

筑波大学博士（文学）学位請求論文

雑誌『第三帝国』の思想

―茅原華山と大正地方青年―

水谷 悟

二〇一三年度

1

2

12

12

21

24

30

33

47

47

60

66

74

79

第三章 「第三帝国」の理論と実践 98

第一節 「生活即政治」の実現―「運動」と「論争」の二面展開― 98

一 「新憲政擁護運動」と山本内閣打倒キャンペーン 98

二 ベルグソン哲学と「自我」論争―野村隈畔「思潮評論」を中心に― 102

三 「二重生活」否定論争と「新労働問題」論争 106

第二節 「第三帝国」の支持基盤―秋田県内における益進会支部を事例に― 113

一 「霊肉合流」の「新帝国」―横手支部の場合― 114

二 地域自治と教育の革新―北浦支部の場合― 117

三 政界変動のなかの地域青年―能代支部の場合― 120

第三節 「模範選挙」運動の実践 124

一 普通選挙請願署名運動の展開 125

二 第十二回総選挙における政治的争点―第二次大隈内閣とジャーナリズム― 129

三 「模範選挙」運動の展開―「模範」と「理想」の相違― 132

第四章 「第三帝国」の思想圏 148

第一節 益進会の隆盛と分裂 148

一 「模範落選」以後 148

二 益進会の隆盛と分裂 151

三 『洪水以後』と『新理想主義』 153

第二節 野村隈畔における「絶対自由」の希求 157

一 ベルグソン哲学の動揺―「潜在帝国」から「自我批判の哲学」へ― 157

二 「文化主義」批判 160

三 「絶対自由」の希求 162

第三節 「第三帝国」の住人―金子洋文と室伏高信の場合― 166

一 金子洋文「華山と無車」の相剋 166

二 「若き農夫」の発見 171

三 室伏高信「生命デモクラシー」論の提唱 175

四 「民本主義」論争への参入 177

終 章 雑誌『第三帝国』の思想像 190

第一節 第一期『第三帝国』の終幕 190

第二節 本論文の成果と今後の展望 193

図表目次

図 1	グラフ 1 ～ 4 「投書」・「交歓」・「通信」・全般地域別統計	75
表 1	益進会同人の創立メンバー一覧	6
表 2	茅原華山の第 1 回「外遊」の足跡	23
表 3	聖学院神学校のエデュケーション（時／1 週）	49
表 4	東洋大学専門部第一科過程表（明治 38 年改正／同 44 年）	53
表 5	「丁未倶楽部」のメンバー一覧	59
表 6	益進会同人メンバー一覧（第一期『第三帝国』1 ～ 57 号）	70
表 7	『第三帝国』の発行年月日・定価・発行部数	73
表 8	「投書」「交歓」「通信」地方・都道府県別一覧	77
表 9	投書欄「戦闘曲」の分類一覧	78
表 10	益進会地方支部一覧	112
表 11	横手支部の構成員一覧	115
表 12	北浦支部の構成員一覧	117
表 13	能代支部の構成員一覧	121
表 14	政党・地域別の候補者および当選者数一覧	132
表 15	東京市における立候補者・得票数一覧	133
表 16	東京市における選挙区別の得票数一覧	134
表 17	大選挙区制下の総選挙における投票率の変遷	135

写真目次

写真 1	益進会東北講演旅行「横手支部記念写真」	1
写真 2	『第三帝国』創刊号表紙	66
写真 3	『第三帝国』32 号表紙	72
写真 4	（大正四年三月五日）『夕刊中央新聞』挿絵切抜	124
写真 5	益進会新社屋写真付き葉書	152

凡例

- 一、本文中の年号は、元号と西暦は適宜併用する。ただし、参考文献の発行年は西暦に統一して表記する。
- 一、本文、引用史料および参考文献ともに、現在通行の用字による。ただし、固有名詞や史料の仮名遣い等はこの限りではない。
- 一、引用史料はできる限り原文を忠実に再現するように努めるが、適宜句読点を付すほか、書簡の改行等には整理を加えることとする。
- 一、引用史料中の傍点（圈点）およびルビは原則として省略する。
- 一、引用史料および参考文献等の註記は、各章ごとに一括して掲げるが、初出の場合を除いて刊行年等を省略して表記する。
- 一、図表および写真には、註記で掲げたものを含めて掲出頁順にそれぞれ通し番号を付す。
- 一、人物の雅号は、頻出する茅原華山・石田望天・野村隈畔を除き、特に使用開始時期を意識しないで用いる場合がある。
- 一、人物の敬称は原則として省略する。

序 章 本研究の視点

第一節 「益進会東北講演旅行」の盛況

【写真1】 益進会東北講演旅行「横手支部記念写真」



会の会員とも重なる、いわば地域の若き知識階層であった⁴⁾。

では、雑誌『第三帝国』は、この講演旅行の様子を誌上でどのように伝えているのだろうか。四八号に掲載されている横手町の様子は次の通りであった⁵⁾。

□横手町 横手町は本会支部のある所、零時半着すれば支部員総出、有志と共に迎へられ、車を連ねて平利旅館に入る、午餐後直ちに会場男子小学校に向かふ、会衆既に七百。県会議員郡長学校長新聞社長土地の有志有力家皆集まる、近郷近在より来るものまた多かりき。中村支部幹事開会の辞を、次で石田主事『第三帝国の思想』を思想的文明的方面よりと実際の政治的方面とより説くこと一時間余、茅原主盟また第三の意味を説き欧州戦局を大観し独逸の優勢を論じ、転じて日本の使命に及ぶ、説くこと約二時間、かゝる間に福来博士は次の汽車にて来着、旅館に到らずして直ちに会場に、而して霊肉問題生命問題を説き日本人の特殊なる性質と其使命を論ずること約一時間

【写真1】は、雑誌『第三帝国』を発行する益進会が実施した東北講演旅行的一幕を写したものである¹⁾。時は大正四年（一九一五）七月十九日午前八時頃、場所は秋田県平鹿郡横手町（現在の横手市）大町中丁にある明治元年創業の「平利旅館」の中庭である²⁾。写真中央で椅子に腰掛けてゐる三人は、左から順に華山茅原廉太郎（同誌主盟）・福来友吉（文学博士）・望天石田友治（同誌主事）で、前日の横手での講演を盛況の内に終え、次の会場（土崎港町）に向かう間際の姿であった。周りを囲んでいるのは、益進会横手支部の青年たちで、前方左側の鉢植え前に据えているのが幹事の月城中村清次（日本基督教団横手教会牧師³⁾）、後方一番右が支部の中心メンバー丹波源一郎であった。彼らの多くは横手中学の卒業生で、明治四十四年に結成された横城青年

半、薄暮漸く散会、聴衆よく此の炎熱にも拘らず、吾等の熱弁を傾聴すること五時間、盛会無比、熱誠無比、演者も聴衆も共に疲労と炎熱とを忘れたるものゝ如かりき。

同誌は自らが主催した講演会に「土地の有志有力家皆集ま」り、中村幹事による開会の辞の後、石田・茅原・福来の順に講演が行われ、計五時間の長きに及び、「盛会無比」「熱誠無比」の余り「演者も聴衆も共に疲労と炎熱とを忘れた」と伝えている。だが、この記事はどこまで客観的な情報と言えるのか。地元紙に掲載された記事を見てみよう。

『秋田毎日新聞』は、同月二十日に「第三帝国講演大会▽横手支部主催の大成功。」と題し、同会の様子を詳細に報じている。この記事によれば、第三帝国東北巡回講演団の一行は、午前中に湯沢町で講演会を開いた関係で予定より開始が遅れたにも関わらず、「当日は恰も日曜なりしを以て、会場なる横手男小学校雨中体操場も立錐の余地なく廊下に至る迄聴衆を以て充たされた」。なかでも主盟の茅原が「欧州戦争と新日本主義」と題し、「第三帝国の意義を具体的に陳べ、第三は人間の思想の帰着点なるを述べ、欧州戦争に於ける連合軍に対する独逸国の態度終局平和後の国際間に於ける大離合集散注意観察商工業的大競争並に欧我運動妄我運動新日本主義」について雄弁を揮い、一時間余りの熱演に及ぶと、「満場破るゝ許りの拍手」に包まれたという。

『第三帝国』と『秋田毎日』の間で報じられた同会の盛況ぶりに大きな違いはないが、注目されるのは、横手支部の青年たちが益進会の講演会を主催していると認識されている点である。ここで重要なのは、茅原や石田ら益進会同人の眼が、帝国日本に再編されつつあった「地方」に向けられていたことと、その思想運動が地方青年の積極的な支持を生み出すなかで、彼らの要望に応える形で展開されていたことである。

さて、『第三帝国』四八号には、講演会の記事以外に、志賀重昂「海外発展論」と水谷保芳「大陸と第三帝国」が掲載されていた。志賀は、列強諸国が繰り広げていた領土分割問題を取り上げ、「海外に発展せんとするの根本義は自己を利益し自国のために図ると同時に我利我利盲者に陥らずして在留国をも利益せねばならぬ」と指摘する。その上で、アメリカや中国で発生した日本人移民排斥問題の要因を、慣習や文化の異なる外国で同化する努力をしない日本人の偏狭さに見出し、教育の改善により日本人に「公德」の観念を身につけさせ、「大和民族の海外発展の道を開拓するのが急務」であると主張した。一方、水谷は、滞在中に実見した朝鮮総督の実態を「言論抑圧政治」と評し、議会も言論の自由もない植民地の現状を伝えている。「若し第三帝国式の言論を鼓吹するの必要ありとせば内地よりも寧ろ朝鮮にあるべし」と、同誌のさらなる戦線拡張を勧めている。

第一次世界大戦が当初の予想より長期化するなかで、日本は袁世凱政権に二十一か条の要求を押し付け、まさに「海外発展」を逞しくしようとしていた。その一方で、大戦景気の到来で日本経済は日露戦後以来の苦境を脱し始めていた。帝国日本の新しい方向性が問われていたとき、同誌が「地方」青年に向けた改革の主体としての期待の眼差しは、同時に「世界」の中の日本のあり方にも注がれていたのである。

第二節 本論文の課題と方法

そうした眼差しを有した益進会同人が雑誌『第三帝国』を創刊したのは、大正二年（一九一三）十月十日のことであった。日本人民の「実生活」に根差した「君民同治の新帝

国」の創設を唱え、読者からの投書を掲げ、主に地方青年層から支持を集めていくが、同誌の言論活動と思想運動の意義を歴史的に位置づける場合、創刊された年から書き始めるのでは不十分である。それは、創刊が準備される大正元年秋頃から十年以上も前、同誌の中心思想となる「益進主義」の原型を、主盟の茅原華山が形成し、彼の言論に惹かれた地方青年たちが上京してくる、二十世紀初頭の時代状況から説き起こさなければならぬ。

「日露戦後」とは、開国以来の対外的危機を脱して「一等国」の仲間入りを果たした日本が、「明治国家体制」の再編を図った時期である⁹⁾。内務省主導の地方改良運動は、国民の生産力をより一層国家に吸い上げることが企図し、それに相応しい「国民」の創出をめざした政策といえる。だが、戦争における多大な犠牲と過重な負担は、国民の間に「権利」の主張を生み出す。そこから国民の心情をすくい上げ、政治的価値を付与し、新しい政治運動を試みる学者やジャーナリストといった「知識人」が登場してくる¹⁰⁾。彼らは「社会」の発見により「国家」の価値を相対化すると同時に、「国家」に対して「国民」の生活を保障し、意見を吸収・還元する機関としての役割を求めている。

こうした政治・思想状況に第一次世界大戦がもたらした影響は大きかった。特に戦後の反戦・平和、民族自決という世界的思潮は、日本の諸運動を一挙に活性化させた。だが、それらは外在的かつ圧倒的な影響力ゆえに、それまで国内で培われてきた運動の内発性、言い換えれば、日本人民の生活に根差した政治の構築、近代化の模索などの可能性を、さらに人々の「心情」まで押し流していく側面を持ち合わせていたのではなからうか。

一方で、当該期は、現代に至る大衆社会の出発点とされる¹⁰⁾。そこでは、広範な民衆の欲望が政治や社会を呑み込み、時代の大勢を動かす要因となりつつあった。上から下へ、中央から地方へとという従来の近代化の図式でも、また吉野作造の「民本主義」などの体系化された「デモクラシー」理論でも把握しきれない新たな状況が胎動し始めていたのである。「民主」化の諸運動が、大戦を境に急速に進展し、一定の成果を収めながらも、広範な民衆の「心情」を忘却していったのだとすれば、われわれは改めて大戦前後における日本人の内発的な政治意識、生活の場を中心とした社会変革の可能性を問い直す必要があるのではないか。そのためには、当時の代表的知識人や思想家など「発信者」側の言論分析に止まらず、それと同時に「受信者」である読者側における受容のあり方を分析する必要がある。そして、両者の間に存在する思想的連関を把握することではじめて、枠組みからこぼれ落ちる時代の要請をすくい上げることができる。このとき日本人民は、帝国日本の一員として組み込まれていくがゆえに、その政治意識の内実を問われていたのである。

そのような文脈において、益進会同人が世に送り出した『第三帝国』の存在は注目に値する。同誌は、「益進主義」鼓吹のもと、「君民同治の新帝国」の創設をめざし、普選の実施や減税の断行などを掲げ、地方青年層から大きな支持を獲得した。同誌が全国各地に支部を置き、読者と意見を交換するなかで、言論活動および思想運動の展開を図っていくことは特筆される。なぜなら、同人と読者の意見交流の内にこそ、「発信者」と「受信者」の思想的連関の実像を抽出し、時代の本質を捉える視座が存在しているからである。

雑誌『第三帝国』に関する先行研究としては、次の三つを挙げることができる。

まず第一に、松尾尊允氏の研究である¹¹⁾。かつて「幻の雑誌」と言われた『第三帝国』を関係者のもとに足を運び、完全揃いとしたのは氏の努力の賜物にほかならない¹²⁾。ゆえに、同誌は長らく松尾氏の「専売特許」といえる存在で、「第一次護憲運動の衝撃を受け

た広範な青年層に民本主義を広める役割を果たした」と評されている。地方都市や周辺部に住む高等小学校または中学校卒業程度の亜インテリ青年層を読者とし、『東洋経済新報』や吉野作造で「頂点を示した自由主義思潮の、より広汎な民衆へのひろがりの様相」を探ることができると位置づけられたのである。だが、「戦後民主主義」の原型をさぐるという問題意識が先行するあまり、氏の想定する「大正デモクラシー」の枠組みで同時代の思想や言論を裁断する傾向が強い。大戦後の茅原を「転身」とみなし、「茅原華山に代表されるような旧中間層のある部分のデモクラシーの戦線からの離脱が見られた」と述べている点や、読者の投書を「中には旧思想・旧道徳をふりまわすものや単なる美文もないではないが、その大半は急進の色合いが濃かった」と紹介している点がそれに相当する。

第二に、孫国鳳氏の『茅原華山と近代日本』第二部第四章「第三帝国」の時代¹³⁾が挙げられる。氏の研究は、茅原の「民本主義」論の全体像を説明することに主眼を置き、『第三帝国』を「民本主義」の牙城と見なし、「生活権」と「選挙権」の獲得をめざした点を評価している。だが、「模範落選」以後の茅原の言動を「民本主義の挫折」と位置づける点は松尾氏の評価を踏襲し、後の「民生維新論」への評価は茅原健氏の業績に負う所が大きい。これは、氏の問題関心が「今日のように発展した日本の民主主義社会の原型を華山の思想の中に探り出す」ことにあるためと思われる。よって、華山個人の思想の一貫性を説明することに重点を置く一方、益進会という集団に着目し、思想運動の内実や支部の地域性、読者との関係性を問うなど、時代社会への広がりが意識されていない。

第三に、近年の研究として、福家崇弘氏の『戦間期日本の社会思想』第一章「愛国」への普通選挙―雑誌『第三帝国』における普通選挙請願運動」を挙げることができ¹⁴⁾。氏は「大正デモクラシー研究」と「総力戦体制研究」を双方向に批判し、「デモクラシー」と「ファシズム」の連続性について考察するなかで、益進会同人の鈴木正吾「新愛国主義」を事例に、普通選挙を「日露戦後に乖離した自我と国家の関係を再構築する方法」と見なし、国家を超える強靱な自我が国家に主体的に参加していく「举国一致」の道筋を見出している。だが、同誌の幅広い活動のなかで普通選挙運動にのみ注目し、岡悌治や北原龍雄らを取り上げ、国家社会主義運動につながる可能性を指摘することに重きが置かれ、『第三帝国』の思想運動の全体像には言及していない。したがって、益進会の分裂をめぐる記述などは先行研究の内容を再検証しないままに踏襲している。

以上の先行研究を踏まえ、本論文では、研究の主眼を雑誌『第三帝国』が大正初期の時代状況のなかで示した思想を、茅原華山率いる益進会同人の唱えた「益進主義」の思想と行動、そして地方青年読者との連関性に注目する形で説明することに置く。国家に組み込まれようとしている地方青年が、「帝国」日本の再建を説いた思想運動に接し、いかに「国家」を受け止めたのか、何に反発し、何を期待したのかを考察したい。雑誌媒体を基軸とした思想運動には、従来の方法ではすくい上げられない、より広範な国民の「国家」への思いを捉える可能性が伏在している。それは反権力Ⅱ反帝国主義から民主主義運動という単純な図式ではなく、国民の「国家」に対する期待と不満・依存と抵抗が共存しているだろう。したがって、両方の要素を視野に入れつつ、益進会および『第三帝国』の果たした思想的意義を明らかにする。そのことを通じ、従来、「大正デモクラシー」期とされてきた時代像を、特に国民の内発的政治意識に着目しながら捉え直し、「大正デモクラシー」という戦後歴史学の評価枠組みをいかに批判・継承できるか、検討していきたい。

そうした問題関心のもと、次のような三つの課題とそれに対する方法を設定したい。

まず一つ目の課題は、「益進主義」の思想構造を基本的な思考様式のレベルで定位することである。これまでの研究は、茅原華山の中心思想を「民本主義」と見なし、吉野作造に先んじ、その言葉を社会全般に広める役割を担ったと評価してきた¹⁵⁾。しかし、「大正デモクラシー」の理念型をあらかじめ措定し、「戦後民主主義」の原型を形作ったとする吉野の言説との整合性を測りながら、「民本主義」の先駆性または問題点を指摘するといような思想把握の方法は、本研究の問題意識とは異なる。そのような把握の方法は、いわば「歴史の後知恵」から過去の思想の営みを裁断する行為であり、それによって見落とされてきた多くの言論・思想の可能性にこそ目を向けたいと考える。

したがって、本研究では、個々の言説に通底する思考方法を探り出していくことから、茅原華山ならびに益進会の言論活動を、「帝国」日本の改造を企図した思想運動として捉え直すこととしたい。そのような立場から、茅原の言説を詳細に分析していくと、より基本的な思考様式を発見することができる。それこそ、茅原が日露戦後社会で蔓延していた「生活問題」に際会するなかで、地方青年層の実状を踏まえて鼓吹した「益進主義」の思想であった。ここにおいて「益進主義」に影響を与えたのは、ベルグソンやオイケンらによる「生の哲学」と呼ばれる時代思潮であった¹⁶⁾。それらは人間存在を「理性」と「本能」とに引き裂いてしまった近代文明を「直観」によって修復しようとする試みであった。茅原と益進会同人の主張した「益進主義」の思想構造が「生の哲学」の受容により得られた思考方法と密接に関連していたのではないか。換言すれば、益進会ではなぜ『第三帝国』と題する誌名を掲げ、「帝国」日本の行方をめぐり、「益進主義」を唱えていくのか。それを思考方法のレベルで考察することである。この課題は、日露戦争の勝利で国家的独立を果たした日本が、西欧追随型の近代化とは異なる、新たな方向性を探求するという時代的要請に対し、益進会がどのように応えているかを問うことともつながってくる。

次に二つ目の課題は、「益進主義」のもとで結集した益進会の思想集団としての存在形態および彼らが創刊した雑誌『第三帝国』の実態（経営戦略および刊行状況）を明らかにすることである。益進会の結成は、ほぼ同時期の二つの相談が元になっている。一つは、明治四十五年（一九一二）五月、第十一回総選挙に出馬する『秋田魁新報』社主井上廣居の応援演説のため、『萬朝報』記者として秋田を訪れた茅原と『魁』記者であった望天石田友治との出会いである¹⁷⁾。意気投合した二人は、石田が上京して『新公論』に入ると、新雑誌の創刊を相談するようになる。もう一つは、東洋大学の講義室で「再会」した福島県伊達郡を同郷とする隈畔野村善兵衛と松本悟朗が茅原の下に新雑誌の創刊について相談に行ったことであった¹⁸⁾。益進会の創立メンバーは【表1】の通りである。

わずか五人で出発した益進会は、茅原を中心としながら、石田・野村・松本・鈴木の青年記者が各自の得意分野を担当し、幅広い誌面づくりをめざした。彼らが結集する背景には、日露戦後に推進された中等学校以上の教育の拡充が挙げられる¹⁹⁾。中学校の卒業生たちは、地元に残り「知識階層」として地域の自治に関わるか、向学の志をもって上京し私立大学や専門学校に進学するか、いわゆる「立身出世」コースとは一筋違う通りを歩んでいた²⁰⁾。日露戦後の騒擾事件や第一次護憲運動のさなか、各大学の雄弁部が主催する擬国会等で活躍した学生が実際の政治活動に積極的に参加しはじめていた²¹⁾。このとき彼らの思想的結節点となったのが、新聞・雑誌メディアであった。すなわち、益進会の存在形態

と雑誌『第三帝国』の刊行および経営の実態を明らかにすることは、鬱勃とした心情を抱えながら、政治や文学に興味を持った地方青年たちが、雑誌メディアを共鳴盤とし、或は政治やジャーナリズムの世界に身を投じ、或は日々の糧を得ながら一読者として活動を支持する形で成立している、新しい思想・言論空間を捉えることになるのである。

そして、三つ目の課題は、雑誌『第三帝国』の言論の内容と実践運動の関係を時代状況の中で押さえた上で、記者と読者、益進会同人と地方青年読者との思想的連関を解くことである。益進会のように実践的な運動を企画し、読者を結集していった集団の思想史を構想する場合、時代状況の中における思想の機能的側面と思想に内在する構造的特質を架橋する思想史学の領域が設定される必要がある²²⁾。従来の思想史で行われてきた内在的な論理構造を分析していくような方法だけに依って、一部の頂点思想家しか研究対象にできない。一方、民衆思想史では、「民衆」の歴史的役割を強調するあまり、そこで明らかにされた個性や多様性と時代思潮との関連を説明する方法論的自覚には乏しいと思われる。さらに言えば、「民衆」と見なされてきた主体は、従来の「英雄」史観で捉えられてきた歴史的主体との相対的な位置づけに過ぎない。地方名望家層は、「民衆」の「代表」ではあるかも知れないが「典型」ではない。名もなき「大衆」の存在が政治上に影響をもたらす大正期の思想史を構築する場合、名望家層らの存在を「民衆」の「典型」として時代の担い手としてよいのかという疑問が拭いきれない²³⁾。そこで本研究では、時代を超越した「頂点思想家」でも、「英雄」と対峙した「民衆」でもない、時代思潮の特質を担った「中等」に位置する地方青年層を捉える方法として、雑誌メディアを介在した思想運動、そこにおける記者と読者の関係を提示したいと考える²⁴⁾。

なぜならば、日露戦後から大正期は、「大正デモクラシー」²⁵⁾と評されてきた時代状況だからこそ、雑誌を発行する側の主張のみならず、その言論が同時代に与えた影響などの機能的側面に目を向ける必要があるからである。益進会の運動は、従来示されてきた、中央の知識人から地方の一般民衆へという一方向的なものではなく、「帝国日本」の再編に組み込まれようとしている地方青年層たちの主体的・自立的、そして積極的な参加によって突き動かされるものであった。こうした双方向的な言論空間の成立が新しい思想状況を生み出す基盤となったのではないか。それは「デモクラシー」という表現では捉えきれない個性・多様性を有し、時代社会の特質を考える上で看過できない内容を示していると考えられる。その内容の切実さや豊穡さを、益進会同人と地方青年読者の思想的連関性として解いていくことこそ、本研究の最大の課題と言える。

【表1】益進会同人の創立メンバー一覧

氏名	号	生年 (創刊時の年齢)	出身地	出身校(専攻)	入会までの経歴	担当
茅原 廉太郎	華山	1870～1952 (43歳)	東京府 東京市牛込区	愛日小学校 →国民英学会(英語)	『万朝報』論説記者	主盟
石田 友治	望天	1881～1942 (32歳)	秋田県 秋田市土崎	秋田中学中退 →滝野川神学院(神学)	横手教会牧師 『秋田魁新報』『新公論』記者	編輯主任 →主事
野村 善兵衛	隈畔	1884～1921 (29歳)	福島県 伊達郡半田村	桑折町高等小学校 →早稲田・東洋大学 聴講生(哲学)	『六合雑誌』寄稿者、氷屋経営	思潮評論
松本 悟朗		1886～1946 (27歳)	福島県 伊達郡桑折町	福島中学 →東洋大学(哲学)	曹洞宗・慈雲寺の住持	社会評論
鈴木 正吾		1890～1977 (23歳)	愛知県 宝飯郡御津町	豊橋中学 →明治大学(政治学)	学生雄弁団体「丁未倶楽部」	政治評論 →編輯主任

第三節 史料と構成の概観

「雑誌『第三帝国』の思想」と題し、前節で述べたような課題と方法を設定した本論文は、どのような史料を前提に立論していくことが可能であろうか。検討の対象とする時期の益進会同人と青年読者層に関する史料は、次のように分類することができる。

- 1 私文書
- (1) 益進会同人／(2) 支部員・読者／(3) その他
- 2 公文書等
- (1) 学校史料／(2) 公文書等
- 3 雑誌、新聞等
- (1) 雑誌／(2) 中央紙／(3) 地方紙
- 4 著作等刊行物
- (1) 益進会同人／(2) 支部員・読者／(3) 全集、著作集など／(4) その他

本論文における考察は、『第三帝国』の言説および誌面分析が中心になるが、周辺史料をできる限り広く収集することで、益進会同人による言論活動を時代状況に照らしながら位置づけていくことに重点を置く。個々の史料批判は適宜引用箇所の註記等で行うこととし、本節ではまず、益進会の組織および読者層の実態とメディアの存在に注目する形で、雑誌『第三帝国』に関する史料について全体的な見通しを示しておきたい。

まず益進会の運用に関する記録は、誌面以外でほぼ残存していないが、巻末の石田友治「益進会から」が編集後記の役割を果たしている。さらに二四〇号には「益進会日誌」が掲載され、次のように編集室の動向を窺い知ることができる²⁶⁾。また、経営状態に関しては、益進会が「経費、即ち『第三帝国』生活費の内容」を二号より公示している。それを裏付ける史料が確認できないため、その数字を参考にするほかないのが現状である。

- 一日(雨) 土田君麴町に転居す、小田君発熱非常との報せ速達で来た。茅原主盟群馬地方を遊説して帰京。
- 二日(晴) 画家土田耕氏来訪、欧文活版工組合の普通選挙に関する決議を齎らし同組合代表者来訪。
- 五日(雨) 『第三帝国』第廿三号出来、夜十一時まで発送事務。岡見、吉原、白井の諸君外より助けらる。
- 七日(晴) 青島陥落す、あまりに早く余りに飽気なし。午後六時半より芝教会に廓清会の公娼問題の演説会あり、我が『第三帝国』も援助の目的にて山室氏の公娼全廃論を掲載せる第二十一号を聴衆に配布す。
- 十日(曇) 同人全部出揃ひ、編輯室も事務室も賑か。石田主事は神田方面に出張、番人は浅草、本郷、麴町と飛び歩く。茅原主盟は連日演説の疲れで森ヶ崎に撰養す。

次に、益進会同人の各個人に即して史料を収集する必要がある。本論文が検討の対象とするのは、創刊当初の五名と後に加わった一六名の全二二名である【表6】七〇頁）。この内、全集や著作集がある同人は分裂直前に加わった広津和郎しかない²⁷⁾。それに対し、著作が確認できるのは、主盟の茅原(四七点)をはじめ、野村隈畔(一三点)・松本

悟朗（三点）・鈴木正吾（一点）に加え、小田政賀（一点）・雑賀博愛（一六点）・中村孤月（六点）・永川俊美（三点）・鈴木悦（五点）・広津和郎と、同人の約半数を占めている。青年記者たちは同誌で文筆業の基礎を学んだ後、それぞれの領域を開拓していった。自伝・遺稿集・回想録については茅原、野村、鈴木、松本、勢多については部分的に残されているものがある。茅原の評伝は、令孫に当たる茅原健氏の『民本主義の論客』（二〇〇二年、不二出版）が詳細であり、本研究もその成果に負うところが少なくない²⁸⁾。限畔の遺稿集『孤独の行者』（大正十一年、京文社）巻末には同誌創刊に関わる松本悟朗宛書簡が掲載されている。本論文では、これらの史料を必要に応じて使用するが、加えて、茅原・石田のご子孫が所有されていた文書や遺品などを拝見させていただくとともに、生前のお話を伺う機会を得ることができたので、できる限り、その成果を取り入れていきたい。

同人や読者の経歴を見ると、中等教育機関の出身者が多く、上京して同人に加わった者もいれば、地元に残り青年会活動に参加した者もいた。そのような意味では、各校の校友会誌と地方新聞の存在は注目に値する。なかでも、第三章第二節の秋田県内における益進会支部については、平成十三年五月より継続してきた実地調査に負う所が大きい。

いずれにしても、益進会と読者の実態に関する史料の残存状況はきわめて不十分である。同誌の場合、刊行回数が月刊から半月刊・旬刊へ増えたこともあり、雑誌を滞りなく刊行することが優先され、編集に関わる記録が意識的に残されたとは考えにくい。よって、本研究では同人・読者の周辺にまで目配りの範囲を広げ、不足を補っていく必要がある。

また、記者と読者の思想的連関を考える際に、思想の伝達手段と運動の根拠地としての雑誌メディアの存在に注目しなければならない。従来、雑誌は私文書・公文書等に比べ、二次的に扱われることが少なくなかった。だが、『第三帝国』には実名での投書や通信が届けられ、調査で実態を明らかにした上で、彼らの主張や意見に耳を傾けるならば、当時の青年層の生の声に近い、重要な意味を持った史料として再評価することが可能となる。

そこで、本研究では、益進会同人が編集・刊行した『第三帝国』と後継誌の誌面分析を徹底的に行う。特に青年読者との思想的連関に注目し、論説記事のみならず、読者による投書や通信欄にも配慮し、メディアとしての全体像を視野に入れながら、益進会が営んだ思想運動の意味を考えていく。さらには茅原と『萬朝報』のように、同人が関わった他の雑誌や新聞等にもできる限り目配りしていくことで活動範囲の広がりを押さえていきたい。

そのような観点から言うと、一九八四年に不二出版より公刊された『第三帝国』復刻版の完結は、同誌の研究を大きく前進させるものであった。「復刻版」は、石田友雄氏（望天令息）・茅原健氏・橋本一弘氏（橋本一井令孫）・福田久賀男氏・松尾尊允氏の個人蔵書に加え、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）と法政大学図書館の所蔵本を原本とし、創刊号から通巻九九号までを公刊したものである。判型を原本に比べ縮小している点（一〇・一九号：原本三八cm↓A4判（二九・六cm）／二〇・九四号：原本三一cm↓B5判（二五・六cm）／九五・九九号：原本二二cm↓A5判（二二・cm）や二色刷の表紙を単色としている点など、同誌の特質を伝えるには問題がないとは言えないが、本文は写真版複製なので信頼できる。本論文における『第三帝国』と後継誌『洪水以後』『新理想主義』からの引用も「復刻版」に依拠している²⁹⁾。

加えて、松尾尊允氏による解説を付した「総目次・索引」の存在は、同誌の概要を知るのに便利である。ただし、総目次・索引を通覧して気になるのは、略称や筆名による記事

が多いことである。なかでも「益進会同人」の記事に関しては、著者の特定が同誌の発展と分裂を考える上で重要な作業になる。本研究では、メディアとしての特質を具体的に解き明かすために、読者層の実態および発行部数などに関しても、可能な限り論及していく。

それでは最後に、以上のような視点で益進会と雑誌『第三帝国』を取り上げる本研究の全体構成について、あらかじめ概観しておきたい。本研究では、茅原が『長野新聞』主筆時代に「益進主義」思想の原型を形成していく明治三十四年から、益進会同人が結集して『第三帝国』を創刊し、青年読者からの支持を集めて発展しながらも、茅原派と石田派に分裂し、それぞれ言論活動が続けていく大正五年までの約十五年間を主な対象としている。

この内、第一・二章では、同誌の思想的旗幟となる「益進主義」思想の形成過程を茅原個人に即して明らかにするとともに、その思想を中心に結集した同人たちとの人脈形成を、「大正地方青年」という視角を導入することで把握していく。第一次護憲運動の隆盛のもとで結成された益進会を取り上げ、創刊の経緯、誌名の由来、経営の変遷、寄稿者の陣容、投書欄の活況を明らかにしたい。続いて第三章では、益進会同人による読者結集の「企画」、時代思潮と対峙する形での「論争」、減税・普選に関する「運動」を対象に、益進会がどのような問題状況を認識しながら解決課題を設定したのか、それに伴い結集した青年読者の実態はいかなるものであったか、を考察する。最後に第四章では、同誌の発展と分裂の有り様を解明し、分裂後の茅原・石田両派の歩みを辿るとともに、同誌の思想運動に呼応し、そこから自らの道を切り拓いた青年たちの歩みを、「第三帝国の思想圏」として跡付け、同誌の言論や実践が時代思潮にもたらした影響力の内実を確かめていきたい。

第一期『第三帝国』（一〇五七号）大正二年十月十日〜大正四年十一月十一日

第二期『新理想主義』（五八〜六八号）大正五年一月五日〜大正五年五月二十日

第三期『第三帝国』復活（六九〜九九号）大正五年六月五日〜大正七年九月十日

大正七年九月十日まで続いた『第三帝国』の時期区分に言及しておく、益進会の分裂と誌名の復活を機に三期に区分される。この区分に従えば、本研究の検討範囲は第一期を中心に、第二期『新理想主義』にも言及する形を取る。また、編集母体の益進会という集団に注目するならば、第二期以降は、主事の石田友治を残し、主盟の茅原華山を筆頭にほとんどの同人が去り、「益進主義」を唱えることもなくなる。同誌を「益進主義」思想の展開において位置づけるならば、その趣旨は、茅原派が刊行する『洪水以後』『日本評論』に継承されたと見るのが妥当と言える。そこで本研究では、明治三十四年から大正五年までを「初期『第三帝国』Ⅱ益進会時代」と捉え、それを同人による組織と、雑誌メディアを媒体とした青年読者の結集という特質を組合せ、さらに三期に細分化して検討する。

(一) 一〇一九号 ……創刊〜東京市議選〜支部の結成

(二) 二〇〜三五号 ……普選請願署名運動〜模範選挙

(三) 三六〜五七号 ……模範落選〜新社屋の開設〜地方講演旅行〜分裂

まず第一章では、茅原華山というジャーナリストの足跡に沿う形で「益進主義」思想の形成過程を明らかにし、その構造を基本的な思考様式のレベルで定位することとしたい。

¹⁾この写真は支部員であった丹波源一郎の子息・望氏が所蔵されていたものである。平成

十五年九月に能代市内で聞き取り調査にご協力いただいた際にお借りした。五一号「益進会から」に掲載されている「横手支部記念写真（秋田）」と同一の写真と考えられる。「東北講演旅行（上）」『第三帝国』四八（大正四年八月五日）二四頁によれば、撮影を担当したのは同町栄通町で写真館を営んでいた支部員の長谷川清であったという。

²⁾ 横手市編『横手市史』通史編・近現代（二〇一一年、横手市）。「平利」は、隣接する同六年創業の「平源旅館」とともに、横手に訪れる文人たちが定宿にした旅館であった。

³⁾ 中村月城（初代牧師）「横手開拓伝道の思い出」（『創立八〇周年記念出版（一）横手教会の牧師たち』一九九一年、日本キリスト教団横手教会）六〇七頁。

⁴⁾ 「横城青年会発会式」『羽後新報』（明治四十五年五月二十三日）一面。

⁵⁾ 前掲、「東北講演旅行（上）」『第三帝国』四八。

⁶⁾ 「華山氏一行講演会」『秋田毎日新聞』（大正四年七月二十日）二面。『秋田毎日新聞』は、明治四十四年九月十一日、秋田市中長町で創刊された日刊紙である。「不偏不党厳正中立」を標榜しながら、刈田義門を中心に、村山喜一郎や金子為吉ら「土崎派」が、秋田市中心の『秋田魁新報』に対抗し、土崎築港を主張していた。大正二年十一月、『秋田魁』元主筆の木中公中村千代松を社長に招き、『秋田魁』と対抗するほどの成長を見せた。『秋田魁』『秋田毎日』ともに、政治的立場としては国民党支持を打ち出していた。

⁷⁾ 志賀重昂の対外認識については、中野目徹「日露戦争後における志賀重昂の国際情勢認識―蒲郡市小田家所蔵史料の紹介を兼ねて」『近代史料研究』一一（二〇一一年、日本近代史研究会）六三〜八六頁を参照した。一方の水谷は、長野県出身で「古剣」と号した。茅原が『長野新聞』主筆を務めていた時代に知遇を得、その口利きで『長野新聞』に入る。明治三十八年三月、臼田亜浪と雑誌『向上主義』を創刊し、茅原に協力を仰ぎ、発行兼印刷人を務めた。その後、徳富蘇峰に知られ『国民新聞』へ迎えられる。

⁸⁾ 日露戦後の社会状況に関しては、宮地正人『日露戦後政治史の研究』（一九七三年、東京大学出版会）を参照した。同書は、なかでも地方改良運動の展開に関し、国内外の契機を視野に入れつつ、運動の論理を解明した体系的な研究成果を提供している。

⁹⁾ 近代日本における知識人の存在と役割については、古川江里子『大衆社会化と知識人―長谷川如是閑とその時代―』（二〇〇四年、芙蓉書房出版）を参照した。

¹⁰⁾ 筒井清忠「戦間期日本における平準化プロセス」（『昭和期日本の構造』一九八四年、有斐閣）参照。

¹¹⁾ 松尾尊允「『第三帝国』の思想と読者」（『大正デモクラシー』第二部「民本主義の底辺」一九七四年、岩波書店）。

¹²⁾ 松尾氏は『第三帝国』探索の旅」のなかで、「私のように大正期を勉強するものは、まず資料探しから出発しなければならなかった。ここに物語ろうとする雑誌『第三帝国』も、骨董集めではなく、現実の研究の必要上から探索を思い立ったのである」と述べ、一九六三年から十年がかりで、国会図書館をはじめ、多くの人々の協力を得て、創刊号から九三号までを手許に揃えるまでの「苦心談」を紹介している（初出は「現代史資料月報」四一（一九七四年七月）、『本倉』（一九八三年、みすず書房）三八四〜三九〇頁）。

¹³⁾ 孫国鳳『茅原華山と近代日本―民本主義を中心に』第二部「民本主義論の展開と挫折」第四章（二〇〇四年、現代企画室）一一三〜一七六頁。

¹⁴⁾ 福家崇弘『戦間期日本の社会思想―「超国家」へのフロンティア』（二〇一〇年、人文書

院)二三〜三六頁。

¹⁵⁾ 前掲、松尾『第三帝国』の思想と読者」。

¹⁶⁾ ベルグソンの「創造的進化」の影響については、鈴木貞美編『大正生命主義と現代』(一九九五年、河出書房新社)を参照した。

¹⁷⁾ 茅原華山『第三帝国』と石田友治君、石田友治『第三帝国』発刊に就て『第三帝国』一(大正二年十月十日)二頁。

¹⁸⁾ 松本悟朗『第三帝国』滅亡史『洪水以後』一(大正五年一月一日)九三〜九四頁。

¹⁹⁾ 国勢院編『日本帝国統計年鑑』(一九二二年十二月)によれば、日露戦争を経て、全国の中学校数および中学卒業者数が飛躍的に増加している。

²⁰⁾ 東京の私立中学はその受け皿であった。この点に関しては、武石典史『近代東京の私立中学校―上京と立身出世の社会史―』(二〇一二年、ミネルヴァ書房)を参照した。

²¹⁾ 有馬学は『日本の近代4』『国際化』の中の『帝国日本』(一九九九年、中央公論新社)で、日露戦後に登場した「新しい世代」に言及し、時代を象徴する言葉として「成功」「煩悶」「修養」を挙げ、彼らが社会との回路を獲得する手段として「雄弁」に注目し、野間清治の雑誌『雄弁』と大学雄弁会の親睦団体Ⅱ丁未倶楽部を取り上げている。

²²⁾ 「集団の思想史」の方法論および史料論に関しては、中野目徹『政教社の研究』(一九九三年、思文閣出版)に依拠する所が大きい。

²³⁾ 代表例に色川大吉『新編明治精神史』(一九七三年、中央公論社)を挙げることができる。

²⁴⁾ 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』(一九九七年、日本エディタースクール出版部)は、雑誌という新しい活字メディアが近代日本社会の形成に果たした役割を、登場の経緯や読者に受容され大衆化していく過程を分析した先行研究として参考になる点が少なくない。

²⁵⁾ 当該期は、一九七〇年代を中心に、民衆の反権力運動にみる市民社会の形成と政党政治の確立という二つの視角から「大正デモクラシー」期として位置づけられてきた。代表的な研究として、前者では松尾尊兌、前掲、『大正デモクラシー』および『普通選挙制度成立史の研究』(一九八九年、岩波書店)、後者では三谷太一郎『新版大正デモクラシー論』(一九九五年、東京大学出版会)および『増補日本政党政治の形成―原敬の政治指導の展開』(一九九五年、東京大学出版会)を挙げることできる。彼らは、吉野を代表とする「民本主義」の潮流に戦後民主主義の「前提」「骨格」を見出そうとしていた。

これに対し、鹿野政直氏は『大正デモクラシーの底流―土俗的精神への回帰』(一九七三年、日本放送出版協会)で、創唱宗教・青年団運動・大衆文学を例に、時代の底流に全く異なる局面が展開されていたことを指摘した。また伊藤隆氏は『大正期「革新」派の成立』(一九七八年、塙書房)を著し、従来捨象されてきた在野の政治集団を再検証した。

²⁶⁾ 『第三帝国』二四(大正三年十一月十五日、二五頁)の事務室の番人「益進会十日日誌」の「十一月一〜十日」を摘記したものである。

²⁷⁾ 『広津和郎全集』全一三巻(一九八八〜八九年、中央公論社)、『広津和郎著作選集』(一九九八年、翰林書房)。

²⁸⁾ ほかに茅原健『茅原華山と同時代人』(一九八五年、不二出版)、および『華山追尋―茅原廉太郎とその周辺』(一九九六年、朝日書林)を挙げることができる。

²⁹⁾ 『復刻版』洪水以後』(別冊…「解題・総目次・索引」)(一九八四年、不二出版)。

第一章 「益進主義」の思想形成―茅原華山に即して―

第一節 平和膨張的「帝国主義」の提唱

雑誌『第三帝国』の求心力は、主盟である茅原華山の思想と行動に見出すことができる¹⁾。そこで本章では、彼の中心思想である「益進主義」の形成過程を考察していく。

茅原廉太郎は、明治三年（一八七〇）八月三日、東京市牛込区田町南町二五番地に、茅原邦彦・田辺ぬいの長男として生まれた²⁾。父は旧幕臣で、慶應四年（一八六八）一月に鳥羽・伏見で始まった戊辰戦争に出陣し、敗れて帰還した。その後、父は邏卒として勤めながら、敗残の無念を歌舞音曲に沈淪する不遇の日々を送り、明治十三年十一月に病没した。廉太郎は、私立桜井学舎、市ヶ谷小学校、愛日小学校と転校したが、父の死により退学し、近隣に住む宮崎幸麿の紹介で太政官小舎人として出仕し、長男として家計を助けた。正規の教育を受けることは断念せざるを得ず、国民英学会で英語を学んだのみであった。

小舎人時代の廉太郎は漢詩を作ることに熱中した。明治十四年七月、「新橋竹枝」と題する漢詩を『穎才新誌』に投稿し、掲載の栄誉を得ている³⁾。『穎才新誌』と言えば、同十年三月、立身出世主義の風潮を背景に創刊され、教養と修養をめざす作文教育を志向し、わが国初の青少年向き投稿専門誌として若き読者の文芸熱を喚起していた。後に「無名新人の紹介機関」と銘打ち、雑誌『第三帝国』を創刊し、青年読者の投書を掲げていく原体験は、掲載されること十四回に及んだ、自らの投稿少年時代に見出される。

明治十八年、廉太郎は、通信省内信局課長の前田俊雄の勧めで通信省雇となった⁴⁾。伊藤や大隈ら明治政府の中枢を占める政治家たちの仕事ぶりに触れ、旧幕臣の家に生まれた己の道を新聞記者として筆を執ることに見出していく。同二十五年四月、仙台へ赴き、創刊間もない改進黨系の『東北日報』に入り⁵⁾、翌年一月には自由党系の政論新聞『山形自由新聞』に移り⁶⁾、計六年半にわたり東北地方で新聞記者としての経験を積んだ。

同三十一年十月、竹越与三郎に『日刊人民』に招かれ、帰京する⁷⁾。同紙は自由党系『めざまし新聞』『東京新聞』の改題紙として、自由な論陣を張っていた。念願の中央論壇進出を果たした茅原は、民友社員との交流を深めつつ、『日刊人民』紙上で「閑是非」と題して時事を論じるとともに、政界の人物に関する「人物評論」を多く書いた⁸⁾。だが、同三十四年十月、病氣療養のために退社し、更級同志会の経営する日刊紙『長野新聞』の主筆として信州論壇に登場することとなったのである。

「青年、教育を殺す乎、教育、青年を殺す乎⁹⁾」。就任直後の講演旅行を終えた茅原は、そこで受けた長野県の印象を最初の論説でこのように記している。県下の青年たちと交流するなかで、知識に偏重する教育の現状に「我国当面の一大問題」を感じ取り、有為の人材を忙殺する画一的教育を批判し、「品格あり理想あり精神ある」「活ける国民」を養成する教育の実現を訴えたのである。登壇第一声に教育論・青年論を選んだ背景には、教育制度をはじめ、明治二十年代以降、急速に進展した国家体制の完成に伴い、青年層をとりまく状況が著しい変化を遂げていたことが挙げられる。二年後に起きる一高生藤村操の投身自殺は、同世代の青年に衝撃を与え、全国各地で「華嚴宗」と称される自殺志望者を出現させ、世間に大きな波紋を呼び、「人生問題」が社会的に浮上していく¹⁰⁾。当時の社会状況をいち早く看取し、その問題性を鋭く指摘した論説を契機に、彼の論鋒は政治論・実業論に及び、以後二年間、長野県文化の隆盛を説き、主筆として同紙の発展に貢献した。

本節では、『長野新聞』主筆時代を茅原の思想形成における画期とみなし、彼の思想の

原型を探求し、その主張内容を当時の時代状況、とりわけ青年読者との関係に注目しながら考察する。時代の一翼を担った茅原の思想と行動を根底から支えた世界をさぐることを通して、彼の思想像を、実生活に根差した政治の実現、国民の主体的政治参加の可能性という観点から捉え直していきたい。

一 「大家族の分業」―記者と読者の協力―

「今般政友会唯一の機関たる人民新聞に主筆として雄健卓抜の筆を揮ひたる華山茅原廉太郎氏を本社主筆として招聘せり」との社告が『長野新聞』の一面を飾ったのは、明治三十四年（一九〇一）九月二十四日のことであった。同日の「茅原華山氏の入社」には、彼の山形時代の活躍が「主筆として其任に在ること前後六年常に筆を以て主義の為に尽せるのみならず又弁論に長じ凡そ地方問題の解決一に君の斡旋に待つもの多く深く地方人士の信頼する所となれり」と紹介され、その手腕に対する期待が表明されている¹¹⁾。

同月二十七日、主筆就任に際し、茅原は「西園寺陶庵侯を訪ふ」を掲げた。時の枢密院議長西園寺公望といえ、日清戦後に第二次伊藤内閣の文相として行なった「世界主義」演説で知られていた。国民の「偏局卑屈」な気象を戒め、世界文明の大勢に随伴する教育を説いた西園寺の見解は、保守的な教育界で強い反発を招いていた¹²⁾。ここで特筆される「敵愾心」の養成については、同日の論説「教育の大本」を検討すると、明らかにする。

吾人の最も深痛長嘆に耐えざるものは、我教育家が往々にして小国民に向て恐露熱黴菌の皮下注射を試み、是を以て敵愾心を養成する唯一の方法と為すに似たることはれなり、（中略）恐露病を我小国民に鼓吹注射するが如きは、最も我国是に反す、我国進取の宏謨と全然相背馳す、教育の大本は開国進取の宏謨と存せざるべからず¹³⁾。

三国干渉の屈辱により、日本国民は「臥薪嘗胆」を合言葉に、日清戦後経営の熱心な奉仕者となった。東アジアの一小国から「帝国」へ変貌していく日本にとって、南下政策を逞しくするロシアは、朝鮮權益をめぐる最大の宿敵であった。茅原の登壇は、北清事変鎮圧直後、両国間の緊張が急速な高まりを見せる時期と重なっていた。日露協商・日英同盟という二つの外交方針をめぐり、日露対決の気運が醸成されていくとき、国民全体を覆い尽そうとしていた精神的重圧こそ「恐露病」であった。それに基づく「敵愾心」の養成を卑屈な精神による教育と非難し、世界文明の潮流に目を向け、進歩に貢献する術を習得することを訴える彼の主張は、日清戦後社会の思想的潮流において、西欧文明を模範とする開国以来の近代化政策を肯定し、さらなる強化、一層の普遍化を図ろうとする「世界主義」の立場に列なるものであった¹⁴⁾。すなわち、登壇にあたり茅原は、読者に対し、西園寺に語らせる形で、自らの思想的立脚点を明らかにしようとしていたのである。

戦勝の余波は、戦後景気による地方実業派の誕生と、戦後経営の地方行財政への浸透となつて信州にも及び、各地で在地の企業と地方銀行の提携が見られた。なかでも小坂善之助率いる信濃実業同志会は、信濃銀行の支援をうけ、『信濃毎日新聞』を発行し、県下有数の勢力を誇っていた。それに対し、宮下一清・飯島正治らは、第六十三銀行の支援のもとで更級同志会を結成し、明治三十二年四月、『長野新聞』を創刊したのであった¹⁵⁾。

『信毎』『長野』ともに政友会系紙であったが、その裏には長野県特有の地域的勢力争

いが潜んでいた。そのなかにあつて茅原は、維新以来の県内の不統一を政友会により一致させ、日本の発展に貢献することを訴えながらも、自分の主張が党派性や地域的な抗争に束縛されることを拒んでいる。同三十五年十一月二十二日の「地租論」における第十七議會の地租増徴問題に対する増徴案支持や、在任中に行なわれた二度の総選挙でいずれも非政党機関紙の立場を主張したことなどはその代表例であり、単なる一地方の政党機関紙ではなく、独立した言論の場として同紙を守ろうとする彼の確固たる信念が窺い知れる¹⁶⁾。

では一体、茅原はいかなる志を有して、信州の地を踏んだのであろうか。明治三十四年十月四日に掲載された「読者諸君」と題する入社の辞を見ていこう。

僕の長野新聞に在る、同僚諸君と協心戮力して、長野新聞を以て唯一の武器と為し、天下を長野県に紹介し、長野県を天下に紹介し、長野県文明の進運に向て貢献する所あらんことを期す、天下国家に尽くすの心を以て、一郷一地方の為に尽くすを中心の覚悟と為し、是を以て終始を一貫すべし、読者幸に僕が心事を諒とし、僕をして自由の手腕を揮はしめよ。

第一義的な課題は、「同僚諸君」と協力一致して「天下を長野県に紹介」することに置かれている。長野県人士へ中央の情勢、世界の大勢を知らしめ、文明の潮流に貢献する方法を長野県に見出し、同県を天下に紹介しようというのである。茅原は、東北時代の経験と読者との関係に於て、截然別物なり」と、地方新聞のあるべき姿を論じていく。

中央紙に比べ、地方新聞では新聞と読者が「既に購読者と被購読者との関係以上」にある。「愛郷の念」を持つ読者は、自らの「新聞の盛衰興廢に對して痛切なる利害を感じる」「一面に於ては発行人」とも言える存在であり、記者との関係は、互いの人物を知る、いわば「第二章の關係」である。つまり、両者は「一大家族が分業して、一は記者と為り、一は読者となりたるもの」として一致協力し、隆盛に尽力すべき關係なのである。

茅原の地方新聞観は、日清戦争における戦況報道の需要の高まりから生じた新聞メディアの質的变化を背景としていた¹⁷⁾。従来、中央紙の地方版とみなされていた地方新聞に独立性・独自性を見出し、長野県と中央・世界の關係を「文明の進運」への貢献でつなぐことで、県民読者の意識を高揚し、それぞれの役割を新しく捉え直す機会を与えたのである。

加えて「天下国家」と「一郷一地方」の捉え方も興味深い。「一郷一地方」の存在を「天下国家」の構成要素として位置づけ、長野県が貢献する方法を文明進歩への寄与に見出そうとするなかで、茅原はまず何より個人の生活を優先している。個人の生活が充実・発展されてはじめて、それは個人の域を越え、家や村、共同体の発展へ、市や県、ついには「天下国家」の発展へとつながるという図式が示されているのである。

入社の辞で、記者と読者を一致協力すべき關係と位置づけたことで、茅原と長野県人士との間には、『長野新聞』を「唯一の武器」として文明進歩へ貢献するという共通の目標が設定された。彼の主張は、読者との關係を常に意識し、展開されたがゆえに支持を受け、両者の間には、政党や地域的勢力に束縛されない、一定の独立を保持した關係が築かれたのである。次に、彼が最も期待を寄せた青年読者層をめぐる言論を見ていくこととする。

二 「社会進歩の機関車」―地方青年層への期待―

茅原が青年読者へ発した言論を考えるには、第一に主筆就任の経緯を見ておく必要がある。明治二十五年（一八九二）四月以来、約七年の長きにわたり、東北論壇で「平民政治」を唱導し、地方文化の興隆に尽力した彼は、同三十二年十一月、『日刊人民』の一員となり、中央論壇進出を果たした。時事評論「閑是非」や人物評論を担当し、傾きかけた社運を再建、記者・編集者としての実力を蓄えつつ、文名を博そうとしていた。だが、その矢先に重度のインフルエンザに罹り、退社を余儀なくされ、同三十四年十月、転地療養も兼ね、『長野新聞』の要請に応じ、再び言論の場を地方論壇に移した¹⁸⁾。自らの体調不良により好機を逸したことで、茅原の脳裏には中央論壇への強い意識が刻み込まれていた。同月三日の記事「東京より」には、竹越をはじめ、末松謙澄や徳富蘇峰などの先輩・知友による歓送宴の模様が記されるなかで、彼の心境が次のように吐露されている。

毎日毎夜各友人より招かれ、殆ど困倒致さん斗りに御座候。小生は或る意味に於ては無論喬木を去て幽谷に還るもの、之を祝して呉れるとは訳の分らぬ次第に候。蓋し祝さるに非ず、余の心事を諒として同情を表せらるゝものなるべし。

「喬木」たる中央論壇から「幽谷」たる地方論壇へ逆戻りする口惜しさが滲み出ている。こうした心情は、「天下を長野県に紹介」するという第一義的任務と無関係ではなかった。同三十五年七月二十七日、同紙千号記念号に寄せられた鳥谷部春汀「祝辞」には、地方に赴くと評判を得たいがために「土俗を迎合」し「俗論を鼓吹」する文士が多いなか、地方論壇にあっても「常に天下の事を以て自ら任ずる」茅原の姿勢が賞賛されている。心底に潜む意欲と姿勢は、青年読者の鬱勃とした心情を捉えていく。常に文明の進歩への貢献を意識しつつ、長野県の中に具体的な手段を見出し、青年層を担い手に指名するのであった。

世には保守の力と進取の力となるべからず、青年にして若し進取の力を喪はゞ、社会は化石するの外なからんとす、青年は社会進歩の機関車なり、社会を比較の三段法に依て類別すれば、社会には最も富める階級もあるべし、ヨリ富める階級もあるべし、貧なる階級もあるべし、此等是一等の客車なり、二等の客車なり、三等の客車なり、瘋癲白痴老病の荷厄介たる荷車もあるべし、凡そ此等を率いて社会進歩のレールの上を馳するものは、青年なる機関車ならざるべからず¹⁹⁾。

茅原は、社会の進歩を近代交通の主役である鉄道になぞらえ、さまざまな「階級」の先導役となり、社会全体を文明の進歩へと牽引する「社会進歩の機関車」たりうる存在は、青年層においてほかにないと訴えかけた。明治二十年以降、国家体制の整備が急速に推し進められ、維新以来、理想実現の場であった「国家」は一つの枠組みと化した。国民が枠組みへの従順を求められはじめたとき、その影響が最も顕著に現われたのは、青年層の精神領域においてであり、茅原の期待も何より彼らへの理解に基づいて表明されていた²⁰⁾。青年層が政治的無関心や軟弱の風を厳しく批判されるさなか、茅原は社会の進歩、時勢の変化に伴う彼らの変化を必然的なものとして捉えた。「吾人は今日の青年に向けて、維新時代の僥豪不羈の態を学べとは言はず」と、前世代を模倣する不要を説き、常に「世界の

大勢」「社会の思潮」を意識し、己の道に対して誠実に歩むことを望み、なかでも長野県の青年にその先陣をきり「帝国主義の青年」となることを求めたのである。

こうした青年層への期待は、県内各地の青年会・同窓会・婦人会の主催する講演会や学術演説会、新聞記者懇親会等で語られていく。明治三十五年五月十日、更級郡青木島村で催された学校新築五周年、自治制施行記念講演会における演説もその一例である。同月二十四日の更級郡傍聴生「華山君の演説を聴いて」は、彼が労働の神聖、農業の重要性を訴え、教育の非実業性、とくに教員の実業的観念の稀薄さを指摘していたことを特筆している。同会開催の趣旨と照応すると、「傍聴生」は教育関係者であったことが推察される。

さらに紙上掲載の記事から、読者との関係を読み取ることができる。明治三十四年十月八日の茅原の論説「膨張的長野市」をうけ、同十二日に一長野市民「読者の声 長野新聞記者足下」なる投稿があり、同業者組合における経験談が告白され、同県人士の協同一致する心の欠如が嘆かれている。茅原の論説が県下の実業界に少なからず影響を及ぼしていた事実から、読者層が想定される。また、翌年二月二十一日には、同月十四日の「日英攻守同盟条約」以来の日英同盟に関連する論説に対し、飯山一青年「長野新聞記者足下」と題する投稿が寄せられている。茅原の主張を、党派に縛られない大胆な経世的識量による見解と賞賛し、「他日、本県民が帝国輿論の大動力となり内治外交共に全国の首脳として重視せらるゝの時あらばソハ今日に於て鼓吹せられたる足下の感化必ず其多きに居るべきを信ぜん」とまで述べる一読者の意見は、青年層からの反響を代弁させるに十分であろう。

ほかにも、茅原の主張と対応する記事は多数掲載されている²¹⁾。明治三十五年十一月八日、論説「市町村長閣下」を発端として展開された小学校の修学旅行実施をめぐる論争もその一つである。実物教訓の必要性から実施を是とする茅原と、経費や準備の万全を期さない限り実施は非であるという小県郡殿城村長田中救時との間で行なわれた論争のなかで、田中は「県下の新聞紙中町村役場と小学校とに於て多く購読せらるゝは信毎および長野の二新聞の右に出るものなし」と記しており、読者層の具体的な所在を教示してくれる²²⁾。

己の理想を具体的に実現する場として、茅原が実業と教育の調和を企図していくことを思えば、「青年」の存在はより一層明らかになる。彼が実業教育を奨励し、各種学校の教育の実態に厳しい眼差しを向けたのは、実業・教育を支えていく存在として、学生や教員に理想実現の旗手となることを望んでいたからであった。と同時に、役場吏員や工場主、製糸家などの存在にも注目していた。実業教育の発展に貢献する地方自治の主役として寄せられる期待は、「社会問題の実地研究」と称し、明治三十四年十一月一日の華山生「松代に遊ぶ」のように、訪問録や工場における生活実態の観察記事という形で提示された。

以上の考察から、茅原にとつての「青年」とは、教育の対象と実業の担い手を両輪とした「社会進歩の機関車」であったと言える。教育制度の浸透、メディアの発達のなかで成長してきた当時の青年層は、中央進出の欲望を喚起されながらも、諸制度の整備が進むとそれを果たすことができず、国家や従来への価値観に懐疑を抱き、社会と連続性を持たない「個人」意識を萌し始めていた。こうした青年の登場をいち早く見て取った彼は、紙上での論説と各地青年会等での講演により相応しい方向性を示すとともに、理想実現の先鋒としての自覚を促していったのである。青年層への期待は、彼らが置かれていた境遇の把握と、直面していた問題の理解との上に表明されたものであった。では次に、実業と教育のあり方の検討を通じ、「機関車」の行先、その理想実現の場を考察する必要がある。

三 実業と教育の調和

「第二十世紀は国際競争の時代なり²³⁾」。真相は、「平和の戦争」たる商工業の競争に存し、国家の生存はその勝敗如何に関わる。争点が軍事力の増強から商工業の発達へと移行したことに伴い、専門教育の需要と一般人民に対する教育の価値が高まり、それは当然実業の発展につながるものとして立ち上げられなければならない。軍拡中心の戦後経営に対し、茅原は、ここで改めて国際競争の真相の所在を確めることによって、日本の将来的な方向性を示すとともに、教育の充実を支柱に置いたのであった。

明治三十四年（一九〇一）十月六日、茅原は論説「工業教育」を掲げ、「帝国の将来は、工業に在り」と捉え、農業・養蚕業において当時全国有数の地位を占めていた長野県を、「将来日本帝国實力の淵源たる」地方にしようと、次のように問いかけた。

若し夫れ教育と実業とを調和せしめ、教育と実業との調和したる結果、大に工業教育を興し、長野県をして皆に「原料輸出国」たるのみならず、更に「精製品輸出国」たらしむるに至らば、長野県は真に帝国實力の中心地点たるを得ん、聞く県の先覚既に着眼する所ありと、果して然らば、吾人は此議論の事実と為るの日あるを樂むべきなり。

幕末以来の養蚕業の発展に伴い、生糸の生産・貿易をもって長野県民の意識は世界に開かれ、県内でも教育の充実を図ることに力を注いでいた。茅原が注目したのもこの点であった²⁴⁾。教育と実業の調和により、工業教育を興し、長野県を「原料輸出国」から「精製品輸出国」へと成長させ、「帝国實力の中心地点」とすることが主張されたのである。

果たして、こうした茅原の主張が「事実と為るの日」は決して遠くなかった。明治三十四年十二月十九日の論説「小県の機業奨励」は、上田商業会議所で蚕種糸繭の産出強化と製糸紡績機織の工業を振興すべく機業発達の奨励とを掲げる「小県郡機業奨励に関する意見書」が議決・提出されたことを報じている。「精製品輸出国」化の現実を目の当りにするなかで、彼は、同意見書の趣旨に対し賛同の意を述べ、蚕種糸繭から製糸・機業・絹糸紡績工業へと発達の図式を示している。この動向が県内全域へと浸透して初めて、長野県は「帝国實力の中心地点」たりうる。そのためには、県民に対して商工業の発展に貢献すべき教育を施す必要が生じる。彼が実業教育の奨励を熱心に論じていく所以である。

その背後には、教育と実業の不調和と言うべき問題が伏在していた。学校の教育内容と就職先の業務内容とがまったくの没交渉であり、しかも、当時発生していた就職難により、教育の門戸と実社会の門戸の差は年々開きつつあった²⁵⁾。彼が期待した青年たちは、現今教育に忙殺され、真価を発揮することもままならず、無為の人生を送らざるを得ない境遇に陥っていた。こうした現状を踏まえ、茅原はそれを打破すべく実業教育の再興を訴え、生きていく場を新たに提供することで、彼らを実生活に役立つ「活ける国民」としようとしたのである。実業教育の実施はまさにそうした要請に応えるものであった。明治三十五年十二月二十四日の実業生「実業雑感」は、肥料に関する農家の知識不足を解消すべく、実業教育の勃興、実業談話会の開催を希望しており、彼の主張に対する実業側からの反応が示されている。以後、これらの主張は、実業教育をはじめとする各種学校の設置や教育現場における実業教育の奨励などの具体的な形で展開されていく²⁶⁾。

実業学校をはじめ、教育の対象と実業の担い手を「青年」とする茅原に対して、『信毎』主筆山路愛山は、明治三十二年五月二日の社説「学校壁外の青年」において、小学校助教・下級官吏・農夫・僧侶などを主役とする地方開拓の実現を訴えていた。対照的な視座を示す両主筆は、各地の講演会で競演を繰り広げ、それぞれの「青年」に向けて主張を展開し、県内文化の隆盛に貢献していくが、すでに中央論壇において知られていた名士山路と相対したことで、茅原は新聞記者としての力量を蓄えていったと言える。

教育と実業を発達・調和させ、実業教育を拡充することで、長野県の子弟を「平和の戦士」「平和の戦争に優勝する将校」として育成し、「一大教育国」「一大実業国」長野県を「平和軍実業軍の大本営」とするというのが茅原の主張であった²⁷⁾。明治三十年代は、長野県における実業補習学校の勃興期であった。県下の実業補習学校は、明治三十四年から翌年までの間に約三倍に増えるなど、彼の在任中、著しい成長を遂げていた²⁸⁾。彼の示す具体的な方策が読者の支持を獲得していくのは、これが、今まさに県下において推進されつつある、現在進行形の課題だからなのであった。

これまで見てきた茅原の主張は、彼の想定していた読者層である青年たちが生活する実業の場・教育の場に向けて発せられたものであったがゆえに、きわめて切実な内容を有しており、そのような意味において、右の考察は、彼の青年読者層の実態把握、支持した青年層の実態を捉える上で示唆に富んでいると言えよう。では、実業と教育の調和を果たした結果、日本は、そして、その牽引車たる青年たちは、一体どこへ到達するのであるうか。日本の進むべき方向性として示される「帝国の国是」の内容を検討する必要があるう。

四 「個人」と「社会」の相互補完

二十世紀を商工業の優勢を争う舞台とみなす茅原は、日本の進むべき道を「帝国の国是は何ぞ、開国進取なり、開国進取とは何ぞ、平和の事業を以て、商工業を以て、万里の波濤を開拓するに在り」²⁹⁾と述べた。日清戦争を「東洋大局の平和を擁護する」戦争と位置づけた延長線上に、「帝国の国是」として、開国以来の対外的スローガンに商工業の発展という具体的な意味を付与し、「平和の事業」による「開国進取」を置いたのである。

ここにおける「開国進取」とは侵略的ではなく自衛的かつ徹頭徹尾平和的なもので、「如何なる危機に際するも、平和を攪乱するの張本」となってはならないとされた³⁰⁾。ただし、茅原の議論は、戦争自体を完全に否定するものではなく、文明の進歩を阻害し、平和を攪乱する者があれば、正当防衛としての戦争は止むを得ないとされていた。

この性質は「帝国主義」解釈でも一貫されていた。当時、「帝国主義」は、いまだ定義が一樣ではなかったが、国際情勢や日本の将来を考える上で、時代を象徴する言葉として解釈されつつあった。『萬朝報』で論説欄を担当していた幸徳秋水は、社会主義の立場から、労働問題や社会問題を取り上げながら、植民地政策を推進する政府に鋭い筆誅を加えていた。明治三十四年四月刊行の『廿世紀之怪物帝国主義』は、「帝国主義」の流行をペストの蔓延になぞらえ、病菌たる愛国心と伝染の媒介たる軍国主義の存在を指摘し、「帝国主義」を「少数の欲望の為に多数の福利を奪ふ」³¹⁾ものと斥けている。一方、政治学者の浮田和民は「内に立憲主義、外に帝国主義」という、いわゆる「倫理的帝国主義」を唱導していた³²⁾。こうした状況下で、茅原も自らの解釈を示し時代に応じようとしていた³³⁾。

帝国主義は富国主義なり、帝国主義は強兵主義なり、然りと雖も、富国強兵は至竟国家の手段のみ、天命を有する国家国民は、必ず別に終極の希望、最後の目的なかるべからず、故に曰く、何ぞ止々富国、何ぞ止だ強兵、大義を四海に布くのみ。

明治三十四年十月二十七日、茅原は『長野新聞』で論説「富国、強兵、大義」を発表し、横井小楠が慶応二年（一八六六）に甥の米国留学に際して贈った言葉になぞらえ、国民指導の旗幟として自己の「帝国主義」解釈を披露した³⁴⁾。国際情勢の認識に基づき、「帝国主義」の目的を経済的膨張に見出し、「平和の手段」による「富国主義」を第一義的要素と見なし、「強兵主義」を侵略主義を排する自衛的なものと規定し、「四海に布く」べき「大義」として平和の実現を据えた。平和を終始一貫擁護する「帝国主義」を採用することで、日本は新たな文明を吸収し、「極東の主人」「太平洋の海王」となり、「後進の諸国に文明を宣伝」し、「人類の進化、世界の経済に貢献する」存在となり得るのである。要するに、茅原の理想は、日本が商工業の発展により国家生存競争の優者となり、権利・利益を擁護・拡張することで、世界の経済、文明の進歩に貢献していくことであつた³⁵⁾。

一方、当時の青年層は、国家や従来 of 価値観に懐疑を抱き、「人生問題」「社会問題」に直面し、「何故に生れてきたのか」「如何にして生きていくべきか」という問いに懊悩していた。国家と若き国民の分裂の危機に際し、茅原はこれらの課題をどのように位置づけていたのか。彼の「社会主義」および「個人主義」の解釈を考察していく必要がある。日清戦争を機に資本主義的生産様式が拡大するなかで、維新以来、急速に推進されてきた近代化政策はさまざまな矛盾を露呈しはじめ、とりわけ「貧富の懸隔」は「社会問題」として注目されていた。この段階における社会主義理解の最高到達点と評される安部磯雄『社会問題解釈法』によれば、貧困の源は「分配の不公平」にあり、「自由競争主義」に基づく「現社会組織の不完全」性こそが原因であつた。したがって、「社会問題」の根本的な解決は、「現社会組織」の「根本的変革」を説く「社会主義」しかない³⁶⁾とされた。

こうした「社会主義」解釈に対し、茅原は論説「社会主義の新福音」を七回にわたり掲げ、自身の解釈を示した³⁷⁾。社会を「一個の完体」とみなす立場から、「近時流行の社会主義」を消極的・進歩的・受動的・悲観的と斥け、積極的・進取的・主動的・喜観的な「社会主義」を主張する。「近時流行の社会主義」に潜在するユートピア待望的な受動性と「現社会組織」を「根本的変革」により破壊しようとする悲観性を嗅ぎ取り、現存する国家・社会に主体的に参与し、内側から改善・嚮導していくことを主張したのである³⁸⁾。

茅原の立論は、教育や実業の場でさまざまな課題に直面する青年たちに対し、過度の理想ではなく、現実的な意味を付与することを企図していた。例えば、それは明治三十五年一月八日の論説「工場法」を見ても明らかである。ここで茅原は、工場法草案を国家による工場主保護、労働者去就の自由を束縛するものと斥けると同時に、その制定に躍起になっている社会主義者を批判し、国際競争の中で一致すべき資本家と労働者を無闇に衝突させる結果をもたらすと指摘している。茅原は勿論、青年層にとっても、「近時流行の社会主義」は刺激的ではあれ、実現し難いものと感取されていたのであろう。その意味で、茅原の「社会主義」解釈は、安部らの志向する「社会主義」とは相容れないものであつた³⁹⁾。

加えて、「社会主義」を論じる際、茅原は「個人主義」との関わりで自説を展開する。藤村操の自殺を「人事を尽して天命を待つ」ことを忘れた「不可解」な死と見なし、青年

たちにそれぞれの職務に忠実であることを訴えつつ、個人と社会の接合を目指し、「個人主義」と「社会主義」とを連関させて論じていく⁴⁰⁾。茅原の言う「個人主義」とは、「個人の人格を發展せしめ、個人の我を發展せしめ、人をして人たるの職分を全くせしめ、人たるの道を尽くさしめん」ことを目的とするものであった⁴¹⁾。しかも、それは個人内部に止まらず、「個人の發展も遂に社会の發展に帰着するが如く、社会の發展も亦遂に個人の發展に待」つとされ、社会と個人は、利害を共有する表裏一体の存在と捉えられていた。

ここには、「近時流行の社会主義」への違和感とともに、当時の青年層に横行していた「個人主義」に対する批判が示されていた。従来の価値観が懷疑されるなか、新しい価値秩序の形成に資する姿勢が認められる。茅原によれば、社会は「一個の有機的生存を為すもの」であり、個人の自我と同様に社会の自我も存在するならば、その実現には各要素の調和が必要となる。にもかかわらず、「現今の社会主義」者たちは調和を妨げ、衝突を促すことで、社会進化の大勢に反する行動を採っている。個人と社会は、互いの發展に不可欠であり、完全な一致を見るものではないからこそ、調和を目指すべきとされたのである。

「個人主義」と「社会主義」の弊害を指摘し、両者の調和を企図する主張は、明治三十六年九月七日の論説「社会主義と個人主義」で展開される。「個人主義」は「競争の哲学」であるが、競争が激し過ぎると「弱肉強食の哲学」となり、強者の権利を正当化する道具と化す。一方、「社会主義」は「協力の哲学」であるが、協力も度を越すと盲目的博愛、無差別の慈善を生み、個人自助の精神を損なう。両主義ともに限界を有し、互いの弊害を矯正するために必要となる。つまり、競争と協力はともに進化の要素であり、個人の自我、社会の自我を実現していくために相互補完的な関係を有すべきとされたのである⁴²⁾。

以上のように、『長野新聞』時代の茅原は、地方新聞における記者と読者の関係を「大家族の分業」と位置づけ、文明進歩への貢献を共通の旗幟として掲げることで、長野県と日本・世界を架橋し、読者に新たな展望を示そうとした。なかでも大きな期待が寄せられたのは、教育に忙殺され、進むべき道を見失いかけている青年層であった。二十世紀の到来とともに、時代の閉塞感が蔓延するなかで、青年たちは従来の価値観に懷疑を抱き、社会との連続性が稀薄な「個人」観念を強めつつあった。こうした実態をいち早く把握した茅原は、世界文明の進運に貢献する必要性を説いた。そのような時代認識に基づき、青年層に「社会進歩の機関車」としての役割を期待し、彼らが生活する実業と教育の場に理想実現の可能性を見出し、両者の調和を切実に訴えたのである。

現実を正面から見据え、そこに具体的な意味を見出そうとする茅原の姿勢は、中央論壇進出への焦燥感を背景としていたがゆえに、現状に充たされずにいた青年層の鬱勃とした心情を捉えた。さらに、当時注目されていた「個人主義」と「社会主義」を相互補完的に解釈することで、青年たちの進路に新たな意義を付与し、彼らに社会に対して積極的に関与する姿勢を求め、個人の主体性を起点とした言説を展開した。こうした主張を支えたのは、社会を「一個の完体」と見なし、時勢を重んじることで形成された、経済膨張的・平和的「帝国主義」の思想であり、後に彼独自の「益進主義」の思想となつて結実する⁴³⁾。

『長野新聞』主筆時代の経験こそ、茅原の思想と行動、青年読者層からの支持の基盤を形成したものであった⁴⁴⁾。明治三十六年十一月一日、彼は二年二ヶ月を過ごした『長野新聞』を退き⁴⁵⁾、渡辺国武の『電報新聞』を経て、『萬朝報』に入社していく。

第二節 東西文明の調和―日露戦後の外遊経験―

明治三十八年（一九〇五）九月下旬、茅原華山は、『萬朝報』海外通信員として、横浜港より太平洋航路にて米欧視察へと出発した。社主黒岩涙香の厚い信任と副社長山田藤吉郎の諒解のもと、この外遊は約五年の長きに及ぶ。日露戦争の勝利で「一等国」の仲間入りを果たした日本では、世界への関心が強まる一方、多大な犠牲と負担のもとで達成された国家的独立の結果、次なる国家的課題の設定を必要としていた⁴⁶⁾。すなわち、彼の欧米外遊は、日露戦後という将来日本のあり方をめぐる画期のなかで行なわれたがゆえに、重要な役割を課されていたのである。明治四十五年七月、帰国後の茅原が著した『華山文章』の序に寄せられている与謝野晶子の短歌の連作に目を向けてみよう⁴⁷⁾。

青雲の 月の中より 折りて来し 金の枝にも たとふべきかな。

地の上の 光る都を あまた観て 遊びし人の 物言ふは美し。

仲麻呂に 似る筆もちて 真ごころは 真吉備にまさる 君帰りきぬ。

この国を 身に疎しとは 思はねど 海の彼方の なつかしきかな。

青空を 仰ぐがごとく 時として 我もよろこぶ (COSMOPOLITE)。
こすもぽりいと

日露戦争に際し「君死にたまふこと勿れ」と弟の出征を慨嘆し、国民の生活感情に訴え、世の注目を集めた女流作家の詩から、われわれは世界各地を巡り、その模様を随時、海外通信記事として伝えていた茅原の姿を垣間見ることができる。と同時に、そこには、彼の記事を自らの国際的関心に重ね、熱心に読み込む国内読者の姿までもが映し出されている。さらに注目されるのは、茅原の文章が「仲麻呂に似る筆」と賞賛された上に、彼の外遊への思いが、初代遣唐使として入唐し、律令を学んで帰国し、奈良朝を支えた学者・政治家吉備真備にも優ると評価されている点である。では果たして、茅原の「真ごころ」とはいかなるものであったのか。彼の「西洋経験」の思想的意味が問われるべきであろう。

従来の研究で、茅原の欧米外遊は、視野の拡大と深化が図られ、後の思想の素地を形成した時期と位置づけられてきた⁴⁸⁾。だが、その評価のあり方は、彼の言論を、愚民観の克服から「民本主義」の提唱へ、「帝国主義」の是認から批判へといった表層的かつ恣意的な図式で捉えようとするものであった。「枠組み」による結果論的な分析が、彼の実見してきた世界それ自体への考察から思想の内実を検討する視点および彼の中心思想である「益進主義」を把握する視座を看過させてきたのである。

そこで本節では、主に茅原の海外通信記事を対象とし、欧米外遊の足跡をたどり、視察内容を踏まえた上で、ここで獲得された思想の実像をさぐるとともに、帰国後、彼が鼓吹する「益進主義」思想の原型を抽出することにより、西洋経験の再評価を行なっていく。また、これらの作業は、二十世紀初頭の世界情勢（「帝国主義」と日露戦後の国内状況（「民本主義」）という時代背景に鑑みれば、近代日本の方向性をめぐる一つの時代転換期を捉え直す意味をも有している。

一 「生活問題」との遭遇

明治三十八年九月六日夜、『萬朝報』記者茅原華山の壮行宴が開かれた。会場となった帝国ホテルは創立十五周年を間近に控え、「帝国日本」を代表する国際的な宿泊施設であ

った。⁴⁹⁾ 同席上には、社主黒岩を筆頭に、天山円城寺清、山県五十雄、斯波貞吉、松井柏軒、山本常樹ら同紙記者が出席していたが、同僚を世界に送り出す宴は妙な静けさに包まれていた。それは、せつかくの宴が「何分にも焼打の直翌夜で、満都尚人心恟々の最中で」「物静かながら頗る凄惨」な雰囲気のうちに「何時襲撃されるも測られねば又飛火を喰ふも知れぬ」状況に置かれていたからにほかならない。⁵⁰⁾ 日比谷焼打事件という未曾有の民衆騒擾が全国に波及していったなかで、茅原はいかなる思いを胸に米欧外遊に旅立とうとしていたのか。同月下旬、彼が伊予丸に乗船して太平洋の人となり、航行の途上、「船客万歳録」と題する記録帳に書き残した七言律詩を見てみよう。⁵¹⁾

敢嘆秋風撲被單 空明萬里與心寬

(敢えて嘆かんや秋風の被單を撲つことを 空明萬里心と寛なり)

吹將長笛舷頭立 驚起潛蛟月下看

(長笛を吹きもつて舷頭に立てば 潜める蛟を驚起して月下に看る)

書劍幾人存意氣 江湖滿地捲波瀾

(書劍幾人意氣を存し 江湖滿地波瀾を捲く)

文章報國吾儂事 太憫沙場戰骨寒

(文章をもつて國に報いるは吾儂のこと はなはだ憫む沙場の戦骨の寒きを)

首聯(第一、二句)・頷聯(第三、四句)から、秋風吹く伊予丸の甲板で広大な太平洋に臨み、二十世紀の盟主へと成長しつつあった新興國を目指し、まだ見ぬ欧米世界へと思いを馳せる茅原の様子が窺い知れる。それと対応する形で、続く頸聯(第五、六句)・尾聯(第七、八句)には、海外通信員として世界各地を視察し、「文章」をもつて國家に報いることを「吾儂事」と自認する彼の強い意気込みが記されている。では一体、茅原はどのように世界を視察し、いかなる「文章」をもつて「報國」しようとしたのであろうか。まずは、以後五年にわたる外遊の足跡をたどっていく必要がある。

明治三十八年十月、茅原はシアトルより米國に入り、約一年半にわたり、ニューヨーク、ボストン、ニューヘブンを巡った。さらに、英國領であったカナダのオタワ、ウィニペグにも足をのぼし、北アメリカ大陸を横断した。⁵²⁾ 同四十年六月八日、合衆國滞在を終え、ボストン発のリパブリック号に乗り込み、英國へ向かった。以後約三年半の歳月を費やし、首府ロンドンを拠点に、仏・独・露・奥のほか、北はアイスランド、北欧諸國(丁抹、瑞典、諾威)から、南は北アフリカ(アルジェリア、チュニジア、モロッコ)、トルコまで非常に広範圍にわたる視察旅行を展開していった【表2】。

ここで『萬朝報』が持つ新聞メディアとしての特質を確認しておきたい。⁵³⁾ 日清戦争前後から鋭い社会批判を展開し、広範な読者層を開拓してきた同紙は、明治三十年に内村鑑三、翌年に幸徳秋水や堺利彦を陣容に加え、学生や教員などの知識階層も取り込み、府下有数の新聞に成長していた。日露開戦に際し、内村・幸徳らの連袂退社に加え、報道体制の迅速化の遅れにより勢力を減退させていたとはいえ、日露戦後においては依然として府下でも上位の発行部数を誇っていた。国民の国際的関心の高まりを考慮すれば、「文章報國」の志を抱く茅原と『萬朝報』読者の間には、世界情勢をめぐる情報の発信者と受信者という関係が成立しており、このとき読者が茅原の海外通信記事をもつて、いわば世界視

察の同時中継的疑似体験を行なっていたことは想像に難くない。

欧米視察の中心は米国・英国に置かれていた。当時、年間約百五十人の海外渡航者の内、半数以上が米国、さらに英国を加えると八割近くになるといふから、外遊の順路としては特に珍しいわけではなかった⁵⁴⁾。問題は茅原が何を課題として視察を行なっていたかである。

明治四十一年一月二十三日より五回にわたる論説記事で、茅原は列強外交の中心に君臨する英国と、勃興めざましい露・独両国との拮抗関係に注目している。北海とボルチック海をめぐる「北欧問題」が「欧州外交の新中心と為る」ことを指摘し、「英独対抗の時代」が到来することを伝えている⁵⁵⁾。当時の列強諸国は微妙な緊張関係のなかで相互の利害を調整しており、事実、同年四月に英・仏・独などの六ヶ国間で北海の現状維持を約した北海条約が締結されていた。日英同盟の将来への注視からわかるように、彼にとつての第一義的な課題は、日露戦後の国際情勢（「欧州外交の新中心」）を把握し、そこから日本の国際的位置を見出すことに置かれていた。

一方、茅原にとつてより本質的な課題となっていくのは文明世界の現実を見極めることであつた。このとき彼の眼前には、欧米各地に蔓延する苛酷な生活難や移民問題に代表される「生活問題」の発生という西洋文明の現実が横たわっていた。日露戦後における世界的な「黄禍論」の流布と日本人移民問題の発生は、日本の文明化の道程に影を落とした⁵⁶⁾。茅原の海外通信にも、日本の台頭および野心を警戒する欧米列強の様子が多く描かれている。彼はそうした風潮を、欧米人が抱いてきたアジアに対する「軽侮」と「恐怖」の心情をもつて分析し、「黄禍の説」を引き起こした日清・日露戦争の結果よりも、「直に彼等の活動範囲に踏み込む」「太平洋岸移民問題」が「泰西人をして民族的に自覚せしめ、其恐怖心をして益す活動せしめ」たことを指摘している⁵⁷⁾。これは茅原自身が米国滞在を通じて日本人移民排斥運動の隆盛に触れてきたことを背景とし、在外日本人の非国際的な態度への批判となる一方で、日本の位置と西洋文明の現実を痛感させることとなった。

欧米各国で発生していた生活難との遭遇から、茅原は「社会主義」「社会問題」を論じ

【表2】茅原華山の第1回「外遊」の足跡

順番	年月	国	都市
1	1905年10月～1907年5月	アメリカ	ニューヨーク、ボストン、ニューヘブン
2	1906年夏	カナダ	オタワ、ウィニペグ
3	1907年6月～1908年8月	イギリス①	リヴァプール、ロンドン、イーストボン
		アイルランド	ベルフハスト、ダブリン
		スコットランド	グラスゴー
4	1908年7月	アイスランド	レイキャビック
5	1908年9月～11月	フランス	パリ
6	1908年11月～12月	アルジェリア	
7		チュニジア	
8		モロッコ	
9	1909年1月～11月	イギリス②	ロンドン
10	1909年11月	ドイツ	ベルリン
11	1909年12月～1910年1月	デンマーク	(丁抹)コペンハーゲン
12		スウェーデン	(瑞典)ストックホルム
13		ノルウェー	(ノ威)クリスチャニヤ
14	1910年2月	オーストリア	ウィーン
15	1910年3月	トルコ	コンスタンチノーブル
16	1910年4月～5月	ロシア	ペテルスブルク
17	1910年6月～10月	イギリス③	ロンドン

ていく。明治四十一年一月二日より六回にわたり掲載された「欧米と社会主義」は、彼が『萬朝報』特派通信員として英国マンチェスターで開催された第二次「婦人労働者の国民連合」大会に出席したことを契機とし、「社会主義」蔓延の真因を解釈した論説であった。「社会主義」の論理はあくまで欧米社会における「民族衝突」の歴史のなかで培われてきた「欧州の特産物」である。英国ストライキの中心地として知られるアイルランドのベルフハストをはじめ、各地の労働争議を視察してきた彼は、西洋文明における絶対的平等精神、独立精神、自衛精神が行き着いた一つの終着的現象を労資間の対立に見出し、それを「売買の関係」「機械と機械との関係」とみなした⁵⁹⁾。その独立自衛の精神が、日本の近代化を推進させた重要素であったことを認めながらも、結果、絶対的個人主義の傾向を生み出し、さらには物質至上主義という弊害を引き起こしている現実を捉えたのである。欧米の学者が欧米の社会より割り出した「社会主義」の議論を生吞活剥して日本に適用するのではなく、「人情の紐帯」によって日本における労資間の相互的結合を図ろうというのが彼の主張であり、これは外遊以前の議論が展開されたものであった⁶⁰⁾。

茅原の「社会主義」理解は、決して資本主義的生産様式の広がりを見做して展開されていたわけではない。彼は「我国の工業にして愈よ進まば、多少欧州に類する社会的現象を生じ来るは、固より免るべからず」という見解を示し、「従つて吾人は我国決して機械的、組織的、立法的の解釈法を採用するの必要なしと言はず」と語っている⁶¹⁾。むしろ、そうした現象が進行しつつあることを看取していたがゆえに「然れども我国の現在に於ては、是よりも更に大切なものあるを知る」として「非機械的、非組織的、非立法的の解釈法」、すなわち「人情の微妙なる発展」による克服を強調したのである。

加えて、明治四十二年一月二十五日から計十五回に及んだ論説「社会問題の解釈法」では、「蓋し泰西の社会を学ばんと欲すれば、第一に小児の心理を学ばざるべからず」「人倫の問題を研究せざるべからず、之を学びたる後、歴史の知識を加へて、始めて泰西の社会問題を解釈すべし」という認識のもと、欧米社会の観察が実施されている⁶²⁾。「社会は有機体なり」という茅原は、親子・夫婦・君臣などの人間関係を支配する社会心理が政治・法律・商業、さらには資本家・労働者といった社会全般の関係でも一貫することを主張する。そして、その社会心理の考察を第一義的な課題に据え、同盟罷工や「社会主義」といった従来の解釈法を強制的、機械的と斥け、真の解釈法は、遠き西欧社会の理論のなかではなく、「汝の脚底に在り」と高唱し、社会全体の調和の必要を訴えていく⁶³⁾。

日露戦後における欧米視察の目的は、文明先進国の問題をいち早く看取し、日本の克服すべき課題と方法を見出すことに置かれていた。国際情勢を把握するなかで遭遇したのは「生活問題」という欧米社会の現実であった。ここで茅原は西洋文明を相対化する視座を確立し、文明への認識を深めていく。それはいかなる深化であったのか。彼の文明認識の内実が明らかにされなければならない。

二 文明認識の内実

吾人を以て東西の文明を比較するに、聊か前人と異なるものあるを覚ゆ、大体より論ずれば、我れ彼れに劣りたりと言はんよりも、寧ろ東西の文明全く其性質を異にしたりといふの適切なるに若かず、今日まで、日本の以て彼れに劣れりと傲したるもの、実

は唯習俗の相違に過ぎざるものあり、彼れに在りて、我れに無かりしものありと雖も、我れに在りて彼れに無きもの亦決して寡からず⁶³⁾。

明治四十年（一九〇七）八月二十七日、茅原は「東西文明の質を論ず」と題する記事を掲げ、東西両文明を「畢竟彼我習俗の相違のみ」と論じた。これは西洋文明世界への違和感に基づき発せられた見解であり、すでに米国視察の途上で顕現されていた。米国滞在中、茅原は『萬朝報』寄稿以前に、サンフランシスコの邦字紙『日刊新世界』に筆を執り、「欧米人が四海兄弟主義を執るを公言するにも拘らず、欧米人が他の人種他の教徒を見るに、決して対等の人類を以てせず、我優彼劣の念牢乎として抜くべからず」と記している⁶⁴⁾。西欧社会に存在していたのは、非欧米なるものへの差別であつた。彼が欧米列強の「万国公法」的な偽善を糾弾するのは、まさに日本の近代化の歩みと表裏する。「我同胞よ、我有為なる、諸君之を知れりや、人を模するものは、遂に其人に過ぐる能はざるを」という警鐘は、開国以来、西洋文明を模倣してきた日本に鳴らされていた⁶⁵⁾。

外遊当初、茅原は、列強外交の争点を、保守的な先進国（英・仏・米）と新興の後発国（独・露・日）との対抗関係で捉え、「新興の国を以て、保守の国の為に守門の番兵たる勿れ」と主張していたが、それは東洋対西洋という図式のもとで修正される⁶⁶⁾。列強外交で孤立する独・日が国際政治上における「二個の危険点」と見なされながら、「独人ハ憎まるゝといふと雖も、決して今日我日本人が欧米人猜疑の中心たるが如くならず」と彼はいう⁶⁷⁾。果たして、その理由は「日本が異民族の国を以て、四十年の短月日に、世界強国の伍伴に就きたる反動」にあるとされた。彼は、異民族ゆえの疎外感から、韓国の保護政策を例に、欧州外交の真意が日露を抗争させることで、欧州の平和を維持し、異民族を統治し、極東の市場を保有することにあると洞察した。こうした違和感の集積に、「生活問題」の蔓延という現実が重なり合うなかで、東西文明の相違は次のように論じられていく。

一言以て之を尽せば、亜細亜の人民ハ、一処定住の人民なり、（中略）之に反して、欧米の人民ハ、不断移動の人民なり、有史以前よりして、人種移住の大運動ハ、専ら亜細亜より欧州に向て行はれ、之が為に欧州ハ過去に於て、各民族競争の大舞台たりしのみならず、此移住の勢ハ、今日に継続し、白人種ハ南北阿米利加、阿非利加、濠州に移住しつゝあり、乃ち知る、亜細亜の文明ハ、一処に定住せる人民の生じたる静的文明にして、欧州の文明ハ、不断移動せる人民の生じたる動的文明なるを⁶⁸⁾。

茅原は、東洋と西洋の相違を両者が育まれてきた境遇の違いに見出し、そもそも性質が異なることを示し、実見してきた世界に照らすなかで、両文明の性質を「静」と「動」という独特の区分によって論じた。西洋は「天然に虐げられた」ことで「不断移動の人民」となり、「智」を主とした「動的文明」を形成し、それゆえ、個人的・世界的な特質を有する⁶⁹⁾。対して東洋は、「天然に愛せられた」「一処定住の人民」であるがゆえに、「情」を主とし、家族的・国家的な性質を持つ「静的文明」を形成したとされるのである。

ここで注目されるのは、東西両文明が「静」と「動」という区分により、同列のものとして論じられ、さらには、両者ともに弊害をもつ不完全なものであることが指摘され、「動以て静の弊を救ひ、静以て動の弊を救ふハ、是れ実に理想の文明なり」と相互補完の

必要が説かれている点である。これは当該期の論壇において大日本文明協会の主唱者である大隈重信を中心に説かれていた「東西文明調和論」が、「東西の調和」としながらも、実質的に文明化を西洋化と捉え、西欧列強に対する日本の独自性の主張とアジアに対する日本の優位性の保持を内包する論理を展開していたのと異なる視座を有している⁷⁰⁾。

では、両文明はいかなる点で弊害を生じさせているのか。茅原はその真因を西洋Ⅱ「個人」、東洋Ⅱ「家族」という社会構成単位の違いに求めている。西欧社会における「生活問題」の蔓延は、「動的文明」が激烈な生存競争を引き起こし、社会を省みない極度の個人主義を発達させ、物質至上主義に至った結果とされる。一方、東洋「静的文明」の停滞は、「一処定住の人民」が「家族」や「国家」に依存し、自立した「個人」に成長しないことに起因すると見なされた。彼は両文明を科学や技術の導入による発展の遅速ではなく、根底にある精神の展開で把握し、克服すべき対象として位置づけようとしたのである。

「エキスパート、オピニオンと実際の社会的状態とは区別するを緊要とす⁷¹⁾」。茅原が西洋文明の摂取における理論と実際との区別の必要を促すときに、「兵器、工器、商器、科学、哲学を輸入すると同時に、西洋の習俗を以て理想国のものと為し、之を輸入せんとするに至りては、頗る考えものなり」と述べ、さらに「況や其哲学、倫理の如きも、東洋の哲学、倫理を加えて、反て其完璧を見るべきの実あるに於てをや」と付け加えている点は示唆的である。ここでは応用可能な技術や理論と「習俗」および「哲学、倫理」とが明確に区分されている。かつて福沢諭吉が「文明」を「事物」と「精神」とに区分し、「欧羅巴の文明を求るには、難を先にして易を後にし、先ず人心を改革して次で政令に及ぼし終に有形の物に至るべし⁷²⁾」とその順序を論じたことを想起するならば、以後の近代日本の歩みを相対化し、東西両文明の相互補完的な摂取を課題に据えた茅原にとって、「習俗」こそ、文明の根本的な精神を顕現するもの、すなわち第一に改革すべき「人心の気風」を捉え「生活問題」の克服を図っていくための視座だったと言える。それゆえ、彼は精力的に議會・官庁から工場・学校・家庭、さらに墓地・道端に至るまでさまざまな場所を訪れ、そこにおける君臣・労資・師弟・夫婦・親子などの人間関係を取り上げ、社会心理の特質を、気候条件や地理、歴史の観点を踏まえて考察していくのである⁷³⁾。

明治四十一年七月下旬のアイスランド視察は、茅原の「習俗」への眼差しが西洋文明の淵源をさぐる指針となり周辺諸国へ注がれた典型であった。彼は「欧州の競争以外」に立つ「絶海の孤島」に、なお「第九世紀時代の欧州の旧風故俗尚漁民牧夫の間に存する」ことを聞き及び、訪問を決意し、「余ハ欧州の習俗を研究し、出来得べくんバ、其淵源をも窮めんとす、是れ此行ある所以なり」と目的を語っている⁷⁴⁾。

このとき茅原の目には、アイスランドの地理や気候といった基本的な観察は勿論、西洋文明との関係、日本との比較が映し出されていた。首府レイキヤビクで彼は英国領事館をはじめ、国会議事堂、学校、官庁、工場などを訪れ、現地の人々と会話を交わし、命名法、表情の作り方、婦人の活躍、島全体の職種、偉人、宗教の現状、「日本の国威」の波及などを視察し、氷島文明を「二十世紀が九世紀と握手するの感あり」としながらも、氷島人の欧米人への同化力を目の当たりにして、「蓋し氷島の文明と欧米の文明とハ、唯程度の差のみ、氷島人を以て欧米人たるハ、唯進数歩を要するのみ⁷⁵⁾」という。そして、それに比して、「日本人は如何に同化を論ずるも」「到底一代にてハ欧米化すべきにあらず、是れ日本人が長く別種の文明の下に生息したる罪なり」との結論を下している。

東西文明の質的相違という論理の展開には、両文明に対する距離感が伏在していた。東洋に対しては、自らの淵源を見出す存在でありながら、そこから文明化Ⅱ西洋化を遂げたゆえの優越感あるいは自負心を抱いていた。一方、西洋に対しては、文明への憧憬・崇敬の念に基づく模倣する対象としての親近感と、文明化の結果として味わった疎外感から来る憎悪を形成していた。これらの距離感は、当時の日本人における西洋崇拜と東洋蔑視という安易な思考様式を批判すると同時に、彼らの中の両文明に対する複雑な帰属意識の有様を鋭く看取したものであった。そこから東洋にも西洋にも属することができない日本が、両文明の弊害を克服し、独自の文明を形成する方向性が模索されていく。西洋文明が「生活問題」を生み落とし、人間を苦境に追い込んでいるという現実から立論されるがゆえに、彼は一貫して「習俗」に着目し、「生活」の場から文明を捉え直そうとしたのである。このとき、茅原の主張を支え、帰国後、日露戦後社会に対応するなかで鼓吹されるのが「益進主義」の思想であった。最後に、彼が「新文明」の創出という課題をいかに説いていくのか、「益進主義」の原型を抽出しながら検討していきたい。

三 「益進主義」の原型

夕、茅原華山君と逢ひ、日本料理亭生稻の階上に語る、同君の西欧風俗習慣の研究は、頗る微細に亘り、欧米に於ける老人の跋扈は青年新進の途を塞ぐといふ論、男女同権は屋外のみにて行はるるにあらず、ホームの内にも見らるゝといふ觀察など、なかゝに面白く聞いた、寓に帰ると十二時過である。⁷⁶⁾

劇作家の春雨中村吉蔵は、明治四十一年（一九〇八）六月二十六日の「倫敦日記」を右のように書き記している。約二ヶ月のロンドン滞在中、茅原と懇意であった中村が「なかゝ面白く聞いた」という「頗る微細に亘る」「西欧風俗習慣の研究」とは、日常生活の次元から西洋文明の本質を見出そうとする姿勢に基づくものであった。東西両文明の相互的補完による「新文明」の創出という課題設定のもと、独特の手法をもって西欧社会を闊歩していく茅原の姿ならびに生活実感を起点とする批評が、一ジャーナリストの目を通した「世界」として提示され、国内読者の国際的関心を集めたことは想像に難くない。

では一体、茅原が補完すべき両文明の弊害と見なしたものは何であったのか。それは西洋文明の引き起こした「生活問題」と東洋文明の停滞の原因とに見出された。換言すれば、両文明の抱える課題は、非社会的な「個人」の社会化と没我的「個人」の「国家」からの自立化であった。将来日本の方向性がその補完的な撰取にあるならば、両文明の弊害とは、まさに日本国家と日本国民が克服すべき課題そのものであった。

茅原は、米国の第一印象を「僕が米国に來りて、第一に驚きたるは、其如何にも平凡なる事なり」と語っている⁷⁷⁾。彼が「建物」「汽車」「瀑布」など何事にも「世界第一」を誇って止まない米国社会の精神性を「単調」と評したことは、逆を言えば、圧倒的な物質的發展が厳然たる事実として迫っていたことを意味している。彼は決して「世界第一」の看板それ自体を否定することはできなかった。その精神性を「単調」と批評し、対象を相対化することで、日本の方向性を見出そうとしたのである。

国力格差の実感「一等国民」としての自覚を促す言説となって顕れる。『萬朝報』海

外通信の初出となる明治四十年五月二十四日の論説「寄付金募集国民」で、茅原は遠く米国の地で自国の貧乏を宣伝し寄付金を募集してまわる日本人の姿を目の当りにし、「果して一等国民の挙措態度なりと謂ふべき乎」と嘆いた。新島襄が同志社創設のため米国各地の教会堂で寄付金募集を行なった時代と比較し、いまや日本国民は「寄付金募集国民」のままであってはならないと、自立的「一等国民」としての自覚を促がしている。

「欧米外交の中心点」をはじめ、国際情勢の把握に努めた茅原は、実見した世界に基づき、日本が目指すべき方向性を「商業国民」に見出していくが、より本質的な問いかけは「日清日露両戦争の犠牲を以て、興国の代価と為し」「進取邁往の国民」たることを要請することであった⁷⁸⁾。「故に僕は我國の将来を一身に担へる青年有為の士に望む、我國民は客觀的にして能く世界を理會せり、此上は百尺竿頭、歩を転じて、主觀的に自家の頭腦を開拓し、新發明、新學術、新応用を以て新なる文明を鑄造すべし⁷⁹⁾」。ここにおいて西洋文明の模倣から脱し、「客觀的」に世界の多元性を理解し、「主觀的」に自己の可能性を開拓し、「新なる文明」を創出する主体の誕生が求められたのである。

「新文明」の創出を唱えるなかで、茅原は東西両文明に属さない世界に目を向ける。北アフリカやトルコなどのイスラム圏への視察旅行の実施がそれである。明治四十一年十一月から約二ヶ月にわたり、茅原はアルジェリア・チュニジア・モロッコの北アフリカ諸国を訪れ、自らが唱えてきた東西文明論に加え、「更に一步を進めて論ずれば、印度、阿刺比亞の文明は之を欧州と區別せざるべからざるものあるが如く、又極東の諸國即ち日本、支那、朝鮮と區別せざるべからざるものあり」と第三文明の存在を示し、西洋の「智」・東洋の「情」に対して、近東の「想像」という区分を提出する一方で、「欧州進歩の淵源を窮めんと欲するものは、併せて阿刺比亞を学ばざるべからず」と述べている⁸⁰⁾。茅原は一貫してイスラム文明の「習俗」を視察しているが、特筆すべきは、近東の「想像」という性質が道徳の立脚地として捉えられている点である。社会心理の觀察は、その社会に属する人々の価値観、「人心の改革」の糸口を見出すために行なわれていたと言える。

欧州の今日の宗教的道德的の習俗が過去数百年、境遇の必要より結晶したるものなるが如く、東洋諸國民は亦境遇の産物なり、東西が今日國際的競争を為すは、即ち一なりと雖も、其天然上の境遇に至りては、古往今来大なる変化あるべからず、故に一旦異分子の侵入に會して、社会的の動亂を生ずるも、他年瀾収まり風靜かなるに及んで、回顧すれば、西洋の知識信仰を以て、東洋の旧迷信、旧陋俗を打破し、東洋の強点と西洋の強点とが、相抱合して、新に國民的生活の根本義と為るを見るべし、是れ適者生存、自然淘汰の理の然らしむる所⁸¹⁾。

西洋教育の普及による東洋道德の危機が叫ばれたとき、茅原は「唯此ヨリ善きもの鑄り成すに方りて要する所の火力のみ」と述べ、両文明の衝突に伴う過渡的現象とみなした。「適者生存、自然淘汰の理」のもとで新しい國民的生活の根本義が成立することを説いたのである。これは、東西文明の質的相違の認識が、彼において文明の發達や社会の「進歩」そのものへの信頼を喪失させていないことを示している。「進歩」の確信ゆえに、「生活問題」を抱える西洋文明の自立的な精神を、東洋文明における社会的な精神によって救済することが可能とされ、そこから新しい文明の創出を唱えたのである。

ここで再び茅原の「社会主義」理解、「社会問題」解釈のあり方に目を向けてみたい。彼の主張には、本質的な問いとして、「実生活」に根差していない西洋の理論を適用することへの明確な拒絶と、苛酷な生活難を生み出した西洋文明への懐疑が込められていた。「生活問題」を軸とする彼の解釈法は、西洋文明の物質至上主義が招いた「唯物論的思考の跋扈」に対する違和感を、社会を一個の完体とみなし、各個人の向上を「人心の調和」により社会進化へ導くものとして提示されていた。これは先に挙げた文明の課題、すなわち「個人」の社会化、「国家」の生活化を期するものであり、その論理は、「社会進化」のもとで優れたものが選択されるという認識に裏付けられたものであった。

「泰西に在りて泰西を学びたる結果、日本に在りて学びたる泰西と相吻合するに至りて、始めて真に能く泰西を学び得たるものと謂ふべき歟⁸²⁾」。外遊終盤の言葉にある通り、茅原は、自らの体験を通じて知識上の「泰西」を再構築していった。とりわけ東西文明の質的相違の認識を深めたことは、彼をして西洋文明の一元的な普遍性を放棄させるとともに、文明が「習俗」の積み重ねにより「生活」の中に存立していること、換言すれば、文明とは、元来「生活」の場に根差した形で、そこに生きる人間のために創出されたものであることを実感させた。ゆえに、彼は「習俗」を文明の淵源と見出し、世界各地の生活実態を視察したのである。このとき、「生活問題」への関心は、西洋文明の暗面を捉える視座となり、東西文明の相互補完的な摂取に基づく日本の方向性を模索する指針となった。茅原が日本人に対し「西洋動的文明の知識を日本の静的文明の心を以て運用」すること、両文明の相互補完的な吸収を「自家の新機軸」とし、「理想の文明」を作り出す主体となるべき旨を繰り返して主張していく所以である⁸³⁾。社会進化のもとで、両文明の相互補完的な運用を求める彼の主張は、その基底に日本人における複雑な帰属意識を据えながら、「益進主義」の思想となつて結実し、帰国後、そこから「霊肉一致の新文明」を創出することを目指す「第三帝国」の主張が展開されていくのである。

「夢は逆夢といふが、我理想化した日本は、帰つて見れば、全く倫敦客舎の一夢であつた⁸⁴⁾」。明治四十三年十月二十七日、約五年の長きに及ぶ欧米外遊から帰朝した茅原を待っていたのは、日露戦後の苦境とも言える社会状況であつた。欧米各国の苛酷な現状と対置する形で説かれていた日本の姿は「どうか日本を斯ういふ風にしたい」と願う「理想化」の産物であり、実際とは大きな隔たりを見せていた。だが裏返せば、それらの状況は、彼が外遊を通じて実見し、課題を発見してきた世界そのものであつたと言える。

日露終戦直後に外遊の途に就いた茅原は、世界情勢の把握に努め、国力の格差を痛感しながら、欧米外交の中心を「英独の対抗」と見なし、日英同盟の行方に留意するなかで、将来日本の国際的位置を「商業国民」と見出した。一方で、生活難や移民問題などに代表される「生活問題」の蔓延という欧米社会の現実遭遇し、文明の淵源を「習俗」に見出し、日常生活の次元から西洋文明の本質を把握していった。東西文明の質的相違を説くなかで、相互補完すべき両文明の弊害として示されたのは、「個人」の社会化と自立化であつた。それは過度の個人主義が物質至上主義を生み出した西洋文明の暗面を克服することで日本独自の「文明」を創出するために設定された新たな課題であつた。

茅原の「西洋経験」は、日露戦後の社会状況に対応するなかで発揮されていく。生活実感に基づき獲得した視座と独特の文明観により、「益進主義⁸⁵⁾」を鼓吹し、日本国内でも

蔓延していた「唯物論的思考」を批判し、社会進化のもとで東西文明を相互補完的に捉え、国民の自立化と国家の生活化に基づく新文明の創出を目指した。彼の思想は、国家体制の整備のもとで鬱勃とした心情を抱えた地方青年層に共鳴を呼び、雑誌『第三帝国』の思想運動となって結実していく。「霊肉一致の第三文明」の創出は、「生命力」の飛躍する場としての「生活」、その集積としての文明という図式のもと、静的「精神文明」である東洋文明と動的「物質文明」である西洋文明の調和によって企図されたのである⁸⁹⁾。

第三節 「益進主義」の鼓吹

評論家稲毛詛風は「大正三年の思想界」を振り返り、代表的論者として相馬御風と茅原華山の名前を挙げている⁸⁷⁾。「この際に雑然たる思想界の大道に立つて巧みにその文学的方面の一般人一殊に青年者を率ゐた人に相馬御風氏がある様に、実社会の渦中にあつて一流の気概と見識とによりその大勢を支配した人に茅原華山氏がある」。日本の思想界が「欧州の戦乱」を契機に「本当の自覚」へ突入したという稲毛は、相馬を「思想界」の第一人者として取り上げる一方で、「只最近思想が実生活と接近して来た結果として、氏をも広い意味での思想界の代表者の一人に数へしめるに至った」と、「熱情」「誠意」「識見」をもつて一般社会へと自覚を促し、それを統率する茅原の「実行力」「事实力」に評価を与え、同年の思想界の特色を体现する存在として注目していたのである。

では、「思想が実生活と接近してきた」状況下で「広い意味での思想界の代表者」と認識され、地方青年に影響を与えた茅原の思想はどのように評価することができるだろうか。茅原は、明治二十五年の『東北日報（仙台）』入社から『長野新聞』主筆時代に至るまで約十年の地方新聞時代に記者としての実力を蓄え、地方青年層との親交を深めつつ、地域の生産力に注目する形で平和膨張的「帝国主義」を唱えた⁸⁸⁾。このとき彼の言論を支えていたのは、「維新の敗残者」としての心情と人民の「私利私欲の心」こそが「社会進歩の一大動機」であるという確信であつた⁸⁹⁾。日露開戦直前、『萬朝報』論説記者となつた茅原は、欲望を文明の向上進化へと貢献させるべく「自彊主義」を説きながら、「社会問題」の発生に際しては、西洋追隨の「社会主義」の採用を批判し、「個体責任観」と「社会意識観」に基づく自立的「社会進化」を目指すことを主張していた⁹⁰⁾。

だが、西洋からの思想的自立を志向しながらも「社会進化」を至上原理とする茅原の樂觀的な文明観は、日露終戦直後より約五年に及ぶ欧米外遊で修正を加えられる。文明先進国における苛酷な「生活問題」の発生に遭遇するとともに、世界各国の視察を通じ「生活」と「文明」の普遍的な対応性を実見したことで、文明の多元性を痛感し、東西文明の質的相違の認識を深めたのである。そして、帰国後、「生活問題」の発生しつつある日露戦後の社会状況に対応するなかで「益進主義」を唱導していく。本節の主眼は、茅原の中心思想である「益進主義」の構造を明らかにすることで、それを支持した地方青年層との思想的連関を解く手掛かりを探ることに置かれる。まずは「益進主義」がいかなる状況に対峙するなかで、どのような形で提示されたのか、その原初形態を確認していこう。

一 人間存在の回復―「新唯心論」への到達―

明治四十四年八月十二日、茅原は『萬朝報』に論説「東北人士に与ふ⁹¹⁾」を掲げるなかで、「益進主義」を唱えた。先の山形県議会選挙に際し「憲政有終の美を就すてふ名に於

て、時としては知事、警部長の力を藉り、又地方の利益問題を餌にして反対党の地盤を揺さん」とした政友会の地域展開に対し、奮闘努力により立憲国民党を勝利に導いた青年層に向けて、「現代を悲観」しなげらも、「ストツラグル」すなわち「努力」「苦闘」することで日々計画を新たにしていくな思考態度を「ウィリアム・ゼームスの益進主義は即ち是なり、而してロングフェローのエキセルシヨアと義相通ず」と示したのである。

前年十月二十七日に外遊から帰朝した彼の眼前には、生活難の蔓延と青年層における「非国家的思潮」という現実が横たわっていた。特に教育の浸透、メディアの発達のもとで成長した青年たちは、日露戦後経営によって「田園將に荒れんとす、寧ろ既に荒る⁹²⁾」という状況にあつて、中央進出の願望を抱きながらも厳しい現実の前に「煩悶」「懊悩」し、鬱勃とした心情を抱えたまま日々を送らざるを得ない焦燥のただなかであつた⁹³⁾。こうした境遇に置かれていた地方青年にこそ、「益進主義」は鼓吹されていくのであつた。「吾人は一糸の希望を我山形県の青年、東北の青年、日本の青年に維ぎ、此益進主義を以て吾人のビーコン・ライトと為さんとす、改革の業決して難からず」と。

「益進主義」とは、プラグマティズムの提唱者として知られるウィリアム・ジェイムズの「メリオリズム (Meliorism)」の訳語である。当時、「改善説」と訳され、「進化の法則」を前提に「人力に由りて世界の改良を企図し得べきを信ずる説」として、「厭世」と「楽天」を両極に据え、その中間を採用していくことで世界は「より善く (Melior)」なり得ると主張するものであつた⁹⁴⁾。周知のように、明治四十四年二月、西田幾多郎はジェイムズの「純粹経験の哲学」に示唆を受け、『善の研究』を著した⁹⁵⁾。ジェイムズの「純粹経験」とは、知識の介在を許さない経験のみが唯一の實在であるという考え方で、人間の経験の連続的事実を無視する主知主義に反対する哲学的試みであつた⁹⁶⁾。

楽天知命と樂觀悲観とは自ら別なり、楽天知命は人の内的生活に於て覚行円満の域に達したるをいふ、富貴淫せず貧賤を樂む亦難からず、樂觀悲観は我れと外圍世界との關係なり、客観は常に樂觀すべきものを以て満たされず、樂觀すべきものと雖も、大なる理想の前には必ずしも吾人をして満足せざらしむ、一身世界に繋がるに於て、吾人は常に建設の心を把持して打破せざるべからず、悲観しては更に一難を経る毎に一倍し来る勇氣を鼓舞し、樂觀しては更に理想に達せんとす、是れ益進主義なり⁹⁷⁾。

明治四十四年九月二十七日、茅原は論説「益進主義と先達」で、ジェイムズ「メリオリズム」の内容を日本の現状に即して捉え、社会と没交渉な「悲観」と現状容認・自己欺瞞に陥る「樂觀」を排し、現状への批判精神を保持しつつ、理想への建設的精神を持つ必要性を説いた⁹⁸⁾。悲観せざるを得ない境遇にある青年たちの心情を汲む形で、現状批判から出発し、理想建設に努めることを訴えたのである。このとき「益進主義」を支えていたのは「何処までも人事を尽くす」べき個人の存在および変革に対する信頼と、社会を「一個の完体」と見なし、生存競争に基づく「社会進化」のもとで矛盾する二項を相互補完的に調和する思考様式であり、その根底には人間存在の回復という命題が据えられていた⁹⁹⁾。

「古の貧というは生活問題に關係なき貧なり、今の生活問題は直に胃の腑の問題なり¹⁰⁰⁾」。熾烈な「生活問題」を前に日本人は、「自衛主義」「黄金崇拜」「黄金蓄積」に直走つていた¹⁰¹⁾。日露戦後の実業熱のさなか、「成功」という言葉に魅せられ、「黄金蓄積」者と

なつてさらなる物質を求める者、失敗してなお成功を追い求め「拝金宗」となる者たちが後を絶たなかった。茅原は「黄金蓄積は物質主義である、人物質の奴と為れば、物質の為にする労苦を慰藉するに、亦物質を以てする」と、資本主義生産様式の拡大に伴い蔓延する没我的な「物質至上主義」がもたらした欲望の際限ない循環構造を看取したのである。

他方、内面的な沈潜・理性の絶対化をもって時代の閉塞状況に向き合おうとする思潮に対して、「吾人は自然主義を出て新理想主義、新華想的精神に入らん」と、自説の所在を示している。¹⁰²「ロマンチズム」をあえて「華想」と表現することで、現実と遊離した形で展開された「浪漫主義」と、現実を暴露するのみで理想を建設し得ない「自然主義」を同時に批判し、さらに耽美的に靡く「新浪漫派」との違いを明確に打ち出したのである。

つまり、茅原のいう人間存在の回復とは、人々の心を捉えていた主知主義的な「唯心論」と物質至上主義の「唯物論」からの脱却を意味していた。内なる「理性」の絶対化により社会と没交渉となる「個人主義」と、「物質」を優先するがゆえに人間存在を没却してしまう「物質至上主義」が双方向的に批判されるなかで、「実生活」の場を起点とし、「自我」と「社会」との不断の対話のもと、真の「自我」を獲得する必要が説かれていく。「現状を打破せずんば益進は無い、暗中飛躍せずんば現状打破は無い」¹⁰³。生活難という現実を受け止め、現状を打破し、「益進」の扉を切り開くことが求められていたのである。

「科学主義の人生観は即ち唯物的人生観だ、一切を因果律に帰し、従つて一切を平等視する、英雄もなく、美人もなく、賢愚不肖もない、総てが因果律から来るのであるから、努力も奮闘も無用に為る」¹⁰⁴。日本人を「生活問題」の圧迫のもと「物質主義」の虜と化し、青年層を「人生問題」に煩悶させていた真因は、科学の発達による「唯物論」を基礎とし「一切を因果律に帰し」てしまう「唯物的人生観」に見出された。それは「神なく理想なく幻影なき」二十世紀において人々の精神を支配し、あらゆる個性を「平等」の名の下に喪失させ、その画一性ゆえに一層激しい生存競争と多くの落伍者を生み出した。このとき依つて立つべき価値として提示されたのは「生」の事実に基づく「我れ」「我生命」の存在であった。「人が科学の主人で、科学が人の主人ではない」。人間存在の危機的状況のなかで、「我れは受動的に因果律に支配せらるべきものではない、主動的に因果律を活用し」「適者と為つて生存するのだ」という「個性中心主義」が表明されたのである。

「今日まで藐視せられた個性の真生命を、高い、理想世界の中心に引張り上げむと努力したのはオイケンの哲学である、荒寥として砂漠の如き科学的現象界に、澁澁たる個性の神秘を直覚し、個性の本質たる内的持久性と創造的生命とを提げて、大胆に数学者科学者に肉薄し、以て現象界より直に本体界、形而上界に突進し飛躍せんと奮闘したのは、即ちベルグソンの哲学である」¹⁰⁵。「益進主義」を考える上で忘れてはならないのが、オイケンやベルグソンら「生の哲学」と呼ばれる時代思潮の影響である。¹⁰⁶特に茅原が評価を与えたのは、両者の哲学思想が「理想主義」のもとで隠蔽されてきた現実を正面から見据えるとともに、科学万能の思想によつて滅却されていた「個性」に新たな生命を吹き込んだことであつた。文明の内部崩壊を指摘し、宗教共同体による「生の新しい連結」の実現を主張するオイケンの哲学と二つの「自我」の恒常的対話による「創造的進化」を唱えるベルグソンの哲学を「個性問題」に即して把握したのである。茅原は、オイケンが認識し高めようとした「個性の独存的生命と自由労作との真理」と、ベルグソンが直覚により「生の飛躍」を試みた「個性の本質たる内的持久性と創造的生命」に、人間の存在、「個人の

主観的経験」、努力に基づく創造の意義を見出し、「社会進歩の一大動機」たる人民の欲望を利導する方向性を読み込んだのである。

ここに至り茅原は、「新なる時代精神」を「科学を基礎としたる唯心論、実験に根ざした理想主義、実生活は出发点とした華想主義」に見出し、「新唯心論」の地点に到達した。当初、悲観と楽観という抽象的かつ単純な図式で唱えられていた「努力自彊主義」的「益進主義」は、人間存在の中心となる「自我」とそれを形作る「個性」を依って立つべき価値とし、「一切を因果律に帰す」ことで人間存在を喪失させてしまう「唯物的人生観」を批判対象に定め、その産物たる「官僚政治」と権利・自由なき国家・社会・制度に筆鋒の矛先を向けていった。では、「益進主義」で依拠すべき価値とされた「自我」「個性」の所有者である人間はどのような存在と見なされていたのであろうか。

二 「真個の自我実現」——人間観における「個人」の位置——

「文明の呪詛」と言うべき状況から人間存在の回復を求めて提唱されたがゆえに、「益進主義」の思想構造を説明するには何より人間観を考察する必要がある。本節では、茅原が示した三つの「個人」像を抽出し、三者の連関を解くことで、「益進主義」における人間観を位置づけ、そこに示された「真個の自我実現」の内実を問うこととする。

自我は常に知性等の客我に対して主たるのみならず所有する非我に対して主である、天地に意味あり人生に価値ありといふのも、その意味を感じその価値を感じる主体は自我である、意味も価値も所詮は自我要求の所造で、自我が無ければ意味も価値もない、自我に対して意味なく価値なきものも他に対しては価値あり意味があるといふ疑問も起るが、他に対しての価値、意味は飽くまで他に対する価値、意味で、自我に対しては勿論ナッシングである、こゝに於て自我は天上天下唯独尊の栄光に満ちた王座に達せんとしてゐる。¹⁰⁷⁾

人間存在において全ての価値や意味に先行するものこそ「自我」の実在である。「自我」が存在して初めて価値や意味は享受される。その「中心骨子」を形成するのが人間に備わる「個性」で、それは「特有の天性」として自己と他者を区別する基準となる。ゆえに、「真の自我」は「撰択の原理」「判断の基準」「裁決の主権者」と位置づけられ、「自己の所信を以て絶対の真となし、自己の要求を以て無上の善となるもの」なのであった。続けて茅原は、自他の「自我」が完全に一致し得ないにもかかわらず、自己の所信を客観的真理として主張する一方で、他者の客観的真理の存在も認めてしまう人間の矛盾を指摘し、「此れ吾人に自己実現の要求、自己拡充の要求がある為め」と説明する。そこから「吾人の生活は自己を表現し自己を拡充し自己を実現することに外ならぬ」と、「人間生活」そのものが「自己実現の過程」であることを示した。「自己実現」とは「自己を客観界に投合せしめ順応せしむるの謂でなく、自己の内容によって新しい客観を創造する」とであった。この意味において「自己は即ち新しい客観の創造力」となるのであった。

人は環象に影響される。況んや吾人には遺伝と呼び本能と称する先祖伝来の世襲財産があつて、吾人が精神的宝庫の大部分を占有し、それが活動の形式と方向とを規制し

て居る、然し此等一切の權威と勢力とは、原始以来独立自存せる客觀的實在ではなくして、過去及び現在に於ける一切の自我實現、一切の自己客觀化の総化である、各時代を通じて各方面に互つて所有する個人が創造し化生せる結果である、恰も珊瑚蟲が自己体内の分泌物によつて珊瑚樹を作り珊瑚礁を築くやうに一切の自己が自性本然の創造力に依て織り成し編み出せるものである、畢竟するに吾人が客觀的と呼ぶところのものは実は曾て主觀の創造せるものに外ならぬ¹⁰⁸⁾。

人間が自己の要求の他に認めてしまう客觀的価値は、「一切の自我實現、一切の自己客觀化の総化」にすぎない。あらゆる客觀的真理を相對化することで、客觀性の仮面を剥ぎ取ろうとする茅原の意図がうかがい知れる。實の所、「客觀的真理」とは、過去や現在において個人または社会が創り出した「価値」を受動しているに過ぎない。「自我」の實在が強く肯定されていたのは、「絶対の真」「無上の善」であるはずの「自我」の實現を阻むものが厳然と存在していたからであつた。今こそ、日本人は「自己が真個の活動を為す」ことで「偶像破壊の過程」「既成的事象に対する根本的否定の過程」に突入しなければならぬ。「吾人は新らたに自己に最も適した住家を自ら建築せねばならぬ、真個の自我實現は方に此より着手せらるゝ」と、「自己の新王国を創立すべき時代」の到来が告げられ、自己の所信を一般的真理へ導くことが高唱されたのであつた。

要するに、力強く肯定された「自我」論で茅原が示そうとしていたのは、自己を他者から區別し「新客觀」を創造すること、内なる秩序の創造をもつて周囲の価値秩序に對峙し、そこから独立しようとする、いわば自立的存在としての「個人」像であつた。それは人々が「唯物的人生觀」に基づく「官僚政治」の生み出した価値秩序や社会制度によつて「自我」の實現を阻まれ、支配されようとしていたことに對する精神的抵抗の顯現にほかならなかつた。だが、自立的存在としての「個人」は、自立した瞬間から新たな課題を負うこととなる。続いて、第二の「個人」像、依存的存在としての「個人」について見ていこう。

人間の我のうちにもこの伝説の我と現在の我とが争闘してゐる、即ち生きて新しく築き上げられて行く我と、過去のまゝ動かず過去の迷盲を現在に広げて行かうとする我との葛藤である、この争闘に於てこの伝説の我が凱歌を奏してゐる時は時代錯誤の我が出来て来る、而してこの現在の我が勝利を誇つてゐる時は我は創造の我をつくるのである¹⁰⁹⁾。

「過去の迷盲」たる支配秩序（「伝説我」）から自立したはずの「自我」（「現在我」）は、自立と同時に自らの存在を拘束する新たな「伝説我」へ姿を変えてしまう。茅原は、ベルグソンの「自我」論に示唆を受ける形で、人間の内側には「現在我」と「伝説我」の葛藤が存在することを指摘し、そこから「時代錯誤の我」を生み落とすか、「創造の我」を作り出せるかは、争闘の勝敗如何によると主張した。「わが世界はこの二つの私の争闘である」と言い切り、人間の「我」を「現在」と「過去」という時間軸で捉え、新旧の對決に勝利し、創造的活動へ進むことを訴えたのである。

さらに「自我」の捉え方は次のように論じられていく。「我々は時代を離れて存在しないと同樣にまた生活を離れて生存しないのである。故に我々の我は上下四方に活躍自在

なる我であつて始めて生活の全部を自覚することが出来るのである」¹¹⁰⁾。「現在」と「過去」という直線的な時間軸で捉えられていた「自我」が、「時代」と「生活」、つまり時間と空間という二つの座標軸で捉え直され、「客観の我と主観の我とその合致が我の本尊である。即ち我はあらゆる人生の中心である」と論じられる。これは「自我」が「時代」と「生活」という二つの「形式」で捉えられるがゆえに、人間の存在を拘束する、換言すれば、ある「形式」への埋没を生み出す危険性を孕んでいることを示唆している。と同時に、「自我」が「時代」と「生活」の交差した地点においてのみ把握されることをも意味していた。だからこそ、茅原は、「自我」を「実生活」の場から「社会」との関わりで捉えていく。つまり、自らの依存性を認識することで初めて「個人」は自立的存在たり得るのであった。では、自立した「個人」はいかなる存在となつていくのであろうか。第三の「個人」像、普遍的存在としての「個人」像を見ていこう。

人間のあらゆる人々の心を貫く一線がある、その一線は上下四方縦横に交叉し、過去現在未来に渡つて引かれてゐる、即ち人間の生命の変化、発展、進転そのものゝコンスタンシイ（恒久性）である、この個人の心から心を貫いてゐるユニヴァサル、マインド（普遍共通の心）が歴史の事実の底に潜む最上権威である、この心を表現するところが史家の事業である。（中略）然るにこのユニヴァサル、マインドと言ふものは人間の心を共通してゐるものであるけれども、要するに人間一個人の一人の心の中に宿るものである。故に歴史は人間の一個人の経験世界を離れて存在しない、人間一個の世界は人類共通の世界と照応類似する故に人間一人の完全なる自叙伝は、人間全体の歴史と対応し、同一比、同一率で比較されることは言ふまでも無い¹¹¹⁾。

真の自立的存在としての「個人」は「ユニヴァサル、マインド」へ連なる。茅原は「人間のあらゆる人々の心を貫く一線」を「普遍共通の心」と称し、それを「歴史の事実に潜む最上権威」と位置づけた。その上で、「普遍共通の心」が「一個人の一人の心の中に宿る」と、個人の経験が「同一比」で人類全体の歴史世界に対応すると主張したのである。

ここには自立的「個人」と依存的「個人」を止揚する形で、普遍的存在としての「個人」の姿が描き出されている。自立的「個人」が不断の創造的活動により文明の向上進化へ貢献することこそ「益進主義」の内実を占める重要素であつた。「一個人の経験世界」が「人類全体の歴史世界」に連なる所以は、「個人」が自立的たること、すなわち「創造的我」を作り出すことで歴史の主体となることにより、普遍的な存在へ繋がるという図式の上にあつた。茅原の提示した三つの「個人」像は相互に連関するなかで日本人に不断の創造的活動を要請し、「益進主義」における人間観となつて立ち現われていく。

では、このような形で示された「個人」はいかに組織化されていくのか。最後に「益進主義」における社会観を明らかにしていこう。

三 「人間本意の憲法政治」——人民の自立化と国家の生活化——

「益進主義」の社会観を考える上で茅原の共同体観を確認しておきたい。彼の「自我」論が常に「実生活」を介して「国家」「社会」との関わりで展開されるのは、「国家」「社会」が機能や利益を追求するあまり、人間および生活共同体を脅かしていたからであつた。

此個性中心主義を以てニイチエの本能的個人主義と同視しては困まる、我れは与へられた、更に与へねばならぬ、我れの生活は独り人に対してのみならず、動植に対しても地水火風に対しても日月星辰に対しても常に反動反動してゐる、与ふるのは取るの取るのは与ふるのだ、取与同帰で、我れの所謂個性中心は一身五世界に繋がる個性中心だ、『個中の趣を解し得れば五性の煙月尽く寸裡に入り、眼前の機を破り得れば千古の英雄尽く掌握に帰す』五湖の煙月を寸裡に入れ、千古の英雄を掌握に帰した個性中心説だ、宇宙を懷に入れた個性中心主義だ。¹¹²⁾

茅原の唱導する「個性中心主義」とは、「我れ」を中心に据えながら、周囲との連帯で捉えられる「取与同帰」の「一身五世界に繋がる個性中心」であった。その対象は人間のみに限定されず、自然・世界さらには宇宙までもが視野に入っている。こうした「個人」の集合体こそ、彼の想定する共同体の姿であった。そこに「自己の進化」を「国家の進化」と重ね合わせる強い連帯意識が加わるがために、人間存在そのものを危機に陥らせる政治や社会の現状が厳しく批判されていくのである。

雑誌『第三帝国』を創刊し、大正の新「帝国」を「第二帝国」たる「明治官僚制」から解放し、日本人民の主體的な活動によって内側から再創造することを主張していくのも、こうした共同体観を基底に据えていたためであった。「これからの日本人は（明治時代の進行曲を奏し了へた日本人は）、第二の進行曲を奏さねばならない、明治時代の音楽はその音色が同じであった、けれども、大正の音楽はその音色が個々に異らねばならぬ、そしてその音色が異なる故に生ずる一大諧音とならねばならぬ、その一大ハーモニーが風濤の呼吸するやうに起きて来て始めて大正の文明は、その第二の充実をすることが出来る、その音色はいふまでもなく、一に個人主義、二に民主主義¹¹³⁾」。

ここで注目されるのは茅原における「欲望」の捉え方である。「個人的にいへば簡易生活は必要である、然しながら社会的にいへば、長袖善く舞ひ、多錢善く買ふ、何故多く儲け多く買ひ多く貯ふるのが悪いのか¹¹⁴⁾」。「物質至上主義」に囚われる日本人の実状を嘆きながら、物質的進歩の事実そのものは認めている。その上で「衣食住の進歩、快楽趣味の進歩が何故悪いのか、我々は最早禁欲主義の昔しに還ることは可能ぬ、快楽主義の発達は避けんと欲するも避くることは可能ぬ」と、両者の相互補完的な採用を説いたのである。

例えば、こうした「欲望」の把握は、日露戦後経営で展開されていた地方改良運動に対する見解に顕れている。茅原は「二宮宗は地方でも市又は町では反対である、反対でないとしても相手にされぬ」と述べ、「商工の利益と両立せぬ」時代錯誤な禁欲主義と批判している。彼においては、「社会進化」に伴って拡大されてきた人間の欲望は否定されるものではなく、むしろいかに文明の向上へ善導し得るかが課題とされていた。人民の欲望は共同体の発展における動光源と認識されていたため、「自我」の実現・拡充が「実生活」の場を媒介にして政治上へ、すなわち「社会」との連関のなかで説かれるのであった。

こうした共同体観に基づき茅原は批判の刃を、「貴族」「官僚」「軍人」を本位とする現今の政治状況へと向ける。政治制度を複雑化し、国民を政治的無責任の状態で導くことで自らの「権力の増長」を謀る「官僚政治」の打破が急務の課題とされた。「常に一般消費者の休戚を念」う「民本主義」を早期に提唱し、「憲政の実現」を求めたのである。¹¹⁵⁾

「憲法政治なるものは自我を意識したる国民の生命力が迸って政治の方角に活動するを

いふのだ」¹¹⁶⁾。茅原の「民本主義」の担い手は、「生活問題」の苦しみから「自我の權威を意識し、此自我を政治上に拡充せんとする人民」にほかならなかった。「憲法の精神」を「時代と共に変化する時代精神」とみなし、日本人を「時代精神」を形成する主体と位置づけ、「故に憲法も亦我々の外に在るのではなくして、我々の内に在るのだ」と政治的自覚を促したのである。先の憲政擁護運動を「生活問題」を内包し得なかった点で批判し、「憲法政治」の主体となる「新しい神」として期待を寄せたのは「独立して生活し得るもの、自ら富を造るもの、肉の独立を得て併せて靈の独立を有するもの」、すなわち「農人、工人、商人」といった地域生産力の担い手たちであった¹¹⁷⁾。「憲法政治は米屋、酒屋、油屋、八百屋、時計屋、機械屋、蕎麦屋、天婦羅屋の政治である、極めて平凡な政治である、夫れだから堅実の政治なのだ」という訴えのなかに具体的な支持層が示されている¹¹⁸⁾。

「国家の各機関は今や其中心点を失ふて、各其往かんと欲するに任かしてゐる、之を国民生活で統一するのが、日本の急務である」¹¹⁹⁾。だが、覺醒した日本人民により創造されるはずの「国家」は、各機関が中心点を失い、「国家無能」さらには「国家有害」という事態を招いていた¹²⁰⁾。茅原が「政治は米に在り」「我が衣食住にありといふ処に落着かねば、真に生活に自覺したものとはいへぬ」¹²¹⁾と呼びかけたとき、現実の政治と国民の「実生活」との間には大きな隔たりが生じていた。茅原は「我らは現代に於ても尚生活から遊離して政治を談ぜんとするものあるを悲む」¹²²⁾と述べ、「我々は政治を生活化せねばならぬ」と「実生活」の場から政治のあり方を問い直し、「生活即政治」の主張を展開し国家の生活化を要請していく。「生活」こそ、自然としての人間存在が作為としての「国家」「社会」と交錯し、その摩擦・衝突を通じて新しい動力源を生み出す場であり、「生活問題」とは「国家」と「国民」の没交渉を認識し、改善する重要な契機であった。

「日本人に在つては議會は我れの外に在るのだ、政界は我れの外に在るのだ、減税するものは我れの外に在るのだ、それだから我々は日本の憲法政治を改革するのではない、新に人間本位の憲法政治を創造開始せねばならぬのだ」¹²³⁾。藩閥政治家、官僚、一部の特権資本家などにより「国家」を占有され、「日本人の胃の腑」が「全く政治上に象徴せられてゐない」現状を打破するために、茅原は新しく「人間本位の憲法政治」を創造する必要を説き、その具体的な方策として「普通選挙法の制定」と「根本的減税」を提示した。

「普通選挙」こそ、国民が自立的存在となり「主動的に能動的に其自我を政治上に拡充する」有効な政治的手段であった¹²⁴⁾。と同時に、選挙の場合は国民を依存的存在としてしまう危険性をも内包していた。したがって茅原は「選挙」を選挙人が「生活上の為に奮闘するもの」と位置づけ、まず何より選挙人である「日本国民の人生観」を革新することから「憲法政治」実現の第一歩を進み出すべきであると主張していくのであった。こうした茅原の主張は、やがて『第三帝国』誌上において普通選挙請願署名運動や「模範選挙」などの実際の運動として具体化され、地方青年読者の結集を呼んでいく。

「生活問題」を「個人の自覚」の出発点に位置づけ、「経済生活が我等の所謂実生活である」という茅原にとって「根本的減税」は「普通選挙法の制定」と並んで第一義的な課題であった。彼は「非常特別税として賦課若くは増徴せられたる通行税、織物税、塩専売を始めとし、酒税、砂糖税、石油消費税の廃止、軽減、整理を要求」し、人民の「実生活」を顧みない「財政上の戦争」の中止を訴えた¹²⁵⁾。この要求は、軍備拡張、なかでも植民地経営と陸軍二個師団増設問題への批判となり、軍事費の削減、「海軍一元主義」、満

韓放棄による「小日本主義」、徴兵制の廃止などの形で表明されていくのであった。

何が何うならうと、防ぐべからざるはデモクラシイの大勢である、此デモクラシイは人間主義の上に根拠を有つてゐる、人間主義は個性中心主義の上に根拠を有つてゐる、個性中心主義は人間の自覚から来る、人間の自覚は生活問題から来る、我國民は明治維新を以て覇者を中心とした第一の帝国を出たが、人間の自覚が伴はなかったから更に藩閥を中心とした第二の帝国を受取らざるを得ざるに至つた、我國民はこれから君民同治、上下和衷の第三帝国を創造せねばならぬ運命に会してゐる。¹²⁶⁾

「個人」の存在を中心に、「自我」を「実生活」の場から「政治」上に拡充しようという主張の集大成が人間の存在そのものに依つて立ち、「自我」の覚醒と「実生活」の充実ににより「国家」を内側から再創造していこうとする「第三帝国」の実現であった。「私は継続的破壊を為さんとするものである、我等が新なる憲政を創造するまで継続的破壊を為さんとするのである」¹²⁷⁾。新帝国を創造するための破壊。それは現状打破の訴えとなつて鬱勃とした心情を抱える地方青年層に響き、「自治体革新」などの形を取つてそれぞれの場における主体的な呼応を引き起こしていく。¹²⁸⁾ ここにおける茅原の政治論は、あくまで「個人」の存在を立脚点とし、現今の制度や政治状況へ批判を積み重ね、新聞や雑誌といったメディアを通し、時々刻々と移り変わる情勢に対して常に言論を発するなかで、読者の心情を吸収しつつ、彼らに不断の政治的覚醒を促すという形で展開されていくものであった。¹²⁹⁾ 「大なる始めは国家の各機関が新しく目覚め始めたる国民生活と調和するに始まる」¹³⁰⁾。「益進主義」思想において示された「社会」は、あくまで個人の「自我」を起点とし、その拡充する場としての「実生活」から、「政治」さらには「国家」を編成しようと試みる場であり、それゆえ、日本人民が自立的「個人」から普遍的「個人」となり、文明の向上進化に貢献し、歴史の主体者へと成長する場だったのである。

以上のように本章では、茅原華山の思想構造を解明すべく「益進主義」の内実をさぐつてきたが、その思想的意義は次のように位置づけることができるだろう。

「文明の呪詛」とも言うべき「生活問題」の蔓延のもと地方青年層の実状を踏まえ鼓吹された「益進主義」は、まず何より人間存在の回復を求めるものであった。当初、「努力自彊主義」的にすぎなかった「益進主義」は、人間存在の中心となる「自我」とそれを形作る「個性」を依拠すべき価値とし、ベルグソンやオイケンなどの欧米の哲学思想の影響を受けつつ、人間存在の喪失を招く「唯物的人生観」を批判すべき対象として見出すなかで、「物的唯心論」とも言うべき「新唯心論」の地点へと到達した。「実生活」の場における「社会」との不断の対話のなから「自我」を獲得することが求められたのである。

このとき「益進主義」で示されたのは「自我」の所有者としての「個人」であった。「自我」を「裁決の主権者」と見なす茅原は、「人間生活」を「自己実現の過程」と位置づけることで、自立的な「個人」のあり方を示した。だが、自立的「個人」は、「時代」や「生活」さらには自らの「伝説我」に拘束され、「形式」に埋没する依存的な存在でもあった。そこから二つの「個人」を止揚する形で普遍的存在としての「個人」像が提示され、不断の創造的活動により文明の向上へ貢献し、「普遍共通の心」を体現する歴史の主

体者となること、すなわち「真個の自我実現」を果たすことが要請されたのである。

このような人間観に基づき示されたのは、社会を一個の完体とみなす茅原の共同体観を根柢に据えた、自立的「個人」の集合体としての「国家」像であった。社会への強い連帯意識ゆえに、人間存在を脅かす現存の国家・社会・制度に対して鋭い批判が向けられ、そこから「人間本位の憲法政治」の実現が唱えられた。日本人の欲望を善導する形で説かれた政治論は、地方生産力の担い手を主たる対象とし、彼らが自立した「個人」となつて「自我」を「実生活」の場から「政治」上へと拡充することを主張したものであり、「第三帝国」の創設はその実現を最も痛切に訴え、実践的に展開したものであった。

ここで「益進主義」思想の内実を占めていたのは、日露戦後社会で再編成されようとしていた外からの「秩序」に対峙するための、内なる「秩序」の形成という精神的抵抗にほかならなかった。矛盾・対立する二項の相互補完的な把握は、現状打破のエネルギーを新しい秩序の構築へ善導する意図を含んでいた。「自己以内に第三帝国を創造」し、それを「外現」すること、すなわち不断の精神的自己革新を起点とする社会変革の実現が、社会との連帯意識のもとで、文明への貢献、歴史の主体者となることで求められたのである。

雑誌『第三帝国』は茅原の提唱する「益進主義」の中心機関として地方青年層の心情をすくいあげ、思想の実践化を試み、多くの読者を結集することで、当該期の思潮で独自の地歩を形成していく。ここで茅原の「益進主義」は青年たちの心に共鳴を呼び、それを吸収し、思想的自立を図り、独自の道を切り拓く人物を登場させていくのであった。

¹⁾茅原の「第三帝国論」に着目した先行研究として、山岡桂二「茅原華山の第三帝国論について」『文化史学』一九（一九六五年三月）四〇～五〇頁、および「同（続論）」『歴史研究』三（一九六五年十一月）一～二二頁を挙げることができる。ほかに茅原を取り上げた研究として、神島二郎『近代日本の精神構造』（一九六一年、岩波書店）、西田長寿「愛山・華山・蕨村」『明治文学全集』三五「月報九」、一九六五年、筑摩書房）などがある。

²⁾茅原健「茅原華山年譜・著作目録稿」（一九八四年、不二出版）参照。

³⁾茅原廉太郎「新橋竹枝」『穎才新誌』二一七（明治十四年七月二十三日）四頁。これ以降、茅原が『穎才新誌』に投稿し掲載された漢詩の題名と雑誌の号数（発行年月日）は、次の通りで、確認できる限りで十四回を数える。『穎才新誌』は復刻版が不二出版より出されているが完揃ではない。華山の漢詩については、野山嘉正が「ジャーナリスト茅原華山の漢詩」（『江戸詩人選集』「月報七」第一巻、一九九一年七月）七～一〇頁で、文明開花期の少年が、一方では欧化主義者でありながら、漢詩に早熟の才能を発揮していたことは、当時としては珍しくない「知識少年の典型」であると評している。

- ・茅原廉太郎「柳橋竹枝」三〇〇（明治十六年三月十日）四頁。
- ・茅原廉堂「春寒」三〇九（明治十六年五月十二日）三頁。
- ・茅原廉堂「秋日客中作」三一六（明治十六年六月三十日）三頁。
- ・茅原廉堂「暮春客中作」三一八（明治十六年七月十四日）三頁。
- ・茅原廉堂「客中作」三二〇（明治十六年七月二十八日）四頁。
- ・茅原南郭「春日郊行」三二八（明治十六年九月二十二日）三～四頁。
- ・茅原南陔「游山水楼記」三二八（明治十六年九月二十二日）三頁。

・茅原廉「秋江即事」三三〇（明治十六年十月六日）四頁。

・南陔茅原廉「経旧都」三三三（明治十六年十月二十七日）四頁。

・茅原廉「湖上雜題」三三四（明治十六年十一月三日）四頁。

・茅原廉「感秋」三三五（明治十六年十一月十日）四頁。

・茅原廉太郎「南口評」三三八（明治十六年十二月一日）四頁。

・茅原廉「江樓即事」三五八（明治十七年四月二十六日）五頁。

⁴⁾内海朝次郎「六、本省雇員から言論界に雄飛した茅原華山氏」（『統通信島の先輩巡礼』、昭和十一年、交通経済社出版部）五六〜六七頁。

⁵⁾茅原廉太郎「因縁東北日報社へ入るの辞」（『東北日報』（明治二十五年七月七日）一面では、赴任した理由が維新における敗者体験および首藤陸三との関係から説明されている。

⁶⁾山形時代に関しては、川崎浩良『山形県新聞史話』（一九四九年、山形新聞社）、および近藤侃一「山形県新聞史」（『地方別日本新聞史』、一九五六年、日本新聞協会）を参照した。山形時代に著した茅原廉太郎『東北大勢論』（明治二十八年二月、共同活版社）は、「日本人民ノ中最モ王化に露ハザル」辺境の地東北に「平民政治」を確立することを説き、東北の青年たちに強い影響を与えた。一力健次郎は、同書に共鳴し『河北新報』を創刊する意を強くしたという（河北新報社『河北新報の七十年』、一九六七年）。

⁷⁾茅原は『日刊人民』への入社を自伝的著書『平生の懺悔』（大正五年、実業之日本社）二〇二〜二〇三頁で次のように回想している。

再び東京に帰って私は自由党の人民新聞に招かれることゝなった、この新聞は菅原伝氏と日向輝武氏と共同で出資して竹越三又氏が処理してゐた、この時竹越氏が私を抽いて主筆としたのであった、論説記者としては私の外に塚越停春氏などもゐた、私はこの人民新聞で『戦争の福音』や『人物評論』を書いた「局面展開」とか「不得要領」等の新熟語を造り出したのは私で、この人民新聞の紙上であつたと思ふ。

⁸⁾田口卯吉は、自らが主宰する『東京経済雑誌』（明治三十三年九月）で「華山生、人民紙上において立憲政友会創立委員の人物を評せり、其文章遙かに閑是非に勝れり、然れども之を以つて能事とせば、到底蘇峰矧川の亜流たるを免る能はざるべし」と評している。

⁹⁾「青年と教育」（『長野新聞』（明治三十四年十月十九日）二面。以下、本稿で用いる『長野新聞』は、長野県飯田市立図書館所蔵のものである）。

¹⁰⁾長野県諏訪郡出身で、当時、同校二年の岩波茂雄は、この死を「我々憧れの目標であつた」とし、「巖頭之感は今でも忘れないが当時これを読んで涕泣したこと幾度であつたか知れない」と回想している（安倍能成『岩波茂雄伝』、一九五七年、岩波書店）六二頁。

¹¹⁾伊藤整『日本文壇史』七（一九六四年、講談社）第七章参照。

¹²⁾明治三十四年十二月二十九日付の『萬朝報』一面には「当今の新聞記者」と題し、この頃の華山を評した次のような記事が掲載されている。

一見すれば瀟洒たる才人なり、筆を下せば千言立ち所に成り、文藻煥然、また甚だ才気の流露するをみる。然れども先生自ら才子たるを好まず、新聞記者にして又事務家たるを以て自任し、其の十六、七歳より自由党員なれるも、今に自由党風に浸染せざるを自負す。先生廿二歳にして始めて仙台東北新聞の記者となり、翌年山形自由新聞の主筆と為る其の社長重野謙次郎自由党を脱するや、先生堅く執て不可を主張し、侃諤縦横、頗る其の地方を動かし、竟に重野をして復党せしめたり、是より先生の名、

頗る山形に揚がれり、廿八歳にして人民新聞に入り、大に社務を改革し、毎月の損出額千五六百円なりしを四、五百円に減じたり、今茲同社を去て長野新聞の主筆となる、

歳卅一

¹²⁾ 立命館大学西園寺公望伝編纂委員会『西園寺公望伝』第二卷（一九九一年、岩波書店）参照。

¹³⁾ 茅原華山（於東京）「教育の大本」『長野新聞』（明治三十四年九月二十七日）二面。

¹⁴⁾ 前掲、中野目徹『政教社の研究』、第六章参照。

¹⁵⁾ 『長野県史』通史編七近代一、近代史料編一〇（二）学芸・スポーツ（一九八八、一九九〇年、長野県史刊行会）、『百年の歩み―信濃毎日新聞』（一九七三年、信濃毎日新聞株式会社）、『八十二銀行史』（一九六八年、株式会社八十二銀行）参照。

¹⁶⁾ 華山生「機関廃業の注文」『長野新聞』（明治三十五年七月一日）二面。「機関新聞の不可能」『長野新聞』（明治三十五年十二月六日）二面。地方政治と政党機関紙の關係については、有泉貞夫『明治政治史の基礎過程』（一九八〇年、吉川弘文館）を参照した。

¹⁷⁾ 有山輝雄『近代日本ジャーナリズムの構造―大阪朝日新聞白虹事件前後―』（一九九五年、東京出版）第一部、山本武利『近代日本の新聞読者層』（一九八一年、法政大学出版局）第二・三部参照。

¹⁸⁾ 茅原の長野行は、同県知事押川則吉との山形時代以来の知己に由来するが、野党政友会系紙に彼を招聘した押川は桂内閣から睨まれ、翌年二月、非職処分となる。

¹⁹⁾ 「長野県の青年」『長野新聞』（明治三十四年十月二十五日）二面。

²⁰⁾ 当時の青年層については、岡義武「日露戦争後における新しい世代の成長」『思想』五一・五一三（一九六七年二・三月、岩波書店）一〇一三・八九〇一〇四頁、岡和田常忠「青年論と世代論―明治期におけるその政治的特質―」『思想』五一四（一九六七年四月、岩波書店）三七〇五七頁、K・B・パイル『新世代の国家像―明治における欧化と国粹―』（一九八六年、社会思想社）第九章、坂本多加雄『近代日本精神史論』（一九九六年、講談社）第三章、木村直恵『〈青年〉の誕生』（一九九八年、新曜社）などを参照した。

²¹⁾ 明治三十五年七月二十七日の千号記念号には、長野県師範学校・上伊那甲種農業学校・小県甲種蚕業学校・上田中学校・上田高等女学校などの教育の様子が伝えられている。

²²⁾ 田中救時「再答華山君」『長野新聞』（明治三十六年一月七日）一面。

²³⁾ 華山生「長野県民と平和の戦士」『長野新聞』（明治三十四年十月五日）二面。

²⁴⁾ 『長野県政史』一卷（一九七一年、長野県）参照。

²⁵⁾ 当時の学生・青年層における学校教育と就職難に関しては、E・H・キンモンス『立身出世の社会史―サムライからサラリーマンへ―』（一九九五年、玉川大学出版部）第六章、竹内洋『立身出世主義』（一九九七年、日本放送出版協会）第六章を参照した。

²⁶⁾ 文部省実業学務局編『実業教育五十年史』（一九三四年、実業教育五十年記念会）参照。

²⁷⁾ 前掲、華山生「長野県民と平和の戦士」二面。

²⁸⁾ 『長野県政史』別巻（一九七二年、長野県）、『長野県歴史大年表』（下）近代・現代編（一九八七年、郷土出版社）参照。

²⁹⁾ 「菊池文相と中学教育」『長野新聞』（明治三十四年十月二十日）二面。

³⁰⁾ 前掲、茅原華山（於東京）「教育の大本」二面。

³¹⁾ 幸徳秋水著、山泉進校注『帝国主義』（二〇〇四年、岩波書店）一一四頁。これに対し茅

原は、明治三十四年四月三十日の『日刊人民』で書評を試み、「帝国主義」を進化の一段階として「世界主義」との関わりで捉え、各国民の特性を發揮しうる人類一致の理想を実現する方法として模索することを要請している。

³²⁾ 浮田の「帝国主義」については、神谷昌史「一九〇一年の「新日本」―浮田和民における「倫理的帝国主義」の成立―」（『大東法政論集』七（一九九九年三月）七三―九一頁、栄沢幸二『大正デモクラシー期の政治思想』（一九八一年、研文出版）第二章を参照した。

³³⁾ 茅原は、論説「憲政党の位置」（『日刊人民』（明治三十二年七月十三日）一面で「外に對しては、帝国主義、内に向ては、国家社会主義と自由主義、是れ世界の最も進歩せる思想にして、亦宇内自然の大勢、茲に到りたるものと謂はざるべからず」と、浮田の「倫理的帝国主義」と極めて近似した内容を述べている。

³⁴⁾ 山崎正董編『横井小楠』下巻遺稿篇（一九三八年、明治書院）参照。

³⁵⁾ 後に、茅原は『文明推移史論』（明治三十八年六月、東亜堂書房）を著わし、生糸を日本の生産の礎にすえた独自の生産論を展開していく。

³⁶⁾ 安部磯雄『社会問題解釈法』（明治三十四年、東京専門学校出版部）第二章。安部の社会主義解釈については、山泉進編著『社会主義事始』（一九九〇年、社会評論社）、荻野富士夫『初期社会主義思想論』（一九九三年、不二出版）を参照した。

³⁷⁾ 茅原廉太郎演説「社会主義の新福音（一）」『長野新聞』（明治三十六年二月一日）一面。
³⁸⁾ 『内観』一三二（昭和六年三月一日）八頁の「西多摩に遊ぶ」には、幸徳秋水との交流が回想されており、茅原の社会主義に対する姿勢が窺えておもしろい。

幸徳秋水とは頗る懇意であった。それはお互に漢詩を作るためであった。社会主義ではあったが、その詩には大分帝国主義的のものがあつた。幾度も余の下宿に遊びに来たこともあつた。何うしても説が合はない。華山君は現実にはばかり囚はれて困るといふから、秋水君はユートピアに囚はれて困ると酬ひたことなどがあつた。

³⁹⁾ 茅原は『向上の一路―社会主義の新福音―』（明治三十七年十二月、日高有隣堂）を著わし、自己の「社会主義」解釈を表明した。

⁴⁰⁾ 「青年と人生問題（上）」『長野新聞』（明治三十六年六月九日）二面。

⁴¹⁾ 前掲、茅原廉太郎演説「社会主義の新福音（一）」一面。

⁴²⁾ 茅原には、「個人主義」と「社会主義」のように、二項対立の図式を立て、両者の弊害をその調和において克服しようとする思考様式が見られる。こうしたあり方は、従来、「中道」「折衷」として評価されなかったが、青年読者層との関わりで捉え直すとき、自己の内にある複数の価値に對峙し続ける姿勢として評価することができよう。

⁴³⁾ 華山「益進主義と先達」『萬朝報』（明治四十四年九月二十七日）一面。

⁴⁴⁾ 益進会同人の鈴木正吾は、内政史研究会『内政史研究資料』第一九一・一九二集鈴木正吾氏談話速記録（一九七五年、内政史研究会）一八頁において地方読者が特に長野県に多かったと回想している。

⁴⁵⁾ 茅原が長野を去った理由には、主筆としての契約年限とともに、同年六月に起きた山路愛山との確執があつた。これ以降、渡辺国武の『電報新聞』、黒岩涙香の『萬朝報』へ移籍し、西園寺との親交を深めるなど政友会に近い所に位置していた彼が、そこから距離を置き、自らの言論を忌憚なく発することのできる場を求めていったことが推察される。

⁴⁶⁾ 日露戦争前後の時代状況に関しては、主に、前掲、宮地正人『日露戦後政治史の研究』、

井口和起『日露戦争の時代』（一九九八年、吉川弘文館）、および前掲、有馬学『（日本の近代4）「国際化」の中の帝国日本』などを参照した。

⁴⁷⁾ 与謝野晶子「茅原先生の新著のはしに」（茅原廉太郎『華山文章』、明治四十五年七月、友朋館）。「連作」とは、『アララギ』を中心に、表現の自由度が高い散文詩の流行に対抗するために用いられた短歌の一手法である。茅原と晶子の接点については、当時、彼女が黒岩涙香との親交から『萬朝報』歌壇の選者であったことが関係していると考えられる。晶子に関しては、香内信子『与謝野晶子と周辺の人びと―ジャーナリズムとのかかわりを中心に―』（一九九八年、創樹社）を参照した。

⁴⁸⁾ 茅原の外遊期に関する先行研究としては、前掲、山岡桂二「茅原華山の第三帝国論について」、「同（続論）」のほか、入江昭「茅原華山と日本のコスモポリタニズム」（A・クレイグ、D・シャイバリー編『日本の歴史と個性』、一九七四年、ミネルヴァ書房）一五三―一七九頁、石川禎浩「東西文明論と日中の論壇」（古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』、一九九四年、京都大学人文科学研究所）などを挙げるができる。

⁴⁹⁾ 帝国ホテル編『帝国ホテル百年史』（一九九〇年、株式会社帝国ホテル）第一章参照。

⁵⁰⁾ 柏軒松井広吉『四十五年記者生活』（昭和四年九月、博文館）二三七頁。茅原の外遊に際して支援した人物として、松井は「氏の外遊は、主として某出身校の関係から、奥田義人男等が世話された」と記している。「某出身校」とは東京法学院（現在の中央大学）を指す。開学に尽力した奥田に対し、校友に推薦された茅原が支援を要請したと考えられる。

日比谷焼打事件に関しては、松本武裕『所謂日比谷焼打事件の研究』（一九七四年、東洋文化社）および、前掲、有山輝雄『近代日本ジャーナリズムの構造』を参照した。

⁵¹⁾ 幸徳秋水「渡米日記」（明治三十八年）十一月廿三日条（塩田庄兵衛編『増補幸徳秋水の日記と書簡』、一九六五年六月、未来社）一三二頁。

⁵²⁾ 華山生「加奈陀Ⅱ新米国（上）」『萬朝報』（明治四十年十二月三日）一面。

⁵³⁾ 前掲、山本武利『近代日本の新聞読者層』、および山本武利『萬朝報』の発展と衰退』（『萬朝報』解題・解説、一九八四年、日本図書センター）参照。

⁵⁴⁾ 手塚晃、国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』三卷（一九九二年、柏書房）参照。

⁵⁵⁾ 華山生（龍動に於て）「欧米外交の新中心（五）」『萬朝報』（明治四十一年一月二十七日）一面。

⁵⁶⁾ 黄禍論の隆盛および日本人移民排斥問題については、主に橋川文三『黄禍物語』（一九七六年、筑摩書房）、松村正義『日露戦争と金子堅太郎―広報外交の研究―』（一九八〇年、新有堂）第三部、賀川真理『サンフランシスコにおける日本人学童隔離問題』（一九九九年、論創社）、澤田次郎『近代日本人のアメリカ観―日露戦争以後を中心に―』（一九九九年、慶應義塾大学出版会）前編第一・二章などを参照した。

⁵⁷⁾ 華山「民族的大同盟（下）」『萬朝報』（明治四十一年三月十二日）一面。

⁵⁸⁾ 華山生「欧米と社会主義（五）」『萬朝報』（明治四十一年一月六日）一面。

⁵⁹⁾ 前掲、茅原廉太郎『向上の一路（社会主義の新福音）』一一六頁。

⁶⁰⁾ 華山生（蘇国）「英の出納尚書と独逸の社会政策（下）」『萬朝報』（明治四十一年十月十四日）一面。

⁶¹⁾ 華山生（在仏国）「社会問題の解釈法（二）」『萬朝報』（明治四十二年一月二十六日）一面。

⁶²⁾ 華山生(在仏国)「社会問題の解釈法(十五)」『萬朝報』(明治四十二年二月八日)一面。
⁶³⁾ 華山(英京に於て)「東西文明の性質を論ず(上)」『萬朝報』(明治四十年八月二十七日)一面。

⁶⁴⁾ 茅原華山(ボストンにて)「新信仰の確立(中)」『日刊新世界』(明治三十九年八月十七日)一面。

⁶⁵⁾ 華山「四海先生主義(下)」『日刊新世界』(明治三十九年九月五日)一面。

⁶⁶⁾ 華山生(六月廿八日)「餓鬼同盟(下)」『萬朝報』(明治四十年八月一日)一面。

⁶⁷⁾ 茅原廉太郎(蘇国)「独逸と満州(下)」『萬朝報』(明治四十一年九月二十四日)一面。

⁶⁸⁾ 前掲、華山(英京に於て)「東西文明の性質を論ず(上)」一面。

⁶⁹⁾ 華山生(英国)「西洋の教育と東洋の道德(第三)」『萬朝報』(明治四十一年八月八日)一面。前掲、石川禎浩「東西文明論と日中の論壇」は、茅原の「静」と「動」による独特の東西文明論が、同時代の中国論壇において、とりわけ李大釗や杜亜泉をはじめ当時の知識青年層に大きな影響を及ぼしていた事実を指摘している。

⁷⁰⁾ 大隈重信『東西文明之調和』(大正十一年十二月、早稲田大学出版部)。大隈の文明論については、柳田泉『明治文明史における大隈重信』(一九六二年、早稲田大学出版部)、神谷昌史「東西文明調和論」の三つの型―大隈重信・徳富蘇峰・浮田和民―『大東法政論集』九(二〇〇一年三月、大東文化大学大学院法学研究科)一五九―一八〇頁を参照した。

⁷¹⁾ 華山生(英国)「対西洋人の態度(二)」『萬朝報』(明治四十一年五月二十三日)一面。

⁷²⁾ 福沢諭吉『文明論之概略』(松沢弘陽校注、一九九五年、岩波文庫版)三三頁。

⁷³⁾ なかでも茅原が注目したのは家族制度であった。彼は西欧の墓地を視察するなかで、「欧米には祖先崇拜の習俗なきのみならず、家族制度なるものも、少なくとも今日に於ては、全然迹を断ちたるを知るべし」と、西洋「文明」における極端な個人主義を批判している(華山生「祖先崇拜と家族制度(上)」『萬朝報』(明治四十年十一月十五日)一面)。

⁷⁴⁾ 華山生(七月廿日蘇国リスに於て)「氷島探險前記(上)」『萬朝報』(明治四十一年八月二十五日)一面。茅原のアイスランド視察に関しては、大宅壮一『小国の裏街道を行く』(一九六二年、文芸春秋社)二〇三頁に次のような記述がある。

初めてアイスランドを訪れた日本人は、わたくしの知る限りでは、茅原華山である。一九〇八年(明治四十一年)の夏、『万朝報』の特派員として欧州各国を歴遊した上、ここへきたのだが、当時アイスランドには巡查が三人しかいなくて、レイキヤビクの市会議員に婦人が四人もいるときいて驚いている。日露戦争のあとをうけて、東郷、乃木、伊藤、山県、大隈などの名が、アイスランド人にも知られていたという。

⁷⁵⁾ 華山生(氷島に於て)「氷島探險記(六)」『萬朝報』(明治四十一年九月三日)一面。

⁷⁶⁾ 中村春雨(吉蔵)「倫敦日記」『欧米印象記』、明治四十三年六月、春秋社書店)二四二頁。同時期に英国に滞在し、茅原と交流のあった人物としては、後に政党政治家として活躍する植原悦二郎や海軍少佐の松岡静雄などが挙げられる。

⁷⁷⁾ 茅原華山(ボストンにて)「新信仰の確立(上)」日本と米国『日刊新世界』(明治三十九年八月十六日)一面。ちなみに『日刊新世界』は、同年五月に発生したサンフランシスコ地震のため、以後四ヶ月間、オークランドに事務所を移転し発行されていた。

⁷⁸⁾ 華山生(英国に於て)「商業国民としての日本の位置」『萬朝報』(明治四十年十月十三日)一面。

⁷⁹⁾ 前掲、華山「四海先生主義(下)」『日刊新世界』一面。

⁸⁰⁾ 華山生(アルジェリヤにて)「回教徒の過去将来(四)」『萬朝報』(明治四十二年一月一日)一面、および「同(六)」『萬朝報』(明治四十二年一月十二日)一面。

⁸¹⁾ 華山生(英国)「西洋の教育と東洋の道德(第七)」『萬朝報』(明治四十一年八月十二日)一面。

⁸²⁾ 華山生(倫敦)「如何にして泰西を学ぶべき乎(下)」『萬朝報』(明治四十三年六月四日)一面。

⁸³⁾ 前掲、華山(英京に於て)「東西文明の性質を論ず(上)」一面。

⁸⁴⁾ 華山「革風易俗の業」『萬朝報』(明治四十四年五月十七日)一面。

⁸⁵⁾ 前掲、華山「益進主義と先達」一面。

⁸⁶⁾ 卷頭論説「靈か肉か」『第三帝国』二(大正二年十一月十日)一頁。

⁸⁷⁾ 稲毛祖風「大正三年の思想界を論ず」『生の創造と道德』、大正四年二月、大同館書店)四七七〜四七九頁。祖風稲毛金七は、山形県出身の評論家で、早稲田大学哲学科を卒業後、雑誌『創造』を主宰するかたわら、『オイケンの哲学』(大正二年十月、大同館)や『生の創造と教育』(大正三年七月、内外教育評論社)を著し、創造主義の哲学や教育を論じた。

⁸⁸⁾ 「富国、強兵、大義」『長野新聞』(明治三十四年十月二十七日)二面(茅原廉太郎『二水余声』、明治三十五年五月、長野新聞株式会社)一一〜一四頁。

⁸⁹⁾ 茅原華山「大慾主義」『動中静観』、明治三十七九月、東亜堂書店)七四頁。

⁹⁰⁾ 茅原華山「是我宗教」(同右、『動中静観』一四頁。前掲、茅原華山『向上の一路―社会主義の新福音―』一一九頁。

⁹¹⁾ 華山生「東北人士に与ふ」『萬朝報』(明治四十四年八月十二日)一面。

⁹²⁾ 華山「田園將に荒れんとす」『萬朝報』(明治四十四年九月二十三日)一面。

⁹³⁾ 当該期における煩悶青年の様態については、平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌―「西洋」を読み替えて』(二〇一二年、新曜社)を参照した。

⁹⁴⁾ 『哲学大辞書』(明治四十五年六月、同文館)の「メリオリズム(改善説)」の項目には「人力に由りて世界の改良を企図し得べきを信ずる説にして、概ね更に、進化改良は事実にして進化の法則なりといふ信仰を含むものなり。改善説は、厭世楽天の問題に關し其の両極の中間を採る説にして、即ち人生世界は最悪(Pessimus)なりといふと、最善(Optimus)なりといふとの中道を取り、世はより善く(Melior)成り行くものなることを主張する説なり」と記されている。

⁹⁵⁾ ジェイムズと西田の影響関係については、三橋浩「西田幾多郎とジェイムズ―「純粹經驗」説をめぐって―」『大阪産業大学論集』人文科学編五〇(一九八〇年四月)一〜一〇頁、嘉指信雄「ジェイムズから漱石と西田へ―「縁暈」の現象学、二つのメタモルフォーゼ」『哲学』四八(一九九七年四月)八二〜九六頁を参照した。

⁹⁶⁾ ジェイムズの哲学思想については、三橋浩『ジェイムズ経験論の諸問題』(一九七三年、法律文化社)、砂原陽一「現象学からの解放―ウィリアム・ジェイムズの哲学」『金沢大学教養部論集』人文科学編二六―二(一九八九年三月)一一二〜一二八頁を参照した。

⁹⁷⁾ 前掲、華山「益進主義と先達」一面。

⁹⁸⁾ 茅原華山「日本人と益進主義」(市原自適『益進主義』序、明治四十四年九月、南北社)。
市原自適『益進主義』は「メリオリズム」の努力主義的な要素に注目し、「真面目」「精

- 力「勇氣」などの解説により青年層に「立身策」を説いた著書である。
- 99) ジェイムズ著、梶田啓三郎、加藤茂訳『根本的経験論』（一九九八年、白水社）参照。
- 100) 華山「床次次官に与ふ」『萬朝報』（明治四十五年二月二十一日）一面。
- 101) 華山「誰が罪」『萬朝報』（明治四十五年一月二十六日）一面。
- 102) 華山「新華想的精神」『萬朝報』（明治四十五年一月二十七日）一面。
- 103) 華山「世界苦」『萬朝報』（大正元年十一月二日）一面。
- 104) 華山「新唯心論（下）」『萬朝報』（大正元年十一月三十日）一面。
- 105) 茅原華山「思想界の中心問題」『新動中静観』、大正二年五月、東亜堂書房）二四頁。
- 106) オイケンとベルグソンの哲学思想に関しては、ジル・ドゥルーズ著、宇波彰訳『ベルグソンの哲学』（一九七四年、法政大学出版局）、桧垣立哉『ベルクソンの哲学―生成する実在の肯定―』（二〇〇〇年、勁草書房）を参照した。また近代日本への影響については、渡辺善雄「森鷗外「吃逆」の意図と背景―オイケンの宗教論と三教合同―」『日本近代文学』四六（一九九二年五月）、森淑美「心の革命」と《社会の革命》―夏目漱石と大杉栄のベルグソン―『文学』（二〇〇〇年三、四月号）を参照した。
- 107) 茅原華山「新時代といへる意義を明かにす」（前掲、『新動中静観』二九頁。
- 108) 同右、茅原「新時代といへる意義を明かにす」三四頁。
- 109) 茅原華山「現在我と伝説我との葛藤」（前掲、『新動中静観』三八〇頁。
- 110) 茅原華山『動的青年訓』（大正三年三月、東亜堂書店）一一三―一一四頁。
- 111) 茅原華山『人間生活史』（大正三年十月、弘学館書店）二頁。
- 112) 華山「新唯心論（上）」『萬朝報』（大正元年十一月二十八日）一面。
- 113) 前掲、茅原華山『動的青年訓』、六三頁。
- 114) 華山「どっちが贅沢だ（上）」『萬朝報』（明治四十五年三月十一日）一面。
- 115) 華山「民本主義の解釈」『萬朝報』（明治四十五年五月二十七日）一面。
- 116) 華山「生命のある憲法」『萬朝報』（大正二年一月九日）一面。
- 117) 華山「独立生活と憲政」『萬朝報』（大正二年三月一日）一面。
- 118) 華山「農奴、工奴、商奴」『萬朝報』（大正元年八月三日）一面。
- 119) 前掲、華山「独立生活と憲政」一面。
- 120) 茅原華山「国家無能」『第三帝国』一（大正二年十月十日）三頁。
- 121) 茅原華山「国家の打破と創造（新憲政擁護運動）」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）三頁。
- 122) 華山「生活即政治」『萬朝報』（大正二年十月九日）一面。
- 123) 茅原華山「大なる終りと大なる始め」『第三帝国』四（大正三年一月十日）三頁。
- 124) 華山「選挙」『萬朝報』（大正二年一月十一日）一面。
- 125) 前掲、茅原華山「国家の打破と創造」三頁。
- 126) 同右、茅原華山「国家の打破と創造」四頁。
- 127) 茅原華山「我等の進歩」『第三帝国』八（大正三年四月一日）一頁。
- 128) 益進会「益進会支部の設置に就て」『第三帝国』一二（大正三年六月一日）二二頁。
- 129) 茅原華山「新聞進化史論」（前掲、『新動中静観』五六―七三頁。
- 130) 前掲、茅原華山「大なる終りと大なる始め」四頁。

第二章 「第三帝国」の創設

第一節 益進会同人の結集―日露戦後の地方青年―

明治三十七年（一九〇四）九月末日、雑誌『太陽』の写真班として日露戦争に従軍した花袋田山録弥は、帰国後すぐに埼玉県羽生町の建福寺に親友の太田玉茗を訪ねた。その際、「小林秀三君之墓」と彫られた真新しい墓標を目にし、寺に間借りしていた青年が遼陽陥落で国中が湧きかえるなか、肺を患い二十歳の若さで逝去したことを知る。「事業といふ事業もせずに、戦場へ兵士となつてさへ行かれず¹⁾」、小学校代用教員として田舎に埋もれ、志半ばで一生を終えた無念の死であった。花袋は、玉茗の手許に残された小林青年の日記を読み返し²⁾、彼の故郷や勤務先を訪れ親や友人に話を聞きながら、作品の構想を練った。だが、中学校に通ったことも教壇に立った経験もない花袋には、小林青年の、延いてはこの時代の青年の心情を描くに足るだけの確信が得られず、歳月だけが過ぎていった。その後、花袋は、明治四十年に発表した『蒲団』で世間の注目を集め、翌年に長篇小説『生』を書き上げ、自然主義作家としての地位を確立したが、当該期の青年群像を作品として残さなければならぬという使命感が頭から離れることはなかった。同四十二年六月初め、ついに執筆を決意し、再び青年の親友たちを訪ね、史料収集に奔走した。構想を練り直し、五年越しの想いを一気呵成に書き上げ、小説『田舎教師』を発表したのである³⁾。

花袋の新作への反響は小さくなかったが、批評の多くは自然主義作家としての技量、特に「平面描写」の手法が貫徹されているか否かを問うものであった。だが、『田舎教師』の真髓は、花袋自身が「兎に角、一青年の志を描き出したことは、私に取つて愉快であつた。『生』で描いた母親の肖像よりも、即きすぎてゐない故か、一層愉快であつた。私は人間の魂を取扱つたやうな気がした。一青年の魂を墓の下から呼び起して来たやうな気がした⁴⁾」と回想している通り、実在の人物をモデルに当時の青年の生き様を捉え、そこに「魂」を吹き込んだ所にこそ見出される。日露戦後の青年群像を描き出すことは、花袋にとって、作家としての評判以上に重要な事柄であり、今を逃しては描き得ない対象だったのである。

『第三帝国』は、まさに花袋が描き出した「時代の青年」によつて創刊された雑誌と言つていい。益進会同人は、主盟の茅原華山（明治三年生まれ）を除いて、石田友治（明治十四年生まれ）、野村善兵衛（明治十七年生まれ）、松本悟朗（明治十九年生まれ）、鈴木正吾（明治二十三年生まれ）と、いずれも小林青年とほぼ同世代に当る。日露戦争を前後して青年期を迎えた彼らは、地方に埋もれて生きることを拒み、中央さらには世界へと活躍の場を求めた者たちであつた。本章の目的は、茅原の唱えた「益進主義」に導かれ集結した地方青年たちが、どのような時代状況のなかで益進会を結成し、新雑誌を創刊するに至るのか、さらに青年読者をいかに運動へと結集していくのか、いわば雑誌『第三帝国』の誕生の軌跡を描き出すことに置かれている。まずは石田の「上京」を見ていこう。

一 石田友治の「上京」

明治三十七年（一九〇四）十月、石田友治は故郷の土崎港を後にし、東京へ向かう汽車に乗り込んだ。前月四日に日本軍がロシア軍との激闘を制して遼陽会戦を占領し、二万人以上の死傷者を出したにもかかわらず、国内各地で戦勝を祝う提灯行列が出た。「お祭り騒ぎ」のただなかで、聖学院神学校に入学し「神の僕」となるための「上京」であつた。

石田友治は、明治十四年五月二十日、秋田市土崎本山町で芳之助・久の三男として生ま

れた⁵⁾。生家は平鹿郡増田町の旧士族で、酒造業で産を築き「大石田」と呼ばれた豪家の分家であった。三男の友治は叔父吉治の養子となり養母の玉に育てられた。幼い頃から胃弱で悩み、土崎高等小学校を卒業し秋田中学へ入学したが、日々の通学が負担となつて重い脚氣を患い、中退を余儀なくされた。だが、闘病中もカーライルの「英雄論」を読破し、早稲田講義録で自学に励むなど向学の志を捨てなかった。同三十二年、病氣を克服した友治は壮丁検査で第一乙種合格となり、弘前野砲兵八連隊に入営し、縫工兵として約三年間を過ごした。豊かな教養を持ち合わせた青年兵は、師団長の娘と恋に落ち「肉の罪」を犯す。懺悔の思いに悩んだ彼は、キリスト教会に通い、同三十六年二月十四日、秋田市本町四丁目のデイサイプルス派に属す秋田基督教会で高木熊次郎牧師より洗礼を受けた。

「デイサイプルス派」(原名: Christian Church (Disciples of Christ))は、十九世紀初め、独立戦争後に移民が西部へ大規模な移動を行った時期のアメリカで始まった教会改革運動に端を発するプロテスタントの一派であった⁶⁾。「教会は教派的に分立することなく、一つにならなければならぬ」という根本理念のもと、「初代教会の単純さと清さに復帰する」ことを目指していた。「個人の意見の自由」を重んじ、キリスト以外に信条を持たず、「牧師も平信徒もキリストのデイサイプルス(＝司祭)であり、牧師でなければ教会の儀式は司れないとは考えない」という「万人祭司」を信じ、諸派のなかでも進歩的かつ自由な雰囲気を持っていた。明治十六年、他派より遅れて日本伝道を始めたため、プロテスタント未開の秋田県に入った。開拓当時、明治政府の「欧化主義」政策によりキリスト教会は総じて教線を伸ばしたが、大日本帝国憲法の発布に伴い明治国家体制が確立されると逆風が吹き始め、教育と宗教の衝突、新神学問題などが相次いだ。

だが、日露戦争を機に状況は一変する。日英同盟の締結を背景に、英・米両国が日本の外債発行に多額の援助を寄せたことに加え、戦争中に明治天皇がキリスト教青年会の大幕事業に一万円を下賜したことで、キリスト教への偏見は取り除かれた。逆風が止むなか、明治三十六年二月九日、宣教師の Harvey・Hugo・ガイ博士⁷⁾の尽力により本郷教会堂を仮校舎として聖学院神学校が設立された。「聖学院」は「聖なる学院ではなく聖学の院」の意で、「聖人の教えを学ぶばかりでなく学んで聖人となる⁸⁾。」という志を示していた。

明治三十七年九月、東京府北豊島郡滝野川村に本校舎の一部が出来、十月六日に開校式が挙行された。友治が二期生として入学したのは、落成間もない真新しい本校舎で、いわば聖学院神学校の教育が本格的に開始された初年度に当たる。「神学校入学の心得」によると、入学資格は「公私の中学校もしくは之と同等以上と認むる諸学校卒業の程度に準じて試験を施し入学を許す」とあり、修学年限は三年、学年は「毎年一〇月上旬をもって始まり翌年六月下旬をもって之を終」わり、三学期制を採用した。「給費規則」「書籍貸与規則」には、「本科」の生徒には所属教会の教会員を通じてアメリカの伝道会社から学費支援を受けることができ、教科書を貸与することも定められていた。

三学年の教育課程は【表3】の通りであった。週当りの授業数は一五時間。ギリシャ語・教会史を軸に、第一学年で旧・新約の世界を概観し、キリスト伝やパウロ伝などを通じて伝道者の姿勢を学ぶ。第二・三学年では、新・旧約聖書の解釈を学ぶ一方で、弁証学・心理学、比較宗教学・社会学など隣接する学問分野にも見識を深めていく。特にギリシャ語教育に力を入れていたのは、聖書を原典で読み、「初代教会」に範を見出し、分裂した教派を統一するためであった。第一学年に「パウロ伝」「教会史使徒行伝」「吾教会之主

張」「希伯来語随意科」を置いている所以である。

初年度の入学生は八名で、四名が自費学生、知識・経験・信仰の差が激しく、年齢の幅も広がった⁹⁾。授業は、ガイ校長兼教授が「教会史」「予言史」を担当したほか、学習院を辞し同校教授となった石川角次郎が「キリスト伝」「英語訳読」を、早稲田出身で詩人・作家として知られていた湖処子宮崎八百吉が「ギリシャ語」「パウロ伝」を教えた¹⁰⁾。少数ながらも精鋭の教授陣に友治は二期生唯一の本科生として神学・宗教学の手解きを受ける幸運を得た。「肉の罪」の懺悔から信仰の道に進んだ彼にとって、かつてキリスト教徒を弾圧しながら奇跡の「回心」により初代教会で世界伝道の礎を築いたパウロの存在は大きかった。「パウロ伝」を教わった宮崎とはその後も連絡を取り合い、『第三帝国』に寄稿を依頼している。

【表3】聖学院神学校の教育課程(時／1週)

第1学年		第2学年		第3学年	
科目名	時	科目名	時	科目名	時
希臘語	5	希臘語	5	希臘語	5
旧約総論	1	旧約史	2	予言史	1
新約総論	1	新約釈義	2	旧約釈義	2
新約釈義	2	基督伝	2	教会史	2
基督伝	2	教会史	2	比較宗教学	1
保羅伝	2	弁証学	1	哲学史	2
教会史(使徒行伝)	1	心理学	1	社会学	2
論理学	1				
吾教会之主張					
音楽		音楽		音楽	
希伯来語随意科		希伯来語随意科		希伯来語随意科	
英語					
計	15	計	15	計	15
+	4	+	2	+	2

教科教育に加え、日曜毎の滝野川教会での奉仕活動と夏期休暇中の東北伝道が課されていた。友治より二期後輩の白井為治郎は「入学した時の神学生は一八名。聖学院神学生はガリラヤ党と称えられ、蛮勇を奮ったものである。大学の赤門や上野公園、飛鳥山などで金だらいをたたいて人を集め、路傍伝道を盛んにやった。神学校卒業の若い伝道者は困難の多い東北伝道に従事した¹¹⁾」と回想している。友治も無牧の横手講義所で夏期伝道に従事するとともに、機関誌『聖書之道』に神学生を代表して教勢報告を寄せている¹²⁾。

聖学院神学校で勉学と伝道に打ち込んだ友治は、明治四十年六月に卒業し、夏期伝道に赴いた秋田県横手町番匠町（現在の羽黒町）に教会を開き、初代牧師に就任した。当時の「基督教会教勢一覧」によると、横手教会は会員六名・入会者一名・日曜集会出席者八名で、秋田基督教教会員九〇名に比べ、小さい群れであった。友治は、義母と教会に住み込んで伝道に励み、地元の青年に聖書や讃美歌を用いて英語を教えた。当時、横手中学の学生だった石川美津雄は「番匠町教会にアメリカ人が来るそうだから」と、友達を誘って教会に行った所、門前に高張りちようちんと「入場無料」の看板が立っており、中には眉目秀麗な若き日本人牧師がいた。友治に賛美歌を教わったことがきっかけで石川は教会に通い始め、後に自らも牧師の道を歩むこととなる¹³⁾。小さいながらも、新しい出席者を増やし始めていた矢先、同四十一年六月、友治は牧師を辞し、『秋田魁新報』に入社する。

なぜ友治はわずか一年で牧師を辞めたのだろうか。「予は曾て伝道の「真似」をしたことがあった、併し一年と経ぬに其自らを欺くに堪え得ず、辞表を出して自から退いた¹⁴⁾」。約二年半後、彼自身が秋田基督教教会の夕拝でその理由を語っている。「伝道」とは人を神の道に導き、イエスの教えに従う生活の実践を教えることにほかならない。だが、若き友治は自ら「真の基督教的生活」を実践し得ないままに、利己心を持ちつつ「基督教は犠牲

献身の教ぞ」と説き、功名心を秘めつつ「虚しきほまれを求むるなかれ」と戒め、「ひそかに性欲の囚となり汚穢の罪を犯し」ながら「女を見て色情を起すものは中心すでに姦淫せる也」と忠告し、虚偽に満ちた身でありながら「愛は偽ること勿れ」と教えていた。そのような「己を欺き人を欺く」生活に終止符を打つことこそ、友治が牧師を辞した理由であった。だが、この決断は伝道から永久に離れることを意味していたわけではない。教会から社会に踏み出し、生活の渦中で神に祈りを捧げ、苦難を通じてキリストの「生命」の光に触れ、「再び真個の意義ある伝道をなさんことを期す」ための一歩だったのである。

次に、明治四十二年二月二十三日の「入社之辞」を見ていこう¹⁵⁾。ここで友治は神学校と教会での日々を振り返り、「これからは責任なき理想や、空虚な理屈の衣を脱いで、真面目に厳粛に、現実の生活をせねばならぬ」と決意を表明している。そして、「予は先づ現代の色彩とも云ふべき生活難の渦中に苦しまねばならぬ、次に、目の前に横はって居る世間現実の真相をありゝゝと観たい」と、記者としての抱負を語っている。

では、友治の眼前に横たわっていた「世間現実の真相」とはいかなるものだったのか。それは「泰西物質的文明の急潮」により「世道人心の荒廃」が進み、社会が「金銭の奴隷」となっていく現状であった¹⁶⁾。「町人根性」が政治家・学者・軍人・教育家・宗教家をも支配し、品性・道義は「私欲」を遂行する手段、道德的行為は「私利」を営む方便と見なされている。そのため、「乱倫の輩も富みて美服を纏へば紳士と称せられ、貧にして清節を持するものは却って迂愚と辱しめらる軽薄なる一代の風潮」が横行していた。生きる指針が「善悪」から「貧富」へと移り、「士道の頹廢」が日々顕著となっていく。

こうした「真相」に対し、友治は有志者が提携して青年層を導くとともに、青年たちが自ら進んで団結し、「青年尚志会」を結成することを勧めた。彼らが「内、互に修養につとめ、相援け相励まし相慰め、外、一地方の光となり塩となりてその風教の為に尽瘁する」ことを求めた。「士の本分」を尽し「世道人心の荒廃」を防ぐとともに、「社会の進運」に資し「健全なる一郷一郡の發達」を促し、延いては「国家の大勢」を動かすことを切望したのである。前年に渙發された戊申詔書を引き合いに出し、「二十世紀の武士道」として「敬虔にして細心、労働を貴び、質素なる生活を喜び、人を恕し他の人格を尊重する英人の所謂真のゼントルマンシップ（紳士道）」を唱え、県下の青年たちと親交を深める契機を生み出した。と同時に、新思潮の登場に解決の糸口を見出そうとしていった。

自然主義とプラグマティズムとの関係については、これまで世間に兎角の議論もあったことだが、両者は昨年に於ける新思潮の代表者で、いづれもこれまでの因襲打破唯理反動の産物で、人生の赤裸々、実証実験を重んじ事実ありのまゝ、実感そのまゝを尊ぶと云ふ点に於ては同じである。ただ前者は文芸描写の一主義となり、後者は心理哲学研究方針の一原則となつたのに過ぎない¹⁷⁾。

友治は、自然主義とプラグマティズムを、ともに「実証的思潮の児」で、「抽象的な理想」を排し「具體的の人生」「内面的考察」を重んじ、「意志の自由を弁護し、道德の威厳」を保とうとしている点で「並行するもの」と解釈している。自然主義文学を「肉的本能主義の産物」と見なすのは「一時代以前の写実主義」に属する評価と斥け、自然主義の作品に「深い実験の内面描写」が実現されない理由を、世間に「生命の人」が少ないから

と、対象となる人間の側に求めたのである。

さらに、友治は「新時代の青年」がなすべき喫緊の課題を二つ挙げている¹⁸⁾。一つは「世界の大勢、人類の帰趣に対し」「如何の態度に出づべきか」という「文明批判の問題」。もう一つは「世界の大勢」に伴い、「我が日本の現状その政治その社会に対し、如何の態度」を取るべきかという「国家問題政治問題社会問題」であった。前述の「思潮瞥見」を前者への取り組みとするならば、後者への取り組みはどのようなものであったのだろうか。

明治四十四年九月二十五日、その課題は第十七回秋田県議会議員選挙という具体的な政治問題として顕れた。同選挙では、秋田市選出の一議席をめぐり立憲政友会推薦の永井喜久治と立憲国民党推薦の安藤和風が争った¹⁹⁾。安藤は、慶応二年（一八六六）に秋田市に生まれ、『秋田日日新聞』『秋田日報』の記者を経て、明治三十二年に秋田市議に補欠当選、翌年九月に『秋田魁新報』に入り、主筆を務めていた²⁰⁾。主筆の応援に際し、当初、友治は「党派の如何を問はず」「信ずるに足る人を選べ²¹⁾」と促していたが、熾烈な争いの末、政友会を「大政党であるが為に却って横暴を恣にして往々県民の疾苦を意とせない行動に出る²²⁾」と非難し、「県民の信頼するに足る『人格』を選ぶべき」と訴えた。結果は、投票数六八四の内、永井三四一、安藤三二五と一六票差の惜敗に終わった。これをうけ、友治は「今回の秋田市の選挙競争は安藤側に此非常な優越と、及び市民に此強き公義の力の無かった事は遺憾である、予は秋田市民の為に悲む²³⁾」と述べるほかなかった。

「時代は「空想」に愛想をつかして、併せて「理想」をも排斥した、吾人は今年の年頭に於て、新理想の樹立を叫ぶ²⁴⁾」。翌年初頭に友治が掲げた「新理想論」は、日露戦後の青年たちが創刊する雑誌『第三帝国』の思想的旗幟につながる重要な内容を兆していた。

現代は物質的文明が一世を風靡し、精神的文明が其圧倒する所となつてゐる、此趨勢は向後益す増長するであらう、茲に総ての災厄が萌すのである、戦争も擾乱も、諸種の社会的罪惡も、文明の弊も、皆この物質的文明の大勢が残して行く陰影である、物質的文明には当然伴ふべき現象である、此人類の災禍を除却し、平和にして光輝ある真文明を進展させやうとすれば、吾人は其本に帰つて、先づ物質的文明の以上に、精神的文明を高調し、個人の肉体の害力を精神の智慧と力を以て完全に制禦し支配するやうに、精神的文明を以て物質的文明を卒えしむるに至らなければならぬ、之が即ち社会的理想実現の待望である²⁵⁾。

「総ての災厄」は「物質的文明」の圧倒的優位に起因する。ゆえに、「平和にして光輝ある真文明」を築くためには、「精神的文明を以て物質的文明を卒えしむるに至ら」なければならぬ。ここで提唱されているのは、茅原の「益進主義」で示されていた「新唯心論」の境地に通じる「新理想主義」であった。

こうして友治は「新時代の青年」にとつて喫緊の課題に自らの言動をもって対峙し、解決方法を提示することで、各地の青年たちと信頼関係を築いていった。ここにおける記者と読者の紐帯は、雑誌『第三帝国』で地方青年読者を結集していく際に重要な役割を担うこととなる。同年九月十三日、明治天皇の崩御に伴い「大喪の儀」が東京青山葬場殿で挙行されると、友治は社を代表して東京へ赴き手記を寄せている²⁶⁾が、その裏で第十一回総選挙の際に知遇を得た茅原華山のもとを訪ねていたのである。

二 「哲学」 青年の再会―松本悟朗と野村善兵衛―

雑誌『第三帝国』の創刊に際し、野村善兵衛は、「主盟」茅原華山・「編輯主任」石田友治とともに「印刷人」として名を連ねている。遡ること五年前、彼が福島県伊達郡を同郷とする松本悟朗と東京で再会したことは、同誌の誕生を考える上で重要な意味を持つ。桑折町高等学校の同窓生でありながら、「常に級の首席」にいた善兵衛と「悪戯と喧嘩」に明け暮れた悟朗は、在学中ほとんど親交がなかった²⁷⁾。卒業後、優等生だった善兵衛は家庭の事情が許さず家業を継ぎ、ガキ大将だった悟朗は「順風に帆を上げて」福島中学へ進んだ。別々の道を歩んだ二人は同窓会の席で、哲学に対する興味から「新たな共鳴」を呼び、「爾来境を隔てつゝも、互ひに相思ふ身」となっていた。彼らが揃って哲学に惹かれた背景には、明治三十六年（一九〇三）に起きた藤村操の自殺があったと考えられる。一高生が華嚴の滝に身を投げた事件の衝撃は、同世代の知識青年たちを従来の国家偏重の価値観から解放し、いかに人生を生きるべきかを問う哲学へ向かわせた。二人が再会した場所は、「私立哲学館大学」改め「私立東洋大学」第一科（哲学）の講義室であった。

同大学は、明治二十年に井上円了が哲学を教授する専門学校として創立した「私立哲学館」を基礎としている²⁸⁾。創立の背景には、国家体制の整備を急ぐ明治政府が人間形成よりも官僚養成を主眼とした「帝国大学令」を公布したことがあった。円了は「哲学」を「思想道理を錬磨する術」として必要な学問と捉え、極端な「欧化主義」に直走る日本の現状を問い直そうとした。社会全般、特に経済的事情で向学の道を閉ざされている者たちに「考え方の基礎」を身につけさせ、精神的に自立する道を開いたのである。

明治時代に創設された私立大学の多くは、近代化に必要な法律・経済・政治など「実学」を教授する専門学校として発展し、国家の支援を受けない代わりに、開学の精神に基づいて特色ある教育を施した。そのなかにあつて、哲学館は哲学教育を中心に据え、「三田の理財、早稲田の政治、駿河台の法学、白山の哲学」と並び称される存在となった²⁹⁾。

だが、明治三十五年十月、円了が二度目の外遊で不在の間、いわゆる「哲学館事件」が起き、中等学校教員資格無試験認定の認可が取り消される³⁰⁾。帰国した円了は「痛手」を克服し前進すべきことを説き、哲学館大学の開設に着手するとともに、修身教会を設立し全国を巡講した。こうして「私立哲学館」は、同三十六年十月に「私立哲学館大学」として認可され、同三十九年六月には「私立東洋大学」と改称した。「事件」の影響による学生の減少に歯止めをかける方策として、教員免許無試験検定の再認可を求める申請書を提出し、中等学校教育者の育成という時代的要請に応える体制を整えることで生き残りをかけていた。善兵衛と悟朗が在学した時の東洋大学は「転換」の渦中にあつたと言える。

松本悟朗は、明治十九年八月十八日、福島県の元板倉藩士米山家に生まれた。典型的な貧乏士族の家に生まれ、桑折町にある曹洞宗慈雲寺住職の松本達宗の養子に入った³¹⁾。当時、学才に恵まれた子弟が村の知識階層である寺の住職の養子となるのは珍しいことではなかったが、悟朗の場合、「腕白な」小学校時代から福島中学に進み勉学に目覚め、「早くより哲学などに興味を持つに至った」ようである。卒業後、上京して「実生活の奮闘を続けつつ」、東洋大学専門学部第一科（哲学）二種（別科）に学んだ。この進学には、いずれ寺を継ぐための「修業」の意味もあつたと考えられる。というのも、「哲学館」時代（明治二十三〜三十九年）の卒業生四五八名の内、同窓名簿等で確認できる二八三名の就業先のおお半が教育者・宗教者であつた。しかも「宗教者」の内、寺の住職が一二五名、曹

洞宗が三四名と群を抜いている。また他の職業では、雑誌・新聞記者が多かった。これは創立者の井上円了が三宅雄二郎、志賀重昂らと政教社を設立し、「国粹主義」を掲げ、雑誌『日本人』を発刊してきたことと無関係ではなからう³²⁾。

悟朗の在学期間（明治四十一年四月～同四十四年三月）における専門部第一科の受講科目は【表4】のようであった。教員検定試験に対応できる内容で構成された専門部教育第一科の課題を継承し、「国語」「漢文」を加えつつ、哲学・仏教を中心に専攻させる体制で、それに伴う人材の招聘を図った。東洋大学は、「哲学館事件」の騒動を創設者井上円了の学長辞退で収拾し、「八宗兼学」の方針のもとで開明的な姿勢を打ち出していた。

【表4】東洋大学専門部第一科課程表(明治38年改正～同44年)						
学年	第1学年		第2学年		第3学年	
学科	科目名	時	科目名	時	科目名	時
倫理	実践道徳	4	実践道徳	4	実践道徳	4
	東洋倫理史		東洋倫理史		東洋倫理史	
	西洋倫理史		西洋倫理史		倫理学	
教育	教育史	4	教育史	4	教育学	5
	心理学		教育学		教授法	
					実地授業	
国語 漢文	徒然草	6	日本文学史	6	日本文学史	4
	大学・中庸		老子・荘子		支那文学史	
	論語・孟子		近思録 ・伝習録			
哲学	哲学概論 ・論理学	6	西洋哲学史	4	西洋哲学史	5
	西洋哲学史		印度哲学 即ち唯識学		支那哲学	
	印度哲学 即ち俱舎学				印度哲学 即ち天文学	
歴史			東洋歴史	2		
法制 経済					法制経済	3
英語	文典・作文	7	会話・作文	7	会話・作文	7
	講読		講読		講読	
合計	計27		計27		計28	

『東洋大学百年史』通史編588頁より

『東洋大学百年史』通史編588頁より

残念ながら「新生」東洋大学に在学した悟朗がどの教授の講義を受け、いかなる学問的影響を受けたかを実証できる講義ノートや日記などの史料は見つかっていない。だが、彼がイギリスの哲学者バートランド・ラッセルの翻訳者として活躍していくことを考えれば、「論理学」担当の紀平正美や「哲学史」担当の北沢定吉に師事を仰いだ可能性を推測の範囲に入れておいていいだろう³³⁾。大正十一年六月に悟朗が著した『哲学の話』（日本評論社）の巻末「哲学研究参考書目録」には、朝永三十郎や桑木厳翼らの著書とともに、紀平正美『哲学概論』（大正五年、岩波書店）と北沢定吉・宮地猛雄共著『哲学汎論』（明治四十年五月、弘道館）が挙げられている³⁴⁾。

『哲学の話』は、「人生問題」への関心が高まるなか、「特別の立場を避けて、万人向きを心掛けた」哲学の入門書であった。悟朗は「はしがき」で、哲学を「観念的遊戯」と見なす世評に対し、「人性の根本に深い根を下し」「最も厳密なる批判的立場に立つて居るもの」と定義している。本編は「総論」「实在の問題」「認識の問題」の三篇から成り、AとBの問答形式で哲学の歴史と本質が説かれていく。最終章「哲学的認識の性質」では、プラグマチズムやベルグソンが紹介され、哲学の試みが次のように結論づけられている³⁵⁾。

A 「何っちの方を向いても未解決の問題許りだね、哲学ってやつは」

B 「哲学は絶えず進歩発達する学問丈けに、何処迄行つても此れで決つたとか此れで解決がついたとかいふ事はない。絶へず或る問題を解決し乍ら、又絶へず新たな問題を生み出して行く。そこに知識の不断の進歩がある。若しそれが可けないといへば、人文の発展はその進行を止めなければならぬ」

A 「そういふ訳か、スルト絶対に動かない解決などは求める方が間違つてゐるんだね」

B 「間違つてゐる訳ではない。誰れでもそれを求めるので、それが究智心の理想であるには相違ないが、然しそれは常に理想に止まり、現実とはなり得ないところに、無限の発展、無限の追求が行はれる。そこが人生の妙味とでもいふべき所だらう。凡そ決定し固定したところには何等の生命もなく、希望も光明も努力も追求もない。そうなるのは人生は洵につまらない。レッシングは「神若し右手に真理を持ち、左手に真理を追究する心を持って、孰れなりと汝の好むところを選べと言はゞ、余は真理其物よりも寧ろ真理を追究する心を貰ひ受けるだらう」と言つて居るが、此れは実に人間性の真髓を言ひ当てたものだと思う」

一方、野村善兵衛は、明治十七年八月五日、福島県伊達郡半田村で農家の次男として生まれた³⁶⁾。半田村は、土地の三分の一が耕地、残りが山林と原野で、米作と養蚕が村民の生活を支える典型的な農村であつた³⁷⁾。村の南に阿武隈川の支流である産ヶ沢川が流れ、それを境に睦合村、桑折町と接していた。後に善兵衛が「限畔」と号す所以である。村内でも野村家は「可なり貧乏な田舎の百姓家³⁸⁾」であつた。善兵衛は「村の小学校の尋常科を卒へた時に、猶高等科にも這入りたい」と願つたが、家計に余裕がないからと父親に反対された。時あたかも日清戦争直後、軍備拡張政策が推進され、「重税は父よりも直接小学生の自分に関係した」と言う。あきらめきれない善兵衛は、役場に松原熊治郎村長を訪ね、授業料や税金の軽減を訴え、どうにか隣の桑折町高等小学校に通うことを許された。だが卒業後は家業を手伝う日々を過ごし、「同窓の友達が中学校や師範学校や、その外彼等の志望せる専門学校などに喜び勇んで入つて行つた」³⁹⁾姿を複雑な心境で見送つていた。善兵衛に上京の契機を与えたのは、岸本能武太の著書『社会学』であつた⁴⁰⁾。岸本は、同志社英学校に学び新島襄から洗礼を受けたが、ハーバード大学神学部に進み宗教哲学・比較宗教学を修めるなかで、神の神聖さを強調しながらもイエスの神性を否定するユニテリアンとなつた。帰国後、姉崎正治らと比較宗教学会を設立し、日本の宗教学の確立に努めながら、『六合雑誌』主筆として活躍し、多くの著作を刊行し宗教哲学を紹介していた。『社会学』は、明治二十九年に岸本が東京専門学校で行つた講義をもとに『六合雑誌』に掲載した記事を一般読者向けに加筆・修正し、同三十三年に刊行したものであつた。

では、なぜ善兵衛は同著に惹かれ、哲学を志したのでろうか。一つは、学歴のない彼にとって、平易な文章で書かれた新しい学問に関する概説書の方が己の修学への道を示唆してくれると考えたからであろう。もう一つは、彼の家庭生活と関わつてゐた。両親は仲が悪く、「母が里に戻つて行つたことは、決して一、二回ではなかつた⁴¹⁾」という。子供にとつて最も身近な社会と言える家庭は両親の不仲で緊張感の走る場であつた。そうした体験から、彼は学校で教わる「孝」の道に疑いを抱き、「倫理問題の解決」を求めていた。すなわち、善兵衛にとって、社会の起源から特質・目的まで説明する『社会学』の内容と、

理性により宗教を捉え人間のあるべき姿を説く岸本の宗教哲学は、自らの環境を客観的に捉え直す視座を提供し、さらには現状から抜け出す好機を与えてくれたのである。

明治四十一年、善兵衛は『社会学』への質問で書簡の往復をした岸本を頼り上京した⁴²⁾。小日向台町の岸本家に居候しながら、東洋大学の聴講生となり松本悟朗と再会した。だが、外国の哲学書を直訳するだけの講義内容に失望し、「哲学の研究を要するに古今の書を渉猟するを以て手段とするので、必ずしも教師の手を煩はす必要はない」と退学した。国民英学会の夏期講習を受け⁴⁴⁾、英語と独語を修得し、ほぼ独学で哲学の原書を読み耽った。また、岸本の誘いで統一基督教会の礼拝に出席し、加藤一夫・吉田弦二郎・小川未明・一條忠衛らと出会い、『六合雑誌』に執筆する機会を得ていく。

我ありて社会あり、又社会ありて我存在す。我と社会とは同一体の両面である、此二面の統一的全体は即ち人生其者である。即ち自我の真生活である。自我の生活を主観的に見れば個別の「我」であるが、客観的に見れば「社会」である。此の主客を合体して人生と云ふのである。されば真の自我は二方面相互の關係進歩に依て其本質を発揮することが出来る⁴⁵⁾。

明治四十四年八月一日、善兵衛は論説「社会的同情心」を掲げ、社会を「恰も残忍なる敵国の様に思つて」「其悪事短所を忌憚なく暴露攻撃して止まない者」を批判した。個人とは独立した存在であると同時に、他の個人と共存する存在でもある。ゆえに、社会は「自己実現の重要な舞台」であり、「人生の意義は我よりは寧ろ社会に於て円満に発現せらるゝもの」と主張したのである。自己の存在を社会との調和のなかで位置づける姿勢は、「自我」の解放を積極的に唱える、後の言説とは性質が異なる。だが、善兵衛が上京してきた経緯を想起するならば、個人と社会の捉え方に岸本の影響が大きかったことは想像に難くない。限畔の見解は、『社会学』第五章第一節「社会の有機的説明」に示されている、個人と社会を主客と見なす岸本の社会観とほぼ相似形の内容を有していた。

さらに、その背景にキリスト教への入信を挙げる必要がある。明治四十五年二月四日、善兵衛は東京市芝区三田四国町の統一基督教弘道会で内ヶ崎作三郎牧師から洗礼を受け、「信仰の新生活」に入った⁴⁶⁾。『六合雑誌』は、キリスト教に限らず、人権・人格という観点から広く宗教・政治・社会・思想・文学・芸術を論じ、社会主義の紹介や労働問題・婦人問題への提言にまで誌面を割いていた⁴⁷⁾。彼が登場した時期は、主筆が岸本から内ヶ崎に代わり、ユニテリアン派の機関誌として社会伝道の役割を担っていた。

そうした影響は、同年六月一日の論説「自覚と労作的精神」⁴⁸⁾に顕著である。善兵衛は、宇宙それ自体が神の「労作」であるから、創造物である人間の終局目的も苦勞して物を作ることにあると解釈する。人間は「唯労作に由てのみ神を見、神を拝し、神の恩寵は享くる」存在で、「宇宙的大精神を自覚し、大労作を賛助育成する」時はじめて「無限の自由と絶対の価値」を有する。「進化」とは、「宇宙の大精神」を自覚した者たちの「能動自制的労作的態度」に基づく「無限の活動」である。したがって、「一般人心」に「能動自制的精神」を体得させるならば、青年層の「懷疑」は解消され、宗教の根底は確立され、産業の勃興により生活難も解消される。ここにおける論理の展開には、プロテスタントの倫理観念と勤勉な労働を結ぶ近代資本主義の精神に近似した思考様式が見て取れる⁴⁹⁾。

要するに、『六合雑誌』登場時の善兵衛は「自我」の実現をあくまで社会との調和のなかで捉え、教会内で「労作的精神」の發揮をめざす一青年であった。彼は積極的に教会員としての言説を披露することで、自らを「基督者」と規定しようとしていた。だが、思索を深める内に、彼の思想的軌跡は次第に教会から乖離し、自らの意見を存分に発表できる場を求めていくこととなる。そうした心情を示す一通の書簡が残されている。

古人が「艱難相救ふは朋の道也」と云ったが、コンナに零落しては救ふどころか正に嘔みつき合ふ程の勢となつては、丸で犬猿の如しと我ながら浅間しく考へたよ。Mに欠乏しては美しい人間生活も恐しく残酷なものだねえ。君の手紙を読んで誠に同情の念なき能はずだが、自己の首の落ちる時は、無念無想。併し僕は寸時の余裕を得たよ。以御蔭ヤリクリを為し得た。まだ学校に行つて反つて君ひどいよ。何の仕事もなく、金もなく友もなく田舎の赤子からは小使をセビられてそれで毎日四畳半に安閑とねころんでゐられないよ。夕方二時間の学校は何より楽みにして居るのだよ。ドーセ夏田舎に引込めば皆放擲さ。僕此頃初めて死んで見たいと思ふことがあるよ。いつか少し余裕があつたらピストル一挺買ふつもり。華山の帰るまで一縷の望みをかけて居るが、是だつて何だかわからないよ。あゝ恐ろしい夏！
今度教会と縁を切つてますゝ孤独になつたよ⁵⁰⁾。

右は、大正二年（一九一三）四月三十日、善兵衛が松本悟朗に宛てた手紙である。「M」は文脈から考えて「Money（＝金）」のことである。金銭の欠乏で生活が荒み、自身の零落に直面した時、親友との関係は「救ふどころか正に嘔みつき合ふ程の勢」となり、「犬猿の如し」と表現せざるを得ない状態にあつた。「此頃初めて死んで見たいと思ふことがある」と告白する限畔は、「華山」の帰りに「一縷の望み」を見出していた。その人物こそ、雑誌『第三帝国』をともに創刊する茅原華山であつた。同年三月から茅原は朝鮮・中国へ視察旅行に出かけていたが、書面からすでに善兵衛らと雑誌創刊の話し合いをしていたことがわかる。善兵衛は、再会した松本と意気投合し、相談を持ちかけた「華山」の帰りを、換言すれば、『第三帝国』の創刊を待ち焦がれていたのである。また、「教会と縁を切つて」いたことも無関係ではなかった。具体的にどのような絶縁であつたかは判然としないが、『第三帝国』における「自我論」と比較する時、その変化に気づかされる。分岐点となるベルグソン哲学の受容については第四章第二節で詳述することとしたい。

では一体、善兵衛と悟朗は、いついかなる形で華山の知遇を得たのだろうか。それは前年九月に茅原が東洋大学で行った講演「新唯心論」を契機として考えた⁵¹⁾。善兵衛と悟朗は、独学力行の士でありながら『萬朝報』記者として活躍する茅原の講演会に参加し、自我の問題・記者の職分・日露戦争の意義などの話を聞き、これまで温めてきた計画を打ち明け、協力を仰いだ。それは同様の境遇に置かれ苦闘している青年たちに向けて新しい雑誌を創刊する計画であつた。彼らのような青年たちが登場してくる背景には、高等小学校教育の浸透、中等・実業教育の拡充とそれに伴う教員の養成という時代的要請で、東洋大学に限らず、私立大学への社会的需要が高まっていたことが挙げられよう⁵²⁾。

三 「雄弁」青年の活躍―鈴木正吾と丁未倶楽部―

憲政擁護運動以降、大学生の政治参加とその有効性の認識は増大し、とりわけ「雄弁」青年の活躍は目を見張るものがあつた。明治四十年（一九〇七）に東京帝国大学法科大学首席書記となつた野間清治は、弁論部の創立に尽力するなかで、教授や学生の講演弁論を印刷・頒布しようと考え、同四十三年に月刊誌『雄弁』を創刊した⁵³⁾。同誌は、官学と交流のなかつた早稲田・慶應・明治など私学の雄弁部を連携する媒体となり、「雄弁」は時代を象徴する言葉となつた。そこには、藩閥政治家と帝国大学出身の官僚により確立されてきた明治国家に対する、少壮政治家と私立大学生による根本的批判が「雄弁」によって広く国民に伝えられ、大正国家を創造していく可能性が内包されていたのである⁵⁴⁾。

益進会の創設に加わる鈴木正吾は、まさに「雄弁」青年の代表的存在であつた。正吾は、明治二十三年六月三十日、愛知県宝飯郡御津町に渥美半五郎の三男として生まれた。父の営む仏壇屋は小さく、貧しかったため、正吾は幼い頃に鈴木家の養子に入つた。当時、小学校教育を終えてなお進学する場合、経済的事情が厳しい者は学費免除となる師範学校に進むのが通例だったが、学業優秀だった正吾は、愛知県立第四中学校へ進んだ⁵⁵⁾。

第四中学校は、明治二十六年に豊橋市の有志が地元の教育水準を向上させることを願つて設立した私立補習学校「時習館」を礎としていた⁵⁶⁾。校名「時習館」は、宝暦二年（一七五二）に吉田藩主松平信腹が創設した旧藩校の名称をかりたものである。同二十八年五月に豊橋町立の「豊橋尋常中学時習館」となり、同三十三年四月に県に移管され、その翌年に「愛知県立第四中学校」と改称された。正吾が入学した明治三十六年には、従来の校地が手狭となり、豊橋市大字中柴から大字花田にわたる新校地に移転工事が進められた。正吾は、自らの中学時代を振り返り、「暴れん坊」で「硬派」な学生であつたこと、勉強が厳しかったこと、押川春浪らの冒険小説を貪り読み「馬賊」に憧れていたことなどを述べている⁵⁷⁾。その背後には、どのような校風と時代状況が存在していたのであろうか。

当時の四中の雰囲気を見ると、教師排斥の同盟休校や生徒同士のもめごとが起き、新聞沙汰になる場合も少なくなかつた。正吾が入学する前年六月に起きた「生徒間殴打告訴事件」もその一例であつた⁵⁸⁾。四中・豊橋中の時代を通じ、校内では、最上級の五年生が校風を乱す行為をする者を「鉄拳制裁」で戒めることがしばしば行われていた。

この事件では、三年生一名が五年生四名に教室で鉄拳制裁として殴打され、十日以上の欠席に追い込まれた。これに対し、三年生の兄が校長に訴えたが、学校の対応を不服とし、診断書を添えて豊橋区裁判所検事局へ告訴状を提出し、五年生四名を訴えたが受理されず、改めて岡崎地方裁判所に提出し受理され、取り調べの結果、予審免訴となつた。事件は一応解決したが、詳細が地元紙の『参陽新報』に連日掲載された⁵⁹⁾。学校側は、五年生四名の内、傷を負わせた一名を戒飭処分としたが、三年生は退学した。四中の校風が垣間見えるとともに、地域社会における中学校教育への注目の高さをうかがい知ることができよう。

一方、正吾が二年次に進級しようとしていた明治三十七年二月、日露戦争が勃発した。卒業生が召集され、出征兵士は生徒らにとって兄弟や親類などの場合が多かつたため、四中では教職員・生徒一同で停車場まで赴き、先輩たちの出征を見送つた。三か月後には教職員にも出征者が現れ、ロシアとの激闘で命を落とす者の悲報が届いた。それゆえ、日本の勝利が報じられると校内は沸き返つた。同三十八年一月十一日の「学校日誌」には「午前九時旅順陥落祝賀式ヲ挙行シ、宣戦詔勅奉読、君ガ代ヲ奏シ、式終リテ記念樹ヲ植エ付

ケタリ」⁶⁰⁾と記されている。また、日本海海戦の勝利に際しては、祝意を校外に示すため、教職員を先頭に全校生徒が午後七時から豊橋町の目抜き通りを祝勝の唱歌を高唱しつつ提灯行列の行進を実施した。その様子を地元の『新朝報』は「常に慎重にして着実を守れる第四中学校生徒も、千古未曾有なる我海軍の偉勲に対しては、満腔熱誠の祝意は溢れて圧へ難かりけん」⁶¹⁾と報じている。これら日本軍の勝利には、陸軍参謀本部が派遣した諜報部隊、なかでも大陸浪人や馬賊に偽装した将校たちの活動が欠かせなかった。「馬賊」に憧れた正吾の中学時代は、日露戦争における日本軍の活躍と密接な関係を有していた。

このように四中の生徒たちは、兵士の壮途を見送り、戦死者の英霊を慰める一方で、日本軍勝利の報に歓喜し、激戦で名誉の戦死を遂げた軍人たちの不屈の精神を偲ぶなど、戦争一色に明け暮れた。出征した教職員や卒業生からの手紙はすべて『校友会誌』に掲載され、生徒たち自身もそれぞれの思いを作文に綴った。純粹に勝利を喜ぶ者、敵国の頑張りに賞賛を惜しまぬ者、戦死者を追悼する者、人類の歴史を紐解き戦争発生の原因を論究する者など、様々であった⁶²⁾。以上のように、正吾の回想の背後には、四中の「蛮カラ」な校風と多くの国民の命を奪った日露戦争という現実が横たわっていたのである。

中学卒業後、正吾は地元の小学校で代用教員を勤めたが、進学で上京した中学時代の級友らの声に誘われ、明治大学に入学する。予科に入った彼は、夜間の人力車夫で学費・生活費を稼ぎながら、予科生でも他の学生たちを牛耳ることができるという理由から「雄弁部」に入り、昼は部員との議論・演説に時間を費やした。二年後に本科へと進むが、大学の講義にはあまり姿を見せず、もっぱら「雄弁」青年としての青春を謳歌した。

明治大学弁論部といえ、同時期に鈴木堅次郎や室伏高信などが名を列ねていた。部員は、正吾を含め、明治四十年に帝大・私大の雄弁部を横断する形で結成された丁未倶楽部の主要な部員であった⁶³⁾。次頁の【表5】にある通り、丁未倶楽部には、東京帝大の芦田均や吉植庄亮、早稲田の五明忠一郎や稲田直道、日大の白須皓らが所属し、帝国議會を模して議長や与野党を立て議論を戦わせる擬国会を開催するかたわら、大隈重信や尾崎行雄などの応援部隊として各種選挙で演説に活動にと力を発揮していた⁶⁴⁾。

明治四十四年四月一日発行の『雄弁』には、三月十九日に早稲田大学で開催された擬国会に登壇した茅原が、「海軍拡張」という案件に対し、欧米外遊の経験を踏まえ、大規模な陸軍縮小を伴う海軍一元主義を演説した時の「印象」が記されている⁶⁵⁾。「諸名士の演説中、今日これ程熱心に聴かせたのは無かった、敵も味方も覚えず拍手する」と評されるほどの雄弁は、茅原の存在を東都の学生たちに示すとともに、雄弁部の活動を通じて正吾との関係を形成する契機となっていく。正吾の『萬朝報』への投書がやがて茅原の眼に止まり、益進会の結成に加わったのである。

以上見てきたように、「益進主義」を唱える茅原のもとに結集したのは、明治憲法体制の完成後に教育を受け、中等学校教育程度の学歴を有した日露戦後の地方青年たちであった⁶⁶⁾。日露戦争の勝利は、日本を「一等国」へ導く一方で、列強の対外的脅威および戦時の負担から解放された日本国民、とりわけ青年層に非国家的な傾向を顕在化させていた。このとき世界の中で帝国日本がどのような方向性をめざしていくべきか、「国家」と乖離した「国民」をいかに養成していくべきか、という新たな課題が生まれていたのである。

民友社を結成し雑誌『国民之友』で言論界を牽引してきた徳富蘇峰は、非国家的な「大

正の青年」たちを「模範」「成功」「煩悶」「耽溺」「無色」に分類し、「父祖の余沢に浴する」「金持の若旦那」と揶揄した⁶⁷⁾。だが、そうした批判は、新しい価値観や方向性を求める彼らにとって、いわば「明治の老人」による時勢遅れの説法に過ぎなかった。

【表5】「丁未倶楽部」のメンバー一覧							
大学	名前	生年	経歴	大学	名前	生年	経歴
慶應義塾	小沢愛罔	1887	演芸評論家	明治	羽生正		
慶應義塾	角谷輔清	1892	渋谷区長	明治	室伏高信	1892	評論家
慶應義塾	加藤止人			明治	山口源二郎		
慶應義塾	平野光雄	1881	1920衆議院議員	早稲田	稲田直道	1889	1937衆議院議員
中央	尾崎重美	1883	1936衆議院議員	早稲田	大野恭平	1888	帝国金属工業株式会社取締役
中央	米津藤一			早稲田	五明忠一郎	1887	社会教育家
東京帝国	青木得三	1885	大蔵省主税局長	早稲田	鈴木謙	1891	台湾拓殖株式会社参事 台湾綿花取締役兼支配
東京帝国	芦田均	1887	外交官、首相	早稲田	高木貞雄		
東京帝国	大沢一六	1886	弁護士 『雄弁』編集長	早稲田	高橋円三郎	1894	1937衆議院議員
東京帝国	寺田四郎	1886	弁護士	早稲田	武谷甚太郎	1892	1930衆議院議員
東京帝国	中村泰治			早稲田	内藤隆	1893	1949衆議院議員
東京帝国	前田多門	1884	朝日新聞論説委員 文部大臣	早稲田	中村三之丞	1894	1939衆議院議員
東京帝国	吉植庄亮	1884	1936衆議院議員	早稲田	丹尾磯之助	1891	早稲田大学評議員
日本	白須皓	1891	山梨日日新聞主筆	早稲田	西岡竹次郎	1890	1924衆議院議員
日本	山下祥一	1895	日本大学教授	早稲田	野村秀雄	1888	朝日新聞代表取締役
日本	吉田敬直	1885	弁護士	早稲田	益子逞輔	1885	大成火災海上保険 株式会社常務取締役
法政	田熊福七郎	1887	報知新聞編集主任 法政大学常務理事	早稲田	宮沢胤勇	1887	1930衆議院議員
法政	宮下庄太郎			早稲田	栗山博	1884	1920衆議院議員
明治	鈴木堅次郎	1887	東京府会議員 東京都市計画委員	早稲田	森下国雄	1896	1936衆議院議員
明治	鈴木正吾	1890	『第三帝国』同人 1932衆議院議員	早稲田	山森利一	1889	1936衆議院議員
明治	西野喜与作	1889	帝国生命取締役	早稲田	吉田淳		

対して日露戦後の国際情勢を見つけてきた茅原は、欧米社会に蔓延していた苛酷な「生活問題」を踏まえながら、ウィリアム・ジェイムズの「メリオリズム」を取り入れ、「益進主義」を鼓吹した。人間の欲望を社会発展の基礎とみなす立場から、無批判の勤勉・儉約よりも批判的な生産・消費の循環にこそ帝国日本の将来を見出し、時代の担い手として青年たちを指名し、「国民」の側から「国家」を生活化する道筋を示したのである⁶⁸⁾。

大正元年九月十三日、明治天皇の「大喪の礼」に際し、石田友治は『秋田魁新報』特派員として上京しながら、茅原のもとを訪れ、新雑誌創刊の協力を仰いだ⁶⁹⁾。すでに同様の相談を持ち掛けていた松本悟朗・野村善兵衛がこれに合流し、最後に鈴木正吾が加わる形

で益進会が結成されたのである⁷⁰⁾。「益進会」が茅原の中心思想に由来することは言うまでもない。「会」と称する組織は、「民友社」「政教社」「平民社」といった明治期の思想結社とは性質を異にするのか。時期を前後して結成される「友愛会」「新人会」「黎明会」のように社会運動を内包する団体に成長していくのか。益進会がいかなる時代状況のもとで雑誌を創刊し、どのような言論および運動を展開していくのか、集団のあり方に注目しながら考察したい。まずは石田の「再上京」の足跡を追ってみよう。

第二節 雑誌『第三帝国』の創刊

一 石田友治の「再上京」

大正元年十一月二十九日、石田友治は故郷土崎を後にし、中央論壇への進出をめざし東京に向かう汽車へと乗り込んだ⁷¹⁾。能代の『北羽新報』で社主を務める島田豊三郎らに見送られながら、新時代に相応しい雑誌を創るという使命感を抱いての出発であった。

このとき友治に再上京の契機を与えたのは、旧友との再会と茅原華山との遭遇であった。明治四十五年初頭に「新理想論」を掲げた友治は、同年四月四日に予定外の「東京行」を敢行した⁷²⁾。渡米する堀井梁歩を横手まで見送りに来た所、若き友に「東京まで一緒に行かう！」と提案されての強行軍だった⁷³⁾。突然の誘いを容れた理由は、聖学院神学校時代の一級先輩で、神学校を中退しアメリカに留学していた鷺尾正五郎が、ドレーク大学で文学修士、さらにハーバード大学で博士号（哲学）を取得して帰国し、東京にいたからである⁷⁴⁾。翌日が「休み番」だったこともあり、「明日の晩東京に着き、明後日一日鷺尾君と語り、本郷教会に居る弟を呼んで結婚問題の始末をつけさせ、其晩直ちに帰ることにしよう」と、井上社長・安藤主筆にも無断休暇を取り、「東京行」を試みたのであった。

車中、梁歩君と人生を語り、政治を語り、思想を語り、文明を語った、予はメレジュコフスキーの示したやうに、世界の歴史は、猶太思想と希臘思想の消長であると思ふ、イプセンの「ガリラヤ人と皇帝」も之を指したものだ、其目指した「第三王国」は今後の文明を云ったものである、此無解決、混乱、暗黒の文明の前途を如何せんとは時代の人心の奥に潜む最大問題である、之を人生に当てはめても同じ、旧き宗教道徳は權威が無くなり覚醒された人々は当面には生活難に迫はれながら、心の中には其無解決無希望無理想に苦み悶いてゐる、之をどうしたものであらう、新宗教の使命は茲にある、「第三王国」の建設は茲にある、之を成し遂げること、或は其機運を造ることが吾等の使命でなからうか、更に日本の立憲政体も民軍を以て官僚を打破した上でなければ駄目である、官僚を打破して憲政の実を挙げてからでも、世界の人類、文明の趨向の暗黒なるを思へば、甚だ心細いことゝ云はねばならぬ、と云ふやうなことを語った⁷⁵⁾。

右は、友治が車中で梁歩と語り合った内容の一部であるが、ここで目標として掲げられている「第三王国」の建設こそ、後に益進会が誌名に選ぶ「第三帝国」の原初的形態であることは間違いない。茅原が『萬朝報』で「第三帝国」を用いるのは大正二年八月二十五日であるから、一年四ヶ月も早いことになる⁷⁶⁾。ノルウェーの劇作家イプセンは、当時の青年層に広く読まれていたので、友治の完全な独創とは言えないが、「日本の立憲政体も

民軍を以て官僚を打破した上でなければ駄目である」という表現も含め、この『秋田魁新報』の記事が、新雑誌の誌名の成立を考える上で重要な意味を持つていることは確かである。そして、「吾等の使命」とは新雑誌創刊の「機運を造ること」にほかならなかった。

四月四日午後七時、上野駅に到着した友治は鷺尾正五郎と八年ぶりの再会を果たした⁷⁹。停車場前の牛鍋屋で夕食を共にしながら、鷺尾は、梁歩への助言も兼ね、アメリカでの生活について、辛い労働の経験や勉学の状況、ハーバード大学で哲学博士の学位を得るまでの「実験」などを率直かつ明截な調子で語った。その後、友治は、梁歩と別れ、小石川水道橋の鷺尾の下宿「東郷館」を訪れ、夜が更けるまで熱く語り合っている。話題は、結婚や就職などの身の上話から日本の思想界への批判までと幅広いが、特に鷺尾の博士論文「ニユー、レアリズムの批評」の内容には、バーナード・ショウ、ベルグソン、ウィリアム・ジェームスなど、『第三帝国』の言論に関わる思想・哲学の話が飛び交っていた。

翌五日、友治は鷺尾と下駄がけでの「銀ぶら」と洒落込んでいる⁸⁰。道すがら鷺尾は留学中に目にしてきた欧米の大都市に比べ、東京も「世界の大都市である」と認めながら、「人類の大活動を見やうと思ふならば紐育である」と、他人の羨むような言葉を口にしていく。だが、「一個の田舎漢」にすぎない友治の目には、自らの「東京遊学時代」に比して「著しい進歩」を遂げた「東京」の姿こそが眩しかった。こうして鷺尾と語らいながら、神田古書店街を通り、小川町から電車に乗り日比谷公園の前で別れた⁸¹。

そこから友治は「京橋に萬朝の茅原華山氏と伊藤亀雄氏を訪ねた」が、特に約束をしていなかったのか、目当ての茅原は外出中だった。この時点で友治と茅原の間に面識があったかは不明であるが、後の文脈から推測するに、『萬朝報』が第十一回総選挙で企画していた「理想選挙運動⁸²」に関し、友治が社を代表して応援演説の依頼に訪れたのが真相のようである。「今第一版の編輯を了った処であると云つて会つて呉れた」伊藤亀雄は、「理想選挙」の趣旨を説明し、社主の黒岩が選挙応援に行くことを期待させる返答をしている。

明治四十五年五月十五日における第十一回衆議院議員総選挙こそ、友治に「再上京」の契機を与えたもう一つの要因、茅原華山との出会いの場であった。魁新報社は、一年前の県議会選挙での安藤主筆の惜敗を踏まえ、井上廣居社長自らが秋田市より立候補する英断に踏み切った。同年四月二十八日、「約束」通り、井上の応援演説に『萬朝報』社主の黒岩涙香が来秋した⁸³。傍らには流麗なる文章で青年読者を魅了していた同紙記者の茅原華山の姿もあった。午後一時半より秋田市柳町の「凱旋座」で催された演説会は二千人の聴衆で立錫の余地もなかった。国民党秋田支部の中村木公が「開会の辞」を述べ、応援への感謝と井上の経歴を紹介した。次に茅原が「民の力は正に在り」と題し、日本人の政治的覚醒を促す雄弁を揮い、井上氏の「万歳」を三唱し拍手喝采のもとで降壇した。最後に、黒岩が「国勢大観」と題する演説を行い、盛会のうちに幕を閉じた。

井上の選挙運動に奔走していた友治も「秋田理想選挙同盟会」幹事として、続く能代・大館での演説会に出演している。二十九日は能代青年団主催で「能代港米代座」に聴衆約千人を集め（友治「理想選挙の主意」・華山「芳を百世に流す之を壽と謂ふ」）、三十日は大館青年会主催で雨中に聴衆約千五百人を集め（友治「理想団と理想選挙」・華山「政を知らざるの民」）、連日の盛況であった⁸²。果たして、結果は、有権者五九三人中、井上廣居が三九五点、三期目を狙った立憲政友会の大縄久雄が一五九点で、井上が倍以上の票を集めて予想以上の圧勝を収めた⁸³。『萬朝報』による理想選挙運動が勝利に貢献したこと

は言うまでもないが、ここにおける「共演」を通じ、友治は茅原との関係を強めていった。それから半年後、友治は「退社の辞」を掲げ魁新報社を去った⁸⁴⁾。横手教会の牧師を辞し地元紙の記者となるも、青雲の志を捨て切れずにいた彼は、茅原との邂逅を自らの「而立」の好機と捉え、「再上京」の途に就いた⁸⁵⁾。車中、友治の懷に抱かれていた茅原の論説「新唯心論」は、「古き神既に死して新しき神未だ生れず若し新しき神生れずば、我れ自ら新しき神を造るまでだ⁸⁶⁾」という力強い文章で彼の新しい船出を後押しした。上京した友治は、武藤如牛宅に世話になりながら⁸⁷⁾、中村木公、町田忠治、川尻東馬ら同郷の先輩たちの元を訪問して歩いた。この際、先の応援演説で知遇を得た茅原の自宅にも訪れ、散策・昼食を共にしながら胸襟を開き語り合っている。

幾堂邸より遠からざる茅原華山氏を訪ふ、幸に在宅、誘はるゝが儘に相携へて散策に出づ途々人生を語り、恋を語り、死を語り、神を語り、超人、人神、狂人、理性、宇宙、哲学、宗教を語り、科学を万能とするの愚を罵り、学者は学ぶ処に囚はると論じ、予は人間たらんと欲す、超人たらんと欲す、人神たらんと欲すと云ひ、自己実現の極致は之なるべしと論じ、文明批評家は予言者也と語り、本能と進化退化を論じて、めぐりめぐりて四谷見附に來た、有名の牛鍋屋であると云ふ三河屋に伴はれ、現下の政局觀を話されながらビールを抜き昼食を振舞はる、且つ飲み且つ食ひながら、更に青年の危機にあるを語り、学生の幼稚を論じ、今の教育の弊害をあげつらひ、直覺主觀の尊さを高調し、新文明の建設如何を共に思ひめぐらし、三河屋を出て牛込で別れた、華山先輩手に岩野泡鳴の「半獸主義」を持ち、折々翻して見てゐられた⁸⁸⁾。

ここで二人が語り合ったこと、すなわち「科学を万能とするの愚を罵り」「本能と進化退化を論じ」「青年の危機にあるを語り」「直覺主觀の尊さを高調し、新文明の建設如何を共に思ひめぐらし」たことが、雑誌『第三帝国』の母胎になったと考えられる。言い換えれば、大正元年十二月二日こそが同誌誕生の記念すべき日ということになる。

結局、友治は中村木公の紹介で雑誌『新公論』の編輯員となった。『新公論』は、明治三十七年二月、櫻井義肇を主幹に創刊された月刊誌である⁸⁹⁾。東本願寺の内紛を機に『中央公論』から分かれた同誌は、高島米峰・青柳有美・山路愛山・土岐哀果らに協力を仰ぎ、「公論」「討究」「人物月旦」などの欄を充実させ、生彩ある誌面作りを行っていた⁹⁰⁾。友治は編輯員の仕事に徹し、『第三帝国』創刊直前まで九ヶ月間在籍し、執筆の機会を得たのは退社の辞を含め二度であった⁹¹⁾。だが、彼は「新公論社の九ヶ月」を「東京の地理に通じ、東京の人物に接し、東京の人物の頭脳を研究」する「修行」と捉え「奮闘努力」した。「今や自ら生命を打ち込み、一身を献げて為すべき仕事に取かゝらなければならぬ秋」が待っている。「同志と共に資を併せ、我が畢生の志業を為さん」「我等は最善を尽し、斃れて面して後已むの外はない」という言葉には並々ならぬ決意が込められていた。

また、友治の故郷秋田は、明治前期に犬養毅が『秋田民報』に記者として在任以来、犬養派の強固な政治基盤であった⁹²⁾。友治が訪ねた同郷の先輩たちは、中村、町田、川尻らいずれも国民党系もしくは反政友会系の人士であった⁹³⁾。立憲国民党は、犬養を党首に、第二八回帝国議会で三七九議席中、与政友会の二〇七議席に次ぐ八七議席を占める野党第一党であった⁹⁴⁾。西園寺党首・原幹事長体制のもと、桂との「情意投合」を繰り返し、

利益誘導型の党勢拡張を推進していた政友会と対立し、とりわけ選挙法の改正をめぐり熾烈な論戦を展開していた。国民党は、選挙資格を直接国税十円から五円に引き下げ、さらに中等学校卒業者に新しく選挙権を与えるという改正案を提出したが、政友会の反対で否決された。⁹⁵⁾翌年五月には友治も国民党地方遊説の一員として秋田県下を廻る一方で、茅原との音問を断たず、新雑誌創刊のための協力を求めていくのであった。

二 第一次護憲運動と益進会

「すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったやうな気がしました⁹⁶⁾」。漱石夏目金之助は、『東京朝日新聞』に連載してきた小説「こころ」の結末を「先生」の自殺で締め括った。それは、「懊悩」の末に「生涯の事業⁹⁷⁾」を見出した己の歩みと「明治」の時代がともにあったことを偲び、その精神に殉じようとする彼自身の身代わりであった。大正元年（一九一二）九月十三日、明治天皇の大喪が挙行されると、出棺と同時に乃木希典陸軍大将夫妻が殉死を遂げた。式の終了を告げる号砲は、東京の夜に、明治が永久に去ったことを報じるように鳴り響いた。このとき日本全体が一つの時代の終りを確かに感じていたのである。

『天皇崩御、天皇万歳』の一刹那に於ては、神代を始めとして日本の昔しが偲ばるゝ、そして記者は日本には一頁と雖も『日本人民史』と名づくべきものがないといふ墓ない断案を得た⁹⁸⁾。天皇崩御に際し、茅原が開口一番指摘したのは、明治天皇の盛徳に応えるだけの「人民史」が存在していないという哀しい歴史であった。批判の矛先は、明治維新においてなお「惟命維従ふ」存在であった日本人全体に向けられていた。茅原は政治的に無自覚なまま、権威に従属し続ける人民をあえて「農奴」「工奴」「商奴」と称し、「我農工商民若し記者の此論に異議があるなら言ひ給へ、サア言ひ給へ」と挑発する形で、新時代の開幕に相応しい「一個独立の精神気象ある」人民による運動の勃興を求めたのである。

こうした主張は、茅原のもとに益進会同人を集結させるとともに、期せずして同年暮れに一つの運動を迎える⁹⁹⁾。発端は、陸軍二個師団増設問題をめぐり紛糾した第二次西園寺公望内閣が、上原勇作陸相の単独辞職で十二月五日に総辞職に追い込まれたことであった。元老らによる後継首班人事は難航を極め、翌六日から十日間で評議を重ねること十四回、西園寺再任をはじめ、寺内、松方、平田、山本、大山らの名前が浮上しては消え、勧誘と辞退が相次いだ。巷間では、十四日に犬養毅や尾崎行雄らと新聞記者が集まり憲政擁護会が結成された。十九日には歌舞伎座に三千人の聴衆を集めて第一回憲政擁護大会が開かれ、「憲政擁護」「閥族打破」をスローガンとし、護憲運動の波が全国へ広がっていった。

『萬朝報』論説記者として渦中に身を置いていた茅原は、この人事を長州叛徒の巨魁山県有朋と国民による「第二次西南戦争」と見立てた¹⁰⁰⁾。停滞する「古池」日本を不断の創造と進化が流れる「大河」とするには、まず古池の主を倒す必要がある。「山県が勝つか国民が勝つかは実に国家盛衰の岐る所」と国民の覚醒と官僚政治の打破を求めたのである。ところが、同二十一日に組閣したのは、明治天皇崩御の後、内大臣兼侍従長となっていた桂太郎による第三次内閣であった。この交代劇は、日露戦後に繰り返されてきた「情意投合」に基づく「桂園体制」の範疇であったが、世論は「宮中・府中の別」を破り登場した桂内閣を時代に逆行する「非立憲」内閣と非難した。茅原も『萬朝報』で同内閣の成立を「三田の蛙はとうとう古池の中に飛び込んだ」と揶揄し、「桂が憲政有終の美を済すと

いふは、鬼の念仏だ」と切り捨てている¹⁰¹。「真に憲政の美を実現せんとらば、国民先づ自ら心の結構を改造するを要す」と、権力への妥協を続けてきた日本人の性質を改造し、「自己を中心として自己の発展に資する政治を造らねばならぬ」と訴えていく。

『大正維新』といふ言葉が口より口に伝はる、これには沈痛にして深遠なる意義がある、日本は今や一大過渡時代を経過しつつあるのだ、一大過渡時代といはんよりも、日本あつて以来の最大過渡時代を経過しつつありといふが適切である、日本国民は二千五百年の服従的生活を出でて新に自主自動的生活に入らんとしつつあるのだ¹⁰²。

大正二年の年頭に当り、茅原は「大正維新」という言葉で「最大過渡時代」の到来を告げた。昨年末以来の運動の隆盛を同人とともに迎え、新聞・雑誌や演説会における「共闘」を通じ手応えを得た上での発言であつた。明治維新は国家的自覚を遂げた「政治上のルネサンス」であつたが、いまだ日本人は政治的自覚に欠け、無為な生活を送つてきた。だが、日露戦争を経験し苛酷な生活難に曝されて初めて、日本人は国民的自覚を持ち、「生活上のルネサンス」を遂げるに至つた。今こそ「大正維新」を合言葉に日本人民が力を合わせ「自主自動的生活」へ突入する時である。「天將に曙けんとす、これ千古の好機である」という茅原の訴えには、旧き「明治」を葬り去り、人民の「生命力」を伸長させる新しき「大正」を創造していこうとする強い決意が込められていた。

さて、折からの政治的雰囲気は桂の在任を許さなかつた。桂内閣反対の動きは全国に広まり、一月十七日に築地精養軒で全国記者大会が開催され、四百人余の新聞・雑誌記者が集まり、「憲政擁護」「閥族掃蕩」の宣言のもと全国記者同志会を結成した。各紙の言論が運動を先導するなかで茅原も論説「綜合的運動」をもつて「逾よ日本国民が綜合的に政治上の大運動を為すべき絶好機会が到来した」と訴えた¹⁰³。「憲法政治不俱戴天の敵」桂内閣の存立を容認してはならない。「生命力の活躍活動する国民」は断乎たる覚悟で「汝の精力と生命とを国政の上に集中し」「新なる大円満を建設」しなければならないと。

運動の隆盛に脅威を覚えた桂は、新党結成や議会对策、さらに詔勅の奏請により事態の収拾を図つたが、却つて「情意投合」してきた政友会の強い反発を招いた¹⁰⁴。政友会代議士による議場突進と議会周辺を取り囲む数万民衆の激しい示威運動のなか、桂はついに総辞職を決意する。だが、度重なる停会に激昂した民衆は暴徒化し、交番や政府系新聞社などを焼打ちし、余波が全国に飛火した。ここに第三次桂内閣は、憲政擁護運動によって、議会上空前の紛擾のさなか、瓦解に追い込まれたのであつた。

このとき民衆の激情に運動の形式を与えたのは、政党の院外団、新聞雑誌記者、弁護士、そして大学雄弁会を母体とする青年団体などであつた。特に鍛え上げた「雄弁」をもつて存在感を示したのが大学雄弁部の連合組織「丁未俱樂部」であつた。益進会同人の鈴木正吾は主要な一員として運動に加わり、初陣に勝利したことで自信を深め、反藩閥・反政友会、立憲国民党や立憲同志会に近いが政党勢力とは一線を画す独自の位置で、当該期の政治において一定の役割を担つた。こうして大正政変を機に、院外運動の高揚、全国的世論の形成、そして民衆騒擾の可能性という政治の新たな条件が登場したのである。

茅原も論説「民軍勝てり」¹⁰⁵や講演で運動の一端を担っていたが、いまだ彼の求める運動には遠かつた。なぜなら政治家や新聞記者に先導され、人民の実生活とは没交渉で、人

民の覚醒が立憲政治に基づいて発揮されるものではなかったからである。ゆえに、それは普通選挙の実施を要求するが、決して民衆の暴動をもたらすものではなかった。だが、運動を主導した政友会人士は、薩摩出身の海軍大将山本権兵衛との提携を模索し、茅原の「進歩の勇氣」¹⁰⁶⁾の訴えも虚しく胸の白薔薇を投げ捨て新内閣に参画していった。「憲政擁護」「閥族打破」の期待を裏切る形で成立した山本内閣に対し、茅原は打倒キャンペーンを張りながら、日本人民の「実生活」から発動される真の運動の実現を唱えていく。

支那の人心は皆に機微の間に動いてゐるのみならず、大いに動き出したのだ、新氣運が四百余州に鬱勃たりといつても決して過言ではあるまい、この眠れる獅子だか、眠れる象だか眠れる虎だか知らないが、既に動き出したといふことは團匪事件以来今日のまでの経過に徴して間違のない事実である、我々はこの動き出したといふ事実を眼の底に置いて、支那を観察したらその正鵠を得るに近からう。¹⁰⁷⁾

大正政変の余韻が残る大正二年三月上旬、茅原は中国・満州・朝鮮へ視察旅行に出掛けた。「何といつても日本に居て解らぬのは、否感じ得られぬのは支那的気分である」¹⁰⁸⁾。新しい息吹を感じつつ日本を発った茅原の目には、辛亥革命を実現に導いた支那人民の動静が映し出されていた。欧米列強の侵攻に曝され「西洋の貧を経験」するなかから「近世文明を吸収すべき素養」を身に付け、革命を実現した事実は、茅原に二つの示唆を与えた。一は戦勝に酔いしれ皮相的な西洋化を誇り武力中心の国家主義のもとで安易な支那蔑視に流れる日本人民への批判であり、一は日本人民の苛酷な「実生活」にこそ改革の糸口があるという確信であった。第二革命の失敗を受けてなお彼が「中華民国万歳」を唱えたのは、憲政擁護運動で政治的に覚醒し始めた日本人民を「大正維新」の政治的主体へ嚮導するための手掛かりを求めていたからであった。ここにおけるアジアへの眼差しは満韓放棄を唱える「小日本主義」の提唱や朝鮮青年読者の投書掲載などに結実していく。

帰国一番、茅原は論説「血で書く文」¹⁰⁹⁾を草し、視察旅行で痛感した日本の狭隘な国民性の変革を唱え、国家の根本的改革は「国民の新人生観が其原動力と為らねばならぬ」と主張した。明治の終焉に際し人民による主体的運動を要請した彼は、新時代に相応しい日本の姿を一つの言葉に託した。主客転倒の「国家主義」のもとで暗中模索する日本人民に対し、「維新までの第一帝国ではない、明治までの第二帝国ではない」、新しき大正時代に「我々が住むに堪ふる第三帝国」の実現を提唱したのである。¹¹⁰⁾「直往邁進、以て新しき世界に達し得られる、新しい第三帝国が建設し得らる、我々は今日切に重ねて益進の福音を提唱するの急を感ずる」。後はこれまで進めてきた新雑誌の創刊を待つだけであった。

「併し大正の御代になり、桂公とも別れ、実際の政治とは全く縁を切つて見れば、予の心頭にのぼり来るものは、第一修史の問題であつた」¹¹¹⁾。「大正二年の暮」、桂太郎の死去に伴い政界と絶縁状態となつた徳富蘇峰は、かねてより晩節を費やそうと考えていた「修史事業」に乗り出した。三国干渉の衝撃で「別人」となつて以来、特に桂との関係により政界と論壇を席卷してきた一大記者が「最後の仕事に著手すべき時期の到来を、痛切に感じ」て「文章報国の新たなる生活」に入つたことは、一つの時代の終焉を知らせるに十分であった。大正の開幕に際し、折しも期待する人民的運動が姿を現わしつつあるとき、新時代の扉を開けることこそ、茅原や石田ら益進会同人に托された任務にほかならなかつた。

三 創刊の趣旨と誌名の由来

大正二年（一九一三）十月十日、雑誌『第三帝国』は「主盟」茅原華山、「編輯主任」石田友治、「印刷人」野村善兵衛の名前で創刊された。創刊号の表紙【写真2】には、平福百穂の筆による一人の勇者が描かれていた¹²⁾。古代ギリシャ・ローマの時代を彷彿とさせる勇者が真っ直ぐに指さす方角には、今まさに地平線の彼方から日輪が昇らんとしている。日露戦後の苛酷な生活難のなかで、「生活上のルネサンス」を遂げた日本人が、新しい夜明けを迎えようとしている。まさしく大正の新時代を切り開くことを期した同誌の船出を象徴するかのようであった。その巻頭には、益進会同人による「志を述ぶ」が掲げられていた。



吾人は明に白す、吾人は『大日本主義』にあらず、吾人は実に『小日本主義』を把持するものなり、故に吾人は帝国主義に反対す、故に吾人は個性中心主義を主張す。吾人は武力を藉りて平面的に發展するを以て、国民を枯槁憔悴に導くものなりと知る、吾人は平面的に發展するの前に、先づ立体的に發展せざるべからず。

吾人は『小日本主義』なり、然れども『大日本人主義』なり、大なる日本人が自ら創造し建設したる大なる日本帝国にあらずんば、決して内容の充実を期する能はず。

日本は今や形骸に於ては頗る大なるが如しと雖も、其内容たる日本人は極めて小なり、源頼朝、足利尊氏、徳川家康を中心としたる第一の帝国は日本人をして極めて小ならしめたり、伊藤博文、山県有朋、桂太郎、寺内正毅を中心としたる明治の第二帝国は、益々日本人を小ならしむるを以て、其平面に發展したる帝国を維持するの妙方便と信じ、終に群山万水進みに路なきに至れり。

吾人は乃ち此に生の飛躍を試み、国家の旧組織を打破して、更に新なる第三帝国を創造せんと欲するものなり、第一第二の帝国は日本人の生命力を萎靡銷磨せしむるに於て一致せり、第三帝国は日本人の生命力が飛躍活動して、個性の価値と權威とを樹立扶植したる結果ならざるべからず、故に吾人は国家それ自らを始め国家の各機関を生活化せざるば止まざらんと欲す。（中略）吾人は發憤努力エキセルシヨア（益々進む）を唱へながら、満目の荊榛を排除して向上の一路に就かんのみ¹³⁾。

まず初めに益進会同人は「専ら人を画かんと欲す」と宣言している。人の「皮」のみならず「肉」を画くことで「骨」を断つことを目指したのである。しかも「独り超人の理想を画くにあらず、併せて劣人の実生活を画かん」とするのが同誌の姿勢であった。次にアジアの歴史のなかで、日本人がインド人や中国人に比べ、「肉の要求も猛烈ならず、靈の

煩悶も深刻ならず」に過ぎしてきた事実が指摘される。そこから現在の日本がどのような状態にあり、いかなる解決方法があるのかが示されていく。

開国以来、西欧追隨の近代化政策を進めてきた日本は、日露戦争の勝利で一等国の仲間入りを果たした。だが、領土的膨張を推進する国家政策とは裏腹に、日本人の「生命力」は、戦争や苛酷な生活難のなかで危機に瀕していた。第一帝国たる維新以前の封建制、第二帝国たる維新以後の明治官僚制とともに「日本人民の生命力を萎靡銷磨」してきた。ゆえに、益進会は「大日本主義」ではなく「小日本主義」を把持し、侵略的な「帝国主義に反対し「個性中心主義」を主張した。「平面的発展」ではなく「立体的発展」を、換言すれば、領土的拡大ではなく日本人の生活を充実させることを求めたのである。これまで「日本人を小ならし」めることで「帝国を維持するの妙方便」としてきた藩閥中心の第二帝国は「終に群山万水進みに路なき」「最大過渡時代」に至った。「国家の各機関を生活化」し、「日本人の生命力が飛躍活動」し「個性の価値と權威とを樹立扶植」する、立憲政体による「君民同治の新帝国」の創設こそ、益進会の掲げる「第三帝国」の理想であった。

「志を述ぶ」で理想を宣言した益進会同人は、続く「同志の心事」で各自の抱負を述べている。まず主盟の茅原は「昨年黒岩先生に従って東北に行った際秋田県で石田友治君と会った」ことから創刊の経緯を語り、友治に示した四つの注文を挙げている。¹⁴⁾「経費、即ち『第三帝国』生活費の内容を公示」すること、「断じて是を以て親戚や友人の救貧機関と為してはならぬ」こと、「無名新人の伎倆手腕を紹介する機関」とすること、社員・非社員の区別をせず、「自由競争主義を最も公平に応用し」「自ら来て『第三帝国』に努力せんとしなければ決して之を拒ま」ないことであった。同誌を「石田友治君を編輯主任としたる国民の公機関」と位置づけ、その成長は国民の自覚次第と主張したのである。

次に編輯主任の友治は「快くわれに働く仕事あれ、それを仕遂げて死なむと思ふ」と、『新公論』を辞し『第三帝国』を興すに至った理由を述べる。¹⁵⁾「眼を挙げて急転直下しつつある時代人心を見よ」「今や万民が自覚して起ち、君民同治の第三帝国を創造せねばならぬ一時ではないか」と主張し、茅原の「注文」に応え「一切の経営、一切の行動、一切の思想を、挙げて之を国民の眼前に暴露」すると、収支の公表を読者に約束した。

最後に、善兵衛・悟朗・正吾の三人は連名で筆を執っている。¹⁶⁾「吾人は現代に於ける不平不満の徒である、此不平不満は我国の現状と吾等の実生活の空虚から来てゐる」と吐露し、「現状を打破して新帝国を建設するあるのみ、吾々と一般国民の生活を改造して新理想を実現するにあるのみ」と決意を示している。だが、「権謀術数と虚飾虚礼と諛媚愛嬌を以て唯一の処世術」とする現代の社会で「愚直なる我等の態度」が果たして成功するかは疑問だが、その成否は「吾等自身に対する試金石」であると同時に、「我が国民に対する試金石」であると「信じて居る」と、読者に激励と援護とを強く要請したのである。

ユリアヌス「その帝国とは何だ？」

マクシムス「帝国には三つある。」

ユリアヌス「三つ？」

マクシムス「第一は、知識の木に建設されたその帝国。それから、十字架の木に建設されたその帝国――」

ユリアヌス「で、第三は？」

マクシムス「第三は、いとも神秘的な帝国だ、知識の木と十字架の木を一つにしてその上に建設されるべき帝国だ、と言うのも、この二つは憎み合って愛し合っている、それにその生命の源がそれぞれアダムの墓の下と、ゴルゴダにあるからだ。」

ユリアヌス「で、その帝国は誕生するのか―？」

マクシムス「間もなくな。わたしは幾度も計算した―」¹¹⁷⁾

『第三帝国』という誌名は、ノルウェーの作家イブセンが史劇『皇帝とガリラヤ人』で、「第一の帝国」＝霊の文明＝ヘブライズム、「第二の帝国」＝肉の文明＝ヘレニズムに続く、「霊肉一致」の理想の文明を示すのに用いた言葉に由来する。右は、神秘学者マクシムスが、主人公の王子ユリアヌスに対し、建設すべき「帝国」像を語る場面である。益進会同人は、青年読者に馴染みのある言葉を日本の歴史になぞらえ、日本人の結集に基づく新帝国の創造を期して誌名としたのである¹¹⁸⁾。その原案が『秋田魁新報』時代における友治の「第三王国」であったことは既に述べたが、それを茅原ら同人が日本の政治状況や国際情勢に照応し、「第三帝国」と改めたのであろう。さらに創刊の趣旨を広く伝えるため、「文芸上における第三帝国の思想」・「第三帝国の思想としての霊肉問題」に関し、島村抱月・高安月郊・片上伸・昇曙夢・福来友吉・金子筑水らの寄稿文を掲載している¹¹⁹⁾。

四 益進会同人の陣容と経営の変遷

雑誌『第三帝国』の編集を担う益進会同人は次のような構成であった。「主盟」茅原華山は、『萬朝報』に在籍したまま筆を執り、主に巻頭論説を担当し、同誌の言論の中心を形作った。石田友治は、当初「編輯主任」を務めたが、二二号（大正三年十月二十五日）をもって「主事」となり経営面を支えた。隈畔野村善兵衛は「思潮評論」を担当し、ベルグソンやジェームスなどの思想や哲学の紹介に努めるとともに、強烈な「自我論」を唱えた。松本悟朗は鋭い筆鋒で「社会評論」を展開し、岩野泡鳴や大杉栄らと激しい論争を繰り広げ、同誌の思想的位置を明らかにした。最後に、鈴木正吾は、丁未俱樂部の人脈を活用し政治家への談話筆記を行ないながら「政治評論」を担当し、普通選挙運動や減税運動などの実践運動を企画・実行していった。こうして益進会は、当初、五人で始まり、茅原と友治を両輪としながら、善兵衛・悟朗・正吾の三者がそれぞれ「思潮評論」・「社会評論」・「政治評論」を担当することで多分野に跨る陣容を形成し、幅広い誌面づくりを行なった。さらに号数を重ねる内に、同誌を支持する読者のなかから、編集・経営・事務を助けることを願い出、益進会同人に加わる青年たちが次々と現れていった¹²⁰⁾。

【表6】は、創刊号から五七号までの期間に益進会同人となった二一名を、「氏名」「生没年」「入会時の年齢」「出身地」「出身校」「入会までの経歴」「期間(号)」「担当」などの項目に分けて記したものである。没年や出身地・出身校が不明の者も少なくないが、確認できる限りでは、悟朗や正吾らの紹介による加入もあり、明治二十三年（一八九〇）前後に生まれた地方出身かつ私大出身の青年たちが多いことが一つの特徴である。以下、入会順に同人の動向と経歴を紹介し、会の構成を概観しておきたい。

最初に新規加入したのは小林亮平であった。二号の石田生「編輯だより」には、創刊号の予想以上の反響で、編集作業に追われる様子が伝えられるなかで、「離れ々々になつて

ゐた同志も、大抵発行所の近所に移つて来た、小林君が新に同志に加はつて、専ら経営方面に活動して呉れることになった¹²¹⁾と短い報告がなされている。小林の経歴はほぼ不明で、七号（大正三年三月十日）をもつて会を退き、向島の「大倉本店」という牛乳屋で働きながら、中等教育を受けた青年たちが就職難に苦しむルポルタージュ記事を寄せたり、新年会に「蜜柑一箱」を差し入れたり、同誌の活動に協力している¹²²⁾。さらに三四号では向島寺島村に「太陽堂書店」という本屋を開業し、これまで読者が益進会に申し込んでいた書籍の注文を引き受け、「読書界破天荒の革命！」と称し、新刊書を一割五分引で販売するほか、半額の特価書や古書を取り扱っている¹²³⁾。その後も、小林の太陽堂書店が「破天荒の革命」を続けることができたか定かではないが、創刊号で主盟の茅原が「来る者は拒まず」とした同会の姿勢が示されている一事例と言えよう。

次に益進会同人に大きな移動が見られるのは、一五号（大正三年七月十六日）前後のことである。これは創立時のメンバーで『第三帝国』の哲人¹²⁴⁾として「思潮評論」を担当してきた隈畔野村善兵衛が体調不良により益進会を退会せざるを得なくなったこと、また一〇号より加わっていた中川竹堂が帝国通信に入社が決まったことなどが重なり、人手が不足し、それに代わる有為の青年たちを受け容れたためである。一四号より入会した新谷義雄は茨城県古河出身、明治二十三年生まれの二十四歳で、当初は浅草郵便局電信事務員をしながら隔日勤務で経営を補佐していた¹²⁵⁾。その後、電信局を辞め、益進会の事務に専念し、編輯主任として「殆んど寧所に遑なかつた身」の石田友治を助けている¹²⁶⁾。

一五号から加わったのは小田政賀と前田福市の二人である。小田は、山口県出身、新谷と同じ明治二十三年生まれの二十四歳で、早稲田大学英文科を卒業したばかりであった。一五号の石田友治「益進会から」によれば、在学中より同誌の活動に参加しており、九号以来、編輯を担当してきた鈴木正吾が政治・外交方面にもっと自由に動きたいとの申し出を受けての「抜擢」であった。だが、小田が在学中より知遇を得ていた主盟の茅原が一一号掲載の「新第三帝国論」を付録とした大著『人間生活史』（大正三年十月刊行、弘学館書店）の執筆中だったため、その補佐に当ることとなり¹²⁷⁾、編集に本格的に参加できたのは、二一号からであった。それ以降は、病氣退会となった隈畔野村善兵衛に代わって思想・文芸評論を担当するなど、益進会の新戦力となっていく。

一方、前田は三重県南牟婁郡御舟村の出身、明治二十七年生まれの二十歳で、益進会同人中の最年少であった。政治を志して上京し、「無報酬でも関はぬ、『第三帝国』に働きたい¹²⁸⁾」と、基本金として五百円を持参して入会してきた。雑誌編集は未経験だったように、益進会の仕事を見習いとして学び、訪問記事を足で稼ぐことに従事した。これら若き同人を新たに迎え、友治は「小田君は二十四歳、新谷君も同年齢、前田君は当年僅かに二十歳、皆前途多望の元氣いゝ青年諸君である、我等は新たに此等の諸君を迎ひて、奮闘を続けることになった、実に百万の援軍を得た心である¹²⁹⁾」と述べている。そして、来たる一周年記念に「大飛躍を試みる積り」で、今からその方法を研究しているので、「読者諸君にも妙案があつたら教えて頂きたい」と呼びかけたのである。

【表6】益進会同人メンバー一覧(第一期『第三帝国』1～57号)

	氏名	号	生没年	齢	出身地	出身校	入会までの経歴	期間(号)	担当	備考
1	茅原 廉太郎	華山	1870～1952	43	東京府東京市牛込区田町南町	愛日小学校 →国民英学会(英語)	『万朝報』論説記者	1～57	主盟	
2	石田 友治	望天	1881～1942	32	秋田県秋田市土崎山町	秋田中学中退 →滝野川神学院(神学)	横手教会牧師 『秋田魁新報』『新公論』記者	1～99	編輯主任 →主事	
3	野村 善兵衛	隈畔	1884～1921	29	福島県伊達郡半田村	桑折町高等小学校 →早稲田・東洋大学聴講生(哲学)	『六合雑誌』寄稿者、氷屋経営	1～15	思潮評論	※体調不良により15号で益進会を退会する
4	松本 悟朗		1886～1946	27	福島県伊達郡桑折町	福島中学 →東洋大学(哲学)	曹洞宗・慈雲寺	1～57	社会評論	
5	鈴木 正吾		1890～1977	23	愛知県宝飯郡御津町	豊橋中学 →明治大学(政治学)	学生雄弁団体「丁未倶楽部」	1～57	政治評論 →編輯主任	
6	小林 亮平		?		?	?		2～7		※向島の「大倉本店(牛乳屋)」 ※34号「太陽堂書店」店主
7	中川 竹堂	竹堂	?		?	?		10～15		※15号にて『東京評論』兼輯＋ 帝国通信に入社
8	新谷 義雄		1890～?	24	茨城県古河	?	14～21浅草郵便局電信事務員 …隔日勤務／51～事務主任	14～57	経営→事務	※21号で電信局を辞して益進会 の事務に専念とある
9	小田 政賀		1890～?	24	山口県	早稲田大学(英文科)	学生	15～57	編輯	※16～20…華山『人間生活史』 の補佐／21号「交歓」より登場
10	前田 福市		1894～?	20	三重県南牟婁	?	※入社時に会に500円を寄附 退社時に300円返金	15～24	訪問記事	※24号で家事上の都合により退 社
11	赤塚 忠一		?		?	?		17～23	漫画	※「漫画半月史」「漫画旬報」 「漫画評論」を担当
12	土田 恭治		1892～?	22	秋田県平鹿郡館合村	横手中学 →第一高等学校を受験して失敗	『秋田毎日新聞』編輯員	17～24	訪問記事	※24号をもって国民新聞に入社
13	雑賀 博愛	鹿野	1890～1946	24	福岡県朝倉郡		福本日南主宰『九州日報』 『青年日本』『外交時報』	21～30	編輯事務	外国渡航の希望あり 大正5年に政教社に入社
14	中村 長次郎		?		?	?		28～57	広告担当	※28号(36頁)の新年の挨拶に 同人として名を列ねる
15	岡見 護郎		1894～1945	20	秋田県	早稲田大学中退	四谷医院の薬局生	30～57	事務補助	「丘美」「もりを」「もり郎」という筆 名で新刊紹介を担当
16	中村 八郎	孤月	1881～?	33	東京府東京市浅草	早稲田大学(英文科)	文筆生活…『早稲田文学』 『文章世界』	37～56	文芸評論	※伊藤野枝女史との論争
17	永川 俊美		1892～?	22	福岡県筑紫	福岡県立中学修猷館 →早稲田大学(政治経済学科)	学生	46～57	生活評論	大正5年に早稲田大学卒業 『朝日新聞』に入社
18	勢多 左武郎		1888～1981	27	福島県福島市	立教学院、東北学院中退 →正則英語学校	『河北新報』『やまと新聞』	50～57	海外思潮	内藤民治の月刊『中外』に入る 大正8年に国際通信社に入社
19	米津栄次郎		1873～?	42	?	?	教師、校長、師範学校	51～57	青年後援部長	麻布区桜田町62番地に居住
20	鈴木 悦	夕村	1886～1933	29	愛知県老津村	成城中学 →早稲田大学(英文科)	『萬朝報』在籍(明治43～大正3) 『早稲田文学』に作品を発表	57	文芸欄	大正6～7年『朝日新聞』 大正7年～ カナダへ渡る
21	広津 和郎		1891～1968	24	東京府牛込区矢来町	麻布中学 →早稲田大学(文学)	雑誌『奇蹟』を創刊(大正元年)	57	文芸欄	大正6年に『中央公論』に「神経 病時代」を発表し文壇進出

同人を増員していった益進会が編集の分担をほぼ揃えたのは、創刊一周年記念号かつ旬刊誌へと移行した二〇号（大正三年十月五日）を前後してのことであった。一七号より政治風刺の効いた「漫画評論」を担当する赤塚忠一¹³⁰⁾と友治と同郷で『秋田毎日新聞』記者を務めていた土田恭治が加わり¹³¹⁾、さらに二一号からは鹿野雜賀博愛が入会し、友治から「編輯主任」の仕事を引き継いでいる¹³²⁾。雜賀は、明治二十三年、旧黒田藩士の雜賀久五郎義敬の子として福岡県朝倉郡に生まれ¹³³⁾、同三十八年に福本日南主宰の『九州日報』に入社した。同四十三年、日南を追いかける形で上京し、『青年日本』や『外交時報』などを経て、益進会に入り、『第三帝国』の「編輯事務」を担った。二二号の巻末には、雜賀博愛の名で「編輯室にて」¹³⁴⁾が掲載され、編集作業の苦勞とともに、第一次世界大戦が日本に新しい国際的地位を与え、「若々しい『第三帝国』は真にこの戦後より出現する」と予告している。「この大變転運動を明治の老人にやつて貰ったとなつては現代青年の此上もない恥だ。宜しく青年の力を以て此の新時代を打開す可しだ」と、同人も『第三帝国』の最初の出陣者となるつもりで奮闘してゐるのだから読者諸君も此の殉難者の為に一肌抜いて貰ひたいのだ、『第三帝国』の曙は近けりだ」と呼びかけたのである。これによって友治は「主事」となり、同誌の活動全体を見渡す役割へ移行していく。

こうして益進会の陣容は、『第三帝国』の創刊から約一年の歳月をかけて確立された。主盟の茅原華山が「大局に関する評論」を巻頭に掲げ、鈴木正吾が「政治經濟外交に関する評論」を、松本悟朗が「社会及び哲学方面に関する評論」を、小田政賀が「文芸と思想方面に関する部分」をそれぞれ担当し、それを若き青年記者たちが訪問記事や編輯事務などを分担する形で補う態勢が整ったのである¹³⁵⁾。その後、三〇号（大正四年一月二十五日）の「編輯室から」において「帰省旅行中であつた雜賀氏は本月十日頃帰京したが、都合あつて鈴木氏代つて編輯することになった、雜賀氏は近き将来に於て外国渡航の希望があると云ふ」¹³⁶⁾と事実上の退会が知らされ、鈴木正吾が「編輯主任」に就くこととなった。他にも同人の出入りは見られるが、会としての態勢が確立されたためか、二八号より「広告」を担当した中村長次郎以降に入会した者たちの多くが、第一期『第三帝国』を通じて、つまり益進会が分裂する五七号まで在籍し続けている。

全二十一名を通観してみると、出身校としては、とくに早稲田が多いことがわかる。中退の岡見護郎まで含めると、創立メンバー五名を除く、一六名中六名になる。一五号より益進会に加わり、主要メンバーとなつた小田政賀などが同門の先輩・後輩を勧誘したことと考えられるが、茅原の著書『華山文章』（明治四十五年七月、有朋館）に「跋文」を寄せている早稲田大学の学長高田早苗の存在¹³⁷⁾と「丁未俱樂部」の一員として尾崎行雄とともに大隈重信の周辺にも出入りをしていた鈴木正吾の存在に目を向けるならば、「雄弁青年」とも「院外青年」とも言われる学生たちが輩出されていたことと無関係ではあるまい。

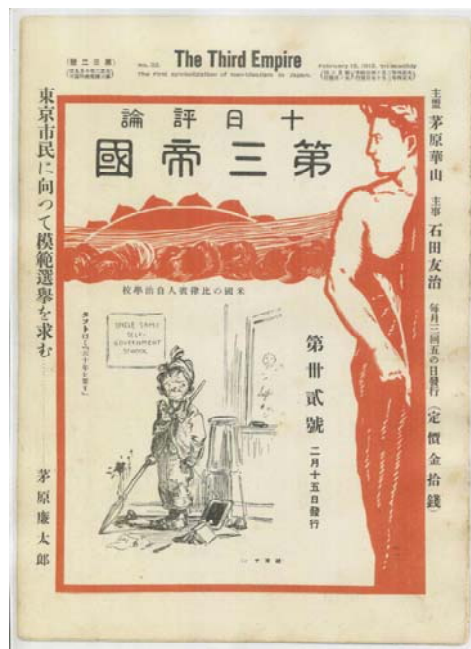
また、出身地としては、友治と同郷の秋田県出身者が二名加わっている。一人は一七号より加わつた土田恭治である。土田は主に訪問記事を書く仕事を務めたが、二四号をもつて『国民新聞』へと移っている。もう一人は、四谷医院の薬局生をしていた岡見護郎である¹³⁸⁾。彼は「事務補助」として入社したが、「丘美」「もり郎」という筆名で新刊紹介なども担当するようになる。ほかにも文芸評論家として「大正文壇の三奇人」に挙げられる孤月中村八郎¹³⁹⁾、早稲田在学中から参加し、後に『朝日新聞』中部本社編輯局長となる永川俊美¹⁴⁰⁾、松本悟朗の紹介で入会し「海外思潮」を担当、後に国際通信社に入る勢多左武郎¹⁴¹⁾、

『萬朝報』から移籍し、後にカナダに渡り田村俊子との「ロマンス」で世相を騒がす鈴木悦、作家広津柳浪を父に持ち文芸批評家・小説家として活躍していく広津和郎¹⁴³⁾など、個性的な面々が益進会に加わり、同誌の思想運動を盛り上げ、支えたのである。

編集の努力・熱意に応え『第三帝国』に協力したのが寄稿者である。主な人物としては、安部磯雄、浮田和民、三浦鍊太郎、犬養毅、尾崎行雄、永井柳太郎、田川大吉郎、島田三郎、植原悦二郎、大場茂馬、江木衷、岩野泡鳴、相馬御風、島村抱月、伊藤銀月、松崎天民、小川未明、山村暮鳥、平塚らいてう、岩野清子、鈴木文治、横田英夫などの名前を挙げるができる。また、当時「冬の時代」にあった堺利彦、大杉栄らの社会主義者にも誌面を提供している。同誌には、早稻田系、自由主義者、少壮政治家、ジャーナリスト、法曹人、自然主義文学者、社会評論家、文士、女流評論家、労働運動家、そして社会主義者など多分野にわたる言論人が集い、他誌と比べて自由闊達な議論が繰り広げられていた。¹⁴⁴⁾

経営に関しては、創刊当初、山縣悌三郎率いる内外出版協会に委任していた。¹⁴⁴⁾ 雑誌『第三帝国』の保証金千円は華山が負担し、創業・編集費は華山・石田・野村の三人が共同出資し、紙代・印刷費・広告代については内外出版協会が立て替えた。発売所は「巢鴨町上駒込一九番地」の内外出版協会、発行所は「牛込区砂土原町三丁目八番地」の益進会、「発行兼編集人」は石田友治、「印刷人」は野村善兵衛であった。だが、内外出版協会による経営が困難となったため、大正三年四月一日発行の八号をもって経営が益進会に移る。以降、石田が経営に専念し、代わって鈴木正吾が編集を担当した。経営は、購読料の前金制度や地方支部の結成などに伴い発行部数が伸びて軌道に乗り、月刊から半月刊、さらに旬刊へと発行回数を増加させていく。

【写真3】『第三帝国』32号表紙



装丁を見ると、同誌は【写真3】のように二色刷り、全二四頁の月刊誌として出発した。『中央公論』や『太陽』など同時代の総合雑誌に比べると頁数は少なく、一回り大きい判の「パンフレット形の雑誌」で、定価一〇銭と安価であった。¹⁴⁵⁾ 加えて販売形態が主に地方青年読者層を対象とする前金制度の定期購読に拠っていたことなどを考えると、同誌は携帯可能な冊子として地方青年読者たちの間で回覧される、プロパガンダ的な要素を持つ雑誌だったと推察される。

『第三帝国』の主たる対象は、青年読者層であった。創刊に際し茅原は、同誌を「無名新人の伎倆手腕を紹介する機関」と語り、読者に意見を公表する場を提供した。¹⁴⁶⁾ さらに同誌を「国民の公機関」と銘打ち、『第三帝国』生活費の内容を公示¹⁴⁷⁾ することを約束した。【表7】に示した通り、『第三帝国』収支決算¹⁴⁷⁾ から計算した同誌の発行部数は初期三〇〇〇部、中期以降六〇〇〇部前後であったと推定される。同時代の総合雑誌に比べ、決して多い数字とは言えないが、同誌に掲載された青年読者の投書に目を向けると、共通した思潮のもとで容易に看過できない内容が込められていたのである。

【表7】『第三帝国』の発行年月日・定価・発行部数																			
号	発行年	月	日	発行	頁	判 cm	定価 (銭)	部数	備考	号	発行年	月	日	発行	頁	判 cm	定価 (銭)	部数	備考
1	大正2	10	10	月刊	24	38	10	2240	創刊号	31	大正4	2	5	旬刊	32	31	10	6630	
2	大正2	11	10	月刊	24	38	10	2190		32	大正4	2	15	旬刊	32	31	10	13000	「模範選挙」宣言
3	大正2	12	10	月刊	24	38	10	1720	思園の開始、第1回講演会	33	大正4	2	25	旬刊	32	31	10	6630	
4	大正3	1	10	月刊	24	38	10	()	「新年号」	34	大正4	3	5	旬刊	32	31	10	7560	
5	大正3	2	1	臨時	24	38	10	()	臨時増刊「大減税号」	35	大正4	3	20	旬刊	64	31	20	7560	模範選挙号
6	大正3	3	10	月刊	24	38	10	()		36	大正4	4	5	旬刊	32	31	10	6140	模範落選、神田区表神保町へ移転
7	大正3	3	10	月刊	24	38	10	()		37	大正4	4	15	旬刊	32	31	10	6140	華山「日本の政治原理」
8	大正3	4	1	半月刊	24	38	10	2930	※経営主体を益進会に移す	38	大正4	4	25	旬刊	32	31	10	6140	華山「徳治国か法治国か」
9	大正3	4	16	半月刊	24	38	10	2960	「戦闘曲」開始	39	大正4	5	5	旬刊	32	31	10	5070	本誌読者大会の開催予告
10	大正3	5	1	半月刊	24	38	10	2960		40	大正4	5	15	旬刊	32	31	10	5070	「第三帝国活版所」→ポイント活字
11	大正3	5	16	半月刊	24	38	10	3000		41	大正4	5	25	旬刊	32	31	10	5070	
12	大正3	6	1	半月刊	24	38	10	3600	益進会支部の設置に就て 「読者より同人へ」(交歓)開始	42	大正4	6	5	旬刊	32	31	10	5750	華山「新貴族政治と青年」 「代議政治無用」
外	大正3	6	2	臨時	4	38			臨時牛込区号	43	大正4	6	15	旬刊	32	31	10	5750	華山「欧州より解放せよ」 石田「民本政治と天才政治」
13	大正3	6	16	半月刊	24	38	10	3600	「支部たより」開始										
14	大正3	7	1	半月刊	24	38	10	2850		44	大正4	6	25	旬刊	32	31	10	5750	学生及び青年後援部設置に就いて
15	大正3	7	16	半月刊	24	38	10	2850	鈴木「罰金一金参拾円也(上)」	45	大正4	7	5	旬刊	32	31	10	4560	
16	大正3	8	1	半月刊	24	38	10	2860	鈴木「罰金一金参拾円也(下)」	46	大正4	7	15	旬刊	32	31	10	4560	
17	大正3	8	16	半月刊	24	38	10	2860	発売禁止処分	47	大正4	7	25	旬刊	32	31	10	4560	
18	大正3	9	1	半月刊	24	38	10	3050	石田「本誌前号発売禁止の理由」	48	大正4	8	5	旬刊	32	31	10	5100	東北講演旅行
19	大正3	9	16	半月刊	24	38	10	3050		49	大正4	8	15	旬刊	64	31	20	5100	新日本創造号
20	大正3	10	5	旬刊	64	31	25	3560	一周年記念徹底号 普く天下の同志に檄す(普選請願)	50	大正4	9	1	旬刊	32	31	10	6110	青年後援部の開始
21	大正3	10	15	旬刊	28	31	8	3560		51	大正4	9	11	旬刊	40	31	10	6110	臨時拡大号
22	大正3	10	25	旬刊	28	31	8	3560		52	大正4	9	21	旬刊	32	31	10	6110	
23	大正3	11	5	旬刊	28	31	8	3300	同人号	53	大正4	10	1	旬刊	32	31	10	5880	
24	大正3	11	15	旬刊	28	31	8	3300		54	大正4	10	11	旬刊	32	31	10	5880	
25	大正3	11	25	旬刊	28	31	8	3300		55	大正4	10	21	旬刊	32	31	10	5880	
10	大正3	12	5	旬刊	28	31	8	6630	黒岩先生に対する我れ	56	大正4	11	1	旬刊	32	31	10	()	
27	大正3	12	15	旬刊	28	31	8	6630		57	大正4	11	11	旬刊	64	31	20	()	御即位大典記念号
28	大正4	1	5	旬刊	64	31	20	5590	新年革新号 読者に敬告す(増頁+値上げ)	外	大正4	11	29	臨時	20	31	8	()	茅原華山絶縁頼末 ※書籍として出版
29	大正4	1	15	旬刊	32	31	10	5590	三題目につき寄書を求む (生活樹立、農民保護、選挙実態)										
30	大正4	1	25	旬刊	32	31	10	5590	本誌の勧誘に就て										

第三節 地方青年読者たちの「益進」―「投書」「交歓」「通信」―

一 投書欄「戦闘曲」の活況

雑誌『第三帝国』は「新人の戦の唯一機関」と銘打ち、青年読者に広く門戸を開放した。投書欄の設置により青年の声を掲載し、経営費の公示により一体感を作り出した。果して、同誌の創刊は、都鄙を問わず、当時の青年層に反響を呼び、益進会同人の予想を上回るほどの盛況をもって迎えられた¹⁴⁸⁾。第二号には、早くも次のような声が読者から届いている¹⁴⁹⁾。

第三帝国、此語が最も適切に現在の私の胸に響きます。堅く自ら持して、暗黒でないまでも疑い多い過程に立ちて兎も角も迷わずに歩を運ばんと覚悟する。それが現在の我です。漫りに求むる勿れその警告を聞くまでもなく日々の務―正しい生活手段―に最善の力を用いる吾等、否万民一様に誠実に天職に尽すべきだ。いや他人は怎うでもよい、自分の事だ―時にそれは死んでるのではないかとも思われるが、力が籠っている。

なぜ「第三帝国」という言葉は山田玉一（静岡）の胸に「最も適切に」響いたのか。本節では、投書欄を中心に取り上げ、同誌に集結した読者たちの意見を分析することで、支持獲得の理由を説明していく。それは同時に、前章で考察した茅原の「益進主義」が雑誌『第三帝国』の活動を通じて読者たちにどのように受容されていくかを検討する試みであり、当該期における青年層の思想傾向を従来の枠組みに捉われずに示すものである。

『第三帝国』における読者の結集化は、支部設置や普選運動など益進会の企画により進んでいくが、青年読者突き動かす原動力は全国から届く彼ら自身の投書にこそ存在していた。なかでも読者の声を伝える投書欄が、一号「地方生活」・三号「同志の叫び」・五号「同志の言論」と名称を変えながら、全二四頁の内一―二頁を割く形で設けられていた。題名は、経営主体が益進会へ移った九号以降、「戦闘曲」に定着するが、その内容は読者の「実名」を「居住地」とともに掲載し、彼らの政治や教育、社会などに対する意見をありのまま発表するという手法であった。さらに「交歓より」や「支部たより」は、読者の様子を知る上で重要な情報源である。それらを内容に応じて区分すると次のようになる。

①投書(三二一点)：「地方生活」「同志の叫び」「同志の言論」「戦闘曲」

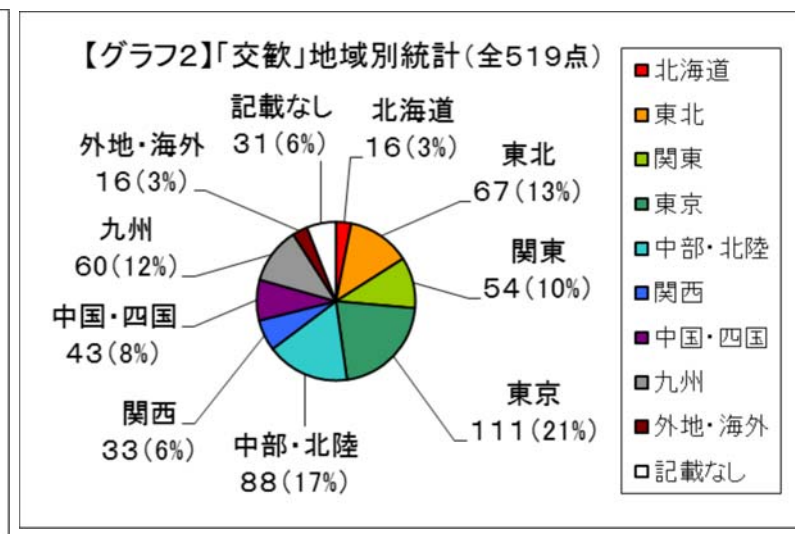
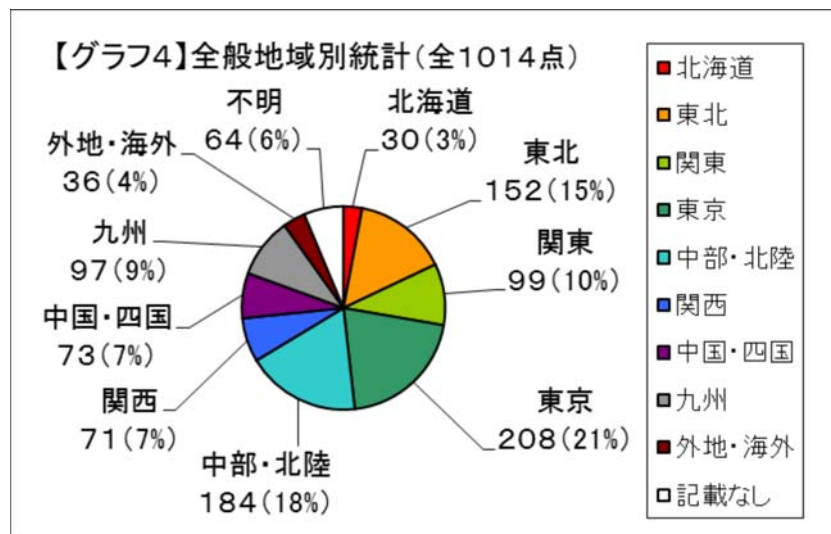
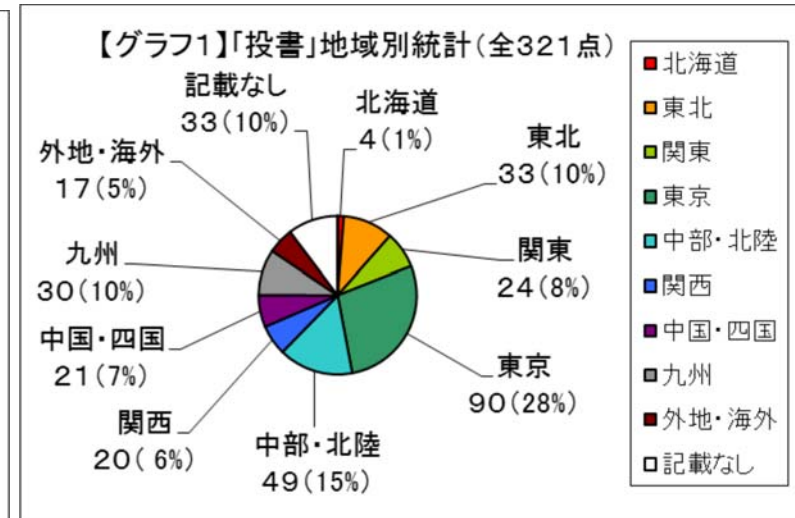
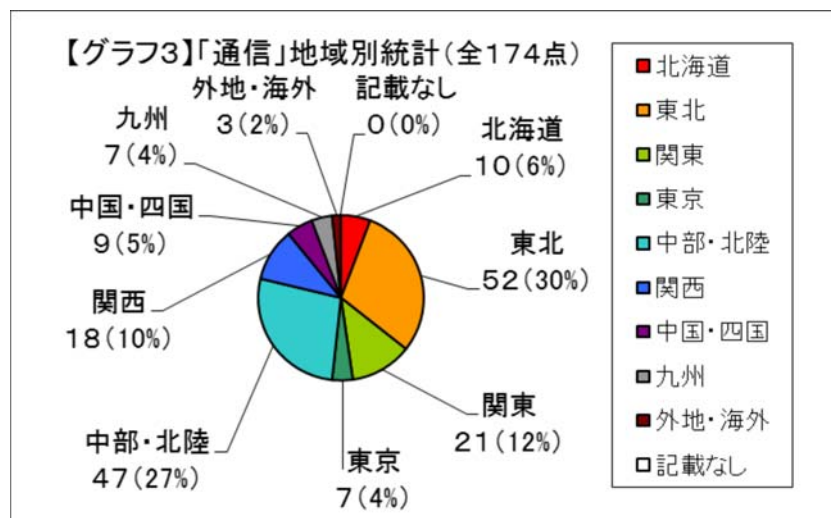
②交歓(五一九点)：「同情と激励」「同情録」「同志短信」「読者より同人へ」

「交歓」「読者短信」

③通信(二七四点)：「青年会便り」「益進会支部だより」「支部たより」

次頁に掲げる【図1】のグラフ1～3は、右の①～③を地域別に統計し、合計(点)および割合(%)を示したものである。まずグラフ1・2を見ると、ともに合計が「東京」「中部・北陸」「東北」「九州」の順番となっている。なかでも「東京」が群を抜いているのは、『第三帝国』という雑誌メディアの存在を知り投稿することができる社会階層の多くが帝都に在住していたことを物語っている。彼らの内、進学や就職で地方から上京してきた青年読者も相当数存在しており、それぞれ帰郷の際に同誌の存在を地域の知人・友人に伝える役割を担っていたことが誌面から窺い知れる¹⁵⁰⁾。対してグラフ3は全一七四点中、「東北(五二点)」と「中部・北陸(四七点)」の割合が高く、「東京」は七点に止まっている。これは、欄の性質上、益進会支部の設置数に比例しているためで、全国三十三ヶ所の内、「東北」六、「中部・北陸」一三と、過半数を越えていた。

【図1】 グラフ1「投書」・「交歓」・「通信」・全般地域別統計



以上の三項目をすべて集計したのが**グラフ4**である。全体を通して「東京」「中部・北陸」「東北」の割合が高いことが見て取れる。また、それ以外の「関東」「九州」「中国・四国」「関西」の地域からも満遍なく投書が寄せられていたことがわかった。

次に各地域内での府県別の数値はどうだったのか。次頁の【表8】をご覧ください。この表は読者欄を種類別に分類・集計し、出身地を府県別に示したものである。地域ごとの割合に比べ、府県別で群を抜いているのは「秋田」である。これは「編輯主任」石田と出身校の聖学院神学校の存在が大きい。「秋田」については、支部設置を事例に次章で詳述したい。続いて目を惹くのは、「長野」「山梨」「静岡」「愛知」「新潟」など中部・北陸地方の各県に高い支持を得ていることである。これは「主盟」茅原の『長野新聞』主筆時代以来の支持層、または鈴木正吾の出身地との関係が考えられる。そのほか、関東であれば「神奈川」、関西であれば「京都」、中国・四国であれば「山口」、九州であれば「福岡」と、各地域で政治や文化の「窓口」的な役割を果たしていた中小の地方都市に愛読者が存在していたことも窺い知れる。その数値から読者による「投書」「交歓」「通信」が、全体を通して「東北」や「中部・北陸」、とくに「秋田」「長野」などの支持を集めているという一定の地域性や傾向を帯びながら、北は「北海道」から南は「沖縄」まで、さらに朝鮮や台湾などの外地を含め、当時の帝国日本の版図ほぼ全域から届けられていたこと、加えてシアトルや漢口などの海外からの便りも寄せられていたことが確認できる。

では、読者たちの声はいかなる内容であったのか。投書欄「戦闘曲」に焦点を絞り、五七号までの全投書を集計し、読者が特に関心を抱いていた話題を抽出し、全体の傾向を明らかにしたい。これまで同誌における読者の声を取り上げる場合、「大正デモクラシー」の枠組みに適当な投書のみが評価され、枠外の投書は「旧思想や旧道徳をふりまわすもの」と斥けられてきた¹⁵⁾。だが、同誌が益進会の編集を経て刊行された雑誌メディアであることを想起すれば、投書も雑誌を構成する重要な部分であり、その選出自体に益進会側の編集意図が込められていたと考えるのが妥当である。そこで、青年たちの声を可能な限りすくい上げ、益進会が提示しようとしていた時代の姿を総体として考察する必要がある。

「戦闘曲」に寄せられた投書は計二二四点である。これに「戦闘曲」以前の「青年の叫び」五点、「地方生活の改善」九点、「地方生活」一六点、「同志の叫び」一六点、「朝鮮青年の心事」二点、「同志の言論」一〇点、無題二〇点を加え、さらに二九号（大正四年一月十五日）で「三題目につき寄書を求む」と公募された投書一九点を加算した計三二一点を分析対象とした。総計を五七号で平均すると毎号五・六本の投書が寄せられていた計算になるが、これらを「1. 政治」「2. 経済・産業」「3. 外交」「4. 社会」「5. 学術・教育・思想」「6. 文芸・芸術」「7. 生活」「8. 軍事」「9. その他」の九項目に分類し、特徴や傾向を分析した。ただし、投書の内容は、必ずしも一項目にのみ該当するとは限らないので、その場合は複数の項目にわたって数えることとした。

【表9】は分類結果を示したもので、複数項目にわたるものを合わせて三五〇点となった。「5. 学術・教育・思想」に関する投書九一点を筆頭に、「7. 生活」七二点、「1. 政治」七〇点と続き、以下「4. 社会」三九点、「2. 経済・産業」二四点、「3. 外交」二四点、「8. 軍事」一六点、「9. その他」一〇点、「6. 文芸・芸術」四点となる。とりわけ「6」に関する投書が少ないのは、同誌の性格が読者からの小説や詩の投稿に支えられる文芸雑誌と異なり、教育・思想や政治・社会の傾向が強かったことを示している。

【表8】「投書」「交歓」「通信」地方・都道府県別一覧

投書	道府県	件数	交歓	道府県	件数	通信	道府県	件数	合計	道府県	件数	投書	道府県	件数	交歓	道府県	件数	通信	道府県	件数	合計	道府県	件数
北海道 4	北海道	4	北海道 16	北海道	16	北海道 10	北海道	10	北海道 30	北海道	30	関西 20	三重	1	関西 33	三重	3	関西 18	三重	0	関西 71	三重	4
													滋賀	0		滋賀	1		滋賀	0		滋賀	1
東北 33	青森	5	東北 67	青森	5	東北 52	青森	4	東北 152	青森	14		京都	10		京都	7		京都	14		京都	31
	岩手	2		岩手	0		岩手	0		岩手	2		大阪	5		大阪	11		大阪	2		大阪	18
	宮城	0		宮城	8		宮城	1		宮城	9		兵庫	2		兵庫	8		兵庫	2		兵庫	12
	秋田	14		秋田	44		秋田	37		秋田	95		奈良	0		奈良	2		奈良	0		奈良	2
	山形	3		山形	4		山形	9		山形	16		和歌山	2		和歌山	1		和歌山	0		和歌山	3
	福島	9		福島	6		福島	1		福島	16	中国 20	鳥取	1	中国 30	鳥取	3	中国 8	鳥取	2	中国 58	鳥取	6
関東 24	茨城	4	関東 54	茨城	13	関東 21	茨城	4	関東 99	茨城	21		島根	0		島根	4		島根	1		島根	5
	栃木	0		栃木	4		栃木	1		栃木	5		岡山	7		岡山	8		岡山	4		岡山	19
	群馬	2		群馬	4		群馬	4		群馬	10		広島	1		広島	3		広島	0		広島	4
	埼玉	0		埼玉	7		埼玉	4		埼玉	11		山口	11		山口	12		山口	1		山口	24
	千葉	8		千葉	5		千葉	4		千葉	17		徳島	0	四国 13	徳島	4	四国 1	徳島	0	四国 15	徳島	4
東京 90	神奈川	10		神奈川	21		神奈川	4		神奈川	35	四国 1	香川	0		香川	0		香川	0		香川	0
													愛媛	1		愛媛	9		愛媛	1		愛媛	11
													高知	0		高知	0		高知	0		高知	0
中部 49	新潟	7	中部 88	新潟	11	中部 47	新潟	7	中部 184	新潟	25	九州 30	福岡	12	九州 60	福岡	17	九州 7	福岡	1	九州 97	福岡	30
	富山	0		富山	1		富山	9		富山	10		佐賀	2		佐賀	4		佐賀	0		佐賀	6
	石川	0		石川	1		石川	0		石川	1		長崎	3		長崎	7		長崎	0		長崎	10
	福井	0		福井	3		福井	0		福井	3		熊本	3		熊本	15		熊本	4		熊本	22
	山梨	11		山梨	11		山梨	13		山梨	35		大分	4		大分	3		大分	1		大分	8
	長野	16		長野	24		長野	2		長野	42		宮崎	4		宮崎	6		宮崎	0		宮崎	10
	岐阜	1		岐阜	3		岐阜	2		岐阜	6		鹿児島	0		鹿児島	4		鹿児島	1		鹿児島	5
	静岡	8		静岡	21		静岡	3		静岡	32		沖縄	0		沖縄	3		沖縄	0		沖縄	3
	愛知	6		愛知	13		愛知	11		愛知	30		九州	2		九州	1		九州	0		九州	3
外地 10	朝鮮	8	外地 10	朝鮮	9	外地 1	朝鮮	1	外地 21	朝鮮	18	外国 7	米国	4	外国 6	米国	3	外国 2	米国	2	外国 15	米国	9
	台湾	2		台湾	1		台湾	0		台湾	3		中国	3		中国	3		中国	0		中国	6
記載なし		33	記載なし		31	記載なし		0	記載なし		64	総計321			総計519			総計174			総計1014		

上位三項目を取り上げ、特に読者の話題が集中していたものを挙げると、まず「5」では、学校教育・教育制度への批判および教員の現状と養成に関する意見が三二点と最も多かった。続いて「自我」をめぐる意見が二七点、また同誌の主張に呼応し「霊肉一致」「益進主義」を唱える者も複数見られた。次に「7」では、性・結婚・家族をめぐる議論が二〇点と頻出するとともに、地方社会の改善を訴える声が一六点と多く、具体例として青年団・青年会が取り上げられていた。最後に

「1」では、政治の現状、特に官僚政治を批判する声が二二点と多かった。と同時に、自らの政治的権利を求め、選挙権拡張・普通選挙の実施を求める声も二四点と多かった。一方で、選挙権を無条件で認めることへの違和感を表明する意見もあり、国民の政治的自覚を促す声も一六点と少なくなかった。

また、内容ごとで点数が多いのは「4. 社会」の「日本人論」一七点と「労働運動・農民運動」に関する意見一三点であった。前者は一等国たる日本が、国内外で改善・成長すべき点が指摘されている。国内では、国民が政治的自覚を持って自主・自立的存在となることが主張され、それに反して「奴隷根性」が抜けない国民性が批判される¹⁵²⁾。国外では、日本人が偏狭さゆえに海外生活に馴染めず世界各地で排斥されている現状を嘆き、要因を日本人自らの姿勢やあり方に見出して反省や改善を促している¹⁵³⁾。

後者は、「生活難」に苦しむ読者の生活実態が労働環境の改善を求める声となったものと言える。そうした悲痛な叫びを受け止める形で、同誌は二九号で「如何にして生活を樹立せしか」「如何にして農業農民を保護すべき乎」「如何にして選挙が行はれつゝある乎」という三題目につき投書を募っている。応募された投書の内から計一九点が選ばれ、「戦闘曲」とは別に見開き四頁を割いて掲載され、掲載順に原稿料が贈呈された¹⁵⁴⁾。

以上、投書欄「戦闘曲」を取り上げ、読者から届いた声の傾向や特徴を主に分類・集計した数値から確認してきたが、次に読者たちの実際の声に耳を傾け、彼らがいかなる内容の意見を同誌に届けていたのか、できる限り個別具体的に明らかにしていきたい。

【表9】投書欄「戦闘曲」の分類

5. 学術教育思想	91	学校、教員、教育制度	32	3. 外交	24	第一次世界大戦	6
		自我論、自我と社会	27			日本の朝鮮統治	6
		宗教、道徳	13			日本外交への批判	5
		霊肉一致、益進主義	10			対中国問題	4
		思想・言論の自由	8			排日問題と日本人	2
		その他	1			その他	1
		計	91			計	24
7. 生活	72	結婚・性・家庭・家族	20	2. 経済産業	24	農民の現状と保護策	10
		地方社会の改善	16			減税、税制整理	7
		胃の腑の問題	12			生活難、パンの要求	5
		職歴＝生活史	11			中央と地方の格差	2
		青年団・青年会	7			計	24
		自尊の精神、真の生活	6				
		計	72				
1. 政治	70	選挙権拡張、普通選挙	24	8. 軍事	16	兵役忌避、在郷軍人会 廃兵・傷痍軍人	8
		閥族打破、官僚政治批判	22			国防問題、増師問題	5
		国民の政治的自覚を促す	16			第一次世界大戦	2
		大隈内閣への批判と期待	8			その他	1
		計	70			計	16
4. 社会	39	日本人論	17	6. 文芸芸術	4	文芸	3
		労働運動・農民運動	13			芸術	1
		新聞・輿論の形成	6			計	4
		娼娼論	1	9. その他	10	『第三帝国』への応援	6
		その他	2			孤独の悲哀、青年の叫び	4
		計	39			計	10
		総計					

二 青年読者の「聲」

先生私達は行詰りました、否総ての覚めたる田舎の青年は行詰らざるを得ないので、服従道徳、没我道徳によつて仕上げられたる天保の模範国民、「ゴンベ」られやうが「ハラケ」られ様が決して小言を云はない（云ふことを知らない）人々の充満して居る地方で新しい時代の覚めたる青年が生活して行くのは実に苦痛です¹⁵⁵⁾

三河の有我生に筆を取らせたのは、茅原の「人は語らんがために書かんがために生れたものでなくして何んだ¹⁵⁶⁾」という問いかけであつた。だが、「地方の模範青年」は日露戦後の「服従道徳」を押し付けられ、海軍薩派の山本権兵衛と原敬率いる政友会の新たな「情意投合」のもとで「ゴンベ」られ「ハラケ」られても、「何の考へも無くだまつて労働に盲従」し、語ることも書くことも許されない「苦痛」を味わっていた。彼は「第一の帝国が遺したる不都合なる家族制度の為に」、自己を捨て「周囲化」せざるを得ない境遇を「地方の醒めてる青年総ての悶」として訴え、「取るべき道」の指示を仰いだのである¹⁵⁷⁾。

このとき青年たちの眼前に立ちはだかつていたのは「制度」や「社会」であつた。「あらゆる方面に向つて衝突せよ、汝の力を、確実に社会に示さんとするならば、決して衝突を避けてはならない¹⁵⁸⁾」という言葉には、打破すべき現状として彼らの存在や生活を拘束していた家族制度や学校教育、在郷軍人会や青年団の活動が見据えられていたのである。

一七号の花城生は「家族制度を屠れ¹⁵⁹⁾」を掲げ、「日本の家族制度を全然破壊せぬうちは駄目だ」と訴えた。「形骸ばかりの家族制度」を過去の遺物と斥け、「第三帝国の家族制度を作らねばならぬ」「汝の呻吟せねばならぬ原因を焼尽せよ」と痛言している。彼の過激な主張は、同誌を発禁処分¹⁶⁰⁾に追い込むほどであつた。五五号の冲野微光（青森）も、家族制度を「青年にパンの問題を以て迫り父母兄弟の為にはその若き志望も憧憬も総て犠牲にせよと求むる」ものと非難している¹⁶⁰⁾。青年たちの才能を発揮するには、現実との妥協を強いるのではなく、彼らに「パン」と「智識の泉」を与えなければならぬ。さもないければ「幾多の青年は空しく精神的死のどん底に葬られ¹⁶¹⁾」ると警告したのである。

家族制度と関わつて読者たちが衝突したのは恋愛問題であつた。一四号の矢山ハルム（福岡）は「真の純潔さ¹⁶¹⁾」とは何かという問題を提起し、読者たちの間に賛否両論を喚起した。また、後藤賢吉（茨城）は「性欲苦」と題する投書を寄せ、「私は手淫の実行者なることを正直に告白したい¹⁶²⁾」と述べている。「消極的の殺人的の禁欲に苦心するよりも」「寧ろ、手淫の身心上の害毒を最少ならしめ、其の快感を倍加する方法を研究するが緊要ぢやないか」という赤裸々な叫びは、同世代の青年たちが共有する「懊悩」であつた。

これらの問題と同様に、彼らの生活で大きな比重を占めていたのが学校教育であつた。教育界に籍を置く林源一（山口）は「今の教育は形式的、人生を捕へて無理矢理にマツチ箱に詰込む様な教育」であると、実状を暴露する¹⁶³⁾。「当局の『御機嫌』を取る事に没頭して居る」教育界を「御用教育」と批判し、「第三帝国式の教育を発揮する使命を帯びて居るのは我々であるまいか」と、現場の教員たちへ訴えかけている。さらに文蔭生（山梨）は、右のような教育界の現状を打破するために、「教育行政を刷新し」「教育制度を破壊し¹⁶⁴⁾」、「そして教育実家の人生觀の根本的革命」をなすことを求めている¹⁶⁴⁾。

学校教育とともに、全国の青年が共有する体験として兵役に伴う軍隊生活が挙げられる。

「自分も軍籍に拘束されてゐる」という下川清嘯（北海道）は、在郷軍人会に漲る「一種の強圧的専制的気分」を忌嫌する¹⁶⁵。毎年の簡閲点呼が「青年の自由と権利とを拘束蹂躪」する場と化していることを指摘し、「奴隷視され玩弄的扱ひ」にされる軍隊生活を嘆き、「吾等は第三帝国創設の爲め否地方発展の爲め先づ有害菌たる在郷軍人道徳から打破せねばならぬ」と主張したのである。また、白井公郎（小石川）は、「徴兵忌避の悪風潮¹⁶⁶」が全国の青年に広がっていると断言し、その原因を「国家共同観念の墮落」と「国民生活難の圧迫」に見出している。彼らが「軍隊生活の惨酷」や「実戦の悲惨」を予想・見聞するなかで、「文士の享楽主義に心酔」し「花柳病」によつて徴兵を忌避するか、「生活難」ゆえに将校を「生活手段」として志望するか、いずれかであることを指摘したのである。

全国の青年読者からの反響は、同誌の言論活動に対する期待と彼らの意見を積極的に掲載する益進会の編集手腕によるものであったが、その背景には、日露戦後に全国各地で結成された青年団・青年会の存在があった¹⁶⁷。二号の「青年会便り」に届いた対照的な事例を見ていこう。熊本の永松生は、県下に五百以上の青年団体があることを報告し、なかでも優良な青年団として「横島村の自彊団」を紹介している。「県下に冠たりと称せらるゝだけあつて万事秩序整然、幹部の命令は軍隊に於ける上官の命令の如く遵奉している。だが、実態は「会長が陸軍の予備将校なるが故、自然万事軍隊式になつて了つた」に過ぎず、「諸君よコレが熊本県第一の模範青年団である」と自嘲気味に述べている。

一方、京都の岳風生は、丹後縮緬の本場峰山で、「強大なる資本を擁する近江商人」の進出を食い止めようと起ち上がった地域青年たちの奮闘ぶりを報告している。彼らは、地元特産品の存亡をめぐり、県外資本の「蚕食」を防ぐため、「国産の擁護を絶叫」して「峰山実業青年団」を結成した。同青年団は「実業実生活」こそ「団員の生命」であると説き、第一次護憲運動でも茅原華山をはじめ、「罌堂」尾崎行雄や「木堂」犬養毅を招き、運動の一端を担いつつ、同じ志を持つ青年団との地域を越えた連携を求めていたのである。

さらに二〇号の島田清一（千葉）「青年会改革」と四二号の吉田芳舟（舞鶴）「青年会打破」を比較検討したい。¹⁶⁹島田の痛嘆する青年会が「昔前の『若衆と称えて居つた団体』から脱しきれず『野獣に等しい生を送つて居る』のに対し、吉田が非難する青年会は日露戦後の「二宮宗の跋扈」に伴い組織された「他動的で、旧思想保有の象徴物」であった。ともに改善を訴えながら両者の描く青年会像が異なるのは、彼らの生活に「第一帝国」たる封建制以来の「旧慣」と、「第二帝国」たる明治官僚政治が作り出した「伝統」による二重の支配が伏在していたためであった。日露戦後に自生した青年会や報徳運動が、内務官僚主導による地方改良運動に吸収され、再組織化されていく事実を考えると、右のような意見が同時に寄せられていた時代背景が見えてくる。「戦闘曲」は、青年読者が二重支配への違和感を表明する場にほかならず、そこから「自我」の実現が求められていく。

静岡の魔弓生は「我等の生命が飛躍活動して個性の価値と権威とを生活の上に樹立し、猛烈なる肉の要求、深刻なる霊の煩悶の流れに自我の旗章を鮮明豊麗にせん¹⁷⁰」と主張した。さらに「生活を根底とする帝国を創造し、生活のうめきから生れた政府の建設には盲従盲動の織り込まれたる二千有五百年の歴史を破壊し¹⁷¹」なければならぬと訴えている。

トルストイが嘘つきの名人ならニイチェはだだっこきの名人だ。自我に死んで社会に生きる。社会に死して自我に生きる。その何れも忌だ。社会に生きるもよいとして其

自我に死することは堪え得らるゝものでない。両方に生きたい。さうしてこの自我と社会との調和を計りたい。余が第三帝国の読者たるの意、唯これに外ならぬ¹⁷²⁾。

読者たちはそれぞれの生活の場で「霊」と「肉」、「自我」と「社会」の間で悶々合っていた。右の相馬現堂（越後）は、そうした葛藤を率直に「両方に生きたい」と吐露している。「余が第三帝国の読者たるの意、唯これに外ならぬ」という言葉にある通り、「自我と社会との調和」こそ、読者が同誌に求めていた課題であった。ここには、さまざまな価値や欲求の矛盾を相互補完的に調和する「益進主義」の思考様式が顕現していた。益進会は、読者からの要望に応え、議論と運動を積極的に展開することで、誌上において「調和」を体現しようとしていた。「自我」を「実生活」の場で拡充し、そこから「人間本位の立憲政治」を実現し、「君民同治の新帝国」を創造するために読者を結集していった。

「益進会と『第三帝国』」とは、茅原氏等同人数名の単なる私有物ではない。主義精神を同じくする天下同志者の共有物である¹⁷³⁾。このように述べる門馬清郎（山形）は、「第三帝国の精神」を徹底する政治上の標識として「立憲政治」を挙げた。彼は、同誌が創刊以来、「立憲的精神」に基づく経営および誌面づくりをしていることを喜び、「立憲的政治は全生活を立憲的に徹底して始めて実現し得る」と論じている。このように益進会と同じ地点に立つ読者は、同誌の実践運動に関して自由な提言を行っていく。

三号の北州生（新潟）「減税の大運動を起せ」¹⁷⁴⁾は、実践運動に関する最も早い反応であった。現今の政治家を己の利権に渴し、国民の「眠りを永びかせて甘き汁を吸はんとする横着なる寄生虫」と批判した。と同時に、戦争と重税の「大雨」に打たれながら眠り続ける国民に「醒めよ、起てよ」と呼びかけたのである。

それ以上に多くの声を集めたのが普通選挙に関してであった。芝区の山口晴は「国家的発達とは其の国家を組成せる各個人の生活及性格の進歩発達を意味す」という観点から、「速に超然内閣制を撤廃して国民に対する責任内閣制を採用せよ。速に制限選挙法を撤廃して普通選挙法を採用せよ」と求めている¹⁷⁵⁾。長野の西川狂水は、閥族打破よりも「大なる根本問題」として「政治的教育の普及」と「普通選挙制の実施」を掲げている¹⁷⁶⁾。伊豆の山口伝吉は「直訳的立憲政治」を「国民に適切な形式」に改めるために「二重選挙法」と「全国一区選挙法」を提案している¹⁷⁷⁾。前者は「有権者が、先づ投票者を選挙して此当選者が、更に議員を選挙する」という方法で、「自覚した者」が選ばれて再選挙を行うので「健全なること」を確保できる。後者は「議員の数を一定せず最低得票の数幾十万と限り、此法定数以上の得票者を以て議會を組織する」という方法で、「平時新聞に演説に著作に自己の政見を発表し」「真の国民多数の輿望を担ふた人」しか当選できないとされる。

だが一方で、普通選挙の即時実施に異論を唱える読者がいたことも看過してはならない。愛知矢作の有我生は、直接国税十円以上を納める満二十五歳以上の男子という選挙資格のもとで有権者が総人口の三%にも満たない現状を踏まえ、「選挙権拡張の一日も早からんことを希望」¹⁷⁸⁾する。と同時に、「凡そ世に求めざるを与ふるは効無きのみならず時には有害なること有り」と述べている。なぜなら、国民の多くが「選挙権の何物たるやも解する能はざる」状態だったからである。この発言は、読者にとって身近な市町村議会の選挙で「選挙権売買てふ聞くもいまわしき弊」が生じていたことを踏まえていた。したがって、まずは「農村青年」への教育を改革し、「法制経済の一般」を学ばせ、「立憲国の人間」

を作らなければならない。『第三帝国』は、創刊以来、社会主義者にも誌面を提供していたが、「革新」青年だけの専有物ではなかった。¹⁷⁹⁾ 読者の見解は、帝国日本の再創造を期する想いから発表されているがゆえに、厳しい現状批判を伴ったのである。

むしろ、自身と政治の関係の稀薄さを告白せざるを得ない読者こそ『第三帝国』の住人だったのかも知れない。板橋で小売業を営む福田三郎は「何だか政治等は私等と没交渉の様に思われます」と漏らす。¹⁸⁰⁾ 商売上の利益から「政治等に熱中しては損」と自分に言い聞かせ、「国を治むるより自分を治むる方が大切です」と述べている。神田の加納秀も「都市に地方に白熱の如き政戦は開かれてゐる」のに、「吾々投票権を有せぬ者は日陰者である、単に傍観者である」と嘆いている。¹⁸¹⁾ ここには選挙権の有無をめぐり国家と乖離していく若き国民の姿が示されていた。こうした状況を踏まえ、両国の兼多恒三郎は「より強き愛国心」¹⁸²⁾を掲げ、「文部省的、非自然的なる愛国心の養成」を批判し、国民が自己を愛するように国家を熱愛する「内省的発現の愛国心」を養成する必要性を力説している。

このように多くの読者たちが、周囲との葛藤を繰り広げ、現状を打開するための方策を模索していたが、とりわけ沢田栄治（京都）「創造的国民政治」は、同誌の主張に最も近接した政治論と言える。¹⁸³⁾ 沢田は「官僚打破」「政党革新」「内閣改造」を表面的批判と斥け、政治的心情に触れる「真の政治論」を提示した。「政治界の心情」は「実に国民の血に流れて居る」と述べ、「国民に没交渉な、隔離した政治に何の価値があらう」と非難する。と同時に、政治を自らの「生活」と「別物」と見なす国民を戒め、われわれの存在こそが「政治の根底」ではないかと問いかけた。「政治界の新生」は、国民自らが「政治の根底」となる自覚を持つことで始まる。そこから「国民の心性を基礎とした政治」、言い換えれば、「第三帝国の要求する」「深い強い創造的国民政治」が実現するのであった。

加えて、農村青年や労働青年の声も届けられている。越後の黒木甚一郎は、地租軽減請願の動向に対し、土地の売買価が騰貴し、小作が自作農に戻れずに大地主化が進むだけと苦言を呈す。都会人の参入による土地所有権の流出という危険性も指摘し、「我等農民の希望は地租軽減よりも塩醬油石油等の消費税の廃減か小作料低減かにあり」と述べ、国家の前途を考え「地租遞増法の新設」を切望している。¹⁸⁴⁾ また、茨城の笑山子は、近年農村で流行する耕地整理事業が、県庁・郡役所と請負人の結託の下で行われているにもかかわらず、農村青年が県や郡主催の農場技術講釈を謹聴している実状を批判し、「俗吏らの講演をきゝて よろこべる 農村青年の 心かなしも」という狂句を添えている。¹⁸⁵⁾

一方、伊勢崎の根岸正吉は一労働者として「何んの為めに労働する」かを問うた。¹⁸⁶⁾「飯が食へないから」という消極的な意味に止まらず、「何故、自分が労働するために工業が興り、生産が行はれ、幾多の人の欲望を充たすことが出来る」かを考えるように促す。その上で、生産した富が他人に奪われる「矛盾」を解決するためには「労働者自らが動力となったレボリユーション」より他ないと呼びかけた。南葛飾郡大島町のスプリング工場で働きながら友愛会支部の幹部を務めていた平沢計七も投書を寄せている。¹⁸⁷⁾ 平沢は「階級戦争は日本の労働問題でない」と述べ、「日本式労働問題」の解決方法として「新空気を吸って生長した青年労働者」に「健全の思想」を扶植することを挙げた。そして、その指導を「足で現在の労働者の真相を見た後の茅原廉太郎氏」に求めたのである。

「実生活」の場で苦闘し現状を打破するなかで、青年たちはそれぞれの「益進」¹⁸⁸⁾を始めていた。そこには「他に技巧されんとする自己より自ら創造せんとする自己へ」と、「自

己」を抛り所に主体的な「生」を獲得しようとする青年読者の積極的な受容が示されていた。「機械より牛馬へ、より人間へ。即ち自らを動き索めんとする自己へ」、まさしく「自我」を中心に人間存在を回復しようとする強い意志が込められていたのである。彼らの「益進」は、MN生（牛込）「不断の努力」や大久保清美（長野）「自分の思索」のように、「自我」を絶対の権威とし現実を捉え返し、積極的に前進することを説く者を生み出した¹⁸⁹⁾。そこから、次の伊藤仙重（山梨）のように同誌の主張を自分なりに消化・発展させることを訴える者まで現れてくる。こうした青年読者の呼応と奮闘努力のゆえに、益進会同人も「第三帝国の真生命を戦闘曲の中に見出し度い」との期待を表明したのである¹⁹⁰⁾。

諸君はわが華山先生を単に「新しき人」「力の人」として崇拜せらるゝか尊敬せらるゝか、心酔せらるゝか、然らば諸君は自由の人、創造の人でなく又「あなたのあなた」でなく「華山に囚はれた人」「華山を祖述する人」即「華山の人」である。どこに自由がある創造がある、私の付度する所わが華山先生は吾等に「吾の人」となれと言はず「吾は吾」で居る「君は君」であれ、と言はれると信ずる、「君は君」であれ「吾は吾」である、そこに「自己主」たり得、「他客」となし得る¹⁹¹⁾。

三 「投書」の連鎖と「交歓」「通信」欄の充実

「戦闘曲」の盛況は『第三帝国』の言論を支える役割を担っていたが、そこから投書の「連鎖」とも言うべき現象が発生していく。上述した有我生（愛知矢作）による普通選挙の実施に慎重な意見をうけ、一四号に木村篤（茨城）から投書が届いた¹⁹²⁾。木村は選挙権拡張を「予の尤も歓迎する処」と述べながらも、「各町村を通じて衆庶から突然神の如き信頼を受けて居る篤望家」と代議士や県議が「密接な悪縁」を結んでいる実態を指摘する。自ら「昨年四月村議の候補に担がれ」、彼らの「迫害と術策とに翻弄されて、ヤツト当選した」「辛い経験」から、普通選挙の実施が「至難の業」であることを痛感し、「時機の尚早」を唱えた。ゆえに、「予は愛知の有我生の主張と同感で、青年に法制一般の知識を与へて、立憲的国民を養成するが、先決問題」と主張したのである。

一二号の衛藤生（豊後）は「国防会議と普通選挙¹⁹³⁾」を掲げ、国防方針は「国民が自らの生活から案出すべき¹⁹⁴⁾」という鈴木正吾の見解を前進させた。衛藤生は、第二次大隈内閣による国防会議の開催を「立憲治下にあるまじき事」と批判し、「壮丁の苦痛」を伴う兵役という「国民一般の義務」に見合う「権利」として、「二十五歳に到ると雖、尚、税額に制限せられて、獲得し能はざる」選挙制度を改めること、すなわち参政権を要求した。「壮丁をして国事を談ぜしめん事」を主眼に置き、普通選挙の実施により「軍隊を国民の軍隊たらしめねばならぬ」と主張したのである。ここには第一次世界大戦下の列強諸国で実行されていた「総力戦体制」に伴う「選挙権拡張」に近似した論理が内包されていた。

これに呼応し、一六号には門馬新水（山形）が「普通選挙に迄」を寄せている¹⁹⁵⁾。門馬は「第十二号に出た豊後衛藤生君の意見の如きも嬉しく読んだ」と述べ、「現今の政府者や衆議院貴族院あたりの老人連」が普通選挙を「青年の空想」と見なしている事実を指摘し、「手を拱いて選挙権の与へられるのを待て居るのは」「愚直の極」と訴えた。日露戦争に従軍した際、所属部隊の経理部員が「国費を消耗して居る」姿を目の当たりにし、「租税の名によって徴収した我々の汗血を以て、官禄に衣食して居る人々の貪欲心迄を充たし

てやらねばならぬ筈は無い」と憤り、「真の生活」のためには「普通選挙に迄」到達しなければならぬと、普通選挙同志会の結成に基づく「意味ある運動」を要請したのである。

普通選挙をめぐる投書の「連鎖」に手応えを感じた鈴木は、「私共は冬の議会には是非共『普通選挙に迄』の実戦をやるつもりです、具体的手段方法等は次号で発表します」と新企画の展開を示唆した。この発言は、創刊一周年の二〇号に掲げられた益進会同人「普く天下の同志に檄す」に基づき、普選請願書名運動として実践されていく。雑誌『第三帝国』における普通選挙運動は、選挙権拡張をめぐり、益進会同人と読者が、あるいは読者同士が誌面を通じ、記事や投書により議論を積み重ねた結果として実現したのである。

さて、投書の「連鎖」は普通選挙に関わるものだけではなくた。青年読者の生活により密接した事例として恋愛問題を挙げることができる。なかでも上述した矢山ハルムの投書「世の処女へ」¹⁹⁶⁾は大きな反響を呼んだ。矢山が筆を執ったのは、一―号で瀧澤寿三(長野県)が柳澤としという女性読者を批判した「新しき女よ」¹⁹⁷⁾に共鳴してのことであった。

柳澤は、六号で自らの「経験」を告白し、「処女の純潔」をダイヤモンドに例え「火にも水にも損はれない底の最も堅固なる宝」であると主張した¹⁹⁸⁾。だが発表後、周囲からの反響の大きさに当惑し、九号で「あの文には五分の真実と五分の虚偽―不真面目―がありますので、半ば病的な私の過去の『いまはしい吐瀉物』に等しい」¹⁹⁹⁾と弁解した。

この一連の言動を、瀧澤は「自分を極力踏み躪って居られる」「余りに軽薄なうすっぺらな態度」と非難した²⁰⁰⁾。素直に非を認めることは大切だが、「余りに深みのない真実のない真摯のない浮気な蓮つ葉な仕打ちには実に驚かざるを得ない」と述べ、婦人の「個性」や「自我」を尊重すればこそ、「新しい女とはこんなものか」と痛烈に批判したのである。

これに対し、「田舎の小学女教師」である矢山は「新しがる女は多く、真に新しい女はいと少ない」²⁰¹⁾と述べ、「柳澤とし子氏のにえきらぬ態度に一大痛棒を加へられた」瀧澤に賛同し、新しいと自称しない立場から「真の純潔」を論じた。矢山の言う「純潔」とは、女性が「内から出て来る特殊發揮の美しさ」で異性から認められながら、時に拒んででも理を義することで保持される「純潔」であった。「高嶺に超然たる白雪の潔白さよりも、草の上、道のべ、はては馬糞塵埃の上に、潔白を保つその美しさを処女の心的態度とし」たいという主張は、異性に愛されることと「純潔」を守ること、いわば「恋愛問題」における「矛盾」の調和を示すものであった。

続く一五号では渡瀬孝二(牛込)が矢山に対する反論を展開した²⁰²⁾。彼は「自ら新らしがらない女と称し」、処女の純潔を守りながらも恋愛を奨励する矢山の姿勢に疑問を投げかけた。「肉を決してハルム女史のやうに蔑視したくない」という立場から、「恋愛をし乍ら肉を拒絶することが出来るやうなら、それは不徹底な恋愛、否それは恋愛ではない。男子を欺いて楽しむに等しい」と糾弾したのである。

渡瀬の矢山批判に対し、二人の読者が反批判の筆を執った²⁰³⁾。室園こま(福岡)は、同じ女性の立場から「真の恋」を「対等の二人が、その片手と片手を出し合はして一人としての両手となして愛の清水を汲み」上げることと定義する。ゆえに「二人は融合して一人となる。之を汲み且つ飲まんと欲する要求を離れては成立しない」と恋愛と肉の関係を肯定した。ただし、「みだりに岸を下つて清水を掬むの愚をなしてはならぬ」と処女の純潔を堅持し、「肉欲を美化して真の恋愛に変ぜしめ」る方策として「靈肉融合の確に健全な恋を世に公表する」こと＝結婚を勧め、恋愛を「健全なる家庭」の前提に据えたのである。

石垣伊三郎（静岡）は「矢山ハルム君の説を読んで、私の理想とする女性を知った」と語り、なかでも「肉」の蔑視という批判について反論を試みた。「矢山君が処女の純潔を守るのは、肉を蔑視するのではなくして肉を尊重するからではないか」と問い返し、「青年処女が神聖を確保する為に恋愛修養を必要とする」と主張し、「肉の伴はない恋愛はない」とする渡瀬の見解を真つ向から否定した。そして、「肉を尊重するが故に最後の恋愛、即ち夫婦関係を結ぶの時ではなくては肉の交歓をしない」と終局に結婚を置いたのである。

こうして矢山が示した「真の純潔」は、恋愛問題における「矛盾」の調和をめぐり、多くの議論を喚起しながら、二人の読者が「結婚」を提示することで一応の終結を迎えた。白熱する議論を受け、鈴木正吾は「私には此問題に対する発言権がないから批評がましい事は避けます」と前置きしながら、「要するに貴君（石垣）の議論も矢山君の議論もそれから渡瀬君の議論も、あまりたいした徹底味はないやうですネ」と、突き放している²⁰⁴。だが、ここでもより重要なのは、益進会の思惑を超えて「戦闘曲」が読者たちの間に波紋を呼び、そこから反論や支持、さらには前言撤回までもが生み出されていたことであった。

勿論、それらは益進会同人らの「演出」による部分が大きい²⁰⁵が、青年読者の「益進」は、時に同人が鎮静化を図らなければいけないほどの熱を帯びていた。また議論の発端となった柳澤としての存在は、誌上での発言が時に読者の現実生活を脅かすほど、雑誌メディアが浸透していたことを物語っている。雑誌『第三帝国』は、「無名新人の紹介機関」に止まらず、誌面を通じて読者が意見を交換し、成長していく場に発展していたのである。ゆえに、益進会は「一切を公開し、一切を読者と共にし、公明に正大に、一步一步新時代に向って戦闘曲を奏でつゝ進んで行く。同志よ、友よ、共に奮へ！」と高唱したのである²⁰⁶。投書の「連鎖」に注目し、益進会同人は「交歓」欄を新設した。「同志短信」として掲載してきた読者の声を、一二号以降、「交歓」と題し誌面を左右に分割し、左Ⅱ「同人より読者へ」／右Ⅱ「読者より同人へ」という形で並べ、両者が意見を交換する場とした。この企画は、支部の設置および創刊一周年の準備のために、読者との連携を強化する意味を持っていたが、そこに寄せられた声は大別して次の四つに区別することができる。

まず一つ目は同誌の活動に対する「応援」である。一二号（二二頁）掲載の原聖華（長野）は「今後必ず貴誌の為に地方青年に購読を勧める決心です」と語る。岡田修一（愛媛）も「色々考へました末、葉書二百枚を印刷して愛媛の教育者に第三帝国を御紹介することに致しました」と、読者の新規開拓を宣言している。こうした声が届く理由は、一四号（一七頁）で福岡由一（名古屋）が「徒らに学士博士の名を目録に並べ立てて而も内容の貧弱な雑誌の多い世の中に諸兄の真面目にして熱烈なる御奮闘振り」と述べているように、青年読者の声を掲げる誌面づくりが支持されていたことであった。

「応援」の声は同誌の苦境にこそ活発となった。特に大正三年八月十六日発行の一七号が発禁処分を受けると、各地の読者から激励が届いた。一九号（一六頁）掲載の小林与次右衛門（神奈川）は「第三帝国発売禁止との由驚き入り申候、吾人は大隈内閣の遺口に向って大々的不平を浴せ掛けんと存候」と政府を批判した。安倍珊々（新発田）は「一度や二度の発売禁止を恐れてⅡ低脳なる検察官に信頼して吾人の進路を偽ってならぬ」と述べ、「吾人は寧ろ甚大なる迫害を征服して最後に勝利の旗を翻すべきだ」と励ました。

二つ目は読者による現況の「報告」であった。二〇号（五四頁）の西山磐岳（福島）は「当地の青年は一般に物質的方面にのみ去り、甚しきは無宗教無哲学を叫ぶ馬鹿者も有之

候」と批判する。二二号（二二頁）の神谷冷雲（三河）は、「私の町は県下有数の工業地ですが今に一の青年団体も起りませぬ」と不満を漏らす。一方、一三号（一七頁）の康廣一雄（岡山）は「私共同志は昨秋所謂先輩者の扶を借らず純無一物の青年ばかりで和氣青年会なる小さな団体を設け時々会合して新思想の研究を為して居ます」と報告している。

「報告」は内地からばかりではなかった。一三号（二七頁）には、沖縄の古謝清昌が「半殖民地半属国的本県に遺憾なく發揮せられたる官僚的風潮は吾人の思想を容るべくに窮屈過ぎました」との声を届けている。二〇号（五四頁）では、朝鮮の神崎生が「所謂大家の無責任にして空虚なる言論には飽き飽き致した、『第三帝国』の明日をして願くば異彩あらしめよ」と励ましている。また、二二号（二二頁）の阪本五郎は「私は釜山のある大きな魚問屋の店先で『第三帝国』を読んでゐます。『第三帝国』は魚屋の店先まで攻め寄てゐるかなと自分で考へて面白くもありまた愉快でもあります」と報告している。

三つ目は、益進会の企画や運動への「呼応」である。支部設置の呼びかけには、一二号（二二頁）の相馬現堂（新潟）が「支会設置大によし第三帝国の同志を募るは第三帝国愛読者の責任である」と企画の後援を約束している。同じく一二号で神吉千代子（宮崎）は「私は夫と二人で愛読するのですが購読者の幹旋方支会設置の件等私では少々差支へもありますから夫に頼んで種々尽力して貰ひました」と述べる。大正三年六月の東京市議会で政友会系常盤会の打倒キャンペーンが展開されると、一三号（一七頁）に山本生（名古屋）から「御奮闘の効果空しからず多摩泥の巨頭森久保倒る」との声が届いている。

最後に四つ目は、同誌の活動に対する「要望」である。一三号（二七頁）の黒木雅彌（日向）は「特に同人諸君の地方遊説を御勧め仕り候」と地方講演の実行を求めている。二〇号が創刊一周年の「紀念徹底号」として刊行されると、同号（五四頁）に塩谷良之助（秋田）から「紀年号写真を掲げて誌上『第三帝国』闘士の俤に接せしめよ」との声が届いた。

さらに二三号が、主盟茅原の地方遊説による不在で、鈴木正吾「新愛国論」を巻頭に『同人号』として刊行されると、二四号（二四頁）には根岸正吉（群馬）から「同人号！内容の豊富なる、生命の横溢せる、赤貧なる職工の財布の底より普通号の二倍価を支払ふを禁ぜざらしむ、二十三号形式は同人号なり二十号其名は徹底号なり、されど二十号は其名二十三号に奪はるべし、否譲らざるべからず」との声が届いた。「同人号」に「紀念徹底号」よりも徹底した内容を見出したための率直な意見であった。こうした声に自信を深めた益進会は「やがて、読者諸君に依つてより盛んなる『読者号』の製出せられん事を希望する²⁰⁷⁾」と、逆に青年読者に要望していくのであった。

「交歓」欄とともに、益進会は「通信」欄を設けた。特に一二号（大正三年六月一日）で益進会支部の結成を呼びかけて以降、全国各地の支部または希望する読者・団体からの近況が掲載された。これらの声がすべて結実したわけではないが、支部は全国三十三ヶ所に置かれた。その実態については、次章で秋田県を事例に述べることにし、ここでは愛知県海老町の第四支部、京都府峰山の第五支部から届いた「支部たより」を見ておきたい。²⁰⁸⁾

「大正三年七月七日よ！今宵私共五名の同志は此処に会合して今日より新に『第三帝国』の愛読者となり『第三帝国』の主義主張に依り我等の生活を革命し併せて今後我等の最も近き周囲より第三帝国化する事に全生命を傾注して努力せんことを誓ひました」。第四支部幹事に加藤文一は、右の報告を一六号に届けた。「二十歳前後の」彼らは、「我が地方の為に憂ふるの精神」をもつて奮闘し、「我が第三帝国の為に尽さん決意」を示して

いる。「今は同志五名に過ぎないが今後努力の結果は更に大に我等と志を同ふするものを集め得る見込です」と勢力拡大を意気込、「熱誠の前には何ものも敵する能はざるを確信し」ながら、「ア、大正三年七月七日よ……エキセルシヨア……」と締め括っている。

一方、第五支部からは『『第三帝国』の愛読者を以つて組織し峰山青年団員たると否とを問はず、広く会員を募集』する旨と支部規則が報告されている。支部を「峰山町宇呉服二八峰山青年団内に設置」すること、「東京本部と連絡を取り『第三帝国』の主義思想を宣伝」すること、「研究会講演会を開き其の他機に臨みて地方の思想上及實際上の問題に活動」すること、「本会員たらんとする者は本会の紹介を経て三ヶ月以上の購読料を添へ直接東京本部に購読申込む」こと。この報告は青年団の機関紙『哄の声』にも掲載された。

両支部は、海老町青年会・峰山青年団を受け皿としていた。支部員たちは所属する青年団体の牽引役として『『第三帝国』を用い、支部准則を定め、研究会や講演会を行った。自らの「生活を革命」し「最も近き周囲より第三帝国化する」ことで、「青年会の中堅を形成」し、「我が地方の爲め」「我が第三帝国の爲め」に尽力することを目指したのである。

「支部たより」は、主に各支部の活動を報告することに用いられたが、そこから支部同志の交流も生み出されていく。一九号の加藤文一（愛知県海老町）「支部たより」²⁰⁹には、支部新設の喜びとともに、「先日京都峰山実業青年団の諸君から諸君の機関紙『哄の声』を贈つて呉れました、實際私は心から感激したのです、其れに依つて私共の得る所は非常なものであった」との報告が記され、地域を越えた同志団体の存在に励まされ、「私共は益々急調的に天保我打破大正我建設の声を挙げねばならない」との決意が示されていた。

以上のように雑誌『第三帝国』は、「国民の公機関」として、投書欄「戦闘曲」の盛況に力を注ぎ、「交歓」欄に届くさまざまな声に応え、「通信」欄により情報交換の場を設けることにより、益進会同人と青年読者を架橋すると同時に、読者たちが双方向に意見や議論を交わしあえる言論空間を提供し続けた。それゆえに、熱烈な支持を寄せた読者たちの中には、尾崎士郎²¹⁰、妹尾義郎²¹¹、金子洋文などのように、やがて同誌から巣立ち、名をなしていく人物が少なくなかった。次章では、『第三帝国』の思想的立場を、益進会同人が展開した論争により措定し、同誌の地域的基盤である支部員の実態を解明した上で、普通選挙をめぐる政治的实践を中心に、その運動に検討を加えていく。

¹⁾ 田山花袋『東京の三十年』（一九四七年、創元社）二六八頁。

²⁾ 小林一郎『田山花袋―「田舎教師」モデルの日記所収―』（一九六三年、アサヒ社）一四五～二二九頁。

³⁾ 前田晃「解説」（田山花袋『田舎教師』、一九八〇年、岩波文庫（改版））。

⁴⁾ 前掲、田山花袋『東京の三十年』二七五頁。

⁵⁾ 石田の生涯については、伊多波英夫「石田友治」（秋田県広報『あきた』、一九七三年四月）四九～五三頁、同『銀月・有美と周辺―明治・大正秋田文壇人誌―』（一九七九年、秋田近代文芸史研究会）を参照した。

⁶⁾ 基督教会については、秋山操編著『基督教会（ディサイプルス）史』（一九七三年、基督教会史刊行委員会）が詳しい。

⁷⁾ 同右、秋山『基督教会（デイスイプルス）史』四八、一〇一、五七三頁。ガイ博士（一八七〇〜一九三六）は、アイオワ州のドレーク大学を卒業後、明治二十六年十一月に來日し、伝道のかたわら、本郷の借家に聖書神学校を開いた。同三十三年六月の休暇帰国に際し、エール大学で哲学博士を取得し、母校の創設者フランシス・ドレーク將軍からの寄付金一万ドルを元手に、同三十六年に再来日し、聖学院神学校の設立に尽力し礎を築いた。

⁸⁾ 『聖中学報』創立三十周年記念号（昭和十一年、聖学院中学校）。

⁹⁾ 明治三十六年三月の『福音新報』には「現在の学生八名中、四名は自費学生。年長者は四六、七歳、年少者は二一、二歳、伝道に従事している者や早稲田大学在学中の者などもあり、年齢、思想知識、信仰の差がはなはだしいので、これを一組として教授しているガイ、宮崎両氏の苦心一方ならぬものがあるう」と記されている。

¹⁰⁾ 石川は英語夜学校および中学校の校長を兼任し、聖学院全体の教育に尽した。彼については、甥の石川清『叔父石川角次郎』（一九七四年）が詳しい。宮崎は明治三十八年八月に「二身上の都合」で神学校を辞し、『電報新聞』に入社している。宮崎に関しては、木村圭三『宮崎湖処子―甦る明治の知識人』（二〇〇九年、彩流社）を参照した。

¹¹⁾ 『教会月報』（昭和十四年九月、基督教会）。

¹²⁾ 「石田神学生報」『聖書之道』（明治三十九年六月）に「二月七日東北凶作救済の募金をなし二四円三五銭送金した。二月の平均集会者は礼拝三六名、夜の聖書講義と伝道説教二三名、三月中は礼拝三七名、夜三〇名位、四月中礼拝三三名、夜二三名。毎木曜夜の祈祷会は二一、二名で大部分神学生。毎水曜午後ガイ氏宅で開いている婦人会は一九名内外の出席がある」と記されていた。また、前掲、伊多波「石田友治」によれば、友治自身も「勿欺の録」と題する日記を書いていたが、残念ながら現在その所在は不明である。

¹³⁾ 石川は、明治二十三年に秋田県横手に生まれ、同四十年に横手中学に入り、同四十三年四月に須藤安吉牧師から受洗する。卒業後、宣教師の勧めで聖学院神学校に進み、本荘教会牧師となる（前掲、秋山操編著『基督教会（デイスイプルス）史』六九三〜六九四頁）。

¹⁴⁾ 望天生「告白（上）」『秋田魁新報』（明治四十三年十一月六日）三面。

¹⁵⁾ 石田望天「入社の際」『秋田魁新報』（明治四十二年二月二十三日）二面。

¹⁶⁾ 石田望天「士道論―青年尚志会を起すべし―」『秋田魁新報』（明治四十二年三月八日）二面。

¹⁷⁾ 石田望天「思潮瞥見―自然主義とプラグマチズム―」『秋田魁新報』（明治四十二年四月十日）二面。

¹⁸⁾ 石田望天「新しき時代と青年（下）」『秋田魁新報』（明治四十四年三月五日）三面。

¹⁹⁾ 『秋田市史』四巻通史編・近現代一（二〇〇四年、秋田市）第五章参照。

²⁰⁾ 安藤和風については『新聞人安藤和風』（一九六七年、秋田魁新報社）を参照した。

²¹⁾ 石田望天「信ずるに足る人を選ぶべし」『秋田魁新報』（明治四十四年九月十一日）三面。

²²⁾ 石田望天「近時所感」『秋田魁新報』（明治四十四年九月二十四日）三面。

²³⁾ 石田望天「勝敗論」『秋田魁新報』（明治四十四年十月一日）三面。

²⁴⁾ 望天生「新理想論」『秋田魁新報』（明治四十五年一月八日）三面。

²⁵⁾ 同右、望天生「新理想論」三面。

²⁶⁾ 石田特派員謹記（東京にて）「明治天皇大葬記（第一〜七信）」『秋田魁新報』（大正元年九月十三〜二十一日）三面。

- ²⁷⁾ 松本生「〔新著批評〕野村君と『ベルグソンと現代思潮』『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）二〇頁。
- ²⁸⁾ 私立哲学館・東洋大学の歴史については、『東洋大学五十年史』（一九三七年、東洋大学）、『東洋大学百年史』通史編Ⅰ・Ⅱ（一九九三・一九九四年、東洋大学）を参照した。
- ²⁹⁾ 『東洋大学校友会一〇〇周年記念誌』（一九九四年、東洋大学校友会）参照。
- ³⁰⁾ 同事件は、明治三十五年十月の卒業試験で講師の中島徳蔵が倫理学の試験に出した「動機善にして悪なる行為ありや」という問題とそれに対する学生の答案を臨監の文部省視学官が問題視し、文部省は哲学館の哲学教育は国体に合わないとは判断した。この背景には学問を統制しようとする政府と学問の自由を主張する私立学校との対立があった。
- ³¹⁾ 松本史朗「祖父悟朗を思う」『たちばな』三八（一九七三年三月、川崎市高津図書館友の会）三〇～三二頁。
- ³²⁾ 前掲、中野目徹『政教社の研究』第三章第二節参照。
- ³³⁾ 市井三郎「改題ラッセル社会改造の諸原理」（『世界の大思想』二六卷（一九六六年、河出書房新社）、美坂太郎「バートランド・ラッセル」『社会改造の原理』を読んだ頃――『戦前戦中を歩む――編集者として――』一九八五年、日本評論社）七三～八一頁参照。
- ³⁴⁾ 朝永三十郎編著『哲学綱要』（明治三十五年、宝文館）、桑木厳翼『哲学綱要』（大正二年、東亜堂書店）。ほかにも西田幾多郎『思索と体験』（大正四年、千章館）と並び、バートランド・ラッセル著、松本悟朗訳『ラッセル叢書（自第一編至第七編）』とウィリアム・ゼームス著、北沢定吉・吉田圭・西山哲治共訳『実際主義（プラグマチズム）』（明治四十三年、弘道館）などが紹介されている。
- ³⁵⁾ 松本悟朗『哲学の話』（大正十一年、日本評論社）一三一～一四〇頁。
- ³⁶⁾ 隈畔については、福田久賀男「私信・愛と自由の哲学者・野村隈畔のこと」『たちばな』三八（一九七三年三月）、同「情死した天才的哲学者・野村隈畔」『彷彿月刊』第八卷第七号（一九九二年六月）、および同『探書五十年』（一九九九年、不二出版）を参照した。
- ³⁷⁾ 半田村の歴史や風土については『桑折町史』三卷各論編「民俗・旧町村沿革」（一九八九年、桑折町史出版委員会）を参照した。
- ³⁸⁾ 善兵衛「父は自然主義、子は理想主義」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）一〇頁。
- ³⁹⁾ 野村隈畔「自由人の生活」（『自由を求めて』、大正十一年、京文社）二～三頁。
- ⁴⁰⁾ 岸本能武太『社会学』（明治三十三年、大日本図書館）。岸本については、茂義樹『六合雑誌』における岸本能武太」（同志社大学人文科学研究所編『六合雑誌』の研究』、一九八四年、教文館）二七七～二九七頁を参照した。
- ⁴¹⁾ 野村隈畔「萩の家の店頭から」（前掲、『自由を求めて』）九四～九七頁。
- ⁴²⁾ 野村隈畔「K先生を訪ねて」（同右、『自由を求めて』）七九～九一頁。
- ⁴³⁾ 前掲、松本生「〔新著批評〕野村君と『ベルグソンと現代思潮』」二〇頁。
- ⁴⁴⁾ 明治四十二年七月四日付松本悟朗宛野村隈畔書簡（前掲、『孤独の行者』二六〇頁）には「国民英学会の夏期講習会本日より始まり、カーライルの衣裳哲学を習ひ初め申候」と記されている。
- ⁴⁵⁾ 野村善兵衛「社会的同情心」『六合雑誌』三六七（明治四十四年八月一日）四〇～四一頁。
- ⁴⁶⁾ 野村善兵衛「否定より肯定へ」『六合雑誌』三七五（明治四十五年四月一日）一〇四頁。
- ⁴⁷⁾ 鈴木範久『六合雑誌』解説」（一九八五年、不二出版）によれば、創刊の趣旨は全世界

(Ⅱ「六合」)に向けて人心の改革をはかり、日本の精神革命を実現することであった。⁴⁸⁾ 野村善兵衛「自覚と労作的精神」『六合雑誌』三七七(明治四十五年六月一日)二九〇三頁。

⁴⁹⁾ マックス・ウェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(一九八九年、岩波文庫版)。

⁵⁰⁾ 大正二年四月三十日付松本悟朗宛野村隈畔書簡(前掲、『孤独の行者』二六一〇二六二頁)。

⁵¹⁾ 茅原廉太郎『地人論』(大正二年、東亜同書房)「自序」。

⁵²⁾ 三羽光彦『高等小学校制度史研究』(一九九三年、法律文化社) 第二部参照。

⁵³⁾ 雑誌『雄弁』と大日本雄弁会については、野間清治伝記編集会編『野間清治伝』(昭和十九年、講談社)、『講談社の歩んだ五十年』(一九五九年、講談社)を参照した。

⁵⁴⁾ 井上義和「文学青年と雄弁青年」『明治四〇年代』からの知識青年論再検討―『ソシオロジ』四五―三(二〇〇一年二月)八五―一〇一頁、同「英雄主義の系譜―「雄弁」と「冒険」の明治四十年代―」(稲垣恭子・竹内洋編『不良・ヒーロー・左傾―教育と逸脱の社会学―』、二〇〇二年、人文書院) 六〇―八二頁参照。

⁵⁵⁾ 当時の中学進学者は、小学校卒業者の内一〇%に満たず、師範学校・実業学校に就学する者がおよそ一五%、残りの八〇%近い者たちは修学の道を終え、家業を継ぐなどしたという(陣内靖彦『日本の教員社会』(一九八八年、東洋館出版社) 一三八頁)。

⁵⁶⁾ 愛知県立第四中学校の歴史の変遷については、近藤恒次『時習館史―その教育と伝統―』(一九七九年、愛知県立時習館高等学校)を参照した。

⁵⁷⁾ 前掲、『内政史研究資料』第一九一・一九二集鈴木正吾氏談話速記録。これは、伊藤隆氏・有馬学氏が、正吾本人と五女の昭子を迎え、大正期における政治や社会の状況を聞き取りした内容を速記したものである。この時点で正吾はすでに八十五歳で、記憶が曖昧だったり、返答が的を射ていない場面も見受けられるが、興味深い内容が含まれている。

⁵⁸⁾ 前掲、近藤恒次『時習館史―その教育と伝統―』三五二―三六九頁。

⁵⁹⁾ 『参陽新報』掲載の記事は、次の通りである。「中学生間の殴打事件(昨日告訴状を提出す)」(六月十九日)三面。「中学生間の殴打事件」(六月二十日)三面。「第四中学校生徒間殴打告訴事件」(六月二十四日)三面。「中学生殴打事件に就て」(六月二十五日)三面。

⁶⁰⁾ 前掲、近藤恒次『時習館史―その教育と伝統―』三八〇―三八八頁。

⁶¹⁾ 「中学生徒の提灯行列」『新朝報』(明治三十八年六月二日) 三面。

⁶²⁾ 愛知県立第四中学校校友会編『校友会誌』一一(明治三十八年九月)。

⁶³⁾ 丁未俱樂部に関しては、前掲、有山輝雄『近代日本ジャーナリズムの構造』、および前掲、有馬学『日本の近代4』「国際化」の中の「帝国日本」などを参照した。

⁶⁴⁾ 政党の外延にある院外団とその周辺の「青年政治集団」の存在に注目した研究として、伊東久智「政友会の院外団と「院外青年」」(安在邦夫・真辺将之・荒船俊太郎編著『近代日本の政党と社会』、二〇〇九年、日本経済評論社) 三五三―三八〇頁がある。

⁶⁵⁾ 風塵郎「早稲田擬国会の印象」『雄弁』第二巻第四号(明治四十四年四月一日、大日本雄弁会) 二〇三―二〇五頁。

⁶⁶⁾ 菊池城司『近代日本の教育機関と社会階層』(二〇〇三年、東京大学出版会) 第八章参照。

⁶⁷⁾ 徳富蘇峰『大正の青年と帝国の前途』(大正五年、民友社) 第一章。

特に厳しく批判したのは、日露戦後の地方改良運動における節約の美德であった。茅原は、人間の欲望を否定する運動に虚偽性を嗅ぎ付け、上意下達の国家主義教育の精神構造を斥け、個人の欲求をいかに善導するかを近代社会の宿命的な課題として把握していた。

⁶⁹⁾ 石田望天「退社の辞(中)」『秋田魁新報』(大正元年十一月二十八日)三面。井上社長に「東京の就職口が決るまで社に居たら宜からう」と言われ、社を代表して出京していた。

⁷⁰⁾ 前掲、松本悟朗『第三帝国』滅亡史、九三〜九四頁。

⁷¹⁾ 石田生(十一月廿日)「東京より秋田へ」『秋田魁新報』(大正元年十二月五日)三面。

⁷²⁾ 望天生「東京行(一)」『秋田魁新報』(明治四十五年四月六日)二面。

⁷³⁾ 梁歩堀井金太郎は、明治二十年十月十五日、秋田県河辺郡仁井田村の豪農の家に生まれた。秋田中学を経て、第一高等学校に進むが、徳富蘆花に私淑しトルストイに傾倒する。一年で一高を中退し帰郷。農業を手伝いながら、「梁歩吟客」と号し詩や論文を発表する。模範村や北海道の農場に赴き指導を受け、大陸の農学に関心を抱き、同四十五年四月に洋行の途に就いた。梁歩については、相場信太郎編『追悼集梁歩の横顔』(昭和十五年、土筆社)、柳澤七郎『堀井梁歩の面影』(一九六五年、いづみ苑)を参照した。

⁷⁴⁾ 前掲、秋山操編著『基督教教会(デイスイブルス)史』五八四頁。三期生の国分甚五郎は「異色の学生は鷺尾、石田、三井の三君で、鷺尾正五郎君は第一期生で、途中渡米してドレーク、ハーバード大で学び、哲学博士号を得て帰国し、後藤東京市長の秘書になった。石田君は私より一年先に卒業、政治運動で活躍した」と回想している。

⁷⁵⁾ 望天生(五日午前三時東京にて)「東京行(二)」『秋田魁新報』(明治四十五年四月九日)二面。

⁷⁶⁾ 華山「第三帝国」『萬朝報』(大正二年八月二十五日)一面。

⁷⁷⁾ 前掲、望天生(五日午前三時東京にて)「東京行(二)」二面。

⁷⁸⁾ 望天生「東京の印象」『秋田魁新報』(明治四十五年四月八日)三面。

⁷⁹⁾ 望天生「東京行(三)」『秋田魁新報』(明治四十五年四月十一日)二面。

⁸⁰⁾ 有山輝雄「理想団の研究(一、二)」『桃山学院大学社会学論集』第一三卷第一、二号(一九七九年十二月、一九八〇年三月)三七〜六四頁、三一五〜三四六頁参照。

⁸¹⁾ 「総選挙政戦録▲秋田市の黒岩氏一行」、「総選挙政戦録▲感動を与へたる井上氏応援演説会」『秋田魁新報』(明治四十五年四月二十九、三十日)二面。

⁸²⁾ 「総選挙政戦録▲能代市の黒岩氏一行」、「総選挙政戦録▲大館の黒岩氏一行」『秋田魁新報』(明治四十五年五月一、二日)二面。

⁸³⁾ 「秋田市選挙の結果」『秋田魁新報』(明治四十五年五月十七日)二面。

⁸⁴⁾ 石田望天「退社の辞(上)」『秋田魁新報』(大正元年十一月二十七日)三面。

⁸⁵⁾ 前掲、石田望天「退社の辞(中)」三面。

⁸⁶⁾ 前掲、華山「新唯心論(上)」一面。

⁸⁷⁾ 如牛武藤太吉は、弘前野砲連隊の先輩に当たり、国民党の支持者として井上廣居の出馬に際し理想選挙同盟で共に活動した関係であった。

⁸⁸⁾ 石田生(十二月二日)「東京より秋田へ」『秋田魁新報』(大正元年十二月九日)三面。

⁸⁹⁾ 櫻井義肇は、明治十九年の『反省会雑誌』創刊より編集に加わり、同二十二年から『反省会雑誌』『中央公論』の主幹を務めてきた。同誌の印刷所は、後の『第三帝国』と同じ、牛込区市谷加賀町一丁目十二番地の「秀英舎第一工場」であった。

『新公論』については、宮地正人氏が前掲、『日露戦後政治史の研究』一六七～一六八頁で「明治から大正初年にかけては、『中央公論』よりはるかに生彩があった」と評している。⁹⁰⁾望天生「大隈伯と論戦する記」『新公論』(大正二年八月一日) 一一九～一二二頁、石田望天「新公論社の九ヶ月」『新公論』(大正二年九月一日) 一一六頁。⁹¹⁾前掲、『秋田市史』四巻通史編・近現代一、第二章参照。⁹²⁾中村ら四名は、桂太郎の新政結成に際し、立憲国民党を離れ、同志会へ合流していった。⁹³⁾衆議院・参議院編『議院制度七十年史』政党会派篇(一九六一年) 三九二頁。⁹⁴⁾大正政変で活躍した青年層の存在に注目し、彼らとの関係構築に動いた犬養毅率いる国民党の活動を分析した研究に、伊東久智「立憲国民党と青年―雑誌『青年』の分析から―」『日本歴史』七三三(二〇〇九年六月) 六九～八五頁がある。⁹⁵⁾夏目漱石「こころ」『漱石全集』第九卷(一九九四年、岩波書店) 二九七頁(初出は『朝日新聞』大正三年八月十日)。⁹⁶⁾夏目漱石『私の個人主義』(一九七八年、講談社学術文庫) 一三三～一三七頁。⁹⁷⁾前掲、華山「農奴、工奴、商奴」一面。⁹⁸⁾前掲、有山輝雄『近代日本ジャーナリズムの構造』第一部参照。⁹⁹⁾華山「第二西南戦争」『萬朝報』(大正元年十二月十四日) 一面。¹⁰⁰⁾華山「妥協的国民(上・下)」『萬朝報』(大正元年十二月二十一・二十二日) 一面。¹⁰¹⁾華山「天将に曙けんとす」『萬朝報』(大正二年一月六日) 一面。¹⁰²⁾華山「総合的運動」『萬朝報』(大正二年一月十五日) 一面。¹⁰³⁾大正政変をめぐる政治情勢については、山本四郎『大正政変の基礎的研究』(一九七〇年、お茶の水書房)、升味準之輔『日本政治史』二(一九八八年、東京大学出版会) 第三章、坂野潤治『大正政変』(一九九四年、ミネルヴァ書房)、櫻井良樹『大正政治史の発露―立憲同志会の成立とその周辺―』(一九九七年、山川出版社)、季武嘉也『大正期の政治構造』(一九九八年、吉川弘文館) などを参照した。¹⁰⁴⁾華山「民軍勝てり」『萬朝報』(大正二年一月二十五日) 一面。¹⁰⁵⁾華山「進歩の勇氣」『萬朝報』(大正二年二月十七日) 一面。¹⁰⁶⁾茅原華山「新しく観たる新しき支那」『中央公論』(大正二年八月一日) 二六頁。華山(三月二十七日夜)「大阪より」『萬朝報』(大正二年三月二十九日) 二面によれば、静岡・浜松・名古屋・岐阜・京都・大阪で講演を行った後、九州から大陸へ渡っている。¹⁰⁷⁾前掲、茅原華山「新しく観たる新しき支那」二二頁。¹⁰⁸⁾華山「血で書く文」『萬朝報』(大正二年七月十六日) 一面。¹⁰⁹⁾前掲、華山「第三帝国」一面。¹¹⁰⁾徳富蘇峰『蘇峰自伝』(昭和十年、中央公論社) 四六一～四六三頁。¹¹¹⁾百穂平福貞蔵は、明治十年十二月に秋田県仙北郡角館町で円山・四条派の画家平福穂庵の四男として生まれた。父に師事して絵を学び、同三十年に東京美術学校日本画科に入る。卒業後、帰郷して秋田の蘭画に接し洋風写真に関心を抱き、自然主義を提唱し「无声会」を結成した。同三十五年、母校の西洋画科に入りデッサンを学び、『平民新聞』や『国民新聞』に挿絵を描く。伊藤左千夫や斎藤茂吉らと交わりアララギ派の歌人となり、画風にも変化が現れる。『第三帝国』の表紙絵を描いたのは、彼自身の絵画が主観的写真へ変容していた時期と重なっている。百穂に関しては、富木友治編『平福百穂書簡集』(一九八

一年、翠楊社）、加藤昭作『評伝平福百穂』（二〇〇二年、短歌新聞社）を参照した。
益進会同人「志を述ぶ」『第三帝国』一（大正二年十月十日）一頁。

前掲、茅原華山『第三帝国』と石田友治君」二頁。

前掲、石田友治『第三帝国』発刊に就て」二頁。

野村善兵衛・松本悟朗・鈴木正吾『第三帝国』に参加するに就て」『第三帝国』一（大正二年十月十日）二頁。

原千代海訳『イプセン戯曲全集』三卷（一九八九年、未来社）一九一〜一九二頁。近代日本におけるイプセンの受容については、中村都史子『日本のイプセン現象——一九〇六〜一九一六年——』（一九九七年、九州大学出版会）が詳しい。

五七号より益進会に加わった広津和郎は、参加の経緯を回想するなかで、「『第三帝国』という誌名がイプセンの第三帝国から来たことは説明を聞かないでも解る」と述べている（広津和郎『年月のあしおと』（一九六三年、講談社）二〇七頁）。

島村抱月「イプセン劇の『第三帝国』」『第三帝国』一（大正二年十月十日）八頁。抱月は、イプセンの「第三帝国」が、ヨーロッパ現代文明の方向性を、「基督教紀元の始めに於ける希臘思潮と、希伯来思潮との接触」に見出そうとした試みであると指摘している。

昇曙夢「メレジューフスキの作物に現はれたる霊肉一致の思想」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）八頁。ロシア文学の翻訳者として知られる昇は、「霊肉一致の思想」が頭われている場面を解説し、「現代文学の黙示録である」と評している。

同人に加わった勢多左武郎は「華山の名を知ったのは、彼が『萬朝報』で社説を書いていた時代である。華山の文章たるや律動的」「従来の社説と違って、その見出しなども「血で書く文」とか、「何んだ、何んだ、何んだ」と言ったようなセンセーショナルな文句で読者に呼びかけた。正直のところ、私もそうした彼の呼びかけに応じて馳せ参じた血の気の多い青年のひとりであった」と回想している。また、益進会が「自由主義者の寄り合い世帯」で、「茅原主盟と必ずしも同意見を主張するとは限らず、それぞれ独自の見解を公表したところに、その特色があった」と述べている（勢多左武郎「『第三帝国』から『洪水以後』へ——あのころの若人たち——」・「同（続）」『たちばな』三七・三八（一九七二年三月・一九七三年三月、川崎市高津図書館友の会））。

石田生「編輯だより」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）二四頁。

小林亮平「生活難を叫ぶ人々に」『第三帝国』二五（大正三年十一月二十五日）一三頁。

石田友治「益進会から」『第三帝国』三〇（大正四年一月二十五日）二八頁。

『第三帝国』読者の大福音！』『第三帝国』三四（大正四年三月五日）二八頁。

石田友治「益進会から」『第三帝国』一五（大正三年七月一六日）二二頁。

石田友治「益進会から」『第三帝国』一四（大正三年七月一日）二二頁。新谷の書状には『第三帝国』に投ずる以上は真剣です、命懸けです」と記されていた。

石田友治「益進会から」『第三帝国』二一（大正三年十月十五日）二二頁。

石田友治「益進会から」『第三帝国』一七（大正三年八月一六日）二二頁。小田は益進会分裂後も茅原と行動を共にし、『洪水以後』『日本評論』に加わり、大正八年六月には茅原との共著『現代文章講話』（日本評論出版部）を刊行している。

前掲、石田友治「益進会から」『第三帝国』一五、二二頁。だが、前田は「家事上の都合

で、目下他の事業に奔走せねばならぬ」という理由で二四号をもって退会している。

¹²⁹⁾ 同右、石田友治「益進会から」『第三帝国』一五、二二頁。

¹³⁰⁾ 一二号から始まった「漫画」の掲載は、当初『朝日』『萬朝』『時事』『報知』などの風刺画を転載していた。赤塚の名で掲載されたのは、一七、一九号「漫画半月史」、二〇号「漫画旬日評論」、二一・二二号「漫画旬報」、二三号「漫画評論」である。二五号以降、他紙の転載に戻り、四〇号で姿を消した。その一方で、二四号以降、表紙の扉絵に風刺画を挿絵として掲げるようになり、定着していった。

¹³¹⁾ 土田恭治は、明治二十五年、秋田県平鹿郡館合村に生れ、同四十四年三月に横手中学を卒業後、第一高等学校の受験に失敗し、帰郷して『秋田毎日新聞』の編輯員を務めた。だが、上京の夢を捨て切れず、同郷の先輩石田友治を頼って『第三帝国』の編輯員となった。

¹³²⁾ 前掲、石田友治「益進会から」『第三帝国』二一、二二頁。

¹³³⁾ 雑賀博愛の経歴については、『雑賀鹿野歌集』（一九七七年、雑賀博愛先生三十周忌記念歌集刊行会）六二四、六二五頁の「年譜」を参照した。

¹³⁴⁾ 雑賀博愛「編輯室にて」『第三帝国』二二（大正三年十月二十五日）二四頁。

¹³⁵⁾ 前掲、石田友治「益進会から」『第三帝国』二一、二二頁。

¹³⁶⁾ 退会した雑賀は、二年後に政教社に入り、『日本及日本人』の同人として『大人格の偉觀西郷南洲翁』（大正八年、止善堂書店）を著した。だが、同十三年に三宅雪嶺と袂を別ち、『月刊日本及日本人』を発刊する。その後は、大江天也・杉田鶉山など幕末・維新期の人物評伝や、藤田東湖・佐久間象山・吉田松陰ら「勤皇の志士叢書」の執筆に力を注いだ。

¹³⁷⁾ 前掲、茅原廉太郎『華山文章』の「跋文」で、高田は一地方紙の記者であった茅原が外遊を経て成長し、『萬朝報』の論説に健筆を揮い、「早稲田大学の政治科学生」による演説会で雄弁を奮う姿に接し、彼を「筆の人」のみならず「舌の人」であると評している。

¹³⁸⁾ 岡見については『解放のいしずえ』（一九五六年、解放運動犠牲者合葬追悼会世話人会）一〇二、一〇三頁に、「秋田県出身。早稲田大学を中退して一九二二年（大十一）毎日新聞社に入社。政治研究会に加入、俸給生活者組合に所属して活動。その後四〇年頃まで社会運動を支援した。のち毎日新聞社人事部副部長となったが、四五年五月二五日夜、太平洋戦争の空襲により渋谷区原宿の自宅附近にて母、妻、二児と共に一家全員爆死した。五

二歳。【遺】なし」という記述が残っている。

¹³⁹⁾ 孤月中村八郎は、明治十四年五月六日、東京浅草に生まれ、早稲田大学英文科を卒業後、『早稲田文学』『文章世界』に小説や文芸時評を発表した。大正四年一月から『文章世界』で連載した「現代作家論」は、正宗白鳥・谷崎潤一郎・田村俊子・武者小路実篤らを論じ、作者の生活革新に力点を置いた評論として知られる。主に「文芸評論」を担当した。¹⁴⁰⁾ 永川俊美は、明治二十五年に福岡県で生まれ、早稲田大学政治経済学科に在学したまま益進会に加わり、「生活評論」を担当した。大正五年に大学を卒業すると、『朝日新聞』に入り、昭和九、十年に外遊し、帰国後、『朝日新聞』中部本社編輯局長となる。

¹⁴¹⁾ 勢多左武郎は、明治二十一年三月一八日に福島県福島市で生まれた。家は貧乏士族であったが、小学校を卒業後、立教学院・東北学院中退を経て、新聞配達をしながら夜学の正則英語学校へ通った。同三十九年に仙台の『河北新報』に入社し、同四十二年には上京し『やまと新聞』社会部に入った。大正四年九月に松本悟朗の世話で益進会に加わった。益進会分裂後は、内藤民治の月刊誌『中外』の編集局へ、同八年に国際通信社に入社した。

¹⁴²⁾ 鈴木悦は、明治十九年十月十七日、愛知県老津村の漁師の家に生まれた。小学校を卒業後、奉公に出るが一年で辞める。両親に頼んで成城中学へ入り、早稲田大学英文科に進む。同四十三年に『萬朝報』へ入社するかたわら、『早稲田文学』に小説を発表する。大正三年に『第三帝国』に入り、益進会分裂後は『洪水以後』に加わるが、翌年に『朝日新聞』に入社する。同七年、女流作家の田村俊子と同棲生活を始め、『朝日』を辞しカナダに渡り、『大陸日報』主筆として労働運動に尽力した。鈴木に関しては、田村紀雄『鈴木悦―日本とカナダを結んだジャーナリスト―』（一九九二年、リポート）を参照した。

¹⁴³⁾ 広津和郎については、松原新一『怠惰の逆説―広津和郎の人生と文学』（一九九八年、講談社）、坂本育雄『評伝広津和郎―真正リベラリストの生涯』（二〇〇一年、翰林書房）、坂本育雄『広津和郎研究』（二〇〇六年、翰林書房）などを参照した。

¹⁴⁴⁾ 山縣悌三郎『児孫の為に余の生涯を語る』（一九八七年、弘隆社）一六〇頁には、「雑誌『第三帝国』を発行す。主筆茅原華山との共同経営に係る。好評あり、売行よし。されど思ふ所あり、久しからずして其の関係を絶った」と記されている。「思ふ所あり」とあるが、内外出版協会は『第三帝国』の経営権を手放すと同時に倒産している。

¹⁴⁵⁾ 『第三帝国』二（大正二年十一月十日）「本誌に対する批評（抄録）」の『時事新報（東京）』には「パンフレット形の雑誌で政治経済教育文芸社会と各種方面に亘って論議を恣にして居るが、其編輯振りの引締ったキビキビした遣り方は、非常に気持よく思はれた。趣味と実益を兼有した手軽な冊子として何人の繙読にも値する」とある。

¹⁴⁶⁾ 前掲、茅原華山『第三帝国』と石田友治君「二頁」。

¹⁴⁷⁾ 「同人より読者へ」『第三帝国』二（大正三年六月一日）二二頁には、石田友治の名で「本会直接の熱心な多数購読者を除いて、外に如何に少なく見ても確かに二千五百名以上の愛読者がある」との記述が見られる。

¹⁴⁸⁾ 二号（大正二年十一月十日）一七頁の「同情録」で、相馬御風は「血の湧くをおぼえ候。是非其中少し実の入ったもの御高覧願度と存じ候。雑誌の五版とは何たる盛な事に候ぞ、謹でお祝ひ申上候」と記している。

¹⁴⁹⁾ 山田玉一（岡山）「予が地方生活」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）一九頁。

¹⁵⁰⁾ 一一号の「同志短信」（二二頁）に文を寄せた駒場在住の加藤文一は、一六号（二〇頁）では故郷の豊橋から「一体私の故郷と云ふは山間の一小町に過ないのです、夫れでも此度帰省して知人故旧と六年振り膝を交へて話をして見ると、私は思ったよりも没我的で無いのが嬉しい」と記している。

¹⁵¹⁾ 前掲、松尾尊兌『大正デモクラシー』一三七頁。

¹⁵²⁾ 若林貞雄（山梨）「日本人は奴隸的根性だ！」『第三帝国』五（大正三年二月一日）一九頁。若梅刺葉「冷人熱語」『第三帝国』四九（大正四年八月十五日）五七頁。

¹⁵³⁾ 齊藤茂（東京）「新日本主義―書簡の一節」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）二七頁。¹⁵⁴⁾ 三五号（大正四年三月二十日）五一頁には、「農業農民の問題に対しては随分面白い原稿が集まったが、生活問題に対しては余り振ったものがないのは残念である、此に五篇を掲載し、掲載の順序に依りて原稿料を呈す」（華山敬観）と記されている。

¹⁵⁵⁾ 有我生（三河）「華山先生へ」『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）一九頁。

¹⁵⁶⁾ 茅原華山「青年と文章」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）一頁。ここで茅原は青年読者へ投稿を呼びかけ、同誌を「広く都会及び田舎の青年に開放し」「苟も意義ある文字

ならば、我等同人は最極限まで紙面を割くを躊躇しない」との公約を掲げている。

前掲、有我生（三河）「華山先生へ」一九頁。

黒木雅彌（日向）「衝突せよ」『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）一九頁。

花城生「家族制度を屠れ」『第三帝国』一七（大正三年八月十六日）一八頁。

沖野微光（青森）「家族制度と青年」『第三帝国』五五（大正四年十月二十一日）二八頁。

矢山ハルム（福岡）「世の処女へ」『第三帝国』一四（大正三年七月一日）一八頁。

後藤賢吉（茨城）「性欲苦」『第三帝国』一四（大正三年七月一日）一八頁。

林源一（山口）「御用教育論」『第三帝国』一六（大正三年八月一日）一八頁。

文蔭生（山梨）「教育制度の現状打破」『第三帝国』三五（大正四年三月二十日）五五頁。

下川清嘯（北海道）「在郷軍人的道徳打破」『第三帝国』一六（大正三年八月一日）一九頁。

白井公郎（小石川）「増師と生活」『第三帝国』一七（大正三年八月一六日）一九頁。

明治・大正期の青年団に関しては、平山和彦「青年集団史研究序説…合本」（一九八八年、新泉社）を参照した。また、若者を宿泊させて漁業訓練を行う山口県萩市の青年宿を取り

上げ、村落社会における若者組織と近代における青年団組織の關係性を解明したものに中

野泰『近代日本の青年宿―年齢と競争原理の民俗』（二〇〇五年、吉川弘文館）がある。

「青年会便り（寄稿歓迎）」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）一九頁。

島田清一（千葉）「青年会改革」『第三帝国』二〇（大正三年十月五日）五一―五二頁。吉

田芳舟（舞鶴）「青年会打破」『第三帝国』四一（大正四年六月五日）二七頁。

魔弓生（静岡）「新生命の帝国の建設」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）一六頁。

魔弓生（静岡）「生活の戦争」『第三帝国』四（大正三年一月十日）一九頁。

相馬現堂（越後）「何が何だ」『第三帝国』一二（大正三年六月一日）一九頁。

門馬清郎（山形）「立憲の生活」『第三帝国』二三（大正三年十一月五日）二三頁。

北州生（新潟）「減税の大運動を起せ」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）一六頁。

山口晴（芝区）「個人を發達せしめよ」『第三帝国』六（大正三年二月十日）一九頁。

西川狂水（長野）「第三帝国実現の前提」『第三帝国』二〇（大正三年十月五日）五二頁。

山口伝吉（伊豆）「全国一句選挙区論」『第三帝国』四〇（大正四年五月十五日）二九頁。

有我生（愛知矢作）「農村青年の教育」『第三帝国』九（大正三年四月一六日）一二頁。

山崎三省（信濃）「社会主義と本誌の読者」『第三帝国』三五（大正四年三月二十日）五四

頁。彼は「よく雑誌を読んで見たり読者の意見なりを聞いて見れば、決して社会主義乃至

は無政府主義とは相容るゝを許さない思想であることが解るでせう」と記している。

福田三郎（板橋）「私と政治」『第三帝国』三一（大正四年二月五日）二六頁。

加納秀（神田）「傍觀者の悲哀」『第三帝国』三二（大正四年二月十五日）二六頁。

兼多恒三郎（両国）「より強き愛国心」『第三帝国』三四（大正四年三月五日）二六頁。

沢田栄治（京都）「創造的国民政治」『第三帝国』一四（大正三年七月一日）一九頁。

黒木甚一郎（越後）「弱きもの」『第三帝国』三九（大正四年五月五日）二八頁。

笑山子（茨城）「農村から」『第三帝国』四三（大正四年六月十五日）二八頁。

根岸正吉（伊勢崎）「貧弱なる労働者」『第三帝国』四一（大正四年五月二十五日）二八頁。

平沢計七「日本の労働者の見た日本の労働問題」『第三帝国』五三（大正四年十月一日）

一八頁。その後、平沢は純労働者組合を組織し、「労働文学」の確立に貢献した。

本井善蔵（会津）「我生活の行進序曲」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）二三頁。

¹⁸⁹⁾ MN生(牛込)「不断努力」『第三帝国』一五(大正三年七月十六日)一九頁。大久保清美(長野)「自分の思索」『第三帝国』一二(大正三年六月一日)一九頁。
¹⁹⁰⁾ 「同人より読者へ」『第三帝国』一三(大正三年六月十六日)一七頁。
¹⁹¹⁾ 伊藤仙重(山梨)「反逆者より読者へ」『第三帝国』一二(大正三年六月一日)一九頁。
¹⁹²⁾ 木村篤(茨城)「普通選挙は尚早也」『第三帝国』一四(大正三年七月一日)一八頁。
¹⁹³⁾ 衛藤生(豊後)「国防会議と普通選挙」『第三帝国』一二(大正三年六月一日)一八頁。
¹⁹⁴⁾ 鈴木正吾「国防会議無用論―是れを増師反対の宣戦布告文とす」『第三帝国』一〇(大正三年五月一日)二頁。
¹⁹⁵⁾ 門馬新水(山形)「普通選挙に迄」『第三帝国』一六(大正三年八月一日)一九頁。
¹⁹⁶⁾ 前掲、矢山ハルム(福岡)「世の処女へ」一八頁。
¹⁹⁷⁾ 瀧澤寿三(長野県)「新しき女よ」『第三帝国』一一(大正三年五月十六日)二〇頁。
¹⁹⁸⁾ 柳澤とし「世の処女に望む」『第三帝国』六(大正三年二月十日)一三頁。
¹⁹⁹⁾ 柳澤とし「私の旧文について」『第三帝国』九(大正三年四月十六日)一九頁。
²⁰⁰⁾ 前掲、瀧澤寿三(長野県)「新しき女よ」二〇頁。
²⁰¹⁾ 前掲、矢山ハルム(福岡)「世の処女へ」二〇頁。
²⁰²⁾ 渡瀬孝二(牛込)「矢山女教師へ」『第三帝国』一五(大正三年七月一六日)一九頁。
²⁰³⁾ 室園こま(福岡)「処女と恋愛」、および石垣伊三郎(静岡)「私の理想の女―渡瀬孝二氏へ―」『第三帝国』一七(大正三年八月十六日)一八頁。
²⁰⁴⁾ 同右、石垣伊三郎(静岡)「私の理想の女―渡瀬孝二氏へ―」一八頁。
²⁰⁵⁾ 「同人より読者へ」『第三帝国』一二(大正三年六月一日)二二頁。
²⁰⁶⁾ 石田友治「本誌前号発売禁止の理由に就て」『第三帝国』一八(大正三年九月一日)一七頁。
²⁰⁷⁾ 編輯子「益進会から」『第三帝国』二三(大正三年十一月五日)二五頁。
²⁰⁸⁾ 「支部たより」『第三帝国』一六(大正三年八月一日)二二頁。
²⁰⁹⁾ 加藤文一(愛知県海老町)「支部たより」『第三帝国』一九(大正三年九月一六日)二三頁。
²¹⁰⁾ 愛知県立第二中学(岡崎中学)四年だった尾崎は茅原に自らの境遇と心情を綴った手紙を送った。「もつと痛烈にもつと深刻に教育の悲劇を叫んで下さい」と訴える手紙が三六号(大正四年四月五日)に「中学と師範との改革(二中学生の手紙)」として全文掲載された。尾崎は『小説四十六年』(一九六四年、講談社)一五頁で、「私が、『教育亡国論』を執筆して、茅原華山(故人)の主宰する「第三帝国」に送ると、すぐ掲載され、新聞に仰々しい広告が出たために、学校内で物議を起こした」と回想している。以後も尾崎は投書続け、五〇号「帝国主義者に与ふ」、五七号「孝の新意義」が掲載されている。尾崎に関しては、都筑久義『若き日の尾崎士郎』(一九八〇年、笠間書院)を参照した。
²¹¹⁾ 後に大日本日蓮主義青年団を結成し、仏教思想に基づく社会運動を展開していく妹尾は、大正三年五月十日の日記に、煩悶の日々に茅原の「物的唯心論」に惹かれる『第三帝国』の住人であったことを記している(『妹尾義郎日記』一卷(一九七四年、国書刊行会)二四七〜二四八頁)。妹尾に関しては、吉田静邦「妹尾義郎の思想と行動―主として研究史的視点から―」『仏教経済研究』八(一九七九年三月、駒沢大学仏教経済研究所)九五〜一一一頁、細井宥司「妹尾義郎と新興仏教青年同盟」『文化評論』三七四(一九九二年三月)一九〇〜一九六頁を参照した。

第三章 「第三帝国」の理論と実践

第一節 「生活即政治」の実現―「運動」と「論争」の二面展開―

大正二年（一九一三）十一月二十二日、『第三帝国』二号を刊行した益進会同人は、予想以上の反響に手応えを感じつつ、「實際運動の手始め」に第一回第三帝国講演会を開催した。¹⁾会場は益進会本部から程近い牛込払方町基督教教会であった。午後一時、「編輯主任」石田友治の挨拶で開会したものの、生憎の冬時雨の影響で入場者は百人足らず、お世辞にも盛会とは言えなかった。だが、講演者の弁舌は熱を帯びていた。なかでも特別講演に立った抱月島村瀧太郎は、同年七月に文芸協会幹事を辞し、松井須磨子らと芸術座を旗揚げ、早稲田大学文学科教授の座を放擲し、須磨子との演劇運動に挺身していく渦中であった。²⁾翌月に帝国劇場での「サロメ」（オスカー・ワイルド作／中村吉蔵訳）公演を控える抱月は、「新道徳」と題し、劇の梗概を紹介しつつ、『第三帝国』の問題を暗示した。

「サロメ」は、紀元三〇年頃、預言者ヨカアナンがユダヤを支配するヘロデ王の行為（弟の妻ヘロヂアスを強奪）を非難したことで囚われ、王の酒宴の席でヘロヂアスの娘サロメの願い出により斬首されるという新約聖書に題材を取った劇で、「新生」松井須磨子の「当り役」となった作品である。³⁾ワイルドは、サロメが実はヨカアナンに恋心を寄せていたという脚色を加えることで、人間の愛欲、霊肉問題の神秘性を描き出した。抱月はその真意を汲みつつ、サロメがヨカアナンの首に接吻する場面に彼女の恋の進化（肉から霊へ）を見るとともに、それにより王の逆鱗に触れ殺されてしまう終幕に「霊肉問題の未解決」を見出した。『第三帝国』の問題は尚ほ残つてゐる」と抱月が投じた波紋は、「実生活」の場から帝国日本の再創造をめざす益進会同人に課せられた使命となつて広がっていく。

第三帝国講演会は、内外出版協会に経営を委任していた期間に福来友吉・安部磯雄・内ヶ崎作三郎らを招いて四度開催され、その模様は誌面で報じられた。入場者も回を重ねる度に増え、大正三年二月一日に神田青年会館で催された第四回講演会には、約三百人の聴衆が会場を埋めた。⁴⁾この経験は経営が益進会に移った後も引き継がれ、さらに「思園」の開催、支部の結成、青年後援部の設立など読者を結集する企画が試みられていった。

本章の課題は、益進会同人がいかなる「企画」を提示し青年読者を結集していくのか、時代思潮とどのように対峙したのか、主に「十日評論」における「議論」と普通選挙に関する「運動」を考察すると同時に、実際に結集した読者の実態を、同誌の支持基盤である益進会支部を事例に解明していくことである。

一 「新憲政擁護運動」と山本内閣打倒キャンペーン

『第三帝国』創刊号で主盟の茅原は論説「国家無能」⁵⁾を掲げた。新時代の幕開けに「君民同治の新帝国」の創設を謳った益進会の前に立ち現れていたのは、日露戦争の勝利で使命を果たし「日に空虚になりつゝある」明治国家の残骸と、苛酷な生活難に曝されるなかで国家や従来の価値観に懐疑を抱き、社会と連続性の希薄な「個人」観念を強めつつあった国民、とりわけ青年層の煩悶であった。これに際し、茅原は「日本の新なる国家は生活といふ母の胎内から産れねばならぬ」と、「国家」を「生活」の場から捉え直し、「個性の発展を中心として内容の充実したる国家」として再創造する必要性を説いた。そして、「国家の打破と創造《新憲政擁護運動》」を掲げ、具体的な方策を示していく。

対支大運動は少なからぬ損害を日本の国際上に於ける位置に与へた、国民的運動は生活問題と搦み附かねばならぬ、外務省に赴かずして大蔵省に赴いたならば、所謂行政、税制、財政の整理は少くとも更に一步を進められたかも知れぬが、外務省に赴いたのは、決して策の得たものではなかった、外交無能といふが、無能なのは独り外務ばかりではない、国家の各機関は今や其中心点を失ふて、各其往かんと欲するに任かしてゐる、之を国民生活で統一するのが、日本の急務である。⁷⁾

「対支大運動」とは、大正二年九月一日に南京で起きた袁世凱軍による日本人殺害事件に対し、同八日に日比谷公園で開催された対支問題国民大会を指す。事件の背景には、同年三月に始まった「第二革命」が孫文の台湾亡命により失敗に終わり、兗州・漢口で続けて日本人将校監禁事件が発生していたことがあった。⁸⁾同大会では、袁軍の「暴挙」に対し「中国出兵要望」案が決議され、民衆が大挙して外務省に押しかける騒動となっていた。

大陸の動向に注目していた茅原は「対支運動」を「憲政擁護運動に対する反動革命」と位置づけ、「憲政擁護運動が二月革命なら、対支運動は其猛烈さ加減到底前者に及ばないが九月革命といへぬことはあるまい」と評している。ここで茅原があえてフランス革命になぞらえて「対支大運動」を憲政擁護運動の延長線上に置き、転換点の到来を演出したのは、裏を返せば、前年暮れからの運動が勢いを失いつつあったからである。「憲政擁護・閥族打破」のスローガンのもと、民衆を政治に動員し、大正政変を成し遂げたにもかかわらず、誕生したのは薩摩出身の海軍大将と立憲政友会の提携による山本内閣であった。

運動を牽引していた新聞各紙は、国民が抱いた期待や不満を吸い上げ、新しい意味を付与していく回路を持つこともできず、「憲政擁護」に代わる新たなスローガンを模索していた。⁹⁾国民の支持を集め続けるために、山本内閣打倒の姿勢を維持しつつ、より具体的な政治課題として政党内閣制か選挙権拡張を選択する岐路に立っていた。茅原が在籍する『萬朝報』は、これまで民衆運動を喚起することに熱心な姿勢を見せ、能動的な言論活動を展開していたが、『第三帝国』が誕生した理由も同紙の存在と深く関わっていた。

『『第三帝国』は何故に生れたのか、其初心に遡つて見れば、第一は全く『萬朝報』の別働隊とするのであった。¹⁰⁾『萬朝報』の別働隊として『青年評論』を設置することこそ、同誌誕生のもう一つの理由であった。言い換えれば、憲政擁護運動の隆盛に手応えを得て創刊された『第三帝国』こそ、覚醒しつつある国民、とくに地方青年層を新たな運動の担い手に据え、誌面を提供することで彼らの期待と不満を吸収し、記者と読者が意見を交換する場を設け、議論と運動を共有することで思想的連関を強める共鳴盤だったのである。茅原が『萬朝報』に在籍したまま『第三帝国』に筆を執り続けた理由は、新聞各紙が読者との間に持ち得なかった回路を作り、双方向的な政治運動を実現するためであった。

先の「対支大運動」で「中国出兵要望」が決議されたことを踏まえ、「好戦的な我が国民は対外問題の起る毎に戦争を連想するが、戦争は我が国の現状では絶対的に不可能である」と断言する。なぜなら、非常特別税が戦後も継続され、「財政上戦争を九年も継続してゐた」からであった。日本国民は「先づ戦争を中止せよ」。¹²⁾「生活問題」を「個人の自覚」の出発点に位置付け、「経済生活が我等の所謂実生活である」という茅原にとって、財政整理・減税の断行は、普通選挙の実施に先駆ける第一義的な課題であった。

大正三年一月五日、憲政擁護大会が開催され、『大阪朝日』の本多精一、『萬朝報』の

斯波貞吉らが中心となり、山本内閣打倒キャンペーンを継続すべく、減税運動に乗り出す方針が確認され、營業税・織物消費税・通行税の全廃について決議し、減税宣言が発表された。¹³ここで『萬朝報』は中心的な役割を担い、国民各自が「自我の覚醒」を政治的・社会的要求へと発展させることを求め、選挙権の拡張を唱えていた。¹⁴これと連動して『第三帝国』も、大正政変一周年に際して「大減税号」を臨時増刊し、松山忠二郎、川尻東馬、安部磯雄、尾崎行雄らの寄稿のもと、「大減税運動を起せ!」と呼びかけた。

『東京朝日』主筆の松山は「五千万円減税論」を掲げ、非常特別税が継続されてきた事実を取り上げ、財政整理と輸出貿易振興の点から減税の必要性を説いた。¹⁵政府による海軍拡張案が「民意」に反するだけでなく、輸入超過と正貨流出を招くことを批判した。營業税全廃同盟会幹事の川尻は、營業税が商工業者の負担であるため、全廃論は都市の商工層のみを保護する論理と誤解されているが、実際は製造・問屋・卸売・小売と四重に課税され、結果として物価が上昇し、国民の負担となる事実を指摘した。¹⁶

社会主義者の安部は「真に国民の休戚を考へ」るならば「先づ消費税を減廃する」¹⁷必要があると主張する。「目下選挙権を有する資格が直接国税十円以上であるが、年額二百五十円の収入しかない労働者でも間接税は十五円を負担してゐる」と、間接税による歳入が国費全体の六割以上を占める現状に鑑み「貧民労働者と雖も選挙権を有すべき筈」と、間接税を直接税に換算することで、減税運動を選挙権拡張へと繋げる論理を示していた。

これらの呼びかけは、全国で行われた三悪税全廃運動を促進し、生活に直結していた地方の商工層に熱烈な参加を呼び起こした。¹⁸だが、營業税・織物消費税は商工層のみ、通行税は国民全般と課税対象が異なり、「憲政擁護」「閥族打破」ほどの求心力はなかった。

減税の断行を訴えたとき、「国家」は藩閥政治家・官僚・資本家らに独占され、「日本人の胃の腑」の問題が「全く政治上に象徴せられてゐな」かった。茅原は、「自由に解放せられた生活を実現するには政治上に人間本位個性中心の主義を徹底せねばならぬ、政治を階級に依りて壟断せずして一般に解放せねばならぬ、是に於て乎、一は普通選挙法の制定と為り、一は根本的減税と為る」と¹⁹方策を示した。普通選挙こそ、国民が「自我」を拡充し、「生活」の場から「国家」を再創造するために有効と見なされた手段であった。茅原は国民の政治教育が進んでいないことを根拠とする普選尚早論を、「現今の教育を徹底すれば、日本人は益々非憲法政治の人民に為つて了ふ」と斥けた。「選挙権」とは「自覚した人民が政治上に」行使する権利であり、教育の問題ではなく「生活の問題」で、「我等の胃の腑を政治上に象徴する為め」の権利であった。普通選挙の実現は、同誌の中心的課題となり、普選請願署名運動や「模範選挙」として具体化されていく。

さらに茅原は「根本的減税とは国防一元主義を以て其内容とする」と述べ、「我国予算の過半を占領してゐる軍事費に大削減を加へる」ことを提言する。国際社会における日本の将来を商工業の発展に見出して「海軍一元主義」を唱えるとともに、「私は今でも朝鮮を取った事は日本に百年の禍根を残したものだと思ふ」と韓国併合を批判し、「小日本主義」を把持し、「全く国民的生活の上に立つて居らぬ」陸軍の二個師団増設に反対している。

こうして茅原の主張する「人間本位の立憲政治」は、人間存在そのものに依って立つがゆえに、それを圧迫・²⁰阻害する制度や状況を批判の対象とし、「新なる憲政を創造するまで継続的破壊を為さん」と、批判を積み重ねる形で示された。「大なる始めは国家の各機関が新しく目覚め始めたる国民生活と調和するに始まる」²¹のであった。

「大なる終りと大なる始め」掲載から二週間後、大正三年一月二十三日、期せずして海軍高官による汚職事件が発覚する。²²⁾ドイツのジーマンス社が日本海軍の軍艦受注に際し贈賄を行ったことが報じられたのである。同日午後の衆議院委員会で立憲同志会の島田三郎が『時事新報』の記事を材料に政府を追求したことで、事件は政治問題化し、世の注目を集めた。憲政擁護会の結成に加わった新聞各紙は、社会面を中心に汚職を続報するとともに、政治面では議会での政府追及を詳報し、山本内閣打倒キャンペーンを改めて展開した。茅原も六号の巻頭論説「第三帝国は近づけり！」²³⁾をもって内閣の責任を追及した。

海外電報で詳細を探りながら、茅原は事件の責任を現役の海軍大将として組閣した山本権兵衛に見出し、「国民は先づ差し当たつての仕事として山本内閣の破壊をやらねばならぬ」と呼びかけた。一方、政府に国民が「自ら政治を監督し政府の生殺与奪権を獲得する」ことを求めた。大正政変の混乱に乗じ「火事場泥棒」した山本内閣を国民が許容したのは「民意を尊重して立憲的政治を行ふ」と期待したからであり、「制度整理の小成功」に喝采したのも「其剰余金を以て民力充実の資に供する」と信じたからであった。だが、期待は海軍拡張案と贈収賄事件により裏切られた。「山本伯は速やかに辞職するが可い」。内閣を弾劾した茅原は、後継首班人事に「尖頭伯」こと寺内正毅が出たら「又壊してやる」、政友会総裁の原敬でも「壊すまでだ」と言い切り、国民が「偶像を叩きわる音」を「第三帝国の黎明を告げる鐘」と表現した。「又壊してやる」という発言に青年層を指導し政治を動かしてきた自負、これからも動かしていくという強い意志を読み取ることができる。

この論説が発表された日、衆議院で国民党・立憲同志会・中正会の三派が海軍汚職に関する内閣弾劾決議案を提出した。日比谷公園では一年前と同じ光景を見るかのように内閣弾劾国民大会が開かれ、議會を包囲した民衆は暴徒化し、政友会機関誌の中央新聞社などを焼打ち、軍隊が出動し、警官が抜刀して民衆や記者に斬りつける事件が起きた。『東京日日』記者が斬り付けられた事をうけ、「刃傷事件記者連合会」が結成され、原敬内相の責任を追求する運動に発展した。²⁴⁾だが、原は記者たちの思惑を見抜き、「慰問の趣旨」を表明する以外、各社代表による訪問抗議も受け付けなかった。²⁵⁾ジーマンス事件を機に盛り上がった内閣打倒キャンペーンは決定打を欠いたが、貴族院勢力により山本内閣が総辞職に追い込まれたため、表面的には勝利を収めた。『萬朝報』社主の黒岩らは後継内閣にも関与し、新聞ジャーナリズムの勢力は世に認められる所となった。

『第三帝国』は内閣打倒の一翼を担いつつ、青年読者との連帯を形成する新たな目標の設定に迫られていた。これに際し茅原は「新第三帝国論」²⁶⁾を発表している。「近頃の政治的国民運動」で「記者として又弁士として全力を挙げて戦った」結果、「山本内閣の運命が既に尽きた」時、彼の内に「新らたなる奮闘」が起こった。それは「輿論」の力で山本内閣を倒したことで「外に對する奮闘」に区切りをつけ、国民を養成する「内に對する奮闘」へ歩を進めたものであった。ここで茅原は改めて「日本に代議政治を実現しなければならぬ」という課題に目を向ける。「代議政治」の本質を「言論」に見出し、「国民的運動」の主役に積極的な発言を求め、「批評と戦ひ、反対論と戦ひ、之を国民の輿論とすれば善いのだ」と説いた。「国民の輿論として之を廟堂の上に決議」し、その上で「之を属僚に命じて実行させるまでだ」と、国民の声を政治の中心に据えることを唱えた。「新第三帝国論」は「直覺と科学」²⁷⁾が合流する「益進主義」の初志とも言える思想的課題を示しながら、誌上で展開される「論争」と「運動」によって具現化されていた。

二 ベルグソン哲学と「自我」論争―野村限畔「思潮評論」を中心に―

益進会が『第三帝国』創刊以来、依って立つべき価値としてきたのは人間存在であった。その中心をなす「自我」をめぐる議論は、自然主義や白樺派から大杉栄に至るまで、一つの時代思潮を形成していた。²⁸⁾ 同人中で茅原が「益進主義」で示した個人像を継承し、「自我」を積極的に論じたのが野村限畔であった。まずは限畔の「自我論」を考察していく上でベルグソン哲学の影響に注目したい。彼が上京した明治四十一年に日本で初めてベルグソンが紹介された。同四十三年の西田幾多郎「ベルグソンの哲学的方法論」を皮切りに、ベルグソン哲学は論壇の注目を浴び、大正初期に一大ブームを起すが、²⁹⁾ 限畔も処女作『ベルグソンと現代思潮』（大正三年、大同館）によって一端を担っていた。そこで彼の受容のあり方を、西田・大杉との比較から検討し、「自我論」の特徴を解明したい。

西田幾多郎は、日本で最初にベルグソンの哲学を本格的に紹介したとされる。彼の代表的著作『善の研究』で示された、「純粹経験」としての意識現象こそが唯一の「實在」である」という考え方は、まさにベルグソンの影響を強く受けたものであった。

氏（＝ベルグソン、引用者註）の思想の傾向といへば、大まかにいへば、これまで自然科学的研究法が全盛を極め、何でもすべての現象を因果律の鉄柵の中に押し込めなければ實在の説明ができないかの様に考へて居た思想の傾向に反し、我々の精神生活の内に自然法以上の創造的作用がある、我々に直接なる實在界は反つて此の意志活動の世界であつて知識の対象の世界ではない、自然科学的説明は實在の一方面の説明にすぎないといふ現今の思潮に属するのである。³⁰⁾

ここでベルグソンは「現今の思潮」に属する一人として、「認識論を価値の哲学に変ぜんとする」新カント派およびプラグマティズムと並列されている。「ベルグソンの考では我々の知力を知る為には知るのではない。或る利益の為に知るものである、欲求を充す為に知るのであるといふ、此点に於て氏は全くプラグマチストである」。³¹⁾ すでにプラグマティズムの影響下にあった西田にとつて、ウィリアム・ジェイムズの「純粹経験」をベルグソンの「純粹持続」にいかに関展的に継承させるかが重要な課題であった。

両者に連続性を見出そうとする意図は、日露戦後の哲学・思想界が新たに依拠すべき「實在」を強く求めていたことと関わる。その傾向は、『善の研究』の構成が第一編「純粹経験」、第二編「實在」とベルグソンからの強い影響を示しているのに対し、第三編「善」、第四編「宗教」が東洋的な哲学世界を織り成している点に象徴される。西田自ら序文で「純粹経験を唯一の實在としてすべてを説明して見たい」³²⁾と語る通り、彼は西洋思想を素材とし、東洋的な哲学を築き上げるために、依って立つ絶対の「實在」を求めていた。すなわち、西田におけるベルグソン哲学の受容には、新しい「實在」をもとに、総体として日本独自の哲学体系を構築しようとする強い意欲が、原初的な形で示されていたのである。

アカデミズムに属する西田と立場は異なるが、大正初期にベルグソン哲学を積極的に受容した人物として大杉栄を挙げることができる。大正二年四月一日に発表された「創造的進化―アンリ・ベルグソン論」³³⁾から大杉の受容のあり方を検討しよう。

ベルグソンは云ふ。「生とは、或る発達したる有機体の仲介によつて、芽から芽に行

く流れの如きものである」。(中略) 又ベルグソンの所謂「活躍」とは、一榴弾が爆発して、それが又粉々の榴弾となるのと同じ意味のものである。「生とは傾向である。そして傾向の本質は、たゞ其の生長と云ふ事実のみによって、其の跳躍の分れる種々の方面を創造しつゝ、束の形になつて発達する事である」。「各々の種は、其の種の成立せらるゝ行為其者によつて、其の独立を確め、其のむら氣を追ひ、多少の脱線をして、時としては更に坂を登り、そして其の元の方に背を向ける」。

大杉は、ベルグソン哲学をプラグマチズムの延長には置かず、むしろ同属と見なししている。彼にとつて重要なのは、ベルグソンの「創造的進化」に「革命」の可能性を見出せるかどうかであつた。³⁴進化論の系統を整理するなかで、大杉が高い評価を与えているのは、ベルグソンの「創造的進化」における「生」の突発性と跳躍性であつた。さらに「生」の性質の傾向について「目的論」が排斥されていることを指摘し、「将来の仕組を施して、将来を閉ぢて了ふ」のではなく、「生の進化の前には、将来の門が大きく開かれ」「実現さるゝ案以上のものと善いものが其処にある」とされる。ベルグソンをサンジカリストではないと断言しつつも、彼の哲学を革命的側面と保守的側面とに分け、前者を評価し、「生の進化は、発意的運動によつて、目的なくして生ずる創造である」と定義している。

つまり、大杉にとつてベルグソンの「創造的進化」とは、生の突発性に「革命」の実現可能性を読み込み、主体を創出する論理として捉えられていた。彼がベルグソンをプラグマティストとみなした背景には、理念を行動の結果で評価する実存主義的な思考様式に、「創造的進化」の跳躍性を組み合わせ受けて容れ、ソレルの解釈を介し、自らの革命的サンジカリズムに援用しようという意図が伏在していた。「科学的決定論によつて厳密に見し得る系統的、機械的の進歩の外に、それと対立する、過去は知れるが将来の全く予見され得ない、生きた自由自在な創造的進化がある」。³⁵以後、大杉は、革命理論の強化のため、西田らが試みなかったベルグソン哲学の社会論への応用を積極的に行つていく。

対して隈畔の受容とはいかなるものであつたのか。大正元年九月一日、『六合雜誌』の「ベルグソン特集号」に隈畔が掲げた「ベルグソンとニイチエ」³⁶を検討していこう。

ベルグソンは、近世哲学と近代科学により知性と本能に引き裂かれた人間存在を一元的に捉え直し、「更に深い自己の中に、確かな根底を捕へやうと努力し」た人物と位置づけられている。隈畔が特に注目したのは、ベルグソンが「意志の努力に由り、有らゆる知性や本能の束縛を解脱し勇猛なる跳躍に由つて生に飛び付く」点であつた。われわれ人間は「非常なる意志の努力」により、世界の変化の根源たる「生的動力」を発見し、「無限の創造」をしなければならない。逆を言えば、「知性と直観との相互活動に由つて、益々内容を豊富にし、創造力を拡大した進歩せる生に達する」ことができる。

「生は我を通じて働く。私の感覚と霊とを工具として、創造の細工を為す」。³⁷にもかかわらず、人間は「自己の内部に潜在する偉大者」を認識することができない。ベルグソンは「知性（受我）と本能（能我）とを超越して、以て生即ち真我に達することが出来る」と説いているが、われわれが「思想や感情や感覚などに囚はれ過ぎ」ているため、その地点に到達できないのである。要するに、「我々を苦しめ、自由を束縛するもの」は、実は自分自身の「凡ての感覚及び知性」なのであつた。それらが形成する「不動にして団結せる石」を粉碎できる「神聖なる鉄槌」こそ「熱烈なる創造の意志」なのであつた。

これまで社会との調和のもとで説かれてきた限畔の「自我論」は、ベルグソンの説く「創造の意志」に強い示唆を受ける形で転回を見せた。自分自身の思想や感情とは、国家や社会から外在的に与えられながらも、結局の所、自らが築いてきた価値観であった。そこそが「我々を苦しめ、自由を束縛」していたことに気づいたとき、彼はあらゆる束縛からの自由を、「吾人の意志」に基づく「自我」の解放として積極的に唱えていく。

ベルグソン哲学の受容に際し、限畔は、彼が理性と本能を「創造的進化」のもとで相互補完的に捉えた点に「思想中に於いて大いに吾人の意を得た」と述べている。「主知主義」と「実用主義」とを同時に批判しながら、「理性」でも「利益」でも捉えきれない、「直観」によって把握される新しい思想世界を構築しようとしていた。それは「生命を中心とし、活動乃至創造を本位とした哲学」の確立をめざすものであった。

限畔がベルグソン哲学に触発されるなかで積極的に「自我論」を展開した場こそ、『第三帝国』であった。「紛糾に紛糾を重ねた現代の思想は、種々なる影響と幾多の変遷を経て、遂に自我の一点に集中して来た」³⁸⁾。彼が創刊号に掲げた思想評論「現代思想の焼点Ⅱ自我」には自己の存在を「社会」との調和で説く、かつての論法は見られない。むしろ、徹底的に個人の存在に依拠し、「自我」の解放が強く希求されている。人生の「中心」であり「全体」でもある「自我」の「生活経験、生活感情、生活意志」をもって初めて我々は「生命を直覚し味識」することができる。「自我」を「生命の最高形式」と位置づけ、その「創造的發展の限りなき要求」こそが「人生の根底」であり、一切の現象は哲学・芸術から日常の行為に至るまで、「自我」の拡充としての「実人生」の一側面と捉えられる。そこから「自我」の実現の場として「生活」が論じられていく。

「真の生活は言ふまでもなく個性から出立せねばならぬ」³⁹⁾。限畔は、「個性」を「自我」の構成要素とし、「生活」のあり方を説明する。「個性の内部的要求の絶対の權威を認め、これに莊嚴なる祭壇を築き、崇敬する祈禱を捧ぐるものでなければ真の生活は出来ない」。「真の生活」とは「絶対无二の個性」をもって、ベルグソンの「時間的持続」とオイケンの「空間的統一」とを意識的に渾一融合し「生命の表現」をなすもので、何より「個性の尊嚴なる独立と自由」を重んじる場であった。限畔の「自我論」は、「生活」を実現の場に据え、積極的な拡充を唱え、より具体的な方向性を求めている。

「今や時代は個性の自覚を要求して居る。新しき生活の第一歩を踏まむと藻掻いてゐる」。「自我論」を解放から拡充へと展開してきた限畔は、「最早や模倣の弊に堪えない受け売りの思想を放棄」して、「吾人は自ら進んで新理想を建設し、新王国を創造せねばならぬ」と時代への焦慮を顕にし、従来の価値観とともに、西洋の新思想も批判の対象とする。

大正三年四月十六日の「思想評論」を限畔は「日本の思想界は一転期に向ひつゝある」⁴⁰⁾と書き始めている。「二転期」とは、これまで「受動的模倣的」だった日本の思想界が「能動的独創的」へ変わることを意味していた。「理解し把握した「生命」や「自我」を如何に」して「精神的に同化して、我々の生命の血となし肉となることが出来るか」が「猶一倍の努力と勇氣と真正の批判とを要する」課題であった。今こそ「如何にして真正の自我に徹底し得るか」「如何なる生活行為が真に自我の迸発表現であるか」が問われていた。

「具体的自我」の創造と真正の「自我」の徹底とが緊要の課題とされ、「自我」の本性は何であるか」という問いに向き合ったとき、限畔は明確な解答を出せず、「オイケンもベルグソンも之を解釈せんとして起り、トルストイもニーチェもこの問題の為に煩悶

し奮闘した」と述べるに止まっている。ここから彼は「自我」に「形」を求めていく。

一 号の「五月思潮の感想」⁴¹⁾で、隈畔は、評論の「沈滞」を指摘しつつ、『近代思想』掲載の大杉栄「智識的手淫」を「この情気満々たる思想界に大梵鐘のやうに響いた」と高く評価する一方で、『早稲田文学』掲載の稲毛詛風「戦」⁴²⁾を厳しく批判した。「生活は戦である」という稲毛の評論を「論理的遊戯にあきあきした」と難じ、「吾々が深く自己の真実を掘り下げる時、自己の生命を瞬間に於て掴むとき、かゝる鮮かなしつとりした接触が出来なくなつて来はしまいか、そこに真に自己に忠実ならんとするとき戦が起きはしまいか」と疑義を挟んだ。そして、稲毛が「真に自己に忠実ならんと」していないがゆえに、「氏の接触は決してかゝる戦を意味してゐない」と斥けたのである。

隈畔の批判に対し、稲毛は「あきゝゝするとしなひとは君自身の問題であるから僕の関知する所ではないが、⁴³⁾「論理的遊戯」の一語については改めて君の高見を聞かねばならない」と問い返した。「僕にとつて「戦」の一文は最も生々しい事実に即した、換言すれば僕の最近に嘗めた血を吐く様な経験的事象に即した、その上に築き上げた信仰の赤裸々な披瀝告白である」と反論したのである。

翻つて君の「戦」を読むに予が痛切に望むであるやうな随つて今の人々が大に憧れ悩んでゐるものに対して、適当な「警告」も指導も與えて呉れない。(中略) 吾々は

「如何に」戦ふべきかといふ戦の形式を知りたくない。「何者」と戦ふべきかその敵の正体をつきとめて見たいのである。これは稲毛君に既に問題でないかも知れぬ。然し予には大なる問題である。又世間の人々にとつても確かに、何者が真に自己の敵であるか解らない人が多いだらうと思ふ。⁴⁴⁾

稲毛の反論に対し、隈畔は再び筆を執り、「予は予の意識に於て、真に要求の核心に触れてゐない説明及び論説は凡て「論理的遊戯」といふに憚らない」と痛言した。もし「血を吐くやうな経験の上に築き上げた信仰の告白」であるならば、偉そうに自己の戦ひ振りや「矜持の感」を説かず、「君の実際戦つた又現に戦ひつゝある強敵を直接吾々に示し」「その強敵がいかに偉大なものであるか、残忍なものであるか、はた卓越したものであるかを説いて貰ひたい」。だが、稲毛は「敵」の核心に触れず、修飾を重ねるだけであつた。

加えて、「自我をも敵として戦はん」とする稲毛の論理は、「自我は如何なる場合に於ても絶対で自由であり、従つて自我は自分を敵として憎悪したり、或は自分を犠牲にしたることは断じて無い」という隈畔の考え方と本質的に異つていた。したがつて、「敵の方向だけ解つてまだ敵の正体は見えない」と斥けられた。「君の戦ひぶりをきくよりも、君の敵の恐ろしい顔を見たい」「敵の恐ろしい顔と筋肉とに触れて見たい」という発言は、隈畔自身が争闘すべき「敵の正体」を捉えきれずにいたがゆえの切実な訴えであつた。

両者の論争は隈畔の入院により中座してしまふが、稲毛との議論を通じて示されたのは「絶対で自由」な「自我」という、この段階における隈畔の「自我論」の到達点であつた。しかし、それは同時に「敵」の見えない限界点にも達していた。無論、隈畔のみがこうした状況に直面していたわけではない。『第三帝国』が青年読者に支持され、経営が軌道に乗り出したことは、益進会に次なる展開を求めていた。益進会同人は、同誌の思想運動を継続・拡大するために新しい企画を積極的に打ち出し、実践運動を展開していく。

三 「二重生活」否定論争と「新労働問題」論争

内ヶ崎作三郎氏を訪ひ、話が僕の刹那主義並に二重生活否定の問題になった時、氏は『それぢやア一種の宗教ではないか』と云った。勿論、僕は僕の宗教を述べてゐ、また生活してゐるのだが、宗教だとは断らないのは、一般の宗教と同じやうに、善意にも悪意にも、解釈されて、一般宗教の外存外向的な諸道具（世間はそれをいいことにして）が僕にも必要だらうなどと云はれるのが面倒だからである。現代の思想界も文学界も幼稚だから、僕の云つてゐること行なつてゐることを、ほんの、ただの文学論の進歩した物としか思つてゐないのだ。人の手を引ッ張つて天国へ連れて行くことが出来ると思ふやうな浅薄な伝道的宗教は、僕の初めから問題としないところだが、僕の言行は決して宗教に至る道ではなく、宗教その物である。⁴⁵

泡鳴岩野美衛は、大正三年五月二十六日の日記を右のように記している。内ヶ崎との会話にある「刹那主義並に二重生活否定の問題」とは、同年四月より『第三帝国』を賑わしていた論争の焦点であつた。「一般の宗教」と同列に扱われることを嫌いながら、自らの言行を「宗教その物」と断言する姿勢は、泡鳴特有のものであつた。強烈な個性を放つ自然主義作家との論争によつて、同誌は当該期における思想的位置を明示していく。

「自然主義」は、「浪漫主義」における人間生活の全面的解放という側面を現実主義的に徹底することと継承しながらも、浪漫的人間像への批判的な吟味、社会的梗塞への探究などの厳しい知的反省を併せ持っていた。このなかで泡鳴の「自然主義」は、後者の知的反省を欠くほどに、全自我の肯定と積極果敢な生の意欲に満ちあふれていた。⁴⁶その「自我」論は本能的な物欲から社会的梗塞への叫びまで姿を変え、「半獣主義」「刹那主義」という形で示され、宇宙を主宰する「帝王」と自称するに至つていた。「自然主義」は本能的人間の肯定にまで徹底され、人間生活の内的分裂に想到した。それを新たに統一し、人間再建の道を見出す思潮こそ、『第三帝国』の掲げる「新理想主義」なのであつた。

大正三年三月二十日、泡鳴は「編輯主任」石田友治の依頼に応じ『第三帝国』への寄稿を承諾し、論説「事実と批評（二重生活の否定）」⁴⁷を掲げた。彼の批判の矛先は「目的と手段の分離」する政治や社会の現状に向けられた。本領を発揮する場と生活のための手段を用いる場とを使い分け、結果に応じて態度を変えるような生活を「二重生活」と名付けて排撃し、「その人の主義は乃ち実行、その人の実生活は乃ちその人で」なければならぬと主張したのである。論争の発端は「僕は肉霊合致の見地から―返見れば、もう多年間―人生改造の爲め、実生活革新の爲め、人生乃ち実生活は無目的の盲動だと云ふことを主張してきた」という一節にあつた。泡鳴は言う。「肉霊の合致があるところでは、最大最良の人格として、目的と手段との分離を許さず、自己は自己その儘の純全と充実とを得て、これがひとり政治界とは云はず、あらゆる方面の思想、実行、並に生活に実現する」と。そうして初めて「新時代の青年が歓迎すべき徹底した主義の人」となるのであつた。

岩野泡鳴君の『二重生活の弊害』を讀みて、私は一言以て君に質せざるべからざるものがある、君は『多年間、人生改造の爲め、実生活革新の爲め、人生即ち実生活は無目的の盲動心だといふことを主張して来た』と言はれた、私は此に君が『主張』以外、

如何に『実行』せられたかを聞いて自ら裨補したいのである、そうならば私にも直に『無目的の盲動』といふ真意が訳かるであらうと思ふ。⁴⁸⁾

『第三帝国』の主題に関わる「実生活」を「無目的の盲動」とする泡鳴の物言いは、到底看過できるものではなかった。茅原は右のような質問を投げかけ、彼の主張を「戸外より知られた批評」と斥け、「今少しく現実に入し」「何故に彼等が二重生活を為すべく余儀なくせられたのか、国民生活の根柢に到り得て見」る必要性を述べ、自らの姿を真摯に見つめ直すことを勧めた。さらに青年たちが心ならず「二重生活」に陥っている現状を踏まえ、「若し青年に親切ならんとすれば、『我等は二重生活を為さざるべからざる境遇に在る、これを如何にすべきだ』といふ課題を提出して之に解決を与へて遣らねばならぬのでは」ないかと訴えたのである。茅原の穏健な反論に比べ、「益進主義」思想を「自我」と「社会」の調和を企図する点において発展させ、「社会評論」を担当していた松本悟朗は、次のような厳しい見解を頭わにせずにはいらなかった。

僕は本当に真面目な態度には、自己の内部に起る一切の欲望、一切のモーティヴ、人生に於ける一切の事実といふものに対する、深い同情と尊敬と是認とがなければならぬと思ふ。自分としても社会としても到底免れない矛盾や事実を、一個の動機とか一個の主義とかいふものを標準にして、強いて圧迫し或は否認する態度、自分にも他人にも到底出来ないと思はれる事を、一種の感情や主義に囚はれて、誇張する態度、斯うした態度は確かに純全的でない、充実にない、隙のある、偽った態度であると思ふ。此の意味で、僕は泡鳴氏の態度を真面目なものとして受取り得ないのである。⁴⁹⁾

松本は、自身の「二重生活の弊」を認めた上で、「肉霊合致」を体现すると明言する泡鳴に、理想は「口で丈け言ひ得る事で、實際は永久に矛盾や葛藤や分裂や自家撞着に苦しみつゝ悶きつゝ惑ひつゝ悩みつゝ求め懂れ行くのが人間生活の真相ではあるまいか」と問い詰めた。理想と現実の逃れ難い矛盾を、ある動機や主義で強いて否認・誇張するのは「偽った態度」であると非難し、そうした「矛盾」に対する「深い同情と尊敬と是認」の必要を説いたのである。ここで問題となるのは、両者の「自我」の捉え方の相違であった。「自我」の全面的解放を求め自らを体现者とする泡鳴に対し、松本は「自我」の存在を常に社会や他者との関係のなかで捉えている。さらに「我々は流動不断の生活の中に、常に目的を発見し、又は創造しつゝ進む、内在的に目的を認め、不断に此れを展開しつゝ進む」と主張し、「何ぞ我々の生活が無目的の盲動といふを得んや」と反論したのである。

益進会からの反論に対し、泡鳴は自らが「批評若しくは主張（氏の考へる意味とは違ふ）を以って自己の実行乃ち、生活をしている」と反批判の筆を執った。⁵⁰⁾「局外者の批評」という茅原の指摘を不徹底と斥け、松本の批判を「浅薄な臆断」と切り捨て、「僕の思索若しくは批評の範囲に這入った社会の現象や事実を反例し若しくは実証として、僕自身を責め、僕自身を鞭撻してゐる」と主張した。人間の弱さを認める益進会の態度を妥協的と見なし、二重生活の弊害を改めて訴え、「誠実」な生活改革を青年層に求めたのである。

先の批判を一掃された松本は、再び「二重生活否定」を論じ、なかでも「精神生活と肉体生活の合致」に関する見解に異議を唱えた。⁵¹⁾「到底実行の出来ない生活論、処世論程僕

等にとって無意味なものはない」と、人間にとって実現不可能な理想はむしろ現実における人間の弱さや矛盾を隠蔽してしまう危険性があることを指摘した。松本にとって「日々靈肉の矛盾に苦しめられ」、一致を実現するために「悶えつゝ疑ひつゝある」のが人間の真の姿であった。「故にそれが至って無造作に出来る事のやうに、決して自分が現に実現しつゝあるかのやうに言ひふらす」泡鳴の言行は許すことができなかったのである。

さらに「経験的事実」に基づき、泡鳴の思想が内包する全面的自我の肯定という側面に切り込んだ。「自我」は「一つの要求を中心として雑多の意識的経験又は内容を統一して居る所の有機的組織体」である。その中心的欲求の相異やそれと一切の意識内容との関係の相違こそ「自我の自我たる所以」であり、それは「二重生活」として非難されるものではない。加えて「奮り自己の自由を主張するのみならず、他人の自由をも尊重しなければならぬ」と、「自我」を他者や社会との関わりの中で捉える必要性を再度訴えた。そして、「絶対に妥協せざる生活」が実現できるか否かを再考することを泡鳴に促したのである。

二度にわたる松本からの批判によりやく応じた泡鳴は、前妻との娘の葬式を俎上に、「刹那哲理」を実行してきた悪戦苦闘の経緯を述べ、己の「純全生活」の有様を説明していく。⁵²⁾「純全生活」を実現不可能とするのは、松本の意志の有無による。それを実行してきたと自負する泡鳴は、不完全であれ、誠実に努力をする必要を説き、「充実した態度その物が芸術であり政治であり、また生活である」と主張した。さらに「二重生活の否定」に必要な「刹那主義から来る強者の生活を追行」するためにも、まずは自分の「特殊の哲理と特殊の実行」に通じてから批評を下すべきことを松本に求めたのである。

論争の終止符は松本によって打たれた。⁵³⁾松本は「主義と実際との破綻」の事実から「泡鳴氏が能くその主張を実行しつゝあると言ひ張る所に」「謙遜な態度を以て本心に真面目に自己を反省し自己を解剖して居るのか」疑わざるを得ないと、改めて違和感を示した。ここで松本は、泡鳴の「刹那主義」を「全生活をヂャステイファイ」する「氏の人格其物」と見なし、「僕が全然氏の人格又は内部生活に融合同化し得ない限りは、永久に氏の思想を認容し得ない」と、両者の埋まらない溝を表現し、議論を重ねることを止めたのである。

「自我」を人間の中心的要求と捉え、それを基調とする主張を展開していた点で、茅原・松本と泡鳴は、共通の地点に立っていたと言える。だが、「自我」の解放を全面的に肯定し己の言行を「宗教その物」とまで言い切る泡鳴に対し、益進会同人が抱く「自我」は、「絶対の真」でありながらも、他者や社会との関係において常に内省されるものだった。益進会は、自己の内部に厳然と存在する欲求の矛盾や弱さを認め、その地点に立ち続けることで脱却の方途を見出そうとしていた。岩野泡鳴との「二重生活」否定論争は、「自我」を政治・社会的変革との関わりにおいて捉えようとする同誌の根本的な姿勢を世に知らしめるとともに、「自我主義」の多くが非政治的な人間個性の内面性のみに目を向け、政治的社会的変革に主体的に関わってなかったことへのアンチテーゼであった。

『第三帝国』が思想・社会・政治評論により国家の生活化と国民の自立化を訴え、減税および普通選挙の実施を主張していたのに対し、⁵⁴⁾「冬の時代」を過ごす社会主義者たちも帝国日本のあり方に違和感を示していた。同誌は、創刊以来、彼らに誌面を提供していたが、なかでも安部磯雄は主な寄稿者であった。⁵⁵⁾ただし、安部が言及していたのは、益進会が企画する普通運動に関してであった。二号の特集「普通選挙論」に文章を寄せた彼は、⁵⁶⁾有権者が「百人に対し二人二分と云ふ割合」にすぎない選挙の実状を嘆いた。「何人も政

治に関係し、生活をして居る以上」「婦人にも参政権を与へる」のが「最も公平」であると、男女普通選挙の実現を「政治運動の根本」に置く必要を説いている。

運動の一線から退いていた安部は、学理的な研究に沈潜することで「冬の時代」に抗い、「講壇派」として広く社会主義を紹介していた。『第三帝国』における安部の主張は、益進会が「生活問題」の解決のために打ち出した方策と軌を一にしていた。右の選挙論は、東京市政を革新する根本策として「三級制度の廃止」「選挙民の自由意志による選挙の実施」「選挙法取締の改正」という具体的な形で示され、そこから労働者に「経済上の参政権」を与えるための「コーポトナリシップ」の採用が提言されている。⁵⁷⁾

対して堺利彦は「近年流行のあのモツ運動こそ、今後日本政界の根本動力である」と民衆の政治的覚醒に注目し、「如何にあれを指導するか」が「諸君の手腕である」と益進会への期待を表明している。権力獲得の方途は財力と民力の巧みな操縦にあると述べ、「諸君にして若し今の調子で本式に奮発せば、此次の天下は即ち諸君のモノである」と励ましたのである。だが、「其次に僕等の時代が来る」という言葉には、同誌の活動の延長線上に社会主義運動の再建の方途を見出そうとする思惑が垣間見える。

他にも高畠素之や伊藤野枝らが寄稿しているが、同誌への期待と批判を強く表明していたのが大杉栄であった。⁵⁸⁾ 赤旗事件で検束された大杉は、獄中で自らを省み、新思想の獲得のために書を貪り知識の吸収に努めた。服役中ゆえに大逆罪に問われなかった皮肉な運命は、彼をして明治社会主義の克服へと向かわせる。西欧の社会主義に追隨する既存の運動に疑問を抱き、個人を抛り所とする自立したアナキズム理論の確立を目指していく。

出獄後、大杉は自身の「国家」体験を踏まえ、「自我」の拡充を妨げる社会制度に対する反抗を顕わにした。売文社の筆頭であった堺が「正統派マルクス主義」に依拠し「待機主義」に止まっていたのに比べ、血気盛んな大杉は、荒畑寒村とともに雑誌『近代思想』を創刊し、文芸や思想を題材に「生の拡充」を論じた。⁶⁰⁾ 「美は乱調にあり」と訴える無政府主義により歴史の可能性を読み替えることで、知識層と労働者の間に「革命的イデオロギー戦線」を形成しようと試みた。このとき、大杉にとつても、「自我」を神髄とする「生命」の存在は、益進会同人たちと同様に主要な概念に据えられていた。

「自我論や創造論やと共に、誰れが周囲論を試みたか、社会論を試みたか」。⁶¹⁾ 大杉は、『近代思想』大正三年一月号に論説「時が来たのだ―相馬御風君に与ふ―」を掲げ、「近時の我が思想界、殊に文壇に於ける論調の基調」となった自我論や創造論が「周囲の暴圧に対する反逆」と結びつかず、「自我の中に、蝸牛が殻の中にとちこもれるが如く、逃避し」ていることを批判した。大杉は、相馬に現社会組織の欠陥に対する確かな知識を持つて、「誤り作られた所以」を痛撃することを求める一方で、「周囲論」や「社会論」を試みた一人として「稀れに茅原華山君の如き、『万朝報』及び『第三帝国』に於て、多少これを論じてもある」と評している。だが同時に「政治の迷想を解脱しない過去の人」とも表現している。その理由とは一体何か。同誌における両者の主張に目を向けていこう。

大杉の寄稿は、一七号の「欧洲大乱と社会主義者の態度」に始まる。⁶²⁾ だが、この文章が一因となり同誌が発禁処分を受けたことに加え、大杉自身が同年五月に「智識的手淫」をもって第一次『近代思想』を廃刊し、次の準備に取り掛かったため、彼が再登場するのは翌年八月十五日発行の四九号、前号掲載の中村弧月の論説に込めてのことであった。⁶³⁾ 孤月は、無政府主義の方向性と手段について疑問を呈した。「国民の利害を深く考へない」

政治の現状が、普選の要求とともに共產主義運動の傾向を生むのは「人間生活の進化の経路」として首肯できる。だが、運動が成功しても、単に「優劣の逆転現象」が生じるのみで、人類の争闘は永続するのではないか。運動が盲動化する危険性を指摘し、大杉の掲げる「直接の威力」を「真の自覚した政治を行ふために敢てするのも、亦避けなければならぬ」と斥けた。さらに大杉の説く「平等」とは個々人の特質や生活を尊重しない、相互理解の欠如を生み出すのではないかと、彼に回答を求めたのである。

大杉は中村と同時に茅原へ反論を加える形で回答した。⁶⁴資本家と労働者の融和を主題とし、茅原らの觀察を「只だ平面的に日本の現在の事情と西洋の現在の現状とを比較する」のみで、「階級」問題と見ていない点を批判する。社会の両極化で相互扶助の法則が崩れているにもかかわらず、「征服の事実」を維持するために「社会的諸制度」が創られ、巧妙に組織化されている事実を指摘した。ゆえに「全人類の間に完全な相互扶助を可能ならしめんがために、人類の此の階級的區別を根本から絶滅しなければならぬ」と訴え、「経済上には共產の制度により、政治上には連合の制度によって、食物を得るために互に相食む底の所謂生存競争を避けつゝ、各人の生活と自由とを保證」する必要性を主張した。

続けて大杉は「僕は歴史を解釈する主要なる一導線として、所謂物質的史觀説を懷いてゐる」⁶⁵と述べ、欧洲における現代社会の経済組織の解剖を行う。紳士閥が登場し、資本家による社会が建設された経緯を示し、最も顕著な特徴は「階級的争闘を極めて単純な形式に還元して了った事」にあると指摘する。そこで発生した「社会的生産と資本家的領有との矛盾」が、現代社会のあらゆる「反目闘争の萌芽」となり、資本家と労働者を「直接に相對立し相敵視する二大階級」としたと説明したのである。

では、大杉に批判された茅原の主張はいかなるものであったのか。両者の共通点・相違点に留意しながら、茅原の論説「相霑ほす心」⁶⁶を見ていきたい。「日本の産業は日本人の心の内部から湧いた要求に従つてのみ進化した発展すべきものである」。茅原は、現代を「進展の氣運」とするには、「真に日本国民の生活に内化せられたる産業主義」が必要であると唱えた。日本に流入する「欧米の産業主義」には「徹底したる觀察と批判」をもって対峙すべきである。欧米外遊を通じ、熾烈な階級闘争を実見してきた茅原は、それを「欧州人の掠奪的精神の争闘に基因」する問題と捉えた。「物質的要求」を本位とするため、「産業革命以後、現在に至つて欧州の産業は人間としての性情を剥落せしめて来た」事実を示し、欧州の「産業文明」の恩恵には授かつて、決して「争闘的精神」を採用してはならないと訴えた。「我々は人間と人間との關係をもつと人間的に考へ度い」という彼の主張の根底には、「自我」を中心とする人間性の尊重が据えられていたのである。

我々は我々の美しい調和的、自他共有的精神を新しい生活主義の上に忘れてはならないのである、我々相互の關係は飽くまでも人間的に懷抱せられ、相互の抱合的精神に依つて貫かれたものでなければならぬ、我々の労働問題は西欧の産業文明の採用と共に茲に自ら深刻に顧みて自分自身を見失ふやうなことがあつてはならないのではないか。⁶⁷

茅原は「相倚りて双互の生存を安全にせんとする」「抱合的精神」を「日本国民独特の自他両存(Co-Operation)の心」と呼び、「我が生活主義の根底」に据えた。「日本国民の

深い生活の基調から出発」した「自他両存の生活主義」こそ、日本独自の「産業主義」の基調をなすものであった。「生活主義の根底」が異なる欧米の理論を日本に適用すれば、借物の「争鬭的精神」が蔓延り、「日本国民相互の内部的結合」が損われる。したがって、「新しい日本の労働問題」は、サンデカリズムや「効率増進法」などの欧米の理論ではなく、「我々相互の関係我々日本の労働者の心裡を考へ」ることから生じる。ここで茅原は、資本家と労働者が互いに接近し覚醒すること、人間として大なる進化」を遂げ、「物質精神両様の凱歌」を奏し、「真実なる内部的統一」をなすことを求めている。

また一方、大杉が『第三帝国』と対峙する時に「物質的史観説」に立脚していた点は注目される。西欧追随型の社会主義運動を批判し、『近代思想』を創刊して「自我」を起点に独自の運動を模索してきた彼が、茅原の観察を「平面的」分析と批判したのは、茅原が眼前の事実とそれを知覚する「自我」に依拠していたのに対し、大杉があくまで西欧の「物質的史観説」に基づく観察に終始していたからである。

人間相互の理解を「生活基調」とし、「物質的争闘」を消滅させる点と「自我」を政治や社会との関係で捉える点で、茅原と大杉は同様の地点にあったが、問題認識と解決方法が異なっていた。茅原は「新唯心論」の立場から人間性の尊重を根底に据え、日本独特の「自他両存の生活主義」を見出し、資本家と労働者に理解と融和を求めた。あくまで「国家」を「生活」の場から捉え直し、政治的覚醒を遂げた国民が立憲的手段に基づき内側から「国家」を再創造する道を、青年読者の組織化により企図していたのである。

対する大杉は、等身大の個人それ自体を抛り所としながらも、「物質的史観説」に基づいて「征服の事実」を捉え、克服手段を「直接の威力」による階級制度の根絶に見出した。したがって、資本家と労働者、為政者と被治者における理解と融和は成立せず、無政府主義により歴史を革命的に読み替えることで、知識層と労働者の結集を呼びかけていく。

両者の認識の違いは、解決方法の違いとなり、普通選挙運動と共産主義運動に分岐した。階級や主義に囚われるあまり、国内の対立を煽り、欧米の理論を日本の労働環境に当て嵌めてしまうことへの忌避が茅原および益進会にはあった。それは茅原が日露戦後の外遊で経験した東西文明の質的相違に基因するとともに、「国家」体験の違いに基づく人間存在そのものの捉え方と「国家」の存在をめぐる見解の相違に由来していたのである。

以上見てきたように、雑誌『第三帝国』は、従来の価値観が懷疑される「最大過渡時代」に際し、日本人の「生命力」に目を向け、人間存在に依って立った。時代思潮の一端を担うなかで、「自然主義」と「社会主義」を両極に置き、前者には「自我」の捉え方において、後者には改革する対象の認識と解決方法において、それぞれに一定の距離を保ちながら、独自の位置を占めていた。同誌は「実生活」を媒介し、「自我」を「国家」との関係で捉え「個人主義」の横行を抑止する一方、国民を政治的主体に嚮導するための主張を展開していたのである。益進会の使命は、日本人を政治的に覚醒させ、「自我」を「実生活」の場から飛躍活動させることで「国家」の外殻を内側から改善し、「君民同治の新帝国」を創設することに置かれていた。では、『第三帝国』にはどのような青年たちが結集していたのだろうか。次頁の【表10】に示した益進会地方支部を事例とし、同誌における読者の実態を説明していこう。

【表10】益進会地方支部一覧										
番	地名	報告	人数	幹事	支部員					
1	静岡県藤枝町	15(1914.7.16)	12	大畑正三	小宮小四郎	堀恵秀太郎	小川半三郎	笹野宗次郎	小宮虎吉	原木吉之助
					原野敏三	八木市太郎	菊川弘三	安野格次郎	常泉鉄蔵	
2	秋田県横手町	15(1914.7.16)	12	中村清次	伊藤慶太郎	山崎亀次	村上源吉	丹波源一郎	栗澤竹蔵	佐々木一郎
					石川忠太郎	小林文治	長谷川清	川上勝淑	加々谷鉄蔵	
3	山梨県甲府市	15(1914.7.16)	7	三枝次郎	丸茂芳造	松浦米蔵	今井豊太郎	三井徳次郎	萩原勇	大鷹貴祐
4	愛知県海老町	16(1914.8.1)	5	加藤文一	加藤興一	遠藤弘	山本栄男	山田久六治		
5	京都府峯山町	16(1914.8.1)	5	杉浦嘉七	中村準一	松本俊一	鳥井博	和田精一		
6	北見国常呂町	17(1914.8.16)	8	水谷溪月	西村磯三	郷寿吉	長濱四郎	深尾修三	島崎卯一	小林景岳
					吉田直英					
7	秋田県北浦町	17(1914.8.16)	11	伊東晃璋	柴田卯之吉	相澤敬之進	鎌田善次	豊澤貞助	加賀谷新之助	納谷善市
					田沼竹治郎	長門政治	小番友太郎	石井一三		
8	山形県鶴岡町	17(1914.8.16)	5	鈴木秀夫	笹原定次郎	竹澤繁一郎	山口戊吉	廣瀬仁吉		
9	京都府網野町	17(1914.8.16)	6	安田市助	梅田利代蔵	大橋萬二郎	廣西興一郎	池部三郎	梅田市治郎	
10	越後国長岡市	19(1914.9.16)	7	小川四郎	石川末吉	高田誠作	吉田半次郎	小澤寅雄	神保とき	遠藤いま
11	大分県中山杵	27(1914.12.15)	7	宇都宮猛	岩毛元世	本田積	河野通信	山香義憲	荒木娛郎	清成馨
12	長野県上山田	27(1914.12.15)	7	山崎親喜	山崎等	若林嘉幸	宮原英一	田島国應	小山新	宮原信男
					小出正喜	石井太伊蔵	高田義弘	豊永鶴一	土屋義徑	新堀重一
13	肥後球磨	28(1915.1.5)	8	岡崎北走	岡崎北吉					
14	兵庫県国領	28(1915.1.5)	6	中澤潔郎	細見文治	細見哲之亮	細見教一	越賀亀蔵	近藤隆三	
15	秋田県能代	30(1915.1.25)	6	相澤愛水	城間恒人	越前彦蔵	西村莊右衛門	西村久吉	宇野猛太郎	
16	名古屋市	30(1915.1.25)	7	松田操	須賀新一郎	神谷誠道	芹澤次晴	吉瀬増太	和田光治	間瀬謙二
					井上一郎	西村齋一郎	小林匡男	石川正儀	吉田正信	
17	千葉県千葉町	31(1915.2.5)	10	生方誠	古谷拓之	浅見忠	長谷川千浪	伊原恒		
18	群馬県茂呂町	31(1915.2.5)	5	井上丑蔵	佐藤幸太郎	石原祐次郎	鈴木伸次郎	根岸正吉		
19	北海道河西	32(1915.2.15)	6	西川武之助	福澤善助	阿部敏牛	田中信吉	佐藤直治	岩本臥雪	
					桶尾喜三郎	徳永権光	尾畑乙蔵	中西久次郎	小中善吉	福崎武人
20	山口県安岡	32(1915.2.15)	8	安村辨介	原田才五郎					
21	名古屋市東区	33(1915.2.25)	5	後藤隣平	佐藤五夫	林政治	佐々成一	桜井成行		
22	富山県滑川町	33(1915.2.25)	5	松井景治	島田房吉	柳原政吉	飯塚清重	東谷林次郎		
23	富山県三日市	33(1915.2.25)	11	木下清弑	倉田幸次郎	長谷川栄吉	平田三四郎	女川栄吉	中川耕吉	辻三四郎
					松倉平六	島田清太郎	松野乙次	太田清次		
24	山梨県飯野村	33(1915.2.25)	6	飯野義雄	齋藤昇次郎	中込精一	飯野孝平	米山貞太郎	中澤榎	
25	岐阜県羽島郡中屋村成清	35(1915.3.20)	6	丹羽淳一	森義一	藤田勇太郎	森久市	可児利一	松尾政司	
26	青森県富木館村	37(1915.4.15)	5	横山喜代造	神多七	佐藤倭	三上孝三郎	今井七兵衛		
27	鹿児島県花岡村	38(1915.4.25)	5	寺脇浅吉	塚田秀山	中村虎蔵	八木寛次郎	竹下清天		
28	茨城県上郷村	38(1915.4.25)	7	秋田茂十郎	染谷久之助	片手徳太郎	石田哲四郎	土田晋作	中山健二	輕部彦十郎
29	岡山市西中山下47石黒方	39(1915.5.5)	6	武野一雄	入江栄一郎	石黒忍	延澤恒雄	木村武	菊地武彦	
					小倉正光	武藤辰雄	村田久義	向山鬼	武川清行	田邊那作
30	山梨県東山梨郡松里村	51(1915.9.11)	8	雨宮幸一	廣野幸貴					
31	熊本市新屋敷72	51(1915.9.11)	7	牧野弑太郎	西芳雄	美作次郎	堀一郎	竹崎モト	丸田エイ	林憲輔
					佐川信一郎	砂金甚壽郎	林賴作	菅原民治	菅原銀蔵	
32	宮城県遠田郡南郷村二郷	56(1915.11.1)	9	木下凌	佐々木孝	木下仲蔵	川田泰助			
33	山梨県北巨摩郡韮崎町2001	56(1915.11.1)	7	矢崎仁質	華輪謙蔵	久保田武雄	武川増太郎	柳本経武	功力五郎	立花範平

第二節 「第三帝国」の支持基盤―秋田県内における益進会支部を事例に―

大正四年（一九一五）七月十四日、「第三帝国益進会横手支部の招聘に依り、茅原華山氏は福来博士石田望天氏と共に、来る十八日直行（朝）にて来横せらるゝことに決定した」との報せが『秋田毎日新聞』の一面を飾った。⁶⁸この記事こそ、本論文の冒頭に【写真1】として掲げた「東北講演旅行」の開催を地域住民に伝える第一声であった。この企画が通常の講演旅行と一線を画しているのは、それが益進会の側からではなく、支部員からの「たより」が契機となり、つまり読者からの要請に応える形で実施されたことであつた。⁶⁹

■横手支部より（秋田県） 暫く通信を怠つてゐましたが例会は毎月開いて居ります、集る者は拾名以内の少数でも議論いつも盛んなものです、四月の例会は去る廿八日の午后七時から開きましたが来り会する者九名、種々な談論の末、第三帝国講演会の事が議題になりました、是は先月石田氏に御会ひした時にも一寸お話して置いた筈ですが、臨時議會閉会後茅原氏と石田氏に来て頂きたいと思ひます、是は唯に我々や当地の人々の為のみではなく、又第三帝国拡張運動の一つになる事を信ずる者であります、此事に就ては何れ案を具して正式に御相談致す積りですが、本部の方でも御考置を願ひます、尚大塚七郎君は新たに入会せられましたから御紹介申します。

二伸当支部員一同は石田主事の御結婚に対し、心よりの祝意を表します。

（秋田県横手支部幹事中村清治）

すでに同様の要望は「同志短信」に寄せられていたが、「第三帝国拡張運動」として地方講演旅行が実現したのは、秋田の地が石田主事の故郷・赴任地であることを含め、『第三帝国』にとつて重要な支持基盤を形成していたからにほかならない。石田の結婚祝いを「凱旋」講演で実現したいという支部の声は、読者を代表し、同誌の活動に影響を及ぼすほどに成長していた。本節の課題は、秋田県内に設置された三つの支部を取り上げ、構成員および具体的な活動をさぐり、従来の研究では看過されてきた雑誌『第三帝国』の読者の実態を明らかにすることである。横手・北浦・能代の三支部は積極的な運動参加により講演旅行を実現に導くなど、同誌の地域的基盤を考察する上で不可欠の事例である。支部員たちがいかなる期待を寄せて結集し、何を獲得・継承していくのか。青年読者における思想受容の有様を検討することで、益進会同人との思想的連関を解明したい。

一〇号掲載の谷口吼洞は、「討閥護憲」や「民本主義思想」の文字とは程遠い岡山県加茂村の現状を報告している。⁷⁰「村の中堅人物青年団の人達」が旧思想に囚われたままであることを嘆き、「民本政治の思想」を「日本の隅から隅へ徹底」させるために「先輩の人達の田舎行を切望します」「希くば導火の一線を田舎へ！」と訴えたのである。

こうした声を受け、益進会が読者結集の新企画として展開したのが、地方支部の設置であつた。大正三年六月一日発行の一二号で、「熱烈な新思想を有する五名の読者が集まれば、其地方に於ける一勢力と為れる、此一勢力が例えば自治体革新といふような確実な目的に向つて活動せられたならば第三帝国の創造も決して艱難ではない」と、全国の読者へ支部の結成を促した。ここで「自治体革新」という明確な目的が掲げられているのは、同誌の言論活動が、日露戦後経営のもとで軍備拡張を担う新たな「国民」「地域」が創出されようとしていた地点にあつたからである。⁷²地方改良運動などを通じ、地域行財政の整理

が推進されるなか、益進会同人は、これに抵抗・対決する姿勢を打ち出し、自生的・内発的な「自治体革新」に基づく「第三帝国」の創設を求めた。「田舎行を切望する」読者に「将来諸君の活動を総合し大成するの時期が到来する」と答えながら、以下の八つの支部准則を提示した。⁷³「一、益進会支部は直接購読者五名以上を有する地方に之を設く」「一、支部の名はその地方の市区町村名を以て之に冠す」「二、支部員は一同協議の上、其支部の規約を作り、幹事一名を互選す」「一、幹事は支部一切の事務に当り、本会と連絡を取り、『第三帝国』の主義思想を宣伝す」「一、支部は時々研究会、演説会、講演会を開き、其他適宜の方法により其の地方の精神上実際上の問題に活動す」「一、支部員は三ヶ月以上の直接前金購読者に限る。支部員に限り三ヶ月分前金五十銭とす」「一、支部には支部員名簿を備付く」「二、支部には備付用として『第三帝国』一部を贈呈す」と。

「上から」の地域再編のなかで呼応した読者は少なくなかった。静岡県藤枝を筆頭に、北は北海道から南は鹿児島まで全国三三ヶ所で支部が結成され、設置報告に実名を列ねた読者は総勢三〇〇名を越えた。『中央公論』などに比べて規模は小さいものの、読者の実態が把握できるという意味で稀少な事例である。また、同誌に対する読者の思いは、主体的な活動となり、やがて普通選挙運動などの政治的実践を支える重要な基盤となっていく。

一 「靈肉合流」の「新帝国」——横手支部の場合——

秋田県内でいち早く支部結成に呼応したのは横手の青年読者であった。それは何より「主事」石田友治の存在と深く関わっていた。⁷⁴彼が明治四十年（一九〇七）にディサイプルス派の牧師として横手に赴任したことはすでに述べたが、加えて、支部員である加賀谷鉄蔵（一八八五—一九一九）には友治の妹ユキが嫁いでいた。⁷⁵鉄蔵は、横手でも名の知れた地主兼豪商「加賀谷田右衛門」（通称「加賀田」）の長男として生まれ、横手中学卒業の俊才であったが、元来体が弱かったため家業を継がず、政治や文学に精を出していた。『秋田魁新報』を辞して、茅原らと『第三帝国』を創刊し中央論壇で活躍する義兄の号令に応じ、本部とのパイプ役を務めることは、彼の情熱を燃やすに相応しい仕事であった。

だが、横手支部は、石田の血縁のみで結成されたわけではない。より積極的に運動に関わる主体が存在していたのである。大正三年七月十六日発行の一五号では、横手支部の結成が全国に先駆けて報告されているが、支部員一二名は【表11】のようであった。

まず目を引くのは全支部員が「外町」と呼ばれる商人町出身ということである。久保田領下の城下町であった横手は、戊辰戦争の際に戦場となり、横手城が焼失し、一時、市街地は荒廃した。だが、以後は陸路での玄関口として、県内でも中央からいち早く西洋の文物が入る先進的な地域であった。⁷⁶町の中央を流れる横手川を挟み、北側（城側）に武家屋敷の並ぶ「内町」と呼ばれる武家町があるのに対し、南側には商工業者の住む「外町」があり、本町・四日町・鍛冶町は横手商店街の中心であった。結成当時の支部員の年齢を考えると、商店街の若旦那衆が集まっていたと言える。

次に学歴に着目すると、彼らの多くは横手中学の同窓生であった。横手中学は、明治三十一年三月、秋田・大館に続き秋田県第三尋常中学校として創設された中等教育機関である。⁷⁷中学への進学率が全体の一割に満たないことを考えれば、彼らは地元に残る青年のなかで最高水準の教育を受けた地域の知識階層であった。

丹波源一郎は「支部たより」で「毎月支部会を開き、思想の交換、政治的覚醒に努め、

『第三帝国組』を以て青年会の中心となしたき考に候⁷⁸⁾と報告している。彼らが結集した場こそ、明治四十五年五月に横手中学出身者を中心に発足し、「精神の修養に努め我町の悪風を根底より革新し一致団結社会に貢献する目的を以て組織⁷⁹⁾」された横城青年会であった。伊藤慶太郎をはじめ、栗沢竹蔵、加賀谷鉄蔵、石川忠太郎、小林文治ら支部員の多くが参加していた。地域の知識青年たちが官立の改良運動ではなく、同誌の言論を新たな指針として受け容れ、活動していたことが窺い知れる。

先導役は幹事の月城中村清次であった。中村は、岐阜大垣の出身で、明治四十四年四月に東北学院専門部神学科を卒業し、日本基督教団（長老派）横手教会の初代牧師に就任した。彼は伝道のかたわら、『秋田魁新報』や『羽後新報』などに筆を執る地域の文化人であった。中村の幹事就任は、「丹波君等数名の青年有志が官立的な青年団に反対し、修養を主目的とした民主的青年会を組織し私に相談役になってほしい⁸⁰⁾」と依頼したことに始まる。「月城文庫」と称し蔵書を貸し出し、読書会を毎月開催するなかで、「茅原華山君が万朝新聞社を退社して雑誌『第三帝国』を発行し、横手に支部を設けたので、私が支部長となった⁸¹⁾」という。地域青年の要請で始まった教会牧師による文化活動が横手支部のもう一つの礎であった。

横手支部は、幹事中村宅に事務所を置き、毎月十日に例会を開くことを決議し、活動を開始した⁸¹⁾。その後の報告によると、例会の開催日は必ずしも一定しなかったものの、新会員を積極⁸²⁾に勧誘し、毎回一〇名前後の出席者が見られた。例会では、最新号が回読され、「思想の交換」「政治的覚醒」に努め、さまざまな議論が繰り広げられた。彼らの同誌の言論に対する意識を次の史料で検討していこう。

然し如何に日本人の物質的生活方面がヨーロッパ化されても、日本人の思想なり、生活問題なりがヨーロッパと同一になるとは断じて思へぬ。之れ両者は其歴史を異にし、且其置かれたる状況を―現在及び将来ともに―異にしてゐるからである。要するに御風君の議論は歴史を無視し、状況を無視したるもの、換言すれば背景を無視したるものである。然し乍ら華山君の議論は又余りに背景に拘泥しすぎたものである。歴史は如何にもあれ、既に現在世界的の影響を受けつゝある我国の社会問題なり、生活問題なりが漸次世界化さるゝのは誠に当然のことではない乎。既に我国にもヨーロッパに似たやうな社会問題や、生活問題が随所にある⁸³⁾。

【表11】横手支部の構成員一覧

	氏名	生没年	年齢	出身・居住	学歴	職業	備考
1	中村 清次(月城)	1883～1960	31	(岐阜大垣)	東北学院	牧師	幹事
2	伊藤 慶太郎	1867～1946	47	鍛冶町	—	銀行員	後に平鹿郡会議員
3	山崎 亀次	1890～1962	24	—	横手中学	役場吏員	後に横手町助役
4	村上 源吉	1892～1977	22	四日町	横手中学	酒類商	
5	丹波 源一郎	1891～1987	23	鍛冶町	横手中学	酒類商	後に教会牧師
6	栗澤 竹蔵	1891～1971	23	四日町	横手中学	紡績糸商、洋品店	
7	佐々木 一郎	1898～1964	16	鍛冶町	—	製麴販売	後に横手市長
8	石川 忠太郎	1887～1952	27	四日町	横手中学	畜産・牛乳商	
9	小林 文治	1886～？	28	本町	横手中学	骨董商	
10	長谷川 清	1881～1945	33	四日町	—	写真業	
11	川上 勝淑	1861～1924	53	本町	明治法律学校	弁護士、県会議員	
12	加賀谷 鉄蔵	1885～1919	29	四日町	横手中学	呉服商	

(『続横手郷土史』および聞き取り調査より作成)

幹事の中村は『秋田魁新報』に掲げた論説「日本とヨーロッパ―茅原華山君に寄す」で『第三帝国』で茅原と相馬御風が繰り広げていた議論を取り上げていた。⁸⁴その議論とは、相馬が日本人の思想・精神における徹底的な西欧化を説いたのに対し、茅原が日本には日本の歴史や風土に合った生活と思想・精神が存在すると反論したものであった。中村は両者の見解をかたや「背景を無視した」、かたや「背景に拘泥しすぎた」極端な議論と批判し、生活のありのままを見る必要性を説いたのである。

ここで重要なのは、中村の茅原評が妥当か否かではなく、論評を加える姿勢にある。続けて彼は「華山君の如きは我国思想界の雄である」と賞賛しながらも、「近頃の言論は反動的に、少し極端に趨つたやうな傾き」があると、「模範落選」以後の茅原の言動を冷静に分析している。横手の一牧師が中央論壇で活躍する論者たちの議論を主体的に受け止めながら、対等の立場で意見を発している態度が認められる。では、彼は同誌の思想運動をどのように受容していたのか。「自我」の実現という課題に即して考察していこう。

「恒常の世界、久遠の救主。眼に見ゆる世界は無常、流転の世、穢土、憂き世である。然し、此の塵の世にうつろひ易き色身の体を以って逃れすむべき恒常の世界がある。それは心霊の世界、神の霊を此土器（肉体）にうけて、彼とともに住む神の国である」。⁸⁵中村は、既成の秩序への違和感を解放し、「生命に満ちたる生活」を実現すること、「靈肉一致の新帝国」を創設するという同誌の主張を自身の信仰世界に引き寄せて理解していた。それは「神の霊」が「己の肉体」に宿ることで正しい「意志」となり、「神の国」の実現に貢献するものと捉えられていた。つまり、中村月城にとって、「第三帝国」とは罪深き己の肉体が神の霊によつて清められ、地上における「神の国」創出の主体となつて奉仕していくという信仰の理想像と重なり合っていたのである。地上の政治主権者を神の意志によると見なすか否かは、近代日本のキリスト教会において重要かつ解決困難な課題であった。⁸⁶彼は解決の方途を「神の国」すなわち「第三帝国」創出という思想運動に見出そうとしたのである。幹事中村の受容のあり方に横手支部の本質があるとするならば、それは「靈肉一致」「東西合流」の「新帝国」を宗教的な側面で解釈し、そこから地上における政治秩序の改革を志向する運動として把握することができよう。

中村における受容は、支部の中心人物であつた丹波源一郎に影響を与えていく。⁸⁷丹波は、鍛冶町で酒造業を営む春吉・イヨの長男として生まれた。横手中学卒業後、同級生が上京・進学していくのを横目に、家業を継いだ。故郷に止まらざるを得ない境遇を嘆くなかで、酒の密造で逮捕され、獄中で「生きる意味」を自問し、キリスト教に出会つた。丹波が横手の現状を憂い、横城青年会の中心として活躍していたのは、まさに彼自身が信仰に目覚め、人生の「道」を発見した時期であつた。横手支部の活動を牽引していたのは、地域青年の活性化という課題に取り組む彼の情熱とキリスト教信仰だったのである。

丹波が共鳴したのは、『第三帝国』の思想運動が自らの境遇を克服しようと新しい価値を求めていた彼の思いをすくい上げたからであつた。その思いは中村月城を介し、地上における「神の国」の実現をめざすものとして「形」を与えられていく。その後、丹波は、酒造業が倒産し、小売酒屋「阿桜酒造」を始めると、経営を一橋専門学校で経営学を修めた弟勝次郎に譲り、伝道に生きることを決意する。大正十一年二月十五日、「出家」と称して横手を離れ、福島県平市で牧会していた中村を訪ね、決心を打ち明けた。中村の勧めで東北学院で神学を修め、卒業後、秋田県能代町に伝道所を開き、信仰の種を蒔き続けた。

二 地域自治と教育の革新―北浦支部の場合―

大正三年八月一日発行の一六号に秋田県本荘町の石井一成から「暑中休暇で帰国いたし、北浦に支部を設くる様に尽力し、辛つと十名位の会員出来の見込立ちし故、後は弟と伊東晃璋君に依頼して当地に参り候⁸⁸⁾」との報告が届いている。同誌の活動を「涙の出るほど嬉しく」思う彼は支部結成のために弟の職場や同窓会などを奔走したという。政治および思想運動への飢え渴き、社会変革への渴望こそ、同誌の動力源であった。こうした石井個人の努力の上に、後を託された弟の⁸⁹⁾一三と伊東晃璋の尽力が重なり、北浦支部の結成が報告されたのは、一ヵ月後の一九号であった。支部員一名は【表12】の通りである。

支部員の経歴を見ると、地元の小学校で教員をしていた伊東を中心に、北浦町会議員、銀行員、郵便局員、町医者などの地域の知識階層に加え、酒類商、薬種商、呉服商などの商店街の若旦那衆が名を連ねていたことがわかる。このような人々が、『第三帝国』の活動に参加してきた背景には、当時、北浦という地域が置かれていた深刻な状況があった。

かつて北浦は男鹿半島における「北の首邑」として活気を呈し、「船川と相対の称を縦にすべき価値を有」する港町であった。⁹⁰⁾日本海沿岸の流通では、冬を除き、重要な「物価集散の中心地」として繁栄し、米の生産・魚介の収獲・石灰石の産出に加え、「大官林」を所有する山漁村で、「鮪の大謀網」の本場として名を馳せた漁港でもあった。

だが、明治四十四年六月、臨時県会での議決を経て、船川築港事業が着工されると、状況は一変する。⁹¹⁾天然の良港として知られる船川港の近代的港湾整備は、財政上の問題や県会内の派閥争いなどで実現されてこなかったが、同四十年三月、軽便鉄道法の制定に伴い、築港の気運が高まり、従来の対立も解消して第一期工事が行われた。大正三年には、第二期計画として海面埋立、防波堤築設などの工事設計が完成し、第一期と合わせ予算総額を三一五万円と定め、工期を同十一年まで延長することが議決され、内務省に認可された。

港湾整備と相俟って、後方連絡の必要から船川線軽便鉄道が着工、大正五年十二月まで追分・船川間の敷設事業が継続された結果、陸海の連絡が円滑となった船川港町は地域経済の中心として急速に発展した。一方、海上運輸に依拠してきた北浦は、陸路との連結で遅れをとっていた。地域の経済構造に変動をもたらしたのは、森正隆県知事の「積極政策」であった。森は原敬と親交のある人物で、利益誘導型の地域行政を展開、船川築港・鉄道事業を最大事業として進めていた。

【表12】北浦支部の構成員一覧

	氏名	生没年	齢	出身・居住	学歴	職業	備考
1	柴田 卯之助	—	—	—	—	—	初代幹事
2	相澤 敬之進	—	—	北浦？	—	—	
3	鎌田善治(博介)	1878～1971	36	相川	明德小学校	酒造業、町会議員	後に北浦町長
4	伊東 晃璋	1889～1944	25	船越	横手中学校	小学校教員	2代幹事
5	豊澤 貞助	1891～1953	23	北浦	鹿山小学校	呉服商	後に町会議員
6	加賀谷 新之助	1892～？	22	北浦	鹿山小学校	薬種商	後に北浦町長
7	納谷 善市	—	—	入道崎？	—	—	
8	田沼 竹治郎	1895～1927	19	北浦	鹿山小学校	酒類商	後に青年団長
9	長門 政治	—	—	—	—	—	
10	小番 友太郎	—	—	戸賀？	—	—	
11	石井 一三	—	—	船越？	—	—	石井一成の弟

(『男鹿市史』および聞き取り調査より作成)

こうした県政の動向は、地域利害を含みながら、中央政界と連動していた。特に第一次護憲運動のさなか、首相の桂太郎が新党の結成を図った影響は大きかった。これに伴い野党第一党の立憲国民党は分裂し、秋田でも町田忠治・斎藤宇一郎・井上広居・添田飛雄太郎の四代議士が政権獲得をめざして桂新党に身を投じた。⁹²この動きが、大正政変後、大きなうねりとなっていく。黒岩涙香率いる『萬朝報』が山本内閣打倒キャンペーンを牽引し、大隈内閣への支持を強めると同時に、東京市議会選挙で政友会勢力の打倒に尽し、『第三帝国』もその一翼を担っていた。したがって、政友会派の「積極政策」により地元経済が危機に瀕していた北浦の青年にとって、同誌の活動は商工層をおもな支持基盤とする立憲同志会の延長線上に置かれていたと考えられる。

だが、支部員たちは一連の動向を政界変動に伴う政党間の抗争という次元ではなく、自分たちの生まれ育った地域の自治を脅かす深刻な問題として受け止めていた。それは彼らが「郷中」と呼ばれる自治組織と関わっていたことによる。「北浦郷中」は、北浦部落から選出された八人の戸主が「委託員」となり、月番で寄合を開き、山入会の使用、漁の解禁、土木事業の遂行など村の行財政に関わる重要事項を議決し、部落民への指導を行っており、支部員の中では豊澤家と田沼家が代表を出していた。当時の「北浦郷中決議録」によると、田植え時の禁酒や法事の質素化、官有地払下げをめぐる討議、共有地の貸出し願いなどが管見される。また、鰯漁の解禁に際し、「定置漁場壱戸ニ弐統着業スル事許サズ」と濫獲を戒め、従来の漁法を続ける指示が出されるなど、地域経済の変動に対応を迫られる自治組織の葛藤を見出すことができる。つまり、県内最大の公共事業は、北浦支部にとっては、地域共同体における自治組織の危機という緊急事態を意味していたのである。

北浦で『第三帝国』が受容された理由は、地域自治の側面からだけではない。幹事の伊東晃璋（一八八九～一九四四）に即して言えば、それは教育分野から、広義における日本の近代化をめぐる問題として受容されていた。伊東は、南秋田郡船越町の真宗大谷派、善行寺に生まれた。⁹⁴明治四十一年に横手中学を卒業した後、父が保証人となった他人の借金をかぶり広島高等師範への入学を諦め、秋田師範学校本科第二部に学んだ。翌年三月より南秋田郡脇本や飯田川の尋常高等小学校の訓導を歴任した。大正元年九月二十一日、北浦表町の鹿山尋常高等小学校に訓導として赴任、以後約二年半の間、教鞭を揮いながら、同誌の活動に接していく。では、彼はいかなる境遇から応じ、何を獲得していったのか。当該期に伊東が書いた二つの文章を比較・検討することで、その内容を明らかにしたい。

順境者は、或一部の人を除きては、恐らく羨望するに足る者なけん、逆境者は、何ぞ自己の窮境を歎き悲しむの要あらんや。若し勉学の余暇十分ならずとも、熱心なる研鑽は、能く其の欠を補ふべし。又大家の卓説を聞くの機を持たずとも、幾多の自修書は、その屈せず撓まざる力と相俟ちて、絶大なる卓見を開発せしむべし。且や彼等は、人世の辛酸に遇ひて、以て自己の意志を強固ならしめ、心胆を練磨せしむべければ、その経験は、世上幾千の修養録を読むに勝ること万々ならん。⁹⁵

右は、伊東が師範学校在学中に母校横手中学の『校友会雑誌』に寄稿した「逆境を論ず」と題する文章である。彼はこの一文をもって、向上心旺盛な後輩たちを励ますとともに、自らの境遇をも積極的に受け止めようとしていた。彼はいう、例え「学資の欠乏、生活難

等の事情に拘束せられて、自己の素志を達すべき道を失ひ、空しく逆境に沈むことの止むなきに至る⁹⁸。とても、空しく悲嘆するのは止めようと。「順境者」でありながら怠惰な生活を過ぐすより、「逆境者」としてたゆまぬ研鑽と修養とを積み上げる方がいい。「人世の辛酸」をなめることは、己の意志を強める「経験」として、「大家の卓説」「幾多の自修書」にも勝るというのである。この「逆境者」こそ、広島高師への道を断念せざるを得なかった伊東自身の姿であると同時に、上昇意欲を持ちながらも現状に充たされず、鬱勃とした心情を抱えて『第三帝国』に結集してくる青年たちの姿にほかならなかった。

ここで茅原の唱える「益進主義」を想起する必要がある。「益進主義」は「自我」の実現を社会進歩に貢献する形で果たし、さまざまな欲望や矛盾を調和していこうとする同誌の中心思想であった。彼は、周縁にこそ新文明が生み出されるという独自の文明観に基づき、国家に再編されようとしている「地方」の青年層を社会変革の主体に指名した。

事実、青年たちが望んでいたのは、己の置かれている「逆境」を既存の「順境」にすることではなく、「逆境」を「順境」以上の内容を持つものとして飛躍させることであった。彼らは立身出世に憧れながら、異なる評価軸を獲得することで、人生の価値を逆転させる契機を求めていた。この価値が獲得されるべき場は「実生活」であった。「実生活」における欲望の存在、その多様性と無秩序性こそ、己の要求を受け付けない既存の秩序への違和感の集合体であり、帝国日本の支配原理を打破、再構築していくための突破口であった。

伊東にとつての「実生活」は学校教育の現場であった。教員となった彼は『第三帝国』の活動に接するなかで、横手中学校校友会誌『みいりの』に文章を再び寄せている。⁹⁶ここで批判されているのは教育界における教育思想の急激な受容とそれが定着しない現状であった。「余りに流行が急激に変化してゆくのであつて其内容を究めない中に最早下火になつて了ふ」とは、教員生活に忙殺される彼自身の体験に基づく現場教師の声である。自己の研修よりも教員内での地位を守ろうとする態度が蔓延り、「理論」と「実際」が乖離し、日本の将来を担う子供たちが最大の犠牲者となっている。

この問いは、単に教育界にのみ投げかけられたものではない。近代日本における思想・文化受容の皮相的なあり方に対する、さらには個性を喪失させる画一的な教育を生み出した近代合理主義への根本的な疑義であった。そこに「人間存在」に依拠する『第三帝国』の「新理想主義」が共鳴を呼ぶ理由を見出すことができる。こうした根源的な問いかけは、同誌の思想運動に参加するなかで培われ、やがて彼をして独自の教育方法へ進ませていく。

この後、彼は南秋田郡各地で小学校の教諭・校長を歴任するとともに、中学卒業以上の青年たちを集め、「智識階級の青年の結合団体」⁹⁷として男鹿琴湖会を結成していく。そこで教育世論の喚起を促し、健全な思想の涵養・人格の修養に努め、社会的活動の基礎を確立することに尽くしたのである。とりわけ十年間にわたる「男鹿夏期大学」の開催は、同会における教育活動の金字塔といえる。第一回大会は、大正十年八月十一から十六日まで船川港町小学校で開かれ、堀江帰一（慶應義塾法学博士）、友枝高彦（東京帝大・文学士）、小原国芳（東京成城小学校主事）、松原寛（大阪毎日新聞記者）を招いている。以後、桑木巖翼、富士川游、綿貫哲雄、阿部次郎、新明正道などを招聘し、地元の青年有志に名士の卓説に触れる機会を与えた。⁹⁸男鹿の寒風山にある石柱「誓之御柱」は、昭和五年（一九三〇）に伊東たちが夏期大学一〇周年を記念して建立したものである。⁹⁹

三 政界変動のなかの地域青年―能代支部の場合―

県内で最後に設置されたのは能代支部であった。結成報告は、大正四年一月二十五日発行の三〇号に届けられているが、能代の場合、支部員に名を列ねていない五空島田豊三郎（一八七五―一九二八）の存在が重要であった。¹⁰⁰五空は、能代市畠町の米屋の次男に生まれ、長兄の夭折・父の死去に伴い、幼くして「豊三郎」を襲名した。小学校卒業後、本家「島田治右衛門」の奉公に入ったが、明治二十七年（一八九四）に天風小林徳太郎と私立能代図書館・印刷所を設立、さまざまな刊行物を発行し、地域の文化定着に尽した。とりわけ同三十六年八月創刊の『能代商報』は、同四十三年十一月に『北羽新報』と改題、能代随一の歴史を誇る地元紙として、政治や文化の発展に貢献していく。

こうしたなかで五空が傾倒したのは俳諧であった。佐々木北涯との出会いから、新聞『日本』における正岡子規の俳論を知り、自ら北斗吟社を創立、雑誌『俳星』を創刊した。同誌は、能代のみならず県下の俳句界を隆盛に導き、俳句を志す者は勿論、知的好奇心旺盛な青年たちにとっても「思想文化への窓」として大きな役割を果たしていた。

そのかたわら、五空は政界にも進出していく。明治三十年の能代実業会への加入を機に山本郡青年同志会（憲政本党派）の一員となり、同三十六年十月の初当選から郡制廃止まで郡会議員を続け、副議長・参事会員などの要職を歴任した。さらに同三十七年四月には能代町会議員選挙に二九歳の若さでトップ当選を果たし、昭和三年（一九二八）まで当選し続ける。明治から大正にかけて、彼の政治活動は県議会進出をめざし顕著となる。特に大正三年二月の営業税廃止運動では、中央政界と連絡をとり、中心的な役割を演じた。

今茲に大正三年皇上登極の盛典を宣せられ国政応に更始一新を期すべきの時に当り、外は貿易の権衡を失し、内民力の窮乏を告ぐ、是れ国税の負担重過にして、国民の資力と相応ぜざるに由る。就中、営業税は其弊最も甚だしく、産業の発展を阻害し、国力増進を妨碍すること多し、之が全廃の急務なるは国論の既に一致する処なり。¹⁰¹

大正三年二月一日の『羽後新報』には、右の宣言を掲げた「営業税全廃同盟会大会」の様子が報じられている。これは前年末の第三一通常議会で第一次山本内閣が海軍の軍拡法案を通過させたことに端を発していた。同内閣は、大正政変後に立憲政友会が薩摩海軍閥の山本権兵衛と妥協して成立したため、組閣当初より弾劾運動が起きた。ゆえに、軍部大臣現役武官制や文官任用令を改正し、さらに国家歳出の一一％に及ぶ大規模な行政整理を実行することで、世論の緩和をはかった。だが、次年度予算をめぐり、海軍中心の軍備拡張と政友会が要求する「積極政策」の実現のため、減税政策を放棄したのである。

この動向に反対して営業税・織物消費税・通行税のいわゆる三悪税廃止運動が起きた。大正三年一月五日、憲政擁護会で三悪税の撤廃が決議され、同十四日には全国三税廃止大会が開催、運動は全国化した。急先鋒には、犬養毅率いる立憲国民党と加藤高明を中心に結党したばかりの立憲同志会が立った。同二十三日にシーメンス事件が発覚すると、政府への攻撃は激化し、営業税廃止運動も隆盛を見せた。『第三帝国』も「大減税号」を臨時増刊し、全国読者へ「大減税運動を起せ！」と訴え、物価騰貴を招いた戦後経営を批判し、国民の「経済人」としての自立を説いた。先の「営業税全廃同盟大会」に「本県（秋田県）よりの出席者」として石田友治と島田豊三郎の名前が挙がっている所以である。

「木都」と称された能代は、秋田杉の生産で西回り航路の主要な港町として栄え、米代川流域の水運をつなぐ物流の拠点でもあった。¹⁰⁵⁾近代以降、「木都」に変動をもたらしたのは、鉄道敷設に伴う運輸事業の推移であったが、日露戦時の非常特別税が戦後も継続・増税され、地域経済を苦しめていた。日清・日露戦争における産業発展のもとで成長を見せていた地方都市の商工層は、その最大の被害者であった。能代でも、大正三年一月、五空らを中心に能代営業税全廃期成会が結成され、ついで同年七月に能代実業協会が発足した。五空は、秋田木材会社（通称「秋木」）の創業者井坂直幹とのつながりを軸に木材業者の支援を受け、「木都」を支える諸産業の利益を代弁する形で運動を先導したのである。

つまり、能代支部の結成には、北浦と同様に、中央政界と連動しつつ地域的な事情が伏在していた。営業税全廃運動の展開は、県内の政友会派との対抗関係のもと、同志会派の活動と重なる形で商工層の結集を喚起したが、その背景には「木都」能代の再興を実現することで県議会進出を図ろうとする五空の政治的野心が潜んでいたのである。『第三帝国』創刊に祝辞を送り、支部結成の呼びかけに「当地にも支部一つ欲しきも青年連は近頃覇気なく、軟弱輕佻なる思想か、然らずば一身の利達に没頭し、社会的活動を見ざるは齒痒き次第に候、読者も随分ある様なれは一つ相談をかけべく候」と応える彼の発言に、能代支部の求心力の所在を見出すことができる。

では、能代支部にはどのような青年たちが結集していたのだろうか。三〇号の結成報告によると、相澤愛水を幹事とする支部員は【表13】のような経歴の持ち主であった。

愛水相澤常治は、五城目出身で、明治四十五年一月に五空の盟友である小林天風の後任として『北羽新報』主筆に就任した。これに伴い、北方越前彦蔵や加藤文舟なども編集を手伝うようになった。愛水などの「五空山脈」¹⁰⁵⁾ともいえる青年たちによって能代支部は構成されていた。なかでも西村莊右衛門（敬治）は、創業宝暦年間という老舗醸造業「西村醸造店」の一四代当主で、能代青年団の団長も務める有為の人物であった。¹⁰⁶⁾能代青年団は、明治三十四年に地元の青年有志で結成された。とりわけ同四十五年七月一日の稲荷小路大火で能代の繁華街が大きな被害を受けた際、焼失した遊郭の移転を求め、移転期成同盟会を組織し、世論を喚起したことは特筆される。「一、移転候補地に関する意見を發表すること」「二、町会議員を訪問して意向を確むること」「三、各方面の重立者より賛成意見を求むること」「四、内務大臣、知事、町長に陳情書を提出すること」を決議し、「移転地に就ての意見」を次のように發表したのである。¹⁰⁷⁾

- 一、市街を離れて一廓をなすこと
- 一、学校、神社、仏閣、公園、劇場等より相当の距離を保たしむること
- 一、火災に際し市街に延焼の憂無き所

【表13】能代支部の構成員一覧

	氏名	生没年	年齢	出身・居住	学歴	職業	備考
1	相澤 常治(愛水)	1885～1964	30	五城目	—	『北羽新報』主筆	幹事
2	城間 恒人	—	—	—	—	—	—
3	越前 彦蔵(北方)	1887～ ?	28	—	—	果樹園(能代梨)	後に町会議員
4	西村莊右衛門(敬治)	1876～1928	39	日吉町	—	醸造業	能代青年団長
5	西村 久吉	—	—	—	—	—	—
6	宇野猛太郎(美葉)	1886～1917	29	万町	大館中学	小学校教員、金融業	揺影社の主催者

(『山本の権威』および『能代のあゆみ』および聞き取り調査より作成)

青年団の活動は新聞報道で県下に伝わり、横手の横城青年会から応援電報が届くなど大きな反響を呼んだ。結果、青年たちの要求が通り遊郭の新柳町への移転が決まった。遊郭や娼婦の問題をめぐる¹⁰⁸⁾ては、山室軍平の救世軍による廃娼論およびキリスト教社会運動の展開が知られていた。¹⁰⁸⁾『第三帝国』にも、松本悟朗「婦人問題」をはじめ、山室軍平「公娼全廃論」や富士川游「絶娼論」など、青年たちが直面していた遊郭や性の問題に解答を与え、さらには人権問題と捉え、女性の解放を主張する論説まで見られる。

この問題が、青年たちにとって重要であったのは、それが己の存在意義を考える上で卑近かつ具体的な対象だったからであろう。性は「人生問題」に苦悩や葛藤を生み出すがゆえに、克服の対象として享受され、『第三帝国』にもそうした心情を吐露した投書が届いていた。能代青年団の遊郭移転運動は、当時の青年の抱える課題が社会的に顕現した例であった。同誌には、時代の課題を人権や性の解放という人間存在そのものの追求へ向わせる羅針盤としての役割が求められていた。

一方、支部員のなかには、文学から政治へ活躍の場を移していく島田五空と対照的に、文学の道に進む青年も存在していた。美葉宇野猛太郎は、能代市檜山の坂本家に生まれ、大館中学を卒業後、淳城高等学校の教師として勤めた。¹¹⁰⁾明治四十一年三月十日、能代港町で金融業を営む宇野家に婿入りしたが、妻キクエはすでに父を亡くし、祖父辰之助が戸主であった。辰之助は、正業のほか土地や宅地を所有する資産家だったが、生前に戸主の座を婿養子の美葉に譲ることはなかった。そうした環境もあり、美葉は専ら文学活動に励み、同四十二年五月に同僚の木村北鳥と二葉会を結成し、短歌の創作に力を注いだ。

これまで能代の文学は、五空の創刊した雑誌『俳星』に先導されてきた。だが、同四十五年六月、五空の政界進出に伴い『俳星』が休刊すると、中央文壇の影響も加わり、文学の主流は俳諧から短歌へ移行した。美葉の周辺には加藤文舟や越前北方などの俳人が集まり、二葉会同人は増え、大正二年十二月に揺影社と改名し、雑誌『揺影』を刊行するまでに成長した。彼が支部員に加わるのは、揺影社の主宰者として活躍していた時期であった。¹¹¹⁾以下、彼が残した作品から特徴的な一〇首を取り上げ、詠歌の変遷を跡付けていきたい。

- ① 背囊は重きに堪えず剣なども 好かぬ我をば知りてかえりぬ
- ② 世のために働く気になれぬ かなしき我のカフス汚れぬ
- ③ 「先生」と呼ばわれつつも我若く 「よい日本人」となれぬがかなし
- ④ 金貸しの門の柱に尿して ひそかに誇る夜の静けさ
- ⑤ 金貸しの婿が教諭を勤めある 世を見くびった仕事なるめり
- ⑥ 役に立たぬ学者などよりは金満家の 殖えねば困る日本国かな
- ⑦ 兵隊になると力んだ児の顔に 日本人の血の色が燃ゆ
- ⑧ 日本に一人の男児生れけり 幼な命の自我の創造
- ⑨ 専心の顔に汗ばみ見ゆるかな ひた働けるおさなきいのち
- ⑩ 聴診器わが生命のくづれゆく 音きかんとして胸をさぐれり

①～③は、明治四十四～五年に詠まれた初期の作品に当たる。この時期、彼に強い影響を与えたのは若山牧水であった。¹¹²⁾牧水の詠歌は、詠歎的・憧憬的な哀韻が「自我」を赤裸々に表現し、無雑作な詠みぶりが無技巧で真実味のある作風と評され、自然主義歌人とし

て圧倒的な人気を誇った。¹¹³⁾上の三作品は、いずれも美葉自身が題材となり、「我」の無力さを告白する形式をとっている。歌のリズムや表現が無骨な印象を与えるのは、彼が人間のありのままを歌う自然主義詠歌の作法を素直に踏襲していたからであろう。

続く④～⑥の作品は、大正二年に詠まれた歌である。この時期には、高利貸しの媚養子に入った自身の境遇や「家」の問題を否定的に扱う作品が多く見られる。なかでも⑥は国の財政難を打開するための方策として自分の家の存在を認めるといふ、複雑かつ自虐的な見解を示している。牧水の模倣、すなわち己の無力さを告白することから脱却しようとした美葉がまず対決を余儀なくされたのが、彼を縛り付けていた「家」だったのである。

大正五年に詠まれた⑦～⑨の作品では、初期の作品と同じ軍隊や学校というテーマが扱われながらも、美葉自身が題材になることはほとんどない。主人公は、彼が教室で接している子供たちであった。このとき美葉はすでに肺結核を患い、死の恐怖に直面し、⑩のような歌を詠んでいた。だが、以前のように己の無力さを告白することはなかった。ただ教え子の成長や幼子の生命・自我の芽生えに目を向け、それを前向きに詠んでいる。己の生活を題材とする新派短歌の姿勢をとりながらも、扱う対象、視点の置き方、描写の仕方は変化していた。ここに個人主義を道徳的なものへと深め、奔騰する生命の力を感じ、個性を自由かつ澁刺と伸ばそうとする「新理想主義」の影響を見出すことは難しくない。

このように見てくると、詠歌を通して自分の生活を見つめ直し、そこから社会や国家に思いを馳せ、ついには生命の貴さに辿り着く一地方青年における文学の軌跡をうかがい知ることができる。これはまさに美葉が、牧水および自然主義の影響を、生活短歌に潜ることで払拭し、そこから自我の創造、生命の神秘を見出す「新理想主義」歌人へと成長していく道程であったと言える。地域再編の激動のなかで宇野美葉は、「新理想主義」を掲げた『第三帝国』の思想運動に加わることで、打破すべき制度としての「家」ならびに島田五空からの影響を克服し、己の道を短歌へと切り拓こうとしていたのである。

以上、本節では、秋田県内に設置された横手・北浦・能代の支部を事例に、読者の実態を説明することで、『第三帝国』の地域的基盤について考察してきた。益進会の呼びかけに応え、支部を結成した読者は、横城青年会や能代青年団のように自生的な青年会組織を準備する青年有志たちであった。中学卒業程度の学歴を持つ彼らは、地域の新しい知識階層として、従来の名望家秩序とは異なる地域自治のあり方を模索するなかで、同誌の「自治体革新」の主張に呼応し、運動に参加したのである。

『第三帝国』の政治的位置は、中央政界の変動のなかで山本内閣ならびに政友会打倒キヤンペーンの急先鋒を担い、営業税全廃運動の先頭に立って地方商工層の利益を代弁するものであった。それゆえ、地域再編の渦中にあった北浦や能代の青年たちが、地域経済および自治の危機を背景とし、政治や思想への渴望を胸に自治体および自己革新の方向性を見出そうと結集してきた。つまり、「上から」の地域再編に違和感を抱き、地域の固有性を重んじ、地域の活性化・自立化をめざした青年層こそ、同誌の地域的基盤であった。

だが、『第三帝国』の運動は、政治的な側面から捉えるだけでは十分とはいえない。なぜなら、同誌の言論と運動は、青年たちの内側で思想として体系化される以前の、さらには思想として体系化し得ないような「情念」の部分を導き出していたからである。近代化の本流に乗り切れず、立身出世も叶わない彼らは、政治・社会的に「正当」な価値を持ち

得ない「逆境者」たちであった。したがって、帝国日本の「既存」の秩序に抵抗し、その打破をめざす社会改革に共鳴した。自らの人生を肯定する新たな価値の創出を迫られるなかで、人間存在に拠って立つ同誌の言論に接し、思想運動に導かれる形で、中村月城・丹波源一郎における「信仰」、伊東晃璋における「教育」、宇野美葉における「短歌」のように、政治とは異なる次元の価値を身につけ、自身の歩みを正当化していった。逆に言えば、同誌こそが、地方青年層の鬱勃とした心情をすくい上げ、「人生問題」の指針を与えることで、彼らの結集を呼び、進むべき道に「形」を与える好機をもたらしたのである。

このとき、『第三帝国』と青年読者をつないでいたのは、茅原華山の「益進主義」思想であった。中村の論評、伊東の教育論などに見られる、「AでもBでもないC」という思想評価のあり方こそ、同誌特有の思考様式であった。¹¹⁵「第三帝国」という誌名に象徴されるように、「東西合流」「靈肉一致」と繰り返される折衷主義は、「凡庸さ」ゆえに、中等教育を受けながらも地域にとどまらざるを得ず、煩悶を抱えつつも極端をさせて生きるほかない青年層を惹きつけたのである。理想と現実の葛藤に生き続けるしかない、きわめて現実的な「折衷主義」こそ、「益進主義」の思想がすくい上げた日本人民、特に地方青年層の抱える精神的位相であり、そこに同誌の歴史的意義は存していたと言える。

第三節 「模範選挙」運動の実践

【写真4】『夕刊中央新聞』挿絵 阪谷芳郎「東京市長日記」大正四年三月二日条には、¹¹⁵⁾



同五日の『夕刊中央新聞』に掲載された挿絵の切抜が貼付されている【写真4】。「買収」と書いた大きながま口を肩から掛け、「大ボラ」・「吹込演説」用の巨大蓄音器を背負い、「選挙干渉」の大蛇を振るわんとして四方を見渡す首相大隈重信の姿が描かれていた。

東京市長を辞して間もない阪谷が大隈邸での午餐に出席した日に「危険! 危険!! 斯んな狂人に近寄る可からず」と記された切抜を貼り加えたのは、大隈こそが彼の政治的境遇を変えた張本人であり、その絵が時あたかも全国的な政争を巻き起こしていた第十二回総選挙の一面面を痛烈かつ的確に指摘・批判する内容を有していたからにほかならない。

前年暮れに議會を解散した大隈は、来る総選挙を見据え、原敬率いる政友会を打倒するため全国遊説と選挙干渉を繰り返していた。¹¹⁶大正政変で社会的影響力を示した新聞ジャーナリズムは、選挙報道により重要な政治的役割を果たしていく。

史上空前の選挙キャンペーンが展開されるなか、『第三帝国』の主盟茅原華山は「模範選挙」と称し東京市から立候補を宣言した。なぜ、茅原は「模範選挙」を掲げ、出馬したのだろうか。これまで茅原の「模範選挙」は、落選に伴う「変節」が益進会分裂の直接的な要因とされ、彼の思想的後退をもたらす契機とみなされてきた。だが、第十二回総選挙を前後する同誌の政治的位置は、特に『萬朝報』・黒岩涙香との関係に注目して定位しなければ、真意を解くことはできない。茅原および益進会同人の政治評論と実践運動が地方青年読者に支持され、彼らの結集を呼び起こしたことを考え合わせると、「模範選挙」に至る普選運動の展開を時代的要請のもとで捉え直す必要がある。

したがって、本節では、第十二回総選挙における政治的争点をジャーナリズムが果たした役割に注目する形で検討し、茅原が立候補した東京を事例に選挙分析を施すことで、『第三帝国』の展開した「模範選挙」運動の意味を問い直す。同誌の政治的実践を位置づけることは、大正期の普選論とそれをめぐる政治情勢を、新聞・雑誌メディアを介し、支持層との連関で読み解くとともに、当該期の政治的特質を照射することを期している。

一 普通選挙請願署名運動の展開

大正三年六月の東京市議会選挙は、山本内閣打倒を果たした新聞ジャーナリズムが大隈内閣を支持する一方で、政友会勢力の打破に力を傾けた最初の政治的舞台であった。黒岩涙香は、松井広吉・大谷誠夫らと「市政記者倶楽部」を組織し、市政革新運動を展開し、東京市政に大きな影響力を及ぼしてきた常盤会の打倒キャンペーンを張った。ここで標的となったのが政友会関東派の中軸を担っていた常盤会の森久保作蔵（一八五五～一九二六）であった。森久保は、多摩郡七尾村高幡（現在の日野市）の農家に生まれ、明治十五年に自由党に入り、石坂昌孝・村野常右衛門らと南多摩の自由党結集に尽力した三多摩自由党壮士の指導者であった。神奈川県議・東京府議を経て、衆議院議員選挙に当選。政友会の創立に参加し、星亨と結び東京市会に影響力を持ち、深川区を主な地盤としていた。

「黒岩周六日記」同年五月十九日条には、帝都東京の「膨張」に伴う新規公共事業を「私腹を肥すの具」とし、市会議員を「利益の職」と見なす常盤会が痛烈に批判され、「市会の操縦者が森久保之無くバ市会不正運動を為す能ハス」と記されていた。¹¹⁸『萬朝報』は連日、「深川と多摩尼」「市閥打破の第一日」などの記事を掲載した。六月二日にはあえて深川区で演説会を開催し、「森久保の時代ハ去りたる事」を説いたのであった。

このとき森久保批判の記事を書いたのは誰であろう茅原であった。『萬朝報』記者の坂口二郎は「黒岩も固より彼の文章を愛し、或は彼れを愛したに相違ない。山本内閣打倒乃至東京市政革新運動当時の萬朝報社に対して、黒岩が兎も角もその言論欄を委せ得たのは、茅原の有るためであった。現に茅原は、市政革新に就いては約三十日殆んど一人で萬朝報の言論を書いた」と証言している。さらに黒岩は深川演説会にも茅原を登壇させた。

加えて、茅原自身も演説会と同日に『第三帝国』『臨時牛込区号』を発行し、「今回の市会議員の総選挙は自治を東京市に実現し、過去十有八年東京市を食物にした多摩ニズムを一掃し、又牛込区の面目を一新する好機会だと存じます」との見解を示した。¹²⁰そして、牛込区の市会議員に対し、次の「標準」によって選挙すべきことを提案したのである。

- (一) 直接間接常盤会に關係あるものは一切之を選挙せざる事
- (二) 市に於ける重要問題に対して予め明確なる意見を徴する事
- (三) 成るべく新しい人を推薦する事
- (四) 若し区に区閥あらば我々が長閥薩閥を始め総ての閥を打破しつゝあるが如く区閥を打破する目的を以て候補者を物色する事

結果は常盤会の大敗に終わった。森久保の落選をはじめ、常盤会が議席を四八から二二へ減らしたのに対し、非常盤会系議員は二一名から五三名に増加した。阪谷東京市長は、同五日の日記に「市会二級選挙、森久保落選」と記しているが、これにより彼の支持基

盤も動揺し、電灯統一問題などの事業に着手できないまま、翌年二月に辞職を余儀なくされる。また、大隈を支持するジャーナリズムの活動で有力な政治基盤を崩された政友会総裁の原は、同六日の日記に「森久保作蔵現内閣より厭忌せられ遂に落選せり、彼を市会より除くは常盤会を倒さんとするに出たるものなるが、森久保は世間の批評あるが如き悪事をなす者にあらず」と、黒岩ら「不良の徒」によるキャンペーンを非難していた。

『第三帝国』は創刊以来『萬朝報』の「青年評論」として活動してきたが、両者の関係は黒岩の大隈に対する過剰な支持により変化していく。大隈内閣は、選挙権拡張はおろか、同年七月の新聞紙法改正をめぐり言論の自由より発禁回避の自主規制を促がす政府案を提出するなど、当初、期待された政策を実現するに遠かった。だが、黒岩は支持を続け、国際情勢の緊張化を理由に従来の主張を取り下げ、大陸進出政策にまで与していた。こうした黒岩の動向に違和感を覚えた茅原は、大陸出兵論に対し内治優先を説き、意見の衝突を機に執筆依頼を断って講演旅行に出かけた。そのため、同年十一月十日に黒岩より「ハガキ辞令」を受け、約十年間在籍した『萬朝報』を去った。¹²³⁾ここで茅原は、黒岩からの独立を宣言し、私財を投じて益進会に寄附し、『第三帝国』に専念することとなった。

同誌の普選運動および「模範選挙」運動の展開は、大隈に肩入れする黒岩への批判という意味合いを含んでいた。日露戦後の昂揚期から一時沈静化していた普選運動も憲政擁護運動を機に復活し、大正三年初頭に普選同盟会が再興され、さまざまな普選選挙論が唱えられていた。『太陽』主幹の浮田和民は「倫理的帝国主義」を奉じつつ、「健全なる立憲的政党を養成せんとすれば国民一般に選挙権を重んじ選挙権を有せざる者は進んで選挙権の拡張を要求」すべきことを主張した。¹²⁴⁾『東洋経済新報』主筆の三浦鏡太郎は、制限選挙に基づく政党政治の実現に「憲政大墮落の禍期」が伏在していると指摘し、選挙権拡張を訴えた。¹²⁵⁾吉野作造も上述のように大隈内閣に政党内閣の期待を寄せつつ、「普通選挙制の長所」として、国民の利益が法律上平等に保護され国民が政治教育を受ける機会を得ること、買収などが駆逐され「真に手腕あり見識ある人物が議会に選出せらるゝこと」¹²⁶⁾を列挙し、「政界廓清の如きも、普通選挙を布くことに依つて其の端緒を得る」と説いた。

同時代にあつて『第三帝国』の普通選挙論は、日露戦後の青年層における「自我実現」の観点に基づいて立論された点に特徴があった。「一周年紀念徹底号」で実施を呼びかけた普通選挙運動の中心を担ったのは鈴木正吾であった。鈴木が明治大学在学中に丁未倶楽部に所属し「雄弁」青年として活躍していたことは上述したが、『第三帝国』では主に「政治評論」を担当し、尾崎行雄や犬養毅などへの訪問記事を掲げるとともに、国民の政治的覚醒に眼を向け、増師や減税をめぐる政治問題などに積極的に言及していた。

「先帝崩御の事あつて以来、五千万民は心の底に意識的或は無意識的に、民の力を以て固定権力に反抗するの快感を覚え始めた。所謂大正維新の政変で国民は一種の味を占めたのだ」¹²⁷⁾。創刊号に「民の力！」を掲げた鈴木は、自らも学生として参加した憲政擁護運動を振り返り、そこで得た確信を「現状打破の最良武器は、実に「民の力」である」と表現した。七号の「二月大勢評論」では、「政治に現れたる近代思潮の顕著なる表現は、苟くも民意に反する政府の存在を許さないことである」¹²⁸⁾と指摘し、「専制色を帯ぶ」政治家が「最も忌む人民の名」「立憲の名」を呼ばざるを得ないこと自体が「人民の勝利」「デモクラシーの勝利」を意味すると評した。と同時に「人民が速かにこの思潮を体得するか否か」でこれ以降の政治情勢が大きく変わると、人民の覚醒を促していた。

一方、「明治大学法学部学士」の肩書きで「胃の空虚を奈何せん」¹²⁹⁾を掲げ、日本の実態を「一等国といふ美しいベール」を脱ぐと「虎よりも猛き苛税に虐げられて胃の空虚に悩む国民が生きんとする本能に衝動せられて、互に他を欺き陥れて刹那の享楽にせめてもの慰安を求めてゐる阿鼻叫喚の修羅場ではないか」と嘆き、その解決手段として「減税」の断行を主張していく。明治二十六年度と同四十四年度の年度別国税総額と直接税・間接税の占める割合を示し、直接税（六〇↓三三％）と間接税（四〇↓六七％）の割合がこの二十年で逆転したことを指摘した。地租を中心に税の変遷を辿り、「消費税其他の間税」が多い理由を「人気取専門の政治屋が時々の財政需要に応じて、増税に抵抗力のない政治的無能力者―選挙権なき者―中流以下の者―を圧迫し間接税を誅求し来た」と非難した。

そこから詳細な計算に基づき各種の税を吟味し、廃止または減税の必要を訴えた。なかでも強く主張されたのは穀物関税の撤廃であった。日本では「物価の標準」となる米価が高いため、工賃・生産費が高くなり、結果として輸出が振るわない。「米さい安くすれば今日我国の生活難は殆んど救済される」「全国民の十五分の一に過ぎざる三百万の地主の鼻息のみ窺ふ代議士よ、少しく国を憂へよ」と述べ、日本の政治・経済の根幹に関わる問題に踏み込んだ。さらに地方税における直接税・間接税の経年変化も示し、「上流社会」が九倍の所得増加で三倍の税負担となったのに対し、「中流以下」は三倍の所得増加で九倍の税負担を課されている現状を指摘し、「過重なる消費税」の全廃を求めたのである。

続けて鈴木は、大隈内閣による国防会議の開催につき、歴代の内閣がまさに増師問題をめぐり紛糾してきた歩みを省み、「深刻な悲哀が西園寺を倒し、桂を葬り、山本を追ひ、今又大隈に肉迫せんとしてゐるのだ」¹³⁰⁾と述べた。「国防とは畢竟国民の生活を安全に保証する為めの保険である、国民の胃の腑を窮迫して以て国民の生活を安全に保証するといふは、それ自体に大なる矛盾あるを思はねばならぬ」と指摘し、国防会議の無用を訴え、会議に参加した軍人や閣僚を「予算の寄生虫」と称し、「彼等に国民の―私の胃の腑がわかつてたまるものか」と叫んだ。そして、「国防方針は国防会議で決すべきものではない、国民が自らの生活から案出すべきものだ」と説いたのである。

九号で経営の主体が内外出版協会から益進会に移り、石田友治が「主事」として経営の任に当たると、代わって鈴木が「編輯主任」を引き受け、同誌における政治運動の企画および実行の中心をなしていく。鋭い筆法をもって縦横に政治を評論し、運動を展開していく姿勢は、主盟の茅原から鈴木正吾へと引き継がれたものと言える。

だが、それゆえ、鈴木は大正三年三月十六日に治安警察法違反の被告人として東京地方裁判所刑事第二号法廷に立つこととなる。¹³¹⁾理由は、同年「二月九日の青年会館でやつた演説が暴動煽動だと認められた」ことによる。彼は「立憲的手段の運動をするには我々が先づ政治的人間即ち選挙権を有するに至らねばならぬ」と演説したが、その中で「堂々たる示威運動を二度し三度し四度五度して尚選挙権をよこさない場合は最後の手段に出るより外はない」と発言したことが危険視された。裁判の結果、検事から三ヶ月の禁錮を求刑され、判決では罰金三十円を命じられた。第二審として控訴公判が翌月二十一日に開かれたが、裁判長の「高圧的な態度と挑発」に乗り、「最後の手段」について「¹³²⁾若しそんな場合には何をするかわかりません、或は思ひ切った暴れ方をするかも知れませんが」と答え、控訴は棄却。上告審はわずか二分で終わり、一審の判決通り「参拾円の罰金」となった。

この判決をうけ、鈴木は一五・一六号に「罰金一金参拾円―口は禍の門、革命の噴火口

―」を掲げ、「思ふ事いはねば腹ふくるゝ心地す、云へば罰金一金參拾円也だ」という書き出しで、裁判の実態を語っている。裁判長に職業を聞かれ「雜誌記者」と答え、誌名を聞かれ「第三帝国」と答え、意味を聞かれ「君民同治する立憲政治の帝国である」と説明する件や、尋問の際に「最後の手段といふのは焼打ちをするつもりではなかったのかエ?」と聞かれ、立憲政治における「示威運動」の健全性を説き、むしろ「焼打ち」とならないようにしていた旨を述べすぎて「法廷で演説をしてはいけない」と注意された件など、その内容は『第三帝国』の言論、いわば益進会同人の「実生活」が政府の取り締まりを受けた実例として、まさに「生活即政治」を体現していた。「憲法第三十条の規定によれば「日本国民は相当の敬礼を守り、別に定むる所の規定に従ひ請願を為すことを得」る、我等が選挙権を得るまでは、我等はせめて此請願権を活用して、選挙権を取らふぢやないか」という末尾の一文こそ、同誌の普通選挙運動に直結するものであった。

一切の問題は普通選挙制度実施の後でなければ、国民が自主的に解決することは可能ない。一切の問題とは消費税の減廃を主眼としたる根本的税制整理である。国防一元主義の徹底である。凡百社会政策の実行である。其他民本思想に基ける総ての政治的施設である。我等は現在の選挙制度のまゝでは、如何程絶叫しても是等多数国民の生活を充実せしむるに足る政治の実現を望むことは可能ないと思ふ。仮りに万々一にも現在の選挙制度のまゝで、是等重要なる諸問題が多数国民の利益になるやうに解決せらるゝ事があつたにしても、それでは国民が偶々仁者の仁政に浴したに過ぎないので、国民が自ら実現し得た善政治ではない、苟くも自主的政治でない限り、其善政は徹底さるべき理由がないではないか。¹³⁴⁾

大正三年十月五日、益進会は「一周年紀念徹底号」となる二〇号に「普く天下の同志に檄す」を掲げ、日本人が「自我」を「実生活」の場から政治へ拡充する手段として普通選挙の実施を訴えた。「苟くも日本の男子にして満二十歳に達する者は尽く選挙権を有する」と謳い、「直ちに選挙権獲得の實際運動に取り掛らうではないか」と呼びかけた。その「立憲的手段」として、大日本帝国憲法第三十条の「請願権」を用い、全国読者から普通選挙制度に関する請願署名を集め、「来るべき議會に提出する」ことが示されたのである。

運動の呼びかけは、選挙権拡張を求める読者の声と一致していた。二二号（八頁）「読者より」には、赤羽の大木生から「普通選挙に関する貴社の御意見には大賛成です、老人や金持が人なれば我等白面の青年も同じく人だ。彼等の国民として得る権利を我々が得られぬ筈はない」との声が寄せられた。山梨の松木吾造は『第三帝国』に依つて普通選挙の声が上げられたのは洵にさうなくてはならぬ事である」と激励の言葉を届けている。

さらに「冬の時代」にあつた堺利彦も参加を表明してきた。堺は賛同の意を示しつつ、「普通選挙請願方法別案」として「事情境遇の許す者は自ら請願書を携へて議院に出頭し、直接に之を差出す¹³⁵⁾」ことを勧め、請願に必要な議員の紹介を依頼し、次期議會開会中の実施と協力を求めた。また労働組合欧文活版工組合の水沼辰夫が同志五百名と運動への参加を申し入れ、益進会同人に請願書の趣意書を示すことを要求している。¹³⁶⁾ こうした反響に応えつつ、益進会は二四号に五名連記の「普通選挙請願用紙¹³⁷⁾」を附録とし、運動参加を募った。このとき同運動を支えた論理は、鈴木正吾「新愛国論」¹³⁸⁾に示されていた。

世間には往々、個人主義と愛国主義とは両立しないやうに考へてゐる人があるらしいが、これは大なる謬見だといはねばならぬ。成程今迄の様な盲目的死の愛国主義にあつては個性といふものを始めから無視して、愛国の為めの愛国をいふのであるから、個性尊重、自我実現を生命とする個人主義とは相容れない場合もあるが、批評的生の愛国主義にあつては、どこまでも個性の充実を主張の発足点として、自我実現の為めの愛国であるから、常に個人主義と矛盾しないのみならず、真の個人主義が徹底したものが新愛国主義となるのだと云へる。

ここで鈴木は「新愛国主義」の中心に「真の個人主義」を据え、「自我」を実現するための「愛国」を説いている。「自我」とは無限に拡充するものではなく、「自分の自我と他の自我の集合体」であり、「他我との接触面を無視することは可能ない」と認識されていた。さらに「個性の発展を妨げては国家は進歩せず、国家無くしては私共の個性は決して充実することはない」と国家と相互補完的な関係として把握されていた。日露戦後の苛酷な「生活問題」に苦しんできた国民にとつて、国家は自らを拘束する枠組みであり、「自我」の実現・「個性」の発展を分かち合える共同体ではなかった。ゆえに、鈴木は「国民各自に『自分の国』といふ觀念を植へ付ける愛国的施設」として、すなわち国家と国民の隔絶をつなぐ「愛」の方法として普通選挙を早期に実施する必要を唱えたのである。

この提唱と連動し、鈴木は普通選挙の実施を求める「主張」と請願書を議会に提出する「手段」につき、尾崎行雄法相を訪問し意見を求めている。¹³⁸「国民に選挙権を要求せよと教へる準備の時」と語る尾崎に対し、「普通選挙実現の實際運動を起す」こと自体が「有力なる政治教育」ではないかと問い、「正義（理想）の命ずる所に従つて進まねばならぬ」と激励された。加えて、読者の選挙権拡張を求める声を「人間マーチ」と題して紹介し、「普通選挙運動参加問答」で読者からの疑問に答え、衆議院議長奥繁三郎宛の「普通選挙制実施請願書」を作成し、大正四年一月末日を〆切りとし、運動の氣運を高めていった。¹³⁹

二 第十二回総選挙における政治的争点―第二次大隈内閣と新聞ジャーナリズム―

大正三年（一九一四）十二月五日、第三五通常議会が例年より早い日程で召集された。『第三帝国』による普通請願署名運動はまさに同会期中に実施される予定だったが、同二十五日に大隈内閣による陸軍二個師団増設案が否決され、衆議院が解散し、翌年三月二十五日に第十二回総選挙が行われることとなったため、延期を余儀なくされた。

大正四年三月二十八日、政友会総裁の原敬は、第十二回総選挙の結果をうけ、「我党約十年の過半数は是れにて大敗に帰せり」と記している。「大敗の原因」として政友会への反感、新聞紙の大隈内閣支持、大隈らの全国遊説、選挙干渉の四点を挙げている。それらはいずれも同選挙の特色であつたが、なかでも新聞ジャーナリズムの存在は、当該期の政治状況を象徴し、以降の政治のあり方に影響を及ぼしていった。そこで『第三帝国』における「模範選挙」運動を位置づける前提として、第十二回総選挙の政治的争点を、第二次大隈内閣と新聞ジャーナリズムの關係に注目しながら考察していくこととしたい。

大正三年三月二十四日、第一次山本権兵衛内閣が倒壊した後、後継首班人事は難航をきわめた。松方正義、徳川家達が相次いで大命を拝辞し、清浦奎吾内閣の流産を経て、急転直下、大隈重信に大命が降り、第二次大隈内閣が成立したのは四月十六日のことであつた。

同内閣は、首相大隈を筆頭に、外相加藤高明、蔵相若槻礼次郎、農商務省大浦兼武、司法相尾崎行雄という陣容を誇り、立憲同志会を与党とし、非政友系の中正会を加え、政友会の一八四議席に対し、一三一議席を有していた。大隈の大衆人気と反政友会の気運も手伝い、大方の新聞・雑誌メディアはその成立を歓迎した。雑誌『太陽』や『中央公論』に筆を執りはじめていた吉野作造も政党内閣論の立場から「非政友の諸派を聯合し得る人物」大隈を戴く同内閣の成立を支持し、「新内閣を以て、¹⁴¹⁾政党内閣の端緒として之を迎えることは決して不当でないと思ふ」と期待を表明していた。

だが、このような世評に反し、誕生まで紆余曲折を見た同内閣の性格は複雑であった。山県有朋や井上馨らの元老は「閥族打破」の時勢に配慮し、大衆に人気のある大隈の組閣を承認すると同時に、¹⁴²⁾それを利用して政友会の勢力拡大を抑えて念願の二個師団増設を実現しようと目論んでいた。主要な閣僚の大浦と加藤は、大隈を担ぎつつ、立憲同志会を政界再編の中心に据えるため、第一党の座を政友会から奪い取る機会を伺っていた。¹⁴³⁾ここに非藩閥の大隈内閣に大きな期待を寄せ、接近を試みた新聞ジャーナリズムが加わる。大隈は老練な政治的手腕で、三者の思惑を巧みに利用し、「中継ぎ内閣」とみなされていた同内閣をとにかくも二年半にわたり延命させるが、特に言論操作は巧妙を極めた。

大隈は、山本内閣打倒ならびに大隈擁立工作に尽力した『萬朝報』社主の黒岩涙香、『東京日日新聞』の羽田浪之紹、『報知新聞』論説部主任の須崎芳三郎、『やまと新聞』主筆の松井広吉、『都新聞』言論主任の大谷誠夫、『読売新聞』の中村雅治、『東京朝日新聞』の松山忠二郎ら新聞経営者および幹部記者たちと懇意の関係を築いた。¹⁴⁴⁾公的発表とは別に意見交換の場を設け、彼らを優遇する一方で、「憲政の時代は議論を以て勝敗を決すべきものにして夫の焼打事件を惹起すが如きは寧ろ怯者の敢でするところ（傍点は大活字）諸君は最後迄筆を以て戦ふの勇なかるべからざるなり」との見解を示し、新聞記者の政治運動、とりわけ民衆暴動を煽るような言動に注意を促すなど、言論対策に余念がなかった。こうした大隈の操作術を可能にした要因に、新聞各紙の自己認識の変化があった。大正政変以来、政局の転換に貢献してきたことで自らの言論に自信を抱き、大隈内閣の政治的基盤の弱さに介入の期待を寄せ、言論の力で政府を主導せんと企図していたのである。

大正三年十二月二十五日、大隈内閣は、第三五通常議会で陸軍二個師団増設をはかるも、衆議院で否決され、議会解散を断行した。同年七月二十八日に第一次世界大戦が勃発し、八月二十三日には日本もドイツへ宣戦布告をするなど、国際情勢が緊張の度を増す状況下であった。若槻蔵相は「通常議会は、多数党の政友会と正面衝突することが、初めから予期されていた。政友会が反対すれば、政府は議会を解散し、可否を国民に訴え、選挙後の議会において、政策を實行しようというのが、政府の決心であった」と回想している。¹⁴⁵⁾

過半数に満たない立憲同志会を与党とする大隈内閣にとって、解散総選挙により「可否を国民に訴え」、政界再編を図るのは有効な選択肢であった。したがって、総選挙の焦点は、二個師団増設を否決した政友会打倒へ向かった。大隈は、翌年一月に農商務相だった大浦兼武を選挙対策のために内相に据え替え、地方官の更迭、大量の推薦状や多額の軍資金をばら撒き、時に警察官を選挙指導に当たらせるまでして、大規模な選挙干渉を行なった。¹⁴⁶⁾と同時に、首相自ら閣僚を率いて全国講演に奔走するという選挙史上かつてない大胆な行動に出た。さらに車窓演説や蓄音器による録音講演、投票直前の電信攻勢などの「新戦術」を編み出し、大々的に展開していった。ここで政争圏外で築いてきた広範な人脈を

活用し、早稲田出身者を中心に学生・青年層を「大隈後援会」として組織化し政治運動を行わせるとともに、中央・地方各紙へ輩出した人材をもとに情報戦略を駆使したのである。これに対し、原率いる政友会は結成以来初めて野党として総選挙を迎え、大隈の執念にも似た大選挙運動および選挙干渉の前に大きく遅れを取っていた。¹⁴⁸従来、官僚との情意投合および地域への利益誘導によって勢力を拡大してきた政友会は、貴族院議員や有力政治家を激戦区に送り込むなどの手段を講じて巻き返しを図ったが状況は好転しなかった。

このとき、両陣営の動向を逸早く国民に伝えたのが新聞ジャーナリズムであった。中央各紙は総じて大隈内閣に期待を寄せ、旺盛な全国遊説と新しい選挙戦術を取り上げる一方で、政友会への批判を強め、状況の不利を伝えた。『東京朝日』は、翌年一月二日（二面）に「総選挙大観」を掲げ、「政友会の弱点」として「在野党として総選挙に臨む」こと、政府攻撃の好題目が少ないこと、独力で組閣する力がないこと、老齢大隈への同情、政友会の資金不足という五点を指摘した。同紙はこれを皮切りに、大隈内閣の選挙活動に苦言を呈しながらも、一貫して「政友会の不評」を伝え、「総選挙の真義」は、国民が大隈内閣と原政友会のいずれを支持するかにあると訴えた。¹⁴⁹一方、『東京日日』では、政友会よりも「大隈内閣の任務」への言及に重きが置かれた。¹⁵⁰今回の総選挙が大隈内閣にとって「理想を実現すべき唯一好機会」であることを論じ、「選挙界の廓清新期せんと欲せば、政府の選挙取締に待たんよりも、先づ以て国民の政治的自覚に求むるを以て、最も有力にして且最も健全なる方法なることを信ぜずんばあらず」と選挙民の政治的覚醒を促した。¹⁵¹企業化を推進する新聞各紙は、最新式の輪転機の導入や情報網の充実により報道体制の刷新を図り、大隈内閣の全国遊説に帯同し、「車窓演説」や「吹込演説」などの様子を写真掲載により紹介し、さらなる宣伝効果をもたらしたのである。¹⁵²

なかでも『萬朝報』の言論は注目に値する。社主黒岩は、山本内閣打倒の末に第二次大隈内閣が成立したことを自らの手柄と受け止め、組閣以来、頻繁に大隈のもとに出入りし、公私ともに大きな支持を寄せていた。それゆえ、同紙の論調は、大隈内閣を熱烈に支持する一方、政友会勢力への批判が痛烈を極め、「非政友熱」の拡大が伝えられ、「政友会凋落の状」ならびに選挙違反者への報道が繰り返された。¹⁵³さらには、黒岩自ら応援演説に立ち、政友会を「歴史的遺物」として葬り去る旨を訴えた。¹⁵⁴反面、大隈内閣の選挙活動に対しては、立憲同志会に奮起を促がしつつ、選挙戦が進むにつれ、支持の度合いを強めていった。そして、ついには「大隈内閣の不評ハ只一つ増師問題ニ在るも、増師を非とする者ハ唯た増師といふ語を憎みて時勢のvariしを知らざるなり」という認識のもと、「忠良なる国民よ、願はくは此の国家の大局に注意せよ、今日に於て内閣の更迭を見るハ、国運発展の一大障害なり、挙国一致、此の内閣を助けて、其の力の及ぶ限りを尽さしめて、以て其の効果を収めしむ可し」と、大隈内閣支持を正当化するに至った。

以上見てきたように、第十二回総選挙における政治的争点は、大隈内閣と原政友会との対決にあり、その図式のもとで新聞ジャーナリズムは重要な役割を果たした。新聞・雑誌メディアを駆使した情報戦略が選挙活動でこれまで以上に決定的な影響をもたらすという政治現象が起り始めていた。これは日露戦後における新しい社会階層の出現に伴う政治状況ならびに政治基盤の変動を物語るものであり、急速な産業化および人口増加を示していた帝都東京で顕著に現れていく。そして、この階層にこそ『第三帝国』を支持する読者は存在していた。では次に、茅原華山の「模範選挙」運動を見ていきたい。

三 「模範選挙」運動の展開―「模範」と「理想」の相違―

大正四年（一九一五）二月十五日、茅原華山は三二号に「東京市民に向つて模範選挙を求む」を掲げ、第十二回総選挙に東京市から立候補することを宣言した。総選挙の争点が大隈内閣と原政友会の対決にあり、全国的な選挙干渉とともに、新聞ジャーナリズムの協力のもとで選挙キャンペーンが行なわれたことは上述の通りだが、「模範」の真意を解明するために、東京市を事例に選挙分析を試み、特徴を抽出していきたい。

第一に指摘できるのは各党の候補者数である。大隈陣営は、与党立憲同志会の一九九名を筆頭に、中正会五八、大隈伯後援会五〇を合わせて計三〇七名の候補者を立てた。対する政友会では、落選を恐れて出馬を辞退する者、あるいは離党する者が現れ、候補者を立てること自体が困難な状況に陥っていた。¹⁵⁶ 前々回二四六名、前回二八一名の候補者を出して党勢を拡張してきた政友会が、二一五名を立てるに止まり、国民党の四七名を加えても、大隈陣営を大きく下回る数字であった。こうして第十二回総選挙は、大選挙区制のもと、五十六の都市部および四の島嶼地を独立選挙区とし、これに府県の郡部を四九の大選挙区として加えた総計一〇九の選挙区で行なわれた。

【表14】は、全選挙区を定員複数の大都市圏六区とそれ以外の都市部五〇区、郡部四九区に分類し、各党の候補者数および当選者数を示したものである。ここから政友会が大都市圏をはじめとする市部独立選挙区において候補者数・当選者数ともに少ない一方で、農村を中心とする府県の郡部に候補者を多く推し、¹⁵⁷ 当選者の確保を図っている傾向を見出すことができる。対する大隈陣営は、同志会をはじめ、大都市圏を中心に都市部に候補者を立て当選へ導くとともに、政友会の支持基盤である郡部でも候補者数こそ少ないが相当数の当選者を出し、政友会を優る当選率を示していた。

【表14】政党・地域別の候補者および当選者数一覧								
	区数	定員	政友会	同志会	国民党	中正会	大隈後	無所属
大都市圏	6	26	6(1)	15(10)	7(6)	7(2)	12(6)	9(1)
			16.67%	66.67%	85.71%	28.57%	50%	11.11%
市部	50	50	31(7)	30(18)	7(1)	13(8)	7(6)	37(9)
			22.58%	60%	14.29%	61.54%	85.71%	24.32%
郡部	53	305	178(100)	154(123)	33(20)	37(27)	31(16)	69(20)
			56.18%	79.87%	60.61%	72.97%	51.61%	28.99%
候補者	109	381	215(108)	199(151)	47(27)	58(37)	50(28)	115(30)
			50.20%	75.88%	57.45%	63.79%	56%	26.09%

※『自第七回至第十三回衆議院議員総選挙一覧』（衆議院事務局、大正7年12月）を主な資料とし、『東京朝日』『東京日日』『読売』より補足・作成。

加えて、全国選挙区における各政党別の候補者数および当選者数を見ると、大隈伯後援会は群馬県前橋市から大隈の嗣子信常を擁立し、政友会推薦の前代議士竹越与三郎との激戦に勝利したのをはじめ、新潟、甲府、金沢など、あえて政友会の単独選挙区に狙いを絞り、勝負を挑むという戦略的かつ重点的な選挙戦を繰り広げていたことがわかる。¹⁵⁸ 右の結果、同総選挙は、戦前の予想を上回るほどの大差がつき、同志会が議席を九五から一五一へと躍進させ、中正会、大隈伯後援会と合わせて二一六議席を占めるという大勝を収めた。対する政友会は議席を一八四から一〇八へ半減させる惨敗を喫したのである。

ここで衆人の注目を集めたのが帝都東京における選挙戦の行方であった。大選挙区制が、選挙法改正および日露戦後の経済的発展に伴う有権者の増大という現象のもとで施行されたとき、各候補者に求められたのは出馬地区のみではなく、広く選挙区全体に訴えかける政治運動の展開であった。東京市の立候補者は、全一一議席に対し、これまで一五人前後

であつたのに比べ、倍増に近い二八人を数えた。【表15】で候補者の顔ぶれを見ると、政友会が新人の鳩山一郎を立てたのみであつたの対し、同志会からは一〇人に及ぶ候補者が推され、大隈後援会推薦の新人候補とともに、国民党の前代議士候補としてのぎを削るという様相を呈していた。大隈の公認で弁護士的身で牛込区から初出馬へ踏み出した三木武吉は、当時の選挙の実状を「言論戦などは末の末とされ、買収は最悪で最後の手段とされたが、いつもその最悪の手が最強の手段となる」と語る¹⁵⁹⁾とともに、首相大隈から直接の励ましと三千元という莫大な選挙費の援助を受けたことに歓喜したことを回想している。

【表15】東京市における立候補者・得票数一覧(☆…当選者)					
順位	候補者	党派	得票数①	得票数②	得票率
☆1	古島一雄	国民党、前	3156	3165	8.53
☆2	頼母木桂吉	大隈派、新	2797	2797	7.56
☆3	今井喜八	同志会、新	2591	2779	7
☆4	高木益太郎	国民党、前	2459	2459	6.64
☆5	関 直彦	国民党、前	2434	2434	6.58
☆6	鳩山一郎	政友会、新	2245	2272	6.07
☆7	江間俊一	同志会、元	2178	2178	5.89
☆8	秋山定輔	同志会、元	1954	1954	5.28
☆9	鈴木梅四郎	国民党、前	1946	1946	5.26
☆10	鈴木萬次郎	同志会、新	1895	1904	5.12
☆11	黒須龍太郎	同志会、前	1698	1698	4.59
12	三木武吉	大隈派、新	1618	1623	4.37
13	蔵原惟郭	同志会、前	1498	1498	4.05
14	星野 錫	同志会、新	1457	1457	3.94
15	後藤武夫	無所属、新	1425	1425	3.85
16	横山勝太郎	中正会、新	1312	1251	3.55
17	荻野萬之助	中正会、新	1119	1119	3.02
18	八束可海	同志会、元	849	849	2.29
19	尾竹染吉	無所属、新	636	636	1.72
20	森山守次	大隈派、新	552	552	1.49
21	三輪信次郎	中正会、前	464	524	1.25
22	副島八十六	同志会、新	431	431	1.16
23	大石熊吉	同志会、元	137	其外361	0.37
24	茅原廉太郎	無所属、新	129		0.35
25	馬場勝弥	無所属、新	15		0.04
26	田野 豊	無所属、新	13		0.04
27	渡辺国重	同志会、前	—	—	—
28	吉田巳之助	大隈派、新	—	—	—
計			37008	37312	

※得票数①:『読売』(大正4年3月27日〔三〕)より作成。
 ※得票数②:『自第七回至第十三回衆議院議員総選挙一覧』より作成。

同選挙の特徴として看過できないのが秋山定輔・関直彦・古島一雄ら、ジャーナリズムの担う政治的役割に通じている人物の存在である。秋山は『二六新報』の創刊者として、黒岩の『萬朝報』とともに、日清戦後における大衆新聞の発展を支えた。彼は第七回総選挙より三期連続で当選するも、日露戦中に「露探」の容疑を掛けられ議員を辞して以来の出馬であつた。関は明治十年代後半に『東京日日新聞』社長として「明治の新聞界に一時代」を築き、ここで培った経験と人脈をもって東京市政に参与し、第九回総選挙から四期連続の当選を狙っていた。古島は政教社員として雑誌『日本人』に加わり、新聞『日本』を連訣辞職した後、雑誌『日本及日本人』へ、さらに日露戦後に『萬朝報』に在籍していた経歴を持ち、日比谷焼打事件に際し「宣伝ビラ」の印刷を秘密裡に行なうなど、政治とジャーナリズムの密接な関係を熟知していた。【表16】により選挙区別の得票数を見ると、秋山・関が神田・京橋とそれぞれの本拠地を中心に票数を伸ばしたのに対し、古島は本郷・本所など地元候補が不在の選挙区でも支持を集め、東京市の最高得票を獲得した。

学生・青年層が新しい政治集団として登場してきたことは同選挙における特徴であつた。特に明治四十年に東京の大学生を中心に結成された丁未倶楽部は、大隈伯後援会遊説部において実行部隊の先鋒となり、全国規模の組織を形成するなかで選挙民に多大な影響を及ぼした。編輯主任の鈴木正吾、また茅原に私淑していた室伏高信なども、明治大学在学中に同団体に参加し、既成政党に距離を置きつつ、大正期の政治へ関与していく学生団

体と『第三帝国』の政治的位置に少なからず親近性があることを指摘できよう。

【表16】東京市における選挙区別の得票数一覧(☆は当選者)																	
順位	候補者	計	麹町	神田	日本橋	京橋	芝	麻布	赤坂	四谷	牛込	小石川	本郷	下谷	浅草	本所	深川
☆1	古島一雄	3156	101	356	195	119	201	167	123	82	147	177	234	263	498	382	111
☆2	頼母木桂吉	2797	263	172	239	131	100	41	40	45	119	94	424	80	861	140	48
☆3	今井喜八	2591	25	191	162	72	59	24	12	34	26	35	73	193	1288	386	199
☆4	高木益太郎	2459	21	255	914	57	82	23	20	47	38	55	94	79	273	274	227
☆5	関 直彦	2434	54	124	148	871	283	84	87	35	33	22	72	81	136	234	170
☆6	鳩山一郎	2245	67	87	93	50	104	44	93	233	395	569	176	25	43	169	97
☆7	江間俊一	2178	32	252	86	24	45	43	84	27	63	190	263	755	129	151	134
☆8	秋山定輔	1954	127	711	85	82	108	77	43	44	51	33	83	175	107	158	70
☆9	鈴木梅四郎	1946	168	190	224	80	210	163	145	56	45	60	101	56	131	123	94
☆10	鈴木萬次郎	1895	56	420	230	159	139	73	108	58	74	56	109	176	67	114	56
☆11	黒須龍太郎	1698	32	177	119	60	789	59	17	50	51	31	55	65	93	57	35
12	三木武吉	1618	35	112	54	24	58	52	95	59	663	227	36	34	46	40	73
13	蔵原惟郭	1498	54	222	232	79	83	234	82	31	30	12	27	24	53	233	92
14	星野 錫	1457	42	134	469	102	101	36	44	39	53	40	90	38	70	123	66
15	後藤武夫	1425	88	49	94	369	70	83	68	39	42	68	36	76	57	127	159
16	横山勝太郎	1312	35	75	72	151	508	63	26	60	31	87	20	20	26	61	77
17	荻野萬之助	1119	26	57	366	73	60	32	20	125	16	48	47	46	63	48	92
18	八束可海	849	15	54	67	359	22	11	14	4	14	13	20	62	34	79	51
19	尾竹染吉	636	9	82	78	18	18	6	11	4	12	16	48	137	73	104	20
20	森山守次	552	26	16	35	27	133	52	28	14	69	36	69	16	10	12	8
21	三輪信次郎	464	48	30	18	48	24	15	40	13	30	23	42	58	22	29	24
22	副島八十六	431	11	19	51	26	21	20	16	8	84	36	86	13	8	24	8
23	大石熊吉	137	2	9	21	3	25	1	3	4	13	0	2	9	19	24	2
24	茅原廉太郎	129	8	7	6	14	12	6	6	0	18	12	21	4	2	9	4
25	馬場勝弥	15	1	2	3	0	1	0	0	0	0	0	2	0	1	4	1
26	田野 豊	13	1	2	0	1	1	0	0	4	0	0	1	1	0	0	0
27	渡辺国重	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
28	吉田巳之助	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

※『読売』大正4年3月27日〔三〕より作成。

※『読売』大正4年3月27日(三)より作成。

曰く馬場弧蝶氏、曰く与謝野寛氏、曰く小山東助氏、曰く茅原華山氏、曰く尾竹竹披氏、曰く誰、曰く誰等、従来主として思想家乃至文芸家として知られて来た人々であつて、今度の総選挙を機として政治界へ打って出やうとして居る人が少なからずあるやうであり、且それを非常な大事件のやうにしてワイ、云つて居る新聞や雑誌の記者もあり、更にそれを思想界の進歩であるが如く解して真面目に応援などして居る所謂新しい時代の人々も少なからずある様子であるが、吾々はこれ位馬鹿々々しい、くだらない事は、近年になかったやうにしか思はれない。¹⁶¹⁾

もう一つの特徴に、文士候補の出馬という現象が挙げられる。そうした動向を評論家の相馬御風は右のように批判している。馬場弧蝶、与謝野寛らに茅原も含め、多くの文士が

「思想界の進歩」と称し安易に政界へ進出しようとする姿勢を諫めた。「思想家乃至文芸家」としての純粹さを選挙場裡の誘惑に屈し喪失していくことを憂い、警告していたのである。文士の立候補がジャーナリズムの駆使による選挙戦術の出現と時を同じくしているのは決して偶然ではない。これは「政治の大衆化」に即応する形で浮上してきた社会現象の一つであった。選挙戦術の巧妙化・政治の専門化が言説における政治の大衆化と交錯する形で現れていることは、当該期の政治の特質を知る上で示唆的であろう。

【表17】は、大選挙区制で行なわれた第七十三回総選挙の東京市における選挙人数の変遷を示しているが、選挙法改正に伴う有権者の拡大のほか、第十二次に市内の有権者が年平均千人を超える割合で急増していることに注目したい。さらに有権者の増加が投票者数の増加と平行していることを見ると、新しい有権者をめぐり政党・政治家が新聞・雑誌メディアの宣伝効果に着目し、新たな政治手段として活用したことの意味は瞭然である。この傾向は、農村よりも都市部で顕著であり、東京に典型的なように、資本主義的生産様式の拡大に伴う人口増加、有権者の拡大をいかに把握するかが新しい政治課題として認識されていたことがわかる。大隈内閣の選挙キャンペーンは、同内閣特有の行動でありながら、こうした現象に対応するための戦略であったと言える。まさに政治の大衆化が新しい社会階層を把握・操作する政治技術の専門化のもとで進行していた。当選者と落選者の得票率が前二回に比べ接近したことも二項対立の図式ではなく、多数の候補者が選挙戦を争う傾向を示しているよう。

以上、第十二回総選挙の傾向を選挙分析に基づいて見てきたが、その特徴をもつて『第三帝国』の「模範選挙」の意味を考えるならば、政友会と大隈派という「二大政党」体制の実現の軌轢として、戸別訪問や買収などの露骨な選挙活動や選挙干渉を招いていたことに對する茅原一流の時事批判であったと言える。宣言文の「選挙人の買収せらるゝは即ち議員の買収せらるゝ、所以だとすれば、議員の買収せらるゝは政党の買収せらるゝ、所以です」という言葉には、例を見ない喧騒のなかで全国的政争を引き起こしていた政治情勢へ、「理想選挙」を掲げる大隈内閣とジャーナリズムへの鋭い批判が込められていたのである。

【表17】大選挙区制下の総選挙における投票率の変遷

回(種)・年月日	選挙区(定員)	選挙人	失格	棄権	無効	投票数(%)	当選者得票(%)	落選者得票(%)
第七回(通常)	東京市(11人)	16363	—	3587	76	12701(77.6)	8436(66.4)	4265(33.6)
1902年8月10日	郡部 (5人)	10381	—	1096	114	9171(88.3)	6584(71.2)	2586(28.2)
第八回(臨時)	東京市(11人)	16363	—	3705	84	12574(76.8)	8770(69.7)	3804(30.3)
1903年3月1日	郡部 (5人)	10381	—	1378	58	8945(86.2)	6678(74.7)	2267(25.3)
第九回(臨時)	東京市(11人)	15657	—	3302	56	12299(78.6)	9928(80.7)	2371(19.3)
1904年3月1日	郡部 (5人)	8038	—	763	48	7227(89.8)	5692(78.8)	1535(21.2)
第十回(通常)	東京市(11人)	33870	—	6898	188	26784(79.1)	22094(82.5)	4690(17.5)
1908年5月15日	郡部 (5人)	18626	—	2494	135	15997(85.9)	13519(84.5)	2478(15.5)
第十一回(通常)	東京市(11人)	39293	—	6840	145	32308(82.2)	26735(82.8)	5573(17.2)
1912年5月15日	郡部 (5人)	19424	—	3607	195	15622(80.4)	15461(99.0)	161(0.1)
第十二回(臨時)	東京市(11人)	44332	1234	5632	154	37312(84.2)	25586(68.6)	11726(31.4)
1915年3月25日	郡部 (5人)	21466	373	2398	110	18585(86.6)	16470(88.6)	2115(11.4)
第十三回(臨時)	東京市(11人)	37203	1356	4802	77	30968(83.2)	22615(73.0)	8353(27.0)
1917年4月20日	郡部 (5人)	20568	631	2139	77	17721(86.2)	14677(82.8)	3044(17.2)

※『自第七回至第十三回衆議院議員総選挙一覧』より作成。

「東京市は私の故郷であり誕生地ですが、私は断じて貴下の義侠に訴へません、又断じて貴下の同情に訴へません、私は直接貴下の自己判断に訴へるのです」。茅原は選挙の結果を選挙人の「自己判断」に委ね、戸別訪問や遊説、選挙事務所設置も必要ないとする。「二大政党」のもとで不正はびこる選挙の現状に対し、「民主主義は殆んど全く凋落して、従って私は全然孤立無援である」と告白し、「選挙に関する費用の一切を挙げて明細に之を新聞紙及び私の主盟なる『第三帝国』に公表」することを宣言した。立候補の真意を「議院の内に在って批判して、日本の政治の實際を公平に無遠慮に国民の前に暴露」し、「国民的基礎に立ち国民の資金を以て活動する真の政党即ち第三政党を組織する」ことと語り、海軍一元主義と財政の根本的整理を急務の課題として掲げたのである。つまり、国民の利益を代表する「第三党」組織の結成こそ、茅原が「模範選挙」で示した政治目標であり、それは国民を無視する形で進行する「二大政党」へのアンチテーゼと選挙権拡張に伴う新しい選挙民の誕生を前提として展開されていた。¹⁶⁴

こうした同時代批判とともに、茅原の出馬理由として、主事の石田および青年読者の強い要請があったことも忘れてはならない。溯ること一ヶ月、二九号(同年一月五日)の「益進会から」で、石田は「予は華山氏に対して此際政戦場裡に馳駆すべし、候補に立つて選挙を争ふべしと勸めてゐるが、新時代の犠牲たるべく、華山氏も容易に起つとは云はぬ、予と同感の士あらば遠きより近くより勸めて貰ひたい」と呼びかけていた。対する茅原は直前まで「内の世界を外に実現する見込が附かなければ、外の世界を見ないでもよい」と固辞していたが、石田および読者の強い要望に応える形で、立候補を決意した。すなわち、茅原にとって「模範選挙」運動の意義とは、当選という結果よりも、選挙活動の「模範」を示すことを通じて東京市民、さらには日本人民全体に「選挙人たる権威を自覚し権利を自覚し義務を自覚し、外部の圧迫又は誘惑で選挙させられないで、自己の判断で選挙」することを促し、時事批判の実践を試みることにあったのである。

「模範選挙」宣言をうけ、届いた声は様々であった。三三号(同二十五日)八頁には、信州上諏訪の今井邦が「茅原氏の立候補と生の実現」と題する投書を寄せ、政界を内側から批判し、国民的基礎に基づく「第三党」を組織しようとする茅原の見解が「現代の吾々が欲求して居る霊と、肉との全一合流なる世界と、そこに深き共通鳴号するものがある」と評している。早稲田の柳澤英輔は「本当に自分の主張を徹底させやうとすれば是非現実の一角に根づよい根拠を有たねばならぬ」と立候補の動機に賛成しながら、茅原に「当選の如何は市民の責任だ」などと言わず、東京市民に意志を徹底するための奮闘を求めた。¹⁶⁵

一方、麹町の弁護士安達元之助のように「思想上の文明批評家たる先生が、政治を説き教育経済を説くさへお門違いなのに、¹⁶⁶実際の政治に干渉するが如きは断じて先生の為に取らず」と反対する意見も少なくなかった。¹⁶⁷加藤時次郎と白柳秀湖は三五号(三月二十日)三三頁に「茅原華山君の宣言書を読む」を連名で寄せ、茅原の「選挙に関する意見」には首肯するものの、「階級」認識の曖昧さ、自分を過信する態度に違和感を示している。また、同号(二六頁)には『新公論』主筆の浅海蛮塊が「大馬鹿者華山を推す」を掲げ、「華山氏ほど向見ずな大馬鹿者が何処に居るんだい。第三帝国なんて云ふから危険思想と思はれるが、実は青年日本党の元勳として万世から賞賛さるべき大馬鹿者だ。此人の為に東京市民は万票を惜しむな」と、応援とも皮肉とも取れる意見を届けていた。

立候補宣言後も茅原は、選挙の現状を批判する論説を掲げ「模範選挙」の理念を主張し

続け、實際運動なき実践を試みていた。¹⁶⁷それは「立憲政治は上から築き下ろすべきものではなく下から築き上げねばならないのです、故に私は先づ選挙人から覚醒せねばならないと存じます」という「人間本位の憲法政治」実現への確信から出た「運動」であつた。¹⁶⁸石田も「今回の茅原氏の立候補は実に全国の候補者に模範を示すものにして、而して国民の政治教育の上よりせば、最上の実物教育であると信ずる」と主張し、「模範選挙」の精神を「混濁腐敗の極に達してゐる日本の選挙界を廓清し、憲政の済美を期する唯一の光明」と評価した。そして、選挙運動をしないと公言する茅原に対し、法学博士江木衷を団長に、西本国之輔、佐治実然、¹⁶⁹安部磯雄、向軍治などの賛助を得て、「模範選挙期成団」を結成し、後援活動を行つていく。果たして、「模範選挙」の訴えも虚しく、茅原と益進会同人を待っていたのは、得票数一二九票、立候補者二八名中二四位の落選という現実であつた。当初の狙いに即すならば、それは日本の政治状況を反映する意味で「模範」的な結果であつたが、『第三帝国』における政治的実践は「模範落選」という形で終幕を見たのであつた。だが、同運動は期せずして一地方青年による選挙運動を呼び起こしていた。

国民の輿論を表現す可き選挙の界の腐敗、選挙人の無能なりと為す。夫れ立憲国に於ける選挙権たる国民唯一の参政権にして之が行使の如何は直ちに国政の全般に及び再び還つて国民各自の運命を左右す可きの理照々乎として明らかなる所敢て識者の判断を俟つて初めて知る可きに非ざる也。¹⁷¹

右は、大正四年二月十一日、静岡県田方郡函南村出身の神尾一恵が記した「政界廓清の檄」の一節である。¹⁷¹一恵は明治二十一年三月十一日、函南村丹那に好治郎・むめの長男として生まれた。神尾家は地域の豪農名士で、父は村収入役として勤めた後、横浜で米穀や雑貨などを扱う交易商を営んだが、同四十一年に家業を継ぐために帰郷し、村会議員や郡会議員を歴任した。一恵は、同三十九年三月に菰山中学校を卒業し、早稲田大学予科を経て、同四十四年に早稲田大学商科を卒業した。アメリカ留学を希望したが、父に反対され断念し、家業を継ぐために帰郷した。一恵は、父が静岡市に出した穀物商店を手伝うかわら、郷里の小学校で雇教師をしていたが、留学の夢かなわず、家業に縛られる生活に鬱勃とした心情を抱え、郡議会および県議会選挙にはびこる腐敗に義憤を感じていた。¹⁷²

そのとき、まさに地方青年に門戸を開いた『第三帝国』の評判に触れ、主盟の茅原が東京市から総選挙に立候補する動きを知り、それと連動する形で「理想選挙」運動に乗り出した。帝国憲法発布の記念日を期して「檄文」を起草し、日本の政治に跋扈する「軍閥官僚の横暴」に筆誅を加え、「内政の不備」「外交の不振」「地方自治の未発達」などを指摘し、政治家の責任を問うとともに、自らを省みて国民の責任をも問い直すべきと主張した。

「静岡県青年理想選挙期成会」を結成した一恵は、発起人として「本会ハ選挙界ノ弊風ヲ打破シ憲政ノ完美ヲ期ス」「本会ハ独立自尊ヲ保チ何等党派的色彩ヲ帯ビザル事」など全十条からなる「仮規約」を作成し、本会が成立するまでの仮事務所を田方郡函南村丹那十七番地に置いた。神尾家に残されている「同志名簿」を見ると、彼の檄文に応え、理想選挙期成会に参加した青年は百名以上に及び、県外からも賛同者が集まり、永井柳太郎・尾崎行雄・三浦鉄太郎・一木喜徳郎、そして茅原の名前が確認できる。多くの賛同を得た一恵は、同年三月十四日に三島町戦捷記念館で「選挙界廓清大演説会」を開催することを

決め、「来り不偏不党独立自尊の本会の活動に共鳴せよ」「本会は立憲の公器を持て任ず」と記された宣伝用チラシを印刷している。¹⁷⁾この大演説会の主賓格の弁士こそ、「第三帝国主筆 前萬朝報主筆茅原華山」であった。

今回東京より特に本会の為に来県せらるゝ茅原華山先生は単なる口舌の弁士に非ず我國現代思想の新人たる斉しく天下識者の認むる所而して現下政界の腐敗を傍観するに忍びず立ちて「東京市民に模範選挙を望む」の一文を檄し自ら天下に選挙の模範を提示せんと逐鹿場裏に獅子吼しつゝあり然かも未だ平常の業たる筆を投せず大に論壇に雄飛して社会の鞭撻に務其繁激なる察すべし然るに本会の主意に賛し其切なる願に応じて出演を諾去る本会は以て其の労を多且大と為す

大演説会を開催するに際し、一恵は、尾崎行雄法相、湯浅倉平静岡県知事に事前に連絡を入れ、各新聞記者に会見して運動への理解を求めた。演説会に対する干渉を抑え、さらに静岡県三島を発祥の地として「理想選挙」運動を全国的に展開することを企図したのである。同演説会を投票日を目前に控えた三月一四日に設定したのも、維新に際し明治天皇が五箇条の御誓文を發布された日を記念してのことであった。静岡県理想選挙期成会の発会式を兼ねて催された演説会の様子を地元紙の『静岡朝報』は、次のように報じている。¹⁷⁾

本会発会の理由 神尾一恵、立憲法治国に於いて選挙民の覚悟 法学士山下信義、国家の本質を論じて立憲政体の要義 河原井棄諸氏演説ありて、最後に不偏不党模範選挙東京市立候補者茅原華山氏は模範選挙に就いて縦横無尽に選挙界腐敗を痛論し、滔々三時間の痛快なる演説ありて午後六時閉会せしが傍聴者八百余名にて拍手喝采会場に満ちたり因に立会演説会なかりしかば松城前代議士は期成会の祝辞演説をなしたり

華山の演説は三時間に及ぶ長舌であった。神尾家に残されている写真には聴衆を前に和服姿の茅原華山が登壇している。¹⁷⁾背後に掛かる垂れ幕には、演題と講演者名が墨書されているが、「演題未定 茅原華山」と記されている。演題を決めず、縦横無尽に雄弁を揮ったことは想像に難くない。このように茅原の「模範選挙」運動はその主旨に賛同する読者の内に、「理想選挙」運動を唱道する神尾一恵なる地方青年を喚起したのである。

ここで注目すべきは、茅原が「模範」選挙を掲げているのに対し、神尾一恵は「理想」選挙を標榜している点である。演説会の宣伝チラシにも、華山を紹介する肩書きには「第三帝国主筆」とともに「前萬朝報主筆」が記されていた。前回総選挙で『萬朝報』が展開した党派を越えた「理想選挙」の印象が強かったことに加え、やはり華山の名は萬朝の論説記者として知られていたためであろう。また、同人と読者の熱い声に押され、いわば雑誌存続のために立候補した華山の「模範」選挙が、当選よりも選挙運動の手本を示すことを優先させる「苦肉の策」だったのに対し、神尾一恵の「理想」選挙は、腐敗した選挙の実状を廓清するという正義感から出発した、いわば地域青年の育成をめざした啓蒙活動だった。両者の総選挙に臨む姿勢には微妙かつ明確な差異が存在していたのである。

大演説会以降の華山と一恵の交流については、それを記した史料が残されておらず不明である。華山の「模範落選」をどのように受け止めたかはわからないが、一恵は、大正六

年四月二十日の第十三回総選挙でも普通選挙運動を展開した。¹⁷⁸⁾三島町戦捷記念館で再び演説会を開催し、同郷出身で慶應義塾大学の田中萃一郎、東京大学の吉野作造を招いている。¹⁷⁹⁾二度にわたる選挙啓蒙活動の後は、昭和六年に丹那トンネル（熱海～三島）¹⁸⁰⁾の土地問題が起ると、丹那盆地の水路確保の世話役を務めるなど、地域のために尽力した。

憲政史上空前の騒擾のなかで行われた第十二回総選挙で茅原が「模範選挙」を掲げた真意は、大別して二点に見出された。一つは、大隈派と原政友会の対立の弊害として展開された激烈かつ巧妙な選挙活動への批判であった。日露戦後における新しい社会階層の出現に伴う有権者の増加を背景とし、新聞・雑誌メディア、さらには学生青年層を駆使する選挙活動が決定的な影響を及ぼす政治現象が出現していた。「人間本位の憲法政治」を唱導し、普通選挙制度の実現を訴えていた茅原と益進会同人にとって、制限選挙のもとで実施される「二大政党」体制は、言説上における政治の大衆化とは裏腹に、一層の政治の専横をなすものと映じた。茅原があえて一切の選挙活動を行わず、落選覚悟の「模範選挙」を標榜したのは、従来の主張を投げ捨て大隈内閣を支持する黒岩からの自立化という意味を含みつつ、同時代における政治の現状を批判するがゆえの「模範」の提示だったのである。茅原および『第三帝国』の言説は、言説レベルのみならず、政治史、メディア史との関連に注目し、史料の政治性を検討してはじめて真意を解明することが可能であり、そこに「模範選挙」運動の位置を選挙分析を施すなかで同時代に定位し直した所以があった。

もう一つは、石田や読者の強い要請で決意されたことに基因し、それがあべき選挙の姿を東京市民をはじめ、日本人民に示すことを目的としていたことであった。「益進主義」鼓吹のもと、日本人民に「自我」の覚醒を政治・社会的に展開することを訴えてきた同誌は、先の普選請願署名運動や投書欄の隆盛に手応えを感じ、自ら「模範」となって政治の局面に立つことで、青年読者にさらなる飛躍を求めたのである。ここで茅原は、石田や読者からの要請に応える側面と、野心剥き出しに繰り広げられる巷間の選挙活動を批判する側面との妥協点を、「模範選挙」という一切の選挙活動を拒み、選挙人の見識・判断を問う形で提示した。つまり、『第三帝国』による「模範選挙」運動は、痛烈な時事批判であると同時に、青年層への啓発を企図するものだったのである。だが、「模範選挙」から「模範落選」へという道程は、これまで両輪として同誌を牽引してきた茅原と石田の間に運動をめぐる見解の相違を生み出すという結果をもたらすのであった。

¹⁾ 「本誌第一回講演会」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）二〇頁。

²⁾ 抱月については、尾崎宏次『島村抱月―日本近代劇の創始者たち―』（一九六五年、未来社）、佐渡谷重信『抱月島村瀧太郎論』（一九八〇年、明治書院）、岩佐壮四郎『抱月のベル・エポック―明治文学者と新世紀ヨーロッパ』（一九九八年、大修館書店）を参照した。
³⁾ 井村君江『「サロメ」の受容―翻訳・舞台―』（一九九〇年、新書館）によれば、サロメ劇を日本で初めて上演したのは島村抱月の芸術座で、主演は松井須磨子であった。全国各地の劇場で上演した回数は大正二年から八年までの七年間で計百二十七回を数えた。

⁴⁾ 「本誌第四回講演会」『第三帝国』六（大正三年二月一日）二〇頁。

⁵⁾ 茅原華山「思園小記」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）二〇頁。「思園」は茅原が

市ヶ谷の自宅に開いた私塾で、「思想は人間生活の中心である」という所から命名された。

⁶⁾ 前掲、茅原華山「国家無能」三頁。

⁷⁾ 前掲、茅原華山「国家の打破と創造（新憲政擁護運動）」四頁。

⁸⁾ 辛亥革命前後における中国と日本の政治状況については、櫻井良樹『辛亥革命と日本政治の変動』（二〇〇九年、岩波書店）、久保田文次『孫文・辛亥革命と日本人』（二〇一一年、汲古書院）、王柯編『辛亥革命と日本』（二〇一一年、藤原書店）などを参照した。

⁹⁾ 「憲政擁護の残骸」『東京朝日新聞』（大正二年三月十一日）三面。

¹⁰⁾ 茅原華山「我心事を明にして知不知に告ぐ」『第三帝国』二七（大正三年十二月十五日）三頁。

¹¹⁾ 前掲、茅原華山「国家の打破と創造（新憲政擁護運動）」三頁。

¹²⁾ 茅原華山「民本政治へ（新しい実業家）」『第三帝国』五（大正三年二月一日）一頁。

¹³⁾ 「憲政擁護大会の開催」『東京朝日新聞』（大正三年一月六日）一面、および「憲政擁護大会」『時事新報』（大正三年一月六日）一面。

¹⁴⁾ 「徹底、徹底、徹底」『萬朝報』（大正三年二月十四日）一面。

¹⁵⁾ 松山忠二郎「五千万円減税論」『第三帝国』五（大正三年二月一日）二頁。

¹⁶⁾ 川尻東馬「営業税全廃運動」『第三帝国』五（大正三年二月一日）五頁。

¹⁷⁾ 安部磯雄「生活問題と減税運動」『第三帝国』五（大正三年二月一日）五頁。

¹⁸⁾ 大正期の営業税廃税運動については、石井裕晶「1922年の営業税廃税運動の政治経済過程」『社会経済史学』七六巻一号（二〇一〇年五月）、同「大正末期の営業税廃税過程」『日本歴史』七四八（二〇一〇年九月）などを参照した。

¹⁹⁾ 前掲、茅原華山「大なる終りと大なる始め」三頁。

²⁰⁾ 前掲、茅原華山「我等の進歩」一頁。

²¹⁾ 前掲、茅原華山「大なる終りと大なる始め」四頁。

²²⁾ 「シーメンス会社の贈賄事件」『時事新報』（大正三年一月二十三日）一面。

²³⁾ 茅原華山「第三帝国は近づけり！」『第三帝国』六（大正三年二月十日）一頁。

²⁴⁾ 松山忠二郎「山本内閣倒壊当時の黒岩氏と自分」（涙香会編『黒岩涙香』、大正十一年、扶桑社）五五〇～五五四頁。

²⁵⁾ 「大正三年二月十六日条」『原敬日記』三巻、一九六五年、福村出版）九〇頁。

²⁶⁾ 茅原華山「新第三帝国論Ⅰ」『第三帝国』一一（大正三年五月十六日）一〇頁。

²⁷⁾ 茅原華山「新第三帝国論Ⅴ」『第三帝国』一一（大正三年五月十六日）一六頁。

²⁸⁾ 近代日本における「自我」については、主に小田切秀雄「日本における自我意識の特質と諸形態」『近代日本思想史講座』四巻（一九六〇年、筑摩書房）を参照した。

²⁹⁾ 大正期におけるベルグソン哲学の流行については、宮山昌治「純粹持続の効用―大正期ベルクソニズムと戦争」『成城文芸』一六九（二〇〇〇年二月）一～二二頁、同「大正期におけるベルクソン哲学の受容」『人文』四（二〇〇五年三月、学習院大学人文科学研究所）八三～一〇四頁を参照した。

³⁰⁾ 西田幾多郎「ベルグソンの哲学的方法論」『芸文』第一年第八号（明治四十三年十一月）二二～二二頁。

³¹⁾ 同右、西田幾多郎「ベルグソンの哲学的方法論」二七頁。

³²⁾ 西田幾多郎『善の研究』（明治四十四年、弘道館）序。

- ³³⁾ 大杉栄「創造的進化―アンリ・ベルグソン論―」『近代思想』第一巻第七号（大正二年四月一日）二〇六頁。
- ³⁴⁾ 当該期の大杉については、大沢正道『大杉栄研究』（一九六八年、同成社）、飛鳥井雅道「解説」（『大杉栄評論集』、一九九六年、岩波文庫）、飛矢崎雅也『大杉栄の思想形成と「個人主義」』（二〇〇五年、東信堂）を参照した。
- ³⁵⁾ 大杉栄『正義を求める心』（大正十年、アルス）二一〇～二二二頁。
- ³⁶⁾ 野村善兵衛「ベルグソンとニイチェ」『六合雑誌』三八〇（大正元年九月一日）三七～四二頁。
- ³⁷⁾ 野村善兵衛「ベルグソンとニイチェ（下）」『六合雑誌』三八一（大正元年十月一日）四三頁。
- ³⁸⁾ 野村善兵衛「現代思想の焼点Ⅱ自我」『第三帝国』一（大正二年十月十日）一三頁。
- ³⁹⁾ 野村善兵衛「新理想主義と実生活」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）一四頁。
- ⁴⁰⁾ 野村限畔「四月思想評論」『第三帝国』九（大正三年四月十六日）一六頁。
- ⁴¹⁾ 野村限畔「五月思潮の感想」『第三帝国』一一（大正三年五月十六日）一六頁。
- ⁴²⁾ 稲毛詛風「戦」『早稲田文学』一〇二（大正三年五月一日）三三～三八頁。
- ⁴³⁾ 稲毛詛風「野村限畔君に與ふ―「論理的遊戯」とは何ぞや」『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）一一頁。
- ⁴⁴⁾ 野村限畔「稲毛詛風君に応ふ―「自己を敵とする」とは何ぞや」『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）一一頁。
- ⁴⁵⁾ 岩野泡鳴「巢鴨日記第二」（『泡鳴全集』一二巻、大正十年、広文庫）二四六～二四七頁。
- ⁴⁶⁾ 岩野泡鳴については、片岡良一「泡鳴の自然主義と耽溺」（『片岡良一著作集』七巻、一九七九年、中央公論社）、鎌倉芳信『岩野泡鳴研究』（一九九四年、有精堂）を参照した。
- ⁴⁷⁾ 岩野泡鳴「事実と批評（二重生活の弊害）」『第三帝国』八（大正三年四月一日）一三頁。
- ⁴⁸⁾ 華山「一剣一筆子に答へ併せて岩野泡鳴君に質す」『第三帝国』九（大正三年四月十六日）一六頁。
- ⁴⁹⁾ 松本悟朗「岩野泡鳴氏に与ふ」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）一五頁。
- ⁵⁰⁾ 岩野泡鳴「再び二重生活否定（茅原華山氏へ）」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）一八頁。
- ⁵¹⁾ 松本悟朗「再び岩野泡鳴氏に与ふ」『第三帝国』一一（大正三年五月十六日）九頁。
- ⁵²⁾ 岩野泡鳴「三たび二重生活否定（松本悟朗氏に）」『第三帝国』一二（大正三年六月一日）八頁。
- ⁵³⁾ 松本悟朗「三たび岩野泡鳴氏に与ふ」『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）一四頁。
- ⁵⁴⁾ 当該期の社会主義に関しては、飛鳥井雅道「明治社会主義の帰結―「直接行動論」をめぐって」『思想』五二四（一九六八年二月、岩波書店）四七～六五頁、松沢弘陽『日本社会主義の思想』（一九七三年、筑摩書房）、太田雅夫『初期社会主義史の研究』（一九九一年、新泉社）、三谷太一郎「大正社会主義者の「政治」観―「政治の否定」から「政治的対抗」へ―」（前掲、『新版大正デモクラシー論』二五～三七頁）などを参照した。
- ⁵⁵⁾ 安部磯雄「地方に中心人物を要す」『第三帝国』一（大正二年十月十日）一九頁。この時期の安部や堺については、前掲、荻野富士夫『初期社会主義思想論』、林尚男『評伝堺利彦』（一九八七年、オリジン出版センター）を参照した。

- ⁵⁶⁾ 安部磯雄「婦人小児にも及ぼすべし」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）五頁。
- ⁵⁷⁾ 安部磯雄「市政革新の根本義」『第三帝国』九（大正三年四月十六日）五頁。
- ⁵⁸⁾ 堺利彦「何ぞ大志を抱かざる」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）一八頁。
- ⁵⁹⁾ 益進会同人「勢多左武郎によれば、社会主義者の原稿は伊藤野枝が集めていたという（前掲、「第三帝国」から「洪水以後」へ―あのころの若人たち―）。高島に関しては、田中真人『高島素之―日本の国家社会主義―』（一九七八年、現代評論社）を参照した。
- ⁶⁰⁾ 大杉栄「生の拡充」『近代思想』第一卷第一〇号（大正二年七月一日）二〇五頁、大杉栄「生の道徳」『近代思想』第二卷第一号（大正二年十月一日）二〇七頁。『近代思想』に関しては、堀切利高「解題」『（復刻版）近代思想』（一九八二年、不二出版）を参照した。
- ⁶¹⁾ 大杉栄「時が来たのだ―相馬御風君に与ふ―」『近代思想』第二卷第四号（大正三年一月一日）一二頁。これは相馬の「根本的な個人革命と同時に、吾々は更に現代のあやまりつくられたる社会組織に向つての根本的な革新を要求する」という触発されて執筆した文章であつた（相馬御風「人間性の為めの戦ひ」『読売新聞』（大正二年十一月五日）三面）。
- ⁶²⁾ 大杉も『近代思想』廃刊号（大正三年九月一日）六三頁で「本月十六日発行の『第三帝国』には、僕の『欧洲大乱と社会主義者の態度』が載つた。そして『第三帝国』は、僕の外に二三の原因はあつたさうだが、発売禁止になつた」と記している。
- ⁶³⁾ 中村弧月「人間生活の要求について―大杉栄氏に寄す―」『第三帝国』四八（大正四年八月五日）一二二―一二三頁。
- ⁶⁴⁾ 大杉栄「僕の社会観―中村弧月君に答へ―」『第三帝国』四九（大正四年八月十五日）三〇―三二頁。
- ⁶⁵⁾ 大杉栄「僕の現代社会観―中村弧月君に答へる―」『第三帝国』五〇（大正四年九月一日）一三―一四頁。
- ⁶⁶⁾ 茅原華山「相霑ほす心（新労働問題）」『第三帝国』四八（大正四年八月五日）四―五頁。
- ⁶⁷⁾ 同右、茅原華山「相霑ほす心（新労働問題）」四頁。
- ⁶⁸⁾ 「華山氏一行講演会」『秋田毎日新聞』（大正四年七月十四日）一面。「東北講演旅行（上・下）」『第三帝国』四八・四九（大正四年八月五・十五日）によると、同十七日から二十八日までの約一〇日間で、湯澤町、横手町、土崎港町、秋田市、大曲町、角館町、大館町、小坂町、毛馬内町、大湯村、山形県寒河江町に寄つて帰京するという日程であつた。
- ⁶⁹⁾ 「横手支部より」『第三帝国』三九（大正四年五月五日）三〇頁。
- ⁷⁰⁾ 谷口吼洞（作州加茂）「田舎より」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）一三頁。
- ⁷¹⁾ 前掲、益進会「益進会支部の設置に就て」一二頁。
- ⁷²⁾ 源川真希『近現代日本の地域政治構造―大正デモクラシーの崩壊と普選体制の確立―』（二〇〇一年、日本経済評論社）参照。
- ⁷³⁾ 前掲、益進会「益進会支部の設置に就て」一二頁。
- ⁷⁴⁾ 前掲、秋山操編著『基督教教会（ディサイプルス）史』第三章参照。
- ⁷⁵⁾ 加賀谷鉄蔵および加賀谷家に関しては、猪股久・猪股直樹編著『猪股ミチの記録・書簡集』（一九九〇年、非売品）の「巻末」に詳しい。
- ⁷⁶⁾ 横手町の歴史については、横手町史編纂会『続横手郷土史』（一九三三年、横手町役場）、および佐川良視著・糸井藤之助補綴『横手郷土史年表』（一九七七年、東洋書院（初版は一九六八年、彦栄堂））、前掲、『横手市史』通史編・近現代を参照した。

- 77) 『横手高等学校百年史』(一九九八年、横手高校) 第一・二章参照。
- 78) 「横手町より」『第三帝国』一四(大正三年七月一日) 二二頁。
- 79) 「横城青年会の趣旨綱領」『羽後新報』(大正元年十二月八日) 一面。
- 80) 前掲、中村月城(初代牧師)「横手開拓伝道の思い出」『創立八〇周年記念出版(一) 横手教会の牧師たち』六〇七頁。
- 81) 「横手支部より(秋田)」『第三帝国』一六(大正三年八月一日) 二二頁。
- 82) 前掲、「横手支部より」『第三帝国』三九、三〇頁。
- 83) 中村月城「日本とヨーロッパ―華山対御風の論争―」『秋田魁新報』(大正四年七月四日) 三面。
- 84) 相馬御風「日本とヨーロッパ―茅原華山君に寄す」『第三帝国』四三(大正四年六月十五日) 一二頁。
- 85) 中村月城「久遠の救主」『両羽の光』三三(大正六年九月一日)。
- 86) 宮田光雄「権威と服従―近代日本におけるローマ書13章(上)」『思想』七五一(一九八七年一月、岩波書店) 二二〇四五頁参照。
- 87) 丹波源一郎については、『夕映えの詩―丹波源一郎追悼』(一九八九年、無明舎出版)、および牧野尚信・古内龍夫「丹波源一郎氏に聞く(一)」―大正デモクラシー期の一地方青年―『能代山本地方史研究』五(一九八九年三月、能代山本地方史研究会) を参照した。
- 88) 「秋田県本庄町より(秋田)」『第三帝国』一七(大正三年八月十六日) 一二頁。
- 89) 「北浦支部より(秋田)」『第三帝国』一七(大正三年八月十六日) 一二頁。
- 90) 堀井汀水『南秋田郡案内』(大正三年、秋田民報社) 一三八頁。
- 91) 船川築港・鉄道事業に関しては、男鹿市編『船川開港史』(一九六二年)、同『男鹿市史』(一九六四年) 第二章、同『男鹿市史』上巻(一九九五年) 第六編第三章を参照した。
- 92) 『秋田県政史』上巻(一九五五年、秋田県議会)、『秋田県史』六卷大正・昭和編(一九六五年、秋田県) 参照。
- 93) 北浦部落「(明治参拾八年七月改) 決議録」。
- 94) 次男伊東博の編集した『伊東晃璋遺稿集』(一九七七年、大永舎) が詳しい。
- 95) 伊東晃璋(校外会員)「逆境を論ず」『校友会雑誌』九(明治四十一年十月四日、秋田県立横手中学校校友会) 一四頁。
- 96) 伊東晃璋(校外会員)「無題のままに」『みいりの』(大正四年八月、横手中学校校友会) 四三頁。伊東は、エレン・ケイの児童中心主義教育に示唆をうけ、「一九一四年九月中浣」に教育思潮論・師範教育論・校長論・教師論・児童論などからなる「小学教師のノート」と題する一書を記し、西山哲治、稲毛詛風の序文を巻頭に刊行予定であったと見られる。この著書は、一九七六年に「伊東晃璋遺稿集・別冊」として刊行されている。
- 97) 伊東晃璋「夏期大学の経営について」『秋田魁新報』(大正十年七月二十八日) 三面。
- 98) 伊東晃璋「夏期大学の経営を終へて」『秋田魁新報』(大正十年八月二十八日) 三面、および「男鹿夏季大学要覧」(前掲、伊東博編集『伊東晃璋遺稿集』三二〇三五頁。
- 99) 一九六四年八月一日、「誓之御柱」が「展望台」に位置を譲り、西方の小峰頂上に移された際、男鹿琴湖会の秋山福次郎は、「御柱」の台側に「誓之御柱の沿革抄史」として、「昭和五年十月二十四日男鹿琴湖会が夏季大学開講十周年を記念し当時の伯爵二荒芳徳氏指導のもとに故中川重春会長並に故伊東晃璋副会長等相図り文部省始め全県下の協賛を得て明

治維新の五箇条の御誓文を奉録した誓之御柱を名勝の地寒風山頂に建設した」と記した。
¹⁰⁰⁾「秋田労組運動の草分け島田五空」(秋田県広報協会編『秋田人物風土記』、一九七三年、昭和書院)二〇八～二二二頁。
¹⁰¹⁾「營業稅全廢同盟會大會」『羽後新報』(大正三年二月一日)二面。
¹⁰²⁾前掲、茅原華山「民本政治へ(新しい実業家)」一頁。
¹⁰³⁾『能代市史稿』第七輯現代(下編)大正、昭和年代(一九六四年、能代市史編纂委員會)、『能代市史年表』(一九六五年、能代市史編纂委員會)参照。
¹⁰⁴⁾「同情録」『第三帝國』二(大正二年十一月十日)一七頁。「能代港町より(羽後)」『第三帝國』二二(大正三年十月二十五日)二四頁。
¹⁰⁵⁾相澤愛水をはじめ、能代支部の構成員に関しては、『山本の權威』(昭和四年、金子出版部)、『能代のあゆみ―ふるさとの近代』(一九七〇年、北羽新報社)を参照した。
¹⁰⁶⁾長岡幸作「明治時代の能代(下)―佐々木初治の發表から―」『北羽新報』(二〇〇二年二月二十日)五面。
¹⁰⁷⁾「能代青年團の決議」『秋田魁新報』(明治四十五年七月十七日)二面。
¹⁰⁸⁾『山室軍平選集』七卷(一九五二年、山室軍平選集刊行會)、同志社大學人文科學研究所編『山室軍平の研究』(一九九一年、同朋社出版)参照。
¹⁰⁹⁾山室軍平「公娼全廢論(上・下)」『第三帝國』二二・二二(大正三年十月十五・二十五日)一〇〇～一一頁・一〇〇～一一頁、富士川游「絶唱論」『第三帝國』二八(大正四年一月五日)一五～一六頁。
¹¹⁰⁾古内龍夫「宇野美葉の生活短歌」(『古内龍夫著作集』二卷、一九九四年、秋田文化出版)二六〇～二七二頁。
¹¹¹⁾美葉の短歌については、彼が生前にまとめた「歌帖」一卷(明治四十四年・一三〇首)二卷(明治四十五年・二三二首)、三卷(大正二年・一九六首)、四卷は焼失、五卷(大正五～六年・三五四首)のほか、『北羽新報』の「北羽歌壇」掲載作品がある。
¹¹²⁾野口武治「美葉以後」『水脈』(大正十一年)。「俳星」同人である野口は、「近代能代短歌史は実に宇野美葉以後において成り立つ」と述べている。
¹¹³⁾短歌の推移に関しては、主に木俣修『大正短歌史』(一九七二年、明治書院)第一・二章、および篠弘『自然主義と近代短歌』(一九八五年、明治書院)などを参照した。
¹¹⁴⁾茅原華山「What is C.C.自他両存の政治」『第三帝國』三七(大正四年四月十五日)四頁。
¹¹⁵⁾「大正四年二月二日条」(尚友俱樂部・櫻井良樹編『阪谷芳郎東京市長日記』、二〇〇〇年、芙蓉書房出版)四五〇頁。日記には「同四日」とあるが、この挿絵は三月五日の一面に掲載されたもので、後から貼ったものと考えられる。
¹¹⁶⁾当該期の総選挙および政治情勢に関しては、升味準之輔『日本政党史論』三(一九六九年、東京大学出版会)、富田信男「衆議院議員総選挙の史的分析(二)―明治・大正期―」『選挙研究』二(一九八七年三月、日本選挙学会)、川人貞史『日本の政党政治1890～1937年―議会分析と選挙の数量分析―』(一九九二年、東京大学出版会)などを参照した。
¹¹⁷⁾「黒岩周六日記(大正三年―大正四年)」『紀尾井史学』四(一九八四年)三三～四六頁。
¹¹⁸⁾松井柏軒は「余等はタマニ―ホールと称せられた政友会森久保作蔵氏一派を市政から駆逐し、以て市政を廓清すべし」と首唱し、記者俱樂部中の有志を以て市政廓清会といふを組織し、主として、森久保氏の地盤たる深川本所の両区に突撃し、その二級選挙で、同志

派の太田清次郎を援けて森久保氏を落そうと、黒岩、大谷両氏と余は両区の二級有権者を戸別訪問した」と回想している（前掲、柏軒松井広吉『四十五年記者生活』三三三頁）。

¹¹⁹⁾ 坂口二郎『現代新聞論』（昭和九年、千倉書房）三一五頁。

¹²⁰⁾ 萬朝報記者茅原廉太郎（大正三年六月一日市ヶ谷田町の思園に於て）「牛込区民と自治実現」『第三帝国』臨時牛込区号（大正三年六月二日）一頁。

¹²¹⁾ 前掲、『阪谷芳郎東京市長日記』二七七頁。

¹²²⁾ 「大正三年六月六日条」（『原敬日記』四卷、一九六五年、福村出版）五頁。

¹²³⁾ 小野秀雄『新聞研究五十年』（一九七一年、毎日新聞社）二八〇三五頁。それは「社務の都合有之、本日限り貴下の社員籍を削除致候間、此の段御通知申上候也。朝報社」という文面であつた。茅原は三〇号の「思園消息」で、「黒岩先生は全く大隈内閣の幡隋院長兵衛と為つたのだ、大隈内閣の組織に預つた因縁から、一片の侠心、其創立以来の態度を一変せざるを得ざるに至つたので、決して錢を貰つたのではない、但だそれが為に其立場を失つたのは、独り先生の為に惜しむのみではない、萬朝報と日本国民の為に惜しまざるを得ない」と記している。

¹²⁴⁾ 「桂公の位置と政党政治の将来」『東洋経済新報』（大正二年二月五日）一頁。

¹²⁵⁾ 浮田和民「立憲政治の根本義」『太陽』（大正二年四月一日）一一頁。

¹²⁶⁾ 吉野作造「山本内閣の倒閣と大隈内閣の成立」（『吉野作造選集』三卷、一九九五年、岩波書店）七一頁、初出は『太陽』（大正三年五月一日）。

¹²⁷⁾ 鈴木正吾「民の力！」『第三帝国』一（大正二年十月十日）一八頁。

¹²⁸⁾ 鈴木正吾「二月大勢評論」『第三帝国』七（大正三年三月十日）一五頁。

¹²⁹⁾ 明法学士鈴木正吾「胃の空虚を奈何せん」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）六頁。

¹³⁰⁾ 前掲、鈴木正吾「国防会議無用論―是れを増師反対の宣戦布告文とす」一二頁。

¹³¹⁾ 鈴木生「編輯同人より」『第三帝国』八（大正三年四月一日）二四頁。鈴木は警察官の臨検によつて検挙されたのではなく、警視庁から派遣された速記者の演説記録が当局の目に止まつた結果、一ヶ月以上過ぎてから告発された。

¹³²⁾ 鈴木正吾「罰金一金参拾円（下）―口は禍の門、革命の噴火口―」『第三帝国』一六（大正三年八月一日）一七頁。

¹³³⁾ 鈴木正吾「罰金一金参拾円（上）―口は禍の門、革命の噴火口―」『第三帝国』一五（大正三年七月十六日）一八頁。

¹³⁴⁾ 益進会同人「普く天下の同志に檄す」『第三帝国』二〇（大正三年十月五日）一九頁。

¹³⁵⁾ 堺利彦「普通選挙請願方法別案」『第三帝国』二二（大正三年十月十五日）八〇九頁。

¹³⁶⁾ 益進会同人「同志諸君普通選挙運動に就て」『第三帝国』二五（大正三年一月二十五日）一四頁。

¹³⁷⁾ 鈴木正吾「新愛国論（下）」『第三帝国』二四（大正三年十一月十五日）八〇九頁。

¹³⁸⁾ 鈴木正吾「普通選挙に就て尾崎法相と語る」『第三帝国』二三（大正三年十一月五日）九頁。

¹³⁹⁾ 「人間マーチ―選挙権拡張の叫び―」『第三帝国』二四（大正三年十一月十五日）一一頁。

¹⁴⁰⁾ 益進会同人「普通選挙運動参加問答」『第三帝国』二六（大正三年十二月五日）一八頁。

¹⁴¹⁾ 「大正四年三月二十八日条」（前掲、『原敬日記』四卷）九二頁。

¹⁴²⁾ 前掲、吉野作造「山本内閣の倒閣と大隈内閣の成立」（『吉野作造選集』三）六五頁。

- ¹⁴²⁾ 伊藤隆編『大正初期山県有朋談話筆記政変思出草』(一九八一年、山川出版社)、井上馨侯記編纂会編『世外井上公伝』五卷(一九六八年、原書房(復刻))を参照した。
- ¹⁴³⁾ 『大浦兼武伝』(大正十年、大浦氏記念事業会)、伊藤正徳『加藤高明』下巻(昭和四年、加藤伯伝記編纂委員会)、および奈良岡聰智『加藤高明と政党政治―二大政党制への道―』(二〇〇六年、山川出版社)を参照した。
- ¹⁴⁴⁾ 前掲、「黒岩周六日記(大正三年―大正四年)」三三―四六頁。大正三年五月十一日条には「◎大隈伯ニ招待さる」とあり、黒岩、羽田、須崎、松井、大谷、中村雅治ら新聞記者の名前と、高木益太郎、林毅陸、頼母木桂吉、島田三郎ら政治家の名前が挙がっている。
- ¹⁴⁵⁾ 「大隈首相と記者団」『報知新聞』(大正三年七月四日)二面。
- ¹⁴⁶⁾ 若槻禮次郎『古風庵回顧録』(一九七五年、読売新聞社)二〇八―二一〇頁。
- ¹⁴⁷⁾ 茨城県筑波郡伊奈町の関口家文書には、大隈後援会公認の初見八郎による関口惣四郎宛に投票依頼の書状が所蔵されている(『伊奈町史文書目録』八、「文書」二九)。
- ¹⁴⁸⁾ 山本四郎『評伝原敬』下巻(一九九八年、東京創元社)第四部参照。
- ¹⁴⁹⁾ 「隈閣の人氣取」『東京朝日新聞』(大正四年一月十八日)三面、「政友会の不評」(同月二十七日)三面、「大隈伯か原君か(総選挙の真義)」(同年三月二日)三面。
- ¹⁵⁰⁾ 「大隈内閣と枢密院」『東京日日新聞』(大正四年二月十日)三面、「大隈伯と軍備問題」(同月十四日)三面、「大隈内閣の任務」(同月二十三日)三面。
- ¹⁵¹⁾ 「総選挙の価値」『東京日日新聞』(大正四年三月四日)三面、「総選挙の価値(再び)」(同月九日)三面。
- ¹⁵²⁾ 「大隈伯の蓄音機吹込演説」『東京朝日新聞』(大正四年三月五日)五面、「大隈首相の鉄道演説」(同月十七日)五面、「隈伯車窓の長広舌」『東京日日新聞』(同月十七日)七面。
- ¹⁵³⁾ 「政友会の罪大也」『萬朝報』(大正四年一月二日)二面、「政友会凋落の状」(二月一日)二面、「政友到底振はず」(三月八日)二面、「選挙違反最近調」(三月十三日)二面。
- ¹⁵⁴⁾ 前掲、「黒岩周六日記」の大正四年一月十五日と二月二十四日の間には、「政友会ハ歴史ある政党 藩閥と自由党 党中の偉勲者ハ或ハ去リ或ハ去る、徹頭徹尾 目的の為ニハ手段を選ハス」「政友会を歴史的遺物たらしめよ」と講演の際のメモのような言葉が記されている。日付不明のため用途もわからないが、時代の雰囲気をつかいがい知ることができる。
- ¹⁵⁵⁾ 「内閣を助く可し」『萬朝報』(大正四年三月二日)一面。
- ¹⁵⁶⁾ 『東京朝日』(大正四年一月二十四日)三面の「房総特報」には「政友会の候補難」が報じられ、「政友会千葉支部の公認候補選定大会は来る二月十三四日頃開会せらるゝ筈なるが今日迄内定せるは前代議士鶴澤総明、吉植庄一郎、長島鷲太郎の三氏あるのみ」とある。政友会は六人の候補を立てたが当選者は二名に止まり、同志会の四名に及ばなかった。
- ¹⁵⁷⁾ 小林雄吾『立憲政友会史』四卷(大正十三年、立憲政友会)一一五頁。
- ¹⁵⁸⁾ 「小大隈と竹越の競争日に激烈」『東京朝日』(大正四年三月五日)五面。
- ¹⁵⁹⁾ 三木会編『三木武吉』(一九五八年、大日本印刷株式会社)一〇七―一一六頁。
- ¹⁶⁰⁾ 村松梢風『秋山定輔は語る』(昭和十三年、大日本雄弁会講談社)、関直彦『七十七年の回顧』(昭和八年、三省堂)、古島一雄『一老政治家の回想』(一九五一年、中央公論社)、毎日新聞社編『古島一雄清談』(一九五一年、毎日新聞社)参照。
- ¹⁶¹⁾ 相馬御風「新思想家の選挙運動を拝す」『読売新聞』(大正四年二月二十六日)二面。
- ¹⁶²⁾ 茅原廉太郎「東京市民に向つて模範選挙を求む」『第三帝国』三二(大正四年二月十五

日)二〇頁。

¹⁶³⁾これ以降、茅原は「第三党」の結成を模索し、後藤新平や長島隆二との接近を試みていく。後藤との関係は外遊時の支援が契機となったと考えられる。大正四年五月十四日、茅原宅で開催された第三回思園大会に後藤が招かれ、演説を行っている(『思園大会』『第三帝国』四一(大正四年五月二十五日)二四頁)。その一部が筆記され同号(八頁)に「世界愚か当局賢か」と題して掲載されている。後藤は、桂新党の結成に参画しながらも、桂の死後、政党内閣主義に反対し、加藤高明ら党幹部と対立し脱党していた。一方、長島は大蔵官僚の出身で、桂の秘書官・娘婿として立憲同志会の結成に加わるが、やがて脱党し第三勢力の育成をはかり政界工作に奔走していた。後藤や長島をめぐる大正期の政治動向については、前掲、櫻井良樹『大正政治史の出発―立憲同志会の成立とその周辺―』および前掲、季武嘉也『大正期の政治構造』などを参照した。

¹⁶⁴⁾華山生「思園消息」『第三帝国』三一(大正四年二月十五日)二八頁。

¹⁶⁵⁾柳澤英輔「街頭から書斎へ書斎から街頭へ(茅原華山氏の位地)」『第三帝国』三四(大正四年三月五日)二二頁。

¹⁶⁶⁾石田友治「益進会から」『第三帝国』三三(大正四年二月二十五日)三〇頁。

¹⁶⁷⁾茅原華山「選挙団体をして先づ元素に還らしめよ」『第三帝国』三四(大正四年三月五日)四〇五頁、同「選挙に於ける好意の誘惑」『第三帝国』三五(同月二十日)八〇九頁。

¹⁶⁸⁾前掲、茅原廉太郎「東京市民に向つて模範選挙を求む」二二頁。

¹⁶⁹⁾「模範選挙期成団成る」『第三帝国』三五(大正四年三月二十日)一五頁。同月二十六日の『萬朝報』は「茅原氏の休憩所には『先生の意志に非らず、推薦者の意志で設けた』との意味を断り書した札を掲げ、前の道路で模範選挙と記した青紙の推薦状を配布して居た、午前九時頃鳥打帽に緋白の羽織で華山氏が投票に来た」と伝えている。

¹⁷⁰⁾静岡県青年理想選挙期成会「主意書」(大正四年二月十日)。深町順子氏所蔵。

¹⁷¹⁾深町順子氏の「父の略歴メモ」と聞き書きによる。

¹⁷²⁾「神尾一恵氏より」『東京朝日新聞』(大正四年十月六日)記事切抜。

¹⁷³⁾静岡県青年理想選挙期成会「理想選挙期成会の記録」【ガリ版刷】(大正四年九月十九日)。この末尾に「同志者名の署名」が墨書されている。

¹⁷⁴⁾静岡県青年理想選挙期成会「選挙界廓清大演説会」宣伝チラシ(大正四年三月十四日)。

¹⁷⁵⁾「理想選挙会」『静岡朝報』(大正四年三月十五日)記事切抜。

¹⁷⁶⁾「写真」選挙界廓清大演説会(三島町戦捷記念館にて、大正四年三月十四日)。

¹⁷⁷⁾静岡県理想選挙期成会の幹事であった田方郡函南村の廣田傳一が後に華山が創刊する個人雑誌『内観』の読者になっていることが茅原健氏所蔵「購読者名簿」から判明している。
¹⁷⁸⁾静岡県青年理想選挙期成会「総選挙を機として再び青年諸君に檄す」(大正六年四月三日)。

¹⁷⁹⁾田中は、一恵と同じ田方郡函南の出身、慶應義塾を卒業後、母校で教鞭と執り、史学科を創設し、政治学史・泰西思想史などを講じた。面識がなかった吉野とは駒込の吉野邸を訪ね、直接依頼し承諾を得た。吉野の大正六年四月三日の日記には「神尾君二偶ヒ三時過ヨリ一場ノ演説ヲスル」とある(『吉野作造選集』一四卷、一九九六年、岩波書店)。

¹⁸⁰⁾神尾一恵「見落されたるものしかも問題の核心 水田水路用地評価を丹那の不文律に観る」(昭和七年九月十五日)。

第四章 「第三帝国」の思想圏

第一節 益進会の隆盛と分裂

茅原は、第十二回総選挙における敗北を「模範落選¹⁾」と称した。だが、この言葉はすでに「模範選挙」宣言から二十日後の三四号「思園消息」で使用されていた²⁾。一切の選挙活動をしないと公言した彼は「選挙の為めには足一步も思園を出ない覚悟である」と述べ、「模範落選」と私が時々叫ぶので、園中の人の失笑を買った」と記している。下馬評を知ったの諦めの言葉とも取れるが、続く『模範落選』まで来ねば、私の新たな生活に於ける位地が定まらない」という発言には、負け惜しみ以上の意味が込められていた。本節では、従来、茅原が思想的に後退すると評されてきた「模範落選」以後の言動をさぐり、益進会の隆盛と分裂の実態を明らかにした上で、同誌の思想運動に参加し、そこから独自の道を拓いていく人物たちを取り上げ、「第三帝国」の「思想圏」として跡づけた。

一 「模範落選」以後

「私に候補者に立てといふが私は新しい人がズンズン旧い型に箝って行くのを悲しむものだ³⁾」。「私は口に言ふ所は行に現はるゝ所でなければならぬ、否、言ふ所でなければ行ふことが出来ない、故に選挙場裡に非常展開、急調展開を成就するの目的が達せられる見込のない限り、私は退いて独りを樂しむより外はない」。三一号に掲載された「思園消息」の記述からは、茅原に積極的な立候補の意思があるとは感じられない。

対して石田は、当初より茅原の立候補を推挙していた。「茅原氏立候補に関し所在多くの反響あり、反对者もあれど、賛成者遙かに多し⁴⁾」と紹介し、反对者の声を「時代」を考えない狭い意見と斥け、「何を苦んで躊躇逡巡せん」「速かに決心し宣言すべき也」と迫り、「然らずんば今までの言論総て無意義」とまで言い切り出馬を促したのである。

三二号において茅原が「模範選挙」を宣言したのは、こうした強い推挙に加え、全国の青年読者たちから寄せられた熱い声に応えた結果であった。この宣言を受け、石田は「茅原華山氏は吾々の勧告を容れて愈々立候補の宣言を発表することとなった、予は読者と共に之を喜ばねばならぬ⁵⁾」と手放しで歓迎している。彼の「此選挙をして最も模範的理想な選挙とするに努めなければならぬ」という言葉には、「主事」としての意気込みに加え、「模範」と「理想」を列挙して同選挙を語る姿勢が示されていた。

これに比べ、「編輯主任」の鈴木正吾は、茅原の出馬に伴うマイナス要素も意識していた。「若し華山先生の立候補の意味が世間に有りふれた代議士候補者のやうなものなら私はそれが主盟であらふが先生であらふが『第三帝国』といふ公の機関の編輯者として其一頁―一段をさへ割愛することを拒む⁶⁾」という発言には、政治的野心を疑う読者および世評に対する配慮が見受けられる。だが、「模範選挙」宣言の原稿を「注意を払って再三再四読み返し」た彼は、「此論文が我国の混濁したる選挙界に始めて投げ込まれた理想的ダイナマイト」になると感じ、「レコード破りの編輯」をしたと述べる。少なくとも鈴木には、政治を批評してきた記者が国政へ進出する危険性が認識されていた。さらに言えば、同誌の読者の多くは地方在住であり、例え東京在住であっても納税額や年齢で選挙資格がない可能性が高かった。そのような意味で、一雑誌記者が東京市から出馬することは、地域の政治や経済と連携する地方新聞の主筆が出馬するのとは根本的に意味が違っていた。

要するに、茅原は、石田や読者からの要請に応えることと選挙の現状を批判することの

妥協点を、一切の選挙活動を拒む「模範選挙」に見出したのであった。選挙目前に「自ら総選挙に乗出したのは、私だけの深い意味がある、唯勝ちたい若しくは唯敗れたいといふのではない」、「憲法政治を日本国民の要求と為し得る」「と云ふ希望があるならば、如何にして之を為し得るかを研究せねばならない」と語っていた所以である⁷⁾。これに対し石田は、「模範選挙」を掲げながらも、先の秋田県における「理想選挙」の再現をめざしていたがゆえに、落選という現実には落胆の色を隠せなかった。茅原を読者とともに擁立した張本人であるにもかかわらず、「茅原氏の選挙は、御本人が大有望であるとの振れ込み故、今一と息などと諸彦に申上げたのは、小生の不覚、実以て茅原氏にも読者諸彦にも深く謝さなければならぬ⁸⁾。」と、票の読み違いを茅原の発言に転嫁する始末であった。

ここにおいて「模範選挙」を政治を批判し青年層を啓発する一手段と見なしていた茅原と、選挙での勝利を同誌における政治的実践の一帰結と位置づけていた石田との対照的な姿勢が見て取れる。落選した茅原が、皮肉を込めて「日本の選挙人が選挙の精神に背馳したのではなく、私が日本の選挙の精神に背叛した」と述べたのは、こうした経緯を踏まえてであったが、両者の運動をめぐる見解の相違は益進会の分裂を招く要因となっていく。

しかし、「模範落選」を経て、茅原は自らが唱えてきた日本人民の「実生活」に根差した「人間本位の憲法政治」の実現を諦めたわけでも、政治批判の手を弛めたわけでもなかった。むしろ、「日本に於ける選挙なるものは、選挙人が其代議士を議会に送って其生活上の要求を徹底する戦闘⁹⁾政争ではなくして」「日本に憲法が發布され選挙なるものが行われるようになったから、立身出世を選挙人に求むるものである」と、「実生活」の所在をさぐることに一層力を注いでいったと言える。ただし、こうした茅原の動向を考察するには、第一次世界大戦の勃発に伴う文明認識の変容という課題を加えなければならない。

第二十世紀はその第十四年から第十五年に懸けて、新なるノアの洪水に見舞はれた、世界の各国民は今や層々たる狂瀾怒涛の中に漂ふてゐる、(中略)我々は欧州出兵など、言つて騒がんよりは、先づ此新なる洪水を受けて、地球の表面が如何に変化するであらう乎、そして我国民は如何にして此変化せる新世界新天地に順応すべきであらう乎といふことを痛切に思慮一番せねばならぬ大事の一刹那である⁹⁾。

ここで茅原は第一次世界大戦を「新なるノアの洪水」と称している。「生存競争」のもので「進化」した西洋文明が衝突する現実を目の当たりにし、彼は「先づ此新なる洪水を受けて、地球の表面が如何に変化するであらう乎、そして我国民は如何にして此変化せる新世界新天地に順応すべきであらう乎といふことを痛切に思慮一番せねばならぬ」と表現するほかなかった。日露戦後の欧米外遊で東西文明の質的相違を認識しながら、帰国後、西洋文明で摂取すべき点をいかに日本に扶植し、模倣してはいけない点をいかに克服するかを考えてきた茅原にとって、文明の衝突とそれに伴う国際情勢の変化はまさに「ノアの洪水」と言うべき緊急事態であった。従来、「益進主義」の思想を支え、半ば樂觀的に捉えられてきた「社会進化」に対するイメージを設定し直す必要に迫られたのである¹⁰⁾。

「文明」と「進化」に対する認識の再設定が、「模範落選」に伴う「日本の選挙心理」の獲得を通じ、一つの答えを導き出す。茅原は「東洋生活Aと西洋生活Bとの混血児は最早AでもなければBでもないCである¹¹⁾。」と、日本に西洋の立憲政治を移植し、西洋のよ

うにならないと失望するのは見当違いであると捉えた。日本における選挙の現状が選挙法の規定に反する行為を是認している理由を、「道徳は日本国民の生活から発生したもの、法律は西洋のを模倣したものであるから」と考えたのである¹²⁾。その上で、「自ら『日本に於ける政治原理』『日本に於ける政治哲学』を樹立して、之を実現するに努力せねば我々の所謂生活即政治といふことは畢竟空言にして世に補ひなきに了る」と訴えていった。

茅原は「日本の立憲政治を最も具体的に説明すれば官吏と富豪の結託したる政治である」と指摘し、「日本は新たな政治を其生活の必要から迫出し来るべき運命を有っている¹³⁾」と語り、西洋の模倣によるのではない、日本人の「生活」そのものに根差した政治の在り方を見出していく。彼は「西洋の生活主義」を「汝の物は我の物我の物は我の物」、「東洋の生活主義」を「汝の物は汝の物我の物も汝の物」と見なし、そこから「日本の政治の趨勢は究極するに、東洋の自己犠牲（セルフ、ネゲーション）でもなかれば、西洋の自己保存（セルフ、サクリフハイス、又はセルフ、ネゲーション）でもなく、自他両存の政治（Co-existence）即ち汝の物は汝の物、我の物は我の物とする政治でなければならぬ」と論じたのである¹⁴⁾。これまで「社会進化の大勢」たる「生存競争」のもとで説かれてきた「調和」が、日本人民の「実生活」そのもの、「生活主義」の中から導かれるに至った。

ここに及び、茅原は「代議政治無用¹⁵⁾」を掲げた。従来、この論説は「模範落選」と結び付け、茅原の「変節」を示す例と評価されてきた。だが、果たして、その真意はどのようなものなのだろうか。改めて内容を吟味してみたい。「我々が最も謹まねばならぬことは、思想的『空中戦』を避けることである」。茅原は、日本の政治家が「帝国主義」と「デモクラシー」を二者択一で捉えるのに対し、選択肢自体が「西洋の模倣」であると批判した。さらに「代議政治」の典型を英国流の議会政治に見出し、王を中心に「貴族」「中等」「貧民」という階級があり、それぞれを代表する政党が階級ごとの利益をめぐり争ってきた歴史を紐解く。「代議政治」とは階級が生み出した政治形態であり、彼が実見してきた西欧諸国には厳然たる階級と闘争の歴史が存在していた。それに比べ、「日本には階級の区別がない、従って階級の競争がない」。日本の選挙の実状を見ると、政治家の所属する政党ではなく、「人物本位で又感情的」な選択が認められる。

加えて、西欧における明確な「階級闘争」の先に、未曾有の文明戦争が待っているとするとすれば、「我々は代議政治を実現せんがために強いてゞも階級の区別を造り、階級の競争を挑発すべき乎」と茅原は問いかける。現状の制限選挙を前提とすれば、階級の区別が明確でない上に、多くの国民には代表を選ぶ権利すらない、必然的に彼らの声を代表する政党は成立し得ない。したがって、議会は選挙資格が与えられた「富裕層の独壇場」と化してしまう。つまり、「代議政治無用」とは、階級による闘争を前提としない日本独自の政治のあり方を模索する中から提示された議論であり、決して従来の「立憲政治」や「政党政治」を否定した議論ではなかった。「代議政治」は「不要」ではなく、制限選挙下にあつて本来の用を為さ無い「無用」の状態なのであった。

同号の論説「新貴族政治と青年¹⁶⁾」も、「民本主義」との対比から、茅原が「平民」から「貴族」へと政治の担い手を変え、「大正デモクラシー」の戦線から離脱した例と見なされてきた。だが、実際は『第三帝国』の読者に対し、「村に在っては村民を統御し、府県に在っては府県民を統御し、市に在っては市を統御し、国家に在っては帝王の師と為り輔弼の重臣と為り、国民を指導し国民を統御して以て日本国民の使命を実現すべき使命を

有って」といって、「智識的貴族」「精神的貴族」としての期待を表明したものであった。

「洪水以後」の渦中で「進化」のイメージを更新できずにいた茅原を支えたのは、「生活即政治」の主張であった。「実生活に即しない思想は畢竟空論に外ならない、思想のない実生活が無意義であるが如く、実生活のない思想も亦無意義である、背景のある思想、背景のある生活、これが真の思想、生活である」¹⁷。そこから茅原は「実生活」の考察へ沈潜し、「日本の現実を革命し日本の思想を革命せねばならぬ」と訴え、国民生活を根底から「動的」とし、自発的かつ主体的な学問・思想・芸術を創造し、「現実生活の革命」「思想生活の革命」をもって「政治」の改革を計ることを課題としていくのである。

二 益進会の隆盛と分裂

大正四年四月一日、益進会は創刊より約一年半を過ぎた牛込区払方町二五番地から神田区表神保町十番地へ移転した。表神保町と言えば、同二年二月二十日夜半の「大正の神田大火」¹⁸から復興するなかで、岩波書店が創業されるなど、南神保町に代わり古書店街の中心地となり、第一次世界大戦の好景気に伴う「出版の興隆とともに、業界は栄えに栄えた」¹⁹という。主事の石田は「益進会も牛込の片隅から神田の真中に出て来た、我等同志は此処を我等の城郭となし、陣営として、この時代に対し、更に熾烈に戦闘を試みる積りである」と、「時代の戦線に立つ者」としての意気込みも新たであった。それにしても、なぜ益進会は「落選」からわずか一週間後に「神田の真中」に進出できたのだろうか。

その理由は、選挙費を一切使わない「模範選挙」が功を奏したからであった。茅原の出馬表明前より読者から「寄付金」が届き、総額は一〇二七円二五銭に及んだ。同志が編輯費を公開していたことはすでに述べたが、選挙費用も同様に茅原廉太郎の名で公表されている²⁰。選挙活動それ自体には費用がかかっていなかったものの、「宣言書」の印刷や雑誌の再版、葉書・切手、郵送代などを含め、支出総額は一四三三円五三銭五厘と報告されている。不足分は「益進会基金」から捻出し、選挙に伴う負債は生じなかった。『第三帝国』のような規模の雑誌にとって、主筆の「落選」は、雑誌の生死に直結する事態であるが、特異な選挙運動と読者からの支持や共感の声に助けられ、同志は、それ以降、部数が落ち込むどころか、むしろ売り上げは好調を維持し続けた。

【写真5】益進会新社屋写真付き葉書



益進会も写真の如き体裁となった、此建築の両側には、炬火を高く掲げて暗を照してゐる人物を描いたが、中央の太い日本柱には未だ何も描かないである、此太柱に図案風に、何か第三帝国の思想を現はす最も独創的な最も意味の深い且つ吾々の生活に最も親密な見るからに第三帝国の気分が漲つてゐると思はるゝものを描き出したのであるが、読者諸君の中で御考下され、絵そのもの図案そのものを書いて送らるれば此上なきも、絵は書かずとも、斯る人物をとか斯る図案をとか詳細説明して下さるだけでもいゝのです、当選者には謝礼を致します、期限六月末日限り²¹⁾。

同年六月五日、四二号には益進会の新社屋が写真で披露された。益進会は「図案募集！」と題し、右の案内を掲げるとともに、写真が印刷された葉書【写真5】を作り、「地方の読者諸君にして御入用の方には、郵券二銭封入申込まれるば十枚までは無代贈呈」した²²⁾。新社屋の二階には「第三帝国活版所」²³⁾を設け、ポイント活字に切り替え、誌面を見やすく、字数を増やしながらも印刷費を抑えた。四三号には、読者からの要望をうけ、目黒の恵比寿ビール会社の庭園で開催した「第三帝国読者大会」の様子が伝えられ、「来賓及益進会同人」による記念写真も掲載された。さらに七月には前章で見た「東北講演旅行」が大盛況に終わり、五一号では米津栄次郎を部長とし「青年後援部」が開設され、読者の身上相談を始めた。こうして見る限り、「模範落選」の打撃は販売部数に大きな影を落とさず、むしろ益進会は隆盛の時を迎えていたとも言える。

だが、前途洋々に思えた『第三帝国』は、大正四年十一月十一日発行の五七号「御即位大典記念号」の表紙から「主事石田友治」の名前が消えたことを予兆とし、内紛により突然の終幕を迎える。この分裂をめぐっては、石田派の『第三帝国』『茅原華山絶縁顛末』号と華山派の『洪水以後』一号により双方の主張を知ることができる。

まず石田派は、分裂の原因として茅原の「変節改論」を挙げている²⁴⁾。第一次世界大戦後に反帝国主義と平和主義を投げ捨て、ついで第十二回総選挙に「所謂模範選挙で落選し、爾来茅原氏の思想は激変し」「立憲主義」を否定するようになったと指摘し、主な事例として「新貴族主義と青年」「代議政治無用」「主義とは何だ」を挙げ、それに伴って後藤新平や長嶋隆二ら官僚派の政治家に接近するようになった事実を暴露している。

「変節改論」については、「落選」以降に誤解を招きやすい題名の論説を発表した茅原に責任がないではないが、それらの内容は、上述したように「変節改論」に値するものではなかった。むしろ、第一次世界大戦という未曾有の文明戦争が与えた思想的影響を見出す方が妥当と思われる。また、後藤や長嶋との関係は、黒岩からの独立後、第三党勢力を模索する動きの中で確かに存在していた。「後藤新平文書」には茅原からの書簡が三一通残されており、『洪水以後』創刊に必要な保証金八〇〇円の借用書も現存する²⁵⁾。長嶋は四一号から五二号にかけて計四回登場し、「現内閣の心事陋劣」などの論説を寄せている。

これに対し茅原派では、石田の落度として、公費の私用、すなわち自身の結婚費用に益進会から一五〇円を出費したこと、雑誌『女王』を茅原の反対も聞かずに創刊したことを挙げている²⁶⁾。結婚費用の問題は、松本悟朗が一〇円だったのに比べ、「主事」として同誌の経営を支えてきたとは言え、多額であった。また、十一月十日付で創刊された『女王』に関しては、石田の妻みつじの存在が関わっている。みつじは、信州上田の大きな養蚕農家の娘で、『第三帝国』の愛読者となり、理想に心酔して上京した。石田のもとに半ば押

しかけ女房の形で転がり込み、茅原夫妻の仲人で結婚式をあげたばかりであった。

この内紛劇について、『時事新報』は「事は近刊の同誌欄外に是れ迄茅原氏の名と共に主事石田友治とあつた六字を削除したのから始まって財政上の問題が起り、石田氏が十三日朝、発行所たる神田表神保町の益進会に押掛けて同社の編輯發送等に関する書類帳簿を運び去った²⁷⁾」と伝え、「騒擾は容易に納まり相もない」と報じている。一方、『読売新聞』では、茅原派が「持主であり発行兼編輯人である地位上この挙に及んだ」石田へ「近く正当な手段に依つて争ふ覚悟だ」と主張するのに対し、石田派は「茅原氏が政治的野心を同誌に依つて果し、利益を独占せんとするから氏並に従来の社員を除いて、新に『第三帝国』の改造を試みる積りである」と宣言していると、両陣営の見解が紹介されている²⁸⁾。

互いの疑心暗鬼が事態を悪化させ、告訴合戦の様相を呈したが、やがて両派ともに冷静さを取り戻し、双方に和解の意思を示し、十二月四日、大場茂馬と西本国之輔が調停役となり、雑誌『実業之世界』の創刊者である野依秀市も加わり、同月十二日によりやく和解が成立した。益進会は解散し、出資金・寄付金は返還すること。利益金・備品は茅原、石田、鈴木・松本の間で三分の一ずつ分けること。『第三帝国』は廃刊するが、六か月後に石田側が復刊することができること。以上が和解の概要であった。

双方とも不満はあつたが、茅原側には石田の放逐を企てた弱みがあり、石田側も茅原の言論による功労と資金提供という事実を無視できなかった。当事者同士は「痛み分け」であつたが、分裂が加熱して報道されたことで、興醒めしてしまった読者も少なからずいたに違いない。益進会は、創刊以来、発禁処分や鈴木正吾の「罰金三十円」などの窮地に陥つても、同人が一丸となり、逆境をあえて話題に変えることで乗り越えてきた。地方支部を結成し、普選運動や東北講演旅行を実施し、「投書」「交歓」「通信」により青年読者との間に新しい言論空間を形成してきたのである。それゆえに、同人の内紛は、これまで築き上げてきた信頼関係を自ら大幅に傷付ける、痛恨の「分裂劇」となったのである。

この内紛で益進会同人の多くが茅原側に付いたこともあり、論壇の同情は石田の側に集まつた。『中央公論』大正四年十二月号で「人物評論（六六）」として「茅原華山論²⁹⁾」が特集されているが、松井柏軒・安達元之助・中村孤月・大杉栄・相馬御風・石田友治・松本悟朗ら論者の中で茅原の肩を持つのは松本だけであつた。ただし、松井と安達は華山の独特の才能を認めていた。また「茅原華山絶縁顛末」号では、『中央公論』を主宰する瀧田樗陰が感想を求められ「一代の才人」を「あんまりイヂメたくない」と書いている。同じく感想を求められた人々の中に、山路愛山・杉村楚人冠・与謝野寛・福田徳三のように、絶縁した茅原をさらに糾弾しようとする石田の態度を難じた者があつた。

三 『洪水以後』と『新理想主義』

大正四年十一月十五日、益進会は茅原派と石田派に分裂した。茅原は鈴木正吾・松本悟郎らとともに雑誌『洪水以後』を、石田は雑誌『新理想主義』をそれぞれ創刊した。

私は新なる雑誌を中心として更に大に思想の戦いを進めたい、そして私は我一元社より可能だけ多くの人材を出したいと祈るものであることを告白する、我々は最早デモクラシイばかりでは満足は可能ない、といってビロークラシイ（吏治又は官僚政治）に満足することの可能ないのは言ふまでもない、吾々は過去の歴史を透過して新

た在物を攫まねばならぬ、私は僭越とは知りながら新なる英語を鑄出した、Heroecy (英雄政治) といふものである³⁰⁾。

右は、大正五年一月一日、茅原が『洪水以後』創刊号に掲げた「再び筆を執るに臨みて」の一節である。もはや「デモクラシー」ばかりでは満足できないと言う彼は、新しい意味での「英雄政治」の実現を主張している。ここにおける「英雄」とは、カエサルやナポレオンなどの英雄を指しているのではない。それは「自分自身の個性を意識し」つつ、組織全体の要求や意志をいち早く看取り、代表できる新しい指導者のことを意味していた。

雑誌『洪水以後』は、全三二頁・定価十銭を基本とし、旬刊誌として出発した。誌名の由来は「未曾有の文明戦争」第一次世界大戦を旧約聖書の「ノアの洪水」になぞらえた表現であった³¹⁾。表紙絵には、手力男之命の「天の石屋の岩戸開き」の図柄を配し、開かれた岩戸から放たれる光芒に新時代の思想が到来することを期しており、ギリシヤ・ローマ時代の勇者を彷彿とさせる『第三帝国』時代の表紙とは趣を異にしていた。

同誌の陣営に目を向けると、「主盟」に茅原華山、「発行兼編輯人」に鈴木正吾、「印刷人」に新谷義雄が就いた。社名は「老子が道、一を生じ、一、二を生じ、二、三を生じ、三、万物を生ずるというに取り、一元社³²⁾」と決めた。同人は、茅原(主盟)、松本悟朗、鈴木(編輯長)、鈴木悦、広津和郎、小田政賀(編輯次長)、矢野良暁、永川俊美、勢多左武郎、岡見護郎、米津栄次郎、新谷(事務主任)、中村長二郎(広告主任)、青木文一(相談役)など多くが益進会と重なっていた。発行所は、当初、東京府荏原郡大井町一四七番地に置かれたが、八号(同年三月二十一日)より神田区表神保町十番地へ戻った³³⁾。

『洪水以後』の言論の中心は主盟の茅原であったが、それを支えたのは第一期『第三帝国』より踏襲された「十日評論」を執筆する若き同人たちであった。鈴木正吾が「政治評論」、松本が「社会評論」、永川が「経済評論」、米津が「教育評論」、広津が「文芸評論」をそれぞれ担当した。茅原は二号に「日本のミリタリズム³⁴⁾」を掲げ、「洪水以後」の世界を日本が生き残るため、独自の「大英帝国分割論」と「海軍一元主義」を唱えた。「私は日本は必ず志を大陸に断たねばなるまいと主張する」と述べ、日清・日露戦役で朝鮮・満州に進出したことにより、「海主陸従の国」たるべき日本が「陸主海従の国」になつてしまい、増師問題が国民の負担となっている。故伊藤博文公による日露同盟政策を回顧し、実は日本の得策を熟慮した世界的経綫であったことを指摘し、「日本は其海祐を利用せねばならぬ、日本は其海国たる位地を利用して、新に東方の大英帝国と為らねばならない、それには大陸との交渉は専ら通商貿易を主とせねばならぬ」と主張したのである。

また、『洪水以後』で茅原が時代思潮に筆を揮ったといえ、吉野作造が発表した「民本主義論」に反論を加えた「デモクラシーを使ひ分けたる吉野博士³⁵⁾」であった。詳細は本章第四節に譲るが、論争に参加した理由は、「「民本主義」なる言葉は初め黒岩先生が鑄造され、私は之を賛成して之を弘めたものである」という強い自負心のためであろう。華山にとつての国家は、あくまで「君民同治の帝国」なのであり、運用において人民の幸福と民意の尊重を図るのは、何ら新しい主張ではなかった。

さらに注目すべきは、投書欄「戦闘曲」と地方支部の復活である。まず「戦闘曲」は、「新進論客の火の如き熱文を歓迎す、寄稿家諸君奮励一番して本欄に弁闘の一大洪水を齎らしめよ」という呼びかけに応え、二号より復活を見ている。浮山初太郎(神奈川)は「パ

ンの問題」に「煩悶苦悩」してきた日々を告白し、「パンを離れては宗教も哲学も無い」と断じ、「真に生きる可く努める」新生活に入ること宣言した³⁶⁾。大槻潤一（兵庫）は、「我らは我らの全部を提げて「洪水以後」の新主義にぶつかゝり」「洪水以後」の奏する勇ましき戦闘のマーチを感じせなくてはならない」と述べている³⁷⁾。規矩田独秀（福岡）は、大学教育の改善を叫ぶ前に、教育の根幹をなす小学校教育を改革することが優先であると訴え、若い教師を養成する師範学校の改善を主張し、「真に目覚めた教育者の一人は聴ては国家を料る十人の駿傑を作る」と呼びかけた³⁸⁾。このように『洪水以後』の「戦闘曲」には、第一期『第三帝国』と同様に、地方青年読者たちから熱烈な投書が届いていたのである。ただし、分裂騒動の影響か、益進会時代の常連投稿者の名前は見当たらない。

一方、地方支部については、三号より設置報告が届き、一四号までに計十二の支部が結成されている。しかも、京都府の峰山をはじめ、山梨県の松里と飯野、北海道河西の帯広、宮城県遠田郡の南郷村、富山県の三日市、熊本県の熊本市新屋敷、青森県南津軽郡の富木館の八支部は、場所・幹事または支部員が第一期『第三帝国』の益進会支部と同一の読者たちで構成されていた。加えて、茨城県猿島郡の岩井支部、山梨県中巨摩郡の小笠原支部、京都府の福知山支部、中華民国の上海支部が新設された。これらの事実は、益進会の分裂後、同人のみならず、読者の多くが茅原を支持していたことを物語っている。

一元社同人が評論を受け持ち、読者からの投書も充実していた反面、同人以外の寄稿者の顔ぶれは、第一期『第三帝国』に比べ、数が限られたという印象を拭いきれない。石田から「接近」を指摘された長嶋隆二は創刊号に寄稿した後、八号以降連続して原稿を寄せているが、政治関係では犬養毅や後藤新平、田健次郎らの名前も見られる。ジャーナリズム関係では、『東京朝日』の松山忠二郎や『二六新報』『中央新聞』を歴任した恵美東台、さらに本章第三節で取り上げる金子洋文や室伏高信らも文章を寄せていた。ほかにも自由律俳句で知られる俳人の荻原井泉水が俳句欄「生命の木」を担当し、医学博士で『生命神秘論』を著した小酒井光次が第一期に続き「人生の神秘」を題材とした文章を寄せている。

然らば則ち、汝は何を求めんとする、私が曩きに寰宇に遊んだのは、只管欧州文明を学ばんとしたのである、最も客観的に欧州文明を観察し受納し、それを出来得る限り日本に移植せんとしたのである、今回の西遊は聊か之と趣を異にしてゐる、最も客観的ではなくして最も主観的である。新しい日本を発見せんが為め、第二十世紀の日本を発見せんが為めの外遊である。（中略）戦争が人類と文明とを一大熔鉱炉に投じて、固定した第十九世紀以前の世界が熔解したのである、言ひ換ふれば、戦争が流動体的世界を迫出し来ったのである、この流動体的世界がいかに更に固定すべきか？問題なのである。（中略）文明その物が破壊され革命される、第十九世紀以前の一切が破壊され革命される、私は微力ながらそれを観察し研究したいのである、そして其処に将来の日本を発見したいのである³⁹⁾。

大正五年八月一日、茅原は『洪水以後』の改題誌『日本評論』に「再び西遊せんとするに方って」を掲げ、二度目の欧米外遊に出かけた。溯ること十一年前、日露戦後の世界情勢を実見しようとした時と同じく、第一次世界大戦後の世界を己の目で確かめるためであった。この段階で茅原は日本人の「実生活」に根差した「思想」と「政治」を構築するま

でに至っていないかった。前回と違うのは、今回の基準はあくまで「新しい日本を発見せんが為め、第二十世紀の日本を発見せんが為め」に、日本を主としていることであった。

一方、石田は茅原派との和解条件に従い、大正五年一月五日発行の五八号から『新理想主義』と誌名を改めた。雑誌は旬刊から半月刊となり、普通号は全三二頁・定価八錢であった。発行所は、麹町区飯田町三丁目二四番地の「第三帝国社」に置かれ、石田が編輯・発行・印刷人を兼ね、全責任を負った。巻末の「編集室から」によれば、事務面で彼を助けたのは妻みつじと弟の貞三と給仕一人であった。『洪水以後』と違い、支部設置報告や支部だよりは全く掲載されておらず、地方青年読者の多くが茅原派を支持したと見られる。売上げは減り、営業面で苦戦を強いられたにもかかわらず、雑誌『女王』も継続しなければならなかった。投書欄については「生活の頂にて」「真実一路」と題し、毎号四〜五本の投書が寄せられたが、第一期に比べて東京在住の青年からの投書が増えた。

誌名の「新理想主義」は『第三帝国』二号以来の英文タイトルが、THE THIRD EMPIRE—The First Symbolization of Neo—Idealism in Japan. となっている所から採用された。五八号の石田『第三帝国』から『新理想主義』へ⁴⁶によれば、個性中心主義、民本主義、反帝国主義の根底にあるのが「新理想主義」の思想であり、これこそが『第三帝国』本来の旗幟であるという。六〇号の「第三帝国社便り」(三〇頁)には石田自身の言葉で「本誌の努力の中心は主として時論におく事に決定した」ことが語られている。これは『洪水以後』と同様に、第一期『第三帝国』における「十日評論」の形式を引き継いだとしたものであったが、唯一「教育時評」を益進会同人であった中川竹堂が担当した以外は、「政治経済評論」は佐藤敏雄・北原龍雄・国田東行ら、「社会時評」は石田・小林三郎、「文芸時評」は西宮藤朝が不定期で担当し、次第に他誌からの要約転載が増えていく。

この窮状に救いの手を差し伸べたのが安部磯雄であった。彼は無報酬で五九〜七五号まで巻頭論文を書き続け、ほかにも江木衷・大場茂馬・山室軍平・植原悦二郎らが支援し、久津見蔵村・野村隈畔・高島素之・岡悌治・山村暮鳥らが寄稿という形で力を貸した。

実践運動の事例としては、『新理想主義』と改題した当時が議会開会中だったため、益進会時代に読者から寄せられた普選請願署名用紙千数百枚に、新たに三百枚を加え、計二千枚弱を携え、国民党の相島勘次郎、政友会の吉原正隆、同志会の矢島八郎ら議員六一名を歴訪し、各党内の「尽力」を約束させている。同運動の中心となった北原龍雄は、請願を繰り返すより、「数の力」「団結の権威」に依拠すべきことを主張し、遊説隊を作り全国的組織を作ること⁴⁷を提唱しているが、『新理想主義』の微力では到底不可能であった。こうして石田は、安部や北原らの助力を得ながら、辛うじて雑誌を刊行し続けたものの、第一期『第三帝国』に比べ、雑誌としての勢力は見る影もなかった。

以上のように見てみると、益進会の分裂は、茅原・石田両派に大きな傷手を残したのみならず、同誌を支持してきた青年読者にとっても損失であったと言えよう。では、雑誌『第三帝国』が時代の中で果たしてきた役割は完全に終わってしまったのだろうか。いや実は、同誌の思想的実験は終わっていないかった。茅原が「益進主義」で示した個人像ならびに社会像を発展的に継承する形で、野村隈畔が「絶対自由」を希求し、金子洋文が「若き農夫」を発見し、室伏高信が「生命デモクラシー論」を唱えていくのであった。最後に「第三帝国の思想圏」を検討していくこととしよう。

第二節 野村限畔における「絶対自由」の希求

上述したように野村限畔は、茅原・石田とともに雑誌『第三帝国』を創刊し、「思潮評論」において「自我」の解放を強く訴えた。ベルグソン哲学をいち早く受容した彼の主張は、時代思潮に漂流する青年たちの心情を捉え、共鳴を呼んだ。だが、彼は体調不良を理由に一五号をもって益進会を去ることとなり、以降、独自の道へと進んでいった。

従来、限畔に関する研究は主に哲学史の分野で進められてきた。松山信一氏は、限畔のベルグソン哲学の受容に注目し、西田幾多郎や大杉栄らとの比較から、彼のベルグソン理解の「正しさ」を評価し、在野の哲学者と位置づけた⁴²⁾。また、宮山昌治氏は大正期におけるベルグソン哲学の受容を考察するなかで、限畔を「ベルグソン派」と見なし、彼の「恋愛論」をベルグソンの形而上学を修正し社会論に応用した一例としている⁴³⁾。

だが、そうした理解を生み出した限畔の思想を内在的に読み解く作業はなされておらず、彼が唱えた「自我論」の内容とそれが青年層に支持された理由についても言及されていない⁴⁴⁾。日露戦後の閉塞状況のなかで「自我」のあり方が論じられ、第一次世界大戦に対する反省のもと「人間」や「生命」の価値が問い直されていることを踏まえるならば⁴⁵⁾、限畔の思想の本質は、時代への焦燥感、心底に潜む近代的自我に対する違和感の表明、および資本主義社会に対する根源的な批判にこそ見出されるべきではないか。

そこで本節では、限畔が、茅原の「益進主義」における自立的「個人」像を継承するなかで、いかに「自我」を捉え直し、人間存在ならびに生命に依って立つのか、『第三帝国』離脱後もなお追求される「自我論」を内在的に読み解いていく。と同時に、彼が「文化主義」を批判し、そこから「絶対自由」を希求していく過程を明らかにする。そして、近代的自我に対する根源的な批判を内包する彼の思想の内に、雑誌『第三帝国』の思想圏を捉えていきたい。

また、日露戦後に登場した高等教育機関の出身者に担われたとされる「大正デモクラシー」期において、ほぼ独学であった限畔の思想が当時の青年層から支持されたことに注目するならば、そこには単にベルグソン哲学を社会論に応用した一例として扱うのでは足りない、近代合理主義および産業社会の浸透に対峙する広範な社会階層、特に地域の知識階層である地方青年の心情をすくいあげる方途が存在すると言えよう⁴⁶⁾。

一 ベルグソン哲学の動揺―「潜在帝国」から「自我批判の哲学」へ―

予はこの頃切に潜在帝国を思ふてゐる、潜在帝国に生きやふと努めてゐる。予の今の日常生活は刻々潜在帝国の綾を織り成して居る。潜在帝国とは先在帝国である。先在帝国は沈黙の帝国である。而して沈黙の帝国は過去の帝国でも未来の帝国でもない。現実刹那の帝国である。衆愚の帝国でなくて予自身の帝国である⁴⁷⁾。

大正三年（一九一四）五月十六日、限畔は一一号の論説「潜在帝国」をもって、「先在」「沈黙」「現実刹那」の帝国、すなわち自己の精神世界に生きることを謳った。まさに『第三帝国』が、地方青年読者からの支持を獲得し、支部の結成や政治的実践へと動き出していくただなかで、その動向に背を向けるかのような発言を掲げたのである。続けて彼は「嗚呼第三帝国！実に無意味な名称ではないか。何等の含蓄なく色彩なく生命なく、枯灰の如

く平凡な数学的名称ではないか」と誌名を痛烈に批判し、「真実を求むるものゝ問題は靈肉を一致せしむることではない」「本能を如実に把握することである」と、創刊の趣旨に抵触する内容にまで踏み込んだ。そして、「真実の帝国」は、「靈肉一致の第三帝国」ではなく、「直覚」により「本能」を把握する「潜在の帝国」にあると主張し、「予はかゝる潜在帝国に生きやうと努めてゐる。斯かる意義で第三帝国を破壊せんと思ふ」と、内的世界への沈潜を宣言したのである。

ここには同誌の方向性に疑問を投げかけ、あくまで「個性の自覚」「思想の独立」により「根本の解決」をはかり、そこから真の「帝国」を創設しようとする隈畔なりの意志が込められていた。だからこそ、あえて「潜在帝国は第三帝国よりも内容の豊富な醇美な澁渾たる帝国である」と主張したのであった。だが宣言から二ヵ月後、隈畔は治療入院を余儀なくされ、益進会から退くこととなる⁴⁸。内的世界への沈潜を宣言した彼の離脱は、文字通り、同誌の活動をより政治化していくことに拍車をかける結果となった。

さて、入院した隈畔は、益進会からの離脱という社会的挫折に遭遇し、「私が此処へ来てから十日ばかりになります。私は一種の興味を以てこの牢獄のやうな陰鬱な病室に自ら這入って来たが、今までの間に何の得る所はありません。私の今の状態（肉体的にも精神的にも）は何と形容してよいか殆んど解りません⁴⁹」というほどの錯乱状態に陥っていた。これまで「自我」の解放を唱えてきた自己が社会的に挫折するという現実を突きつけられ、具体的な対策を講じるどころか、動くことすらできなかったのである。しかし、隈畔は入院して初めて自らの足跡を省み、「自我」を捉え直す機会を得た。「自分を苦しめるものは、病氣そのものではなくて、やはり自我問題であった⁵⁰」と振り返り、退院後、病室での苦闘のなかから『自我の研究』と題する著書を書き上げた。

自我は如何なる場合に於ても、自己自身の外に意欲し得ないものであるから、それは『純粹自己意欲』であると。この純粹自己意欲を外にして、自我は絶対に何者でもあり得ない。而して、自我は絶対的存在であるが故に、自我の外に何者も意識しない、又、意識する必要もないのである。『俺れが為す』『俺れが欲する』と突然強くいふ時には、そこには断じて何者の容喙をも許容しない。自然法や、思惟の範疇や、社交上の関係等、一切の羈絆を全然超越して居る。この時の自我は、絶対権威者である。自己の外に、何者も認めない。今迄の寄生的常識我は全く消滅して、影を止めない⁵¹。

「是に於て、吾々は愈々、自我の根本性質を、積極的に規定すべき場合に到着した」と語る隈畔は、「自我」を「純粹自己意欲」と再定義し、「断じて何者の容喙をも許容しない」「絶対権威者」と表現した。禁酒という行為を事例に、『俺は断じて酒を止める』といふのも、亦この純粹自己意欲である。『酒を止める』と云へば、他の事を意欲したやうに聞えるが、実は『酒を止めるのが俺れだ』といふ意味である。「酒の好きな寄生我を征服して、自己の自由を回復するのが、即ち自我である」と説明した。ここで改めて「自我」の本質が現状を打破する自己の猛烈な意欲・意志に見出されたのである。

このとき、「自我」の本質である意志を発揮する場として設定されたのが「生活」であった。「真実なる生活」とは「自由で流動的で、また創造的」でなくてはならない。だが、現実の「生活」は、「自我」を「隠蔽」「埋没」させ「拘束する場」と化していた。上京

以来、生活難に曝されていた限畔にとって、「生活」こそ、内なる要因と外なる要因が交錯し、自己を束縛する「寄生我」が生じる場であったがゆえに、その内省から新たな理想を形成する力が蓄えられる場として捉え直すべき対象だったのである。そこから彼は「道徳」「宗教」「芸術」といった内的世界の表現方法を示していくのであった。

「自我」の淵源を突き詰めていった限畔が辿り着いたのは、内なる要因から解放されるための、絶対的存在への「信楽」であった。「自我の肯定否定の意欲に甚だしく空虚を感じた時に、最も崇高な権威で自分を圧して来たものは、自我に内在してゐた絶対価値であった⁵²⁾。」彼はあるがままの人間存在を生み出した「絶対者」すなわち超越的規範のなかに「自我」実現の根拠を導き出そうとしたのである。このように「信楽」に基づく「自我論」、価値転換による内面的規範の獲得が説かれた背景には、これまで彼が依拠してきたベルグソン哲学の動揺があった。

ラッセルは最後にベルグソン哲学の最も難解な、そして最も彼れの天才的創造を発揮して居る、所謂『イメエジ』の観念について批判して居る。(中略) 形像は『表象』よりも具体的で、『物』よりも流動的な存在である。即ちそれは生彩のある心的物質である。ベルグソンはこの形像から出発して精神と物質との関係を説かむとした。けれども、ベルグソンの個人的性質そのものは、既に観念論者と实在論者のそれとを調停したものであり、随って『形像』は既に『表象』と物質とを混溶したものである。

(中略) かくしてベルグソンは『純粹知覚』において精神と物質とを混同し、『純粹記憶』においては過去と現在とを混同し、『持続』の観念においては知る所の作用と知らるゝものとを混同したと、ラッセルは言つてゐる⁵³⁾。

イギリスの哲学者ラッセルは、ベルグソンの「形像(イメージ)」に関する解釈が観念論と实在論を止揚するなかで「表象」と「物質」を混同していると厳しく指摘した。この批判は、ベルグソン自身が認識の基点に「時間」を介在させて「物質」を引き入れたの対し、日本の思想界全体がベルグソン哲学を「物質」を排除した唯心論の立場から受容していたために、大きな反響を呼んだ。限畔自身もラッセルの批判を「余程旧式で、現代における進歩した形而上学の傾向を無視して居る」としながらも、「是等の点は大に思索研鑽を要する」と結論を先送りしている。そこから限畔は依拠してきたベルグソン哲学をも批判の遡上にあげ、カントの「理性批判の哲学」とベルグソンの「直観批判の哲学」との「根本的、独創的調和」をめざし、自らの哲学を「自我批判の哲学」と名づけた⁵⁴⁾。

「自我」はあるがままの自己を解放する意志である。だが、それは次の瞬間に自己を束縛する危険性を持つため、常に「自我」を批判し続けなければならない。「自我」を批判・解放し続ける状態こそが「真の自由」であり、「自由」の連続が「文化」となつて「生活」の場に築き上げられていく。限畔は、「自我」の発展を形而上性・当為性・自由性に区分し、教育における個人主義、政治における民本主義、宗教における自由主義を創造的自覚の顕現とみなし、その集合体が「文化」の具体的内容であるとした。「自我批判」の哲学を唱えた限畔は、そこから「自我の発展」形態としての「自由文化」の発達を促し、「自我及び文化の創造的生命」たる「真の自由」の実現を主張していくのであった。

二 「文化主義」批判

目下わが思想界を賑はしてゐる凡らゆる思想乃至運動を代表するもの、言ひ換へれば、それらの思想及び運動の根底に流れてゐる精神、即ち指導的原理は言ふまでもなくデモクラシー、即ち民本主義であると見てよからう。民本主義は今や世界的思潮として人類の精神的努力の焦点となつてゐる⁵⁵⁾。

第一次世界大戦の勃発は、欧州戦線の拡大に伴うヨーロッパ産業の停滞により日本に大戦景気をもたらした。結果、日本は、日露戦後以来の財政難を克服し、産業界は活況を呈し、国内の産業構造も大きく変動した⁵⁶⁾。日本は、日英同盟を理由に参戦し、山東省におけるドイツ利権等を獲得、袁世凱政府に対華二十一カ条要求を認めさせた。だが終戦後、反戦・平和の思潮が高まり、「デモクラシー」の波が及ぶと、これまで日本社会で抑圧されてきた人々がさまざまな社会運動を起こすと同時に、中国や朝鮮では独立運動、反日闘争が始まった。「帝国」日本は、大戦景気の恩恵を受ける代わりに、国内における反権力闘争と植民地における独立運動という新たな課題を負うことになった。今まさに、「帝国」の行方が新たに模索され、「改造」が叫ばれる岐路に立つていたのである。

今官僚主義、保守主義、軍国主義乃至民主主義、進歩主義、自由主義を論ずるものにして其の一を排して他に与せんとするものが、其の論ずる所をして論理的に有意義ならしめんとするならば、今言ふた意味に於て此等の主義に内在的にして而かも此等の主義を超越する立場を見出すことを得るものでなければならぬ。然らずんば其の論ずる所は一場の根拠なき感情論に終らざるを得ない。(中略)吾等有する人文史上の諸価値を純化し一方的高昇の過程を極致に導きたる時、其の極限に立つて吾等が人文史上の凡ゆる努力に対して其の目標となり得るものは所謂文化価値即是である。余は今此の如き論理上の普遍妥当性を具有する文化価値の内容的实现を企図する謂はば形而上学的努力を呼んで茲に『文化主義』と言はふと思ふ⁵⁷⁾。

大正八年一月の黎明会第一回講演会において、京都帝国大学講師の左右田喜一郎は『文化主義』の論理」と題する講演を行なった。左右田は、大戦後の世界的な思想混乱状況のなかで、あらゆる主義を「内在的かつ超越的な立場」から把握できる思想を確立する必要性を訴え、その支柱に「文化価値」を据え、「文化主義」を高唱した。また黎明会の創立メンバーであった東京帝国大学教授の桑木厳翼は「人格の自由」にもとづく「文化主義」を提唱し、これを「自然主義」「専制主義」「軍国主義」の対抗概念として位置つけた⁵⁸⁾。

彼らに共通していたのは何よりも「理性」や「概念」を重視する姿勢であった。自国の発展のみを優先する欲望や感情の行き着いた先が多く、多くの生命を奪った悲惨な文明戦争であるならば、そうした欲望や感情の一つ一つが反省の対象となる必要がある。それは、物事を「理性」で判断し、揺れ動く人間の感情を「概念」という形式により分析の対象としようとする試みであったといえる。すなわち「文化主義」は、第一次大戦の終結をうけ、これまで世界を先導してきた西洋文明の普遍性・物質性が大きく揺らぐなか、各国の「文化」の固有性や精神性を重んじる思潮として登場したのである。それは講壇哲学の主流であつ

た新カント派に与しながら、後の大正教養主義の礎を築いていくこととなる。⁵⁹⁾

要するに、現代文化における吾々の根本要求は、価値の形式にあらずしてその具体的実質である。概念的ア priori にあらずしてその体験内容である。文化価値といふことは一種の極限概念であって、何等の体験内容も示して居らぬ。吾々は新たに『文化主義』を標榜して文化価値を立てなくとも、既に個人主義乃至民本主義のうちに、「内在的にして而かも超越的」な「ア・ priori」を単なるイデオとしてではなく、却って人格的創造力として具体的に体験して居るものであると思ふ。この意味からいふと、単に民本主義を貴族主義や官僚主義に対する相対的なものと見るよりも、むしろ民本主義の体験的内面性を指摘して、その創造的な文化史的意義を闡明することが、現代文化の要求から見て必要なことだと思はれる。⁶⁰⁾

真の「自我」の表象こそが「文化」であると主張してきた隈畔は、「民本主義」を時代精神、社会の指導的原理であることを確認した上で、それを批判しつつ、あるべき方向へと導く「文化主義」の存在に注目している。「論理上確実な価値判断」の基準を示そうとする試みに「吾々及び現代文化の大に傾聴すべき価値のあるものである」と、一定の理解と評価を与えたのである。

だが一方で、その試みが現代人の根本的な要求を満足させないことを指摘し、なかでも「文化主義」における価値の「形式」の重視、概念的・抽象的な議論のあり方を厳しく批判した。「現代文化における吾々の根本要求は、価値の形式にあらずしてその具体的実質である」と述べ、「価値が価値として実現せらるゝには吾々の必然的な根本要求として人格的に体験されなければならぬ」と訴えたのである。隈畔が批判の矛先を向けたのは、「形式」を重んじる「文化主義」の思想的態度そのものにあつた。

そこから彼は「文化主義」の改造の必要を唱え、現代の文化を「真正な文化」とするには、「生活の要求」を徹底的に意識しなければならないと主張した。⁶¹⁾「生活の要求」があるがままに解放された状態こそが「自由」である。隈畔によれば、「自由」こそが「体験的事実」であると同時に「具体的価値そのもの」であり、「自由平等こそ吾々の文化における具体的出発点であると同時に、その永遠の帰着点である」のであつた。ここには、あらゆる主義に対し「内在的かつ超越的な立場」から「自我」を解放するはずの「文化主義」が新しい形式を示すことで、新たな束縛を生み出すことへの批判が込められていた。

隈畔はその批判を「文化主義」に対する「最後の疑問」⁶²⁾として提示している。「文化主義」は「生活を価値概念によつてのみ理解せんとするもの」であるが、そこで示される「概念的自由」は果たして「吾々の実現すべき生活自由」となり得るのか、と。「概念」が性質上、人間の経験や心象を整理するため、ある瞬間のある現象のみを抽出し、固定化して把握するものであるのに対し、「自由」の本質はその行為自体と矛盾しており、「概念的自由」はそもそも成立し得ないと隈畔は説く。結果、われわれは体験可能な実質と普遍妥当性を兼ね備えた「自由」、「当為や価値の源泉であると同時に、それを刻々展開し実現して行く生きた存在」としての「自由」、すなわち「理性」や「概念」では捉えきれない、「真正な生活」の「要求」であるところの「直観」および「体験」に基づく「絶対自由」を獲得していくほかないとされたのである。

三 「絶対自由」の希求

「自我」の解放による「真の自由」の獲得を唱えた隈畔は、「文化主義」を批判するなかで、「絶対自由」の希求という命題に到達した。「自由」を「現代の神」と賞賛し、現代人は「絶対の自由そのもの」によってのみ救済されると主張したのである。⁶³ 隈畔によれば、「自由の神」こそ「吾々の生活乃至文化を自発的必然的に創造すると同時に、それを根本的に改造し得る」のであった。そこから彼は自らの哲学体系を「自由哲学」「文化哲学」と称すが、それは価値の創造（当為）を判断する「形而上学」と価値の反省（必然）を説明する「自然科学」を止揚する形で成立する価値の肯定（自由）を希求する学問的試みであった。では、「絶対自由」はいかにして実現されると把握されていたのだろうか。

「吾々の生命価値たる自由が、生活及び文化の上のいかに発展するであらうか」「生活乃至文化の具体的根拠はいかなるものであらうか。余はこれは吾々の体験生活の全内容を構成する愛であらうと思ふ⁶⁴」。隈畔は、「絶対自由」の実践としての「愛」を、「生活」・「文化」における「自由」の発展であると定義する。「愛」は決して「抽象的な無内容なもの」でも、「日常に高遠なそして神秘なもの」でもなく、「自我の要求を最も赤裸々に最も原始的に最も総合的に具体化するもの」である。つまり、「愛」は、われわれの「生活」・「文化」を創造的根拠とし、「一切の種子を渾融的に包蔵するもの」であるがゆえに、「これを体験的に意識する外に、具体的に理解することは出来ないもの」なのであった。したがって、「これをもって吾々は、愛と自由とを根本的に区別することは殆んど出来ない」のであり、「愛は自由であり自由は愛であるといひたい」と隈畔は語るのであった。

当時、青年層の心を捉えていた人生論で恋愛論は欠くことのできない関心事であった。新聞や雑誌を賑わす恋愛事件は、あたかも既成の男女像や性規範を打ち破ろうとするかに見えた。多くの恋愛論のなかで、もつとも高い世評を得たのは厨川白村の『近代の恋愛観』であった。白村は、恋愛なき「結婚」を「強姦生活」「売淫生活」として厳しく批判するとともに、古代の肉的本能時代から、中世の霊的女人崇拜時代を経て、近代の霊肉合一の一元的恋愛観までの歴史を開陳し、現代の恋愛のあるべき姿を次のように述べている。

だから現代の最も進んだ考へ方から云ふと、恋愛の心境は即ち『自己放棄に於ける自己主張』self—assertion in self—surrender⁶⁵だと見られてゐる。おのれの愛する者の為におのれの全部を捧げる事は、つまり最も強く自己を主張し肯定してゐるのである。恋人のうちに自己を発見し、自己のうちに恋人を見出した。この自我と非我とのぴったり一致する所に、同心一体と云ふ人格結合の意義がある。それは即ち一方から云へば自我の拡大であり解放である。此境地に到つてはじめて真の自由は得られる。小我を離れて大我に目ざめるからだ⁶⁵。

「自己放棄に於ける自己主張」と表現される、白村の「恋愛観」の内に、一見すると隈畔における「愛」との親和性が指摘できる。「おのれの愛する者の為におのれの全部を捧げる事は、つまり最も強く自己を主張し肯定してゐるのである」「此境地に到つてはじめて真の自由は得られる」という論理展開がそれである。それは隈畔の言説が同時代において示した先駆性と親和性を物語っているが、その一方で、両者の言説には決定的な違いが表れている。それは前者が「自己放棄」と表現することで、恋愛感情に一つの形式を与

え、秩序化を図っているのに対し、後者は、あくまで「絶対自由」を徹底的に希求することに重きを置き、「直感」や「体験」という表現以上に言語化をしようとしていない点である。理性的な解釈のもと、恋愛論や結婚観がいわば「教養」の一つとして分類されていく時代のさなかで、限畔はあくまで「自由」と「愛」を「直感」や「体験」で捉えようとする姿勢を堅持していたのである。では、なぜ限畔は「絶対自由」を強く希求し、その実践としての「愛」を高唱したのであるうか。それは、それを妨げる障壁が彼の「生活」に立ちはだかつていたからであった。大戦後における急速な資本主義社会の浸透のもと、限畔のみならず、多くの人々が生きていくための「労働」を強いられていたのである。

「人類の真摯なる自由の要求を具体的に表現したものは労働問題である⁶⁶⁾」。第一次大戦下に起きたロシア革命が日本の社会に影響を及ぼし、労働運動が盛んとなるなかで、限畔は、労働問題の文化史的意義を「世界改造の序幕」と「文化競争の実現準備」に見出し、内面的意義を唱えた。ここで彼は労働問題を「単なる物質生活の問題のみでない」と述べ、解決は、賃上げや労働時間の短縮など、雇用条件の改善によってではなく、労働者による自立的・自発的な意志に支えられ、彼らの「生活自由」が認められているかによると考えた。だからこそ、彼は本質を「民衆一般の要求」に見出し、「従って労働者のみが民衆を支配するといふことは、到底あり得ない」と論を一步進めた。「民衆一般が民衆を支配する」ところに「文化の根底」が形成され、「民衆が民衆を支配するといふ自律的自由は、民衆独自の自発的文化を創造することによって実現せられる」と主張したのである。

私は象徴の世界を憧れるが故に自由を欲し、芸術の世界を愛するが故に労働を悪むのである。而かも私は哀れな労働者である、自己の胃の腑を充たし得ないほどの貧窮者である。併し何うしても労働を謳歌することは出来ない。労働はあくまで労働であって決して創造ではない。パンはあくまでパンであって決して生命ではない。労働を創造だと思ったり、パンを生命だと考へたりすることは、現代資本家の色盲である。

この点から見ると、資本家と唯物主義的社会主義とは、たとひ何程反目するにしても、畢竟同一の根拠に立ってゐる⁶⁷⁾。

ここで限畔は、生まれながらの自己は「純真なる自由人」であり、「生活」とは、「食ふために働くこと」ではなく、「何かを創造すること」であると主張している。「象徴の世界」「芸術の世界」はすべてが自由・創造であると謳歌したとき、限畔の眼前に横たわっていたのは、食うために「労働」せざるをえない現実であった。だが、彼は「自我」を隠蔽してまで「労働」をし、それを神聖なものと捉える言説を厳しく非難し、資本主義社会において否応なく「労働」に駆り出されることに対して明確な拒絶を頭わにしている。注目すべきは、限畔が資本家と「唯物主義的社会主義」者とが「パンを生命だ」という同一の根拠に立っていると指摘していることである。資本主義を批判し、克服するはずの社会主義が、物質を根拠にする点において、実はきわめて親和性の高い、半ば相似形ともいえる構造を有していることを示し、双方向的な批判を試みたのである。

『『生きる』ことは吾々の目的だ、そのために働くのは神聖でないか』などと勝手な熱を吹くものを蔑しむ⁶⁸⁾』という限畔は、「自由人」の「生活」のあり方として、「一体、現代のやうな社会において生きようなどと考へるのが間違つてゐる」と主張している。現代の

社会に「生きる」ことは、隈畔にとつては「生きる」ことを意味していなかった。それは、つまり、「死ぬ」ことに等しかったのである。だからこそ、「自由人はゴロゴロして寝てゐるのが正当である。そのために飢ゑ死にしたら、それで好いでないか。何も現代において強ひて生きようと悶える必要はない」と言い切つたのである。「芸術の世界といふものは何も小説を書いたり、山水を描いたり、或は芝居を見たりすることではない。それは無限に自由な創造の世界を意味する」という表現をもって隈畔が示しているのは、人間の存在やその生命力を「形式」に押し込め、「結果」のみを求める近代合理主義への根源的な批判と、「労働」の苦痛を呑み込ませながらもお神聖化しようとする資本主義社会の理不尽さに対する徹底抗戦であつた。彼が「自由」と「創造」に価値を見出し続けることで、「生活」に浸透する「労働」を無価値化し、「象徴」と「芸術」の世界にこそ「真の生活」があると説いた所以である。いかにして生きるかに苦悩・煩悶する青年たちにとつて、彼の示した思想像が根源的な問いとして投げかけられたであらうことは想像に難くない。

「自由人」の生き様を示し、「絶対自由」を積極的に論じた隈畔を待っていたのは、大正九年（一九二〇）の筆禍事件であつた⁶⁹。同年一月の森戸事件に刺激される形で『内外時報』に発表した「権力の国より自由の国へ」と題する論説が新聞紙条例に違反したとされ、隈畔は二ヶ月の禁固刑を受け、人生初の下獄を味わうこととなつた。その経験から、隈畔は出獄後、かつて記した「孤独の行者」と題する創作の続編に取り組むようになる⁷⁰。これは従来の彼の言説のなかでもひととき異質な内容と形式を誇る文章で、孤独と沈黙を愛する主人公の「行者」が、「法律組」「経済組」「教育組」「科学組」「宗教組」などからなる役人たちが「文化城」を建設するときの滑稽な騒ぎをただ眺め続けるというものであつた。これは内的世界への沈潜を宣言するとともに、隈畔の社会に対する視座や距離感が暗示されており、後に『未知の国へ』と題する著書として結実していく。

「自由人」の生活を資本主義社会への根元的批判によつて示し、政治や社会に対する視座を「孤独の行者」に託して表現した隈畔は、大正十年（一九二一）十月、「永恒の世界の旅行者」と称して心中を遂げる⁷¹。相手は、神田の音楽学校の夏期講習会で隈畔の哲学講座の聴講生であつた岡村梅子であつた。「自由人の使命」を「永遠の革命」の実行であると遺言した「最期」は、彼の唱える「絶対自由」の実践としての「愛」の一つの形であつたのかも知れない。「絶対自由」を希求した隈畔は「永恒の世界」に旅立つことで、自らの生命をも批判の対象とし、その思想世界に幕引きをしたのである。

この「死」に対する論評は、隈畔を支えてきた妻・次子の美談を引き合いに出し、同情的な内容を含みながらも、概ね批判的であつた。かつてともに『第三帝国』を創刊した茅原華山は、隈畔を「西洋思想を総合的に換骨奪胎し」日本に扶植する上で、日本人の「独創性を發揮する責任ある一人であつた」と評価しながら、「恋愛至上主義」に囚われ、その犠牲者となつたことを嘆き、哀悼の念を述べている⁷²。だが、ここで注目したいのは、彼を支持していた青年にとつては、この「最期」も含め、隈畔の言動、生き様それ自体が「共鳴」と「感激」をもつて迎えられ、死後もなお彼の著書がむさぼり読まれる対象となつていたことである。明治三十四年（一九〇一）、富山県高岡市生まれの岡野他家夫は、当時、中学校を卒業し、高等専門学校に進学したばかりで、自らが懷疑と煩悶、超越と憧憬のなかで時代思潮に漂流していたことを回想し、隈畔の思想が自分を含めた当時の哲学青年・文学青年たちの心を強く把握せずにはおかなかったことを証言している⁷³。死後、

遺稿集として出された『自由を求めて』は、大正十一年二月の発行からわずか二ヶ月で五版を重ねており、反響の大きさを物語っている。

以上見てきたように、限畔における「絶対自由」の希求は、「自我」の肯定と労働および社会に対する明確な拒絶により、まさに現実生活のなかで没却されようとしている人間および生命の存在をすくいあげる形で展開されていた。限畔における「自我論」の展開は、ベルグソン哲学の受容を介在し、「自我」の闘うべき「敵」を内在的な要因に見出し、「社会」的疎外感を痛感するなかで「真の自由」の実現を唱えることとなるが、それは現状に不満を抱きながらも打破できずにいる自己と社会のあり方に対する批判だったといえる。その論理を「益進主義」の継承という観点で捉えるならば、茅原が示した自立的存在としての個人がより強く主張される一方で、普遍的存在として個人が社会や歴史全体に連なる側面は捨象され、むしろ違和感や拒絶感を表明する対象となっていた。

「文化主義」に対する批判は、その試みに一定の理解と評価を与えながらも、「理性」や「概念」を重視する姿勢に異議を唱え、「直観」「体験」「実在」を重視する姿勢が貫かれていた。これは近代合理主義の浸透のなかで捨象されていく要素をすくいあげることで、現実社会への批判を展開したものであった。これを通じて獲得された「絶対自由」の希求は、「自我」の強い肯定と労働神聖化への違和感の表明となり、「自由」すなわち「愛」の実践という主張につながっていく。

限畔が積極的に「自我論」を展開し、「自由」を強く求め続けたのは、第一次大戦後の混乱のなかで、大戦景気に伴って資本主義的生産様式と近代合理主義が人々の生活に浸潤したことに加え、世界的な「デモクラシー思潮」が国内の思想状況を押し流す勢いで流入していたからであった。そうした現状に対する拒絶の表明こそが彼の言説を形成していた。そこから「芸術の世界」「象徴の世界」に生きると宣言したのは、彼自身、厳しい生活を強いられながらも、あるがままの自己、「真の自我」「真正なる生活」を守ろうとする強い意志の顕れであった。「創造的な意志」の表明は、理念的には人間の存在や生命力を「形式」に押し込め、「結果」のみを求める近代合理主義への根源的な批判であり、現実的には「労働」の苦痛を神聖化しようとする資本主義社会の理不尽さに対する思想的抗戦であった。「自由」と「創造」に価値を見出し、思想的起点をつねに「真の生活」に置いていたがゆえに、限畔は西田哲学に対して土田杏村と「同様の希望」を持ち、「生活に切実に触れるもの」を求め、そして自ら求め続けたのであった⁷⁴⁾。

「大正デモクラシー」期の思想のなかで、「絶対自由」論に集約される限畔の思想は、拡大・浸透しつつある近代的な社会原理とその構造的矛盾に対する根源的なアンチテーゼであった。悲痛な叫びにも似た主張は、人間の価値や存在を政治・社会的に平等化・相対化していく当該期の思想をいわば逆説的に照射するものであった。限畔は自ら「孤独の行者」と称した生き様を全うすることで、「立身出世」や「成功」の道から外れ、鬱勃としていた地方青年層、地域の知識階層に独自の価値観・世界像を示し、内的沈潜に基づく「絶対自由」の獲得により社会批判の視座を提供したのである。ゆえに、青年たちは彼の著書を読むことで、それぞれの生活で「自我」の格闘すべき対象を見据え、「社会」と対峙する自己の世界を形成する方法を獲得していくのであった⁷⁵⁾。明治近代国家批判の射程が支配浸透の射程であるとするならば、限畔の「絶対自由」論こそ、雑誌『第三帝国』の思想圏のなかで、内的世界への沈潜により政治・社会的価値を根源的に批判したという点にお

いて、もつとも原理的かつ急進的な国家批判を示していたと言えよう。

第三節 「第三帝国」の住人―金子洋文と室伏高信の場合―

明治四十一年（一九〇八）四月十六日、洋文金子吉太郎は故郷を離れ、東京行きの汽車に乗った。小学校を卒業した彼は、親友の父である近江谷栄次の紹介で東京市芝区愛宕町の山本電機社に入社するために上京したのである。家が貧しかった彼にとつて、就職よりも一年後に電機学校へ入学できるという約束が魅力的だった。「そこも優等で卒業すると、僕は堂々たる論文を提出して、工学博士となるだろう、いな、更にすゝんで、後藤新平のように通信大臣となって、故郷へ錦を飾ってかえるのだ」⁷⁶⁾。

日露戦後の東京には、洋文のように夢想にも似た青雲の志を胸に上京する青年たちが跡を絶たなかった⁷⁷⁾。明治二十七年四月八日、秋田県南秋田郡土崎港町の附船問屋の四男に生まれた彼は、鉄道施設に伴う港町の経済的变化で家業が傾き、新聞配達をしながら小学校を卒業した。中学進学はできなかったものの、上京の好機を得たことで、帝都への憧れが渾然一体の空想となり、車内の印象や外景が目止まらないほど彼の心を奪っていた。こうした青年の希望は大半が叶わずに帰郷または都会での敗残生活を余儀なくされた。金子青年もまた就職後一年で土崎に戻り、県立秋田工業学校機械科に入学することとなった。従来、金子洋文は、『種蒔く人』の創刊者Ⅱプロレタリア文学の先駆として、文学研究の立場から評価されてきた⁷⁸⁾。だが、小学校の代用教員として勤めながら、『第三帝国』の読者となり、投書を熱心に届け、支部結成に奔走し、講演会幹事を務め、その思想的影響のもとで再上京の機会を与えられた彼の歩みを見るならば、『種蒔く人』同人の青年期ではなく、『第三帝国』の住人となった大正地方青年の思想形成を見出すことができよう。

一 金子洋文「華山と無車」の相剋

晩秋の深い曇天は土崎港町の長い冬のはじまりを予感させる。大正元年十一月、帰郷して秋田県工業学校機械科に在籍していた洋文のもとに次の葉書が届いた。差出人は、東京で人力車夫をしていた小学校の同級生今野賢三であった。

懐かしい両兄！憂鬱な郷土には、寒風荒々しく飛んで、暗い日が続き、雪片四圍を我物顔にしてゐると云ふことを黒丸君からも塩谷先生からも知らせがあった。さうした日々を、兄等は若い血を希望の園に踊らして、学びの道にいそしんでゐることだらう？ 炉辺に首を俛れては居まいネ。（中略）…都？こゝはまだ小春日和である。雨の少ないは気持がいゝ。シャツに合せて沢山である⁷⁹⁾。

この便りを読んだ洋文は「希望の園」で勉学に勤しみながらも「暗い日が続く」自分と、車夫として過酷な日々を過ごしながらも「都」の「小春日和」に浴する親友との対照的な姿を感じたことだろう。帝都東京の小春日和は、「憂鬱な郷土」で寒風にさらされる己の境遇に比べ、文明の明るさとして享受され、彼の向学心と上京熱を刺激したに違いない。

翌年三月、工業学校を卒業した洋文は同校助手となるが、「生活の為に、自己内実を虚偽する生活⁸⁰⁾」に耐えられず、同年暮れに母校土崎小学校で代用教員となった。彼は「算術の時間に、ユーゴーの「レ・ミゼラブル」を読⁸¹⁾」むような型破りの教師で、就任当初

から『秋田魁新報』などに筆を執り、評論や小説を書き、政治・文学活動に勤しんでいた。その頃、同郷の石田友治が上京し、『萬朝報』論説記者の茅原華山とともに雑誌『第三帝国』を創刊して話題を呼んでいた。同誌は、「益進主義」鼓吹のもと、日本人民の実生活に根差した立憲政治の実現を唱え、「無名新人の伎倆手腕を紹介する機関」として出発した。中央論壇に偏向しがちな雑誌編集と一線を画し、記者と読者の意見交流、論者同士の議論の場を提供し、全国の青年読者から熱い支持を得ていた。さらに地方支部の結成により地域的基盤を拡大していったが、洋文もその呼びかけに逸早く応じた一人であった。

私は肉を裂くやうな熱烈な活動を誌上に押し、ひそかに我郷土より第三帝国に尽力しつつあるを思ひ喜んでおります、土崎にも御誌に接し火を吐くやうな其議論、論説に感激してゐる人は少なくありません、で私は土崎智善先生とも計って遅くも来月まで支部を開設したいと思つてゐます、否きつと開きます、益々健康にて真摯に活動されることを希望します⁸²⁾

右は一七号に掲載された洋文の「秋田県土崎港より」である。「肉を裂く」「火を吐く」という表現から同誌に対する並々ならぬ思いを窺い知ることができる。一読者に過ぎない彼の熱情は「活動を誌上に押し」しながら、「ひそかに我郷土より第三帝国に尽力しつつある」との自負を示すほどであった。これに先立ち石田主事から「御葉書及原稿正に拝見しました。どうか小生の郷里の為に新しき帝国、新しき人生の開拓事業を創始被下成^マ、土崎には大橋茂三郎、館山祐治、加賀谷市三、土崎智善の諸君は本誌を愛読せる人々でもあり、小生の友人が多い故、御相談の上、御尽力願上候⁸³⁾」と記された葉書が届いていた⁸⁴⁾。ここでいう「御葉書」が「支部たより」として紹介されたのであろう。『土崎新報』記者の土崎智善らと支部を開設したとの報告は誌面から見つけられないが、これを機に洋文は益進会同人と交信し、地元紙に書く文学的傾向の強い文章とは異なる政治評論を掲げていく。

日本の政治は、立憲政治といふ専制政治なのだ。おれが国民の代表だなんて聞いてあきれる、金で出来上った傀儡ではないか、私はお前を代表者として選挙した覚がない。私の友達も、私の兄も、選んだ覚がない、我々の様な低級な月給取には、金がなくて選挙する権利を与へられなかったのだ。何たる矛盾だらう。堂々たる立憲国に生れて、一個の国民と認められてゐないのだ。(中略) 総ての善良なる真実の解決は普通選挙より他にはない、(中略) あゝ我に一票を与へよ、我々は生々として自己の生活に対して真摯に考へ、真実に動くことが出来よう⁸⁵⁾

右の評論は、第二次大隈内閣が原・政友会の打倒を目指し大規模な選挙キャンペーンを展開した第十二回総選挙に際して書かれた。制限選挙のもとで「低級な月給取」ゆえに選挙権を持たない洋文にとって、金権政治の横行を指を咥えて見ているしかない「一個の国民と認められてゐない」屈辱的な選挙体験だった。普通選挙の実施により「一票」を獲得・行使することで「自己の生活に対して真摯に考へ」た政治を実現するという言説は、「我々は政治を生活化せねばならぬ⁸⁶⁾」と訴える茅原の「生活即政治」の主張と軌を一にするものであった。『第三帝国』は、創刊一周年で普選請願署名運動を始め、さらに茅原が「模

範選挙」を標榜して総選挙に出馬することで時代に警鐘を鳴らしていた。

このとき同誌を支持していたのは、洋文と同様の境遇に置かれた選挙権を持たない青年層であった。「あゝ我に一票を与へよ」という叫びは、普選尚早を唱える同時代の言説を視野に入れた、一地方青年による必死の主張であった。政治的覚醒を遂げながらも参政権を得られない青年たちが、文学を捌け口とし、創作・表現をもって政治的手段に代替しようとしていた現象は看過できない。こうした経験を通じ、洋文は西欧追随型の「近代化」を批判し、「真摯に飯を食ふこと」を「大きな哲学」と捉え、「田を作ることは即ち詩を作ることだ」という「生活即芸術」の境地に到達していくのであった⁸⁷⁾。

さらに『第三帝国』との関係を親密にしたのが大正四年七月十八日より実施された益進会東北講演旅行であった。同年六月二十五日発行の四四号で「来る七月中旬より約二週間の予定を以て関東北遊説の計画あり」と予告され、講演の希望が募られた。前年六月以来、全国に二九の支部が設置されたことも後押しとなり、同号「支部だより」で、横手支部の幹事中村清次は「先般一寸申上げました講演会の儀、当方では秋田市其他の地方の意向如何に拘らず、当方支部単独だけにても実行致したき希望であります」と報告している。

全行程の二日目に設定された土崎港町での講演会は、石田の故郷とあって一段と熱がこもっていた。同地区幹事を務めた洋文は、各地講演会消息に「十七日は時代から忘却された井上円了博士の講演があります、二十二十一両日は当地の祭典ですけれど、此の動揺の中に私等は決して負けぬ積りです」「郷土出の石田先生に花をもたしたい⁸⁸⁾」と記している。同時期に行われる井上円了の講演会を「老人の会」、益進会の講演会を「青年の会」と位置づけ、「決して負けません」と強い意気込みを語っていたのである。四八号「東北講演旅行(上)」によれば、「土崎港町は石田主事の生れ故郷也、わが郷出身の石田主事に花を持たせなければならぬとあって、同地の青年教育家及本誌愛読の諸君熱心に幹旋尽力せられ、午後一時から開かれた土崎小学校の講演会は非常の盛会⁸⁹⁾」であったという。

この講演会後の宴席で洋文は茅原の知遇を得た。主賓のいる上座に招かれたゆえに、臨席した越後谷川弓が地元紙の『土崎商報』に中傷的な記事を載せた。それに対し洋文は『秋田毎日新聞』で「私は二三度辞退した。けれども華山氏が「是非座れ、俺は青年を愛する青年と語りたい」と切りに言はるるのでは非なく座ったのだ⁹⁰⁾」と反論した。ここで彼は「華山氏の一言一句は如何にせば、日本の国家の隆盛を成し得、如何にせば日本をして有終の美を成し得さしむるかの、血の出づる如き焦慮である」と指摘している。茅原の言論の起点となっている「焦慮」こそ、地方青年読者が『第三帝国』に共鳴する要因であった。

帰京した茅原は洋文に「御上京は何時ごろ⁹¹⁾」と促す葉書を送り、「準備が出来たならば何時でも上京し玉へ、上野まで迎へに行きます⁹²⁾」と記している。洋文が上京の不安を打ち明けると、「何とでもして上げますから御安心なさい⁹³⁾」と励ますとともに、「但し十分の用意を以て御出掛けなさい」と忠告し、彼に再上京の機会を与えていく。

代用教員時代の洋文は、茅原の「血の出づる如き焦慮」に基づく「生活即政治」の主張に共鳴し、同誌に熱心に投書を寄せ、支部の結成に奔走し、同郷の先輩のために地元講演会の幹事を務める、「第三帝国の住人」といふべき地方青年読者であった。だが、それは己の道を模索する途上であり、彼は『白樺』、特に武者小路実篤を崇敬する文学青年でもあった。したがって、洋文における「華山と無車」の相剋の実像を、両者からの影響を検討することで、明らかにする必要があるう。

大正四年九月十九日、洋文は『秋田毎日新聞』に「裸体の踊（一）——武者小路実篤様に——」を掲げ、武者小路への思いを独白した。主人公は、田村俊子『春の晩』における描写の艶麗さに驚嘆しつつも、その創作を「美しい人形を造ったに過ぎない」と斥け、「最つとつと、高い力強い人間の生活を、俺の創作に要求しなければならぬ」と、表現すべき対象を発見した喜びを謳っている。ここで洋文は主人公に託す形で自らの創作の命題を示したのである。彼はこの記事を実篤に送り、「御ハガキと新聞ありがとう。「裸体の踊り」は面白く見ました。君の元気が見へるやうに思ひました⁹⁴」という返事を受け取っている。

当時、武者小路は『白樺』に戯曲「ある青年の夢」を連載し、文学活動さらには芸術振興運動に力を注いでいた。彼を中心とした白樺派は、人道主義の旗幟のもと、新たな文学的試みを積極的に仕掛け、文壇の一角を占めていた。洋文が「裸体の踊り」を執筆した頃、実篤は肺結核との誤診により志賀直哉や柳宗悦の住む千葉県我孫子へ転地療養し、芸術共同体の実現に乗り出していた⁹⁵。人道主義と世界平和を謳う『白樺』の主張は、洋文においては「欧州大戦」に対する見解となつて顯れている。

『第三帝国』二十九号に掲載された「欧州出兵断じて不可⁹⁶」は、茅原の大陸出兵反対論に沿いながら、さらなる展開を試みた投書であつた。ここで洋文は、「世界の平和に貢献せんが為め」との「美辞を縷列し」国民を欺そうとする「似而非政治家」の「心事の貧弱」を嘆いている。「世界の平和」という名目で国民の「貴重なる生」を犠牲に戦争を繰り返してきた帝国日本のあり方に違和感を表明し、「然して我が帝国、日本国民は應て戦争の為め倒壊し自滅するの当然の理ではないか」と喝破したのである。戦争への参加を否定する彼の主張は、戦争それ自体を「火の洗礼⁹⁷」と称して認めつつ、欧州出兵には反対する茅原の主張と性質を異にしている。だが、この時点での洋文は、「我等の帝国、我等の生は、決してかゝる空莫なる論理の犠牲となるほど廉価のものに非らず」と、日本人民の生命の危機から帝国日本の方向性を立論する『第三帝国』の一住人であつた。

大正四年十一月、益進会の分裂が「華山と無車」の相剋をより深刻化させた。同郷の石田と自分を認めてくれた茅原が訣別したことは洋文にとつて痛恨事であつたに違いない。彼は、翌年二月に「雪積る夜」と題する対話形式の記事を掲げ、両者の「分裂」に言及している。相手（ⅡB）が「君は華山氏と石田氏の持主事件に対しては何事も語らない様だね。君は前に感じ推賞してゐた尊敬をあの後も華山氏に感ずることは出来るか⁹⁸」と尋ねたのに対し、洋文（ⅡK）は「その問題に就いては、未だ一度も口を開かなかつた。自分は幾度も言ふ事を心の衝動に強請されたが、何物かに未だ早いぞと叫ばれて躊躇してゐた」と告白し、「自分はあの事件以来、華山氏をもつと好きになつた」と答えたのである。

続けて、相手に「君が一種の利己打算の為に正しさが狂ひ出したのではないか」「華山氏の許に働き得るといふ卑屈な、算数の術の会得に囚はれて仕舞つてゐる」と自己の心情を鋭く指摘させることで、見解の客観化を試みている。その上で、石田の「心事の高潔」「人格の優秀」も認めるが、世間一般が「何故石田氏の苦悶、焦慮、懊悩のみを知つて、華山氏のそれを考へ」ないのかという疑問を呈した。とりわけ『第三帝国』の「茅原華山絶縁顛末号」について「僕があゝの雑誌を見て直覺したのは、総ての記事が、全く悪口のための悪口に依つて、配列されてゐると言ふ事である⁹⁹」と述べ、「第三者を首肯せしめる冷静と真摯が、非常に欠けてゐる」と分析し、「何故に石田氏が、冷静と緊張の中に、平素の高潔な純朴な人格の表現がなかつたかを惜しむ」と率直な感想を吐露したのである。

一方、それらの「罵詈雑言」に対して、獅子の如く怒り反駁」すると思われた茅原が後継誌『洪水以後』創刊号で「分裂」の事情を説明し、自分の非を認め、石田側の擁護まで見せた姿勢に、洋文は「氏の悔悟と苦悶と、同人間に於ける愛の如何に傷々しきかを感取せずにはおれなかった」と言う。そして、「華山氏の落度をも否定しない」が、「或部分の人々が華山氏を悪口するに博大であつて、華山氏の傑れたるところを陳ぶるに余りに吝であることを、不思議なる心理の微動として、正直でない眸を向けたくなる」と指摘した。

茅原への攻撃は、同年十二月、『中央公論』の特集「茅原華山論」で大杉栄や相馬御風らが「変節改論」を非難したのを皮切りに、特に社会主義者たちによって展開されていた¹⁰⁰。だが、洋文はそうした人々に対し、「一体氏等の叫ぶ、変節改論とは何物を指摘しての言辞であるか。氏等は人間の思想が常に流転なく膨張なく、停止の常態にあれと言ふのか¹⁰¹」と問い直す。「我々の情意の強靱なる灼熱と昂奮と苦悶を透徹して発見する思想の流転に対して、我々は自己の真理の前に闘ひ退くるを知つても、それを互に変節と罵り、改論と退くるは余りに低級、浅薄、幼稚なる態度ではないか」と訴えたのである。「正しく勇しく華山氏の思想の欠陥矛盾を指摘し反駁し、難ずることを希望する」と述べながら、同郷の先輩石田ではなく、茅原派の発刊した『洪水以後』へ身を投じ、投稿を寄せていく。

さて、先の「雪積る夜」では、「持主事件」に先んじて武者小路の小説「小さき運命」が論じられていた。「小さき運命」は雑誌『太陽』で連載されていた、良家の子息が小間使いに恋をする物語である。洋文は「武者小路氏はあの創作に於て、二つの大きな思想を取扱つてゐる¹⁰²」と、作品の本質を親子関係の困難と愛の普遍性に見出し、「両者の葛藤を描くことで「事実」を読者に突きつけた実篤の意図を高く評価している。

この時点の洋文にとって、人生における「愛」と「戦」は、葛藤する二つの対立項であった。生命の危機、生活の困窮を背景とする矛盾・葛藤の有様は、大正五年四月十一日発行の『洪水以後』一〇号掲載の評論『哲人』たること『人間』たることに端的に顯われている。洋文は、人間生活における不朽の光明を「愛」と「戦」に見出し、「愛する」という事、戦ふと言ふ事、それは矛盾（の）如くにして決して矛盾ではない」と述べ、「愛のなき人間生活の戦ひは、野獣の争闘である。真の戦ひは、愛の正しき翻訳的可能性をもつ生活の光明でなければならぬ」と訴えている。「愛」と「戦」の「正しき合致」「調和」こそ、洋文の考える「真純の人間の信仰」なのであった。

そこから翻って帝国日本の現状が批判される。「あらゆる現実の基調は、人間生活の思潮より出発しなければならない。之を失念したる盲進は、その国家を暗黒裡に落下せしむ可き、運命を暗示する。日本は正にその運命の暗示に掛つてゐるのではないか」。このように述べる洋文は、思想や哲理を持たない政治家、教育家、軍人、実業家を批判し、「民衆を代表する」「哲人政治家」が出現し、代議政治を救済することを望んだ。さらには国民全体に思想生活を有する「正しき人間」、すなわち哲人でなければならぬと主張したのである。洋文が代用教員であつたことを想起するならば、一連の主張は、教育の場で実践すべき課題でもあつた。彼は、教育を「被教育者の現在の生活を有意義ならしむると同様に、十年後の生活の予言であらねばならぬ¹⁰³」と述べ、「田園に働いて二十名位の日本の天才を造るのが、私の後生の偉大な仕事です¹⁰⁴」と報告している。

彼における「愛」と「戦」の体現者こそ、茅原華山と武者小路実篤であつた。大正五年五月に『秋田毎日新聞』に掲載された論説「華山と無車」には、両者からの思想的影響が

明示されている。洋文は「我々の真の生活から生み出されたる政治こそ、それは真純の政治である」¹⁰⁵と主張し、茅原をいわゆる思想家として見れば不足な感は否めないが、「氏の思想の一頁々を繰る時、我々は茲に他人に見られぬ直感の灼熱せる活躍と、天才的な創造力とに詠嘆する」と指摘し、「氏は正しく混沌せる現在日本の産出せる、天才的哲人的政治家の第一人者である」と高い評価を与えている。

一方、「現今の政治界」と没交渉な形で「何等の用意もなく定見もなく、性欲の遊戲的描写を擅にして、青年男女を墮落せしめた」自然主義を否定し、「創作は人間生活に対する、最高の道徳訓である」¹⁰⁶と述べる。特に武者小路に注目し、「氏の創作にはいつも美しき愛と、人類の苦悶者の姿とが明瞭に表現されてゐる」と評している。「老大家」に比して拙く単純かも知れないが、「思想生活の正しき」を把持していることを賞賛し、武者小路の作品に「偉大な愛の光明」「正しき芸術の道程」を見出したのである。

「華山氏が『国家を如何に綜合的に立体的に樹立すべきか』に就いての苦悶者、戦闘者であるとすれば、武者小路氏は『人類の愛を如何に正しくすべきか』に就ての苦悶者である」¹⁰⁷。茅原を「新らしき戦争論者」、武者小路を「新らしき平和論者」とみなす洋文は、「戦の主張者ニイチェ」への欽慕と「愛の殉教者トルストイ」への崇拜という相反する二つの世界を想起し、両者の葛藤を次のように論じていく。

そうした矛盾の長き経緯は、漸く鍛練されつゝ時と共に流れて進んだ私は不可思議にも、小なるニイチェ華山氏と、小なる日本のトルストイ武者小路氏とを、自己自身の愛の前に発見した事に、驚きを握った。私の観照は漸く深邃の度を加た。私は再び自我一元に帰った。混沌を排して、全くの一人の姿を凝視した。自我中心、それを基礎とせる宇宙の存在、人類の愛の認識。私は遂に叫んだ。

愛 即ち神 / 戦 即ち神

上述した「真の人間生活」における「愛」と「戦」の合致という思想的課題が、茅原・武者小路という実在の人間を通して迫ってきた時、洋文は両者を「小なるニイチェ」と「小なる日本のトルストイ」と捉え、どちらでも満足できないことを吐露し、「自分の道程、自分の生涯の苦悶と努力は、此矛盾の調和であると思はずにおられない」と告白することで、両者の矛盾を止揚しようとしていた。だが、ここにおける思想的試みは、いまだ明確な方向性や対象を伴っておらず、「神秘の追及」と表現するほかない状態であった。

葛藤の「告白」から五ヶ月後、洋文は茅原の弟茂が主宰する『日本評論』（『洪水以後』の後継誌）の論説記者として、再上京の途に就く。それは「華山と無車」の相剋を克服した上の決断ではなく、矛盾を抱えたまま調和を図り、己の進む道を探求するための出発であった¹⁰⁸。次に、洋文が『日本評論』記者となつてから、我孫子寄寓時代を経て、雑誌『種蒔く人』の創刊に至るまでに獲得した思想的な支柱を考察していく必要がある。

二 「若き農夫」の発見

大正五年十月、『日本評論』の記者となつた洋文は、「教育評論」を担当し、代用教員の経験を生かし、教育が政治・経済・産業・芸術などの領域から孤立している現状を批判した¹⁰⁹。と同時に、創作・散文詩にも筆を揮い、文学的な素養を生かす場も与えられた。

だが入社時、自らの才能を認めてくれた茅原は二度目の洋行の途上であつた¹¹⁰⁾

こうした事情が関係したのである。洋文は三ヶ月後の翌年一月初旬には、もう一人の崇敬の対象である武者小路の門を叩き、千葉県我孫子手賀沼畔の武者小路宅に、息女房子の家庭教師として寄寓した¹¹¹⁾。これ以降、洋文は我孫子から『日本評論』に寄稿を続けるが、その内容は、武者小路の影響により文学的な傾向を強めていく。大正六年一月一日発行の『日本評論』二一号の金子洋文「生田長江氏に与ふ」は、前年十一月の『新小説』に掲載された生田長江「時評」自然主義前派の跳梁」の白樺派批判への反駁であつた。

生田は、近代芸術の方向性として広義の自然主義を認め、日露戦後の文壇で隆盛する日本の自然主義に不満を抱きつつも、それに反論する形で登場してきた白樺派、特に武者小路の文学を辛辣に攻撃した¹¹²⁾。白樺派の人生の肯定を人生の否定を経た力強い肯定ではないと述べ、「自然主義前派」の段階にあると酷評したのである¹¹³⁾。

対して洋文は「白樺派の芸術の価値は、日本の文壇の成長にとってなくてはならないものである¹¹⁴⁾」と弁護した。生田の批評が対象を十分に検討していないことを指摘し、「氏の近眼は只簡単に人間生活の表層のみを見ようとして」「それ以上に大事な人間のいのちの懊悩、いのちの苦患、そして渦巻くいのちの変化を全く失念してゐる」と斥けた。さらに「自然主義前派」という区分それ自体に疑念を呈し、「その本質を見ないで只単にその外廓のみ見て論じてゐる」点を批判した。そして、文学の本質を「人間として生きる事に真摯であるか、熱烈であるかの問題である」と論じたのである。

洋文の弁護からわかることは、彼が「いのちの懊悩」「いのちの変化」を描くことを創作の対象に据え、「人間」を表現する「芸術」の真の価値を、「自然主義」「浪漫主義」といった形式ではなく、生きることへの「真摯さ」「熱烈さ」に見出していた点である。彼は「主義」の枠組みに囚われることなく、本質において創作の価値を捉え、自己暴露に陥る自然主義ではなく、自己発展へとつながる新理想主義の立場に属していた。洋文にとって「文学」とは、真摯に生きる人間の「いのち」を表現する手段だったのである。

さらに自然主義批判は、教育評論「文学と教育の境を越えて¹¹⁵⁾」に継続されていく。洋文は、文学界と教育界の懸隔を嘆き、要因を「教育家達は文学を敬遠し墮落視する。芸術家は教育の無能を嘲罵し軽蔑しても真摯にその内相を究めやうとしない」と相互の蔑視に見出す。特に教育家たちが文学を「墮落視」する原因を自然主義に見出し、「自然主義は、本当の事を見る事を教へた。けれ共本当の事を考へ、本当の事を言ふのを忘れてゐた」と指摘した。洋文は、自然主義批判を通じ、文学の本質を「形象の内積」に求め、それを学生に伝える教育の役割に着目し、「文学と教育との境を越えて進め」と主張したのである。

我孫子時代の洋文は、それまでに経験したことのない文化的・芸術的な生活を過ごし、白樺派の影響下で文学評論や教育評論を展開していた。後に洋文は「私の生涯にとつて忘れがたい幸福な期間であり、高貴な文学精神をむさぼるように吸収し学び得た¹¹⁶⁾」と振り返っている。だが一方で、武者小路らと時間を共有するにつれ、洋文の心には確かな違和感が芽吹いていた。それゆえ、我孫子での生活は半年で終わりを迎える。「人間生活」における「愛」と「戦」の調和、茅原と武者小路の葛藤を克服するために歩を進めてきた洋文は、我孫子寄寓を経て『日本評論』へ戻るが、そこから『種蒔く人』に至る道程は、いずれの追従にも甘んぜず、独自の道を模索するほかない「地獄の日々¹¹⁷⁾」となっていく。

大正六年七月、我孫子を去った洋文は、再び『日本評論』で筆を執り、翌年五月まで記

事を寄せている。その後、今野賢三と下宿生活を共にしながら、正岡芸陽主宰『労働新聞』や『毎夕新聞』の記者となる¹¹⁸。この時代を通じ、チェーホフやドストエフスキーなどの文学やカーペンターの思想に触れ、これまで抱いてきた「政治」と「文学」への関心を複合する形で「社会主義」を受容していく。この時期は、洋文が『種蒔く人』を創刊していく素地を形作る時期として重要であるが、史料制約から詳細な検討は難しい。だが、すでに洋文の心の内には、表現すべき対象が明確に浮かんでいたのであった。

洋文「女工の群」

ようぶん「若き農夫よ」

女工達が工場から帰る時
広い原っぱをとぼとぼ帰る時
私の心はいつも寂しい

女工達は
群がり群がり通るけれ共
何も言はない
顔もあげない
たゞ頂垂れて通る

原っぱの草は暑さにいきれて蒼く
女工達の顔も蒼く
空も蒼く
土も蒼く

あゝそして私の心は限りなく寂しい
(六、七、一四我孫子行の列車にて)

若き農夫よ
お前の歩きつ振りが気に入った
両肩を広くして
手を前後に大きく振って：
畑はどしゝと埋まる
お前が立止って物を見る時
お前は宇宙の様に大きく重い
小さい人間がぶつかってきても
お前はビクとも動きさうもない
お前の眼は何を見てゐる
それは真理だ
おゝ何といふ深々しい眼だらう
おゝその眼から
今に太陽が燃え出して
新らしき世界が生れるのだ。

(六、七、一五 列車中にて)

右は、『種蒔く人』土崎版第二号に掲載された洋文の詩である¹¹⁹。注目したいのは、二つの詩で示された世界観の違いと日付である。大正六年七月十四日の我孫子行の列車から見えた風景が労働を終え工場から帰る「女工の群」であったのに対し、翌日の列車で見たのは大地を踏みしめ、力強く畑を耕す「若き農夫」であった。「何も言はない」「顔もあげない」女性労働者たちの哀しい姿と、「深々しい眼」で「真理」を見据え、「新らしき世界」を生み出す生産者の逞しい姿とのコントラストはいかなる理由によるのだろうか。

この「明暗」を解き明かすのは、「兄がいよいよ帰郷する日まで確定したのは何とも云はれぬ喜びである」¹²⁰と記した親友今野賢三からの葉書が存在であった。そこには、大正六年七月十二日の午後十ゝ十二時(秋田)と同十五日の午前〇ゝ九時(千葉・安食)という二つの消印が押されている。「女工の群」の日付に「我孫子行」とあることを考え合わせると、洋文が十四日に武者小路宅を訪れ、我孫子を去る決意を伝え、翌日帰路に着いたという推測が成り立つ。つまり、対照的な世界観を示す二つの詩は、洋文が武者小路と決別し、寄寓生活に終止符を打つ「独立宣言」として、彼の心理状況の変化を象徴的に表現

していたのである。同年七月二十九日付の武者小路書簡にも「君の一生にとって僕の処に居たこと、又僕の処から出たことがよりよきことであることをのぞんでゐます」¹²¹という記述があり、右の推測を確かなものとしてくれる。それは上京当初、持ち越していた「愛」と「戦」の調和、「華山と無車」の相剋という問題に洋文が出した一つの答えであった。

自立の意志を表明する詩において「若き農夫」が見出されたことは、偶然ではなかった。自然および大地と格闘すること（「戦」）で農業を営み、その生産物により生命を養い、さらには貧困を救済すること（「愛」）で、「生活」を積み重ね、そこから「歴史」を生み出していく「若き農夫」の姿は、これまで洋文が求めてきた「戦」と「愛」の調和を期した「人間生活」を担う存在であった。洋文は『種蒔く人』土崎版で「チェーホフの『農人』から」¹²²を連載し、「貧乏」による不幸の存在を指摘している。人生における「愉快」を要求しながら、「悲痛」「煩悶」「空虚」しか得られていない現状を憂い、「現生活に対する反抗」と同時に「新しい生活の建設」の必要を訴えたのである。この「新しい生活の建設」を実現する担い手こそ、力強い生産者としての「若き農夫」なのであった。

大正九年秋、洋文は前年暮れにフランスから帰国し外務省欧米局情報部に嘱託として勤めていた小牧近江と十年ぶりの再会を果たした。小牧は、第一次世界大戦を体験するなかで、アンリ・バルビュウスの「クラルテ」運動に触れ、反戦・平和思想を吸収し、自らも運動に加わる志を抱いていた。洋文は、在仏中の小牧が送ってきた「ハイカラな写真からうけた印象と、外務省勤務にこだわり、当初会う気になれなかったが、小牧の父近江谷栄治から「小牧が赤くなって帰ってきた」ことを聞き、連絡を取った」¹²³。桃色がかつていた「洋文は、小牧の持ち帰ったフランス直輸入の反戦・平和思想に共鳴、意気投合し、翌十年二月二十五日、今野賢三、近江谷友治、畠山松治郎らを加え、雑誌『種蒔く人』を創刊した。同誌は、発行保証金が払えずに三号で休刊に追い込まれるが、その志は同年十月再刊の「東京版」へ継承される。同人は、言論により理論的指導に当たる東京組（小牧・洋文・今野）と、小作争議や労働争議の先頭で運動を牽引する秋田組（近江谷・畠山）に分かれ、相互補完的な関係を保ちつつ、プロレタリア文学運動の先鞭をつけていく。

大正十二年三月号の『解放』に掲載された小説「地獄」¹²⁴は、川端康成や徳田秋声から激賞されるなど好評を博し、洋文を文壇の人とした。¹²⁴この作品には、村の農民を組織し、大地主に対し小作争議を行ない、勝利を導く若き農村指導者が描かれているが、それはまさに「若き農夫」の理想像を創作の形で具体化したものであった。その背景に、「東京版」の「ロシア飢饉救済運動」の呼びかけに応じて土崎でキャンペーンが開催されたこと、近江谷や畠山により小作争議や労働争議が展開されていることを見ると、作品執筆それ自体が政治的实践へ連なる行為であったといえる。¹²⁵武者小路と決別する帰路で発見した「若き農夫」の姿は、雑誌『種蒔く人』で結実し、小説「地獄」に描かれた農民たちの活動により具体的な理想像に到達した。そこには『第三帝国』と『白樺』の葛藤に揺れた過去の姿はもうなかった。¹²⁶茅原および武者小路の思想的影響は、洋文において、力強い生産者「若き農夫」像となつて統一され、「政治」を志向する「文学」として確立されたのである。そして、大地と格闘して農業を営み、生産した作物によつて「生命」を救い、「生活」を積み重ねて「歴史」を築いていく「若き農夫」の姿こそ、「益進主義」において示された不断の創造的活動により文明の向上進化に貢献する、「普遍共通の心（ユニヴァサル・マインド）」に連なる個人像を継承・発展させたものにほかならなかった。

三 室伏高信「生命デモクラシー」論の提唱

『第三帝国』に投書を寄せる愛読者のほかに、茅原に私淑・傾倒する青年たちも少なからず存在していた。独自の政治論で「民本主義」論争に参入し、新進異色のジャーナリストとして名を馳せる室伏高信もその一人であった。室伏は、自伝的小説『葦』で青年期を振り返り、『萬朝報』の「黒岩涙香や茅原華山の署名入りの論文」に惹かれ、「むさぼるやうにして読んだ」と記している¹²⁷。人生問題に懊悩していた青年は、茅原との「出会い」に導かれ、やがて中央論壇に登場していくのであった。

室伏高信は、大正前期から昭和戦後に至るまで活躍したジャーナリスト、文明批評家である。長い活動期間に残した著作は二〇〇点を超えるが、多様にすぎる言動は室伏への評価を困難にし、従来、彼は時代に引きずられ「変節」を繰り返したジャーナリストと見なされてきた¹²⁸。近年、ようやく新しい評価が登場してきたが、いずれも室伏の後半生に焦点を当て、彼が「民本主義」論争に参画していく経緯とそこで「異彩」を放つ活躍を見せた理由については十分に解明されていない¹²⁹。室伏の青年期が茅原の影響下にあり、私淑する学生になったことを思えば、「第三帝国の思想圏」を担った一人として、若き文明批評家の思想形成を再検討する必要があるだろう。したがって、以下、茅原の「益進主義」を政治評論の地点で継承した室伏高信の「デモクラシー」論の本質を解明していきたい。

室伏は、明治二十二年（一八八九）旧暦二月二十二日に神奈川県足柄下郡土肥村（現在の湯河原）に生れた¹³⁰。父の庄太郎は農業を営むかたわら、村役場の収入役として勤めていた。日清・日露の両戦役により「湯治」が流行すると、湯河原の周辺は温泉場として急激な発展を遂げた¹³¹。周囲の環境が変わるなかで幼少期を過ごした室伏は、隣村の吉浜高等小学校を優秀な成績で卒業したが、遊学のために上京することを許されず、農業を手伝う日々を送った。だが、向学の志を捨てることができず、兄が送ってくれる大日本国民中学会の講義録で勉強し、家業の合間に少年雑誌に詩を投稿し、父が役場から持ち帰る『萬朝報』の社説・論説記事を愛読するなど、上京および進学への憧憬を強めていた。

明治三十七年十一月末、父から上京の許しを得た室伏は、翌年一月から神田の正則英語学校および正則予備学校に通い、三月に錦城中学の三年次編入試験に合格した。だが、猛烈な詰込み教育に追われ、五年次に栄養失調から脚氣にかかり、止む無く帰郷となった。自宅で静養する内に学業が遅れ始め、「自堕落な生活」を送るが、日露戦後に流行していた雑誌『成功』や『実業之日本』の影響を受け、実業家になることを夢見て、東京高等商業学校に入学願書を提出した。だが、その帰路、自らの方向性に疑問を抱き、東京高商への志望を取り止め、一念発起して『学生論¹³²』を書き上げ、第一高等学校長を務めていた新渡戸稲造から「序文」をもらい自費出版した。

同書の特徴は、新渡戸が「今方に学生の境遇にある学生自らが学生を論ずれば勿論その智識は浅く経験は足らぬにもせよ、現に色々の事実日夜遭遇しつゝある故却て面白い観察や適切な考へがあつて、肯綮に中る節も少くない」と記す通り、従来の青年論・学生論と異なり、現代に生きる「学生の真相」を学生自らが書いているリアリズムにあった。

「人は時に従って活動し、時は又人を作り、人を変化す¹³³」。なかでも室伏が関心を寄せたテーマは「人」と「時」の関係であった。彼は両者の関係を「船をやるものは風に従ふに非ずや」と航海になぞらえる。さらに「多きものは勝ち少なきものは破れ強きものは優となり、弱きものは劣となる」と、量の多少が物事の勝敗を分け、強弱および優劣の基

準となると捉える。結果、「時」の趣く所に「人」が多く集まる。「人」と「時」の関係が、社会進化論における「優勝劣敗」の論理を適用して把握され、そこから「学生の最大急務は時代の精神を捕捉する」¹³⁴ことに見出される。「物質全能」「金権」を「時代の精神」と認識する室伏は、学生が陥りやすい道として、「厭世」「苦学」「恋愛」「成功」などを取り上げ、「理想」を実現するために必要な「資格」「力」を身につけることを主張した。

『学生論』の反響は良好で、ここで得た資金を学資とし、同四十一年九月、室伏は明治大学法科に進学した。当初、弁護士を志願していたが、憲法学への関心から政治思想の書を耽読し、弁論部に入った。そこで室伏は、前年に結成された大学雄弁会の親睦団体「丁未倶楽部」に加わり、各大学による連合演説会や擬国会で活躍し、ここで後に益進会同人となる鈴木正吾とも知り合っている。室伏自身の回想によれば、早くからイギリスの労働党に着目し、「明治の擬国会では、わたしは首相に推薦されたが、これを辞退し、野党の首領を買って出て、自分の党を労働党と名付けた」¹³⁵という。

この頃、欧米外遊から帰国した茅原の知遇を得た。「頼りうるただ一人の先輩は茅原華山先生であつた。先生は万朝報に拠つて論陣を張り、絢爛な文章は当時の学生間では高い評判を博してゐた」¹³⁶。茅原は論説記者として知られるとともに、欧米各国の議会政治を実見してきた経験を活かし、各大学雄弁部が開催する講演会に招かれる存在であつた。室伏も「その文章を愛し、学生時代からしばしば先生の家に訪れてゐた」という。

明治四十五年五月の第十一回総選挙に際し、丁未倶楽部で知友となつた中央大学の横田稔との関係で、稔の兄千之助が立候補したのを応援するため、室伏は演説弁士として群馬へ出向した。そこで演説活動に追われるあまり、卒業試験の準備ができず、結局、大学を中退し、新聞記者となる決心をして「華山先生」の門を叩いた。茅原は「万朝報はいま一杯だから、二六に紹介してやらう」と、『二六新報』編輯局長の川島清治郎に紹介状を書き、編輯局長の川島から社長の秋田清に話しが行き、即日採用された。

大正元年九月、室伏は『二六新報』に入社し、政治部記者として尾崎行雄・島田三郎・大隈重信・犬養毅らを訪問し、記事を書いた。ところが、同年末の憲政擁護運動に際し、『二六新報』社主の秋山定輔が桂太郎の擁護に回つたため、わずか三ヶ月で辞職することとなる。室伏は、翌年二月五日に開催された帝都青年会に出席し、益進会同人らとともに選挙権拡張を決議した。同月九日、浅草蓬萊座における「全国青年大会」に益進会同人が早稲田雄弁会や慶應弁論部らの学生と共演したのに対し、室伏は丁未倶楽部主催で神田青年会館で開かれた「薩閥打破大演説会」に参加した。こうして室伏は、時に益進会同人らと「共演」しつつ、憲政擁護運動に積極的に参加していたのである。

大正二年、尾崎行雄の紹介で対馬機が經濟部長をしていた『時事新報』に入り、貴族院、同志会、政友倶楽部、文部省などを担当し、主要な政客を訪問した。翌年、第一次世界大戦が勃発すると、青島に従軍記者として派遣されるが、山梨参謀長の談話を無検閲で打電した文章が『時事』に掲載され、即日退去を命じられる。帰国後、検事局で取調べを受けたが、時の司法大臣が尾崎行雄だったこともあり起訴は免れる。同四年三月、第十二回総選挙で第二次大隈内閣を支持し、各地で応援演説を行い、政友会打倒の選挙キャンペーンの一端を担った。同年十月、井上正明の勧めで松山忠次郎が主筆を務める『東京朝日新聞』に入り、杉村楚人冠・鈴木文史朗・岡本一平・緒方竹虎・大庭柯公らと同僚となった。

四 「民本主義」論争への参入

周知のように、大正五年一月、吉野作造は『中央公論』に「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」¹³⁷を掲げ、「民本主義」を唱えて、普通選挙の実施に基づく責任内閣制の確立を主張した。東京帝国大学政治学講座の吉野教授による長論文は、発表と同時に反響を呼び、その解釈をめぐって、いわゆる「民本主義」論争が起こった。¹³⁸

筆頭は、吉野論文の発表からわずか十日後、茅原派の一元社が発行していた雑誌『洪水以後』に掲載された小倉俎峰「吉野博士の憲政論を読む」¹³⁹であった。小倉は、吉野が欧米の「デモクラシー」と日本の「憲法政治」を同列に並べ、両者が「同一の根本精神に依って成立して居る」ことを主張しようとするあまり、デモクラシーの思想を二分し、本来、基調となるべき「主権人民に在り」という思想を抜いて語っていることに異論を唱えた。「博士は欧州に囚はれたる憲法政治の論者である」と批判し、日本独自の「憲法」と「根本精神」に基づき「其の有終美を済さしめんと欲する」と主張したのである。

これに続く形で、『洪水以後』主筆の茅原華山も「デモクラシーを使ひ分けたる吉野博士」¹⁴⁰をもつて吉野論文を批判した。茅原は「西洋には民主といふ思想はあるが民本といふ思想はない、日本には民本といふ思想はあるが民主といふ思想はない」と語り、「民本主義」は「デモクラシー」の訳語ではないと断言する。この反論は、彼自身が『萬朝報』社主の黒岩とともに「民本主義」という言葉を造り、これまで貴族主義・官僚主義・軍人政治に反対する「人民を主とする」政治思想として用いてきた自負心ゆえであった。

一方、吉野と同じ東京帝国大学で憲法講座を担当していた上杉慎吉は、同年三月の『中央公論』に「我が憲政の根本義」を発表し、吉野が提示した「議院中心の政治」は、天皇中心のわが立憲政体に反する「天皇親政を排斥する政治」であると厳しく批判した。また、明治大学教授で経済学博士の植原悦二郎は、国家の主権は国家という法人格または国民という全体の団体にあり、君主や人民という一部分にあるのではないと国家主権説の立場から、「民本主義」を唱えること自体が誤っていると批判する。¹⁴¹また「デモクラシー」を「民本主義」と「民主主義」の二様に訳すのは、原語が一つの言葉である以上、両者の内容も当然同じでなければならぬと述べ、上杉に対しても批判を展開していく。¹⁴²

このように多くの吉野批判が「デモクラシー」を「民本主義」と訳したことの妥当性をめぐって展開されたのに対し、室伏は、吉野における「デモクラシー概念」の位置づけと「代議政治」の是非について切り込んだ。¹⁴³「今日の国法学に於ては、博士の最も善く知れるが如く、主権の所在は、法律上国家なる法人格の上に在りとする事が、既に一般の定説となつて居るでは無いか」。室伏は、植原と同じく国家主権説・国家法人説の立場から吉野の「民本主義」を批判した。その上で、「吾々の見る所では、デモクラシーの本義は、法律上の言葉として用ひらるるものには非ず、政治上、社会上に於ける平民的思想、運動、傾向等を総称して、此所にデモクラシーの、本当の概念が現はれて来る」と述べ、デモクラシー概念を政治上に限定する吉野の「民本主義」の狭隘さを鋭く指摘した。

「デモクラシーとは、近時に於ては、男女の問題に於て、婦人の社会上の地位を向上し、之に選挙権や被選挙権を与へんとする運動であり、経済上に於ては、労働者の勢力を認め、社会主義と成り、サンヂカリズムと成り、労働組合主義と成らんとしつつあるものを言ふ」。したがって、今さら「民主」と「民本」を区別している吉野の民本主義論は、「甚だ失礼ながら、新時代のデモクラシーの意義とは大分に遠ざかった」旧い議論だと切り捨

て、「近時のデモクラシーに就ては、ブローハム・ビリエルの書『モダン・デモクラシー』が、割合に善く書き立てて居る」と天下の東京帝大教授に関係図書を推薦している¹⁴⁴。

「デモクラシー概念」の位置づけ以上に、室伏が厳しく批判したのは、吉野が「憲政の有終の美を済す」ための手段として示していた「代議政治」の是非についてであった。「吉野博士の所謂代議政治全能論や、二大政党対峙論やに対しては、僕は大きな疑問を持つて居る」という室伏は「本来他人の意思を代表するといふことは、殆んど有り得可らざる觀念と言はねばならぬ。特に議会の組織の如く一定の期間、全国民の意思を適当に代表せしめんとするが如きは、絶対に夢である」と痛言した。若き評論家にそう言わしめたのは、実際に「代議政治」が国民の声を反映していないという厳然たる事実であった。

見よ代議制度の不敏活を、大隈内閣の中葉に当り、大浦内相瀆職事件が起り、天下憤激物情騒然、大隈内閣は一旦総辞職を決したる迄の大事件たりしに拘らず而して天下の新聞紙は、国民の声を後に控へ、声を揃へて、大隈内閣を非難したるに拘らず、代議士は何をした。議会は何をした。緩慢なる議會制度は、国家の大問題に応じて、少しも適當なる活動が出来なかつたでは無いか¹⁴⁵。

二大政党になる傾向も見られず、二大政党の対立では現代の時勢に應ずることはできない。「吉野博士の所論の中で、吾々の最も怪訝に堪えないは、政党政治―二大政党の対峙を原則とする、政党政治を以て、立憲政治の、有終の美を済す所以の道ないと言ふ事である」。室伏からすれば、目前に広がる政治の現状を飛び越えて「有終の美を済す」ことができるのか。理想よりも現実を目を向け、それに対する国民の声に耳を傾けるべきなのではないかという根源的な問いがあった。それゆえに、室伏は「二大政党の時代は去った」「代議政治はやがて不可能の時代と成った」と語り、国民を代表するという建前の「代議政治」の虚構性を抉り出し、その相対化を推し進めていくべきことを主張したのである。

さらに室伏は、「代議政治の根本義を疑ふ¹⁴⁶」と題し、『洪水以後』誌上で吉野批判を継続していく。彼は大正四年三月の第十二回総選挙を事例に、増師問題に関して政見発表をした候補者が当選すれば、増師問題については国民の代表者と言うことは許されるが、突如として起きた政治問題については到底国民の代表者とはなれない。「選挙の時に予想可らざる問題に対する、代議士の国民代表と言ふ事は、全く滑稽なるカラクリである」。

加えて、「日本の選挙権者は、人口七千万人に対して、僅に百五十万内外に過ぎぬ」と制限選挙の実態を指摘し、「減税運動や増税計画の有る毎に、日本の代議制度の基礎は、転々動揺、何の安定せる根拠も無い」と批判した。米・仏・独など男子普通選挙を実施している列強諸国でも有権者率は二〇％代に止まり、「即ち有権者が国民の全部を網羅する事能はざるは、国民代表の名に添はざる事甚だしきものにして、代議政治は依然たる少数政治と言はねばなら」ない。しかも有権者の内一〇四割の人々は落選者に投票する結果となる。「代議政治の欠陥は、愈々益々甚だしく成つて来る」と主張し、イギリスにおけるレファレンダム（国民による直接投票）を例に上げ、その可能性を評価したのである。

室伏における代議政治への不信任は、前年六月に茅原が『第三帝国』で発表した「代議政治無用¹⁴⁷」の影響が少なくなかった。茅原は「階級の競争あり、階級の代表ありて、始めて代議政治がある」と主張し、それに反し日本の選挙は「人物本位」の性質を持つ上に、

制限選挙であるため、「代議政治」が本来の役割を果たしていない。とはいえ、国民全体の利害を犠牲にしてまで階級の区別を設け、日本を「階級戦争の場」とするのは「真実の要求」ではなかった。そこには、日本人民が生活難に晒されるなかで、すべての問題を「階級」の存在に帰し、無暗に「闘争」を煽る急進的な社会主義思潮の単純さと虚偽性に対する茅原なりの思想的抵抗が伏在していた。

吉野批判に見られる室伏の言論の特徴は、まさに自身の眼前に現れる状況の中に「時代の精神」を看取し、そこから立論していく姿勢であり、多数の国民の意見が「時代の精神」を結集した「輿論」であるならば、少数政治に過ぎない代議政治は非であり、それが直接的に政治に反映されることを是とし、新たな方法を模索していたのである。

さて、一連の批判を踏まえ、吉野は再び『中央公論』に筆を執り、「余の憲政論の批評を読む」¹⁴⁸を掲げた。なかでも上杉への批判が絶対的天皇親政などは実際あり得ないと痛烈を極めたのに対し、室伏からの批判には冷静沈着に対応している。まず「デモクラシー概念」の位置づけに関しては、「デモクラシーを貴族主義・官僚主義に対する辞と云ふなら未だしも、之を帝国主義・軍国主義に対する語と云ふのは全然誤である」と指摘する。もし室伏が「広き意味に於ける平等思想を概称して」いるならば、それは厳密には「デモクラシー」とは言わない。「講義などに於いては斯かる思想・運動乃至傾向にEnfranchisementとか又はLiberationとか云ふ名目を与へて居る」と訂正し、「而してデモクラシーは実に其が政治的に表はれた言はば一面の現象に過ぎない」ことを確認する。そして「室伏氏が各種の解放運動に共通の基礎を認め、之を以て現代文明の一大特徴なりとなすの見解は頗る卓見と云はねばならぬ」と賛辞を送りつつ、「惜むらくは精密なる思想を表はすための精密なる用語の選択に聊か注意を欠いて居られはしないかと思ふ」と忠告している。

次に「代議政治の運用」に関しては、「氏は現今の代議政治に嫌らず、更に進んで人民の直接行動を認むるまでに至らなければ承知しない論者であつて、太だサンヂカリストの立場に似て居る」と指摘した。サンヂカリズムは「西洋のデモクラシーの意義」を過分に拡張した傾向にある学説で、「凡ての国民の智徳が悉く相当の程度に発達し」て初めて弊害なく行われるもので、実際に適用することはきわめて難しいことであつた。また、室伏が触れた「レフエレンダム論」についても「多少の意味」は認めるが、実際に欧米で国民投票が行われた例は極めて少なく、「重大なる意味」を置くほど実行されていない。

最後に「二大政党の形勢」に関しては、政党は一面では政界の実権を握ることを目的としているので、多数を結集する必要がある。それには「小異を捨てて大同に合せねばならぬ」ので、「始め互に分立して居った各種の政党も、勢に迫られて漸々に合同し又は提携」することになる。結果、「社会の現状を維持せんと欲する傾きのもの」と「現在の制度を破壊して新なる運命を開拓せんと欲するもの」とに分れる。このように自らが「政党関係は自由保守の二派に分るるの自然的傾向を有する」と述べた理由を説明し、ただし「必ずしも政党が文字通りに唯二つの党派に分れる」という意味ではなく、実際の論戦で「両団体に分れて争ふ」という関係が、「多少恒久的に続けばそれで好い」と語つたのである。

吉野による批判をうけ、室伏は積極果敢に反批判を試みていく。¹⁴⁹まずデモクラシーの意義が、「専制政治 (autocracy)」に対する「人民の支配 (people's rule)」にあることを確認した上で、それが単に政治的形式のみを意味していないことを主張する。「吾々の信ずるデモクラシーは、其言葉の中に、数百年の久しきに亘れる、壮烈なる平民的諸運動

の歴史を包含せるもの」で、そうした運動の歴史を知らずに「デモクラシーの真実なる意味」は理解できない。換言すれば、「デモクラシーとは、人間の血を以て画かれたる文字」であり、「頗るドラマチカルの表現」を有している。その価値も誇りも、あるいは恐怖も、「戦闘的或は演劇的なる、デモクラシーの生命が齎して居るもの」にほかならない。したがって、「形式的なる、浅薄なる、世の滔々たる法律学者の輩が、斯る、デモクラシーの内部的生命である所の、其悲壮痛烈なる、演劇的価値を知らないで、徒にデモクラシーの意義を判断し、分類せんとする如き、実は滑稽も甚だしい」と痛撃したのである。

「デモクラシーは実に夫が政治上に現はれたる一面に過ぎない」という吉野の独断は、彼が「デモクラシー」を「憲法政治 (Constitutional government)」と混同して居るからだと指摘する。「凡ての平民的思想や、運動や、傾向」をデモクラシーと称することが、「何故精密なる学問の研究に支障があるか。又何故Emancipation&Liberationを、デモクラシーと言ふことが出来ないか」と問いかね、「西洋に於ても斯る用例のあることを、博士自ら認めて居りながら何故之が悪いと言ふのであらう」と疑問を呈したのである。

さらに「代議政治」が「公議輿論の府」として民意を反映させる役割を果たしていないことを批判すると同時に、政党組織の基礎である社会が複雑化すれば、政党の多党化も進み、吉野が想定しているほど単純に「二大政党」が主導権を争うことにはならないと斥けた。そして、「要するに吉野博士の論は、十八世紀以来、英国の政治家に依りて唱へられたものにして、今日の進歩したる、複雑したる国家生活及社会現象に対しては、何れも陳々腐々の論である。其議論の間には、寸毫も、新らしき学者の研究、見識として見る可きものが無い」と切り捨てたのである。

このように吉野の批判に応えた室伏は、「時代の精神」を表わす「輿論」に目を向け、それを国政上に反映する可能性を模索していく。同年八月に掲げられた「直接民主主義の主張」¹⁵⁰で、室伏は、オレゴン州における直接民主主義運動をレポートしている。同運動はユーレンという弁護士が指導者となり、大工職工・活版業者・雇人足・農夫などを同志者として展開され、同州に「イニシエーチブ及レエフエレムダムの制度を創設」した。これにより、立法議会とは別に、人民自らが法律案を提出すること（イニシアチブ国民発案）が可能となると同時に、憲法の改正や法律の制定に際し、人民自らが投票すること（レファレンダム国民投票）で、最終決定を行う権利を獲得した。室伏は「オレゴンに於けるダイレクト・デモクラシーの運動」の「真価」を認め、「デモクラシーの真実なる意味が、此間に潜在する」と賞賛し、ここに「代議政治に対する一の革命」の道筋を見出していく。そして、「凡てのデモクラシーの運動には、卓越せる、非凡なる責任ある指導 (leadership) が無ければならぬ」と述べ、「政党」に対し「民衆指導」を要請すると同時に、「新聞紙」の指導力にも注目し、「新聞紙と政党とは、実に民衆指導の二大勢力と成った。民意の表現は即ち此間に在る」と、日本における運動の勃興を期待したのである。

「民本主義」をめぐる吉野との論争を通じ、室伏は、政党内閣制にもとづく議会政治を中心に据える吉野流のデモクラシーを「選民的デモクラシー」と批判した。代議政治の虚偽性ゆえに、二大政党に基づく議会政治は「議会の寡頭化」による多数党首領の専制を生み出すだけと斥けられたのである。

それに比べ室伏は、「デモクラシー」を一定の政治制度や形式に止めず、「内部的生命」に目を向けていた。デモクラシーを「一つの精神」¹⁵¹と見なし、「民主主義とは人民の意

志である」「その人民の意思が動かんとするところに、民主主義は存在する」と解釈した。「民主主義は意思であればこそ、不断の生命であり、活動であり、古るき形式を破壊し、新しき形式を押したてて、さうして不断の自由を求めるのである¹⁵²⁾」。だからこそ、デモクラシーをそこに到るまでの「壮烈なる平民的諸運動の歴史」を内包するものと捉え、「人間の血を以て画かれたる文字」と表現したのである。そして、「生命デモクラシー」とも言うべき地点に立ち、国民の声をすくい上げる具体的な方策として、直接民主主義を模索し、レファレンダム（国民投票制）やイニシアチブ（国民発案権）、さらには普通選挙論において女性参政権を説くなどの積極果敢かつ独自の言論を展開していったのである¹⁵³⁾。

大正六年三月、社会主義者の山川均が『新社会』に「沙上に建てられたデモクラシー¹⁵³⁾」を掲げ、「民本主義」論争に参入してきた。理論家として知られる山川は、民本主義論を総じて「独占ブルジョアジーの理論的代弁」とみなし、「階級的視点」に立った批判を繰り広げ、吉野・大山・北吟吉ら「デモクラシーのチャンピオン」たちに次々挑戦状を叩きつけ、その矛先を室伏にも向けてきた。「チャンピオン」の多くが山川からの批判に立場の違いから沈黙を守ったのに対し、室伏は、同年七月、『新小説』に「代議政治より内閣政治へ¹⁵⁴⁾」を、さらに翌年七月、『新日本』に「民主主義の諸象」を掲げ、反批判の筆を執った¹⁵⁵⁾。特に後者は匿名で批判する山川の見解に「アナーキズム」の存在を暴露し、「私はアナーキズムに賛成することはできない」と断言し、その理由を「政治の形式の単純化はあっても、政治の実質の単純化は、アナーキズムの空想においてのみ想像せられることであるが、実質の単純化を空想することはできない」からと述べている。

大正八年三月一日、室伏は「民本主義」論争で培った経験を踏まえ、尾崎士郎とともに雑誌『批評』を創刊する。『批評』は毎月一日発行の月刊誌で、「主筆」室伏、「編輯兼発行兼印刷人」尾崎で発刊した。同誌は、翌年十二月一日まで二二号、さらに大正十一年四月一日に再刊されて同年十一月一日まで八号と、合計して三〇号を数えた。

雑誌『批評』の立場は「デモクラシー」に置かれていた¹⁵⁶⁾。「デモクラシーは政治の領分にだけあるのではなくして、われ等の生活の一切を規定する道徳的本能であります。その「道徳的本能」を体現するものが「批評」であります」と宣言し、そこから「民主主義に反対するあらゆるものに非難を加へます」と力強く主張した。さらに「無政府主義に非難を加へることも勿論です。社会主義については厳正な批評を加へます」と自らの立場を明らかにし、「日本の改造を要求」することを謳ったのである。室伏は、主筆として「デモクラシー」研究を次々発表し、「デモクラシーの新理想」の道筋を示した。

だが、三号に「社会主義と民主主義」を掲げて以降、純粹にデモクラシーを論じるよりも、「デモクラシー」の周辺を批判するとしながら、単なる紹介に止まるような記事が目につく様になっていく。その背景には、国内では米騒動が発生し、海外ではロシア革命が起こり、「社会主義」の思潮が急激に流入してきたことが挙げられる。学生以来、唯一の「魔法瓶¹⁵⁷⁾」と見なしていたデモクラシー思想に代わり、社会主義が入ってくるなかで、室伏は「政治的デモクラシー」から「社会的デモクラシー」へ移行を図ろうとした。

しかし、道のりは決して容易なものではなかった。大きな期待を背負った雑誌創刊であったが、実際は、創刊と同時に新しく流入してくる社会主義思想に呑み込まれないように必死に泳いでいたため、かつて「民本主義」論争において吉野や大山、山川らと議論を繰り広げていた頃の「異彩」を放つほどの勢いや筆力は見られなかった。

大正九年十二月、室伏は改造社の山本実彦社長が賀川豊彦『死線を越えて』の売り上げを活用するために企画した「外遊」に選ばれ、十二月二十八日に横浜出航の伏見丸でシアトルへ向けて出発した。米欧各地を訪れ、滞在すること約一年、そこで西洋文明の没落ともいべき現象を目の当たりして帰国する。大正十一年四月に『批評』を復刊し、共産主義批判を鮮明にするが、マルクス主義が論壇を制覇していく状況に逆行する形となり、号を追うごとに部数を減らし、結局、わずか八号「ソレル記念号」で終刊となるのであった。

以上、室伏高信の政治論を考察してきたが、室伏における代議政治への厳しい批判は、茅原の「体験」に基づく「代議政治無用」論を継承しながら、吉野の「民本主義」に対する根本的疑義となつて顕現していた。とりわけ「デモクラシー」をある一定の政治上の形式や制度に止めず、「一つの精神」と見なし、その「内部的生命」に目を向け、「民主主義とは人民の意志である」と見なす解釈には、日本人の生命力に依つて立ち、「実生活」に根差した「人間本位の憲法政治」を目指した「第三帝国」の創設という課題が、より国民の政治的・社会的意志に重きを置く形で捉えられていた。「民主主義は意思であればこそ、不断の生命であり、活動であり、古るき形式を破壊し、新しき形式を押したてて、さうして不断の自由を求める」。室伏の唱えた「生命デモクラシー」論こそ、茅原の「益進主義」における社会観を継承・発展させた政治論であつたと言えよう。

¹⁾ 茅原華山「模範落選（日本国民の選挙心理と憲政の将来）」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）四頁。

²⁾ 茅原華山「思園消息」『第三帝国』三四（大正四年三月五日）二七頁。

³⁾ 前掲、華山生「思園消息」『第三帝国』三一、二八頁。

⁴⁾ 石田友治「益進会から」『第三帝国』三一（大正四年二月五日）二九頁。

⁵⁾ 石田友治「益進会から」『第三帝国』三二（大正四年二月十五日）二八頁。

⁶⁾ 鈴木正吾「編輯の後に」『第三帝国』三二（大正四年二月十五日）二九頁。

⁷⁾ 前掲、茅原華山「選挙に於ける好意の誘惑」八頁。

⁸⁾ 石田友治「益進会から」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）二九頁。

⁹⁾ 茅原華山「洪水以後の世界」『第三帝国』二九（大正四年一月十五日）三頁。

¹⁰⁾ 茅原華山「悲壮なる精神」『洪水以後』一（大正五年一月一日）一二頁。茅原は「世には

進化論なるものがある、第十九世紀は進化論全盛の時代とも言へる、進化論一たび提唱されて、第十九世紀以前の学説は殆ど顛覆された、然しながら虚心平氣に思索して見よ、第一に宇宙が無限に進化するというのは、固より荒唐無稽の言ではないか」と述べている。

¹¹⁾ 前掲、茅原華山「模範落選（日本国民の選挙心理と憲政の将来）」四頁。

¹²⁾ 茅原華山「日本の政治原理」『第三帝国』三七（大正四年四月十五日）三頁。

¹³⁾ 茅原華山「徳治国か法治国か」『第三帝国』三八（大正四年四月二十五日）三頁。

¹⁴⁾ 前掲、茅原華山「What is C.C.（自他両存の政治）」六頁。

¹⁵⁾ 茅原華山「代議政治無用論」『第三帝国』四二（大正四年六月五日）四頁。

¹⁶⁾ 茅原華山「新貴族政治と青年」『第三帝国』四二（大正四年六月五日）三頁。

¹⁷⁾ 茅原華山「友人の発見」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）三頁。

¹⁸⁾ 野田宇太郎『改稿東京文学散歩』（一九七一年、山と溪谷社）二四五頁には、大正の神田大火の被害が「三崎町から火を發し猿樂町、裏神保町、表神保町を一なめにして、錦町まで、約五千戸を焼きつくした」と記されている。

¹⁹⁾ 『東京古書店組合五十年史』（一九七四年、東京都古書籍商業協同組合）五八頁参照。

²⁰⁾ 茅原廉太郎「選挙費公表に就て」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）二九頁。

²¹⁾ 益進会「圖案募集！益進会の建築へ」『第三帝国』四二（大正四年六月五日）三〇頁。

²²⁾ 石田友治「益進会から」『第三帝国』四二（大正四年六月五日）三〇頁。【写真5】は、大正四年八月九日消印金子洋文宛茅原華山書簡（秋田市立土崎図書館所蔵「金子洋文資料」二〇一）の裏面である。益進会が葉書を作成・使用していた実例である。

²³⁾ 石田友治「益進会から」『第三帝国』四〇（大正四年五月十五日）三〇頁。

²⁴⁾ 石田友治「何故に『第三帝国』は茅原華山氏と絶縁せるか」『第三帝国』号外（大正四年十一月二十九日）五頁。

²⁵⁾ 「大正四年十二月三日付借用書」『後藤新平文書』（岩手県奥州市立後藤新平記念館所蔵）二六―二九。この借用書は、後藤の秘書をしていた菊池忠三郎の宛名で「今回雑誌新刊ニ対スル保証金」と記され、「大正五年九月三十一日迄ニ無相違御返済可致候」とある。

²⁶⁾ 茅原華山「持主事件」『洪水以後』一（大正五年一月一日）九〇―九二頁。前掲、松本悟朗「『第三帝国』滅亡史」九三―九四頁。

²⁷⁾ 「第三帝国の騷擾」『時事新報』（大正四年十一月十四日）三面。

²⁸⁾ 「『第三帝国』動揺」『読売新聞』（大正四年十一月十四日）三面。

²⁹⁾ 松井柏軒「茅原華山先生」、安達元之助「私の観たる華山氏」、中村孤月「茅原華山先生」、大杉栄「茅原華山論」、相馬御風「人心攪乱も亦一事業」、石田友治「一切が利用、一切が手段」、松本悟朗「茅原華山とは恁んな人」『中央公論』（大正四年十二月一日）。

³⁰⁾ 茅原華山「再び筆を執るに臨みて」『洪水以後』一（大正五年一月一日）一一―一二頁。

³¹⁾ 一元社同人の広津は「丁度その頃が第一次欧州大戦の最中だったので、欧州大戦をノアの洪水に譬え、その大戦が終った後の新しい時代に魁けるという意味で、「洪水以後」と銘打った」と記している（前掲、広津和郎『年月のあしおと』二〇七―二〇八頁）。

³²⁾ 一元社同人「雑誌『洪水以後』発刊に臨みて」『洪水以後』一（大正五年一月一日）一〇頁。

³³⁾ さらに一三三（同年五月二十一日）で同じ神田区駿河台鈴木町十二番地に移転しているが、これは茅原の実弟茂が経営していた『東京評論』の発行所であった。

³⁴⁾ 茅原華山「日本のミリタリズム」『洪水以後』二（大正五年一月十一日）八―一三頁。

³⁵⁾ 茅原華山「デモクラシイを使ひ分けたる吉野博士」『洪水以後』四（大正五年二月一日）一一―一二頁。

³⁶⁾ 浮山初太郎（神奈川）「真を慕ふの心」『洪水以後』二（大正五年一月十一日）六一頁。

³⁷⁾ 大槻潤一（兵庫）「僕等の求むる新宗教」『洪水以後』三（大正五年一月廿一日）三二頁。

³⁸⁾ 規矩田独秀「小学校教育改善」『洪水以後』四（大正五年二月一日）二八頁。規矩田の居住地＝福岡は、八号（同年三月二十一日、五七頁）の同「貴婦人耳を藉せ」で判明した。

³⁹⁾ 茅原廉太郎「再び西遊せんとするに方って」『日本評論』一六（大正五年八月一日）二頁。

⁴⁰⁾ 石田友治「『第三帝国』から『新理想主義』へ」『新理想主義』五八（大正五年一月五

日) 八〇九頁。

⁴¹⁾ 北原龍雄「普通選挙運動の同志に―第三十七議会に於ける請願運動と今後の我等」『新理想主義』六四(大正五年三月二十日) 六〇七頁。

⁴²⁾ 船山信一「街と野との哲学者野村限畔(および中沢臨川)におけるベルクソンの理解」『船山信一著作集』七卷、一九九九年、こぶし書房)、三枝博音「プラグマチズム批判」『理想』一九三(一九四九年五月、理想社) 一〇一五頁参照。

⁴³⁾ 前掲、宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」。

⁴⁴⁾ 前掲、小田切秀雄「日本における自我意識の特質と諸形態」では、限畔の「自我論」が「教養」によって肥大した自我意識に自足する大正期の「自我論」の典型として取り上げられ、「日本の近代的自我が戦ってきた「現実」と関わりのない場所でもつばら“教養豊かな” 思弁を羅列しているにすぎない」と評されている。

⁴⁵⁾ 前掲、鈴木貞美編『大正生命主義と現代』、同『生命』で読む日本近代―大正生命主義の誕生と展開』(一九九六年、日本放送教会出版) 参照。

⁴⁶⁾ 丸山眞男が主著『現代政治の思想と行動』(一九六四年、未来社)の「第一部 現代日本政治の精神状況」の「二 日本ファシズムの思想と運動」において、ファシズムを「典型的な中間層の運動」と位置づけ、とくに日本では「たとえば、小工場主、町工場の親方、土建請負業者、小売商店の店主、大工棟梁、小地主、乃至自作農上層、学校教員、殊に小学校・青年学校の教員、村役場の吏員・役員、その他一般の下級官吏、僧侶、神官というような社会層」がおもな社会的基盤となっていることを指摘し、彼らを「亜インテリ階級」と呼んでいることはよく知られている。

⁴⁷⁾ 野村限畔「潜在帝国を思ふ」『第三帝国』一一(大正三年五月十六日) 三頁。

⁴⁸⁾ 同誌を去った一因として限畔の気質を指摘しておく必要がある。一一号の編集後記で、彼は一〇号掲載の生田長江「凡て吾が敵」について「同氏から抗議を申込まれた」と報告している。記事を「氏の断はられたにも拘らず掲載した」上に、内容も「甚だしい聞き違ひ」に満ちていたため、本人から訂正の要求が届いた。対して彼は「全く僕の過失である」と認めながらも、「僕も何とかして談話筆記としての記者をやめたいと思ふ。そして自分の意見ばかりを大胆に書いて見たい」と、開き直りに近い謝罪の弁を述べている。

⁴⁹⁾ 野村限畔「病院より」『第三帝国』一五(大正三年七月十六日) 一七頁。

⁵⁰⁾ 野村限畔「序感」(『自我の研究』、大正四年、警醒社) 二〇三頁。

⁵¹⁾ 野村限畔「純粹自己意欲」(同右、『自我の研究』) 二二六〇二七頁。

⁵²⁾ 野村限畔「絶対へ」(『自我を超えて』、大正六年、京文社) 九八頁。初出は『六合雑誌』四三〇(大正五年十一月)。

⁵³⁾ 野村限畔「ベルグソン哲学の迷妄」(同右、『自我を超えて』) 一四八〇一五〇頁。初出は『六合雑誌』四二〇(大正五年一月)。

⁵⁴⁾ 野村限畔『自我批判の哲学』(大正八年、大同館書店)。

⁵⁵⁾ 野村限畔「左右田博士の「文化主義」を評す」(『新文化への道』、大正九年、日本評論社) 一〇一頁。初出は『中央公論』三六九(大正八年五月一日)。

⁵⁶⁾ 中村隆英『日本経済―その成長と構造』(一九七八年、東京大学出版会)、橋本寿朗・大杉由香著『近代日本経済史』(二〇〇〇年、岩波書店)、望月和彦『大正デモクラシーの政治経済学』(二〇〇七年、芦書房) 参照。

⁵⁷⁾ 左右田喜一郎『文化主義』の論理」(黎明会(代表 吉野作造)編『復刻版 黎明講演集』一卷(一九八九年、龍溪書房)、および左右田博士記念会編『左右田喜一郎全集』四卷(昭和五年六月、岩波書店)などを参照した。

⁵⁸⁾ 桑本厳翼「文化主義」(東三市五郡教育会連合第九回夏季講習会『講習会筆記録』、大正九年十一月)。

⁵⁹⁾ 筒井清忠『日本型「教養」の運命―歴史社会学的考察―』(一九九五年、岩波書店)参照。

⁶⁰⁾ 前掲、野村隈畔「左右田博士の「文化主義」を評す」一〇八頁。

⁶¹⁾ 野村隈畔「文化主義の改造」(前掲、『新文化への道』一七八頁)。

⁶²⁾ 野村隈畔「文化主義に対する最後の疑問」(『文化主義の研究』、大正十年、大同館書店)九二〜一二五頁。初出は『雄弁』十一ノ四(大正九年四月)。

⁶³⁾ 野村隈畔「現代の神としての自由」(同右、『文化主義の研究』二二〇〜二二二頁)。

⁶⁴⁾ 前掲、野村隈畔『自我批判の哲学』一九七頁。

⁶⁵⁾ 厨川白村『近代の恋愛観』(大正十一年、改造社)四〇〜四一頁。

⁶⁶⁾ 野村隈畔「世界的文化競争を背景として観たる労働問題」(前掲、『新文化への道』二五九頁)。

⁶⁷⁾ 前掲、野村隈畔「自由人の生活」(前掲、『自由を求めて』二六頁)。

⁶⁸⁾ 同右、「自由人の生活」二八頁。

⁶⁹⁾ 野村隈畔「権力の国より自由の国へ」『内外時報』(大正九年二月)。

⁷⁰⁾ 野村隈畔「孤独の行者」『六合雑誌』四四八(大正七年五月一日)六七〜七三頁。

⁷¹⁾ 三上於菟吉『明治大正実話全集』二卷「悲恋情死実話」(昭和四年、平凡社)。白樺派の有島武郎や無政府主義者の大杉栄らとの比較・検討から、思想家の「死」のあり方がその評価にもたらす影響を考察していく必要がある。

⁷²⁾ 茅原華山「野村隈畔氏」『内観』二二(大正十年十二月一日)一一頁。

⁷³⁾ 岡野他家夫「孤独の行者隈畔の思想的自伝の書」(『日本近代名著解題』、一九六二年、原書房)二二二〜二三三頁。

⁷⁴⁾ 昭和七年七月、土田杏村は西田幾多郎らによる宗教座談会の新聞記事を評するなかで、次のように述べている(土田杏村「西田哲学の時代的意義」(『土田杏村全集』一五卷、昭和十一年、第一書房)二三五頁)。

ここに私などの希望することは先生の若い門弟の中から先生の哲学の一般的解説をなすものや、この哲学を現代社会の生きた問題に結びつけて行くものやの輩出することである。私はここで計らずもかつて同様の希望を語ってゐた天才的哲学者、故野村隈畔君を想起し感慨の無量なるものがある。

京都帝大で西田に師事しながら、個人雑誌『文化』を刊行、「文化主義」を標榜し在野の思想家となった杏村は、師の哲学を「現代の生活に切実に触れるもの」と位置づけ、座談会で「核心」が語られている点を評価した。杏村に関しては、山口和宏『土田杏村の近代―文化主義の見果てぬ夢―』(二〇〇四年、ぺりかん社)を参照した。

⁷⁵⁾ この点については、前掲、鹿野政直『大正デモクラシーの底流―土俗的精神への回帰』が先駆的な作品で、示唆に富んでいる。

⁷⁶⁾ 金子洋文「故郷を出づるの記(二)」(『はたらく日記』、昭和十七年、河北書房)七五頁。

⁷⁷⁾ 前掲、竹内洋『立身出世主義』、および前掲、E・H・キンモンス『立身出世の社会史―

サムライからサラリーマンへ』を参照した。

⁷⁸⁾ 金子洋文の思想形成期に関しては、熊木哲「金子洋文の思想形成について―『電宮舎時代』から『日本評論時代』まで―（附）金子洋文著作目録」『中央大学大学院論究』（一九七八年三月）、および茅原健「若き日の金子洋文―茅原華山との邂逅をめぐって―」『秋田文芸史研究』復刻一号（一九八三年八月）、北条常久『種蒔く人』研究―秋田の同人を中心として―（一九九二年、桜楓社）、須田久美「金子洋文と茅原華山および、武者小路実篤に関する一考察」『日本文学研究』三三（一九九四年一月、大東文化大学日本文学会）七五―八三頁を参照した。

⁷⁹⁾ 大正元年十一月十四日付金子洋文宛今野賢三書簡（秋田市立土崎図書館所蔵「金子洋文資料」八）。以下、洋文に関する書簡はすべて土崎図書館所蔵のものである。

⁸⁰⁾ 金子洋文「悲哀と真実の生活（上）」『秋田魁新報』（大正四年三月十二日）一面。

⁸¹⁾ 佐々木竹治「金子洋文先生のこと」（『港魂―土小百年史―』一九七五年、秋田市立土崎小学校創立百周年記念協賛会）。

⁸²⁾ 金子洋文（土崎）「秋田県土崎港より」『第三帝国』一七（大正三年八月十六日）二三頁。

土崎知善は『土崎新報』記者を務めた人物で、大正九年七月に『土崎郷土史要』と題する著書を土崎読書会から刊行している。石田が『秋田魁』に在籍していた頃に面識を持ち、その関係から『第三帝国』を応援しようとしたと考えられる。

⁸³⁾ 大正三年八月六日付金子洋文宛石田友治書簡（金子洋文資料）九八）。

⁸⁴⁾ 『第三帝国』一四（大正三年七月一日）「のど書き部分」。裏に「大正三年七月一日発行『第三帝国』第拾四号付録」とあるので、これが「暑中見舞方々『第三帝国』発展の爲め」「本誌愛読者に限り」一人に付き二十枚まで無代贈呈された『第三帝国』絵葉書を使用したものであったことがわかる。

⁸⁵⁾ 金子洋文（秋田）「此醜体を見よ」『第三帝国』三三（大正四年二月二十五日）二七頁。

⁸⁶⁾ 茅原華山「生活即政治」『第三帝国論』大正二年、南北社）二三五―二三六頁。

⁸⁷⁾ 金子洋文「偶像結婚」『秋田魁新報』（大正四年六月二日）一面。

⁸⁸⁾ 金子洋文「土崎より」『第三帝国』四七（大正四年七月二十五日）三〇頁。

⁸⁹⁾ 前掲、「東北講演旅行（上）」二四頁。

⁹⁰⁾ 金子洋文「越後谷川弓氏に与へて部分的徹底を論ず（上）」『秋田毎日新聞』（大正四年八月八日）一面。

⁹¹⁾ 前掲、大正四年八月九日付金子洋文宛茅原華山書簡。

⁹²⁾ 大正四年八月二十三日付金子洋文宛茅原華山書簡（「金子洋文資料」二〇五）。

⁹³⁾ 大正四年十月二十九日付金子洋文宛茅原廉太郎書簡（「金子洋文資料」二一一）。

⁹⁴⁾ 大正四年十月一日消印金子洋文宛武者小路実篤書簡（「金子洋文資料」二〇八）。

⁹⁵⁾ 武者小路実篤の我孫子移転期の前後に関しては、主に大津山国夫『武者小路実篤論―「新しき村」まで―』（一九七四年、東京大学出版会）、本多秋五「解説…武者小路実篤の「自己」形成期」（『武者小路実篤全集』一卷（一九八七年、小学館）、および紅野敏郎「解説」（『武者小路実篤全集』三巻（一九八八年、小学館））を参照した。

⁹⁶⁾ 金子洋文「欧州出兵断じて不可」『第三帝国』二九（大正四年一月十五日）二六頁。

⁹⁷⁾ 茅原華山「火の洗礼を受けよ」『第三帝国』一九（大正三年九月十六日）一頁。

⁹⁸⁾ 金子洋文「雪積る夜（六）」『秋田毎日新聞』（大正五年二月二十七日）一面。

金子洋文「雪積る夜(七)」『秋田毎日新聞』(大正五年二月二十八日)一面。
前掲、「人物評論(六十六) 茅原華山論」『中央公論』。

金子洋文「雪積る夜(八)」『秋田毎日新聞』(大正五年二月二十九日)一面。

金子洋文「雪積る夜(五)」『秋田毎日新聞』(大正五年二月二十六日)一面。

金子洋文「教育革命論(上)——神秘的自然教育論——」『洪水以後』一四(大正五年六月一日)一二頁。

金子洋文「茅原先生の許に。」『日本評論』一七(大正五年九月一日)九三頁。

金子洋文「華山と無車(二)」『秋田毎日新聞』(大正五年五月一日)一面。同紙の残存状況(同年四月分の欠号が多い)により、全四回の内、残念ながら初回分の記事は確認することができないが、二、四回の記事から内容を十分に窺い知ることができる。

金子洋文「華山と無車(三)」『秋田毎日新聞』(大正五年五月二日)一面。

金子洋文「華山と無車(四)」『秋田毎日新聞』(大正五年五月三日)一面。

大正五年十月五日消印金子洋文宛武者小路実篤書簡(「金子洋文資料」一五三)。これに際し、実篤からも「御手紙拝見、御上京を祝します、よかつたら九日にお目にかゝりたい気がしてゐます、お目にかゝった上で」と上京祝いが届いていた。

金子洋文「教育評論」『日本評論』一八(大正五年十月一日)一二〇頁。

茅原華山の外遊は、一度目が明治三十八年九月から同四十三年十月までの約五年半の滞在であつたのに対し、二度目は、大正五年八月から同七年六月までの約一年十ヶ月、米国を中心としたものであつた。帰国後、第一次大戦後の米国社会を実見してきた茅原は『国民的悲劇の発生』(大正七年十一月、祖国書院)という著書を刊行し、改めて「民主主義」の必要性を説いた。

大正五年十二月三十一日付金子洋文宛武者小路実篤書簡(「金子洋文資料」三一三)には「御手紙見ました。逢つて話したく思います。しかし私の処は二月からでないと室の都合がよくありません。今たてましをしてゐますから、それが出来ればいゝかと思つてゐます。しかし君の空想がよすぎると、イルージョンがこわれる時のことが頭に浮びます。その時の用心をちゃんとしておくことを望みます。くわしくはお目にかゝつて話したく思います。来月の五六日頃によかつたら一度来て下さい」とあり、洋文の寄寓が五日以降であつたことが推測される。

生田長江「自然主義前派の跳梁」『新小説』(大正五年十一月一日)一三〇二頁。

こうした批判に対し、実篤自身も敢然と反論を展開していた。武者小路実篤「生田長江氏に戦を宣せられて一寸(上・中・下)」『時事新報』(大正五年十一月五、七、九日)。

金子洋文「生田長江氏に与ふ」『日本評論』二一(大正六年一月一日)一八二、七頁。

金子洋文「文学と教育の境を越えて」『日本評論』二四(大正六年四月一日)一七二頁。

金子洋文「その種は花と開いた 我孫子の生活」『金子洋文作品集』一卷、一九七六年、筑摩書房)三八〇頁。初出は『社会党』(一九六一年十月)。

前掲、金子洋文「故郷を出づるの記(一)」(『はたらく日記』)七五頁。また、金子洋文『生ける武者小路実篤』(大正十一年十月、種蒔き社)五頁には、「私は遂に我孫子の家を去つた、美しき青春の夢と、甘い陶酔をのこして手賀沼の家を去つた。私は実に悲しかった。而し、今自分はこの必然の離別に大きな感動を捧げてゐるものだ、私は遂に私に帰つた、私は新しき出発点に立つたのだ、氏と私の目指す目的は同じだ、愛と自由と労働の世

界（あゝ第三インタアナショナル）、而かも二人は別々の途を進む人類の戦士だ」と、実篤からの独立宣言が記されている。

¹¹⁸⁾ 正岡芸陽については、前掲、荻野富士夫『初期社会主義思想論』第三章を参照した。

¹¹⁹⁾ 洋文「女工の群」『種蒔く人』土崎版二号（大正十年三月二十五日）五頁。ようぶん「若き農夫よ」『種蒔く人』土崎版二号、一一頁。

¹²⁰⁾ 大正六年七月十二日付金子洋文宛今野賢三書簡（「金子洋文資料」四一一）。また、金子洋文「六号雑感」『成長』（大正六年九月）には、「小暇を得て自分は七月の十九日に国へ帰った」という記述がある。

¹²¹⁾ 大正六年七月二十九日付金子洋文宛武者小路実篤書簡（「金子洋文資料」四一六）。

¹²²⁾ 洋文「チェーホフの『農人』から（一）」『種蒔く人』土崎版一号（大正十年二月二十五日）一七〇八頁。

¹²³⁾ 前掲、金子洋文「その種は花と開いた 第一次種蒔く人（土崎版）」三八二頁。「金子洋文氏に聞く」『悲劇喜劇』（一九七八年七月、早川書房）二二〇四三頁。

¹²⁴⁾ 金子洋文「地獄」『解放』（大正十二年三月）。

¹²⁵⁾ この点に関しては、北条常久「金子洋文「地獄」自筆原稿をめぐって」『日本近代文学』二八（一九八一年九月）一七一〇一八二頁が詳しい。

¹²⁶⁾ 前掲、金子洋文「その種は花と開いた 代用教員」三七四頁。戦後、社会党代議士となり、サンフランシスコ講和会議に臨んだ洋文は、自らの青年期を振り返り、情熱を傾けた対象として『第三帝国』および茅原華山が存在していた事実を次のように記している。

その過程における情操的形成を検討すると、知的な叙事的なものよりも、素朴、純情、空想混合の感傷主義と、天才を夢みるやや傲岸な英雄主義が顕著であり、二つのものの相互作用も手伝って、前者は文学にあこがれて武者小路実篤一辺倒に成長し、後者は政治と文学の革新的闘争に心を燃やして、一時ブームをおこした雑誌「第三帝国」に熱中し、主催者の茅原華山に傾倒するありさまで、文学青年と政治青年の同居の時代でもあった。

¹²⁷⁾ 室伏高信『小説葦』（昭和十六年、育生社）八二頁。

¹²⁸⁾ 山領健二「室伏高信論―ジャーナリストの転向」（『転向の時代と知識人』、一九七八年、三二書房）一六七〇一八七頁。初出は『思想の科学』（一九六二年四月）。飯田泰三「解題」（『復刻版』批評）三（一九九二年、龍溪書舎）一〇一一頁。中見眞理「室伏高信と柳宗悦」『清泉女子大学紀要』四八（二〇〇〇年十二月）五七〇七四頁。

¹²⁹⁾ 石田あゆ「へ土に還る」文明批評家、室伏高信のメディア論『マス・コミュニケーション研究』五六（二〇〇〇年一月）七八〇九四頁。住友陽文「国民主権のひとつの起源―憲法研究会の室伏高信に即して―」（『日本史の方法』四（二〇〇六年六月）二〇一九頁）。

石田氏は、室伏を「へ土に還る」文明批評家」と位置づけ、雑誌・ラジオ・テレビというメディアの活用により「大衆」に思想を伝え、「文化的大衆民主主義を追求していた」人物と評している。一方、住友氏は、室伏を戦後における憲法研究会の「影の画策者」として、日本国憲法の根本精神である「国民主権」の一つの起源を形成したと評価している。¹³⁰⁾ 室伏の評伝的研究としては、しまねきよし「室伏高信論」『季刊世界経済』六四（一九七八年一月）七四〇九〇頁、および同「評伝室伏高信論（一〇四）」『季刊世界経済』六八〇七一（一九七九年一〇月）を挙げることができる。

- 『湯河原町史』二卷近現代資料編（一九八五年、湯河原町）を参照した。
- 室伏高信『学生論』（明治四十一年、学生論出版部）。同書は自費出版で刊行したためか、誤字・脱字が多く、翌年、題名の頭に「現代」を加え、二版が刊行されている。室伏自身、「二版に題す」に「本書の一版は其不体裁に、加ふるに活字の誤植頗る多く、為に或批評家より「生硬」の文字を冠せられたりと信ず」と記している。
- 同右、『学生論』第一論、一〇二頁。
- 同右、『学生論』第一論、五〇六頁。
- 室伏高信『戦争私書』（一九九〇年、中央公論社）一八頁。初版は一九六六年、全貌社。
- 前掲、室伏高信『小説葦』一一八頁。
- 吉野作造「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」『中央公論』（大正五年一月）。
- 太田雅夫編『資料大正デモクラシー論争史』全二卷（一九七一年、新泉社）参照。
- 小倉徂峰「吉野博士の憲政論を読む」『洪水以後』二（大正五年一月十一日）一九頁。
- 前掲、茅原華山「デモクラシーを使ひ分けたる吉野博士」、一一〇一二頁。
- 植原悦二郎「吉野博士の憲法論を評す」『国家及国家学』（大正五年三月一日）三頁。
- 植原悦二郎「上杉博士の憲法論を評す」『国家及国家学』（大正五年四月一日）五頁。
- 室伏高信「代議政治を論じて吉野博士に質す」『雄弁』（大正五年三月一日）七〇頁。
- 前掲、室伏高信『戦争私書』で、「わたしはデモクラシーとまでいわれた。わたしの魔法瓶はこれ一本だった」と語り、「それまでデモクラシー一本で、そういう本は片っぱしから読んでいて、ひとかどの専門家になつてはいたが、社会主義の本は一冊も読んでいなかった。だから、社会主義思想がデモクラシー思想にとつてかわるようになると、トビに油揚げをさらわれたという感じで、しばらくぼかんとしていた」と記している（一七〇一九頁）。
- 前掲、室伏高信「代議政治を論じて吉野博士に質す」七二頁。
- 室伏高信（東京朝日新聞記者）「代議政治の根本義を疑ふ」『洪水以後』八（大正五年三月二日）二二二二五頁。
- 前掲、茅原華山「代議政治無用」四〇五頁。
- 吉野作造「予の憲政論の批評を読む」『中央公論』（大正五年四月）一〇七頁。
- 室伏高信「民主主義と議会及び政党」『新小説』（大正五年五月）三五頁。
- 室伏高信「直接民主主義の主張」『雄弁』（大正五年八月）五八頁。
- 室伏高信『民本主義について』（大正六年）四四頁。
- 同右、『民本主義について』六七頁。
- 山川均「沙上に建てられたデモクラシー」『新社会』（大正六年三月）六頁。
- 室伏高信「代議政治より内閣政治へ」『新小説』（大正六年七月）七七七八頁。
- 室伏高信「民主主義の諸象」『新日本』（大正七年七月）一一頁。
- K生「編輯局より」『批評』一（大正八年三月一日）一頁。
- 前掲、室伏高信『戦争私書』一七頁。

終章 雑誌『第三帝国』の思想像

第一節 第一期『第三帝国』の終幕

大正四年（一九一五）の暮れ、未曾有の世界戦争により西欧諸国の産業は停滞し、それに代わって日本産業がアジア市場のみならずヨーロッパ市場にまで躍進し、「大戦景気」が到来しようとしていた¹⁾。一方、ドイツに宣戦布告し、中国におけるドイツ権益を占領した日本は、袁世凱政権に二十一か条の要求を押し付け、大陸への進出を逞しくしていた。今まさに、帝国日本の進むべき新しい方向性が問われていたのである。

益進会においては、人間存在そのものに依って立ち、日本人の「実生活」に根差した「君民同治の新帝国」の創設を唱え、「運動」と「論争」の二面展開により地方青年読者を結集し、彼らに『第三帝国』の誌面を提供することで、雑誌メディアを媒介とした思想運動を展開していた。だが、道半ばにして、茅原と石田の目指す方向性に相違が生じ、読者の期待を他所に「分裂騒ぎ」を起こしてしまった。そこから茅原派が「一元社」を結成し『洪水以後』を刊行したのに対し、石田派が「第三帝国社」を結成し『新理想主義』を刊行し、もはや両派ともに「益進主義」を標榜しなくなったことを考え合わせると、それは第一期『第三帝国』の終幕を意味していたと見なすのが妥当であろう。

本書は、序章で掲げた三つの課題に即して、雑誌『第三帝国』における思想運動の全体像を歴史的に解明することを目指したものであるが、最後に、本節で大正四年をもって第一期『第三帝国』が終幕したことの意味を問い、さらに次節で本研究の成果と今後の展望を示すことを通し、改めてその思想像を定位しておきたい。

大正四年五月五日発行の三九号で「第三帝国活版所」の開設を記念して恵比寿麦酒会社構内の大庭園で「本誌読者大会」が開催される旨が益進会の名で発表された²⁾。内容は、名士による講演と読者たちによる「会員五分演説」とで構成されており、前半の講演の部には茅原や石田ら益進会同人のほか、福来友吉、長嶋隆二、青柳有美らが名を連ねていた。この読者大会に、読者を代表して参加した真崎政治なる青年は、当時、同誌の熱烈な愛読者であった金子洋文宛の手紙で、その感想を次のように記している³⁾。

此頃は甚だ失敬して居ります、今日雨にぬれて例の第三帝国記念大会に出て見た、所謂名士の多いのに驚いた、曰く長嶋何んとか代議士、前何んとか床次某、何んとか博士の福来、何んとか中将、オマケニ例の有美、こんな連中が時間の大部分を下らない各論にとられた、而して我々の言ふべき時はもう雨の夜、これでも第三帝国か人を馬鹿にしてら：僕は生活の形式に就て五分間高調して見た、最後に同人に対して嫌味も云ってやった、僕は此頃の彼等の行動に嫌らない。三十八号を見たら貸して呉れ。

神田区表神保町一丁目に新社屋を構え、活版所を開設してポイント活字で刷られた四〇号以降の『第三帝国』は明らかに見やすい体裁となった。しかし、それに反比例するかのように、これまで投書欄「戦闘曲」をはじめ誌面全体に所狭しと掲げられていた青年読者の声が妙に整って見え、熱が鎮まったかのような印象を受ける。右の真崎青年が「読者大会」に対して抱いた不満は、何より大会名に反し、会の主役が読者たちではなく、名士たちによる「下らない各論」に時間を奪われたことであつた。「これでも第三帝国か人を馬

鹿にしてら：」という言葉には、「第三帝国」のあるべき姿に期待して出席したにもかかわらず、それを裏切られたがゆえの憤りが込められていた。翌四〇号の「記念読者大会！」なる記事には、大会の様子が報じられ、真崎政治の名前を「会員五分演説」の中に見出すことができる。だが、彼が「生活の形式」について熱く述べている部分は報じられていないものの、最後に同人に対して「云ってやった」という「嫌味」については扱われていなかった。第三章で詳述した同年七月の東北講演旅行が秋田県内の支部員の声に応える形で実施された背景には、この「失敗」に学び、読者たちの積極的な参加によって企画を成功に導こうとする益進会同人の思いが込められていた。

大正四年十一月六日、大正天皇の大嘗祭に際し、益進会は五七号を「御即位大典奉祝号」ならびに「本誌創刊二周年記念」と銘打ち、刊行した。三二頁には「御大典奉祝 第三帝国自由大園遊会」⁴⁾なる社告が掲載され、同月十六日（火曜日）の御前九時より東京府下代々八幡幡ヶ谷大山公園にて園遊会が計画され、新緑溢れる公園の写真が掲載された。

同年五月、「第三帝国活版所」の開設を記念して催された「読者大会」を自ら「失敗」だったと振り返り、その理由を「最も進んだ思想を有する諸君に対して月並な名士の名論卓説を飽くばかり御馳走した」ことに見出している。にもかかわらず、その「償ひ」の機会として設けられた園遊会には、読者たちによる「会員五分演説」はおろか、「名士」らによる講演すら予定されていなかった。「御即位大典」を祝う会とはいえ、企画されていたのは「素人相撲」「豚追ひ」「兎狩り」「自由芋掘り」「宝探し」という娯楽ばかりであった。辛うじて「生活問題」と題し、「ミルク自由飲み場」「豚午餐会」「兎晚餐会」の後、「会員のテーブルスピーチを催す」と記されているものの、激しい「論争」の展開と積極的な実践「運動」によって「生活即政治」の実現をめざし、時に発禁処分を受けるほどに挑戦的だった、かつての『第三帝国』の姿はなかった。読者からの援助に深く感謝しながらも、益進会同人は青年たちの期待の所在を見失っているかのようなようであった。益進会の分裂により同誌が一時休刊となるのは、そのわずか二週間後のことであった。

『こゝろよく我に働く仕事あれ、それを仕遂げて死なむとぞ思ふ』平民詩人の此の一首こそ、我等が三年前の本月本日、『第三帝国』創刊第一号を出すに当って、私が創刊の辞の起筆に置いた歌であったのだ、噫々大正二年十月十日は、実に、我等志を同ふするともがら、心を合せ、力を協せて、新理想主義、民本主義の旗上げをした日である。而して櫛風沐雨三星霜、旧同人は既に離散して、私は単独『第三帝国』の孤塁を守つてゐる、此の記念号を出すに当って創刊以来の同人にして稿を寄せられたるは僅かに野村隈畔兄一人、私は熟々人生遭逢の果なきを嘆じ、貧に処しては益々人情反覆の常なきを知つたのである⁵⁾。

大正五年十月十五日、石田は『第三帝国』創刊三周年の思いを右のように語っている。大正二年十月十日を同志とともに「新理想主義、民本主義の旗上げをした日」と回想する彼の周囲には、すでに創立メンバーの姿はなかった。辛うじて一五号をもつて入院治療のため退会した野村隈畔が「自我思想の根本革命―自己否定より自己超越へ」と題する論説を掲げるのみであった。石田自ら「単独『第三帝国』の孤塁を守つてゐる」と述べている通り、復活『第三帝国』には雑誌の経営に同情し協力してくれる「先覚の士」はいても、

同志はいなかった。では、そもそも復活『第三帝国』はいかなる志で再出発したのだろうか。四ヶ月ほど時間を戻し、『新理想主義』から旧誌名に復帰した七〇号を見てみよう。

「先づ第三帝国は、根底に於て思想の国である、其の思想が生んだ文化の国である⁶⁾。ここで石田は、「人生上に於ける霊肉一致の境地、神人合一の境地」をすべての人に備えられたものであると述べ、その実現に努めなければいけない一点で、人間は、平等かつ貴重な存在であると主張し、「人尊主義」「平民主義」を標榜している。「木工の子」より「真に偉大なる神人合一の大人格を出したではないか」とイエス・キリストを引き合いに出しながら、人間の生存する権利、すなわち「人權」に依拠し、「そこに自由の要求が起る、是れ吾人の君民同治を唱へ、民本主義を唱道し、平民運動を高調する所以」であると続ける。そこには「霊肉一致の新帝国」という従来の思想像に、「神人合一」というキリスト教的な解釈が加味された、「新しき平民運動」が高らかに宣言されていたのである⁷⁾。

一方、まったく同時期に、茅原派も期せずして再出発を切ろうとしていた。未曾有の世界戦争の勃発を前に、従来の文明観を根本的に見直す必要を痛感し、それを旧約聖書に記されたノアの大洪水になぞらえ、『洪水以後』を創刊した茅原派であったが、益進会分裂の際には、茅原を支持した松本悟朗らとの間に内紛が生じ、同誌は半年、全一四号でその役割を終え、茅原は実弟の茅原茂の『東京評論』と合流し、誌名を『日本評論』と改め、号数は『洪水以後』を継続して一五号より始めた。

茅原は「今一度国家、政府を主義として戦ふのである。」と宣言し、そのためには「私は孤独に還り、自己に還へり、先づ自己の革命を成就して、更に一切の環境を粉碎し、第二十世紀的な国家と政府とを樹立せんとする」との決意を表明している。ここに見られるのは、ドイツの国家社会主義を参照しながら、あくまでも「国家」の存在に拘り、その再生を企図することで、階級闘争を避け、社会主義・無政府主義を防ぐとする、国家社会主義的色彩がきわめて強い茅原の主張であった。すなわち、人民の自立化と国家の生活化の双方向的な批判のもとで展開されてきた「第三帝国」の思想は、より後者に力点を置く形で提出されたのであった。だが、茅原は、この時点で目指すべき方向性を確実にイメージできていたわけではなかった。この宣言からわずか一ヶ月後、彼は新しい方向性を己の目で確かめるために、二度目の欧米外遊に出発することとなるのであった⁸⁾。

ここで茅原は、日露戦後において五年間の長きに及んだ一度目の欧米外遊と比較し、「新しい日本」「第二十世紀の日本」を発見するための、「正しく主客が転倒」した外遊であると位置づけている。欧州戦争が「人類と文明とを一大熔鉱炉に投じて、固定した第十九世紀以前の世界が熔解した」と指摘し、戦争によって生じた「流動体的世界がいかに更に固定すべきか」を見極めることを最優先の課題に置き、「若し私が世界再遊の結果、日本の友人に齎すべき土産があるとすれば、唯此だけである」と述べている。言い換えれば、「洪水以後」の世界を己の目で確かめ、そこから「将来の日本」が進むべき道筋、まさに旧約聖書においてノアが曳いたことを確かめるために野に放った一羽の鳩のごとく、クローバーの新しい一葉を見つけ出したいとの思いであった。

以上のように、大正四年末をもって、設立以来、益進会の核を形成していた茅原派と石田の分派裂が明らかになったとき、大正政変直後の時代状況のもと、時代の青年たちに政治的・社会的覚醒を促し、とくに地方青年読者との思想的連関において独自の境地を切り拓いてきた第一期『第三帝国』はその使命を終えたと言わざるを得ない。とはいえ、当該

期において益進会が思想集団として活動し、青年読者たちに与えた影響は決して小さいものではなかった。政治的覚醒を遂げつつあった青年層、とくに地方青年たちは、雑誌メディアを媒介して、自らの存在や生活を省み、実践運動に加わることで、政治家・ジャーナリスト・哲学者・社会運動家・文学者・牧師・教員など、それぞれの道を切り拓き、いわば「壮年」に成長していったのである。

第二節 本論文の成果と今後の展望

本研究は、大正二年（一九一三）十月十日に創刊された雑誌『第三帝国』を拠点に、日本人の「実生活」に根差した立憲政治の実現、「君民同治の新帝国」の創設をめざした益進会同人による思想運動について検討を加えたものである。特に日露戦後社会に発生していた「人生問題」「生活問題」「社会問題」という時代的課題にいかに対応したかということを評価軸に据えつつ、益進会が時代の中で担った思想的役割を明らかにしていくために、茅原華山を中心に、彼のもとに結集した石田友治、野村隈畔、松本悟朗、鈴木正吾ら益進会同人の言動を集団の思想史として把握し、その存在形態を考察するとともに、同人と地方青年読者との思想的連関を解き明かした。

従来の雑誌『第三帝国』に関する研究に指摘できる問題点は、主盟の茅原や編輯主任の鈴木正吾など一部メンバーの言動にのみ分析が施され、そこに吉野作造の「民本主義」を典型と見做す「大正デモクラシー」の先駆例を見出し、あるいは高畠素之らに代表される「国家社会主義」に連なる可能性を見出し、「民本主義」を提唱し「小日本主義」を保持しながら「普通選挙」運動を展開した点を高く評価する一方で、第一次世界大戦の勃発以降、反帝国主義と平和主義を捨て、さらに第十二回総選挙に「模範落選」したことを機に「立憲政治を否定する」ようになった点をもって思想的後退、「民本主義の挫折」、「デモクラシー戦線からの離脱」と批判するという傾向である。研究者自身の問題意識が先行する形で語られる「大正デモクラシー」研究の蓄積は、かえって益進会同人による雑誌『第三帝国』の歴史的な実像を捉えにくくしてきた一面も否定できない。

そこで本研究では、次のような三つの課題を設定して、雑誌『第三帝国』の思想像を、茅原華山を中心とした益進会同人とその運動を熱烈に支持した地方青年読者との思想的連関に注目しながら、歴史的に捉え直していくこととした。

第一に、「益進主義」の思想構造を基本的な思考様式のレベルで定位することである。

これは、茅原華山の中心思想を、吉野作造の唱えた「民本主義」の先駆けとして評価するのではなく、すなわち「戦後民主主義」の原型を探るために「大正デモクラシー」の理念型を吉野の「民本主義」に見出し、その枠組みで当該期における言論や思想の多様な可能性を裁断するような問題意識の設定それ自体を批判するものであった。具体的には、茅原の新聞記者としての成長および経験の蓄積に即しながら、日露戦後社会に蔓延していた「人生問題」と「生活問題」に際会するなかで、地方青年層の実状を踏まえて「益進主義」を鼓吹していく過程を跡付けるとともに、その思想形成に影響を与えたベルグソンやオイケンらによる「生の哲学」と呼ばれる時代思潮を基礎に形成された思考様式の特質を析出することに重きを置いた。それは、いわば人間存在を「理性」と「本能」とに引き裂いてしまった近代文明を「直観」によって修復しようとする試みであった。

第二に、茅原が唱えた「益進主義」のもとに結集した益進会の思想集団としての存在形

態を解明するため、その「同人」としての結合の実態を、大正政変以降の政治情勢を踏まえながら、形成と変遷に添って明らかにすると同時に、雑誌『第三帝国』およびその後継誌である『洪水以後』『新理想主義』の全貌を把握することである。これによって、思想が生産・流通していく場を、益進会に集った青年記者たちの歩んできた知的環境や彼らが属している社会集団との関わりで捕捉していくことが可能となった。『萬朝報』の論説記者として文名を博していた茅原華山のもとに、石田友治・野村善兵衛・松本悟朗・鈴木正吾ら日露戦後の地方青年たちが結集した。彼らは、当該期に推進・普及した中等教育を受けながらも、地域の「知識階層」として生きる道を選ばず、上京して私立大学や専門学校に進み、宗教学・哲学・政治学などを修めた。第一次護憲運動に遭遇するなかで、自らの存在と学生・青年層の政治的可能性に自信を深めながら、雑誌メディアを通じて、現今の政治や思想、社会を批評することで読者および時代社会を導く立場に身を置いたのである。

第三に、雑誌『第三帝国』の言論の内容を、時代状況を把握しつつ、「運動」と「論争」の両面展開として捉えた上で、記者と読者、益進会同人と地方青年読者との思想的連関を一つ一つ解き明かしていくことである。益進会は、「新理想主義」の立場を標榜し、「自然主義」ならびに「社会主義」との双方向的な論争を繰り広げること、自らの思想的位置を明確にしつつ、その理想を実現するため、減税運動や普選運動などの実践運動へ積極的に乗り出していった。と同時に、益進会は雑誌『第三帝国』を「国民の公機関」と自称して編集費の公開を実行し、講演会の開催や支部の結成によって読者の開拓を試みた。さらに投書・通信欄を駆使して青年読者たちの意見を掲載する場を提供し、交歓欄を設定することで連携を深め、双方向的な思想・言論空間を形成したのである。言い換えれば、日露戦後以来の「人生問題」「生活問題」「社会問題」の解決という時代的要請を益進会がどのように引き受けていたのか、それを言論の社会的機能という視点から、つまり雑誌メディアを介在した思想運動を、特に時代思潮の特質を担った広汎な地方青年読者との思想的連関に注目する形で、問い直したことを意味する。

以上のような三つの課題を時代社会の中で考察するため、本研究では、第一期『第三帝国』と捉えられる時期を対象に、全篇を年代順に構成し、雑誌『第三帝国』の創刊を中心に据えながら、前半は茅原華山の「益進主義」の思想形成と益進会の結集を、日露戦後に地方青年層が置かれていた境遇を前提として、後半は『第三帝国』の思想運動の展開を、第一次世界大戦開戦前後の言論社会で、それぞれ明らかにしようとした。次に、各章ごとの成果を簡単にまとめておきたい。

第一章「益進主義」の思想形成」では、主盟として雑誌『第三帝国』の思想・言論を牽引した茅原華山に即して、その思想形成過程を分析し、彼の言論が『長野新聞』主筆時代、欧米外遊期、そして日露戦後社会と、場を移しながらも、一貫して地方青年層に期待を寄せる形で展開されていたことを跡付けた。「生活問題」の蔓延のもとで鼓吹された「益進主義」は、「自我」に依って立ち、ベルグソンやオイケンら「生の哲学」を援用しながら、「唯物的人生観」を批判すべき対象に据え、何より人間存在の回復を求めている。社会を一個の完体とみなす共同体観を根柢に据え、自立的「個人」の集合体としての「国家」像を示し、その強い連帯意識のゆえに、人間存在を脅かす現存の国家や社会に対して批判が向けられたのである。これらは、日露戦後における国家と国民との乖離を、日本人民の欲望を善導する形で修復し、その担い手たる地方青年層が自立した「個人」として

「自我」を「実生活」の場から「政治」上へと拡充することを主張したものであった。

ここで「益進主義」の内実を占めていたのは、今まさに再編されようとしていた外からの「秩序」に対峙するための、内なる「秩序」の形成という精神的抵抗にほかならなかった。矛盾・対立する二項の相互補完的な把握は、現状打破のエネルギーを新しい秩序の構築へと善導しようとする意図を含んでいた。「自己以内に第三帝国を創造」し「外現」すること、つまり不断の精神的自己革新を起点とする社会変革を、社会との連帯意識のもとで実現し、文明の発展に資する歴史の主体者となることが求められていたのである。

第二章「第三帝国」の創設」では、まず第一節で日露戦後の青年たちが益進会同人として結集してくる時代社会の特質を捉えるため、とくに地方青年の心情と彼らが育ってきた教育環境や受けてきた教育内容に注目した。具体的には、聖学院神学校、東洋大学、愛知県立第四中学校を取扱い、彼らが日露戦後の時代状況下において、ベルグソンらの「生の哲学」や「新理想主義」に触れる中で、等しく「上京」することを選び、茅原の下に結集してくる意味を指摘した。次に第二節では、彼らが第一次護憲運動の隆盛を経て、雑誌『第三帝国』の創刊に至るまでの足跡を、石田の「再上京」と茅原の『萬朝報』における論説記事を中心に明らかにするとともに、創刊の趣旨と誌名に込められた意味を考察した。イプセンの史劇に登場してくる理想の文明を表わす言葉を日本の歴史になぞらえ、第一が明治以前の封建制、第二が明治以後の官僚制、そして第三は君民同治の新帝国と位置づけた。ついで、益進会の組織については、創立メンバーを中心としながらも、有為の地方青年たちを新たに加えることで、「新人の唯一機関」たる所以を体现していった。最後に第三節では、雑誌『第三帝国』という媒体に関し、それが一方的に記者から読者へ思想を伝達する道具としてではなく、「投書」「交歓」「通信」欄の充実を図ることで、双方向的な意見交流の場となっていたことを、具体的な事例を挙げて指摘した。益進会においては、益進会同人の言論および運動を中心としながらも、その活動に熱烈な支持を寄せる青年読者たちの意見や要求が大きな意味を持ち、いわば両者のコミュニケーションの中で生じる摩擦から次なる展開、新たな企画が生み出されていくような構造を有していたのである。

第三章「第三帝国」の理論と実践」は、益進会同人による思想運動がどのような理論によって構成され、どのような実践運動を伴って展開されていたかを解明していった。まず第一節では、茅原が巻頭論説をもって牽引した「新憲政擁護運動」の内容を、当時の時代状況の中に位置づけながら、営業税廃止運動やシーメンス事件後の山本内閣打倒に至るまでの政治的経緯を中心に考察した。こうした実際の政治運動と同時に、野村隈畔や松本悟朗らを中心に展開された、「自我」論争、自然主義者Ⅱ岩野泡鳴との「二重生活」否定論争、無政府主義者Ⅱ大杉栄との「新労働問題」論争などを微細に分析し、同誌において展開された「運動」と「論争」の二面展開の内容を明らかにし、それが青年読者に支持された理由を示した。次に第二節では、従来の研究では見過ごされてきたか、あるいは史料の制約上、なかなか実現されてこなかった雑誌読者の実態を明らかにすることができた。具体的には、秋田県内に設置された横手・北浦・能代という三つの益進会支部を事例とし、その構成員である青年読者の存在を十数回に及ぶフィールドワークに基づきながら調査したところ、彼らの多くは中学校を卒業した地域の俊才揃いで、かつ地方小都市で実家が酒屋や呉服屋を営む商店の「若旦那」たち、または牧師や教員、銀行員など仕事の関係上、移動を余儀なくされる生活を送っている青年層であった。そして、第三節では、読

者層を結集するために繰り広げられた「企画」の中から、とくに時代思潮に対応するなかで積極的に展開された普通選挙をめぐる運動を中心に、普選請願署名運動から「模範選挙」に至るまでの経緯を、寄稿者や読者の支持に目を向けつつ、探った。石田および青年読者の支持を受ける形で実施された「模範選挙」運動は、茅原なりに見出した「妥協点」であったが、「模範落選」という結果は、予想以上に大きな影響をもたらしたのであった。

最後に、第四章「第三帝国」の思想圏」は、同誌の発展と分裂の有り様を「模範落選」以後の益進会の活動によって解明し、その真因を単純に茅原の「思想的転身」にのみ帰してきた従来の研究を批判し、茅原・石田の運動をめぐる見解の相違に加え、同誌の隆盛から生じた利益配分をめぐる内紛であったことを指摘した。と同時に、分裂騒動が各新聞・雑誌メディアを通じて報じられたことで、これまで青年読者とともに運動と論争を繰り広げ、文字通り「戦闘曲」を奏でてきた益進会のイメージが大きく損なわれ、両陣営ともに最も大切な支持者＝読者を失うという結果を手にしたことを論じた。そこから分裂後の茅原派・石田派それぞれの歩みを辿り、『洪水以後』と『新理想主義』の創刊の趣旨とその後の言動を追いかけた。第二・三節では、それぞれの立場で「益進主義」の思想に共鳴し、雑誌『第三帝国』の思想運動に呼応した青年たちの中から、益進会同人であった野村限畔、愛読者であった金子洋文、茅原に私淑していた室伏高信を取り上げた。

まず「絶対自由」論に集約される限畔の思想は、茅原が「益進主義」で示した自立的存在としての個人が「自我」の肯定という形でより強く主張される一方で、個人が普遍的存在として社会や歴史全体に連なる側面は捨象され、むしろ明確な違和感を表明する主体となっていた。内的世界への沈潜により政治・社会的価値を根源的に批判したという点で「第三帝国の思想圏」において最も原理的かつ急進的な国家批判を含んでいた。

次に洋文は、茅原と武者小路の思想的葛藤を克服するなかで、「若き農夫」像を見出し、「政治」を志向する「文学」を確立していった。大地を踏みしめ田畑を耕し、農作物で「生命」を養い、「生活」を積み重ねて「歴史」を築いていく力強い生産者の姿は、「益進主義」で示された不断の創造的活動により文明の向上進化に貢献する、「普遍共通の心（ユニヴァサル・マインド）」に連なる個人像を継承・発展させたものであった。

最後に、室伏高信の「生命デモクラシー」論は、政治を外在的な制度や形式で捉えるのではなく、そこに存在する人間の生命や精神で捉える姿勢に貫かれていた。特に「デモクラシー」の「内部的生命」に目を向け、「民主主義とは人民の意志である」と見なす解釈には、日本人の生命力に依拠し、「実生活」に根差す「人間本位の憲法政治」を目指した「第三帝国」を発展的に継承した姿を見出すことができる。

その後の彼らの足跡と、切り拓いていった思想世界を見るならば、第一期『第三帝国』は、益進会の分裂をもって一応の終幕を迎えるが、その思想運動が時代に果たした使命は、それぞれの読者に継承され、発展していったことがわかるだろう。

以上のような本研究での考察を通じて、益進会が日露戦後の地方青年たちによって結成され、大正政変の余燼冷めやらぬなか、政治熱が国民全体に広がっていくことを背景に、「新唯心論」および「新理想主義」の立場から現実の政治問題に対峙し、その思想運動を展開したことを、新史料の発掘も含めて、具体的に明らかにできた。それは「大正デモクラシー」を前提にした先行研究では捉えきれなかった第一期『第三帝国』における益進会同人の思想運動の全体像について、地方青年読者との思想的連関を含め、「集団の思想

史」として一貫させた点で、研究方法としての意義を実証することができたとさえ言う。益進会の同時代に向けてなされた諸活動は、「明治国家」が日露戦後以来のさまざまな課題を残したまま終焉し、大正という新しい時代に相応しい政治思想の構想が求められるなかで展開されたものであり、政府主導のもとで形成されつつあった外からの「秩序」に對峙するための、内なる「秩序」の形成という精神的抵抗を示したという意味において、日本の近代化路線から外れ、政治的に覚醒しながらも権利が与えられず、知識や教養を身に付けたからこそ現状に満たされない地方青年たちの心情をすくい上げることができたのである。それらは「デモクラシー」という政治的概念では到底捉えきることのできない、矛盾に満ちたさまざまな欲望を含む、幅広くも底深い大正地方青年たちによる「声」で表現された「帝国日本」の思想像であった。

もちろん、本研究は、益進会による思想運動の歴史的意義を機能的側面からのみ評価しようとするのではなく、「益進主義」の思想とそれに基づく「第三帝国」の主張を基底的な思考方法のレベルから捉え直し、それを実践運動と関連させるとともに、地方青年読者との思的連関に注目しながら、評価していこうとするものである。その点から言えば、茅原および益進会同人の「益進主義」とは、ベルグソンの「創造的進化」に大きな示唆を得ながら、西欧文明の生み落とした「唯物的思考」を徹底的に批判し、人間存在そのものに依って立ち、「自我」を「実生活」の場から「政治」上へと拡充し、国家の生活化を図るとともに、人民の自立化を促し、矛盾・対立する二項を相互補完的に捉え、「靈肉一致」「君民同治の新帝国」を創設することで、文明への貢献、歴史の主体者となることを目指す思想の枠組みであった。それは「実生活」における己の実感や直観をもって目前の国家や社会のしくみを根本的に批判する強さを有する点で、明治期における高等教育機関において西欧の学問や理論を習得することによって展開された思想運動とは異なる独自の思想領域を開拓したという意味で、思想上高く評価できるもので、それは日露戦争前後における「人生問題」「生活問題」「社会問題」に込める思想的営為であった。

このような『第三帝国』の思想像は、序章で掲げた三つの課題を歴史的な場で検証して得られたものであった。だが同時に、本研究のような研究視角に立つ限り、必然的に負わなければならない問題点、また言及することができなかった課題も少なからず残っている。最後に、反省と今後の展望という意味を込めて、それを二つの点からまとめておきたい。

第一に、「デモクラシー」をめぐる問題である。本研究は、従来の『第三帝国』に対する研究が、吉野作造の「民本主義」に代表される「大正デモクラシー」の文脈でのみ語られ、研究者自身の問題意識が先行しすぎるあまり、枠組みによって当時の思想や言論の可能性を裁断する形で蓄積されてきたことへの反論を試みるため、あえて「デモクラシー」概念を分析と評価の前提としない方法を採用してきた。「戦後民主主義」に一つの理想を置き、そこで重要視されているパラダイム、例えば、反帝国主義や平和主義を暗黙の基準として『第三帝国』の思想運動の限界を指摘するのではなく、むしろ同誌の活動が、時代の青年たちによって展開され、なかでも地方青年読者に支持された事実にこそ目を向け、雑誌メディアを媒介として交換された青年読者たちの「声」の中にこそ、大正期における思想の実像を解明するという課題に込めることになるであろう。

そのような意味で、本研究における二つの柱であった茅原華山と石田友治の存在は、益進会時代の思想像を土台とし、両者のその後を追跡し、思想世界の全体像を解明していく

必要がある。それには、茅原が大正十年に創刊し戦時中まで続けた個人雑誌『内観』と石田が賀川豊彦らと創刊した『雲の柱』に注目し、読み進めていくことが課題となる。

第二に、同時代における『第三帝国』の位置づけをめぐる問題である。本研究では、益進会による雑誌メディアを媒介とした思想運動を益進会同人のみならず、彼らの活動を支持した地方青年読者との思想的連関に注目しながら位置づけてきた。だが、考察の主眼を集団の思想史として、その存在形態の実態分析に置いたがゆえに、同時代に次々と創刊された他の雑誌メディアへの目配りが十分とは言えない。同誌に結集した青年読者は、中学教育を受けながらも、自らの希望を実現することができず、鬱勃とした心情を抱えた地方青年たちであった。大正期に中等教育の浸透が見られたことはすでに述べた通りであるが、そうした階層の青年たちが読んでいたのは、無論、『第三帝国』のみではないだろう。

広汎な社会階層の存在を想定するならば、益進会による集団の思想史を描いただけでは、時代の青年たちの「声」をすくい上げ得ないのみならず、従来の「大正デモクラシー」研究を総体として乗り越えたとは言えない。現時点において本研究は「大正デモクラシー」研究批判序説に止まっていることは否めないが、今後、鈴木文治と友愛会、海老名弾正と本郷教会、賀川豊彦と日本農民組合、武者小路実篤と『白樺』などを対象に、集団の思想史という方法論を適用する期間や範囲を広げ、大正期の思想像を捉え直していきたい。

¹⁾ 高橋亀吉『大正昭和財界変動史』（一九五四年、東洋経済新報社）参照。

²⁾ 益進会「本誌読者大会！」『第三帝国』三九（大正四年五月五日）一二頁。

³⁾ 大正四年五月二十四日消印金子洋文（秋田県土崎港町満船寺内）宛真崎政治（東京市本郷区駒込林町一八二）書簡（『金子洋文資料』一八八）。

⁴⁾ 社告「御大典奉祝 第三帝国園遊会」『第三帝国』五七（大正四年十一月十一日）三二～三三頁。

⁵⁾ 石田友治「創刊三周年記念日を迎へて」『第三帝国』七六（大正五年十月十五日）七頁。

⁶⁾ 石田友治「新しき心霊運動、新しき平民運動」『第三帝国』七〇（大正五年七月一日）三頁。

⁷⁾ 第三期『第三帝国』の経営も困難続きであった。同年七月二十一日に長男実が生後わずか五ヶ月で早逝し、絶望の淵に暮れる石田を見兼ねて、安部磯雄・福来友吉・向軍治を發起人として「第三帝国後援会」が組織され、二六一円一〇銭の寄付金が集められた。柴田久雄・村瀬武彦・佐々木光三ら学生たちが編集を手伝ったが、半月刊を維持することは難しく、八〇号より月刊に改め、全六四頁・定価二〇銭となり、発行所も牛込区払方町三番地に移った。一〇〇号をもって『文化運動』と改題した。大正十一年十月の一二九号より友人の下中弥三郎の主宰する日本教員組合啓明会の機関誌『文化運動』を無償で提供した。同誌は平凡社を経営する下中の資金に支えられたが、大正十四年四月発行の一五六号で第一期『第三帝国』より数えて十一年半の歴史に幕を閉じた。

⁸⁾ 茅原廉太郎『日本評論』を發行するに際して「『日本評論』一五（大正五年七月一日）二～七頁。

⁹⁾ 茅原廉太郎「再び西遊せんとするに方って」『日本評論』一六（大正五年八月一日）三頁。

目次【引用史料】

一	新聞（著者五十音順↓記事年代順）	（1）
	署名あり	（1）
	署名なし	（3）
二	雑誌（著者五十音順↓記事年代順）	（4）
	同人	（4）
	寄稿者	（7）
	読者	（8）
	その他	（10）
三	書簡（差出人五十音順↓年代順）	（10）
四	著書（著者五十音順）	（11）
五	論文その他（著者五十音順）	（13）
【参考文献】		
一	著書（著者五十音順）	（14）
二	論文その他（著者五十音順）	（18）

【引用史料】

一 新聞（著者五十音順↓記事年代順）

署名あり（※または著者判明分）

- ・石田生（十一月廿日）「東京より秋田へ」『秋田魁新報』（大正元年十二月五日）
- ・石田生（十二月二日）「東京より秋田へ」『秋田魁新報』（大正元年十二月九日）
- ・石田特派員謹記（東京にて）「明治天皇大葬記（第一〜七信）」『秋田魁新報』（大正元年九月十三〜二十一日）

- ・石田望天「入社の際」『秋田魁新報』（明治四十二年二月二十三日）
- ・石田望天「士道論―青年尚志会を起すべし―」『秋田魁新報』（明治四十二年三月八日）
- ・石田望天「思潮瞥見―自然主義とプラグマチズム―」『秋田魁新報』（明治四十二年四月十日）
- ・石田望天「新しき時代と青年（下）」『秋田魁新報』（明治四十四年三月五日）
- ・石田望天「信ずるに足る人を選ぶべし」『秋田魁新報』（明治四十四年九月十一日）
- ・石田望天「近時所感」『秋田魁新報』（明治四十四年九月二十四日）
- ・石田望天「勝敗論」『秋田魁新報』（明治四十四年十月一日）
- ・石田望天「退社の辞（上）」『秋田魁新報』（大正元年十一月二十七日）
- ・石田望天「退社の辞（中）」『秋田魁新報』（大正元年十一月二十八日）
- ・伊東晃璋「夏期大学の経営について」『秋田魁新報』（大正十年七月二十八日）
- ・伊東晃璋「夏期大学の経営を終へて」『秋田魁新報』（大正十年八月二十八日）
- ・華山「四海先生主義（下）」『日刊新世界』（明治三十九年九月五日）
- ・華山（英京に於て）「東西文明の性質を論ず（上）」『萬朝報』（明治四十年八月二十七日）
- ・華山「民族的大同盟（下）」『萬朝報』（明治四十一年三月十二日）
- ・華山「革風易俗の業」『萬朝報』（明治四十四年五月十七日）
- ・華山生「西園寺陶庵侯を訪ふ」『長野新聞』（明治三十四年九月二十七日）
- ・華山生「長野県民と平和の戦士」『長野新聞』（明治三十四年十月五日）
- ・華山生「機関廃業の注文」『長野新聞』（明治三十五年七月一日）
- ・華山生「機関新聞の不可能」『長野新聞』（明治三十五年十二月六日）

- ・華山生（六月廿八日）「餓鬼同盟（下）」『萬朝報』（明治四十年八月一日）
- ・華山生（英国に於て）「商業国民としての日本の位置」『萬朝報』（明治四十年十月十三日）
- ・華山生「祖先崇拜と家族制度（上）」『萬朝報』（明治四十年十一月十五日）
- ・華山生「加奈陀Ⅱ新米国（上）」『萬朝報』（明治四十年十二月三日）
- ・華山生「欧米と社会主義（五）」『萬朝報』（明治四十一年一月六日）
- ・華山生（龍動に於て）「欧米外交の新中心（五）」『萬朝報』（明治四十一年一月二十七日）
- ・華山生（英国）「対西洋人の態度（二）」『萬朝報』（明治四十一年五月二十三日）
- ・華山生（英国）「西洋の教育と東洋の道德（第三）」『萬朝報』（明治四十一年八月八日）
- ・華山生（英国）「西洋の教育と東洋の道德（第七）」『萬朝報』（明治四十一年八月十二日）
- ・華山生（七月廿日蘇国リースに於て）「氷島探險前記（上）」『萬朝報』（明治四十一年八月二十五日）
- ・華山生（氷島に於て）「氷島探險記（六）」『萬朝報』（明治四十一年九月三日）
- ・華山生（蘇国）「英の出納尚書と独逸の社会政策（下）」『萬朝報』（明治四十一年十月十四日）
- ・華山生（アルジェリヤにて）「回教徒の過去将来（四）」『萬朝報』（明治四十二年一月一〇日）
- ・華山生（アルジェリヤにて）「回教徒の過去将来（六）」『萬朝報』（明治四十二年一月十二日）
- ・華山生（在仏国）「社会問題の解釈法（二）」『萬朝報』（明治四十二年一月二十六日）
- ・華山生（在仏国）「社会問題の解釈法（十五）」『萬朝報』（明治四十二年二月八日）
- ・華山生（倫敦）「如何にして泰西を学ぶべき乎（下）」『萬朝報』（明治四十三年六月四日）
- ・華山生「東北人士に与ふ」『萬朝報』（明治四十四年八月十二日）
- ・金子洋文「悲哀と真実の生活（上）」『秋田魁新報』（大正四年三月十二日）
- ・金子洋文「偶像結婚」『秋田魁新報』（大正四年六月二日）
- ・金子洋文「越後谷川弓氏に与へて部分的徹底を論ず（上）」『秋田毎日新聞』（大正四年八月八日）
- ・金子洋文「雪積る夜（五）」『秋田毎日新聞』（大正五年二月二十六日）
- ・金子洋文「雪積る夜（六）」『秋田毎日新聞』（大正五年二月二十七日）
- ・金子洋文「雪積る夜（七）」『秋田毎日新聞』（大正五年二月二十八日）
- ・金子洋文「雪積る夜（八）」『秋田毎日新聞』（大正五年二月二十九日）
- ・金子洋文「華山と無車（二）」『秋田毎日新聞』（大正五年五月一日）
- ・金子洋文「華山と無車（三）」『秋田毎日新聞』（大正五年五月二日）
- ・金子洋文「華山と無車（四）」『秋田毎日新聞』（大正五年五月三日）
- ・茅原華山「憲政党の位置」『日刊人民』（明治三十二年七月十三日）
- ・茅原華山（於東京）「教育の大本」『長野新聞』（明治三十四年九月二十七日）
- ・茅原華山（ボストンにて）「新信仰の確立（上）日本と米国」『日刊新世界』（明治三十九年八月十六日）
- ・茅原華山（ボストンにて）「新信仰の確立（中）」『日刊新世界』（明治三十九年八月十七日）
- ・茅原華山（ボストンにて）「青年と教育」『長野新聞』（明治三十四年十月十九日）
- ・茅原華山「菊池文相と中学教育」『長野新聞』（明治三十四年十月二十日）
- ・茅原華山「長野県の青年」『長野新聞』（明治三十四年十月二十五日）
- ・茅原華山「富国、強兵、大義」『長野新聞』（明治三十四年十月二十七日）
- ・茅原華山「青年と人生問題（上）」『長野新聞』（明治三十六年六月九日）
- ・茅原廉太郎「因縁東北日報社へ入るの辞」『東北日報』（明治二十五年七月七日）
- ・茅原廉太郎（蘇国）「独逸と満州（下）」『萬朝報』（明治四十一年九月二十四日）
- ・茅原廉太郎演説「社会主義の新福音（一）」『長野新聞』（明治三十六年二月一日）
- ・相馬御風「人間性の為めの戦ひ」『読売新聞』（大正二年十一月五日）
- ・相馬御風「新思想家の選挙運動を拝す」『読売新聞』（大正四年二月二十六日）

- ・田中救時「再答華山君」『長野新聞』（明治三十六年一月七日）
- ・中村月城「日本とヨーロッパ―華山対御風の論争―」『秋田魁新報』（大正四年七月四日）
- ・望天生「告白（上）」『秋田魁新報』（明治四十三年十一月六日）
- ・望天生「新理想論」『秋田魁新報』（明治四十五年一月八日）
- ・望天生「東京行（一）」『秋田魁新報』（明治四十五年四月六日）
- ・望天生「東京の印象」『秋田魁新報』（明治四十五年四月八日）
- ・望天生（五日午前三時東京にて）「東京行（二）」『秋田魁新報』（明治四十五年四月九日）
- ・望天生「東京行（三）」『秋田魁新報』（明治四十五年四月十一日）
- ・武者小路実篤「生田長江氏に戦を宣せられて一寸（上・中・下）」『時事新報』（大正五年十一月五・七日）

署名なし（記事年代順）

- ・「当今の新聞記者」『萬朝報』（明治三十四年十二月二十九日）
- ・「中学生間の殴打事件（昨日告訴状を提出す）」『参陽新報』（明治三十五年六月十九日）
- ・「中学生間の殴打事件」『参陽新報』（明治三十五年六月二十日）
- ・「第四中学校生徒間殴打告訴事件」『参陽新報』（明治三十五年六月二十四日）
- ・「中学生殴打事件に就て」『参陽新報』（明治三十五年六月二十五日）
- ・「中学生徒の提灯行列」『新朝報』（明治三十八年六月二日）三面
- ・「総選挙政戦録▲秋田市の黒岩氏一行」『秋田魁新報』（明治四十五年四月二十九日）
- ・「総選挙政戦録▲感動を与へたる井上氏応援演説会」『秋田魁新報』（明治四十五年四月三十日）
- ・「総選挙政戦録▲能代市の黒岩氏一行」『秋田魁新報』（明治四十五年五月一日）
- ・「総選挙政戦録▲大館の黒岩氏一行」『秋田魁新報』（明治四十五年五月二日）
- ・「秋田市選挙の結果」『秋田魁新報』（明治四十五年五月十七日）
- ・「横城青年会発会式」『羽後新報』（明治四十五年五月二十三日）
- ・「能代青年団の決議」『秋田魁新報』（明治四十五年七月十七日）
- ・「横城青年会の趣旨綱領」『羽後新報』（大正元年十二月八日）
- ・「憲政擁護の残骸」『東京朝日新聞』（大正二年三月十一日）
- ・「憲政擁護大会の開催」『東京朝日新聞』（大正三年一月六日）
- ・「憲政擁護大会」『時事新報』（大正三年一月六日）
- ・「シーメンス会社の贈賄事件」『時事新報』（大正三年一月二十三日）
- ・「営業税全廃同盟会大会」『羽後新報』（大正三年二月一日）
- ・「徹底、徹底、徹底」『萬朝報』（大正三年二月十四日）
- ・「大隈首相と記者団」『報知新聞』（大正三年七月四日）
- ・「政友会の罪大也」『萬朝報』（大正四年一月二日）
- ・「限閣の人氣取」『東京朝日新聞』（大正四年一月十八日）
- ・「房総特報」『東京朝日新聞』（大正四年一月二十四日）
- ・「政友会の不評」『東京朝日新聞』（大正四年一月二十七日）
- ・「政友会凋落の状」『萬朝報』（大正四年二月一日）
- ・「大隈内閣と枢密院」『東京日日新聞』（大正四年二月十日）
- ・「大隈伯と軍備問題」『東京日日新聞』（大正四年二月十四日）
- ・「大隈内閣の任務」『東京日日新聞』（大正四年二月二十三日）
- ・「大隈伯か原君か（総選挙の真義）」『東京朝日新聞』（大正四年三月二日）
- ・「内閣を助く可し」『萬朝報』（大正四年三月二日）
- ・「総選挙の価値」『東京日日新聞』（大正四年三月四日）

- ・「大隈伯の蓄音機吹込演説」『東京朝日新聞』（大正四年三月五日）
- ・「小大隈と竹越の競争日に激烈」『東京朝日新聞』（大正四年三月五日）
- ・「政友到底振はず」『萬朝報』（大正四年三月八日）
- ・「総選挙の価値（再び）」『東京日日新聞』（大正四年三月九日）
- ・「選挙違反最近調」『萬朝報』（大正四年三月十三日）
- ・「理想選挙会」『静岡朝報』（大正四年三月十五日）
- ・「大隈首相の鉄道演説」『東京朝日新聞』（大正四年三月十七日）
- ・「隈伯車窓の長広舌」『東京日日新聞』（大正四年三月十七日）
- ・「華山氏一行講演会」『秋田毎日新聞』（大正四年七月十四日）
- ・「華山氏一行講演会」『秋田毎日新聞』（大正四年七月二十日）
- ・「神尾一恵氏より」『東京朝日新聞』（大正四年十月六日）
- ・「第三帝国の騷擾」『時事新報』（大正四年十一月十四日）
- ・「第三帝国」動揺」『読売新聞』（大正四年十一月十四日）

二 雑誌

同人

（著者五十音順↓記事年代順）

- ・石田生「編輯だより」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）
- ・石田友治「『第三帝国』発刊に就て」『第三帝国』一（大正二年十月十日）
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』一四（大正三年七月一日）
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』一五（大正三年七月一六日）
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』一七（大正三年八月一六日）
- ・石田友治「本誌前号発売禁止の理由に就て」『第三帝国』一八（大正三年九月一日）
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』二一（大正三年十月十五日）
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』三〇（大正四年一月二十五日）
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』三一（大正四年二月五日）二九頁
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』三二（大正四年二月十五日）二八頁
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』三三（大正四年二月二十五日）
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）二九頁
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』四〇（大正四年五月十五日）
- ・石田友治「益進会から」『第三帝国』四二（大正四年六月五日）
- ・石田友治「何故に『第三帝国』は茅原華山氏と絶縁せるか」『第三帝国』号外（大正四年十一月二十九日）

- ・石田友治「一切が利用、一切が手段」『中央公論』（大正四年十二月一日）
- ・石田友治「『第三帝国』から『新理想主義』へ」『新理想主義』五八（大正五年一月五日）
- ・石田友治「新しき心霊運動、新しき平民運動」『第三帝国』七〇（大正五年七月一日）
- ・石田望天「新公論社の九ヶ月」『新公論』（大正二年九月一日）
- ・一元社同人「雑誌『洪水以後』発刊に臨みて」『洪水以後』一（大正五年一月一日）
- ・益進会「益進会支部の設置に就て」『第三帝国』一二（大正三年六月一日）
- ・益進会「本誌読者大会！」『第三帝国』三九（大正四年五月五日）
- ・益進会「図案募集！益進会の建築へ」『第三帝国』四二（大正四年六月五日）
- ・益進会同人「志を述ぶ」『第三帝国』一（大正二年十月十日）
- ・益進会同人「普く天下の同志に檄す」『第三帝国』二〇（大正三年十月五日）
- ・益進会同人「同志諸君普通選挙運動に就て」『第三帝国』二五（大正三年一月二十五日）

- ・益進会同人「普通選挙運動参加問答」『第三帝国』二六（大正三四年十二月五日）
- ・（益進会同人）「靈か肉か」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）
- ・（益進会同人）「同情録」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）
- ・（益進会同人）「同人より読者へ」『第三帝国』二（大正三年六月一日）
- ・（益進会同人）「本誌第一回講演会」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）
- ・（益進会同人）「本誌第四回講演会」『第三帝国』六（大正三年二月一日）
- ・（益進会同人）「同人より読者へ」『第三帝国』一二（大正三年六月一日）
- ・（益進会同人）「同人より読者へ」『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）
- ・（益進会同人）「『第三帝国』読者の大福音！」『第三帝国』三四（大正四年三月五日）
- ・（益進会同人）「思園大会」『第三帝国』四一（大正四年五月二十五日）
- ・（益進会同人）「東北講演旅行（上）」『第三帝国』四八（大正四年八月五日）
- ・（益進会同人）「東北講演旅行（下）」『第三帝国』四九（大正四年八月十五日）
- ・華山「一剣一筆子に答へ併せて岩野泡鳴君に質す」『第三帝国』九（大正三年四月十六日）
- ・華山生「思園消息」『第三帝国』三一（大正四年二月十五日）
- ・茅原華山「新しく観たる新しき支那」『中央公論』（大正二年八月一日）
- ・茅原華山「『第三帝国』と石田友治君」『第三帝国』一（大正二年十月十日）
- ・茅原華山「国家無能」『第三帝国』一（大正二年十月十日）
- ・茅原華山「国家の打破と創造（新憲政擁護運動）」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）
- ・茅原華山「思園小記」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）
- ・茅原華山「大なる終りと大なる始め」『第三帝国』四（大正三年一月十日）
- ・茅原華山「民本政治へ（新しい実業家）」『第三帝国』五（大正三年二月一日）
- ・茅原華山「第三帝国は近づけり！」『第三帝国』六（大正三年二月十日）
- ・茅原華山「我等の進歩」『第三帝国』八（大正三年四月一日）
- ・茅原華山「青年と文章」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）
- ・茅原華山「新第三帝国論Ⅰ」『第三帝国』一一（大正三年五月十六日）
- ・茅原華山「新第三帝国論Ⅴ」『第三帝国』一一（大正三年五月十六日）
- ・茅原華山「火の洗礼を受けよ」『第三帝国』一九（大正三年九月十六日）
- ・茅原華山「我心事を明にして知不知に告ぐ」『第三帝国』二七（大正三年十二月十五日）
- ・茅原華山「洪水以後の世界」『第三帝国』二九（大正四年一月十五日）
- ・茅原華山「選挙団体をして先づ元素に還らしめよ」『第三帝国』三四（大正四年三月五日）
- ・茅原華山「思園消息」『第三帝国』三四（大正四年三月五日）
- ・茅原華山「選挙に於ける好意の誘惑」『第三帝国』三五（大正四年三月二十日）
- ・茅原華山「模範落選（日本国民の選挙心理と憲政の将来）」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）
- ・茅原華山「友人の発見」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）
- ・茅原華山「What's C? 自他両存の政治」『第三帝国』三七（大正四年四月十五日）
- ・茅原華山「日本の政治原理」『第三帝国』三七（大正四年四月十五日）
- ・茅原華山「徳治国か法治国か」『第三帝国』三八（大正四年四月二十五日）
- ・茅原華山「代議政治無用論」『第三帝国』四二（大正四年六月五日）
- ・茅原華山「新貴族政治と青年」『第三帝国』四二（大正四年六月五日）
- ・茅原華山「相濡ほす心（新労働問題）」『第三帝国』四八（大正四年八月五日）
- ・茅原華山「悲壮なる精神」『洪水以後』一（大正五年一月一日）
- ・茅原華山「持主事件」『洪水以後』一（大正五年一月一日）
- ・茅原華山「再び筆を執るに臨みて」『洪水以後』一（大正五年一月一日）

- ・茅原華山「日本のミリタリズム」『洪水以後』二（大正五年一月十一日）
- ・茅原華山「デモクラシイを使ひ分けたる吉野博士」『洪水以後』四（大正五年二月一日）
- ・茅原華山「野村隈畔氏」『内観』二二（大正十年十二月一日）
- ・茅原華山「西多摩に遊ぶ」『内観』一三二（昭和六年三月一日）
- ・茅原南郭「春日郊行」『穎才新誌』三二八（明治十六年九月二十二日）
- ・茅原南陔「游山水樓記」『穎才新誌』三二八（明治十六年九月二十二日）
- ・茅原廉「秋江即事」『穎才新誌』三三〇（明治十六年十月六日）
- ・茅原廉「湖上雜題」『穎才新誌』三三四（明治十六年十一月三日）
- ・茅原廉「感秋」『穎才新誌』三三五（明治十六年十一月十日）
- ・茅原廉「江樓即事」『穎才新誌』三五八（明治十七年四月二十六日）
- ・茅原廉太郎「新橋竹枝」『穎才新誌』二二七（明治十四年七月二十三日）
- ・茅原廉太郎「柳橋竹枝」『穎才新誌』三〇〇（明治十六年三月十日）
- ・茅原廉太郎「南□評」『穎才新誌』三三八（明治十六年十二月一日）
- ・茅原廉太郎（萬朝報記者、大正三年六月一日市ヶ谷田町の思園に於て）「牛込区民と自治実現」『第三帝国』臨時牛込区号（大正三年六月二日）
- ・茅原廉太郎「東京市民に向つて模範選挙を求む」『第三帝国』三二（大正四年二月十五日）
- ・茅原廉太郎「選挙費公表に就て」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）
- ・茅原廉太郎「『日本評論』を發行するに際して」『日本評論』一五（大正五年七月一日）
- ・茅原廉太郎「再び西遊せんとするに方つて」『日本評論』一六（大正五年八月一日）
- ・茅原廉堂「春寒」『穎才新誌』三〇九（明治十六年五月十二日）
- ・茅原廉堂「秋日客中作」『穎才新誌』三二六（明治十六年六月三十日）
- ・茅原廉堂「暮春客中作」『穎才新誌』三二八（明治十六年七月十四日）
- ・茅原廉堂「客中作」『穎才新誌』三二〇（明治十六年七月二十八日）
- ・小林亮平「生活難を叫ぶ人々に」『第三帝国』二五（大正三年十一月二十五日）
- ・雜賀博愛「編輯室にて」『第三帝国』二二（大正三年十月二十五日）
- ・事務室の番人「益進会十日誌」『第三帝国』二四（大正三年十一月十五日）
- ・社告「御大典奉祝 第三帝国園遊会」『第三帝国』五七（大正四年十一月十一日）
- ・鈴木正吾「民の力！」『第三帝国』一（大正二年十月十日）
- ・鈴木正吾（明法学士）「胃の空虚を奈何せん」『第三帝国』二一（大正二年十一月十日）
- ・鈴木正吾「二月大勢評論」『第三帝国』七（大正三年三月十日）
- ・鈴木正吾「国防會議無用論―是れを増師反対の宣戦布告文とす」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）
- ・鈴木正吾「罰金一金参拾円（上）―口は禍の門、革命の噴火口―」『第三帝国』一五（大正三年七月十六日）
- ・鈴木正吾「罰金一金参拾円（下）―口は禍の門、革命の噴火口―」『第三帝国』一六（大正三年八月一日）
- ・鈴木正吾「普通選挙に就て尾崎法相と語る」『第三帝国』二三（大正三年十一月五日）
- ・鈴木正吾「新愛国論（下）」『第三帝国』二四（大正三年十一月十五日）
- ・鈴木正吾「編輯の後に」『第三帝国』三二（大正四年二月十五日）
- ・鈴木生「編輯同人より」『第三帝国』八（大正三年四月一日）
- ・善兵衛「父は自然主義、子は理想主義」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）
- ・中村弧月「人間生活の要求について―大杉栄氏に寄す―」『第三帝国』四八（大正四年八月五日）
- ・中村孤月「茅原華山先生」『中央公論』（大正四年十二月一日）

- ・南陔茅原廉「経旧都」『穎才新誌』三三三（明治十六年十月二十七日）
- ・野村善兵衛「社会的同情心」『六合雑誌』三六七（明治四十四年八月一日）
- ・野村善兵衛「否定より肯定へ」『六合雑誌』三七五（明治四十五年四月一日）
- ・野村善兵衛「自覚と労作的精神」『六合雑誌』三七七（明治四十五年六月一日）
- ・野村善兵衛「ベルグソンとニイチェ」『六合雑誌』三八〇（大正元年九月一日）
- ・野村善兵衛「ベルグソンとニイチェ（下）」『六合雑誌』三八一（大正元年十月一日）
- ・野村善兵衛「現代思想の焼点Ⅱ自我」『第三帝国』一（大正二年十月十日）
- ・野村善兵衛・松本悟朗・鈴木正吾『第三帝国』に参加するに就て『第三帝国』一（大正二年十月十日）

- ・野村善兵衛「新理想主義と実生活」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）
- ・野村隈畔「四月思想評論」『第三帝国』九（大正三年四月十六日）
- ・野村隈畔「五月思潮の感想」『第三帝国』一一（大正三年五月十六日）
- ・野村隈畔「稲毛詛風君に応ふ——自己を敵とする」とは何ぞや『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）

- ・編輯子「益進会から」『第三帝国』二三（大正三年十一月五日）
- ・望天生「大隈伯と論戦する記」『新公論』（大正二年八月一日）
- ・松本悟朗「岩野泡鳴氏に与ふ」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）
- ・松本悟朗「再び岩野泡鳴氏に与ふ」『第三帝国』一一（大正三年五月十六日）
- ・松本悟朗「三たび岩野泡鳴氏に与ふ」『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）
- ・松本悟朗「茅原華山とは恁んな人」『中央公論』（大正四年十二月一日）
- ・松本悟朗「『第三帝国』滅亡史」『洪水以後』一（大正五年一月一日）
- ・松本生「〔新著批評〕野村君と『ベルグソンと現代思潮』」『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）

寄稿者

（著者五十音順↓記事年代順）

- ・安部磯雄「地方に中心人物を要す」『第三帝国』一（大正二年十月十日）
- ・安部磯雄「婦人小児にも及ぼすべし」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）
- ・安部磯雄「生活問題と減税問題」『第三帝国』五（大正三年二月一日）
- ・安部磯雄「市政革新の根本義」『第三帝国』九（大正三年四月十六日）
- ・稲毛詛風「戦」『早稲田文学』一〇二（大正三年五月一日）
- ・稲毛詛風「野村隈畔君に與ふ——論理的遊戯」とは何ぞや『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）

- ・岩野泡鳴「事実と批評（二重生活の弊害）」『第三帝国』八（大正三年四月一日）
- ・岩野泡鳴「再び二重生活否定（茅原華山氏へ）」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）
- ・岩野泡鳴「三たび二重生活否定（松本悟朗氏に）」『第三帝国』一二（大正三年六月一日）
- ・大杉栄「生の拡充」『近代思想』一卷一〇号（大正二年七月一日）
- ・大杉栄「生の道徳」『近代思想』二卷一号（大正二年十月一日）
- ・大杉栄「時が来たのだ——相馬御風君に与ふ——」『近代思想』二卷四号（大正三年一月一日）
- ・大杉栄「僕の世界観——中村弧月君に答へ——」『第三帝国』四九（大正四年八月十五日）
- ・大杉栄「僕の現代社会観——中村弧月君に答へる——」『第三帝国』五〇（大正四年九月一日）
- ・小倉徂峰「吉野博士の憲政論を読む」『洪水以後』二（大正五年一月十一日）
- ・川尻東馬「營業税全廃運動」『第三帝国』五（大正三年二月一日）
- ・北原龍雄「普通選挙運動の同志に——第三十七議会に於ける請願運動と今後の我等」『新理想主義』六四（大正五年三月二十日）
- ・後藤新平「世界愚か当局賢か——思園に於ける講話の一節」『第三帝国』四一（大正四年五月二十五日）

日)

- ・堺利彦「何ぞ大志を抱かざる」『第三帝国』三(大正二年十二月十日)
- ・堺利彦「普通選挙請願方法別案」『第三帝国』二二(大正三年十月十五日)
- ・島村抱月「イブセン劇の『第三帝国』」『第三帝国』一(大正二年十月十日)
- ・相馬御風「日本とヨーロッパ―茅原華山君に寄す」『第三帝国』四三(大正四年六月十五日)
- ・昇曙夢「メレジュコーフスキの作物に現はれたる靈肉一致の思想」『第三帝国』二(大正二年十一月十日)
- ・富士川游「絶唱論」『第三帝国』二八(大正四年一月五日)
- ・松山忠二郎「五千万円減税論」『第三帝国』五(大正三年二月一日)
- ・柳澤英輔「街頭から書齋へ書齋から街頭へ(茅原華山氏の位地)」『第三帝国』三四(大正四年三月五日)
- ・山室軍平「公娼全廃論(上・下)」『第三帝国』二一・二二(大正三年十月十五・二十五日)

読者

(著者五十音順↓記事年代順)

署名あり

- ・石垣伊三郎(静岡)「私の理想の女―渡瀬孝二氏へ―」『第三帝国』一七(大正三年八月十六日)
- ・伊藤仙重(山梨)「反逆者より読者へ」『第三帝国』一二(大正三年六月一日)
- ・浮山初太郎(神奈川)「真を慕ふの心」『洪水以後』二(大正五年一月十一日)
- ・衛藤生(豊後)「国防会議と普通選挙」『第三帝国』一二(大正三年六月一日)
- ・MN生(牛込)「不断の努力」『第三帝国』一五(大正三年七月十六日)
- ・大久保清美(長野)「自分の思索」『第三帝国』一二(大正三年六月一日)
- ・大槻潤一(兵庫)「僕等の求むる新宗教」『洪水以後』三(大正五年一月廿一日)
- ・沖野微光(青森)「家族制度と青年」『第三帝国』五五(大正四年十月二十一日)
- ・花城生「家族制度を屠れ」『第三帝国』一七(大正三年八月十六日)
- ・加藤文一(愛知県海老町)「支部たより」『第三帝国』一九(大正三年九月一六日)
- ・金子洋文「欧州出兵断じて不可」『第三帝国』二九(大正四年一月十五日)
- ・金子洋文(秋田)「此醜体を見よ」『第三帝国』三三(大正四年二月二十五日)
- ・金子洋文「土崎より」『第三帝国』四七(大正四年七月二十五日)
- ・金子洋文「教育革命論(上)―神秘的自然教育論―」『洪水以後』一四(大正五年六月一日)
- ・金子洋文「茅原先生の許に。」『日本評論』一七(大正五年九月一日)
- ・金子洋文「教育評論」『日本評論』一八(大正五年十月一日)
- ・金子洋文「生田長江氏に与ふ」『日本評論』二一(大正六年一月一日)
- ・金子洋文「文学と教育の境を越えて」『日本評論』二四(大正六年四月一日)
- ・洋文「女工の群」『種蒔く人』土崎版二号(大正十年三月二十五日)
- ・ようぶん「若き農夫よ」『種蒔く人』土崎版二号(大正十年三月二十五日)
- ・洋文「チエーホフの『農人』から(一)」『種蒔く人』土崎版一号(大正十年二月二十五日)
- ・金子洋文「地獄」『解放』(大正十二年三月)
- ・金子洋文(土崎)「秋田県土崎港より」『第三帝国』一七(大正三年八月十六日)
- ・金子洋文「六号雑感」『成長』(大正六年九月)
- ・「金子洋文氏に聞く」『悲劇喜劇』(一九七八年七月、早川書房)
- ・兼多恒三郎(両国)「より強き愛国心」『第三帝国』三四(大正四年三月五日)
- ・加納秀(神田)「傍観者の悲哀」『第三帝国』三二(大正四年二月十五日)
- ・木村篤(茨城)「普通選挙は尚早也」『第三帝国』一四(大正三年七月一日)

- ・規矩田独秀「小学校教育改善」『洪水以後』四（大正五年二月一日）
- ・規矩田独秀「貴婦人耳を藉せ」『洪水以後』八（同年三月二十一日）
- ・黒木甚一郎（越後）「弱きもの」『第三帝国』三九（大正四年五月五日）
- ・黒木雅彌（日向）「衝突せよ」『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）
- ・後藤賢吉（茨城）「性欲苦」『第三帝国』一四（大正三年七月一日）
- ・斉藤茂（東京）「新日本主義―書簡の一節」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）
- ・沢田栄治（京都）「創造的国民政治」『第三帝国』一四（大正三年七月一日）
- ・島田清一（千葉）「青年会改革」『第三帝国』二〇（大正三年十月五日）
- ・下川清嘯（北海道）「在郷軍人的道德打破」『第三帝国』一六（大正三年八月一日）
- ・笑山子（茨城）「農村から」『第三帝国』四三（大正四年六月十五日）
- ・白井公郎（小石川）「増師と生活」『第三帝国』一七（大正三年八月一六日）
- ・相馬現堂（越後）「何が何だ」『第三帝国』一二（大正三年六月一日）
- ・瀧澤寿三（長野県）「新しき女よ」『第三帝国』一一（大正三年五月十六日）
- ・谷口吼洞（作州加茂）「田舎より」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）
- ・西川狂水（長野）「第三帝国実現の前提」『第三帝国』二〇（大正三年十月五日）
- ・根岸正吉（伊勢崎）「貧弱なる労働者」『第三帝国』四一（大正四年五月二十五日）
- ・林源一（山口）「御用教育論」『第三帝国』一六（大正三年八月一日）
- ・平沢計七「日本の労働者の見た日本の労働問題」『第三帝国』五三（大正四年十月一日）
- ・福田三郎（板橋）「私と政治」『第三帝国』三一（大正四年二月五日）
- ・文蔭生（山梨）「教育制度の現状打破」『第三帝国』三五（大正四年三月二十日）
- ・北州生（新潟）「減税の大運動を起せ」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）
- ・魔弓生（静岡）「新生命の帝国の建設」『第三帝国』三（大正二年十二月十日）
- ・魔弓生（静岡）「生活の戦争」『第三帝国』四（大正三年一月十日）
- ・室園こま（福岡）「処女と恋愛」『第三帝国』一七（大正三年八月十六日）
- ・本井善蔵（会津）「我生活の行進序曲」『第三帝国』一〇（大正三年五月一日）
- ・門馬清郎（山形）「立憲的生活」『第三帝国』二三（大正三年十一月五日）
- ・門馬新水（山形）「普通選挙に迄」『第三帝国』一六（大正三年八月一日）
- ・柳澤とし「世の処女に望む」『第三帝国』六（大正三年二月十日）
- ・柳澤とし「私の旧文について」『第三帝国』九（大正三年四月十六日）
- ・山口伝吉（伊豆）「全国一句選挙区論」『第三帝国』四〇（大正四年五月十五日）
- ・山口晴（芝区）「個人を發達せしめよ」『第三帝国』六（大正三年二月十日）
- ・山崎三省（信濃）「社会主義と本誌の読者」『第三帝国』三五（大正四年三月二十日）
- ・山田玉一（岡山）「予が地方生活」『第三帝国』二（大正二年十一月十日）
- ・矢山ハルム（福岡）「世の処女へ」『第三帝国』一四（大正三年七月一日）
- ・有我生（愛知矢作）「農村青年の教育」『第三帝国』九（大正三年四月一六日）
- ・有我生（三河）「華山先生へ」『第三帝国』一三（大正三年六月十六日）
- ・吉田芳舟（舞鶴）「青年会打破」『第三帝国』四二（大正四年六月五日）
- ・若梅刺葉「冷人熱語」『第三帝国』四九（大正四年八月十五日）
- ・若林貞雄（山梨）「日本人は奴隸的根性だ！」『第三帝国』五（大正三年二月一日）
- ・渡瀬孝二（牛込）「矢山女教師へ」『第三帝国』一五（大正三年七月一六日）

署名なし

- ・「秋田県本庄町より（秋田）」『第三帝国』一七（大正三年八月十六日）
- ・「北浦支部より（秋田）」『第三帝国』一七（大正三年八月十六日）

- ・「支部たより」『第三帝国』一六（大正三年八月一日）
- ・「青年会便り（寄稿歓迎）」『第三帝国』二二（大正二年十一月十日）
- ・「中学と師範との改革（一中学生の手紙）」『第三帝国』三六（大正四年四月五日）
- ・「人間マーチ―選挙権拡張の叫び―」『第三帝国』二四（大正三年十一月十五日）
- ・「能代港町より（羽後）」『第三帝国』二二（大正三年十月二十五日）
- ・「模範選挙期成団成る」『第三帝国』三五（大正四年三月二十日）
- ・「横手支部より（秋田）」『第三帝国』一六（大正三年八月一日）
- ・「横手支部より」『第三帝国』三九（大正四年五月五日）
- ・「横手町より」『第三帝国』一四（大正三年七月一日）

その他（著者五十音順↓記事年代順）

- ・安達元之助「私の観たる華山氏」『中央公論』（大正四年十二月一日）
- ・生田長江「自然主義前派の跳梁」『新小説』（大正五年十一月一日）
- ・植原悦二郎「吉野博士の憲法論を評す」『国家及国家学』（大正五年三月一日）
- ・植原悦二郎「上杉博士の憲法論を評す」『国家及国家学』（大正五年四月一日）
- ・浮田和民「立憲政治の根本義」『太陽』（大正二年四月一日）
- ・大杉栄「茅原華山論」『中央公論』（大正四年十二月一日）
- ・K生「編輯局より」『批評』一（大正八年三月一日）
- ・相馬御風「人心攪乱も亦一事業」『中央公論』（大正四年十二月一日）
- ・中村月城「久遠の救主」『両羽の光』三三（大正六年九月一日）
- ・松井柏軒「茅原華山先生」『中央公論』（大正四年十二月一日）
- ・室伏高信「代議政治を論じて吉野博士に質す」『雄弁』（大正五年三月一日）
- ・室伏高信（東京朝日新聞記者）「代議政治の根本義を疑ふ」『洪水以後』八（大正五年三月二日）
- ・室伏高信「民主主義と議会及び政党」『新小説』（大正五年五月）
- ・室伏高信「直接民主主義の主張」『雄弁』（大正五年八月）
- ・室伏高信「代議政治より内閣政治へ」『新小説』（大正六年七月）
- ・室伏高信「民主主義の諸象」『新日本』（大正七年七月）
- ・山川均「沙上に建てられたデモクラシー」『新社会』（大正六年三月）
- ・吉野作造「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」『中央公論』（大正五年一月）
- ・吉野作造「予の憲政論の批評を読む」『中央公論』（大正五年四月）

- ・『（復刻版）第三帝国』（一九八三年十月、不二出版）
- ・『（復刻版）新理想主義』（一九八四年一月、不二出版）
- ・『（復刻版）洪水以後』（一九八四年三月、不二出版）
- ・『（復刻版）日本評論』（一九八九年六月、不二出版）
- ・『（復刻版）近代思想』（一九八二年六月、不二出版）
- ・『（復刻版）穎才新誌』（一九九一〜一九九三年、不二出版）
- ・『（復刻版）批評』（一九九二年四月、龍溪書房）

三 書簡（差出人五十音順↓年代順）

- ・大正三年八月六日付金子洋文宛石田友治書簡（秋田市立土崎図書館所蔵「金子洋文資料」九八）
- ・大正元年十一月十四日付金子洋文宛今野賢三書簡（同「金子洋文資料」八）
- ・大正六年七月十二日付金子洋文宛今野賢三書簡（同「金子洋文資料」四一一）
- ・大正四年八月九日消印金子洋文宛茅原華山書簡（同「金子洋文資料」二〇二）

- ・大正四年八月二十三日付金子洋文宛茅原華山書簡（同「金子洋文資料」二〇五）
- ・大正四年十月二十九日付金子洋文宛茅原廉太郎書簡（同「金子洋文資料」二二一）
- ・大正四年十二月三日付借用書『後藤新平文書』（岩手県奥州市立後藤新平記念館所蔵）二六―二九
- ・大正四年五月二十四日消印金子洋文宛真崎政治書簡（同「金子洋文資料」一八八）
- ・大正四年十月一日消印金子洋文宛武者小路実篤書簡（同「金子洋文資料」二〇八）
- ・大正五年十月五日消印金子洋文宛武者小路実篤書簡（同「金子洋文資料」二五三）
- ・大正五年十二月三十一日付金子洋文宛武者小路実篤書簡（同「金子洋文資料」三二三）
- ・大正六年七月二十九日付金子洋文宛武者小路実篤書簡（同「金子洋文資料」四一六）

四 著書（著者五十音順↓記事年代順）

- ・安部磯雄『社会問題解釈法』（明治三十四年、東京専門学校出版部）
- ・ウィリアム・ゼームス著、北沢定吉・吉田圭・西山哲治共訳『実際主義（プラグマチズム）』（明治四十三年、弘道館）

- ・伊藤正徳『加藤高明』下巻（昭和四年、加藤伯伝記編纂委員会）
- ・井上馨侯記編纂会編『世外井上公伝』五巻（昭和九年、内外書籍）
- ・『大浦兼武伝』（大正十年、大浦氏記念事業会）
- ・大隈重信『東西文明之調和』（大正十一年十二月、早稲田大学出版部）
- ・大杉栄『正義を求める心』（大正十年、アルス）
- ・尾崎士郎『小説四十六年』（一九六四年、講談社）
- ・金子洋文『生ける武者小路実篤』（大正十一年十月、種蒔き社）
- ・茅原華山『動中静観』（明治三十七九月、東亜堂書店）
- ・茅原華山『新動中静観』（大正二年五月、東亜堂書房）
- ・茅原華山『第三帝国論』（大正二年十二月、南北社）
- ・茅原華山『動的青年訓』（大正三年三月、東亜堂書店）
- ・茅原華山『人間生活史』（大正三年十月、弘学館書店）
- ・茅原華山『半生の懺悔』（大正五年、実業之日本社）
- ・茅原華山『国民的悲劇の発生』（大正七年十一月、祖国書院）
- ・茅原華山・小田政賀『現代文章講話』（大正八年六月、日本評論出版部）
- ・茅原廉太郎『東北大勢論』（明治二十八年二月、共同活版社）
- ・茅原廉太郎『二水余声』（明治三十五年五月、長野新聞株式会社）
- ・茅原廉太郎『向上の一路―社会主義の新福音―』（明治三十七年十二月、日高有隣堂）
- ・茅原廉太郎『文明推移史論』（明治三十八年六月、東亜堂書房）
- ・茅原廉太郎『地人論』（大正二年二月、東亜同書房）
- ・岸本能武太『社会学』（明治三十三年、大日本図書館）
- ・厨川白村『近代の恋愛観』（大正十一年、改造社）
- ・桑木巖翼『哲学綱要』（大正二年、東亜堂書店）
- ・幸徳秋水『帝国主義』（一九五二年、岩波書店）
- ・小林雄吾『立憲政友会史』四巻（大正十三年、立憲政友会）
- ・『雜賀鹿野歌集』（一九七七年、雜賀博愛先生三十周忌記念歌集刊行会）
- ・坂口二郎『現代新聞論』（昭和九年、千倉書房）
- ・尚友俱樂部・櫻井良樹編『阪谷芳郎東京市長日記』（二〇〇〇年、芙蓉書房出版）
- ・関直彦『七十七年の回顧』（昭和八年、三省堂）
- ・『妹尾義郎日記』一卷（一九七四年、国書刊行会）

- ・左右田博士記念会編『左右田喜一郎全集』四卷（昭和五年六月、岩波書店）
- ・田山花袋『東京の三十年』（一九四七年、創元社）
- ・土崎知善『土崎郷土史要』（大正九年七月、土崎読書会）
- ・『哲学大辞書』（明治四十五年六月、同文館）
- ・徳富蘇峰『大正の青年と帝国の前途』（大正五年、民友社）
- ・徳富蘇峰『蘇峰自伝』（昭和十年、中央公論社）
- ・朝永三十郎編著『哲学綱要』（明治三十五年、宝文館）
- ・内政史研究会『内政史研究資料』第一九一・一九二集鈴木正吾氏談話速記録（一九七五年、内政史研究会）
- ・中村月城（初代牧師）「横手開拓伝道の思い出」（創立八〇周年記念出版（一）横手教会の牧師たち）一九九一年、日本キリスト教団横手教会）
- ・中村春雨（吉蔵）「倫敦日記」（『欧米印象記』、明治四十三年六月、春秋社書店）
- ・夏目漱石「こころ」『漱石全集』第九卷（一九九四年、岩波書店）
- ・夏目漱石『私の個人主義』（一九七八年、講談社学術文庫）
- ・西田幾多郎『善の研究』（明治四十四年、弘道館）
- ・西田幾多郎『思索と体験』（大正四年、千章館）
- ・野間清治伝記編纂会編『野間清治伝』（昭和十九年、講談社）
- ・野村限畔『自我の研究』（大正四年、警醒社）
- ・野村限畔『自我を超えて』（大正六年、京文社）
- ・野村限畔『自我批判の哲学』（大正八年、大同館書店）
- ・野村限畔『新文化への道』（大正九年、日本評論社）
- ・野村限畔『文化主義の研究』（大正十年、大同館書店）
- ・野村限畔『自由を求めて』（大正十一年、京文社）
- ・野村限畔『孤独の行者』（大正十一年、京文社）
- ・柏軒松井広吉『四十五年記者生活』（昭和四年九月、博文館）
- ・バートランド・ラッセル著、松本悟朗訳『ラッセル叢書（自第一編至第七編）』
- ・『原敬日記』三卷（一九六五年、福村出版）
- ・『原敬日記』四卷（一九六五年、福村出版）
- ・広津和郎『年月のあしおと』（一九六三年、講談社）
- ・『広津和郎全集』全一三卷（一九八八〜八九九年、中央公論社）
- ・『広津和郎著作選集』（一九九八年、翰林書房）
- ・福沢諭吉『文明論之概略』（松沢弘陽校注、一九九五年、岩波文庫版）
- ・『泡鳴全集』一二卷（大正十年、広文庫）
- ・堀井汀水『南秋田郡案内』（大正三年、秋田民報社）
- ・松本悟朗『哲学の話』（大正十一年、日本評論社）
- ・三上於菟吉『明治大正実話全集』二卷「悲恋情死実話」（昭和四年、平凡社）
- ・村松梢風『秋山定輔は語る』（昭和十三年、大日本雄弁会講談社）
- ・室伏高信『学生論』（明治四十一年、学生論出版部）
- ・室伏高信『小説葦』（昭和十六年、育生社）
- ・室伏高信『民本主義について』（大正六年）
- ・室伏高信『戦争私書』（一九九〇年、中央公論社）
- ・山縣悌三郎『児孫の為に余の生涯を語る』（一九八七年、弘隆社）
- ・『山室軍平選集』七卷（一九五二年、山室軍平選集刊行会）

- ・『吉野作造選集』三卷（一九九五年、岩波書店）
- ・『吉野作造選集』一四卷（一九九六年、岩波書店）

五 論文その他

- ・愛知県立第四中学校校友会編『校友会誌』一一（明治三十八年九月）
- ・「石田神学生報」『聖書之道』（明治三十九年六月）
- ・伊東晃璋（校外会員）「逆境を論ず」『校友会雑誌』九（明治四十一年十月四日、秋田県立横手中学校校友会）
- ・伊東晃璋（校外会員）「無題のままに」『みいりの』（大正四年八月、横手中学校校友会）
- ・稲毛祖風「大正三年の思想界を論ず」『生の創造と道徳』大正四年二月、大同館書店）
- ・岩野泡鳴「巢鴨日記第一」『泡鳴全集』一二卷、大正十年、広文庫）
- ・内海朝次郎「六、本省雇員から言論界に雄飛した茅原華山氏」『続通信島の先輩巡礼』、昭和十一年、交通経済社出版部）
- ・大杉栄「創造的進化―アフリ・ベルグソン論―」『近代思想』一卷七号（大正二年四月一日）
- ・風塵郎「早稻田擬国会の印象」『雄弁』第二卷第四号（明治四十四年四月一日、大日本雄弁会）
- ・金子洋文「故郷を出づるの記（一）」『はたらく日記』、昭和十七年、河北書房）
- ・金子洋文「その種は花と開いた 我孫子の生活」『金子洋文作品集』一卷、一九七六年、筑摩書房）
- ・神尾一恵「見落されたるものしかも問題の核心 水田水路用地評価を丹那の不文律に観る」（昭和七年九月十五日）
- ・茅原華山「日本人と益進主義」（市原自適『益進主義』序、明治四十四年九月、南北社）
- ・北浦部落「（明治参拾八年七月改）決議録」
- ・「教会月報」（昭和十四年九月、基督教教会）
- ・「黒岩周六日記」（大正三年―大正四年）『紀尾井史学』四（一九八四年）
- ・桑木巖翼「文化主義」（東三・一市五郡教育会連合第九回夏季講習会『講習会筆記録』、大正九年十一月）
- ・幸徳秋水「渡米日記」（明治三十八年）十一月廿三日条（塩田庄兵衛編『増補幸徳秋水の日記と書簡』、一九六五年六月、未来社）
- ・静岡県青年理想選挙期成会「主意書」（大正四年二月十日）
- ・静岡県青年理想選挙期成会「理想選挙期成会の記録」【ガリ版刷】（大正四年九月十九日）
- ・静岡県青年理想選挙期成会「選挙界廓清大演説会」宣伝チラシ（大正四年三月十四日）
- ・「写真」選挙界廓清大演説会（三島町戦捷記念館にて、大正四年三月十四日）
- ・静岡県青年理想選挙期成会「総選挙を機として再び青年諸君に檄す」（大正六年四月三日）
- ・『聖中学報』創立三十周年記念号（昭和十一年、聖学院中学校）
- ・「関口惣四郎宛初見八郎書状」（『伊奈町史文書目録』八、「文書」二九）
- ・勢多左武郎「第三帝国」から「洪水以後」へ―あのころの若人たち―・「同（続）」『たちばな』三七・三八（一九七二年三月・一九七三年三月、川崎市高津図書館友の会）
- ・左右田喜一郎『文化主義』の論理（黎明会（代表 吉野作造）編『復刻版 黎明講演集』一卷（一九八九年、龍溪書房）
- ・土田杏村「西田哲学の時代的意義」（『土田杏村全集』一五卷、昭和十一年、第一書房）・西田幾多郎「ベルグソンの哲学的方法論」『芸文』第一年第八号（明治四十三年十一月）
- ・松山忠二郎「山本内閣倒壊当時の黒岩氏と自分」（涙香会編『黒岩涙香』、大正十一年、扶桑社）
- ・与謝野晶子「茅原先生の新著のはしに」（茅原廉太郎『華山文章』、明治四十五年七月、友朋館）
- ・吉野作造「山本内閣の倒閣と大隈内閣の成立」『太陽』（大正三年五月一日）

【参考文献】

一 著書（著者五十音順）

- ・相場信太郎編『追悼集梁歩の横顔』（一九四〇年、土筆社）
- ・『秋田県史』六卷大正・昭和編（一九六五年、秋田県）
- ・『秋田県政史』上巻（一九五五年、秋田県議会）
- ・『秋田市史』四巻通史編・近現代一（二〇〇四年、秋田市）
- ・秋山操編著『基督教会（ディサイプルス）史』（一九七三年、基督教会史刊行委員会）
- ・安倍能成『岩波茂雄伝』（一九五七年、岩波書店）
- ・有泉貞夫『明治政治史の基礎過程』（一九八〇年、吉川弘文館）
- ・有馬学『（日本の近代4）「国際化」の中の帝国日本』（一九九九年、中央公論新社）
- ・有山輝雄『近代日本ジャーナリズムの構造―大阪朝日新聞白虹事件前後―』（一九九五年、東京出版）
- ・E・H・キンモンス『立身出世の社会史―サムライからサラリーマンへ―』（一九九五年、玉川大学出版部）
- ・井口和起『日露戦争の時代』（一九九八年、吉川弘文館）
- ・石川清『叔父石川角次郎』（一九七四年）
- ・伊多波英夫『銀月・有美と周辺―明治・大正秋田文壇人誌―』（一九七九年、秋田近代文芸史研究会）
- ・「伊東晃璋遺稿集・別冊 小学教師のノート」（一九七六年）
- ・伊藤整『日本文壇史』七（一九六四年、講談社）
- ・伊藤隆『大正期「革新」派の成立』（一九七八年、塙書房）
- ・伊藤隆編『大正初期山県有朋談話筆記政変思出草』（一九八一年、山川出版社）
- ・伊東博編集『伊東晃璋遺稿集』（一九七七年、大永舎）
- ・猪股久・猪股直樹編著『猪股ミチの記録・書簡集』（一九九〇年、非売品）
- ・井村君江『「サロメ」の受容―翻訳・舞台―』（一九九〇年、新書館）
- ・色川大吉『新編明治精神史』（一九七三年、中央公論社）
- ・岩佐壮四郎『抱月のベル・エポック―明治文学者と新世紀ヨーロッパ』（一九九八年、大修館書店）
- ・栄沢幸二『大正デモクラシー期の政治思想』（一九八一年、研文出版）
- ・王柯編『辛亥革命と日本』（二〇〇一年、藤原書店）
- ・大沢正道『大杉栄研究』（一九六八年、同成社）
- ・太田雅夫編『資料大正デモクラシー論争史』全二巻（一九七一年、新泉社）
- ・太田雅夫『初期社会主義史の研究』（一九九一年、新泉社）
- ・大津山国夫『武者小路実篤論―「新しき村」まで―』（一九七四年、東京大学出版会）
- ・大宅壮一『小国の裏街道を行く』（一九六二年、文芸春秋社）
- ・男鹿市編『船川開港史』（一九六二年）
- ・男鹿市編『男鹿市史』（一九六四年）
- ・男鹿市編『男鹿市史』上巻（一九九五年）
- ・荻野富士夫『初期社会主義思想論』（一九九三年、不二出版）
- ・尾崎宏次『島村抱月―日本近代劇の創始者たちⅠ』（一九六五年、未来社）
- ・小野秀雄『新聞研究五十年』（一九七一年、毎日新聞社）
- ・『解放のいしずえ』（一九五六年、解放運動犠牲者合葬追悼会世話人会）
- ・賀川真理『サンフランシスコにおける日本人学童隔離問題』（一九九九年、論創社）
- ・『片岡良一著作集』七巻（一九七九年、中央公論社）

- ・加藤昭作『評伝平福百穂』（二〇〇二年、短歌新聞社）
- ・鹿野政直『大正デモクラシーの底流―土俗的精神への回帰』（一九七三年、日本放送出版協会）
- ・『河北新報の七十年』（一九六七年、河北新報社）
- ・鎌倉芳信『岩野泡鳴研究』（一九九四年、有精堂）
- ・神島二郎『近代日本の精神構造』（一九六一年、岩波書店）
- ・茅原健『茅原華山年譜・著作目録稿』（一九八四年、不二出版）
- ・茅原健『茅原華山と同時代人』（一九八五年、不二出版）
- ・茅原健『華山追尋―茅原廉太郎とその周辺』（一九九六年、朝日書林）
- ・茅原健『民本主義の論客』（二〇〇二年、不二出版）
- ・川崎浩良『山形県新聞史話』（一九四九年、山形新聞社）
- ・川人貞史『日本の政党政治1890～1937年―議会分析と選挙の数量分析―』（一九九二年、東京大学出版会）
- ・菊池城司『近代日本の教育機関と社会階層』（二〇〇三年、東京大学出版会）
- ・木俣修『大正短歌史』（一九七二年、明治書院）
- ・木村圭三『宮崎湖処子―甦る明治の知識人』（二〇〇九年、彩流社）
- ・木村直恵『〈青年〉の誕生』（一九九八年、新曜社）
- ・久保田文次『孫文・辛亥革命と日本人』（二〇一一年、汲古書院）
- ・K・B・パイル『新世代の国家像―明治における欧化と国粹―』（一九八六年、社会思想社）
- ・『講談社の歩んだ五十年』（一九五九年、講談社）
- ・香内信子『与謝野晶子と周辺の人びと―ジャーナリズムとのかかわりを中心に―』（一九九八年、創樹社）
- ・『桑折町史』三巻各論編「民俗・旧町村沿革」（一九八九年、桑折町史出版委員会）
- ・国勢院編『日本帝国統計年鑑』（一九二二年十二月）
- ・古島一雄『一老政治家の回想』（一九五一年、中央公論社）
- ・小林一郎『田山花袋―「田舎教師」モデルの日記所収―』（一九六三年、アサヒ社）
- ・近藤恒次『時習館史―その教育と伝統―』（一九七九年、愛知県立時習館高等学校）
- ・坂本育雄『評伝広津和郎―真正リベラリストの生涯』（二〇〇一年、翰林書房）
- ・坂本育雄『広津和郎研究』（二〇〇六年、翰林書房）
- ・坂本多加雄『近代日本精神史論』（一九九六年、講談社）
- ・佐川良規著・糸井藤之助補綴『横手郷土史年表』（一九七七年、東洋書院（初版は一九六八年、彦栄堂））
- ・櫻井良樹『大正政治史の出發―立憲同志会の成立とその周辺―』（一九九七年、山川出版社）
- ・櫻井良樹『辛亥革命と日本政治の変動』（二〇〇九年、岩波書店）
- ・佐渡谷重信『抱月島村瀧太郎論』（一九八〇年、明治書院）
- ・澤田次郎『近代日本人のアメリカ観―日露戦争以後を中心に―』（一九九九年、慶應義塾大学出版会）
- ・三羽光彦『高等小学校制度史研究』（一九九三年、法律文化社）
- ・ジェイムズ著、榊田啓三郎、加藤茂訳『根本的経験論』（一九九八年、白水社）
- ・信濃毎日新聞社『百年の歩み―信濃毎日新聞』（一九七三年、信濃毎日新聞株式会社）
- ・篠弘『自然主義と近代短歌』（一九八五年、明治書院）
- ・衆議院・参議院編『議会制度七十年史』政党派派篇（一九六一年）
- ・ジル・ドゥルーズ著、宇波彰訳『ベルグソンの哲学』（一九七四年、法政大学出版局）
- ・陣内靖彦『日本の教員社会』（一九八八年、東洋館出版社）

- ・『新聞人安藤和風』（一九六七年、秋田魁新報社）
- ・季武嘉也『大正期の政治構造』（一九九八年、吉川弘文館）
- ・鈴木貞美編『大正生命主義と現代』（一九九五年、河出書房新社）
- ・鈴木貞美『生命』で読む日本近代―大正生命主義の誕生と展開（一九九六年、日本放送教会出版）
- ・孫国鳳『茅原華山と近代日本―民本主義を中心に』（二〇〇四年、現代企画室）
- ・高橋亀吉『大正昭和財界変動史』（一九五四年、東洋経済新報社）
- ・武石典史『近代東京の私立中学校―上京と立身出世の社会史―』（二〇一二年、ミネルヴァ書房）
- ・竹内洋『立身出世主義』（一九九七年、日本放送出版協会）
- ・田中真人『高島素之―日本の国家社会主義―』（一九七八年、現代評論社）
- ・田村紀雄『鈴木悦―日本とカナダを結んだジャーナリスト―』（一九九二年、リブレポート）
- ・筒井清忠『昭和期日本の構造』（一九八四年、有斐閣）
- ・筒井清忠『日本型「教養」の運命―歴史社会学的考察―』（一九九五年、岩波書店）
- ・都筑久義『若き日の尾崎士郎』（一九八〇年、笠間書院）
- ・帝国ホテル編『帝国ホテル百年史』（一九九〇年、株式会社帝国ホテル）
- ・手塚晃、国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』三卷（一九九二年、柏書房）
- ・『東京古書店組合五十年史』（一九七四年、東京都古書籍商業協同組合）
- ・同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』（一九九一年、同朋社出版）
- ・同志社大学人文科学研究所編『六合雑誌』の研究』（一九八四年、教文館）
- ・『東洋大学校友会一〇〇周年記念誌』（一九九四年、東洋大学校友会）
- ・『東洋大学五十年史』（一九三七年、東洋大学）
- ・『東洋大学百年史』通史編Ⅰ・Ⅱ（一九九三・一九九四年、東洋大学）
- ・富木友治編『平福百穂書簡集』（一九八一年、翠楊社）
- ・『長野県史』通史編七近代一（一九八八年、長野県史刊行会）
- ・『長野県史』近代史料編一〇（二）学芸・スポーツ（一九九〇年、長野県史刊行会）
- ・『長野県政史』一卷（一九七一年、長野県）
- ・『長野県政史』別巻（一九七二年、長野県）
- ・『長野県歴史大年表』（下）近代・現代編（一九八七年、郷土出版社）
- ・中野泰『近代日本の青年宿―年齢と競争原理の民俗』（二〇〇五年、吉川弘文館）
- ・中野目徹『政教社の研究』（一九九三年、思文閣出版）
- ・中村隆英『日本経済―その成長と構造』（一九七八年、東京大学出版会）
- ・中村都史子『日本のイブセン現象―一九〇六―一九一六年―』（一九九七年、九州大学出版会）
- ・永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（一九九七年、日本エディタースクール出版部）
- ・奈良岡聰智『加藤高明と政党政治―二大政党制への道―』（二〇〇六年、山川出版社）
- ・『能代市史稿』第七輯現代（下編）大正、昭和年代（一九六四年、能代市史編纂委員会）
- ・『能代市史年表』（一九六五年、能代市史編纂委員会）
- ・『能代のあゆみ―ふるさとの近代』（一九七〇年、北羽新報社）
- ・野田宇太郎『改稿東京文学散歩』（一九七一年、山と溪谷社）
- ・橋川文三『黄禍物語』（一九七六年、筑摩書房）
- ・橋本寿朗・大杉由香著『近代日本経済史』（二〇〇〇年、岩波書店）
- ・『八十二銀行史』（一九六八年、株式会社八十二銀行）
- ・林尚男『評伝堺利彦』（一九八七年、オリジン出版センター）
- ・原千代海訳『イブセン戯曲全集』三卷（一九八九年、未来社）
- ・坂野潤治『大正政変』（一九九四年、ミネルヴァ書房）

- ・ 桧垣立哉『ベルクソンの哲学―生成する実在の肯定―』（二〇〇〇年、勁草書房）
- ・ 飛矢崎雅也『大杉栄の思想形成と「個人主義」』（二〇〇五年、東信堂）
- ・ 平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌―「西洋」を読み替えて』（二〇一二年、新曜社）
- ・ 平山和彦『青年集団史研究序説…合本』（一九八八年、新泉社）
- ・ 福田久賀男『探書五十年』（一九九九年、不二出版）
- ・ 福家崇弘『戦間期日本の社会思想―「超国家」へのフロンティア』（二〇一〇年、人文書院）
- ・ 『古内龍夫著作集』二巻（一九九四年、秋田文化出版）
- ・ 古川江里子『大衆社会化と知識人―長谷川如是閑とその時代―』（二〇〇四年、芙蓉書房出版）
- ・ 北条常久『種蒔く人』研究―秋田の同人を中心として―（一九九二年、桜楓社）
- ・ 毎日新聞社編『古島一雄清談』（一九五一年、毎日新聞社）
- ・ 升味準之輔『日本政治史』二（一九八八年、東京大学出版会）
- ・ 升味準之輔『日本政党史論』三（一九六九年、東京大学出版会）
- ・ マックス・ウェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（一九八九年、岩波文庫版）
- ・ 松尾尊兌『大正デモクラシー』（一九七四年、岩波書店）
- ・ 松尾尊兌『本倉』（一九八三年、みず書房）
- ・ 松尾尊兌『普通選挙制度成立史の研究』（一九八九年、岩波書店）
- ・ 松沢弘陽『日本社会主義の思想』（一九七三年、筑摩書房）
- ・ 松原新一『怠惰の逆説―広津和郎の人生と文学』（一九九八年、講談社）
- ・ 松本武裕『所謂日比谷焼打事件の研究』（一九七四年、東洋文化社）
- ・ 松村正義『日露戦争と金子堅太郎―広報外交の研究―』（一九八〇年、新有堂）
- ・ 丸山眞男『現代政治の思想と行動』（一九六四年、未来社）
- ・ 三木会編『三木武吉』（一九五八年、大日本印刷株式会社）
- ・ 三谷太一郎『新版大正デモクラシー論』（一九九五年、東京大学出版会）
- ・ 三谷太一郎『増補日本政党政治の形成―原敬の政治指導の展開』（一九九五年、東京大学出版会）
- ・ 三橋浩『ジェイムズ経験論の諸問題』（一九七三年、法律文化社）
- ・ 源川真希『近現代日本の地域政治構造―大正デモクラシーの崩壊と普選体制の確立―』（二〇〇一年、日本経済評論社）
- ・ 宮地正人『日露戦後政治史の研究』（一九七三年、東京大学出版会）
- ・ 望月和彦『大正デモクラシーの政治経済学』（二〇〇七年、芦書房）
- ・ 文部省実業学務局編纂『実業教育五十年史』（一九三四年、実業教育五十周年記念会）
- ・ 柳澤七郎『堀井梁歩の面影』（一九六五年、いづみ苑）
- ・ 柳田泉『明治文明史における大隈重信』（一九六二年、早稲田大学出版部）
- ・ 山泉進編著『社会主義事始』（一九九〇年、社会評論社）
- ・ 山口和宏『土田杏村の近代―文化主義の見果てぬ夢―』（二〇〇四年、ぺりかん社）
- ・ 山崎正薫編『横井小楠』下巻遺稿篇（一九三八年、明治書院）
- ・ 山本四郎『大正政変の基礎的研究』（一九七〇年、お茶の水書房）
- ・ 山本四郎『評伝原敬』下巻（一九九八年、東京創元社）
- ・ 山本武利『近代日本の新聞読者層』（一九八一年、法政大学出版局）
- ・ 『山本の権威』（一九二九年、金子出版部）
- ・ 山領健二『転向の時代と知識人』（一九七八年、三一書房）
- ・ 『夕映えの詩―丹波源一郎追悼』（一九八九年、無明舎出版）
- ・ 『湯河原町史』二巻近現代資料編（一九八五年、湯河原町）

- ・『横手高等学校百年史』（一九九八年、横手高校）
- ・横手市編『横手市史』通史編・近現代（二〇一一年、横手市）
- ・横手町史編纂会『続横手郷土史』（一九三三年、横手町役場）
- ・立命館大学西園寺公望伝編纂委員会『西園寺公望伝』二卷（一九九一年、岩波書店）
- ・若槻禮次郎『古風庵回顧録』（一九七五年、読売新聞社）

二 論文その他（著者五十音順）

- ・秋田県広報協会編「秋田労組運動の草分け島田五空」（『秋田人物風土記』（一九七三年、昭和書院）
- ・飛鳥井雅道「解説」『大杉栄評論集』（一九九六年、岩波文庫）
- ・飛鳥井雅道「明治社会主義の帰結——「直接行動論」をめぐる」『思想』五二四（一九六八年二月、岩波書店）
- ・有山輝雄「理想団の研究」『桃山学院大学社会学論集』第一三卷第一、二号（一九七九年十二月、一九八〇年三月）
- ・飯田泰三「解題」『（復刻版）批評』三（一九九二年、龍溪書舎）
- ・石井裕晶「1922年の営業税廃税運動の政治経済過程」『社会経済史学』七六卷一号（二〇一〇年五月）
- ・石井裕晶「大正末期の営業税廃税過程」『日本歴史』七四八（二〇一〇年九月）
- ・石川禎浩「東西文明論と日中の論壇」（古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』、一九九四年、京都大学人文科学研究所）
- ・石田あゆ「（土に還る）文明批評家、室伏高信のメディア論」『マス・コミュニケーション研究』五六（二〇〇〇年一月）
- ・伊多波英夫「石田友治」（秋田県広報『あきた』、一九七三年四月）
- ・市井三郎「改題ラッセル社会改造の諸原理」『世界の大思想』二六（一九六六年、河出書房新社）
- ・伊東久智「政友会の院外団と「院外青年」（安在邦夫・真辺将之・荒船俊太郎編著『近代日本の政党と社会』、二〇〇九年、日本経済評論社）
- ・伊東久智「立憲国民党と青年——雑誌『青年』の分析から」『日本歴史』七三三（二〇〇九年六月）
- ・井上義和「文学青年と雄弁青年——「明治四〇年代」からの知識青年論再検討」『ソシオロジ』四五—三（二〇〇一年二月）
- ・井上義和「英雄主義の系譜——「雄弁」と「冒険」の明治四十年代——」（稲垣恭子・竹内洋編『不良・ヒーロー・左傾——教育と逸脱の社会学——』、二〇〇二年、人文書院）
- ・入江昭「茅原華山と日本のコスモポリタニズム」（A・クレイグ、D・シャイバリー編『日本の歴史と個性』、一九七四年、ミネルヴァ書房）
- ・岡義武「日露戦争後における新しい世代の成長」『思想』五一二・五一三（一九六七年二・三月、岩波書店）
- ・岡野他家夫「孤独の行者隈畔の思想的自伝の書」（『日本近代名著解題』、一九六二年、原書房）
- ・岡和田常忠「青年論と世代論——明治期におけるその政治的特質——」『思想』五一四（一九六七年四月、岩波書店）
- ・小田切秀雄「日本における自我意識の特質と諸形態」『近代日本思想史講座』四卷（一九六〇年、筑摩書房）
- ・嘉指信雄「ジェイムズから漱石と西田へ——「縁量」の現象学、二つのメタモルフオーゼ——」『哲学』四八（一九九七年四月）
- ・神谷昌史「一九〇一年の「新日本」——浮田和民における「倫理的帝国主義」の成立——」『大東法政論集』七（一九九九年三月、大東文化大学大学院法学研究科）

- ・ 神谷昌史「『東西文明調和論』の三つの型―大隈重信・徳富蘇峰・浮田和民―」『大東法政論集』九(二〇〇一年三月、大東文化大学大学院法学研究科)
- ・ 茅原健「若き日の金子洋文―茅原華山との邂逅をめぐって―」『秋田文芸史研究』復刻一号(一九八三年八月)
- ・ 熊木哲「金子洋文の思想形成について―『電宮舎時代』から『日本評論時代』まで―」(附)金子洋文著作目録『中央大学大学院論究』(一九七八年三月)
- ・ 紅野敏郎「解説」(『武者小路実篤全集』三卷(一九八八年、小学館))
- ・ 近藤侃一「山形県新聞史」(『地方別日本新聞史』、一九五六年、日本新聞協会)
- ・ 三枝博音「プラグマチズム批判」『理想』一九三(一九四九年五月、理想社)
- ・ 佐々木竹治「金子洋文先生のこと」(『港魂―土小百年史―』、一九七五年、秋田市立土崎小学校創立百周年記念協賛会)
- ・ 茂義樹『『六合雑誌』における岸本能武太』(同志社大学人文科学研究所編『『六合雑誌』の研究』、一九八四年、教文館)
- ・ しまねきよし「室伏高信論」『季刊世界経済』六四(一九七八年一月)
- ・ しまねきよし「評伝室伏高信論(一〜四)」『季刊世界経済』六八〜七一(一九七九年一〜十月)
- ・ 鈴木範久『『六合雑誌』解説』(一九八五年、不二出版)
- ・ 須田久美「金子洋文と茅原華山および、武者小路実篤に関する一考察」『日本文学研究』(一九九四年一月、大東文化大学日本文学会)
- ・ 砂原陽一「現象学からの解放―ウィリアム・ジェイムズの哲学」『金沢大学教養部論集』人文科学編二六―二(一九八九年三月)
- ・ 住友陽文「国民主権のひとつの起源―憲法研究会の室伏高信に即して―」(『日本史の方法』四(二〇〇六年六月))
- ・ 富田信男「衆議院議員総選挙の史的分析(二)―明治・大正期―」『選挙研究』二(一九八七年三月、日本選挙学会)
- ・ 中野目徹「日露戦争後における志賀重昂の国際情勢認識―蒲郡市小田家所蔵史料の紹介を兼ねて―」『近代史料研究』一一(二〇一一年、日本近代史研究会)
- ・ 中見眞理「室伏高信と柳宗悦」『清泉女子大学紀要』四八(二〇〇〇年十二月)
- ・ 長岡幸作「明治時代の能代(下)―佐々木初治の発表から―」『北羽新報』(二〇〇二年二月二十日)
- ・ 西田長寿「愛山・華山・蔵村」(『明治文学全集』三五「月報九」、一九六五年、筑摩書房)
- ・ 野口武治「美葉以後」『水脈』(大正十一年)
- ・ 野山嘉正「ジャーナリスト茅原華山の漢詩」(『江戸詩人選集』「月報七」、一九九一年七月)
- ・ 福田久賀男「私信・愛と自由の哲学者・野村隈畔のこと」『たちばな』三八(一九七三年三月)
- ・ 福田久賀男「情死した天才的哲学者・野村隈畔」『彷彿月刊』第八卷第七号(一九九二年六月)
- ・ 舩山信一「街と野との哲学者野村隈畔(および中沢臨川)におけるベルクソンの理解」(『舩山信一著作集』七卷、一九九九年、こぶし書房)
- ・ 北条常久「金子洋文「地獄」自筆原稿をめぐって」『日本近代文学』二八(一九八一年九月)
- ・ 細井宥司「妹尾義郎と新興仏教青年同盟」『文化評論』三七四(一九九二年三月)
- ・ 堀切利高「解説」『復刻版』近代思想(一九八二年、不二出版)
- ・ 本多秋五「解説」武者小路実篤の「自己」形成期(『武者小路実篤全集』一巻、一九八七年、小学館)
- ・ 前田晃「解説」(田山花袋『田舎教師』、一九八〇年、岩波文庫(改版))
- ・ 牧野尚信・古内龍夫「丹波源一郎氏に聞く(二)―大正デモクラシー期の一地方青年―」『能代山本地方史研究』五(一九八九年三月、能代山本地方史研究会)

- ・松本史朗「祖父悟朗を思う」『たちばな』三八（一九七三年三月、川崎市高津図書館友の会）
- ・三谷太一郎「大正社会主義者の「政治」観―「政治の否定」から「政治的対抗」へ―」（前掲、『新版大正デモクラシー論』）
- ・三橋浩「西田幾太郎とジェイムズ―「純粹経験」説をめぐる―」『大阪産業大学論集』人文科学編五〇（一九八〇年四月）
- ・美坂太郎「バートランド・ラッセル―『社会改造の原理』を読んだ頃―」（『戦前戦中を歩む―編集者として―』、一九八五年、日本評論社）
- ・宮田光雄「権威と服従（上）」『思想』七五一（一九八七年一月、岩波書店）
- ・宮山昌治「純粹持続の効用―大正期ベルクソンニズムと戦争」『成城文芸』一六九（二〇〇〇年二月）
- ・宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」『人文』四（二〇〇五年三月、学習院大学人文科学研究所）
- ・森淑美「〈心の革命〉と〈社会の革命〉―夏目漱石と大杉栄のベルグソン―」『文学』（二〇〇〇年三、四月号）
- ・山岡桂二「茅原華山の第三帝国論について」『文化史学』一九（一九六五年三月）
- ・山岡桂二「茅原華山の第三帝国論について（続）」『歴史研究』三（一九六五年十一月）
- ・山本武利「『萬朝報』の発展と衰退」（『萬朝報』解題・解説、一九八四年、日本図書センター）
- ・山領健二「室伏高信論―ジャーナリストの転向」『思想の科学』（一九六二年四月）
- ・吉田静邦「妹尾義郎の思想と行動―主として研究史的視点から―」『仏教経済研究』八（一九七九年三月、駒沢大学仏教経済研究所）
- ・渡辺善雄「森鷗外「吃逆」の意図と背景―オイケンの宗教論と三教合同―」『日本近代文学』四六（一九九二年五月）